

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第48集

まつかわど
松河戸遺跡

1994

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県春日井市は庄内川中流域右岸に位置しており、尾張北東部の中核的な都市として発展を遂げております。また市内には味美古墳群・下原古窯を代表とする文化財が多く所在し、そうした豊かな文化が、現在の都市づくりの基礎になっているものと考えられます。

このたび春日井市南西部の松河戸遺跡におきまして発掘調査を実施いたしました。当地域は平安時代の三蹟の一人として著名な小野道風ゆかりの地として知られ、さらに松河戸遺跡周辺には当財団が調査を行ってまいりました、町田遺跡・勝川遺跡に代表される弥生時代から古代・中世期にかけての多くの貴重な遺跡が所在しております。今回の松河戸遺跡の調査におきましても縄文時代中期・弥生時代前期という県下においても大変重要な資料があいついで発見されました。さらに鎌倉時代の屋敷地や、また調査区全体に広く存在する水田関連遺構は、奈良時代の条里制遺構と深く関係するものとして注目されます。こうした調査成果をここに公開し、その内容が学術的な資料として、また社会教育・学校教育的な目的で大いに活用されることを期待いたしております。

最後になりましたが、松河戸遺跡の発掘調査につきまして、各方面の方々にご配慮を賜り、関係機関及び関係者のご指導とご協力をいただいたことに対し、厚く御礼申し上げる次第であります。

平成6年3月

財団法人愛知県埋蔵文化財センター
理事長 高木 鐘三

例 言

- 1 本書は愛知県春日井市松河戸町に所在する松河戸遺跡の調査報告書である。
- 2 調査は名古屋環状2号線（一般国道302号）建設に伴う事前調査として実施し、建設省中部地方建設局・日本道路公団名古屋建設局より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、昭和61年(1986)～平成3年(1991)まで財団法人愛知県埋蔵文化財センターが実施した。調査地区担当者等は別表を参照。
- 3 調査にあたっては以下の関係機関のご協力を得た。
愛知県教育委員会文化財課・愛知県埋蔵文化財調査センター・建設省中部地方建設局愛知国道工事事務所・日本道路公団名古屋建設局名古屋工事事務所・春日井市教育委員会。
- 4 発掘調査においては以下の方々のご協力を得た。
水野拡子・岡田智子・西沢英樹（敬称略）
- 5 本書の執筆は服部信博（調査課主査）・堀木真美子・赤塚次郎（以上調査研究員）が担当し、その分担は目次にて表記した。また第IV章1では森勇一氏（県立明和高校教諭）より、第IV章4は澤田康次氏より玉稿を賜り、第IV章2では吉野道彦（名城大学理工学部助教授）萬谷さつき（津島市教育委員会主事）氏のご協力をいただいた。さらに第IV章3には矢作健二氏（パリノ・サーヴェイ株式会社）による分析結果を掲載することができた。なお出土遺物の写真撮影には深川 進氏の手を煩わした。
- 6 遺物整理及び本書の作成においては以下の方々にご協力を得た。（敬称略）
河合明美・高田恵理子・牛田長子・杉山美智子・加賀良子・服部恵子・中村晴美
- 7 本書の作成にあたっては、以下の方々にご指導を賜わった。
土本典生・北条献司・日野幸治・重松和男・服部哲也・藤澤良祐・岩野見司
加納俊介・西口寿生・亀山 隆・山口昌直・遠藤才文・斎藤孝正（敬称略）
- 8 調査に使用した座標は、国土座標第VII系に準拠する。
- 9 調査記録・出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管。
- 10 編集は赤塚次郎が担当した。

目 次

I	調査の概要	
1	経緯	赤塚 1
2	概要	2
II	遺跡	
1	遺跡の概要	赤塚 4
2	遺構	6
III	遺物	
1	縄文時代	服部 16
2	弥生時代前期	20
3	古墳時代後半期	赤塚 25
4	鎌倉・室町時代	28
IV	自然科学分析	
1	愛知県松河戸遺跡における自然科学的検討	森 37
2	愛知県松河戸遺跡における 縄文時代後・晩期の花粉化石	堀木・吉野・萬谷 55
3	伊勢型鍋胎土重鉍物分析	矢作 60
4	S字状口縁台付甕の胎土の変化	澤田 67
V	まとめにかえて	
	中世松河戸ムラ	赤塚 75
付論1	松河戸様式の設定	赤塚 84
付論2	伊勢湾沿岸部における 弥生前期の集団関係	服部 104
別表		115
	I 中世期遺物分析	
	II 中世期遺物分布	
	III 中世期遺物・遺構変遷	
	IV SK201構成比率	
	V 遺構一覧表・調査進行表	
	VI 遺物一覧表	

挿図・表目次

IV-1	埋積浅谷に関する対比表	39
IV-2	松河戸遺跡周辺地域の地質図	48
IV-3	松河戸遺跡を含む地質断面図	49
IV-4	町田遺跡62B区における 浅谷地形(埋積浅谷I)の断面図	49
IV-5	松河戸遺跡89Dc区における 浅谷地形(埋積浅谷II)の断面図	49
IV-6	松河戸火山灰層を含む主な調査区 における地質柱状図	50
IV-7	松河戸火山灰の岩石記載的性質	50
IV-8	松河戸火山灰層およびその相当層	51
IV-9	松河戸火山灰上下の珪藻分析結果	52
IV-10	松河戸遺跡群から産した昆虫化石	53
IV-11	松河戸遺跡の浅谷地形復元図	54
IV-12	試料採取地点および模式柱状図	57
IV-13	花粉分析結果	58
IV-14	松河戸遺跡89Dc花粉ダイアグラム	59
IV-15	伊勢型鍋胎重鉍物分析結果	64
IV-16	試料の胎土重鉍物組成	65
IV-17	試料の分類別胎土重鉍物組成	66
IV-18	分析結果一覧表	73
IV-19	主要造岩鉍物三角ダイアグラム	74

別表

I-1	灰釉系陶器碗分類	116
I-2	灰釉系陶器皿分類	117
I-3	灰釉系陶器碗構成比率	118
I-4	灰釉系陶器碗 口径器高分布	118
I-5	灰釉系陶器小碗・皿構成比率	119
I-6	灰釉系陶器小碗・皿口径器高分布	119
I-7	土師器系鍋分類	120
I-8	伊勢型鍋構成比率	121
I-9	伊勢型鍋分類別口径分布幅	121
I-10	灰釉系加工円盤分類	121
I-11	灰釉系加工円盤長短軸分布	121
I-12	灰釉系加工円盤構成比率	121
I-13	土錘分類	122
I-14	土錘分類別長さ分布	122
I-15	土錘分類別長さ幅分布	123
I-16	土師器系皿分類	123
I-17	土師器系皿構成比率	123

V-1	89EF区遺構変遷	82
V-2	水田計測値分布	83
V-3	灰釉系陶器流入イメージ	83

付論

編年表遺跡一覧	92
松河戸式器種分類	93
松河戸様式編年表	94
宇田型甕の分類と変遷	97
月縄手遺跡上層	98
月縄手遺跡上層	99
高蔵遺跡SH01	100
松河戸遺跡SK201	101
福田遺跡SB04	102
同者遺跡	103
弥生時代前期の遺跡分布と レーダーチャート	113

I-18	土師器系皿 口径器高分布	123
I-19	陶丸分類	124
I-20	陶丸構成比率	124
I-21	陶丸産地別比率	124
I-22	陶丸分類別構成比率	124
I-23	墨書表示器種別構成比率	125
I-24	SD105構成比率	125
II-1	特殊遺物分布図	126
II-2	銭貨分布図	126
II-3	伊勢型鍋等分布図	128
II-4	土錘・陶丸・墨書陶器分布図	129
III-1	中世期陶器様式編年表	128
III-2	89EF主要遺構所属時期	132
IV	SK201器種構成	132

一覧表

V-1	調査進行表	133
V-2	遺構一覧表	134
VI	遺物一覧表	138

図 版 目 次

- 1 庄内川・矢田川流域の遺跡
- 2 調査区位置図
- 3 水田畦畔と調査区
- 4 62AB区
- 5 62EFG区
- 6 63DEF・62H区
- 7 63GHIL・89AB区
- 8 63CJK・89BD・93A区
- 9 89CDEF区
- 10 89EFGH・91A区
- 11 63AB・89I・91B区
- 12 89D区第2遺構検出面
- 13 62EF区第2遺構検出面
- 14 62FSX101・102・62ESX01
- 15 62ESX03
- 16 89EbFa区
- 17 89EbSK151・89FaSK110
91ASK02・63BSE01
- 18 62FSK07・62ASK201
89EbSK168

遺物実測図

- 19 木製品A・B 縄文土器
- 20 縄文土器
- 21 89DcSD120出土土器
- 22 89Dc区出土土器
- 23 89DcSD120出土土器
- 24 89DcSD120出土土器
- 25 89DcSD120出土土器
- 26 石鏃他
- 27 石錘・石匙他
- 28 石斧
- 29 石剣・独鈷石・石斧他
- 30 62ASK201出土土器
- 31 62ASK201出土土器
- 32 62ASK201出土土器
- 33 62FSK07・須恵器
- 34 62ASD105・63BNR01他
- 35 91ABSD01・89IaSD06
- 36 91ABSD01・89IaSD06
- 37 89IaSD01他出土灰釉系陶器
- 38 62BSX101・62ESE01
- 39 62集石・89EbSD03
- 40 89Eb区出土灰釉系陶器
- 41 89FaSD105出土灰釉系陶器

- 42 89FaSD105出土灰釉系陶器
- 43 89FaSD105出土灰釉系陶器
- 44 89FaSD105他
- 45 89EF SD出土灰釉系陶器
- 46 89FaSK119・89EbSK180
- 47 89E SK出土灰釉系陶器
- 48 89E SX出土灰釉系陶器
- 49 89EF Pit出土灰釉系陶器
- 50 91Ab 出土灰釉系陶器
- 51 91BSD02・63BSE01
- 52 水田耕作土出土灰釉系陶器
- 53 水田耕作土出土灰釉系陶器
- 54 水田耕作土出土灰釉系陶器
- 55 水田耕作土出土灰釉系陶器
- 56 灰釉系加工円盤・墨書陶器
- 57 土錘
- 58 陶丸他
- 59 錢貨

遺構写真

- 60 62E区・89Dc区
- 61 62ASK201・62FSK07
- 62 水田検出状況
- 63 水田検出状況
- 64 水田検出状況 63EF・63D区空撮
- 65 89CDEF区空撮
- 66 89Fa区遺構写真
- 67 89Eb区遺構写真
- 68 89EbSK168遺構写真
- 69 89G・91B区 91ASK02

遺物写真

- 70 縄文土器他写真
- 71 89Dc出土遺物写真
- 72 89DcSD120出土遺物写真
- 73 石器他写真
- 74 62ASK201出土遺物写真
- 75 62ASK201出土遺物写真
- 76 62ASK201・62FSK07
- 77 62ASK201・62FSK07集合写真
- 78 91ABSD01・89IaSD06
- 79 91ABSD01・89IaSD06
- 80 灰釉系陶器等写真 89EFS105他
- 81 灰釉系陶器等写真 89EFS105
- 82 灰釉系陶器等写真 89FaSK119他

- 83 灰釉系陶器等写真 89EbSX151他
- 84 瓦・銭貨他遺物写真
- 85 胎土中の重鉍物 1
- 86 胎土中の重鉍物 2
- 87 珪藻 1
- 88 珪藻 2
- 89 松河戸火山灰他電子顕微鏡写真
- 90 昆虫化石の顕微鏡写真

I 調査の概要

1 経緯

松河戸遺跡は、北緯35° 13' 15" 東経136° 58' の愛知県春日井市松河戸町一帯に広がる庄内川右岸の沖積低地部に所在する遺跡である。JR中央線勝川駅から南東へ約500mほど住宅地を抜けると水田地帯が広がってくる。この住宅域が存在する河岸段丘の端には地藏川が流れ、そして南の庄内川とに挟まれた低地部を中心に遺跡が展開し、そこには条里制に深く関係すると考えられる水田畦畔が多く散見できる。こうした古代条里制遺構が明確に残存する当地区は、県下においても希少な地区である。また文献的には醍醐寺領安食荘との関係が早くから指摘されている所でもある▼¹。

さて松河戸遺跡は昭和61年(1986)に名古屋環状2号線建設に伴ない実施した範囲確認調査によって遺跡の性格が判明し、その成果を受けて昭和62年(1987)4月より本格的な発掘調査を開始した。その後は平成3年(1991)まで継続し、同年の調査をもって名古屋環状2号線に伴う発掘調査は終了した▼²。なおその間には松河戸遺跡関連調査として、名古屋環状2号線建設予定地周辺を春日井市教育委員会が数度に亘って調査を実施している▼³。

今回の調査は東西約1.4kmに及び、その間には様々な遺構を発見することができた。さらに自然地形・景観復元の手掛かりを得ることができ、遺跡立地を考える上でも重要な資料となった。また縄文時代の火山灰層「松河戸火山灰(MT層)」の発見▼⁴は尾張地域だけでなく、遺跡調査における広域的な鍵層としての期待をもたらし、縄文時代後期から晩期への基本的な環境変化を推定する上で、学術的に重要な問題を提示する結果ともなっている。

MT層

-
- ▼¹ 水野時二1971『条里制の歴史地理学的研究』大明堂
重松明久1973『古代』『春日井市史』春日井市
弥永貞三・須磨千穎1983『醍醐寺領尾張国安食荘について』『研究紀要』醍醐寺文化研究所
 - ▼² 北村和宏他1988『松河戸遺跡』『年報昭和62年度』愛知県埋蔵文化財センター
後藤浩一他1989『松河戸遺跡』『年報昭和63年度』愛知県埋蔵文化財センター
神谷友和他1990『松河戸遺跡』『年報平成元年度』愛知県埋蔵文化財センター
岡本直久1992『松河戸遺跡』『年報平成3年度』愛知県埋蔵文化財センター
 - ▼³ 大下武1991『松河戸遺跡』『愛知県埋蔵文化財情報6』愛知県教育委員会
永井宏幸1993『松河戸遺跡群』『愛知県埋蔵文化財情報8』愛知県教育委員会
 - ▼⁴ 森勇一ほか1990『愛知県町田・松河戸遺跡から発見された縄文時代後・晩期の境界付近に位置する火山灰について』『第四紀研究』

2 概要

松河戸遺跡の調査は昭和61年度以来、各年度単位で調査区を設定し、その基本はおおよそ現状の水田畦畔と道路によって区画された部分の区割りであり、調査予定順にアルファベットを年度記号の後に付加させて実施した。本書ではこれら年度単位の調査区記号はそのまま変更を加えずに掲載している。さらに遺構記号についても同様であり、整理作業での混乱を避けるため調査区単位の現地記号をそのまま採用した。

調査成果をまとめると松河戸遺跡は以下の大時期区分によって整理することができる。

大時期区分

- 1、縄文時代を中心とする時期で、特に62EF区において集中的に検出することができた。
- 2、弥生時代前期に所属するもの^{▼1}。89D区第2検出面の環濠と旧河道が注目できる。
- 3、古墳時代後半期を中心とするもので、まとまった遺構群は認められない。
- 4、平安時代末期～室町時代に所属する資料。最も多く、内容も充実している。特にその内で、89EF区においては極めて良好なかたちで遺構が検出でき、まとまった資料を得ることができた。その内容はおおよそ12世紀から始まる溝の掘削から開始され、13世紀において基本地割が正方位軸に基づく設定に変化し、同時に溝・建物によって構成される屋敷地が見られるようになる。その段階で木棺墓が作られ89EF区遺構群の最盛期を迎える。

水田

ところで全調査区において水田関連遺構及びその関連施設を検出することができた。これら水田関連遺構は時期的には大きく3つに区分でき、地区的には調査区最西端である62AB区とそれ以外に分割できよう。まず時期的な問題であるが、水田関連遺構として最も遡れるものは62AB区の古墳時代後期のものと考えられる。しかしその後の水田経営は認められず単発的な動きとして理解しておきたい。それに変わって改めて計画的な水田経営を推定できる資料として認められるものが、62G区以東の水田関連遺構である。各調査区によって水田関連遺構の検出状況が多様であるが、おおよそ上位水田と下位水田に分類できる(5頁)。上位水田はほぼ全調査区で検出できたもので、その所属は江戸時代中期の17世紀以降のものと考えられる。その下層に存在する下位水田は遺跡立地・古環境によってその形成が大きく異なり、場所によっては存在しない地区も多い。なお上位水田はおおよそ室町時代の14・15世紀に形成されたものと考えられるが、場所によってはその開発が12・13世紀まで遡る可能性も十分考えられる。その主要な要因の1つはその立地環境にあり、微地形での凹凸が部分的な水田化の端緒となったものと考えられる。しかしながら最も重要な点は基本地割りの設定が空間的な障害を無視して存在している点と、水田形状・用排水原理が少なくとも室町時代以来現在までほとんど変化していないことである。

^{▼1} 本書では便宜的に凸帯文土器以降を弥生前期に一括している。

次に各年度別の概要をまとめておきたい。

□ 昭和62年度 (1987年)

調査区は62A～62H区までの8調査区を設定して調査を実施した。ただし作業の都合により62A・62C区を同時にまとめて調査し、62A区としてまとめた。同様に62B・62D区を合わせて62B区とした。62AB・62EF・62G区は松河戸遺跡の西端に位置し、町田遺跡の東隣にあたる。なお62H区はややはなれた名古屋上水道に隣接した地区に設定した。

62AB区では現在の水田面から継続的に数面にわたる水田層が確認でき、そのうち中世期にまで遡る水田層が2層(上位・下位水田)、さらに古墳時代に所属する可能性があるものがその下層(最下層水田)から部分的に検出できた。また古墳時代の遺構が散在し、特にSK201からは良好な一括資料が見つかっている。62EF区では調査区中央部が広く微高地になり、縄文時代の遺構の広がりが確認できた。その内で集石遺構がその中心となる。

□ 昭和63年度 (1988年)

調査区は63A～L区までの9調査区を設定した。なお作業の都合上で63DEF区は合わせて調査することができ、63D区と総称する。63年度の調査は松河戸遺跡ほぼ中央部付近に集中した調査区が多く、63A・B区のみ庄内川に最も近い東南地区での調査となった。

調査区全体に水田面が検出されたが、63AB区のような多くの水田面を確認できる場所はなく、ほとんどが2～3層にとどまる。一方で庄内川に近接する63A・B区では現在の水田面の下層では明確な水田関連遺構が確認できない。かわって江戸時代の溝・井戸が検出できた。63L区では縄文時代前期の遺構を確認している。

□ 平成元年度 (1989年)

調査区は89A～I区までの9調査区を設定した。89A区を除いて他は松河戸遺跡東部に集中する。この年度の調査区において最も注目すべき発見があった。特に89E・F区において鎌倉時代の遺構が集中して発見され、同時に多量の中世陶器の出土が見られた。さらに89D区においては中世水田面の下層から弥生時代前期の環濠と土坑群が検出でき、さらに埋積浅谷を利用したと考えられる大溝SD120からは縄文時代晩期の土器ならびに木製品が出土している。

□ 平成2年度 (1990年)

89D区の中で平成元年度に調査できなかった部分に調査区(90A区)を設定した。

□ 平成3年度 (1991年)

松河戸遺跡東南部に位置する、県道関田・名古屋線をはさんで91A区及び91B区を設定した。なお本調査区をもって予定地内の調査を終了した。現在の水田面の下層には明確な中世期の水田関連遺構は確認できない。しかしながら奈良時代から鎌倉時代の遺物が含まれた大溝SD01を検出でき、その周辺部には鎌倉時代の遺構が展開する。

II 遺跡

1 遺跡の概要

発掘調査によって確認できた松河戸遺跡の性格を概観しておきたい。調査地区は庄内川右岸の沖積地であり、東西約1.4km南北約0.5kmにもおよぶために単一の性格を帯びた遺跡として認識することは困難である。しかしほぼ全域に中世期から近世期にかけての水田跡が検出できるのであり、その基本地割りはさらに古代にまで遡る可能性が高い。それは条里制関連遺構と考えることもできる(後述)。こうした視点を重視すれば松河戸遺跡は古代から現代にいたる沖積地開拓の歴史を解明する具体的なフィールドということができ、尾張国内でも条里制関連遺構が現在に残る大変貴重な地区でもある。ところで水田跡の下層には微高地が点在し、その地点には場所によって特色ある遺構群が展開して行く。その意味では縄文時代から近世にかけての複合する遺跡群という捉え方もできよう。

松河戸遺跡を前述の大時期区分をもとにまとめてみると、おおよそ以下のように分けて考えることができる。

- 1：縄文時代に所属するもので、63L区の縄文前期と62E・62F区に展開する縄文時代中期後半を中心とする集石遺構・土坑群。
- 2：弥生時代前期の時期。具体的には縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての遺構群であり、89D区下層に見られる環濠集落と考えられるもの。
- 3：古墳時代後半期に所属するもの。62A・62B区を中心に散在する。おそらく集落周辺部に位置するものと思われる。
- 4：条里制関連遺構(水田跡)を基本とした鎌倉時代～江戸時代にいたる沖積地開墾の歴史。水田耕作地の他に89E・89F区に見られる鎌倉時代の集落跡や、63A・63B区での江戸時代に所属する屋敷地と考えられるものも含まれる。

以上に加えて沖積地に埋没した微高地の存在や、埋積浅谷さらには縄文時代後期から晩期にかけて降下した「松河戸火山灰」の発見がある。

主要遺構をまとめておくと以下ようになる。

主要遺構
の数

- 1：縄文時代中期 集石遺構 8ヶ所・集石炉 3基・土坑多数
- 2：縄文時代晩期後葉～弥生時代前期 溝 2条・土坑 3基
- 3：古墳時代後半期 土坑 2基・溝 5条・水田跡 2
- 4：中世期 水田 228筆・水田方形土坑 141基

その他に旧河道 1・埋積浅谷 4

基本層序についてはおおよそ以下のように考えることができる。ただし微高地等の基盤層に基づき異なるのであり、詳細はPL-4及び各調査区での断面図を参照していただきたい。

基本層序

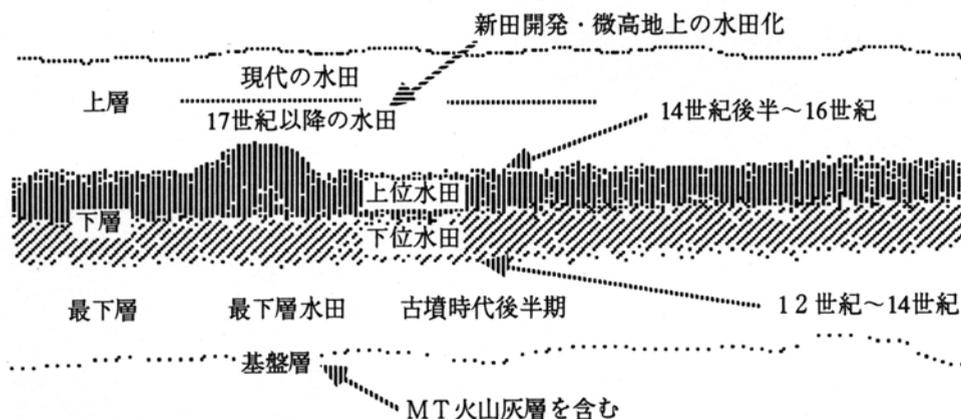
最も良好に堆積状況が残っていた62A区の状況を基に観察して見ると、層位をまず大きく3つに区分することが可能である。すなわち現在の水田耕作土・床土及び近代の土地整備事業から17世紀にまで遡る新田開発までのもので、開発行為による攪乱によるものとみられ、出土遺物は古墳時代以降明治時代にわたり幅広く認められる。これを上層としてまとめることができる。上層は最高4層の水田耕作土層（水田1～4）が確認できた地区もあるが、多くは2ないし1層である。土壌は淡褐色・黄褐色粘質の斑鉄あるいはマンガン斑紋がよく発達している。

上層の下には灰色粘土層が数層にわたって堆積する下層が存在する。その内で上位に見られる堆積土は斑鉄・マンガン斑紋が発達し、明確な畦畔が観察できる（水田5）。さらに床土を確認できる場合も見られる。14世紀後半～16世紀までの遺物を包含する。最も広範囲に堆積しておりこれを上位水田とする。また場所によってその下にはさらにやや暗い灰色粘質土が見られるものもあり、時に畦畔が検出できる場合もある。これを下位水田とする（水田6）。下層は14世紀以前の遺物が包含される。ここでは総括して下層を中世期水田耕作土と呼ぶことにしたい。

中世期
水田耕作土

基本的には上・下層の下位には場所によって砂礫層や淡灰色粘土層が堆積するが、これらをここでは便宜的に最下層と一括する。最下層の中には淡灰色粘土層・黒色粘土層（黒バンドI）が見られることが多く、埋積浅谷が発達した場所では時にその上位には暗灰色粘質土（最下層水田・水田7）や黒灰色粘質土が下層との間に堆積する。その中には極少量ではあるが5世紀末～6世紀の須恵器を伴う。

なお当地区の古環境・遺跡立地については第IV章第1節を参照されたい。



2 遺構

1) 縄文時代^{▼1}

縄文前期

63L区 に縄文時代前期の遺構が認められる。調査区東南隅に集中して土坑を検出できた。当地区は埋積浅谷3と呼んだ幅約30m～40mの谷地形の左岸に位置し、土坑の広がりから左岸の微高地に展開した小規模な遺構群と考えられる。しかし調査ではその北端部分と思われる箇所を僅かに調査しえたにすぎないのであり、遺構の性格を含めて判然としない。検出できた遺構は、長軸6m短軸4mの楕円形状の小溝(SX01)とそれに重複する長軸6.3m短軸1.8mの不整形土坑(SK01)を中心にして、小規模な土坑(SK02)及び若干のピット群から構成されるものである。SX01が住居跡に相当するものであるならばさらに調査区南部に集落が展開する可能性も考えられよう。出土遺物は若干の北白川下層II・III式土器がSX01周辺及びピット内から出土している。

縄文中期

62E・F区 に縄文時代前期から後期にかけて広く展開する遺構群が検出された。しかし出土土器が極端に少なく、そのかわりに石器の出土が目立つ。これらの遺物の出土状況は遺構群そのものの性格を反映しているものと考えられる。極少量の出土土器からは縄文時代中期後半から後期前半に所属するものと考えられる。遺跡の立地は62E・F区中央部に展開する微高地上に立地し、その西には幅50m以上の埋積浅谷2が存在し、微高地東には窪地状の湿地が広がっていたものと考えられる。さらに遺構・遺物の在り方から縄文時代中期の遺構群は調査区南北方向に広がる可能性が高いものと思われる。それは立地する微高地そのものの形態に制約された形となる。なお検出面の標高は約12mで、調査区全体に礫層が露出する。

調査区(62E・F)内での遺構の配置はおおよそ以下のようになる。特に62E区において方形あるいは不定形の比較的大きな土坑(4～6m)が散在し、その周辺には多数の土坑・ピット群が展開する。一方でその南の62F区ではそうした大きな土坑は姿を消し、そのかわりには集石炉と考えられる施設が3基集中して確認できた。ところで土坑には集石を伴うものが数ヶ所認められ、その中にはその範囲が3m×1.5mに及ぶものも確認できる。こうした集石施設はチャート・砂岩・ホルンフェルス等の礫群によって人為的に集積されている。さらにこれら周辺部には石鏃・フレイク等の石器類が散乱する状況が認められた。

▼1 図版 PL-5・7・13

SX01・02・03^{▼1}

62E・F区の中央部北側に検出した大型の土坑で、当地区の土坑群の中心的な施設と考えられる。これらの遺構には必ず一方に偏よって集石施設が伴う。SX01は南北4.5m東西3.8mの方形竪穴状の遺構で、深さ0.1mほどを測る。SX01の北東には2×1.5mの集石が認められ、人頭大の河原石が散在する中を拳大の河原石が集積されている。SX01には小規模なピットが認められるが、比較的浅く深さ10cmを越えるものはない。SX02は土坑群の最も東側に存在する不定形土坑であり、南北5.6m東西約4mで深さ0.06mを測る。やはり東北隅に集石施設をもち、3×2mの広がりが見られる。さらにまたそのすぐ西側のP233にも集石が存在する。SX03は最も大きな方形の土坑で、南北5.6m東西6m深さ0.05mと浅い落ち込み状を呈する。その内部には西側に偏る集石施設が見られる。集石は径2.5mの円形状を呈し、やはり人頭大の河原石と拳大の河原石が集積されている。また東北隅に存在するP139にも集石が見られる。ところでこれらの施設からは土器の出土は見られずその所属が石器製作所不明確であるが、フレイク・チップ等が多数発見されている。なお礫・地表面に被熱の痕跡は認められない。

その他に集石が認められるものとしてSX01の東にはP111・P232、さらにSX03の南にはP228・SK158が存在し、やや離れて調査区南西にSK117が存在する。さてフレイク・チップの出土地点を見て行くと特にSX01～SX03さらにSK121・SK163にかけて集中する。さらにSK131・SK164にもまとまりが認められる。こうした2000点以上にのぼる石器素材等の出土からこれらの土坑群を石器製作関連施設と考えるのが最も妥当であろう^{▼2}。

SX101・102

62E・F区の中央南隅に存在するSX101・SX102は同様な施設と考えられ、中央部に配石をもつ集石炉の可能性が考えられる。さらに近接するSK105も残存状況が悪いものの同種の施設と考えられ、約6mの範囲内に3基が集中する。

最も良好なSX102を見てみると、検出面で南北1m東西0.9mで、深さ0.4mを測る。平面形はやや不整形であるが、全体の掘削状況からはおよそ径0.8mの円形状を志向して垂直に掘削している(上層)。土坑の中央部には底部にさらに径0.55m深さ0.15mの円形の落ち込みが見られる(下層)。上層には黒灰粘質土が堆積し、下層には黒色シルト・焼土・炭化物混在土が堆積する。土坑内部には拳大の河原石が径0.5m深さ0.2mに充填され、中央部ほど被焼が強く観察できた。出土土器は見られない。

▼1 図版 PL-14・15

▼2 後藤浩一他1988「松河戸遺跡」『年報昭和62年度』愛知県埋蔵文化財センター

2) 弥生時代

89D区において弥生時代前期の遺構群を検出することができた。主要な遺構は溝SD05、大溝SD120、土坑SK101・SK102・SK104である。なお周辺には土坑・溝が重複しその所属が明らかにできないものも多い。

SD120とSD05で取り囲まれた空間が1つの居住域と想定すれば、SD05は集落を取り巻く環濠である可能性が考えられる。今そうした前提に立てば、これら一群の遺構群を弥生時代前期の小規模な集落遺跡と捉え直すこともできる。さてその立地であるが、SD120が断面図の観察からも明らかのように、この大溝が埋積浅谷4（幅約20m）の上部にできた窪みを利用した施設と考えられるのであり、集落そのものが谷状地形の左岸の微高地を利用した選地と思われる。その点はやはり谷地形を巧みに取り入れた朝日遺跡の立地条件との共通性が窺い知れる。

SD120^{▼1}

89D区南東隅に存在する大溝で、北東から南西にかけて流水する。上記したように埋積浅谷4を利用したもので、埋土はおおきく2分層できる。上層はI・II・III層といった褐色シルトを基本にした堆積が見られるものを総括したもので、その段階での溝の形態は幅12m深さ0.9mの断面皿状のものである。弥生時代前期の土器が出土している。さらにその下層にはやや傾斜の強い掘削が認められる断面箱状の溝が存在し、第IV・V層が堆積する。第IV層は泥炭層で、第V層は粗砂層となり、流水と滞水が推測される。なおそのIV・V層境付近より条痕文土器・木製品が出土している。これらの点からSD120の掘削が縄文時代晩期後葉に遡ることが理解できる。

SD05

環濠集落

SD120に接続する溝で、検出面での溝幅は約2.5m前後で、深さ0.3～0.4mを測る。なお溝底の標高は14.10m～14.40mとSD120に向かって下降する。断面の形態はU字形を呈し、散在的に弥生時代前期の土器が出土している。現状ではSD05によって囲まれた範囲は、SD120に対し垂直方向では40mほどになるが、環濠内のほとんどが調査区外に所在するため不明瞭ではある。少なくとも200㎡以上の空間が想定できよう。

SK101・102・104

SD05内に掘削された不整形土坑。いずれも内部には褐色シルトが堆積し、弥生時代前期の土器が出土している。なおSK101とSK104からは磨製石斧も見つかっている。SK101は1.8×1.0m、深さ0.3m、SK102は1.5×1.2m、深さ0.3mを測る。

▼1 図版 PL-12

3) 古墳時代後半期

62B・D区を中心に古墳時代後半期の遺構を確認することができる。ただしその遺構の在り方は極めて散在的であり、集中するようなまとまりは調査区内では認められない。また定期的に特定できるような在り方も認められない。出土遺物からその所属が明らかな遺構は62B・D区ではSK201、SD103・SD105・SD107・SK108そしてSX101・SX102。62F区でSK07、63B区のSK09、また62G区のSD01が含まれよう。その他で63B区に見られた旧河道からは廻間式土器や須恵器、あるいは89IaSD06・91ABSD01からも須恵器の出土が見られたが、前者は遺構に伴うものではない。ある程度まとまりが想定できるものは62A・Bに点在する遺構群であり、調査区外南部にこれらに関する遺構群の中心が推測される。

SK201^{▼1}

62A区中央部に検出できた土坑で、多量の土器の包含が見られた。松河戸Ⅰ式4段階の標識資料としたものである。SK201周辺には当該期に含まれる遺構は存在しておらず、単独的な在り方を見せている。SK201はその北側1/3が大きく破壊されていたが、ほぼその全形を復元することができる。径2mの円形の土坑で、深さ0.6mを測り、断面は皿状を呈す 土器焼成坑
埋土は4層に分かれ、上位から暗い灰褐色土、暗灰褐色粘質土、暗灰色粘質土、青灰色砂質土が堆積し、第2層には多量の土器片が見られ、炭化物・灰が混在する。こうした点から集落と離れた場所における土器焼成坑である可能性が高い。

SK07

62F区中央やや東南部に存在する土坑。検出面で1.1m×1.3mの円形状を呈し、深さ0.7mを測る。上位0.3mほどは緩やかに、その後はほぼ垂直に掘削される。土坑底部には拳大の河原石の配石が認められた。土坑内上位には土器の良好な出土が認められた。ほぼ完形に復元できる資料であり、小型手づくね土器を含む。こうした状況からなんらかの祭祀遺構であると推測できよう。なお出土した土器は松河戸Ⅱ式2段階新相と考えられる。

SK09

63B区南端に検出できた方形土坑。自然流路NR01上に掘削されたもので、南北4.0・東西3.0m深さ0.15mを計る。周囲には古墳時代に所属する遺構は認められない。土坑内より須恵器杯・有蓋高杯が出土し、その特徴から5世紀末葉に所属するものと考えられる。

SX101・102

62A区大遺構検出面の西端で検出できた不定形な落ち込みであり、SX101とSX102の間 水田
には幅約5mの直線状を呈する高まりが存在する。暗灰色粘質土(斑鉄含む)が堆積し、厚さは平均3~4cmと薄い。層位的な検討を含めて古墳時代後期の水田関連遺構の可能性が高い。

▼1 図版 PL-4・18

4) 鎌倉時代～室町時代

ここでは後述する松河戸遺跡中世時期区分に基づき中世Ⅰ期～Ⅳ期(34頁)までについて取り扱い、その遺構区分の概要は以下のようになる。

■中世Ⅰ期……

中心となる遺構群が存在しないが、遺物の出土としては、調査区の東南部の溝資料がある。具体的には91A・B区SD01及び89Ⅰ区SD06の資料であるが、奈良時代から継続する溝であり、出土遺物の在り方からおおよそ中世Ⅰ期をもって廃絶することが理解できる。溝幅約8m～5mで深さ0.3mほどを測る。この地点はPL-3に示したように庄内川左岸の氾濫原と水田域を画する部分に相当し、この溝に側して「松河戸ムラ」から「中切ムラ」に至る道が存在していたことが地籍図からも推測できる。そしてそれが12世紀の中で溝が意味をなくしていたことは、この地点での水田開発域の拡大・氾濫原の開発を示す重要な資料とも考えられる。

■中世Ⅱ期……

中世Ⅱ期としては最も充実した内容が窺われ、地区として大きく2群に分かれる。まず調査区西端部に位置する62A・B区に展開する一群で、今1つは調査区東南部での89Eb・Fa区を中心とするものである。

62A・B区^{▼1}

第2遺構検出面にて若干の遺構を検出できている。

SX101は62B区東側にて検出できた不整形土坑で、長軸8m短軸4mを測る。深さは0.1mほどで、浅い皿状の落ち込みには壺を含めて椀・皿の出土が見られた。なお椀・皿には使用痕跡が見れるものが多く存在し、未使用品4点が含まれる。62B区東端には集石遺構が存在する。拳大から人頭大の河原石が東西13m南北5mにわたって広がり、全体に平面的で立体的に積み重ねた状況は認められない。また特に意識した集石や配置も認め難い。しかしながらこの集石周辺から使用痕が認められる椀・皿の出土が見られた。

全体として62A・B区には居住空間を推測させるような遺構配置が認められない。なおその他に62E区東端で井戸SE01及びそれを中心にしたピット列が検出できている。

89E・F区

89Eb・Fa区西側には多くの溝状遺構・土坑・ピット群で構成される遺構群が検出できた。その配置状況や時期区分によっておおよそ4段階の変遷を辿ることが推測できる。その中で中世Ⅱ期が遺構配置の中心的な時期と考えられる。以下主要遺構を整理しておく。

^{▼1}図版 PL-16

SD03

89Eb区東端に存在する溝で、89Dc区SD01につながるものと考えられる。溝幅は1.8m～2mで、深さ0.3mを測り、断面はU字形に掘削される。溝内には暗褐色粘土と灰白色砂の互層が堆積する。なおSD03東掘形上には平行して掘削された小規模なピット列が認められる。出土遺物は中世IIa期のものが主体となる。

溝
89Eb・89Fa

ところでSD03周辺には同方向の小溝が数条認められるが、特に平行するSD108・89Dc区SD125との関係が注目できよう。SD108は溝幅1m～1.5mで深さ0.3mを測り、溝の中心からの距離幅は約9mを測る。おおよそ30尺で、5間となる。これを道と考えればその側溝と解釈できることになる。PL-3の地籍図からは、このSD03北西延長上に同方向の溝が存在し、注目したい。さらに南東延長上には松河戸町の墓所にあたる。

SD120

やや複雑に屈折しながら89Fa区の中で終結する溝で、SD105と重複関係が認められる。溝幅は一定していないがほぼ1mほどで、SD105との重複部分では1.8m前後と溝幅を拡大させる。深さもやはり不安定であるがおおむね0.3mで、SD105との重複部分では0.7mと深さを増す。溝内には暗灰褐色粘土が堆積する。溝はほぼ90度に3段に屈曲しながら調査区外に延長するが、2段目の屈曲部東側にはピット群(Pit群A)が集中する、これらを意識し区画するような在り方を見せている。なお出土遺物はIIc期に限定できるのであり、ピット群AがIIab期に所属することから、少なくともピット群Aが配置された後に溝が掘削されたことが理解できる。

SD105

89Eb区で検出できたSD120と重複する不定形な溝で、溝幅は一定ではなく3m～1mを測り、深さもやはり0.2m～0.6mと不均一。SD105の南側のSD120との重複部分では、溝が大きく弧状を呈し、その部分では溝幅・深さを増し、さらに土器が集中して出土している^{▼1}。土器は、SD105南側の楕円形土坑付近の西掘形に密集して検出できている。埋土の状況は、上から灰色粘土斑土・暗灰色粘土と堆積し、暗灰色粘土層から多量の灰釉系陶器が出土している。

出土遺物は多くが灰釉系陶器で、完形品の椀・皿が中心であるが、その内で検出時で椀・皿が重ね入れるような在り方が4組存在していることが確認されている。さらに椀・皿底部に墨書を施す資料が多く認められる。遺物の出土状況からはSD105西側からの土器投棄が推定できよう。

▼1 岡本直久1990「松河戸遺跡SD105について」『年報平成元年度』愛知県埋蔵文化財センター

SD104等の南端溝群

89Eb・Fa区の遺構群が集中する南端には、ほぼ東西に方向性を持つ不連続に重複しながら配置された、小溝群が存在する。西からSD104・SD103・SD101・SD177・SD176・SD174・SD173・SD182・SD180等が見られる。溝幅はSD104では1.0m～0.5mと不統一で、深さ0.05m前後と極めて浅い。他の溝も同様な状況を呈し、幅の不統一、皿状の僅かな落ち込みが不連続に重複するといった状況である。出土遺物は中世IIc期を中心とするものが若干出土している。

土壙

89Eb・89Fa SK168^{▼1}

89Eb区ピット群南に存在する土壙。検出面でのプランは隅丸長方形を呈し、中央部やや北両側に凹みが認められる。長軸をほぼ南北方向に置き、長さ2.2mで、短軸は1.0mを測る。深さは0.5mで、断面U字形を基本とするが、底部は幅0.4mほどの平坦面をなす。土壙内には加工木材・灰釉系陶器・烏帽子痕跡が見られる。主軸方向はN-5°-E。

さて加工材は複数の木材を横・縦位に配置するもので、明確な規格性は見出だし難い。ただ縦位木材はほぼ土壙底部に均一に配置されていた痕跡が窺われる。縦位木材は残存状況が悪く、本来の大きさを計測できない。横位木材は3ヶ所に配置し、それぞれの大きさは幅0.1m前後で、長さ0.75m前後を測る。厚さは現状では1cm程度しか残存していない。こうした加工木材や灰釉系陶器の在り方、さらに近県での類例からもSK168を「木棺墓」と推定することができる。木棺の状況を断面観察から推測すると、まず土壙底部に横位の木材を配置し、その後に直接縦位木材を並べ、側板に相当する部分も直接掘形及び裏込め土（灰色砂混じり）によってささえていたものと思われる。蓋板に相当する部分はやはり縦位の木材を利用して配置されていたものと推察できる。いわゆる組合式の木棺ではなく、現地で所定の加工材を組み立てる安易な作りのもと考えられる。尾張地域での類例としては阿弥陀寺遺跡SZ1001が見られる^{▼2}。

木棺墓

副葬品は北側に集中する灰釉系陶器のみで、椀2点・皿4点で、椀2点と皿1点は未使用品であった。椀・皿の特徴から中世IIb期に所属し、12世紀中頃と考えられる。なお烏帽子は僅かにその漆部分のみが残存するだけであったが、このことによって頭位の場所を推定することができる。

▼1 図版 PL-18

北村和弘1990「3鎌倉・室町時代」『阿弥陀遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第11集

▼2 近年（1994年）大垣市曾根八千町遺跡で同様な木棺墓が調査されていた。中井正幸氏（大垣市教育委員会）ご教示

SK151^{▼1}

89Eb区の西端に検出できた楕円形土坑。長軸は3.5mで短軸2m、深さは0.8mで掘形を緩やかに彎曲させながら掘削し、内部には複数の層位堆積が認められる。出土遺物は灰釉系陶器碗・皿・甕と土師器系皿が見られ、中世IIa期に掘削の上限を置くことができると考える。

SK110・SK111

89Fa区西端に存在する円形土坑。SK110は径約1.1m深さ0.8mを測る。土坑内には上位0.4mほど皿状の堆積が見られるが、その下位には断面垂直に掘削し、炭化物を含む層位堆積が確認できた。SK111もほぼ同様な在り方を見せる遺構であり、径1.0m深さ0.7mを測る。出土遺物はほとんど確認できていないが、IIb期に所属する灰釉系陶器の小破片が認められる。

土坑
89Eb・89Fa

SX151

89Eb区西端に存在する南北2.5mで東西3.2mを測る方形土坑。SK151の北側には中央部から北へ延びる浅い溝SD175が存在し、さらにSK151に相似形の方形の落ち込み（東西5m）が取り囲む。これらはほぼ同様な方向性（N-10°-S）をもつため関連する遺構と考えられる。またSX151・SK170周辺部には鉄滓・炉壁が点在する。出土遺物はIIbc期に所属する灰釉系陶器・灰釉系加工円盤・土師器系皿が出土している。

SX155

89Eb区中央部に存在する方形土坑で、SX154と北掘形部で重複関係が認められる。SX155は南北3.8m東西2.3m深さ0.3mを測る。断面は傾斜をもつ掘形に、底面が平坦な箱状を呈する。埋土は上層が暗灰褐色粘土に炭化物を含むもので、下層に淡灰褐色シルトが堆積する。下層から中世IIc期の灰釉系陶器と伊勢型鍋D類・土師器系皿が共伴する。

その他の調査地点

SK02

91A区に存在する井戸。検出面で径1.9mを測り、深さ1.8mで最下部にて曲物1段が残存していた。曲物は径0.55m高さ0.2mの円形。埋土は大きくIII層に区分でき、上から灰色シルトを基本にする第I層が0.3m堆積し、次に暗灰色粘土が0.4mほど堆積する第II層が見られる。II層には植物遺体層や炭化物が混在する。その下には灰色砂質シルトが0.8mほど存在する第III層が見られる。出土遺物は第I層からややまとまってIIc期の灰釉系陶器と伊勢型鍋が出土し、第III層からはIIb期の遺物が若干出土している。

井戸

▼1 図版 PL-17

■中世Ⅲ～Ⅳ期……

中世Ⅲ期の時期にはほとんどの遺構が認められなくなり、かわって中世Ⅳ期には水田関連遺構が広く全調査区に確認できるようになる。

なお水田関連遺構以外のものとして注目される遺構はほとんど確認できていない。

SK180

89Eb区北西端に僅かに確認できた土坑で、その主体は調査区外に置く。SD166・SD161が北壁部で交差する部分にあたり、埋土は暗褐色粘土が堆積し、深さ0.5m以上を測る。出土遺物は下部にて多くの河原石と混ざり灰釉系陶器・伊勢型鍋等が投棄された状態で確認された。中世Ⅲb期に所属する比較的良好な資料と考えられる。

SE01^{▼1}

63B区南端に存在する井戸で、近接してSE02が見られる。SE01は南北5m東西4mで深さ1.8mを測るもので、内部構造は河原石組の痕跡が認められる。また出土遺物は灰釉系陶器碗・皿が出土し中世Ⅳ期に所属するものである。なおSE02は河原石組みの構造が比較的良好に残存していた。

水田関連遺構

全調査区において普遍的に存在した水田関連遺構は、層位的におおよそ2つに区分できることを前述しておいた。すなわち基本層序では下層に含まれる下位水田と上位水田である。水田跡の総合的な分析は後述するためここでは上位水田と下位水田の所属時期とその特徴を概観しておきたい。

下位水田

下位水田はほとんどその全体を把握できる資料がないものの、62A区においてのみ畦畔を検出することができた。62A区では水田面が最も良好に残っているところで合計7層の層を確認できている。ただし畦畔を明確に検出できたのは下位水田のみである。それはこの地点が埋積浅谷1の上部に位置する窪地を利用していたためであろうと考えられる。

さて水田耕作土から出土した遺物は灰釉系陶器を中心に見て行くと中世Ⅱ期～Ⅳ期まで含まれる。その内ST07～ST11周辺部に限定すると中世Ⅳa期をもって終了し、それ以降の明確な遺物の混入は確認できない。したがっておおよそ14世紀後半期を下位水田の廃絶時期の1つの目安にすることができよう。問題は上限であるが、第2遺構検出面が中世Ⅱa期以前である点を踏まえると、おおむね中世Ⅱb期をその中心に考えられることもできる。62AST18耕作土内出土遺物が下位水田の成立時期に近い資料と思われる(PL-55)。

▼1 図版 PL-17

すると下位水田は中世IIa期～IVa期の中で考えることが可能であろう。おおむね12世紀後葉～14世紀前半期をその範囲内に置くことができることになる。

水田の形態は極断片的ではあるが、62AST08とST18に挟まれた溝及び平行する畦畔が大畦畔に相当すると考えると、基本的には「長地形」の内部を小区画する状況であり、小区画の規模が南北11m前後で長地形の幅が15m前後となる。この地区では小区画の畦畔がやや傾きをもつようである。なお上位水田に普遍的に存在する方形土坑は下位水田には存在しない。

上位水田

上位水田は中世IV期を中心とする水田関連遺構である。ただ地区によってはその成立が中世IIIb期にまで遡る可能性があるものも存在する。その範囲をおおむね14世紀から16世紀に考えておきたい。厳密に述べれば調査地区における微高地等の存在によって、地区単位で微妙に水田開発時期が異なると考える方が正しいようでもある。例えば63H区周辺は明らかにIII期からの水田開発が認められる。呈示できた畦畔平面図はこうした長期にわたる水田耕作作業のある断面である点を再確認しておきたい。

水田の形態は下位水田と同様に基本的には「長地形」の内部を小区画する状況である。ただしその単位がやや拡大する傾向が認められる。さらに特徴的な存在が各小区画の隅に存在する方形土坑である。これらは上位水田に広く普遍的に認められ、水田耕作に組み込まれたある機能をもったものと理解できる。具体的には堆肥用・貯蔵用等が推定できようが、調査によって具体的にその機能を明らかにするようなのは認められない。また出土遺物もほとんど見られない。

水田 方形土坑

■その他の時期

その他では63A区に存在するSD01は、溝幅3.5m・深さ0.08mを測る溝。調査区内で大きく屈曲するもので、溝内より江戸時代前期の遺物が出土している。

III 遺物

各時期ごとにまとめて出土遺物の説明を行ない、全出土量の大半を占める中世期の遺物についてはやや詳細に分類、その変遷を整理することとした。またこれらの結果をもって遺構の時期区分の機軸とした。

1 縄文時代

1) 土器

松河戸遺跡において縄文土器の出土をみたのは、62E・F区及び63La区である。62E・F区では、集石、竪穴状遺構が確認され微高地西に存在する埋積浅谷内「松河戸火山灰」層直下より若干の資料が検出できた。また、63La区では、竪穴状遺構が確認されており、それらを覆う包含層中より遺物が出土している。しかし、これらは遺存状況の不良なものが大半であるので、ここではある程度時期決定に必要な文様・調整等の判別可能な資料を中心に、説明を加えていくことにする。

62EF

62E・F区から出土した資料はPL-1.9：1～2、PL-20：13～19であり、概ね縄文時代中期後半から末葉及び後期前半に位置づけられる資料である。2を除いて全て「松河戸火山灰」層直下で検出されている。

中期後半から末葉と考えられる資料は大きく4類に分類することができる。

第1類 沈線文を施すもの (1.15.18.19)

1は地文として条痕を施したのち、内傾する口縁部に半截竹管による沈線文を施したものである。15.18.19は口縁下部に横位の沈線文を施したものであり、18はさらにその下位に山形の沈線文が認められる。

第2類 縄文の押圧を加えるもの (16)

16は地文として条痕を施したのち縦位に縄文を押圧したものである。

第3類 刺突が加えられるもの (17)

17は地文に条痕を施したのち、口縁下部に上下2段にわたって連続刺突を加える。

第4類 条痕が施されるもの (13.14)

13.14は器面上に条痕を残したままのもの。

後期前半に位置づけられる資料はPL-1：9：2のみである。2は波状口縁を有する深鉢であり、体部中位からほぼ直線的に口縁部に至る形状を呈する。口縁部は肥厚させ、端部には長形状の区画を配する。

63La区より出土した遺物は大きく前期後半と中期中葉の2時期の資料が認められる。 63La

縄文前期に比定できる資料はPL-20：3～9であり、その文様の特徴から大きく3類に分類することができる。

第1類 羽状縄文を施す (3)

3は口縁部に幅2cm程の無文帯を残し、器面上に羽状縄文を施すもので、口縁端部には刺突が加えられる。施文原体は上段RL、下段LRであり、結束部は認められない。

第2類 隆帯をめぐらす (4～6)

4～6はいずれも口縁部に、隆帯を貼付したものである。4は器面に縄文を施し、素文の隆帯をめぐらす。5・6は隆帯上に原体LRの縄文を施したものである。

第3類 半截竹管文を施す (7～9)

7～9いずれも体部片であり、器面上に、半截竹管による複雑な文様をつくりだしている。

これらは、概ね前期後半北白川下層II式ないしIII式に比定することができよう。

縄文中期に属する資料と考えられるのが、PL-20：10～12である。10は口縁端部を折り返すことによって肥厚させ、その直下より刺突を加える。11は口縁部に連続刺突文を集中させたものである。12は、波状口縁を有する深鉢型土器である。口縁部はくの字状に屈曲させ、体部のほぼ中位で緩やかに外反させる。口縁突起部には2列の連続刺突が認められ、体部には縦位の突帯を貼付し、突帯上には連続刺突を加える。これらは概ねその文様より縄文時代中期中葉の土器と考えられよう。

2) 石器

石器の記載について

松河戸遺跡の発掘調査によって出土した石器(製品)は、総数135点を数える。しかしながら大半の資料が上層遺構(中近世水田)調査時に検出されたものであり、個々の遺物の所属時期については十分に明らかにしえない。よってここで報告する資料は縄文時代の遺構が確認された62EF・63La区の該期包含層・遺構より出土した資料を中心に紹介していくことにする。

ただしこの資料とて、一部の遺構出土資料を除き縄文時代前期～後期といったかなりの時間幅を持たせた時期比定しかできないことをあらかじめ断っておく。

石鏃 (PL-26 : 115～150)

包含層中より出土した石鏃は36点を数える。中茎の有無・基部の形状により大きく以下のように分類できる。

石鏃分類 A類 基部にえぐりの入る凹基無茎鏃(115～144) 点数的にみて最も多量に出土しており、側縁の形状により、直線的な115～135、やや内彎気味の136～139、脚部が外方にはりだす140～144に細分することができる。

B類 基部が直線的な平基無茎鏃(146～150) 148はB類の典型的なものであり、147、148は基部が若干湾曲する。

C類 基部にえぐりが入り、中茎のある凹基有茎鏃(145) 有茎鏃と確認できる資料は145の1点のみであり、中茎の突出は明瞭ではない。

石鏃に使用された石材は在地の石材ともいえるチャートがほとんどであり、118.136.138はガラス質石英安山岩、132は安山岩が利用されている。

尖頭器 (PL-26 : 151.152)

151は中型尖頭器であり基部を欠損する。チャート製。152は全長6.3cmを測る大型品であるが、突帯文終末～弥生前期の包含層が確認された89E区からの出土であり、当該期に属する可能性も考えられる。ガラス質石英安山岩製。

石錐 (PL-27 : 153～158)

石錐は6点出土しており、その形状から、摘み部を形成するもの(153～155)と形成しないもの(156～158)がある。いずれもローリング痕は不明瞭であり、軟質材等の穿孔に使用されたと推定できる。チャート製。

スクレイパー (PL-27 : 159～162)

159～162は剥片の側縁に連続的に打撃を加え刃部をつくりだしている。159～161は刃部が彎曲するのに対し、162は直線的である。いずれもチャート製。

石匙 (PL-27 : 163~169)

石匙は7点出土している。その形状から大きく縦型(163)と横型(164~169)とに分類できる。横型石匙はいずれも丁寧な調整が加えられ定型的な形状を呈するが、その大きさは小型品(164)から大型品(168)までみられバラエティーである。165は安山岩製、その他はチャート製である。

打製石斧 (PL-28 : 173)

打製石斧と確認できるのは、173の1点のみである。小型品であり、バチ状に近い平面形態を呈する。ホルンフェルス製。

磨製石斧 (PL-28:174~179)

磨製石斧は6点出土している。174・175・177はいわゆる定角式磨製石斧であり、両側縁及び頭部を丁寧に研磨する。断面形状は隅丸長方形を呈する。176・178・179は断面が円形状、平面が棒状または乳棒状を呈するもので、刃部は両刃となっている。いずれも頭部を破損している。石材については定角式石斧はいずれもやや軟質の熔結凝灰岩を、176は凝灰質砂岩、178はホルンフェルス、179が緑色凝灰岩を使用している。

その他の石器

172は滑石製のケツ状耳飾りである。上部に穿孔が確認でき、半分以上を欠損するが円形に近い形状を呈すると考えられる。170・171はヒスイ製の勾玉である。ただし171は89D区より出土しており弥生時代のものかもしれない。114は旧石器時代に属すると考えられるブレイドまたは縦長剥片であり、背面にバルバースカーが明瞭に残る。チャート製。

2 弥生時代前期

1) 土器

■突帯文終末期……^{▼1}

突帯文終末期に属する土器は、89D区SD120第IV層中より出土している。溝内出土という性格上出土遺物には若干の時期幅を有するが、概ね突帯文終末期に比定される土器であり当該期の資料不足の感が拭えない尾張地方においては、今後の土器編年等を考究していくうえで貴重な資料と言えよう。PL-21：20～29に図示したように大きく壺、深鉢、浅鉢の3器種がある。

壺 (20・22)

20は内傾し狭くすばまった口縁と、大きく張り出した体部を有するもので、頸部と体部の境界は、頸部から口縁部はミガキ、体部には横方向の貝殻条痕と調整技法を違えることで強調する。内面は条痕調整ののち、ナテを施す。22は口縁から緩やかに外反気味に体部に至り、体部中位が大きく張り出した形状を呈する。口縁端部は平坦に収める。外面の調整は貝殻条痕、内面はナテを施している。

深鉢 (21.23.24～27)

24は口縁下部に素文突帯を有するもので、内面には1条の沈線をめぐらす。25は、素文突帯を有し、口縁端部には1条の浅い沈線を施す。23は頸部と体部の境界が明瞭であり、体部は条痕調整。21、26、27は無文粗製の深鉢であり、21は体部から口縁にかけて緩やかに内彎気味に立ち上がり、口縁端部は平坦に収める。体部の調整は横位の貝殻条痕であり、内面は横方向のナテ調整である。26、27も同様の形状を呈すると考えられ、26は条痕によるケズリ調整、27はナテによって仕上げられる。

浅鉢 (28・29)

28は口縁部を肥厚させ、端部に2条の沈線をめぐらす。内面は研磨されている。29は肩部に長楕円の浮線文を施すもので、口縁部は外反気味に立ち上がる。

以上、SD120より出土した突帯文終末期の土器について説明を加えてきたが、冒頭でも記したようにその所属に関しては若干の時間幅を持つ土器群のようである。^{▼2}

^{▼1} 本書では遺構の在り方を重視し、便宜的に凸帯文土器以降を弥生前期の項目で整理している。

^{▼2} 編年の基準は、突帯文土器研究会1993『突帯文土器から条痕文土器へ』
第1回東海考古学フォーラムに基づいた。

24は、野口分類の深鉢Ⅱ類^{▼1}に相当し、口縁端部の刻目・面取りはみられず突帯文Ⅰ期3・4段階に相当する資料と考えられる。20は変容壺であり、頸部と体部の境界が明瞭であり、かつ器面全体に条痕が施されておらず突帯文Ⅱ期1段階に、また22の変容壺は器面全体に条痕が施され、21.26.27の深鉢は口縁端部の面取りが明瞭であり、山中遺跡SD01出土資料^{▼2}と共通する要素が認められる点より突帯文Ⅱ期2段階に比定することができよう。ゆえに、SD120出土資料は単一時期を示す土器ではなく、概ね突帯文Ⅰ期3・4段階から突帯文Ⅱ期2段階までの時間幅を有する土器群と考えておきたい。

■ 弥生時代前期.....

弥生時代前期に比定される土器は、概ね89D区を中心とした地点より出土しており、環濠集落を構成する各遺構及びそれらと密接な関連を持つSD120から多数の資料が検出されている。ここでは主要な遺構の出土遺物を中心に説明を加えていきたい。尚、口縁部の残存する資料からの遠賀川系・条痕文系土器の出土比率は6.5：3.5であった。

SK101

遠賀川系土器・条痕文系土器が若干出土しているが、図示できうる資料はPL-21：37の条痕文系の甕のみである。口縁下部に横位及び縦羽状の貝殻条痕が、端部には、刺突が施される。

SK102

遠賀川系土器・条痕文系土器が出土しているが、条痕文系土器は少量かつ細片であるため図示することはできなかった。30～32は壺の頸部及び体部片である。いずれも4～5条よりなるへら描き沈線文からなる。33～36は甕の口縁部・体部片であり体部には2～3条のへら描き沈線文が、口縁端部にへら刻みが施される。33・34に関しては体部上半以上の形状を窺うことができる。33はほぼ直立気味に立ち上がる体部に鋭く外方に屈曲する口縁部を持つのに対し、34は緩やかに外反する口縁部を有する。体部は縦・斜方向のハケ、内面はナデによって調整される。

SK104

遠賀川系土器・条痕文系土器が少量出土している。38・39はへら描き沈線が施された遠賀川系の壺体部片。40は条痕文系の甕口縁部片である。

▼1 野口哲也1993「突帯文土器」『突帯文土器から条痕文土器へ』第1回東海古考古学フォーラム

▼2 服部信博他1992『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集

SD05

集落を取り囲むと考えられる環濠と考えられる遺構であり、量的には少ないが遠賀川系土器、条痕文系土器が出土している。

遠賀川系土器 41～45は壺の体部片であり、41.42は幅広の削りだし突帯上に3～6条のへら描き沈線を施したもの。43はへら描き沈線文のみからなる。44.45は突帯を貼付し、突帯上に刺突を加えたもの。46は壺の口頸部片であり、頸部は長く直立し、大きく外反した口縁を持つ。頸部には多条の沈線と下方側のみを削りだし突帯状にする特徴的な文様を施す。47.48は大きく屈曲する口縁部を有する甕であり、48はへら描き沈線を4条施す。

条痕文系土器 49.50は大きく外方にのびる厚い口縁部を持ち、口縁直下に押圧突帯を貼付した壺であり、49は端部に1条の沈線をめぐらす。51は緩やかに外反する口縁を持った甕であり、斜方向の条痕調整が施される。

SD120

最も多量の遺物が出土した遺構である。出土土器は大きくI～IV層に分層されて取り上げられており、弥生時代前期の土器群は第I～III層で出土した。各遺物の出土層位は図版中に明記し、ここでは大きく遠賀川系、条痕文系、その他の系統の土器に分け、一括して記述していくことにする。

遠賀川系土器 壺・甕・鉢・蓋の4器種がある。

壺 (PL-23.24:53～60.68.69.71～77.80～91)

53～60は口頸部及び頸部片であり、いずれも頸部が立ち上がり、大きく開いた口縁部を有するものである。53は頸部に貼り付け突帯をめぐらし、突帯上に軽い押圧を加える。54.57.58.59は削り出し突帯上に1～4条の沈線を施す。55.56.60は頸部にへら描き沈線を施す。以下はすべて体部片であり、へら描き沈線文が施されるものが多い。80は頸部と体部の境界に1条の沈線を入れ画するものであり、口縁部は残存しないので判然とはしないが、古相の壺によくみられる短く外反する口縁がつくものと考えられる。68.76.77.90.91は貼り付け突帯を有するもので、77.91は押圧突帯であり、亜流の遠賀川系土器と考えられる。88.89は削りだし突帯上に沈線をめぐらしたものの。

甕 (PL-23.24:61.62.70.78.79)

壺に対して甕の出土量は少ない。61はほぼ全形を窺うことのできる資料であり、緩やかに外反する口縁部を持つ。体部には4条のへら描き沈線が施され、体部上半は縦方向のハケ調整が確認できる。62・70は外面に文様をもたず、ハケ調整のまま終わるものであり、

62は口径39cmを測る大形品である。78は半截竹管による沈線が確認でき、亜流の遠賀川系土器と考えられる。79はヘラ描き沈線が5条確認できる。

鉢 (PL-23 : 63.64)

63は突起を有するもので外面には部分的にハケ調整の痕跡が残る。64は口径39cmを測る大形品であり、やや内彎気味の体部から緩やかに外反する口縁部を持つ。内外面ともにナデ調整。

蓋 (PL-23 : 52)

52は壺の蓋と考えられ、全体の5分の1程が残存する。穿孔が1ヶ所確認できる。

条痕文系土器 壺・甕・内傾口縁土器がある。

壺 (PL-23.25 : 65.66.94.98~101.110)

いずれも口縁下部に幅広の突帯を貼付したものである。指圧による押圧を加えるものが大半であるが、66.94.101は棒状または板状の工具による。口縁端部の文様は、65のみ沈線を2条めぐらすが、他はナデ調整のまま無文に終わる。98は壺の底部、110は縦羽状の条痕と横位の条痕が確認できる体部片である。

甕 (PL-25 : 92.93.95~97.102~109)

いずれも細片であり、全体の形状は判然とはしない。口縁端部の状況は、平坦なものが大半であり、108のみ丸くおわらせる。平坦なものは施文の状況によりさらに細分することができ、92.103は刺突、104は押し引きが施され、他はすべてナデ調整のまま無文に終わるものである。端部を丸くおわらせる108は外面にはヘラ状工具を利用した刻みが、内面には条痕原体を利用した押し引きが施される。

内傾口縁土器 (PL-23 : 67)

67は、直立気味に内傾し、口縁部は肥厚し、端部は平坦である。外面は不鮮明ながら条痕が確認できる。

その他の系統の土器 (PL-25 : 111~113)

111は半截竹管による波文を体部に施したものの。112は沈線により区画されると考えられる精製土器で、外面は研磨される。113は摩耗が激しいが渦文土器であり、体部に沈線による渦巻状の文様が描かれる。

以上紹介してきたこれらの遺物は、遠賀川系土器に関しては概ねI-3~4期に、条痕文系土器については条痕文II期に比定することができよう。

2) 石器

弥生時代前期に属する石器は量的に多くはないが石鏃の一部及び独鈷石を除き、遺構から出土しており注目することができる。概ね突帯文終末～弥生時代前期に比定できる。

石鏃 (PL-29:180~186)

180~182は凹基無茎鏃であるが縄文時代のものに比べるとえぐりは浅い。183は平基無茎鏃、184~186は、凹基有茎鏃である。182はチャート、その他はガラス質石英安山岩製である。

打製石斧 (PL-29:189)

189はSD120第IV層から突帯文終末期の土器とともに出土したものである。頭部は欠損するが、ほぼ刃部に至るまでほぼ同じ幅であり、長方形の形態をとる。ホルンフェルス製。

磨製石斧 (PL-29:187.188)

188はSK101から出土した両刃型の磨製石斧であり、側縁の一部に敲打痕を残すが、ほぼ全面を丁寧に研磨されている。187は刃部を欠損するが、188と同様に両刃型の石斧であったと考えられる。頭部には敲打の痕跡が残り、叩き石に転用されている。SK104出土。いずれも石材は変塩基性岩を石材に使用している。

その他の石器 (PL-29:190.191)

190は身を欠損するが鉄剣形磨製石剣の基部であり、SD120の上層より前期後半の遠賀川系土器等とともに出土した。その所属時期については、従来の考えでは近畿以東においてこの種の石器が盛行するのは中期後半以降のこととされてきた^{▼1}が、本遺跡では中期以降の遺構・遺物が確認されてはいないので、遠賀川系土器の時期に求めるが自然であろう。頁岩製。191は中央部にくびれ部を持ち左右対称の形状を呈する独鈷石であり、弥生前期の包含層中から出土した。はんれい岩製。

3) 木製品 (PL-19:A.B)

89D区SD120の最下層(第V層)からは若干の木製品が出土している。その内で注目したいものが丸木弓(A)である。ほぼ2/3の形状が残存し、端部には弓筈部が作り出される。中央部は断面が球形で、2条の樹皮巻きが認められ、さらにその上部には握り痕跡が明確に認められる。その他不明加工木製品(B)が見られ、板状の残存部中央には2箇所に円形孔が穿たれる。

▼1 平井勝1991『弥生時代の石器』考古学ライブラリー-64

3 古墳時代後半期

1) 土師器

古墳時代の土師器に関しては付論で分類とその変遷を後述するため、ここでは器種分類と編年をこれらに基づき説明をすることにしたい。

SK201 (PL-30~32)

62A区第2遺構検出面にて確認できた円形の土坑で、その第2層からまとも土器の出土が見られた。なお出土遺物としては土師器以外認められない。松河戸I式4段階の標識資料である。

まず甕であるが、192~198はS字状口縁台付甕（以下S字甕とする）D類中段階の資料であり、192に典型的に認められるのであるが、口縁端部に明瞭な平坦面を残し肥厚する。口縁部の厚さはほぼ均一で、S字甕D類古段階に比べると体部も含めていっそう厚さを増す。体部にはヨコハケが見れず、ハケメも粗く体部上位のハケメが大きく長く施される。台部は八字状に大きく開き、端部には折り返しが明瞭に残る。台部内外面の補充技法はこの段階でほとんど認められなくなる。199~205は器壁が比較的薄く、口縁部は大きく外反する形態のもので、底部は平底が基本であるように思われる。調整法は摩滅が著しく不明瞭であるが、ハケメの使用はほとんど認められない。211~214.225は口縁部に鈍い稜を持つもので、212は体部外面をナデ調整し、下位にはケズリが施される。内面はヨコ方向に板ナデが認められる。全体の形状は山陰東部地域に類似するも判然としない。222~224は彎曲する口縁部をもつ平底甕。その他の多くの甕は台付甕と考えられる。口縁部はやや外傾するものが多く認められ、外面の調整にハケメはほとんど見られず、ナデ・ヘラケズリ技法が主体と考えられる。

松河戸I式
4段階

高杯は大きく2つに分類できる。まず杯部が深く口径が小さいものと(B2)、逆に杯部が浅く大きく外反し、口径が大きいものである(B3)。後者は231.232が典型的な形態であり、脚部はやや開きながら膨らみをもつ柱状部である。外面はミガキ・ヘラナデといった前段階に多用された技法が認められる点が興味深い。脚柱状部内面はナデ・ケズリといった調整が見られる。一方のB2形態は脚柱状部が比較的直線的で、外面にはナデ・指による整え程度の痕跡しか認められない。また内面にもしほり目・指頭ナデが残り、ナデ等の調整はほとんど見られない。

壺は大小が存在し、小型壺は252のような口頸が小さいものと(B2)、253のような大きく口径が体部最大径とほぼ同じ形態のもの(B1)とが存在する。外面は指によって整える。234は台付壺で、口縁部は大きく外傾する。258は直立する口縁部をもつ短頸壺で、体部はやや長胴で外面には粗いハケメが施される。SK201におけるハケメの使用はS字甕以外極めて例外的な存在でもある。263は白色を呈する台付短頸壺で、内外面にはケツリ技法が認められる。259～262は有段・稜部を口縁部にもつ壺で、口縁の形態は261とそれ以外に区分できる。

SK07 (PL-33)

62F区で検出した土坑で、出土遺物は松河戸Ⅱ式2段階の資料と考えられる。高杯2点・壺2点・台付甕1点そして手づくね土器1点が伴う。高杯268は大きく外反する杯部を持ち、垂下稜が認められるもの(B4)。脚部は大きく緩やかに外反し、明確な屈折は認められない。脚柱状部内面にはヨコ方向の板ナデが施される。外面は杯部でヨコナデを施す以外は指ナデを基調とする。269は深く大きな杯部を有する高杯で、脚部も大きく八字状に開く(C)。この形状は松河戸Ⅱ式期に特徴的に認められるものである。267は口縁部が小さく外傾する小型壺B2と相似の形態をもつもので、器壁は厚く外面は指で整え、内面は板ナデ。264は直口する口頸部をもつ丸底の中型壺で、松河戸Ⅱ式期でも新しい段階以降に散見できる形態である。265は台付甕で、頸部の径が小さく直口する口縁部をもつ。外面は板状工具によるナデ。内面はヨコ方向の板ナデ。

2) 須恵器

明確に遺構に相伴した資料は極めて少なく、62A/G区～62G区にかけて散見できるにすぎない。

PL-33：274.275は62G区にて出土し、274はSD01埋土内より見つかった。274は須恵器杯蓋で、天井部が平坦であり、回転ヘラケズリが稜まで施される。275も同様であるが、稜上位に段が出現し始めている。端部は面取りする。これらの特徴は城山2号窯出土品よりも明らかに古く遡る資料と考えられる。62G区SD01は径20mほどの円墳の周溝である可能性が高いものであり、出土した須恵器から所属時期を5世紀前半期におくことができる。

(PL-33:270~273) SK09

63B区の土坑SK09からは270~273の須恵器の出土が見られた。270・271は杯蓋で、天井部がやや高いものの回転ケズリは稜上位の段付近まで施される。端部には外方への拡張が認められるも明確な凹みを構成していない。272・273は尾張型須恵器の特徴を良く残す有蓋高杯である。273の脚端部は彎曲状ではなく面を意識する。これらの特徴からはおおむね東山11号窯期の内にあるものと判断できよう。

(PL-34:279~284) SD105

62A区第2遺構検出面にて確認することができた溝で、須恵器蓋杯・土師器台付甕の台部が出土している。杯蓋は口径が15~15.3cmを測り、天井部が丸く、回転ケズリは天井部上位に後退する。さらに口縁部の形態は彎曲化する。杯身の立ち上がりは内傾し、端部には明確な段を有する。こうした特徴から東山61号窯期に所属するものと考えることができよう。因みにSD109出土品である蓋杯(285.286)も同様な特徴を持つものである。

その他 (PL-35.36)

奈良・平安時代に所属する資料が存在する。

91A・B区のSD01や89 I a区SD06には須恵器類がややまとまって出土している。杯身は高台付のものが口径15cm前後にまとまり、口縁部は外傾し、底部は彎曲を僅かに留める。無高台のものは口径が13・12cm前後で、底部は丸味を残しへら記号を留める資料が多い。杯蓋は端部が下方に突出し、摘みはやや扁平なものが多い。その他に短く緩やかに立ち上がる口縁部をもつ鉢(324)や、横瓶(325)が見られる。こうした形態的な特徴や器種の構成はその中心を岩崎41号窯式期に類似点を求めることができよう^{▼1}。それは無高台で底部に回転へらケズリをもつ杯が未だ欠損する点や、篠岡78号窯出土品との比較においてその類似性からも容認できよう。

また91A・B区SD01・89 I a区SD06は灰釉碗・皿の出土も確認できる。その多くは形態・技法の特徴から虎溪山1号窯・丸石2号窯期に所属する資料が主体を占める。したがって91A・B区SD01・89 I a区SD06は7世紀末葉と11世紀前葉に中心を置く2つの資料群が存在することになる。

▼1 斎藤孝正1988「猿投窯第III期杯類の型式編年」『名古屋大学総合研究資料館報告第4号』

4 鎌倉・室町時代

1) 分類

中世期における形式分類をここでは以下のように考える。まず灰釉系陶器全体においては機能的な分類案が流布しているため、基本的には資料的な制約からもこれを踏襲する。ただしその内で最も主体的な存在である椀・皿類についてはやや詳細な形式細分を行ない、以下分類基準をこれに基づき行う。土器については土師器系と一括し、機能的な名称を付加した形式名をそのまま採用する。

山茶椀

なお様式名称として「山茶椀」という一形式？名の灰釉系陶器群への拡大・付与は^{▼1}、縄文～土師器研究史においてほとんど認められない視点でもあり、容認するのは困難かと思われる。しかし特定型式名に限定しての「山茶椀」という用語の使用は再考に値するものと思われる^{▼2}。

以下特に問題としたい形式についてのみ述べておきたい。

■灰釉系陶器.....

形態の全体的な特徴を基本に分類することにし、系統的な変遷を加味することによって特定型式の抽出はそれほど困難な問題ではない。さらに色調・胎土も灰釉系陶器においては大きな特徴を表わす場合も多々認められる点はすでに多くの指摘がなされている。そこでここでは近年の藤澤論文^{▼3}に準拠しつつ松河戸遺跡での分類をまずは考えてみたい。

椀

大きく4つ(0～IV類)に区分し、さらにそれらを細分する。椀0類は灰釉椀の中で出現する形態で、高台は大きく底部は厚く体部と独立した形態を留める。

尾張型

椀I類は極めて普遍的に存在する形態であると同時に椀の中心的な存在と考えられる。「尾張型」とする。尾張型は体部が内彎し、口縁部において僅かに外反する特徴をもつものと、体部が直線的で、全体に口縁に向かって外傾する形態を保有するもの。前者を尾張型A、後者を尾張型Bとする。現状では尾張型Aは瀬戸窯・東山窯系と考えられ、一方で尾張型Bは有松・鳴海窯系統の生産地を中心に拡散する形態と思われる。

▼1 いわゆる瓷器系陶器全体を示すもの

▼2 あえて山茶椀という用語を使用するとすればここでいう尾張型椀Bに限定して用いることも可能ではある。すると美濃窯・瀬戸窯には原則的に山茶椀は存在しないことになるのだが。

▼3 藤澤良祐1993「生産技術の交流と展開」『東海の中世窯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター

碗II類は高台径が比較的小さく、底部からやや直線的に延びる体部をもつもの。「瀬戸型」とする。瀬戸型は胎土に半精製品を含み直線的で深さのある体部形態をもつものと、やはり直線的であるが端部に著しい肥厚が見れる粗製品の2者が認められた。前者を瀬戸型Aとし、後者を瀬戸型Bとする。瀬戸型Aは南山窯等に確認でき、瀬戸型Bは瀬戸・黒笹・藤岡窯に多く認められる。

碗III類は精製品の「均質手・北部系」と称されるものを一括する。極めて精製的で、薄
東濃型
碗の範疇で考えられる。粘土紐積上技法を基本とするI・II類と製作技法的に大きく異なり、ロクロ水引技法に基づくものと思われる。「東濃型」とする。東濃型は灰釉系陶器碗の中で最も器高の高い一群の資料と。端部にいたるまでほとんど変化を持たず、器高の低いものにて区分する。前者を東濃型Aとし、後者を東濃型Bとする。

皿

4つに区分する。皿0類は高台をもつ「小碗」と称されているもの。本来は細分が可能であろうが、本遺跡では資料数が少なく一括する。皿I類は高台が欠損し、体部がヨコナデによって2段構成になるものを基本とする。なおI類は体部が外傾し、底部が小さくさらに突出するものと(A)、それ以外のもの(B)に2分する。皿II類は大きな底径に小さな体部が付くもので、器壁は比較的均一化し、端部に明確な面をもつ。皿III類は東濃型の精製品を一括する。器壁が薄く器高1cm以下のIIIB類とそれ以外のIIIA類に2分する。

碗と同様な系統を考えることもできようが、ここでは皿I類を尾張型とし、II類を瀬戸型、III類を東濃型と考える。

灰釉系加工円盤

灰釉系陶器を素材にした土田分類A・B¹を灰釉系加工円盤とする。ここではそれらをあらためてI類とII類に分類する。I類は土田A1類を意味し、灰釉系陶器碗高台部を素材にしたもの。II類はそれ以外の土田A2・B類を一括する。またI類を高台部の位置によって2分する。すなわちほぼ中央部に高台部を置くもの(Ia)と、一方に偏るもの(Ib)。長軸短軸分布ではこの両者に円形・楕円形の区分が認められた。なお製作的には周辺部を丁寧に細加工するものや、素割り段階で終了するものがあり、前者は円形加工円盤に多々見られる。

灰釉系加工円盤はI類が基本であり、ここでは92%を占める。なお重さは7g~13gに集中する。

¹ 赤塚美智代1987「加工円盤」『土田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第2集

陶丸

各調査区より出土の総数238個を分析すると、ほぼ径によって大きく小・中・大の3つに区分できる。小は径2.0cm未満のもので、重さは9g以下を一括する。やや散漫な分布を示すが、径1.7~1.9cm前後で重さ8g前後が多い。中としたものは径2.0~2.2cmで、重さ9~11gに集中する一群の資料を中心とする。大としたものはこれら以外の大きなもので、径2.3~2.4cmで、重さ13~14gに集中する。別表の分布からもおおむね小・中・大(1・2・3類)の区分が存在することが認められよう。中(2類)が全体の63%を占める。

東濃産

その他に胎土で精製品と粗製品に大きく区分できる。精製品は東濃産とすることができ、全体では81%と圧倒的な占有率を示し、陶丸の流入が東濃型碗・皿類の消費地への拡散段階であることを物語っている。

墨書表記

土田遺跡での分類を踏襲する^{▼1}。内容によって3つに区分する。I類は「数字を表記するもの」で、II類は「文字を表記するもの」、III類はその他である。I類としたものが108点の中で28%を占め、II類は41%を占有する。なお墨書の部位は大半が底部であり、器種では全体の出土量との相対的な比率においては、明らかに灰釉系陶器碗・皿「東濃型」が高い比率を占める。

■土師器系.....

鍋

I類とした「清郷型」とII類とした「伊勢型」に区分する。本遺跡ではII類が大半を占め、特に断わらない限り以下伊勢型鍋の分類を示す。伊勢型鍋はA・B・C・D・E類に区分しておいた。口径からは20cm前後の小型(1類)と23~24cmの中型(2類)、25cm以上の大型(3類)に区分できる。

伊勢型鍋

伊勢型鍋A類は口縁部が摘み挙げ状となり、口縁部が小さく外反するもの。B類は肥厚する口縁端部をもち、比較的球形の体部から小さく外反する口縁部をもつもので、外面調整はヨコナデ、指ナデが認められる。ケズリは底部に限定される。本遺跡の資料では1類とした小型品のみが見られる。C類は端部肥厚が傾斜をもち、折り返し痕跡が明確になる。頸部が明確になり立ち上がる。D類は折り返し口縁で、やや偏平な体部から直線的に立ち上がる頸部をもち、大きく屈折して外反する口縁部をもつもの。C・D類は口径からは中・大の2つに区分でき、小型品が見られず、B類とは大きく異なる様相を見せている。

^{▼1} 永金千佳1987「墨書陶器」『土田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第2集

E類は口縁の内彎化が著しく、器壁も極端に薄くなる。軽量薄甕で、体部は偏平化が著しい。口縁部は大きく折れ曲がる。外部は体部にハケメが残り、体部下位には大きくヨコケズリが施される。表面的には胎土に雲母が目立つ。中型品（2類）に集中する傾向があり、口径が統一的になり、規格化が認められる。薄甕・胎土変化・法量においてE類の登場が大きな画期と考えられる。

III

大きくI類とII類に大別できる。その内でII類は小さな底部から大きく外傾する体部をもち器壁は薄く、灰釉系陶器碗III B類と類似点が存在する。これらは本遺跡では極めて少量が水田跡から出土しているだけである。清洲城下町遺跡等で主体的に出土する形態であり、16世紀以降に盛行する^{▼1}。I類はその形状によってAとB類に区分でき、A類は比較的小さな平底から段状を呈しながら口縁部に移行し、器壁は厚い。小・大が存在する（A1・A2）。B類は底径が大きく、内彎する小さな体部をもつもの。やはり小・大が存在する（B1・B2）。本遺跡に限定すればA類は回転台使用品で、B類は内型使用品と思われる。

土錘

形態と法量さらに出土点数を加味すると、大きく3つに区分できる。I類は本遺跡では少量の出土しか確認できず、基本形には奈良・平安時代に盛行する形態と思われる。直線的な形態と菱形との区分がある。前者をA類、後者をB類とする。出土品においては両者ともに端部の面取り調整は認められず、外面も指ナデを主体とするものが主体を占め、技法的には前代からの退化段階と考えられよう。4 cm前後をさかいに小・大の区分が見られる。

II類は中央部に最大径を置き、緩やかな曲線を描く形状を留めるもので、小（4 cm前後）・中（5・6 cm前後）・大の区分が認められる。やはり端部の面取りは認められず、指による整形が基本である。総数168点の中で57点34%を占める。

III類は細身の土錘を一括した。指による整形が基本で、比較的短く、やや僅かな曲線が認められるものと（A）、長く直線的なもの（B）の2者が存在する。A類は幅がおおよそ1.4 cm前後と一定で、長さによって3.7 cm以下のA1と3.8 cm～のA2に区分する。B類は逆に長さが6・7 cmに集中し、幅が1.4 cm以下のB1と、1.5～2.2 cmのB2に区分することができる。硬質灰色を呈するものはIII B類に偏る。なおIII類が全体の57%を占め最も多く出土している。なお重さによる分析では良好な結果を得られず、器種と重さには明確な相関関係は認めにくい。

▼1 鈴木正貴他1990『清洲城下町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集

2) 分布

特定器種の分布において、興味深い在り方を示すものをここではまとめて整理しておきたい。

89Ea・Fa
分布型

個別の遺物の分布を概観すると、その分布の偏りから大きく3群に区分することができる。つまり中世期の遺構が集中する89Eb.Fa区を中心に分布が偏る一群の資料(89EF分布型)と、89Eb.Fa区に分布が集中するもそれ以外の特に南東調査地点において分布集中するもの(南東分布型)。そして今1つが89EF区と無関係に、むしろこの地点以外に分布が集中するもので、特に水田関連遺構が検出できた63L区・63H区に集中するもの(63HL分布型)がある。

89EF分布型を示す遺物は伊勢型鍋・土師器系皿・墨書表記・瓦がある。その他に鉄滓を含めて考えることができる。一方で南東分布型は土錘・陶丸・灰釉系加工円盤において確認できる。最後に63LH分布型は銭貨の分布において特徴的に認められる。それは上記の2つの分布型を示す遺物とはむしろ対照的な分布状況を示し、明らかに集落遺構とはかけ離れた在り方をみせる。特に63H・L区に集中しており、これらは水田跡から散在的に出土している。このような在り方は水田経営における目的別の銭貨の使用(祭祀を含めて)を暗示するものとも想定できる。

ところで89EF分布型は明らかに居住域を想定する資料と考えられるもので、特に瓦・土師器系の資料や鉄滓は遺構の性格そのものに直接係わる重要な資料と考えられる。また南東分布型は陶丸・加工円盤といった非日常的な遺物と考えられているものが含まれ、特に土錘は生産的な使用をその機能にもつと考えれば、分布の集中域そのものがそうした活動範囲を表わすものとも考えることができよう。

最後に灰釉系加工円盤と陶丸の分布をより詳細に検討してみたい。

加工円盤
と陶丸

加工円盤と陶丸はおおよそ分布域が重複するも、逆に大きく異なる地区も認められる。まず89Eb.Fa区では加工円盤はピット群Aとした89Ea区の柱穴群の南側に集中する傾向が見られる。一方で陶丸も同様に分布の密度はやはりピット群A南部に存在するが、加工円盤に比べより範囲が拡散的である。89Eb.Fa区以外の地点でも陶丸により広い分布域が確認できる。特に89G区に集中箇所が存在する。さらに89Eb.Fa区の集中分布箇所には土壌が配置されており、SD105の遺物投棄地点に近接するような非日常的な場がそこに想定できるようである。陶丸の使用を考える上で留意すべき点であろう。

3) 時期区分

土器・陶器の形式組列の変遷を基に中世期を大きくⅠ～Ⅳ期に区分する。おおむね土田遺跡^{▼1}での変遷を踏襲することになる。

中世Ⅰ期

灰釉系陶器Ⅰ類とした尾張型の登場をもって考えることができよう。規格化した無釉の大・小の椀を基本とする。形状は藤澤編年^{▼2}第3・4型式の資料が相当し、おおむねそれぞれⅠa期・Ⅰb期と区分できる。土師器系では鍋Ⅱ類とした伊勢型鍋がⅠb期の中で登場するようである。また松河戸遺跡では尾張型椀Bとした直線的な体部を有する椀がⅠb期ですでに主体を占める。11世紀後葉～12世紀中葉までの時期を考えることができる。

中世Ⅱ期

灰釉系陶器尾張型が盛行し、瀬戸型とした椀ⅡA類が僅かに散見できるようになる。伊勢型鍋は徐々に増加し、B類C類へと変化する。小椀から高台が欠損した「皿」が定着する時期でもある。特に椀はその形態の変化から3つに細分する。Ⅱa・Ⅱb・Ⅱc期とし、Ⅱc期には口縁部に肥厚する形態が出現する。尾張型椀Bが中心的な存在であることに変化はない。常滑窯^{▼3}第2・3型式がほぼ相当しよう。藤澤編年では第5型式を中心とし、第6型式を含めて考えられようが、両型式は極めて少量で客体的。主体は瀬戸窯以外にある。おおむね12世紀後葉～13世紀中葉が考えられる。

中世Ⅲ期

灰釉系陶器尾張型の中に、椀ⅡB類とした瀬戸型Bが多量に流入し、続けて東濃型椀が急増するのを特色とする。Ⅲa期は灰釉系陶器尾張型が急速に消失して、瀬戸型椀Bが目立つようになり、Ⅲb期には東濃型椀Aが主体的な地位を確保する。また伊勢型鍋は大きな画期を迎えE類が多量に出土する。美濃窯Ⅲ期^{▼4}明和1号窯・大畑大洞4号窯期を中心とする。13世紀後葉～14世紀中葉が考えられる。

中世Ⅳ期

灰釉系陶器は全て東濃型椀Bに大きく変化し、伊勢型鍋に替わって羽釜型鍋・尾張型鍋^{▼5}さらに皿Ⅱ類とした新しい形態が登場する。美濃窯Ⅳ期前半の資料が主体を占め、14世紀後葉～15世紀前葉の時期を考えておきたい。

▼1 赤塚次郎他1987『土田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第2集
城ヶ谷和宏他1991『土田遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第23集

▼2 藤沢良祐1990『瀬戸地区の北部山茶椀窯』『尾呂 本文編』瀬戸市教育委員会

▼3 中野晴久1992『常滑窯』『大戸窯検討のための会津シンポジウム 東日本における古代、中世窯の諸問題』資料

▼4 田口昭二1984『美濃焼』ニューサイエンス社

▼5 鈴木正貴1994『戦国時代における尾張型煮炊具の歴史的様相』『考古学フォーラム4』

4) 出土状況

62B区 SX101 (PL-38: 389~407)

389~406は灰釉系陶器尾張型の椀で、体部に緩やかな彎曲が認められる椀 I A類と、体部が直線的で底径が比較的狭い I B類がほぼ同量認められる。387.388は皿 II A類で、388は底部に墨書が確認できる。椀392.405.406と皿387には明瞭な使用痕跡が確認できない。407は体部上位に2状の沈線が見られる壺。灰釉系陶器の形態から中世 II a期に所属するものと考えられる。

62B区 集石 (PL-39: 414~426)

417の灰釉系陶器尾張型椀 A と418の尾張型椀 Bが見られ、420のような底部が小さく大きく外傾する瀬戸型椀 A も存在する。416はの底部には墨書表記が認められる。422は皿 I Aで、突出する底部をもつ。423は灰釉系陶器羽釜で、424~426は灰釉系加工円盤 I 類。椀・皿類はすべて使用痕が明確に確認できる。中世 II a期に所属するも SX101 よりやや古い様相が認められよう。

89Fa・Eb区 SD105 (PL-41~44)

灰釉系陶器尾張型椀がごく少量が出土しているのに比べて、瀬戸型椀 A・B さらに東濃型椀の比率が目立つ。皿においても同様に II・III A類が多く、椀・皿では東濃型に墨書表記が認められる。使用痕は多くのものに確認できるが、おもに III b 期に所属する資料に未使用品が散見できる。土師器系では565は土師器系皿で、内型使用の I B. 1 類。577~583は伊勢型鍋 C~E 類。その他の灰釉系陶器は566.567及び573.574は甕、568は羽釜、569~572の鉢が見られる。576は玉縁丸瓦。Eb区では584が灰釉系陶器羽釜、585.586は甕、587は壺の口縁部。598~602は土錘で、II 3 類が目立つ。全体的に中世 II b~III b 期にかけての資料が存在するが、中心は III a 期にあることは明らかであろう。

89Fa・Eb区 SD120 (PL-45: 630~660)

630~635は灰釉系陶器椀で、635は瀬戸型椀 A である。636は口縁部が L 字状になる甕で、637は青磁椀。638・639は土師器系皿 I 類で、639は底部に糸切痕が認められる。643~660は灰釉系陶器皿 I・II 類で、643・644の底部には墨書表記が見られる。640は土錘 III A 2 類で、641・642は灰釉系加工円盤である。総じて中世 II c 期に所属する資料が多い。

(PL-46 : 661~663) 89Fa区 SK119

661~664は灰釉系陶器尾張型椀Bで、665~667は瀬戸型椀Aである。662の底部には数を表記した墨書表記I類が見られる。668は灰釉系陶器皿I A類。今回の調査では比較的瀬戸型椀の比率が高い資料群でもある。中世IIb期に所属する。

(PL-46 : 675~686) 89Eb区 SK180

675~679は灰釉系陶器東濃型椀Aで、680は瀬戸型椀B。681.682は皿III A類。683は花瓶で、口縁部が欠損する。684は口縁端部が肥厚し1条の沈線が見られる鉢。685.686は伊勢型鍋E類で、器壁が薄く、表面の胎土に雲母が多く確認できるもので、体部にはヨコハケが施される。東濃型椀Aが明らかに主体を占めるのであり、こうした在り方は中世IIIb期の良好な資料と考えられる。

(PL-48 : 742~756) 89Eb区 SX155

742~750の第II層と751~756の上層資料に分かれる。744は瀬戸型椀Aで、748は土師器系皿I B. 1類で、749は伊勢型鍋C類。750は常滑産の三筋壺。751は伊勢型鍋D類の口縁部で、754は瀬戸型椀Bである。II層の資料は中世IIc期で、上層は中世IIIa期に所属するものと考えられる。

(PL-48 : 757~760) 89Eb区 SX158

757~760は灰釉系陶器尾張型椀Bで、758は底部に墨書表記が認められる。761皿I A類。762は土師器系皿I A. 1類で底部に糸切痕が見られる。763は伊勢型鍋B類。中世IIa期に所属するものと思われる。

(PL-50 : 821~835) 91A区 SK02

821~827は灰釉系陶器尾張型椀Bで、829は瀬戸型椀A。831~833は皿II Aで、832.833には類似する墨書表記が見られる。834.835はそれぞれ伊勢型鍋C・D類。I~III層の資料が混在し、IIb期新相~最終廃棄は中世IIIa期と考えられる。

(PL-51 : 850~860) 63B区 SE01

850.851は灰釉系陶器東濃型椀Bで、853~859は東濃型皿のIIIB類。皿の多くには墨書表記が認められ、852~855は同様な表現である。860は陶丸で、胎土からも東濃産と思われる。中世IV期に所属する。

5) その他の遺物

金属製品関連資料

89Eb・Fa区において鉄滓が散見できた。検出箇所を明確に確認できた資料は9点で、その内の1点を除くと全て89Fb区と89Fa区にまとまる。さらに限定すると89Eb区ピット群A周辺部に集中する傾向が認められる。またフイゴ口片、鋳形状の破片がやはり同様な地区にまとまる。遺構に伴うものとしては89EbSX151やSX170およびSX155で確認できる。さらに注目したいのはこれらは全てピット群Aの東側に展開する土坑であり、この地点での鍛冶関係作業が推定できよう。

銭貨

全調査区にて多くの銭貨が出土している。その内の多くが宋銭である。最も古いものとしては唐銭の「開元通寶」「乾元重寶」で、新しいものとしては明銭の「永樂通寶」があげられ、銭貨で主体的なものは宋銭の「天聖元寶」や「治平元寶」「熙寧元寶」「元豊通寶」「元符通寶」等であり、11・12世紀代の渡来銭が多いようである。

これらの分布には前述したように極めて特徴的な在り方を見せており、銭貨の使用を考える上で興味深い事例と考えられる。すなわち他の多くの遺物と集落遺構が存在する89Eb・Fa区中心に分布するのに比べて、大きく異なる分布を示し63L区や63H区といった水田跡からの出土が中心であった。それは銭貨そのものが流通経済を支える手段というよりも、むしろ水田に関する特定行為（祭祀）に付属する遺物である可能性が高いものと考えられる。

瓦類

軒瓦は軒丸瓦2点が出土している。89Dc区(遺構外)から出土したものは巴文軒丸瓦(PL-58:1380)で、瓦当径10cmほどで内区には尾が長く連続する巴文が見られる。内区径6cmを測る。外区には珠文が細かく密に巡る。89Eb区のSD171からも巴文軒丸瓦(PL-44:603)が1点出土している。外縁が欠損しており瓦当径は計測できない。内区には尾が長く連続する巴文と大きく粗な珠文が巡る。外区に相当する部分には複弁蓮華文が巡る特徴的な文様構成が認められる。内区径は7cmを測る。その他ではSD120から玉縁丸瓦(567)1点が出土している。

IV 自然科学分析

1 愛知県松河戸遺跡における自然科学的検討

—とくに松河戸火山灰層と昆虫群集について—

1) 地 形

松河戸遺跡は春日井市南西部の松河戸町一帯に位置し、第四紀更新世後期の低位～最低位段丘を構成する鳥居松段丘面下の庄内川の氾濫平野内に立地している(図IV-2.3)。遺跡の標高は、現在の地表面の高さで12～15mである。

松河戸遺跡の位置する氾濫平野の生成には庄内川の河道の変遷が深く関与している。庄内川は、現在春日井市高蔵寺町から同桜佐町を抜けるあたりから流路を北東-南西方向より南北方向に変え、南進して名古屋市守山区竜泉寺丘陵直下の崖を洗いながら西流する。鳥居松段丘崖より現在の庄内川の河道に至る南北約1.5km・東西約3kmの広い氾濫平野の存在は、完新世から先史～歴史時代にかけて、庄内川の河道が南方へ移動した結果を示している。現在鳥居松段丘崖と沖積面との間の地形変換点に沿って流れる地藏川は、地質構造に支配された適従河川(subsequent stream)の性質をもった庄内川水系の旧河道である 適従河川と考えられる。

歴史時代の河道変遷の証拠を示すものとして、勝川遺跡(62F区)から、昭和の中頃まで機能していたとされる北東-南西方向に流れる地藏川の旧河道の存在が知られている。そして、この旧河道はわずかに位置を変えながらも、奈良・平安時代から弥生時代後期にまで遡りうるものであることが発掘調査の結果明らかになった(愛知県埋蔵文化財センター、1992)。また、弥生時代中期の頃の地藏川の河道はさらに北寄りに位置し、段丘崖の直下を流れていたことが1987(昭和62)年度の勝川遺跡の調査によって確認されている(愛知県埋蔵文化財センター、1992)。一方、庄内川の主谷が現在の河道付近に固定されるにしたがって、その周囲(とくに北側)に自然堤防の発達が促進された。春日井市上条町から 自然堤防下津町・松河戸町にかけ、庄内川に沿って分布する微高地(図IV-2)はこのような庄内川の自然堤防の形成期の存在を示している。自然堤防はその強弱はともかく、歴史時代の長い期間にわたって繰り返し形成され、その形成の時期は先史時代にも遡るものであろう。

2) 埋積浅谷およびその古環境について

先史時代（とくに縄文時代）には、河床面の低下や気候変化に伴い、地藏川と庄内川主谷とを結ぶ何本かの谷地形（チャンネル状構造）が発達したことが発掘調査の結果明らかになった。こうした谷地形は遺跡から発見される際には、河道内に堆積物が充填された状態で見つかる場合が多く、埋積浅谷（buried shallow valley）（井関、1982）と呼ばれる。これは後述するテフラ（松河戸火山灰層；MT）（森ほか、1990）との層位関係、および充填する堆積物の層相・花粉や珪藻・昆虫などの古生物資料により、明瞭に二時期のものに識別される（表IV-1）。その一つは下底を縄文時代中期の未分解の泥炭層に埋積される比高2 mの浅谷地形（埋積浅谷I）、もう一つは縄文時代晩期の比較的分解の進んだ植物片まじりの腐植質シルト層に埋積される比高約1.8 mの浅谷地形（埋積浅谷II）である。前者は町田62B区（図IV-4）・松河戸62A区など6カ所で、後者は松河戸89Dc区（図IV-5）より確認された。埋積浅谷Iは、最上部にMTを挟む黒泥層（腐植質シルト層）の堆積が認められることより、明らかにMT堆積以前の下刻・埋積作用によって生成された谷地形、埋積浅谷IIは浅谷がMTを包含する地層を切っていることによりMT堆積以降の谷地形であること

埋積浅谷I

がわかる。埋積浅谷Iの下底に堆積した泥炭層中には、ネクイハムシ亜科 DONACIINAE・マメゲンゴロウ属 *Agabus* sp. など湿原性～湿地性の水生昆虫と、コガネムシ科 SCARABAEIDAEやハナムグリ亜科 RUTELINAEなどの森林植生に多い食植性昆虫が多数認められた。珪藻化石では湿地ないし池沼などの水域環境に認められる珪藻化石を多産した（森、1992a）。また花粉化石ではコナラ亜属ほかの落葉性の木本花粉が多く出現した。埋積浅谷II中の堆積物からは、ゴミムシ科 HARPALIDAEや糞虫などの地表性歩行虫を多産し、それに二次林や林縁・草原的環境の樹葉を食する食葉性昆虫が随伴した。珪藻化石では、水分条件の乏しい好気的環境に出現する陸生珪藻が多数出現し、流水性の珪藻も少なからず認められた。花粉化石ではイネ科花粉に加え、温暖な環境下に生育するアカガシ亜属などもめだつた。

埋積浅谷II

埋積浅谷Iの下底付近に堆積した泥炭層の放射性炭素年代値が4000年代後半から5000年代を示し、また本層中に中部地方の山地帯と東北地方北部を中心に新潟県中部までの日本海側の低地に分布する寒冷型昆虫（野尻湖昆虫グループ、1985）であるとされるカワホネネクイハムシ *Donacia ozensis* が少なくとも4点見いだされることにより、この浅谷の生成は太田ほか（1982、1990）・愛知県埋蔵文化財センター（1991）・森（1992c）らによって指摘された気候寒冷化（縄文中期の小海退）、同じく埋積浅谷IIの生成は古川（1972）・井関（1974）・海津（1988）らによって報告されてきた水位低下期（弥生の小海退）に対応したものであると考えることができる。

そして、これらの埋積浅谷の成因は、松河戸遺跡をはじめ春日井市内の沖積地に位置する遺跡の立地や、広く完新世の古環境変遷を考えるにあたってきわめて重要な手がかりを与える。

		埋積浅谷 I	埋積浅谷 II
浅谷の深さ		約2.0~4.0m	約1.5~2.0m
MTとの関係		浅谷の中部~上部にMTが堆積	浅谷がMTを包含する地層を切る
堆積物の層相		下位：未分解の泥炭層 上位：分解した腐植質シルト層 (黒泥・MTを挟む)	腐植質シルト層
主な古生物	昆虫化石	ネクイハムシ亜科・マメゲンゴロウ属 (湿地性~湿原性昆虫)	ゴミムシ科・糞虫 (地表性歩行虫など)
	珪藻化石	湿地性~池沼性の珪藻 (海生二次化石を含む)	陸生珪藻・流水性珪藻
	花粉化石	コナラ亜属ほかの森林的要素	イネ科ほかの草原的要素 ほかにアカガシ亜属など
	その他	淡水海綿の骨針および渦鞭毛藻類のシストを多産	イネ科起源植物珪酸体多産
形成時期	埋積の時期	縄文時代中期から後期 5000±100y.B.P. 4470±130y.B.P. 5260±100y.B.P. 4640±130y.B.P.	縄文時代晩期から弥生時代前期 2380±80y.B.P. 3050±110y.B.P.
	下刻の時期	縄文時代中期	縄文時代晩期
遺跡および調査区		町田遺跡62F区、松河戸62A区 62E・63E・63L・89Dc区	松河戸遺跡89Dc区
他遺跡での検出例		朝日遺跡	伊保遺跡・朝日遺跡 阿弥陀寺遺跡

IV-1 埋積浅谷に関する対比表

3) 松河戸火山灰層について

■火山灰層の産状

火山灰層は町田遺跡1調査区、松河戸遺跡9調査区の計10調査区より発見された。その分布は確認されたものだけでも、少なくとも東西約1.5km、南北約300mにわたり、遺跡の基盤層を構成する砂礫層が低くなり浅谷状の地形（埋積浅谷I）を形成している部分を中心に、その上位に堆積した泥炭層に挟まれて、レンズ状に堆積していることが確認された。以下に、主な調査区における火山灰層の産状について述べる。

町田遺跡62B区では、二層の未分解の泥炭層（泥炭I・泥炭II）、その上位に分解の進んだ二層の黒色泥炭層（黒バンドI・黒バンドII）が堆積しており、黒バンドII最上部およびその上限より1～1.3cm下位の層準から火山灰層が検出された（図IV-4.6）。火山灰層の上部には、縄文時代晩期の条痕文系の土器片を含む地層、古墳および奈良～平安時代の遺物包含層などがのっている。火山灰層の分布高度は標高9.50～9.80mで、やや赤味を帯びた淡灰褐色の細粒ガラス質火山灰からなる。層厚は3～15mm（平均4mm）、泥炭層（黒バンドII）最上部にレンズ状ないし塊状に堆積していて、層厚は所によって変化する。

松河戸遺跡62A区では、最下位に緑灰色シルト層および暗灰色シルト質粘土層、その上位に黒色泥炭層の堆積が見られ、この泥炭層（黒バンドII）の上部から火山灰層が検出された（図IV-6）。泥炭層の上位にはラミナの発達した泥炭質粘土層、その上に水田耕作土がのっていて、水田耕作土の最下部から15世紀の遺物が出土した。火山灰層は細～中粒・淡赤褐色ガラス質で、層厚2～21mm（平均3～5mm）、ところによって塊状ないしはブロック状を呈し、断続的ではあるが調査区東半部を中心に広範囲に分布する。ここでの火山灰層の分布高度は標高10.40～10.50mである。

松河戸遺跡62E区では、最下位の砂礫層より上位に縄文時代中・後期の土器片を挟在する未分解の厚い泥炭層の堆積が見られる。その上に暗褐色および灰褐色の粘土層の互層があり、さらに上位に黒灰色泥炭層が堆積している。黒灰色泥炭層（黒バンドII）の上限より1～2cm下位の層準に、淡赤燈色ないし桃白色の細粒ガラス質火山灰層が検出された（図IV-6 PL.86）。火山灰層の分布高度は標高10.40～10.45m、最大層厚は22mm、平均の厚さは3～4mmで、層状に点在するのが観察される。火山灰層の検出地点は浅谷状に掘りこまれた部分にあたり、これより東方では高度を上げ、標高約12mの微高地を形成する。この微高地上から縄文時代中期の集石遺構が検出され、その付近より縄文時代中期（一部、前期および後期を含む）の多数の石器およびフレイク・チップ等が出土した。

■火山灰層の鉱物学的性質および年代

火山灰の岩石記載的性質の検討にあたっては、吉川 (1976) の火山灰試料の処理・記載の方法に従い実施した。採取した試料は水洗・篩別し乾燥させたのち、プロモホルム (比重2.5~2.6) にて重液分離した。この処理後の細~極細粒砂 (1/4 mm~1/16mm) の粒度について、鉱物組成、重鉱物組成、火山ガラスの色・形状・屈折率、斜方輝石の屈折率や各種鉱物の特徴などを検討した。なお、松河戸火山灰 (松河戸遺跡62A区) の偏光顕微鏡および走査型電子顕微鏡下における火山ガラスの形状写真を写真PL-89に示した。

鉱物組成および重鉱物組成については、偏光顕微鏡下でそれぞれ総計200粒以上同定して各粒数の百分率を求めた。火山ガラスの色は実体顕微鏡下で観察し、形状については、吉川 (1976) にもとづいて扁平型 (Ha型+Hb型)、中間型 (Ca型+Cb型)、多孔質型 (Ta型+Tb型)、その他の型に分類し、200個以上同定して鉱物組成同様各粒数の百分率を求めた。火山ガラスの屈折率 (n) および斜方輝石の屈折率 (γ) の測定方法は、Yoshikawa (1984) によった。この方法による測定誤差は $\pm 0.001\sim 0.002$ 以下と見積られる。以下に、松河戸62A区より産した火山灰試料の分析結果について記す (表IV-7)。

鉱物組成は、火山ガラス90%、長石類4%、石英2%、重鉱物4%からなり、細~中粒ガラス質火山灰である。火山ガラスは白色~無色透明であり、その形状は中間型56% (Ca: 50%、Cb: 6%)、多孔質型33% (Ta: 9%、Tb: 24%)、扁平型11% (Ha: 3%、Hb: 8%) で、屈折率 (n) は中間型および扁平型火山ガラスを用いて測定した結果、1.499~1.504 (モード値: 1.501~1.502) という値が得られた。なお、多孔質型の火山ガラスの屈折率は、モード値がいくぶん高くなる傾向が認められるものの、屈折率の幅は1.499~1.504の範囲内であった。

重鉱物組成は、角閃石38%、斜方輝石26%、単斜輝石9%、黒雲母10%、燐灰石1%、不透明鉱物16%であった。角閃石は細~中粒で緑色ないし緑褐色、長柱状である。斜方輝石は細粒、淡緑色ないし淡褐色、長柱状で針状に近いものも含まれる。屈折率 (γ) は、1.703~1.705である。単斜輝石は破片状である。不透明鉱物には自形を示すものはほとんど含まれない。また、重鉱物には火山ガラスの付着したものが多くみられ、とくに斜方輝石にその傾向が顕著であった。

松河戸62A区以外の3調査区 (松河戸62E区、同63H区、町田62B区) より産した火山灰試料についても、同様の分析を実施した (表IV-7)。鉱物組成では、松河戸62H区・町田62B区で、火山ガラスが85%および82%とやや低率で、長石類が12%および82%とやや多かったほかは、他の鉱物の粒数百分率には3調査区ともほとんど差異はみられなかった。火山ガラスは3調査区とも白色~無色透明で、その形状は松河戸62A区にくらべて中間型がやや多く、多孔質型は少なかった。火山ガラスの屈折率は、松河戸62E区で1.497~1.505 (モード値: 1.501~1.503)、松河戸62H区で1.499~1.504 (モード値: 1.502)、町田62B区で

1.498~1.504 (モード値: 1.501~1.502) であった。重鉱物組成では、3調査区とも松河戸62A区にくらべて黒雲母の粒数百分率がやや低率だったほかは、角閃石、斜方輝石、単斜輝石等には、粒数百分率および顕微鏡下における形状にほとんど差異は認められなかった。

放射性炭素
年代

松河戸火山灰層の放射性炭素年代は、町田・松河戸両遺跡よりそれぞれ火山灰層を挟む泥炭層(黒バンドII)の年代測定値が得られた。その値は、町田遺跡では火山灰層直下で 3120 ± 120 y.B.P. (GaK-13810)、火山灰層下位の泥炭層中の木片では 3770 ± 120 y.B.P. (GaK-13811)、松河戸遺跡では同じく火山灰層直下で 3120 ± 120 y.B.P. (GaK-13521)、火山灰層下位の泥炭層中の木片では 2870 ± 110 y.B.P. (GaK-13525)と求められた。遺物では、町田遺跡で火山灰層下位の砂礫層上面より縄文時代中期末の土器片、火山灰層上位のシルト層より縄文時代晩期の土器片が検出された。また、松河戸遺跡では、火山灰層の下位より縄文時代中・後期の土器片が多数発見され、火山灰層の上位の地層からは弥生時代中期~古墳時代にかけての土器片が検出されている。以上の事実から、松河戸火山灰層の降灰年代は3120年前か、それよりいくぶん新しいものと推定され、これは縄文時代後期と晩期の境界付近にあたる。

■火山灰層の対比

松河戸火山灰層は、濃尾平野北西部の愛知県一宮市尾張病院・山中遺跡(森、1992; 服部、1993a)の深掘りトレンチ内の標高+1.0mの泥炭層中から、および濃尾平野西部にあたる岐阜県大垣市荒川遺跡の標高+2.5mの腐植質シルト層中からも見いだされている(未公表; 大垣市教育委員会の好意による)。三河部においては豊田市三本松遺跡(服部、1993b)の標高214mの黒色砂質シルト層中、また、名古屋大学地理学教室の愛宕氏によって安城市柿崎町で実施されたボーリング試料中の深度約4.12m(標高約21m)の腐植質シルト層中より発見された(未公表)。そのほかに松河戸火山灰と考えられる火山灰層の確認地点として、北設楽郡稲武町中村遺跡(標高543m、層厚約20mm)があげられる。ここでは縄文時代後・晩期頃とされる宮滝式土器を含むドングリピットに火山灰層を挟む地層が切られていることが確認された(未公表; 稲武町教育委員会の好意による)。これらは、いずれも層厚2~15mmのほぼ純層と呼んでよい状態の火山灰層が発見された地点である。

一方、西尾市岡島遺跡(森ほか、1993)の標高+1.0mの腐植質シルト層中には分散した状態の火山ガラス片の多産層準が、また一宮市西上免遺跡の腐植質シルト層(自然堆積層)、一宮市馬見塚遺跡の縄文時代晩期の遺物包含層中からは松河戸火山灰と考えられるガラス片が少量ずつ検出された。そのほかに岐阜県揖斐郡谷汲村の深坂泥炭層中のボーリング試料(松田、1993)、および南設楽郡作手村大野原湿原の泥炭層(沢井ほか、1993)からも松河戸火山灰層が発見されている。なお、後者の火山灰層は、カワゴ平パミスと同定さ

れている。

次に松河戸火山灰層に対比可能な火山灰層として、放射性炭素年代、火山ガラスの性質 (無色透明～白色・中間型～多孔質型・ $n=1.499\sim 1.504$ ；モード値： $1.501\sim 1.502$)、重
火山灰の
対比
 鉍物組成 (角閃石や斜方輝石の出現率が高いという特徴) などより、筆者 (森) は大阪市
 港区天保山のボーリング試料中より発見された難波累層最上部火山灰層 (吉川ほか、
 1986)、および滋賀県琵琶湖底200mボーリング試料中のBB7火山灰層 (Yoshikawa、1982)
 をあげた (森ほか、1990)。また竹村ほか (1988) は、琵琶湖底のBB7火山灰層と福井県
 鳥浜におけるボーリング試料中のNo. 6火山灰層とが火山ガラスの色と形および屈折率か
 ら、対比が可能であると述べている。よって、松河戸火山灰層は大阪平野・琵琶湖底、そ
 れに福井県の鳥浜にも降灰している可能性が考えられる。

その後吉川ほか (1991・1993) は、松河戸火山灰層がBB7火山灰層および難波累層最上
 部火山灰層と対比可能であることを確認するとともに、松河戸火山灰層と対比できる火山
 灰層として、同じく琵琶湖高島沖ボーリング試料中のBT1火山灰層 (吉川、1991) を追加
 し報告している。これ以外に西田ほか (1993) は、本層準付近に位置する火山灰層として、
 京都市深泥ヶ池 (那須、1981)、彦根市曾根沼 (西田ほか、1993)、大津市小女郎ヶ池 (西
 田ほか、1993)などをあげている。図IV-8にこれまでに各地より報告されている松河戸火
 山灰相当層の確認地点を示した。

なお、縄文時代後・晩期の頃の層準に位置する広域ないしは準広域的な分布を持つ火山
広域テフラ
 灰層については、新井ほか (1980) および町田ほか (1984)、町田ほか (1992) のカタログ
 中に、池田湖 (約4000年前)、三瓶・太平山火山灰層 ($<3680\pm 90y.B.P.$)、霧島御池 (約
 3000年前)、カワゴ平パミス (約3000年前) が記載されているが、いずれも対比可能な鉍物
 および火山ガラスの諸性質などの詳細については記されていない。

■火山灰層の給源

松河戸火山灰層の給源については、本火山灰層の重鉍物組成が、三瓶・太平山降下火山
 灰層の中海・宍道湖湖底下における重鉍物分析結果 (正岡、1972)、三瓶火山室ノ内カルテ
 ラから得られた同火山灰層の鉍物組成の分析結果 (三浦ほか、1987) とよく調和しており、
 ^{14}C 年代値 (松井ほか、1970) においても矛盾しないことより、本火山灰層は三瓶・太平山
 火山灰層 ($<3680\pm 90y.B.P.$) を含め、山陰に起源を持つ火山灰層に対比される可能性に
 ついて指摘した (森ほか、1990)。しかし、その後中国地方から近畿地方にかけて、本火山
 灰の確認地点の情報は得られていない。

一方、本層の給源について、ガラスの屈折率やその化学組成の類似性などをもとに、ほ
カワゴ平
パミス
 ぼ同じような時期 (約3000年前頃) に東方から西方に降灰したとされる伊豆半島起源のカ
 ワゴ平パミス (葉室、1978；町田ほか、1984) の可能性を指摘する考えがある (西田ほか、

1993)。カワゴ平パミスは、四季を通じて日本上空を吹いている偏西風の風系とは逆向きに吹送された火山灰層として知られ(町田ほか、1984；加藤、1985)、静清平野の遺跡基盤層中には普遍的に挟在し(加藤、1987)、現在確認されている西方への最遠地は浜松市伊場遺跡(加藤、1989)および静岡県浜名湖(池谷ほか、1985・1987)周辺であるとされる。なお、西田ほか(1993)に従えば、カワゴ平パミスは滋賀県彦根市・福井県鳥浜のみならず、大阪平野にまで吹送されたという。PL-89に、静岡県長崎遺跡から産したカワゴ平パミスの偏光顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真を掲げた。カワゴ平パミスは、静岡県内ではその直上に大沢スコリア(町田、1964)と呼ばれる火山性の碎屑物を伴うことを特徴としている(加藤、1987)。

松河戸火山灰の給源は、これまでの火山灰層確認地点の分布からすると東方から飛来したことを推定させるが、今後さらに詳細な層位学的調査を実施し、火山ガラスの形状や屈折率、含有される鉱物の組成ばかりでなく、松河戸火山灰相当層の各発見地における層厚や火山ガラス片の粒径分布にも注目して検討を重ねていかなければならない。

■火山灰層降灰と水質変化

珪藻は水域の物理化学的性質(水深・水温・流速・pHなど)によって、棲息する種を異にする。火山灰の降灰によって、縄文時代後・晩期の頃、庄内川の氾濫平野(湿地帯)の水質がどのように変化したのか、環境に与える火山灰の影響はどのようなものであったのか、珪藻分析の手法を用いて追究した。ここでは松河戸火山灰層(調査地点では層厚2～7mm、平均4mm)を境に、上下に堆積した泥炭層を3mm間隔で6cmにわたり計20サンプル採取し、その間の珪藻分析を実施した。

試料の分析方法および使用した文献などは、森ほか(1993)によった。発見された主な珪藻化石についてはPL-87.88に示した。

分析結果の概要は図IV-9に掲げたとおりである。火山灰層の下位では付着生種(平均33.7%)にくらべ底生種(同47.2%)の出現率が高い。一方、火山灰層の上位の層準では底生種(33.7%)にかわって付着生の種群(平均55.7%)の出現率が増加する傾向が認められた。種組成でみると、火山灰層の下位では比較的浅い水域を好む底生種の *Navicula* 属や *Pinnularia* 属が多く認められたのに対して、火山灰層の降灰を境にこれらの種群の出現率が低下し、挺水植物や抽水植物の茎等に付着して生活する *Eunotia pectinalis* および *E. pectinalis* var. *undulata*、*Tabellaria fenestlata*、*T. flocculosa*、*Synedra ulna*などの付着生種が多数認められるようになる。これらの結果を総合すると、珪藻の群集組成がわずか4mm(平均)にも満たない火山灰層の降灰に鋭敏に反応し、その結果水域の環境にかなりの変化があったことが確認された。

4) 松河戸遺跡群から得られた昆虫化石群集

松河戸遺跡群（勝川遺跡および町田遺跡を含む）より産した昆虫化石は計5239点、うち種レベルまで同定できた昆虫は86種1176点（22.5%）であった。そのうち目および科・属レベルまで同定できた昆虫は、1目2点・16科851点・6亜科671点・12属425点（族および亜属を含む）の計1949点（37.2%）であった（森、1992b；結果の詳細は略）。

これらの主な出現種について、時代ごとの出現率を求めた（図IV-10）。この結果をみると、縄文時代（中期および晩期）の頃に、コガネムシ科 SCARABAEIDAE、ハナムグリ亜科 CETONIINAE、ハムシ科 CHRYSOMELIDAE などの出現率が高く、その傾向は平安時代頃までつづき、鎌倉時代以降ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* やスジコガネ亜科 RUTELINAE が著しく増加していることがわかる。地表性歩行虫で雑食性のゴミムシ科 HRPALIDAE は全時代を通じて普遍的に認められるが、とりわけ縄文時代晩期から弥生時代後期の頃に出現率が高い。また、湿地性の食植性昆虫でイネを加害することで知られるイネネクイハムシ *Donacia provosti* は弥生時代後期の頃に突然認められるようになり、

平安時代の頃に出現率がきわめて高くなる傾向（このことは静岡県池ヶ谷遺跡でも同様であった；森ほか、1993）が認められた。

こうした昆虫相の変化は、おそらく人間の居住域を取り囲む景観や植生の変化に密接に関係しており、縄文時代の頃には森林植生が、弥生時代以降平安時代頃には低湿地帯に展開された水稲耕作が、また鎌倉時代以降では二次林の増加や人間によって植栽された果樹等の存在が大きく影響を与えているものと考えられる。

イネネクイ
ハムシ

5) まとめ

- 1... 松河戸遺跡は庄内川の河道変遷により生成された氾濫平野に位置している。
- 2... 松河戸遺跡一帯には縄文時代中～後期、および縄文時代晩期～弥生時代前期の頃に形成された2時期の浅谷地形（埋積浅谷）が認められた。
- 3... 松河戸遺跡からは縄文時代後・晩期の境界付近に位置する淡褐色～桃白色のガラス質火山灰層（松河戸火山灰層；MT）が検出された。MTは層厚2～21mm（平均4mm）、中間型ガラスを主体に多孔質ガラスを伴う細粒火山灰層である。
- 4... MTは一宮市山中遺跡をはじめ、現時点で愛知・岐阜両県下の10遺跡（遺跡以外も含む）より確認されている。
- 5... MTと対比可能な火山灰層には、滋賀県琵琶湖底ボーリング中のBB7、BT1および大阪平野下の難波累層最上部火山灰層などがあげられる。MTの給源は山陰の三瓶太平山のほかに、伊豆カワゴ平が有力であるが現時点では特定するに至っていない。

- 6 詳細な珪藻分析の結果、MTの降灰によって庄内川水系の湿地帯の水域環境が大きく変化したことがわかった。
- 7 松河戸遺跡群より計5239点の昆虫化石が発見された。出現種の時代ごとの変遷をみると、縄文時代の頃には森林ないし草原植生に依存する昆虫が、弥生時代以降平安時代の頃は水稻を加害する稲作害虫が、鎌倉時代～江戸時代では果樹などを食害する食葉性昆虫が多く出現していることが明らかになった。

謝 辞

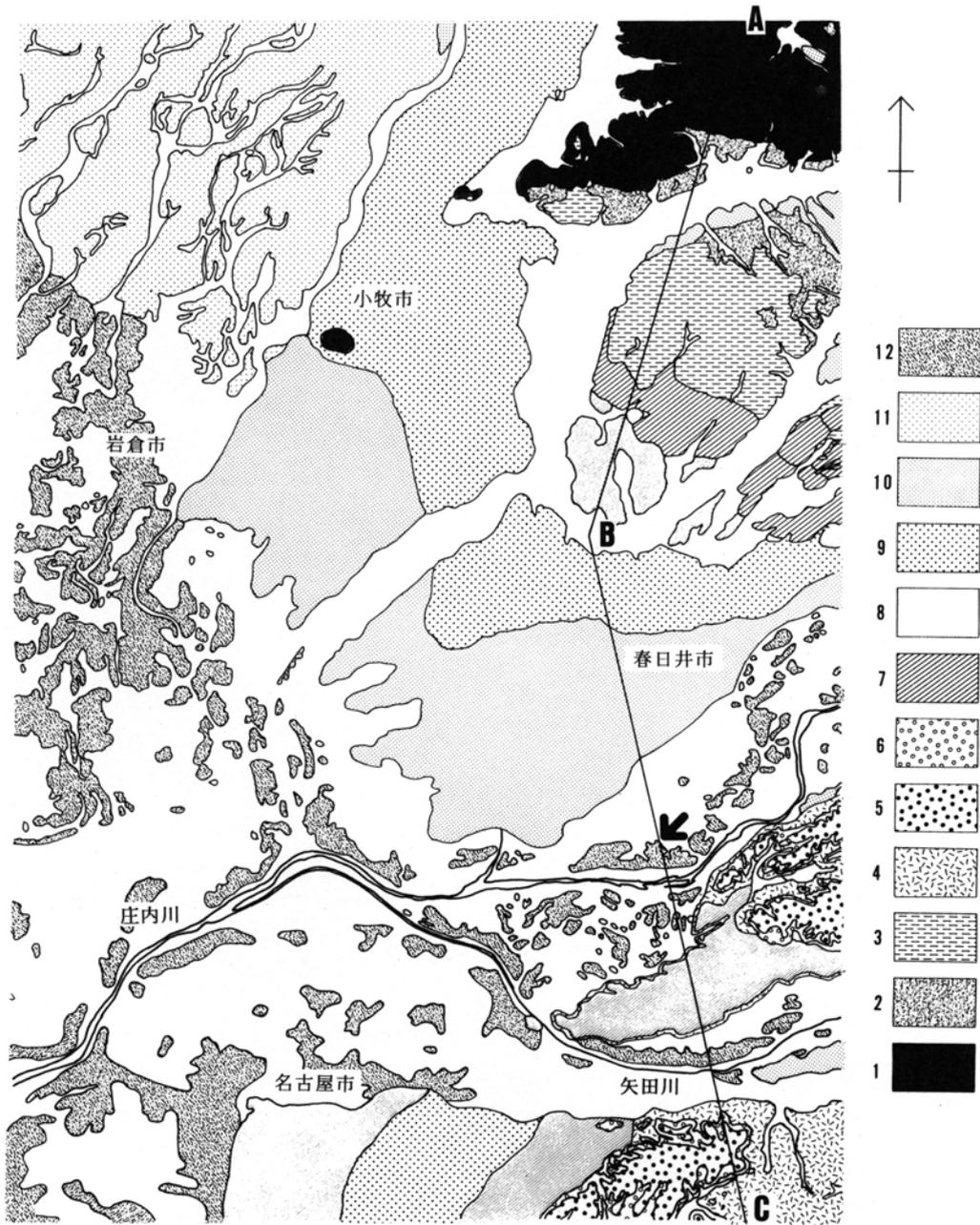
松河戸火山灰の分析・地形調査にあたっては、以下の方々にお世話になった。記して謝意をあらわす。

井関弘太郎 (中部大学)・海津正倫 (名古屋大学)・森 忍 (同)・愛宕誠治 (同)・吉川周作 (大阪市立大学)・檀原 徹 (京都フィッショントラック)・中井正幸 (大垣市教育委員会)・中山勝博 (島根大学)・藤根 久 (パレオ・ラボ)・矢田 豪 (静岡県埋蔵文化財調査研究所)・大垣市教育委員会・稲武町教育委員会

文 献

- 愛知県埋蔵文化財センター (1991) 朝日遺跡 I 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集, 第2章-遺跡の概観 (1.地理学および地質学的接近), 10-11.
- 愛知県埋蔵文化財センター (1992) 愛知県勝川遺跡の地層および層序. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第29集, 勝川遺跡IV, 53-59.
- 新井房夫・町田 洋 (1980) 日本のテフラ・カタログ I - 西日本～東北地方の第四紀後期示標テフラの岩石記載的性質-. 軽石学雑誌, 6, 65-76.
- 葉室和親 (1978) 大室山火山群の地質. 地質学雑誌, 84, 433-444.
- 服部俊之 (1993) 三本松遺跡より発見された縄文時代後・晩期の火山灰層について. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第47集, 三斗目・三本松遺跡, 42-44.
- 池谷仙之・大浦 毅・阿久津 浩・和田秀樹 (1985) 浜名湖東岸完新統の層序・層相とその年代. 静岡大学地球科学研究報告, 11, 171-179.
- 池谷仙之・和田秀樹・大森真央 (1987) 浜名湖のボーリング柱状試料について. 静岡大学地球科学研究報告, 13, 67-111.
- 井関弘太郎 (1974) 日本における2000年B.P.ころの海水準. 名古屋大学文学部研究論集, LXII, 155-176.
- 神谷友和・後藤浩一・森 勇一・山仲廣司・伊藤隆彦 (1989) 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第9集, 町田遺跡 財団法人愛知県埋蔵文化財センター, 119p.
- 加藤芳朗 (1985) 静清平野下の火山灰-偏東風に乗って富士, 天城から飛来-. 静岡地学, 52, 1-3.
- 加藤芳朗 (1987) 清水市長崎新田遺跡の土層中の火山灰の地質学的検討 (続). 清水市教育委員会編「静清水バイパス (長崎地区) 埋蔵文化財発掘調査 I 報 (昭和62年度)」, 13-16.
- 町田 洋 (1964) Tephrochronologyによる富士火山とその周辺地域の発達史. 地質学雑誌, 73, 293-308, 337-350.
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 (1984) テフラと日本考古学-考古学研究と関係するテフラのカタログ. 古文化財の自然科学的研究, 同朋舎, 865-928.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス-日本列島とその周辺. 東京大学出版会, 276p.
- 松田順一郎 (1993) 谷汲村深坂泥炭層の分析. 揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い, 第11回揖斐谷ミニ学会講演要旨集.

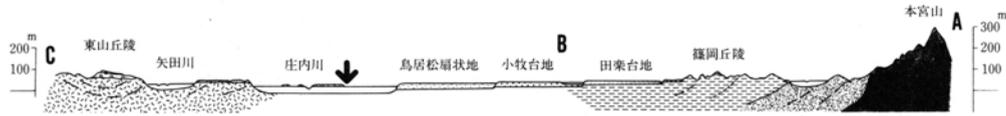
- 正岡栄治 (1972) 重鉱物組成からみた中海・宍道湖湖底下の第四紀火山灰. 第四紀研究, 11, 61-69.
- 松井整司・井上多津男 (1970) 三瓶火山噴出物の¹⁴C年代. -日本の第四紀層の¹⁴C年代 (56). 地球科学, 24, 112-114.
- 三浦 清・林 正久 (1987) 火山活動史からみた三瓶火山の鉱物特性. 山陰地域研究 (自然環境), 3, 67-94.
- 森 勇一・伊藤隆彦・宮田英嗣 (1990) 愛知県町田・松河戸遺跡から発見された縄文時代後・晩期の境界付近に位置する火山灰層について. 第四紀研究, 29, 17-23.
- 森 勇一 (1992a) 愛知県勝川遺跡の地層および層序. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第29集, 勝川遺跡IV, 53-59.
- 森 勇一 (1992b) 勝川遺跡群より産した昆虫化石と古環境. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第29集, 勝川遺跡IV, 77-92.
- 森 勇一 (1992c) 朝日遺跡およびその周辺地域の地質と古環境. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集, 朝日遺跡II, 9-40.
- 森 勇一・前田弘子 (1993) 珪藻および昆虫化石群集から得られた岡島遺跡の古環境変遷. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第43集, 岡島遺跡II, 87-132.
- 森 勇一・木下智章・前田弘子・楯真美子・山田由美子 (1993), 珪藻および昆虫化石群集から得られた静岡岡島・池ヶ谷遺跡の古環境変遷. 池ヶ谷遺跡報告書, 静岡県埋蔵文化財調査研究所, 121-183.
- 那須孝悌 (1981) 深泥ヶ池の地史・深泥ヶ池の自然と人. 深泥ヶ池学術調査報告書, 11-34.
- 西田史朗・高橋 豊・竹村恵二・石田志朗・前田保夫 (1993) 近畿地方へ東から飛んできた縄文時代後・晩期火山灰層の発見. 第四紀研究, 32, 129-138.
- 野尻湖昆虫グループ (1985) アトラス日本のネクイハムシ. 182p.
- 太田陽子・松島義章・森脇 広 (1982) 日本における完新世海面変化に関する研究の現状と問題. -Atlas of Holocene Sea-level Records in Japan-を資料として. 第四紀研究, 21, 133-143.
- 太田陽子・海津正倫・松島義章 (1990) 日本における完新世相対的海面変化とそれに関する問題. 第四紀研究, 29, 31-48.
- 沢井 誠・古澤 明 (1993) 古大野原湿原堆積物中の天城-カワゴ平火山灰 (Kg) の屈折率. 大野原湿原研究会報告集III, 作手村教育委員会, 30-32.
- 竹村恵二・檀原 徹 (1988) 土壌中火山ガラス抽出分析による遺跡の地層対比および編年-温度変化型屈折率測定装置を使用して-. 考古学と自然科学, 20, 35-49.
- 海津正倫 (1988) 濃尾平野における縄文海進以降の海水準変動と地形変化. 名大文学部研究論集, CI, 285-303.
- 吉川周作 (1976) 大阪層群の火山灰層について. 地質学雑誌, 82, 497-515.
- Yoshikawa, S. (1982) Volcanic Glass in the 200 m Core Sample from Lake Biwa. *Paleolim. Lake Biwa Japan. Pleist.*, 9, 35-49.
- Yoshikawa, S. (1984) Volcanic Ash Layers in the Osaka and Kobiwako Groups, Kinki District, Japan. *Jour. Geosci., Osaka City Univ.*, 27, 1-40.
- 吉川周作・那須孝悌・樽野博幸・古谷正和 (1986) 近畿地方中部に分布する後期更新世の火山灰層について. 地球科学, 40, 18-38.
- 吉川周作・井内美郎 (1991) 琵琶湖高島沖ボーリングコアの火山灰層序. 地球科学, 45, 81-100.
- 吉川周作・井内美郎 (1993) 琵琶湖高島沖火山灰から見た中期更新世~完新世の噴火活動史. 地球科学, 47-2, 1-13.
- 吉川周作・小倉博之・福西佐代 (1993) 大阪平野地下の中・上部更新統火山灰層序. 地質学雑誌, 6, 467-478.



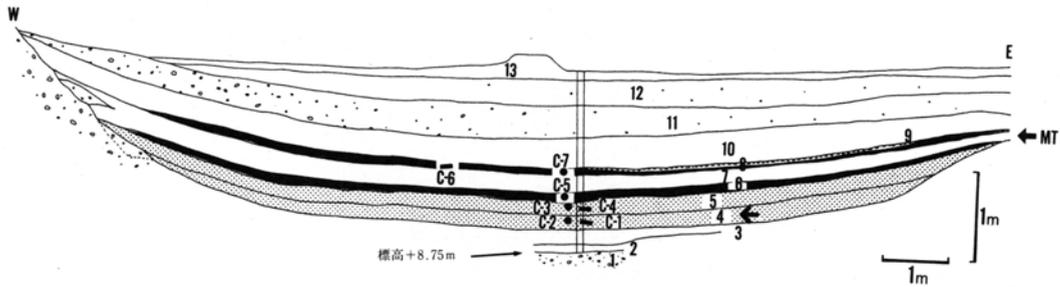
凡例

- | | |
|-----------------------|------------------------|
| 1. 中・古生層 | 7. 高位段丘礫層 (桃山面相当層) |
| 2. 第三系矢田川累層 (シルト層) | 8. 中位段丘礫層 I (熱田面相当層) |
| 3. 第三系矢田川累層 (砂礫層) | 9. 中位段丘礫層 II (大曾根面相当層) |
| 4. 第三系矢田川累層 (シルト・砂礫層) | 10. 低位段丘礫層 (鳥居松面相当層) |
| 5. 更新世八事層 | 11. 完新世扇状地堆積物 |
| 6. 更新世上末層 | 12. 完新世自然堤防堆積物 |

IV-2 松河戸遺跡周辺地域の地質図
(矢印地点は松河戸遺跡の位置)



IV-3 松河戸遺跡を含む地質断面図
(矢印地点は松河戸遺跡、A-B-CはIV-2中の南北断面)



IV-4 町田遺跡62B区における浅谷地形 (埋積浅谷 I) の断面図

<断面図凡例>

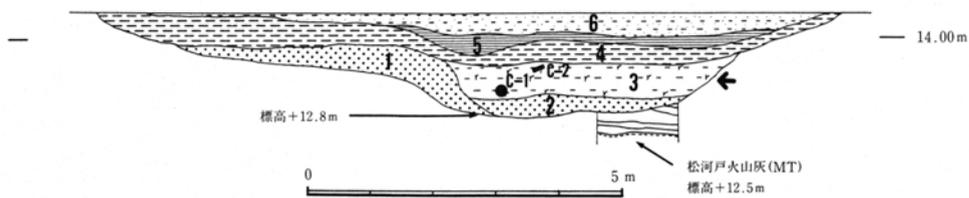
1. 暗灰色砂礫層
2. 暗緑灰色砂質シルト層
3. 植物片まじり暗灰色シルト層
4. 暗灰色泥炭質シルト層 (泥炭 I)
5. 暗灰色泥炭質シルト層 (泥炭 II)
6. 暗灰色腐植質シルト層 (黒バンド I)
7. 暗灰色シルト質粘土層
8. 黒灰色腐植質シルト層 (黒バンド II)
9. 橙色を帯びた淡灰色砂質火山灰層
10. 暗灰色シルト層
11. 礫まじり暗灰色砂質シルト層
12. 鉄斑まじり暗灰色砂質シルト層
13. 細礫・砂まじり淡褐色シルト層

<放射性炭素年代測定値>

C-1. 5260 ± 100 y. B.P. (GaK-13806) C-2. 5000 ± 100 y. B.P. (GaK-13805) C-3. 4640 ± 130 y. B.P. (GaK-13807)
 C-4. 4470 ± 130 y. B.P. (GaK-13808) C-5. 4400 ± 100 y. B.P. (GaK-13809) C-6. 3770 ± 120 y. B.P. (GaK-13811)
 C-7. 3120 ± 120 y. B.P. (GaK-13810)

C-2, 4, 6 : 木片 C-1, 3, 5, 7 : 泥炭 MT : 松河戸火山灰層

矢印は昆虫試料 (縄文時代中期) 採取層準

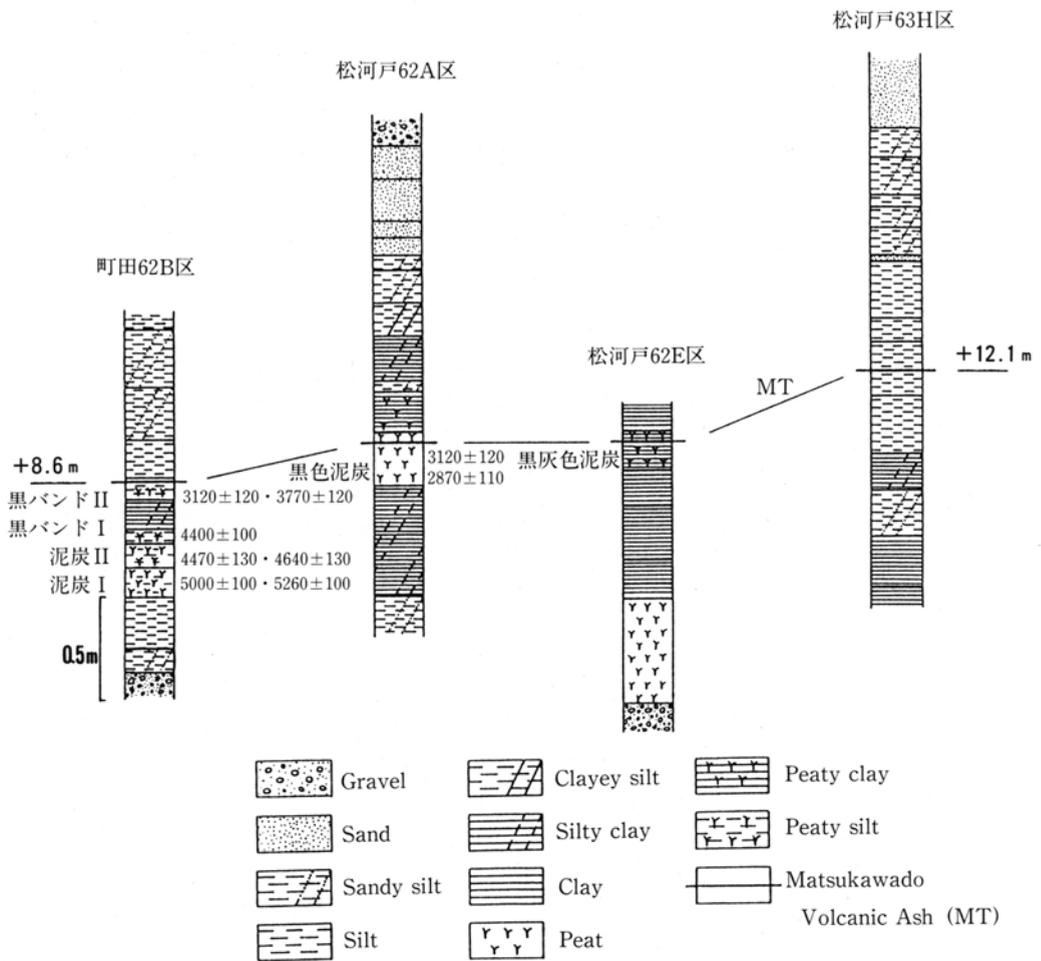


IV-5 松河戸遺跡89Dc区における浅谷地形 (埋積浅谷 II) の断面図

1. 青灰色砂層
2. 青灰色粗粒砂層
3. 暗灰色腐植質シルト層
4. 青灰色シルト層
5. 黒褐色粘土層
6. 暗灰色砂質シルト層

C-2 2380 ± 80 y. B.P. (GaK-15437) C-1 3050 ± 110 y. B.P. (GaK-15436)

矢印は昆虫試料 (縄文時代晩期) 採取層準



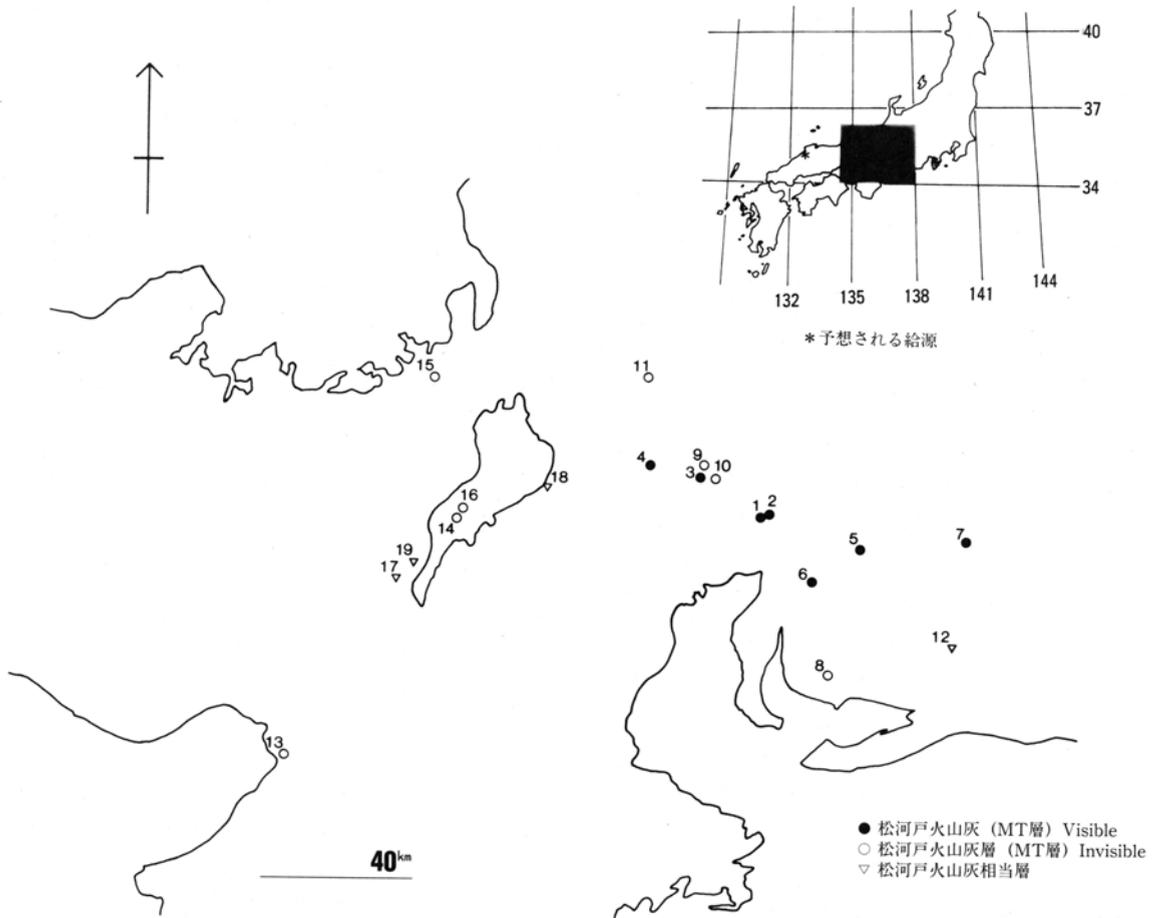
IV-6 松河戸火山灰層を含む主な調査区における地質柱状図

IV-7 松河戸火山灰層の岩石記載的性質

Volcanic ash	Mineral Composition				Glass				Heavy mineral composition						
	Gl.	Fl.	Qz.	Hm.	Shape (%)			Refractive Index (made)	Bi.	Am.	Op.	Cp.	Zr.	Ap.	Oq.
					H.	C.	T.	O.							
Matsukawado62A	90	4	2	4	11	56	33	0	1.499-1.504 (1.501-1.502)	10	38	26	9	1	16
Matsukawado62E	89	7	2	2	13	64	23	0	1.497-1.505 (1.501-1.503)	3	45	33	9	1	9
Matsukawado63H	85	12	1	2	5	74	21	0	1.499-1.504 (1.502)	6	39	35	10	1	9
Chouda62B	82	13	1	4	16	71	13	0	1.498-1.504 (1.501-1.502)	4	39	39	8		10
Sanbonmatsu	85	10	3	5	16	71	12	1	1.500-1.502 (1.500)	8	36	31	6	2	17
Yamanaka	85	7	3	5	4	67	27	2	1.500-1.502 (1.501)	9	38	27	10		16
BT 1	93	5	1	1	2	39	50	9	1.497-1.503 (1.499-1.502)	8	29	22	4	2	24

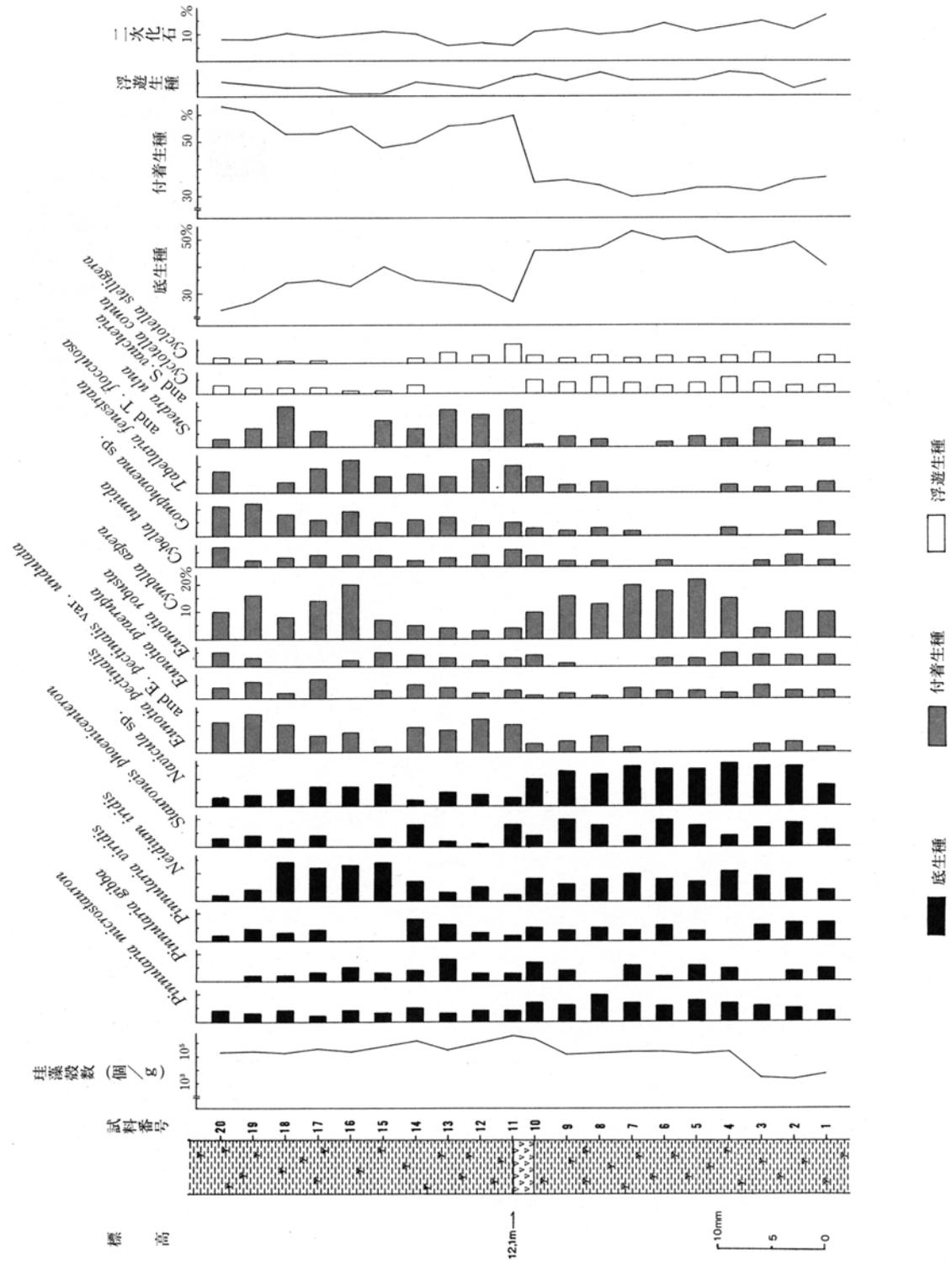
Mineral composition Gl: Glass Fl: Feldspar Qz: Quartz Hm: Heavy minerals
 Shape of glass H: H-type shards C: C-type shards T: T-type shards
 Heavy mineral composition Bi: Biotite Am: Amphibole Op: Orthopyroxene Cp: Clinopyroxene Zr: Zircon
 Ap: Apatite Oq: Opaque minerals

*分析値は松河戸・町田については森ほか (1990)、BT 1については吉川ほか (1991)・服部 (1993) による。

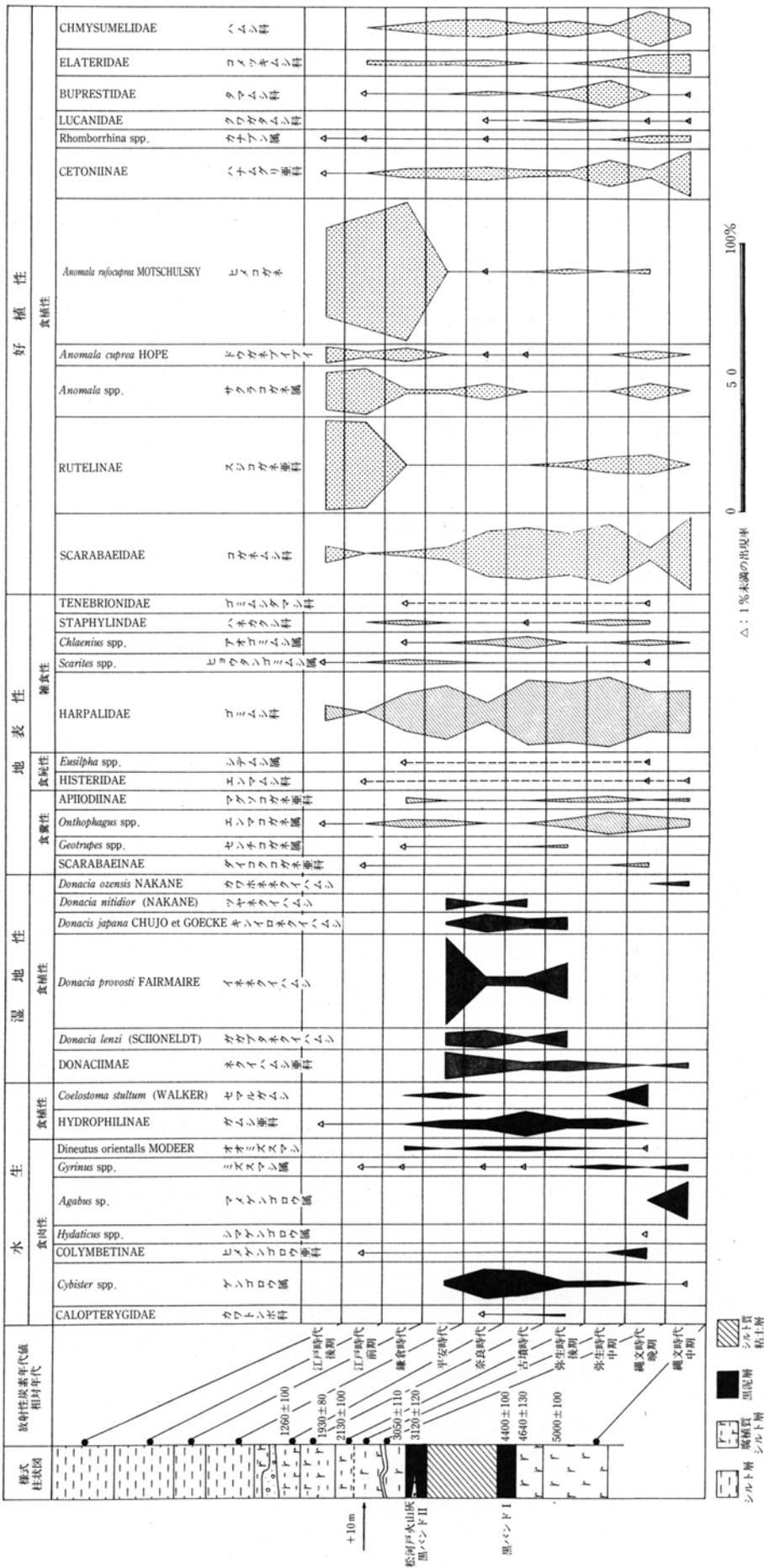


- | | |
|--------------------|------------------------|
| 1. 町田遺跡 (愛知県春日井市) | 11. 深坂泥炭 (岐阜県谷汲村) |
| 2. 松河戸遺跡 (愛知県春日井市) | 12. 大野原湿原 (愛知県作手村) |
| 3. 山中遺跡 (愛知県一宮市) | 13. 天保山ボーリング (大阪市港区) |
| 4. 荒川遺跡 (岐阜県大垣市) | 14. BB7 ボーリング (滋賀県琵琶湖) |
| 5. 三本松遺跡 (愛知県豊田市) | 15. 鳥浜遺跡 (福井県鳥浜) |
| 6. 柿崎 (愛知県安城市) | 16. 高島沖ボーリング (滋賀県琵琶湖) |
| 7. 中村遺跡 (愛知県稲武町) | 17. 深泥ヶ池 (京都市) |
| 8. 岡島遺跡 (愛知県西尾市) | 18. 曾根沼 (滋賀県彦根市) |
| 9. 西上免遺跡 (愛知県一宮市) | 19. 小女郎ヶ池 (滋賀県大津市) |
| 10. 馬見塚遺跡 (愛知県一宮市) | |

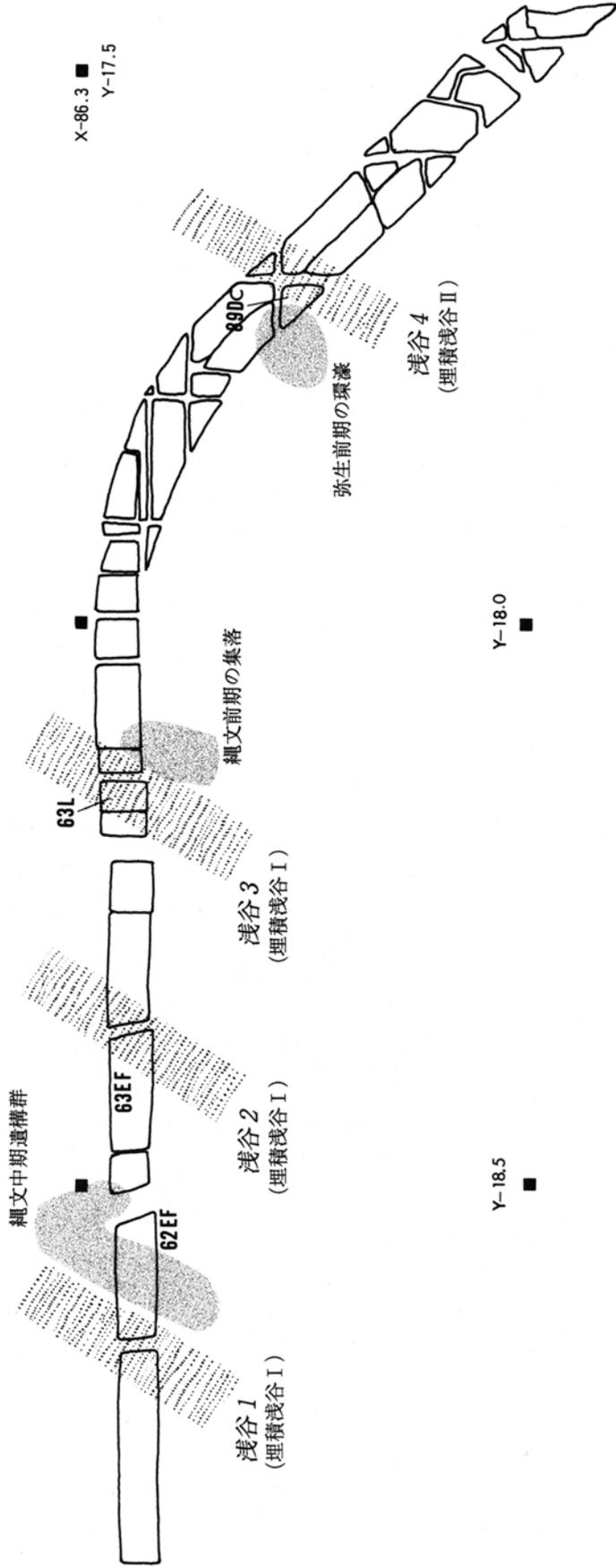
IV-8 松河戸火山灰層 (MT) およびその相当層の確認地点



IV-9 松河戸火山灰層上下の珪藻分析結果 (分析試料は 3 mm 間隔)



IV-10 松河戸遺跡群から産した主な昆虫化石の時代別出現率



1 : 6 0 0 0

IV-11 松河戸遺跡の浅谷地形復元図

2 愛知県松河戸遺跡における 縄文時代後・晩期の花粉化石

1) はじめに

松河戸遺跡は愛知県春日井市松河戸町に位置する縄文時代から近世にかけての複合遺跡であり、発掘調査は昭和62年度から平成3年度の5年間にわたり継続的に行われた。遺跡は庄内川の氾濫原に所在し、標高は約15mである。

今回は、本遺跡の縄文時代後・晩期の頃の古植生の復元を目的に花粉分析を行った。

2) 試料および分析方法

今回扱った試料は、89Dc区のSD120より採取した。このSD120は自然流路を人為的に利用した溝で、下部の堆積層からは縄文時代晩期後半の土器や木製品、打製石斧などのほかにクルミやクリなどの大型植物遺体も多く検出された。また標高12.5m付近では松河戸火山灰(MT)(森ほか、1990)がレンズ状に認められた。採取位置および模式柱状図を図IV-12に示した。

分析方法は、以下のとおりである。約20gの試料を10%KOH溶液処理(1晩)→60メッシュの篩に通し粗粒物質を除去→水洗→10%KOH溶液を加え湯煎(4分間)→傾斜法により細粒物質を除去→ZnCl₂溶液による比重分離(1500回転/分の遠心分離を2回繰り返す)→HF溶液処理(1晩)で鉱物片を除去→水洗→アセトリシス処理(40秒)→水洗→グリセリン・ゼリーで封入。

検鏡は400倍で、木本花粉が200個体以上に達するまで行った。出現率の算出は、木本花粉については木本花粉の総数を基数とし、草本花粉については総木本花粉と総草本花粉の和を基数として行った。

3) 分析結果

分析結果は表IV-13、図IV-14に示した。

針葉樹では *Pinus* が優勢に出現し、試料No. 8、9においては31.4%、27.2%と高率に出現する。その他ではTaxaceae-Cupressaceae, *Cryptomeria*, *Sciadopitys* などが顕著に出現する。広葉樹では *Lepidobalanus*, *Cyclobalanopsis* が優勢で、他に *Alnus*, *Castanopsis*, *Celtis-Aphananthe*, Oleaceaeが顕著に出現する。草本花粉ではGramineae, Cyperaceaeが高率に出現する。他に *Artemisia* や *Typha* が、出現率の違いはあるがほとんどの試料に出現する。

4) 古植生の復元

花粉分析の結果より、縄文時代後・晩期の松河戸遺跡の周辺古植生の復元を試みた。森林植生は *Lepidobalanus* (コナラ亜属) と *Cyclobalanopsis* (アカガシ亜属) の優占する暖温帯性の広葉樹林で、*Castanopsis* (シイノキ属)、*Taxaceae-Cupressaceae* (イチイ科-ヒノキ科)、*Sciadopitys* (コウヤマキ属)、*Cryptomeria* (スギ属) なども構成種に含まれる。他に *Vitis* (ブドウ属) などのつる性の植物や *Aesculus* (トチノキ属)、*Acer* (カエデ属) などもみられる。また *Juglans* (クルミ属)、*Alnus* (ハンノキ属) などの木本花粉や *Typha* (ガマ属)、*Gramineae* (イネ科)、*Cyperaceae* (カヤツリグサ科) などの草本花粉の出現より、河川の影響を受けた湿地的な環境が推測される。特に試料No. 3、4では *Iris* (アヤメ属) が出現している。また、低率ではあるが、*Artemisia* (ヨモギ属) が安定して出現していることから、開けた土地が近くに存在していたことが推測される。

今回扱った試料のうちNo. 8、9の間に、松河戸火山灰(MT) (森ほか, 1990) がレンズ状に挟まれることが認められる。火山灰よりも下位にあたる試料No. 1~5を含む層(黒灰色腐植質シルト、暗灰色腐植質シルト)およびNo. 14~19を含む層(暗灰色粘土、黒灰色泥炭)では、*Quercus* (*Lepidobalanus* + *Cyclobalanopsis*) (コナラ属) 中の *Cyclobalanopsis* (アカガシ亜属) の占める割合が高い。一方、火山灰に近い試料No. 8~12を含む層(黒灰色腐植質シルト、暗灰色腐植質シルト、暗灰色砂質シルト)では、*Cyclobalanopsis* (アカガシ亜属) の占める割合は低くなっている。ほかに *Celtis-Ahananthe* (エノキ属-ムクノキ属) および *Castanopsis* (シイノキ属) も出現率が低下している。このことから試料No. 8~12を含む地層が堆積する時期は、その前後の時期と比較してやや気温が低下したことが推測される。また試料No. 8、9で *Quercus* (コナラ属) が減少し *Pinus* (マツ属) が増加している。これらのことは松河戸火山灰による環境の変化を示している可能性も考えられる。

上記のように縄文時代後・晩期にかけてやや冷涼化した時期が存在したことは、楯ら(1993)においても指摘されている。

5) 今後の課題

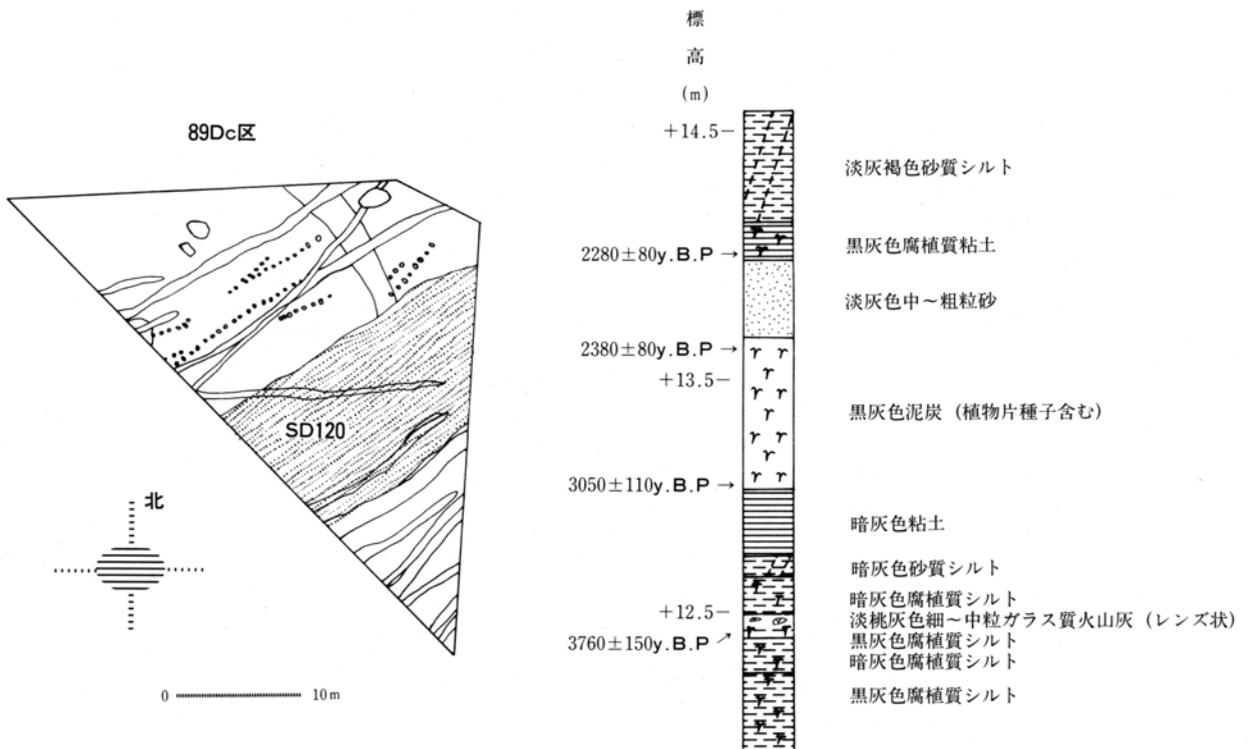
今回の分析では、対象となる試料の時期が縄文時代後・晩期と限られるために時代を追った環境の変遷を推測することができなかった。今後は各時代や地域の花粉分析データを蓄積し、時代による環境の変遷および火山灰降下による環境の変化など古植生史の復元を行ってゆきたい。

謝 辞

松河戸火山灰については森 勇一氏(愛知県立明和高等学校教諭)より御指導御教授いただいた。また試料作成にあたっては、中村明実・服部恵子両氏に多大なるご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

参考文献

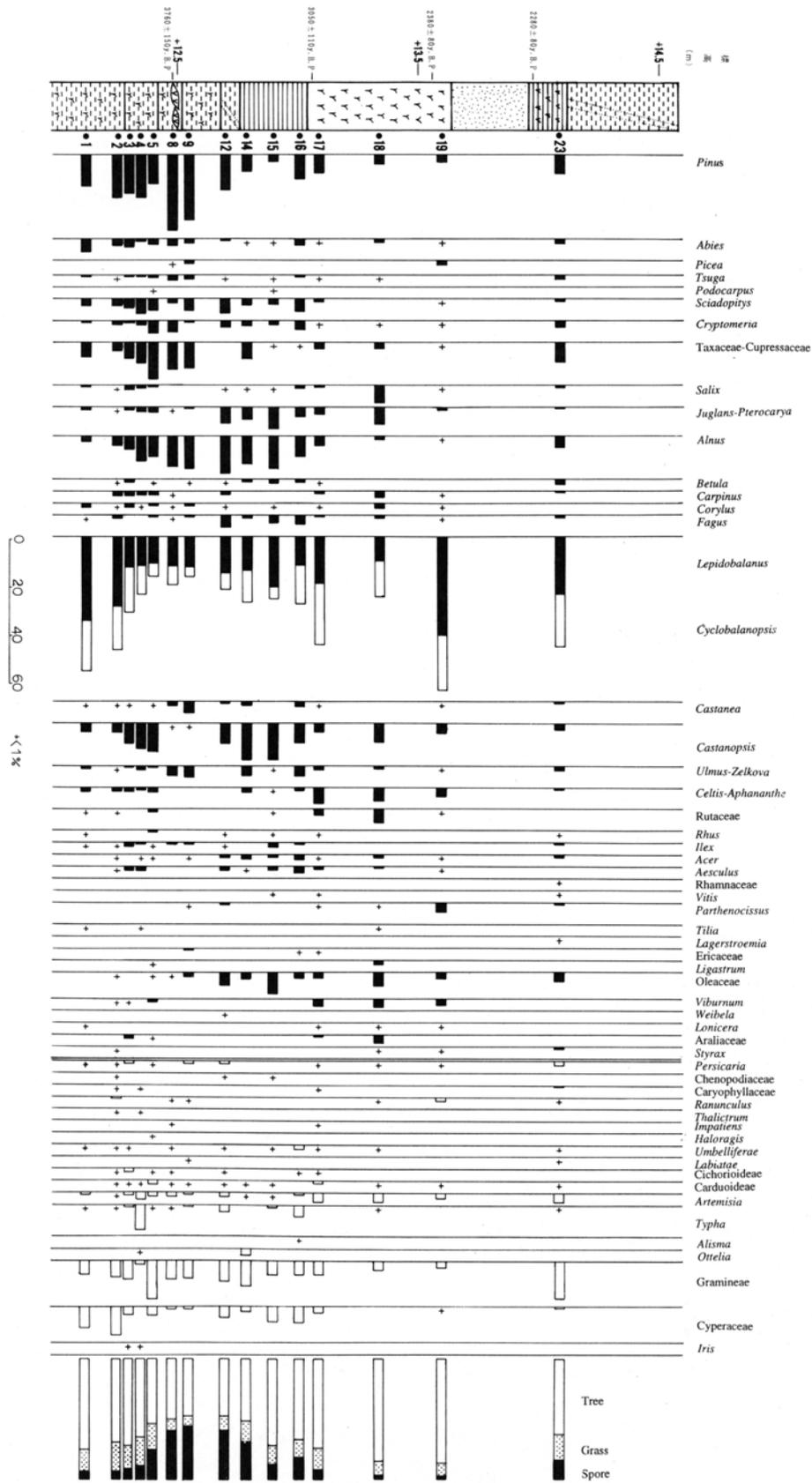
- 楯真美子・中垣内薫・服部俊之 (1993) 自然科学データの活用その1—花粉分析と樹種同定—
 (財) 愛知県埋蔵文化財センター年報 (平成4年度), 141-153.
 森 勇一・伊藤隆彦・宮田英嗣 (1990) 愛知県町田・松河戸遺跡から発見された縄文時代後・晩期の境界
 付近に位置する火山灰層について. 第四紀研究, 29, 17-23.



IV-12 試料採取地点および模式柱状図

サンプル番号	23	19	18	17	16	15	14	12	9	8	5	4	3	2	1
<i>Pinus</i>	17	7	8	16	21	7	15	25	55	64	25	35	35	40	28
<i>Abies</i>	5	1	3	1	6	1	1	2	4	6	5	3	8	7	5
<i>Picea</i>		4							3	1					
<i>Tsuga</i>	5		1	1	2	2		1	4	5	3	2	2	2	2
<i>Podocarpus</i>							1				1				
<i>Sciadopitys</i>	3	1		3	11	6	6	10	10	4	11	13	9	7	7
<i>Cryptomeria</i>	6	1	1	1	9	4	5	5	2	10	11	4	2	4	2
Taxaceae-Cupressaceae	17	2	6	6	1	1	16	22	24	32	19	15	10	13	
<i>Salix</i>	2	2	15	2	3	2	1	1			2	3	5	2	2
<i>Juglans-Pterocarya</i>	2	3	16	8	9	21	11	12	2	1	5	5	3	2	3
<i>Alnus</i>	11	2	3	9	19	31	26	28	30	27	19	22	15	10	6
<i>Betula</i>	5			1	3	4	3	1	1		1		3	1	
<i>Carpinus</i>	2	1	6	3				3		1	4	4	5	5	
<i>Corylus</i>		2	5	1		1		1	3	2	3	1	5	1	4
<i>Fagus</i>	3	2	3	2	8	8	3	9	2	1	2			3	1
<i>Lepidobalanus</i>	51	89	21	40	25	44	29	26	26	25	21	25	27	65	73
<i>Cyclobalanopsis</i>	45	50	30	52	33	13	28	11	7	16	13	24	39	40	42
<i>Castanea</i>	2	2		1	5		4	2	10	4	1		1	2	1
<i>Castanopsis</i>	7	10	17	9	18	34	33	15	1	1	25	23	18	10	8
<i>Ulmus-Zelkova</i>	5	1	3	4	9	1	9		10	9	2	4	2	1	3
<i>Celtis-Aphananthe</i>	2	8	12	15	3	2	5				5	3	5	4	5
Rutaceae		1	12	6		1					3			2	1
<i>Rhus</i>	1			1		2					2				1
<i>Ilex</i>	2				2	5		1	2	2	1	2	5	1	1
<i>Acer</i>	3	1	3	1	5	3	4	3	1		1	1		1	
<i>Aesculus</i>		2	2	3	6	4	1	3				4	4	2	
Rhamnaceae	1														
<i>Vitis</i>	1			1		2									
<i>Parhenocissus</i>	2	10	1	1				2	1						
<i>Tilia</i>			1									1			1
<i>Lagerstoemia</i>	1														
Ericaceae				1	1			2							
<i>Ligustrum</i>			4								1				
Oleaceae	9	7	12	5	5	20	6	8	4	1	1			1	
<i>Viburnum</i>		6	7	7							3		1	1	
<i>Weibela</i>								1							
<i>Lonicera</i>		1	1	1											1
Araliaceae			7	2							1	4			
<i>Styrax</i>			2	1	1									1	
<i>Persicaria</i>	5	1	1	2				3	3		1		4	2	2
Chenopodiaceae						1		1						1	
Caryophyllaceae	3			1								1		1	
<i>Ranunculus</i>	2	5	1						1	1				3	
<i>Thalictrum</i>												1		1	
<i>Impatiens</i>				2						1					
<i>Haloragis</i>											2				
<i>Umbelliferae</i>	1		1	2	5	1		1		2			1	2	1
<i>Labiatae</i>	1								1						
Cichorioideae				1	1			1		2	1		5	1	
Carduoideae	2	2	2	4		1	1	2	2	1	6	2	2	2	
<i>Artemisia</i>	11	6	9	10	3	2	1	5	3	5	5	8	4	2	5
<i>Typha</i>	1		1		15	4		8	6	2	1	28	4	1	1
<i>Alisma</i>					2										
<i>Ottelia</i>							8					1			
Gramineae	43	10	9	15	17	16	28	22	17	19	45	5	21	21	17
Cyperaceae	3	2		7	19	17	7	13	4	4	12		10	37	24
<i>Iris</i>												1	2		
Spore	54	8	9	22	42	59	35	102	189	162	82	58	28	25	20
木本花粉	210	216	202	205	205	219	207	171	202	204	204	203	209	225	210
草本花粉	72	26	24	44	62	42	45	56	34	37	73	47	53	74	50
胞子	54	8	9	22	42	59	35	102	189	162	892	58	28	25	20
総花粉数	336	250	235	271	309	320	287	329	425	203	369	308	290	324	280

IV-13 花粉分析結果



IV-14 松河戸遺跡の89Dc 花粉ダイアグラム

3 伊勢型鍋胎土重鉍物分析

1) はじめに

本分析では、東海地方の中世遺跡において特徴的に産出する「伊勢型鍋」と呼ばれる土師器を試料とする。「伊勢型鍋」については、「伊勢」の名前が示すように現在の三重県中部の伊勢市周辺を分布の中心とするといわれており^{▼1}、他の地域から出土する伊勢型鍋は、この中心地域から搬出されたものあるいは土器製作者（集団）が他地域へ移動したことなどが考えられている^{▼2}。これらに従えば、愛知県出土の伊勢型鍋は、搬入品かあるいは地元で作られたとしても特定集団の作成によるものであるということになる。

伊勢型鍋と
皿類

本分析は、胎土という側面から愛知県出土の伊勢型鍋を見ることにより、上記の問題について別の視点に立った資料を作成することができる。これまでも、愛知県出土の伊勢型鍋の胎土分析を行なった例があり、そこではいくつかの非常に興味深い結果が得られている。例えば、皿類などとは明らかに胎土が異なること（阿弥陀寺遺跡・大淵遺跡）、伊勢型鍋の時期的な変遷とほぼ対応した胎土の変化が認められること（土田遺跡・阿弥陀寺遺跡・大淵遺跡・杉山遺跡）などが指摘された。また、以前行なった清洲城下町遺跡出土の中世の土師器の胎土分析の中では三重県伊勢市および周辺の遺跡から出土した伊勢型鍋の分析結果が得られている。本分析結果はこれらの資料と比較し、解析を行なう。さらに、これらの資料に限らず、これまでの愛知県出土の土器の胎土分析から得られている結果とも比較を行ない、その胎土が示唆するところを引き出すことを試みる。

2) 試料

試料は、中世の伊勢型鍋60点である。松河戸遺跡の試料を基にその関連試料を合わせた。

春日井市：松河戸遺跡40点（試料番号1～40）

一宮市：西上免遺跡5点（試料番号41～45）

一宮市：田所遺跡5点（試料番号46～50）

稲沢市：堀之内花ノ木遺跡10点（試料番号51～60）

どの遺跡も愛知県西部のいわゆる尾張地域に所在する。詳細にみれば、松河戸遺跡は尾張中部、西上免遺跡・田所遺跡は尾張北部、堀之内花ノ木遺跡は尾張西部におおよそ区分される。

試料には、部位も明示され、また時期編年分類であるA～Eまでの分類も行なわれている。各試料におけるこれらの事項は、分析結果を示した図IV-16に併記する。

▼1 新田 洋1985「平安時代～中世における煮炊用具「伊勢型鍋」に関する若干の覚書」
『三重考古学研究』1

▼2 伊藤裕偉1992『南伊勢系土師器の展開と中世土師工人』『三重県埋蔵文化財センター研究紀要第1号』

3) 分析方法

これまで、愛知県の胎土分析では、一貫して胎土中の砂分の重鉱物組成を胎土の特徴としてきた。本分析でも、この方法に従う。処理方法は以下の通りである。

土器片をアルミナ製乳鉢を用いて粉碎し、水を加えて超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4mm-1/8mmの粒子をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96）により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて同定した。同定の際、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを不透明鉱物とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。グラフでは、同定粒数が100個未満の試料については粒数%を求めずに主な産出鉱物を呈示するにとどめる。

4) 分析結果

松河戸遺跡出土品は40点の試料のうち半数に近い19点の試料が、同定粒数100個未満である。このうちさらに6点の試料は、粒数が非常に少なく主な鉱物も呈示することができない。同定された鉱物の中で主要なものは、角閃石、ジルコン、緑レン石の3鉱物である。これらの中では、特にジルコンと角閃石が胎土重鉱物組成を決定しており、どちらかが多いか少ないかあるいは同量程度かによって各試料を特徴づけられる。緑レン石は、多くの試料に少量含まれる。

西上免遺跡出土品は5点の試料のうち、試料番号43と45の2点以外は全て同定粒数100個未満であり、しかも粒数が非常に少ないために主な鉱物を呈示することができない。上記の2点の試料は、類似した組成を示し、ジルコンが最も多く、これよりやや少ない角閃石を含み、少量の緑レン石と不透明鉱物を含む。

田所遺跡出土品は5点の試料のうち、試料番号48以外は全て同定粒数100個未満である。このうち試料番号50の1点は、粒数が非常に少ないために主な鉱物を呈示することができない。試料番号48は、角閃石が非常に多く、少量のジルコンと緑レン石を含むという組成を示す。他の3点の試料も角閃石を主要な鉱物として、このうち2点の試料は、緑レン石も主な鉱物とする。

堀之内花ノ木遺跡出土品は10点の試料のうち、同定粒数100個以上を得られたのは、試料番号55～58までの4点だけである。これら各試料とも角閃石、ジルコン、緑レン石を主な鉱物とするが、その組成は類似しない。試料番号55は角閃石が非常に多く、ジルコンと緑レン石は微量である。試料番号56は緑レン石が最も多く、中量の角閃石と微量のジルコンを含む。試料番号57は、角閃石と酸化角閃石が多く、ジルコンと緑レン石は極めて微量である。試料番号58は角閃石が最も多く、これよりやや少ない緑レン石と少量のジルコンを含む。同定粒数100個未満の試料6点のうち、2点はジルコン、2点は角閃石をそれぞれ主な

鉱物とし、他の2点は粒数が非常に少ないために鉱物を呈示できない。

以上の各遺跡における各試料の分析結果を図IV-15・16に示す。

5) まとめ

■伊勢型鍋の分類と胎土との関係

冒頭で述べたように、愛知県出土の伊勢型鍋の胎土は、時期的な変遷を示すことが推定されている。愛知県埋蔵文化財センターによる本分析試料は、編年がなされているところから、分類毎に分析結果をまとめることにより、以下に示すような胎土の時期的な変遷を見ることができ(図IV-17)。なお、分類では試料中でB類が最も古く、以下順に新しくなり、E類が最も新しい。

B類：「その他」を除けば、ジルコンを主体とする組成である。ジルコン以外の鉱物は微量しか含まれない。

ジルコン C類：B類と同様のジルコンを主体とする組成が多いが、試料番号27および28のように角閃石が多く少量のジルコンと緑レン石を含むという試料も混在する。またどちらの組成にも、他の類にはあまり含まれることのない斜方輝石が少量含まれることもC類の特徴といえる。

角閃石 D類：B類と同様のジルコンを主体とする組成およびC類で少数認められた角閃石の多い組成、さらに角閃石とジルコンが同量かジルコンの方がやや多く少量の緑レン石を伴う組成の3種類の胎土が混在する。また、同定粒数100個未満の試料でも角閃石を主とするものやジルコンを主とするものなどが混在する。

E類：他の類に比べて全体的に同定粒数100個未満の試料が多い。同定粒数100個以上の試料では、B類と同様のジルコンを主体とするものとD類で認められたジルコンの方がやや多い角閃石とジルコン主体のものが試料番号18と21にそれぞれ1点ずつ認められる。他の試料は、多量の角閃石と少量の緑レン石、多量の角閃石のみ、角閃石と酸化角閃石主体、角閃石とこれよりやや少ない緑レン石および少量のジルコン、多量の緑レン石と中量の角閃石および微量のジルコンというように、それぞれが特徴ある組成を示し、互いにあまり類似しない。また、同定粒数100個未満の試料では、角閃石を主要な鉱物とするものがほとんどであり、試料によっては緑レン石を伴うものもある。

以上の変化をまとめてみると次のような図式を考えることができる。伊勢型鍋の胎土は、古くは一様であったが、C類・D類と時代が下がるにつれて種類の異なる胎土が増えてゆき、E類に至っては、胎土の一様性がかなり低くなり、しかもB類の胎土は希少となってしまった。ここで、土田遺跡等で黒雲母と同定した鉱物は角閃石であったことを訂正すれば、本分析の胎土の推移は、土田遺跡などで指摘された第1段階～第3段階の変化に対応する。すなわち、ジルコンの量比が目立つとされた第1段階はB～C類の時代に相当し、黒雲母(本

分析では角閃石)が多いとされた第2段階はD～E類の時代に相当し、鉍物量が激減する第3段階はE類の時代に相当する。したがって、伊勢型鍋の胎土に系統的な変化があったことは、ほぼまちがいはない。そしてそのことは伊勢型鍋の製作をめぐる事情が時代と共に変化して行ったことを表わすと考えられる。その事情を具体的に解明するためには、胎土分析を進めるだけでは不可能であり、考古学や歴史学など多方面からの研究が必要であろう。

■これまでの愛知県出土土器の胎土と比べて

当社がこれまで行なった分析により、愛知県の遺跡より出土した土器の胎土の中には、地域性を示すものがあることが分かっている。その第1は、斜方輝石が多く、少量の単斜輝石を伴う「両輝石型」の胎土である。この胎土の土器は、そのほとんどが尾張地域に分布する遺跡から出土しており、三河地域からは、極めて僅かな試料しか認められないことから、尾張地域在地のものであるとしてきた。本分析試料も全て尾張地域出土の土器であるが、「両輝石型」の胎土は1点も認められない。このような状況から、尾張地域出土の伊勢型鍋は、胎土から見ても特殊であるといえることができる。

両輝石型

地域性を示す胎土の第2として、「西三河型」の胎土がある。「西三河型」は、岡島遺跡を中心とする土器の分析から導きだしたもので、角閃石、ジルコン、ザクロ石の3鉍物を主体とする組成を示す。特に、角閃石が多く、他の2鉍物は少量という「角閃石型」の組成を示すものが多い。本分析試料の胎土は角閃石とジルコンという点では共通するが、ザクロ石がほとんど含まれず、代わりに緑レン石が含まれるという点で、「西三河型」とも区別される。

一方、これまで胎土分析を行ってきた愛知県出土の土器の中には、伊勢型鍋同様にその分布の広域性から特に注目されているS字甕が存在する。この土器についてもその胎土の傾向は、おおよそ把握されている。すなわち、角閃石とザクロ石のどちらか一方あるいは両方を主体とする組成が多く、尾張地域では稀に両輝石型が混在する。本分析の伊勢型鍋の胎土の傾向は、このS字甕の傾向とも異なるものである。

愛知県から出土した土器の胎土重鉍物組成は、上記したものだけでなく、まだ様々な組成が認められる。しかし、本分析試料のようにジルコンを主体とする組成や緑レン石を含む組成は、これまでの分析例から見れば、愛知県出土の土器胎土の中では特異である。ところが、清洲城下町遺跡関連試料での分析において行なった三重県出土の伊勢型鍋のほとんどが、本分析のC類やD類に認められた角閃石とジルコンおよび少量の緑レン石からなる組成を示すものであった^{▼1}。

三重県産

▼1 鈴木正貴他1990『清洲城下町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集

以上に述べたことだけからは、本分析試料が三重県産であると判断することは早計であるが、その特異性を説明するには充分であると考えられる。今後は、三重県の遺跡出土の伊勢型鍋の胎土を調べるとともに、愛知県や三重県各地の自然堆積した砂層や粘土層中の重鉱物組成を調べるなどして角閃石やジルコンおよび緑レン石の由来も検討しなければならない^{▼1}。

▼1 当センターが伊勢型鍋に関して行なった重鉱物分析には以下のものがある。

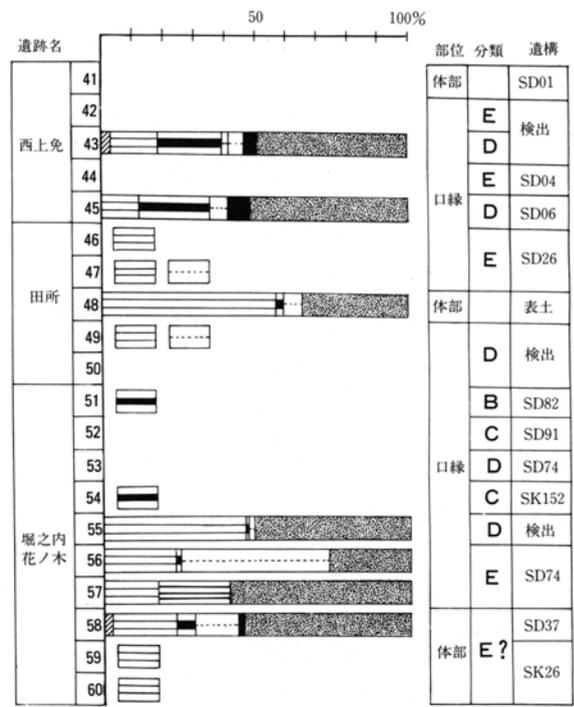
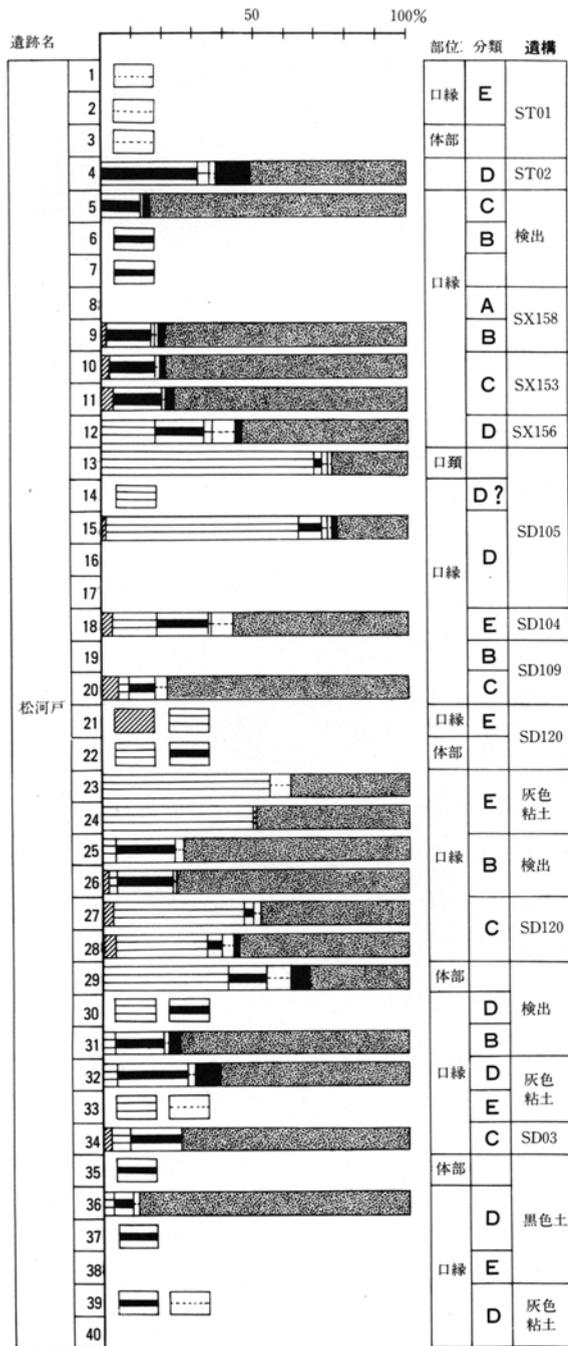
『土田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第2集 1987

『阿弥陀寺遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第11集 1990

IV-15 伊勢型鍋胎土重鉱物分析結果

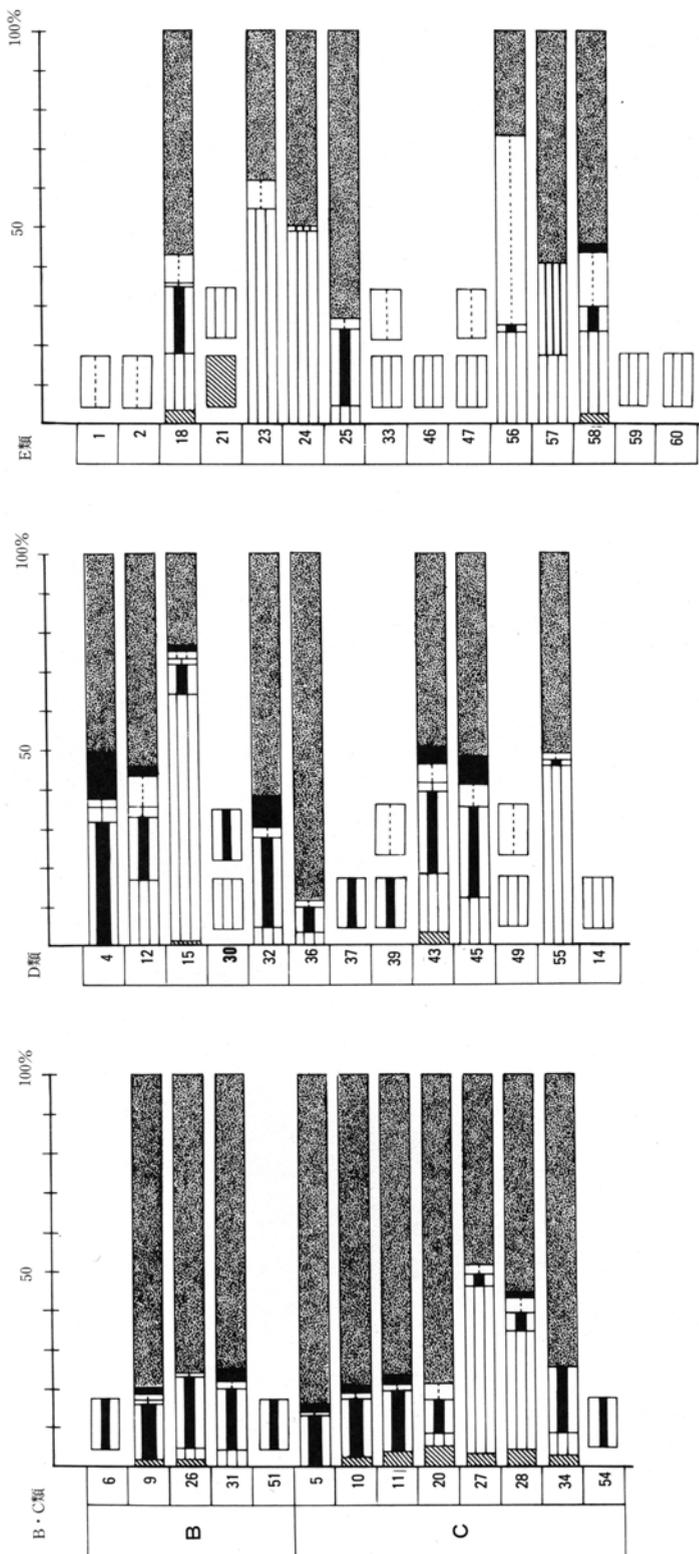
試料 番号	カン ラン 石	斜方 輝石	単斜 輝石	角閃 石	酸化 角閃 石	黒雲 母・ 緑色	黒雲 母・ 褐色	ジル コン	ザク ロ石	緑レ ン石	電気 石	不透 明鉱 物	その 他	同定 鉱物 粒数
1	0	0	0	5	0	0	0	2	0	16	0	5	7	35
2	0	1	1	2	0	0	0	2	0	17	0	0	19	42
3	0	3	0	1	0	0	0	4	0	19	0	3	23	53
4	0	1	0	0	0	0	0	41	5	3	0	14	65	129
5	0	0	0	0	0	0	0	24	0	2	0	3	155	184
6	0	1	1	2	0	0	0	11	2	2	0	3	32	54
7	0	0	0	0	0	0	0	4	0	2	0	4	59	69
8	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	10	13
9	0	4	0	2	0	0	0	34	3	4	0	3	188	238
10	0	6	0	2	0	0	0	37	2	5	0	3	195	250
11	0	5	1	1	0	0	0	21	1	2	0	3	99	133
12	0	1	0	31	0	1	0	29	5	14	0	3	97	181
13	0	0	0	173	0	1	0	7	0	4	4	1	60	250
14	0	0	0	14	0	0	0	0	0	0	0	0	23	37
15	0	3	0	157	0	0	0	19	0	4	5	3	59	250
16	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	7	12
17	0	0	0	5	0	0	0	1	0	0	1	1	15	23
18	0	8	1	36	0	0	0	42	3	18	0	2	140	250
19	0	0	0	2	0	0	0	7	0	1	0	0	16	26
20	0	8	0	5	0	0	0	13	1	6	0	0	119	152
21	0	6	0	5	0	0	0	3	0	0	0	4	56	74
22	0	2	5	7	0	0	0	11	0	3	0	2	34	64
23	0	1	0	135	1	0	0	1	2	18	0	1	91	250
24	0	0	1	122	3	0	0	0	0	1	0	1	122	250
25	0	2	0	11	0	0	0	48	2	7	0	2	178	250
26	0	3	0	5	0	0	0	31	1	2	0	1	127	170
27	0	8	0	107	0	0	0	8	1	6	0	1	119	250
28	0	11	0	75	0	0	0	12	0	10	2	3	137	250
29	0	1	0	103	0	0	0	31	0	20	1	14	80	250
30	0	5	0	9	0	0	0	12	0	2	0	4	43	75

試料 番号	カン ラン 石	斜方 輝石	単斜 輝石	角閃 石	酸化 角閃 石	黒雲 母・ 緑色	黒雲 母・ 褐色	ジル コン	ザク ロ石	緑レ ン石	電気 石	不透 明鉱 物	その 他	同定 鉱物 粒数	
31	0	0	0	8	0	0	0	1	30	1	4	0	6	141	191
32	0	1	0	12	0	0	0	57	0	7	0	19	154	250	
33	0	3	0	13	0	0	0	3	0	15	0	3	33	70	
34	0	7	1	15	0	0	0	42	2	0	0	0	183	250	
35	0	0	0	1	0	0	0	7	1	0	0	2	39	50	
36	0	0	0	5	0	1	0	10	1	3	1	1	132	154	
37	0	1	0	0	0	0	0	16	0	1	0	1	41	60	
38	0	0	0	0	0	1	0	1	0	4	0	1	18	25	
39	0	1	0	1	0	0	0	5	4	6	0	1	43	61	
40	0	3	0	0	0	0	1	2	2	0	0	0	12	20	
41	0	4	0	4	0	0	0	2	0	3	0	0	39	52	
42	0	0	0	2	0	0	0	3	0	0	0	0	42	47	
43	0	4	0	19	0	0	0	26	3	6	0	5	62	125	
44	0	0	0	7	0	0	0	1	0	0	1	0	5	14	
45	0	0	0	31	0	0	1	58	1	14	1	17	127	250	
46	0	0	0	13	0	0	0	0	2	0	2	1	16	34	
47	0	0	1	13	0	0	0	2	0	6	1	0	29	52	
48	0	0	0	140	2	0	0	6	0	16	2	1	83	250	
49	0	1	0	13	1	0	0	6	0	10	3	0	20	54	
50	0	0	0	4	0	0	0	1	0	3	0	0	7	15	
51	0	1	0	0	0	0	0	9	0	1	0	3	35	49	
52	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	6	7	
53	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	6	7	
54	0	0	0	3	0	0	0	11	0	2	0	1	37	54	
55	0	1	0	74	0	0	0	2	1	3	0	0	80	161	
56	0	1	0	27	0	0	1	2	0	57	0	1	28	117	
57	0	1	1	43	59	0	1	1	0	2	0	0	142	250	
58	0	4	0	34	0	0	0	10	0	23	0	3	89	163	
59	0	2	0	20	0	0	0	4	0	3	0	1	34	64	
60	0	1	0	38	0	0	0	2	0	1	3	1	37	83	



1. 斜方輝石 2. 角閃石 3. 酸化角閃石
 4. シルコン 5. ザクロ石 6. 緑レン石
 7. 不透明鉱物 8. その他

IV-16 試料の胎土重鉱物組成



1 2 3 4 5 6 7 8
 1. 斜方輝石 2. 角閃石 3. 酸化角閃石
 4. シルコン 5. サクロ石 6. 緑レン石
 7. 不透明鉱物 8. その他

IV-17 試料の分類別胎土重鉱物組成

4 S字状口縁台付甕の胎土の変化

1) はじめに

S字状口縁台付甕(以下、S字甕という)は、古墳時代初頭より東海地方、特に伊勢湾岸地域において普遍的に出土する土器であり、特に出土の重心は愛知県西部のいわゆる尾張平野にある。ある時期を境に広範囲に拡散がみられ、各地で出土例が報告されているが、考古学的な観点からみてその発生は、現在のところ尾張平野にあると見てよい。

しかし考古遺物に対する科学的分析が進むにつれ、S字甕の材料となる胎土は他の尾張平野出土土器のそれとは異なった特徴を有することが指摘されるようになった。ここで、これまでの土器胎土分析結果を今一度整理・再検討するとともに、本報告となる春日井市松河戸遺跡と、その他の遺跡の出土資料の分析結果も加え考察を行う。

2) これまでに得られている結果の再検討

■S字甕の胎土の特徴

愛知県を中心としたその周辺地域における胎土分析は、これまでに筆者らによる表面の 胎土の
地域差 実体顕微鏡観察と薄片プレパラートの偏光顕微鏡観察のほか、パリノサーヴェイ(株)に依頼して行われた重鉍物分析がある。これらの結果を概説すると、S字甕の重点出土地域の尾張平野では、石英などの他にチャートを中心とする中・古生代の堆積岩類と、安山岩やそれに由来する斜方輝石の組み合わせの土器胎土が特徴である。これらの砂礫は濃尾平野の形成に多量の砂礫を運搬した木曾・長良・揖斐川の中・上流域の地質を反映しており、この地域の遺跡基盤となる砂層中にもこれらの砂礫が含まれていることも明らかになっている(森ほか、1990)。春日井市周辺ではチャートの比率が高く、この他に変成岩のホルンフェルスなどが含まれる。愛知県東部の三河地方や三重県中・北部は周辺に分布する花崗岩の影響を受け、この岩片や黒雲母など花崗岩に由来する鉍物が多い。ただし三河地域でも静岡県寄りの地域はやや異なった傾向にあるようである。

S字甕に対する分析は、S字甕O・A類、B類、C類を中心に、未報告資料もあわせ130点 S字甕の
胎土 近くにおよぶ(時期不明の資料も含む)。その出土遺跡も、最も出土例の多い尾張平野の遺跡(一宮市下渡・元屋敷・南木戸遺跡、西春日井郡廻間・朝日遺跡、海部郡定納遺跡)だけでなく、松河戸遺跡とほど近い町田遺跡や、三重県松阪市粥鍋遺跡も含んでいる。これらの分析結果は、調査報告書「町田遺跡」「廻間遺跡」に掲載されているが、「町田遺跡」関連試料は実体顕微鏡観察と重鉍物分析、「廻間遺跡」は重鉍物分析の結果のみの報告となっている。筆者はその報告後これらの試料に対し可能な限り薄片プレパラートを作成し観察を行っている。ここではこれらの結果もふまえて述べる。

分析を行ったS字甕の胎土は、もちろん尾張平野の土器胎土に共通するものも含まれるが、多くは花崗岩やこれを起源とする黒雲母・角閃石などの鉱物が主体となる。元来花崗岩分布域の下流にあたる粥鍋遺跡を除けば、この結果はS字甕が他の土器とは明らかに異なった胎土で作られたということを示している。

時期別に
みた胎土

これを時期別にみると、S字甕の初期段階であるO・A類では分析試料のすべてが花崗岩起源の胎土である。S字甕の発生期においてその胎土が他の在地の土器胎土と異なるこの状況が、何に起因することかは現在のところ不明である。B類の段階になると、尾張平野在地土器と同傾向の胎土のS字甕も一部出現する。しかし花崗岩起源の胎土を有するものがほとんどであり、S字甕の材質に対する特別視は基本的に変化していないようである。以前からの胎土を踏襲したものと、他の土器と共通した材料で作られたものとの混在は、S字甕の定着による需要の拡大が原因かもしれないし、あるいはより細かくみた場合の時期差である可能性もある。またB類段階でも、他の土器に比べ白雲母が目立つ傾向の一群がある。これは定納遺跡（海部郡八開村）出土資料をはじめ、何点か見られる。この一群は、B類のうちでも特に新段階のものが多く、この胎土の差は、時期差に対応する可能性もある。

春日井地域
のS字甕

春日井地域ではS字甕の出土はあくまでも客体であり、尾張平野とはやや文化圏を異にするものと考えられる。胎土分析の結果を比較しても、町田遺跡出土のS字甕には、在地の弥生式土器と共通するものは1点もなく、この遺跡周辺でS字甕が作られた可能性は、現在のところない。またこの中には尾張平野と共通する胎土のものが含まれ、春日井地域で出土するS字甕は、尾張平野からの搬入によるものであろう。尾張平野と春日井地域は、直接的交流はあったが、標高5m程度までの尾張平野を中心とする「S字甕製作文化」は、標高が10mを越える春日井地域には及ばなかったといえる。

またB類段階の前後には、A類までに比べ他地域への拡散が顕著になり、遠くは北九州での出土例がある。このうち北九州市南方上ヶ田遺跡出土のS字甕B類の分析を行っているが、これは尾張のS字甕の胎土とは共通しない。製作技術という点では正確に模倣されている（赤塚氏教示）が、胎土はおそらく出土遺跡周辺で採取されたものと思われる（ただし出土遺跡の土器胎土とはやや傾向が異なる）。

■S字甕の製作地に関する考察

現在までのところ、このS字甕を作る花崗岩質の胎土の産地は特定されていない。これまでに分析を行った結果との比較やS字甕の出土分布から考えると、三重県中部あたりに候補を挙げることができるが、未だ確証を得ない。そこで、ここではその製作地という点について述べたい。S字甕にはその特異な形態を生み出す独特で普遍的な製作技法が存在する。特に製作地を推定する上で重要な点は脚台部にあり、「まず台部を形成し、その後倒

S字甕の
製作地

立する。(中略) 体部第1段(体部約1/3弱)形成後粘土による補充を接合面内外に行う。この時使用する粘土には多量の砂粒を混合させるという特色がみられる」(愛知県埋蔵文化財センター, 1990a)ことである。つまり製作中に混合させる砂礫は製作地で得られるものである可能性が高いことより、この点を重点的に分析すれば製作地に関する情報が得られるのではなかろうか。こういった観点でこれまでの分析試料の再検討を行うと、偏光顕微鏡下において、花崗岩源の砂礫を多く含みながらも、チャートなども含まれる試料が何点あり、これらの多くは体部下位や脚部・底部であることが判明した。すなわちこれらの部位では、S字甕を特徴づける花崗岩質胎土に、尾張平野の特徴が混在しているようにも思われる。そこでさらにA類とB類(古)に絞って脚部・底部の資料5点を追加分析したところ、当然含有率は低いものの、尾張地域の胎土を特徴づけるチャートや斜方輝石が確認された。チャートは硬いため砂礫として残りやすいし、斜方輝石は元来多くは含まれないものなので、これらが少量含まれたからといって即尾張平野との関わりが結論づけられるものではないが、胴部や口縁部では確認できない岩片・鉱物が、部位によっては含まれる何らかの理由が存在するものと考えられる。またもしS字甕が製品として花崗岩地質の地域から出土重心まで移動するとすれば、その距離は数十～百kmにも及び、特に薄く仕上げられるS字甕がその移動に耐え得る可能性を考えれば、材料の段階で移動することを考える方が自然ではなかろうか。現時点では仮説に過ぎないが、ここまでの分析結果から考えれば、S字甕は材料のみを搬入し、尾張平野で作られた土器といえそうである。

3) 松河戸遺跡出土資料と比較資料の分析結果

松河戸遺跡では、古墳時代初頭を位置づける廻間式土器に続く土器群が出土する。S字甕ではおもにD類と、それに続く宇田型甕がこれに含まれる。ここでは、前章で述べた時期以降の土器胎土の変化に着目し、松河戸遺跡で出土したS字甕D類(No.8～11)と、比較資料として月繩手・堀之内花ノ木遺跡のS字甕D類(No.1～7, 12, 14)と、月繩手・岩倉城下層・朝日遺跡出土の宇田型甕(No.16～21)を分析対象とした。また結果の考察には、町田遺跡関連資料中のD類資料・宇田型甕資料の結果も含めて考える。

S字甕D類
宇田型甕

■各遺跡の地理的關係と地質

松河戸遺跡は庄内川中流右岸の後背湿地にあり、前述の町田遺跡と隣接する。庄内川はおもに美濃帯と呼ばれる中・古生層を侵食し、春日井市に入ると同時にこれらの砂礫を放出・堆積させる。松河戸遺跡は現在の庄内川とも程近く、遺跡基盤の堆積物は庄内川によって支配される。

月繩手遺跡も現庄内川の右岸で距離的にも庄内川に近いが、松河戸遺跡より下流に位置し、標高も低い。堆積物や土器胎土も旧木曾川水系の五条川の影響を強く受け、松河戸遺

跡とは異なりむしろ朝日遺跡など尾張平野の遺跡群と同傾向にあるといえる。堀之内花ノ木遺跡もこれに類する。

岩倉城遺跡は木曾川水系の扇状地縁辺にあり、平面距離でもこれらの遺跡群からはやや離れている。この近辺の遺跡出土土器の系統だった胎土分析はこれまでには行われていない。

■分析結果

分析の方法は、土器表面の実体顕微鏡観察と土器薄片の偏光顕微鏡観察で、これまでに実施・報告した方法に準ずる。

実体顕微鏡観察の結果・偏光顕微鏡観察の結果を、それぞれ表IV-18に示す。実体顕微鏡下では砂礫の極めて少ないもの(Na10)や、煤の付着により特徴をつかみにくいもの(Na2, 20)があり、またこの結果より作成した主要造岩鉱物の三角ダイヤグラム(図IV-20)でも、全体にばらつきを見せ特徴の判別は難しい。そこで実体顕微鏡下の個々の鉱物の組成と偏光顕微鏡観察結果とによって各試料の分類を行う。

S字甕D類 の胎土

D類では、月繩手遺跡出土資料中に白雲母の多い試料の存在が目立った。前述のように、B類段階までにはこのような胎土はB類新段階の一部にしか見られず、尾張平野では時期が下がるにつれて白雲母を含むS字甕が増加傾向にあるように思われる。この白雲母が多い胎土は、併せて斜方輝石やチャートを含んでおり、傾向としては尾張平野の在地型の胎土に似ている。しかし、白雲母を含む資料が重鉱物分析でザクロ石が多い(神谷, 1989)ことや偏光顕微鏡下でもザクロ石が観察できるなども考えると、胎土の産地は他の尾張平野産の土器とは若干異なることは明らかである。町田遺跡関連資料中では定納遺跡出土資料中にこれと似たものが多いことを付記しておく。

松河戸遺跡出土資料では、これに対し春日井在り地型土器や尾張平野在り地土器と似た胎土の試料は1点もない。白雲母が多い資料は1点存在するが、尾張平野型とは異なった傾向を示すようである。町田遺跡関連資料をみてもすべてが花崗岩型であるし、今回の分析試料も1点を除けば花崗岩を主体とする胎土である。この点から春日井地域は、この段階になってもS字甕は客体として搬入されたと考えられ、春日井地域では各時期を通してS字甕が生産された可能性は今のところない。しかも搬入された土器が、B類段階のように尾張平野型胎土ではなく、花崗岩型胎土のものになっていくことは、B類段階とD類段階では、春日井地域へのS字甕の供給体制に変化があったのかもしれない。八尾南遺跡(大阪府八尾市)出土のS字甕(D類?)の土器胎土について、奥田尚氏は「庄内川流域産」と報告している(大阪府教育委員会, 1991)。しかし松河戸遺跡周辺ではS字甕の生産の可能性がないことより、下流域の尾張平野産と考えるべきであろう。

堀之内花ノ木遺跡出土試料は、2点とも在地型の胎土と同傾向であるが、チャートの比率がやや高いようである。他の尾張平野の遺跡群とやや距離的に離れているため、砂礫採取地（の堆積環境）が異なるためであろうか。わずかながら白雲母は含まれている。

宇田型甕ではまた白雲母を多く含む試料は減少し、月縄手遺跡出土の1点のみとなる。これはD類の白雲母を含む胎土と似ているが、わずかに白雲母を含む試料2点は花崗岩起源の鉱物が多く、傾向は異なる。また岩倉城遺跡の2試料と朝日遺跡の1試料では、チャートや斜方輝石とともに、花崗岩片や角閃石を含むなど分散した傾向の胎土の土器がある。偏光顕微鏡下では2種類の胎土が混ざりあった様子も観察でき、全く特徴の異なった胎土を混ぜあわせて土器を作った可能性もある。

宇田型甕
の胎土

ただし町田遺跡関連資料では、宇田型甕はすべて町田遺跡出土で、胎土もすべて花崗岩質であった。これらの点より春日井地域ではS字甕D類段階と宇田型甕の胎土は、調和的であるといえる。

4) まとめ

- 1：東海地方、特に伊勢湾岸地域で出土するS字甕は、その発生期においては現在のところすべて花崗岩源の堆積物から作られており、一定の規格を持って作られている。しかもこの胎土は、S字甕の出土の重心である尾張平野低湿地部の在地の土器とは明らかに異なる。
- 2：花崗岩質の胎土をもつS字甕でも、その製作段階で傾向の異なった砂礫が混和された可能性があり、またこの混和された砂礫は尾張平野のそれとの共通点がうかがえる。このことから、これらのS字甕の胎土は異地産であっても、製作地は尾張平野部である可能性がある。
- 3：S字甕B類段階以降は、上述の規格が崩れ、尾張平野の在地土器と共通する胎土のものが出現し胎土の多様化がみられる。しかし春日井地域では、花崗岩質の胎土のものと尾張平野の胎土に共通するものは出土するが、在地の土器と共通の胎土をもつものは見られず定着しない。
- 4：B類新段階の頃より胎土中に白雲母が入るものが尾張平野で見られるようになり、時期により胎土の産地が一部変化したようである。この傾向はD類段階まで続く。
- 5：春日井地域で出土するS字甕は、各時期を通じて搬入品であり、これに続く宇田型甕も同様である。しかしS字甕の段階では尾張平野在地の特徴をもつものが主体であるのに、宇田型甕では分析したものはすべて花崗岩質の胎土であった。この時期に土器供給の経路に変化があったことが考えられる。

5) 今後の課題

伊勢湾岸地域で出土するS字甕の量は相当量である。分析が行われている土器はその中のごく一部に過ぎず、また時期別にみても偏りがあるなど満足のゆく分析が行われていないのが現状である。しかも一見すらされていないものが大多数であり、現在結果として提示できることもほんの一部でしかないといえる。また他地域で出土するものについても尾張平野で出土するものとの比較・検討も大きな課題である。しかしこれについて詳細な検討を行うにも、この伊勢湾岸地域のS字甕の胎土について明確な解答を出すことが最優先であるといえる。

比較データの収集や実際の堆積物との比較など、大きな課題が山積みの状態と言わざるを得ない。

謝 辞

本稿の執筆に際し、赤塚次郎氏をはじめとする(財)愛知県埋蔵文化財センターの方々には資料提供やご助言を頂いた。また愛知県立明和高等学校教諭の森勇一氏には多くのご指導を頂いた。記して感謝の意を表す。

参考文献

- 愛知県埋蔵文化財センター (1991a) 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 廻間遺跡, 153p.
愛知県埋蔵文化財センター (1991b) 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第18集 大淵遺跡, 148p.
愛知県埋蔵文化財センター (1991c) 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第30集 朝日遺跡 I, 206p.
池本正明・永草康次 (1990a) 岡島遺跡の土器胎土の特徴. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第14集 岡島遺跡, 51-63.
池本正明・永草康次 (1990b) 岡島遺跡の土器胎土に関する考察. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第14集 岡島遺跡, 98-101.
神谷友和(1989)S字状口縁台付甕の分析. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第9集 町田遺跡, 32-43.
森 勇一・永草康次・楯真美子 (1989a) 尾張地方を中心とした土器胎土の地域色について. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第9集 町田遺跡, 44-49.
森 勇一・永草康次・楯真美子 (1989b) 町田遺跡出土の弥生土器胎土の特徴. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第9集 町田遺跡, 50-53.
森 勇一・伊藤隆彦・楯真美子・永草康次 (1990) 濃尾平野周辺地域における遺跡基盤層の粒度および鉱物組成. 愛知県埋蔵文化財センター年報(平成元年度), 131-143.
永草康次 (1990) 阿弥陀寺遺跡の土器胎土の特徴について. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第11集 阿弥陀寺遺跡, 289-299.
永草康次 (1991) S字状口縁台付甕の胎土について(予察). 日本文化財科学会第8回大会研究発表要旨集, 63-64.
永草康次 (1992) 朝日遺跡出土の土器胎土. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集 II 朝日遺跡 II (自然科学編), 299-314.
永草康次 (1993) 岡島遺跡出土の土器胎土. 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第43集 岡島遺跡 II・不馬入遺跡, 141-152.
大阪府教育委員会 (1991) 八尾南遺跡発掘調査概要・II, 93p.
矢作健二・橋本真紀夫・赤塚次郎 (1990) 東海地域における弥生時代の土器の胎土分析. 日本文化財科学会第7回大会発表要旨集, 24-25.

IV-18 分析結果一覧表

実体顕微鏡観察結果

No.	Qz	Fl	Bt	Mu	Mf	Gr	Ch	UR	Oth	total
1	151	19	6	5	17	1	2	0	0	201
2										
3	154	8	4	9	27	0	2	0	0	204
4	152	10	10	19	8	0	0	0	1	200
5	163	16	8	12	8	0	5	0	9	221
6	72	10	0	0	1	2	1	0	0	86
7	77	3	3	0	4	0	1	0	0	88
8	134	21	4	1	7	2	0	0	1	170
9	151	15	23	20	7	0	0	0	1	217
10										
11	163	19	4	2	17	0	0	0	0	205
12	172	20	1	2	13	0	0	0	0	208
13										
14	190	23	2	2	9	0	3	0	0	229
15										
16	154	37	3	8	0	0	0	0	2	204
17	125	18	3	0	6	0	0	0	0	152
18	177	8	3	1	12	0	1	0	0	202
19	173	22	0	0	1	0	4	0	0	200
20										
21	123	5	7	1	11	0	0	0	0	147

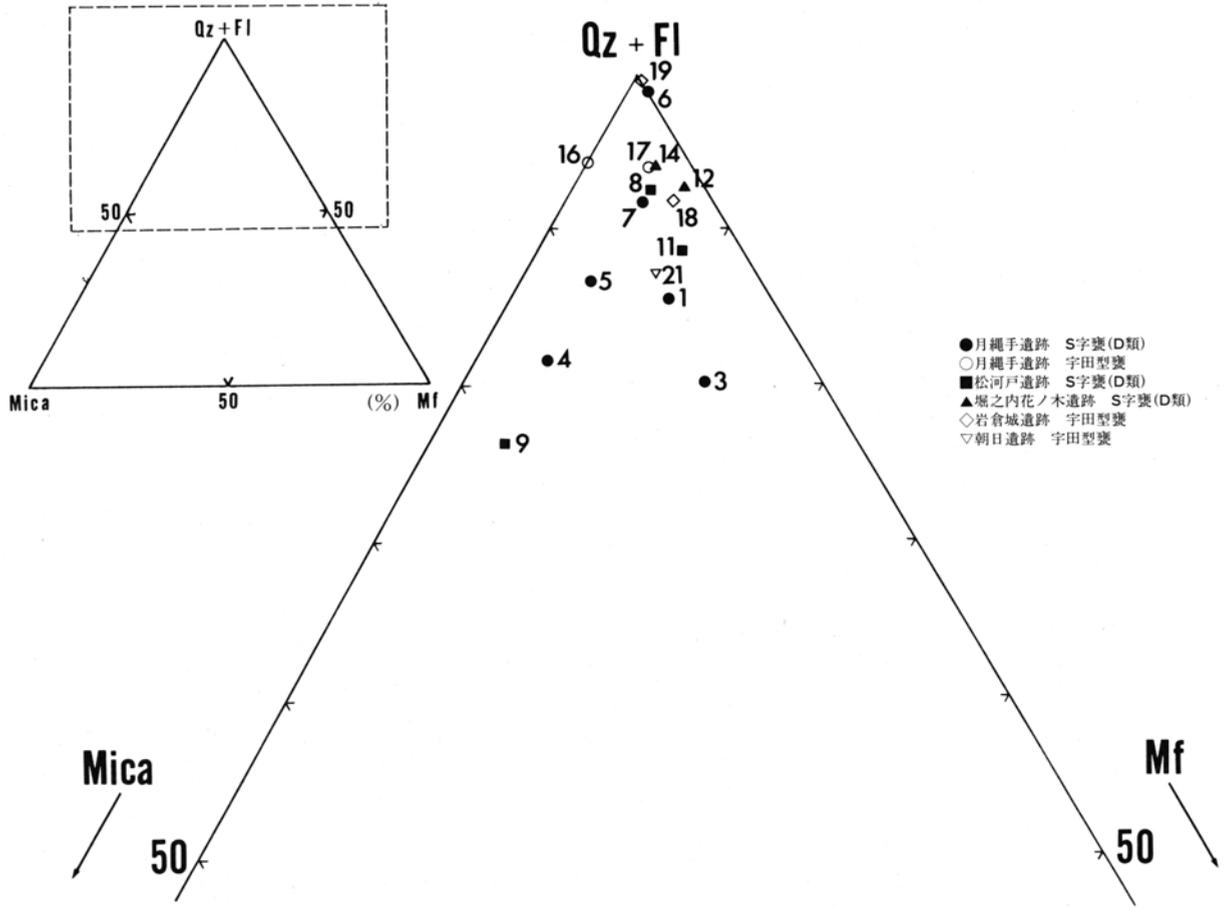
Qz：石英 Fl：長石 Bt：黒雲母 Mv：白雲母
Mf：雲母以外の有色鉱物 Gr：花崗岩 Ch：チャート
Oth：その他（花崗岩・チャート以外の岩片や火山ガラスなど）

偏光顕微鏡観察結果

No.	黒雲母	白雲母	角閃石	斜方輝石	単斜輝石	ジルコン	ザクロ石	花崗岩	チャート	火山岩	砂岩	変成岩
1	—	—	—	—	—	(—)	—	—	△	—	—	—
2	△	△	—	—	—	—	△	—	△	—	—	—
3	△	△	—	—	—	—	—	△	△	—	—	—
4	△	△	—	—	—	—	△	—	△	—	—	△
5	—	—	—	—	—	—	△	—	△	—	—	—
6	(—)	—	—	—	—	—	—	—	△	—	—	—
7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8	—	—	△	—	—	—	(—)	△	(—)	—	—	—
9	△	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
10	—	—	—	—	—	—	—	△	△	—	—	—
11	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—	—
12	—	—	—	—	—	—	(—)	—	○	—	—	(—)
13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
14	(—)	—	—	—	—	—	—	—	○	—	—	—
15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
16	—	(—)	(—)	—	—	(—)	—	—	○	△	—	—
17	—	—	—	—	—	—	—	—	○	△	—	—
18	△	—	—	—	(—)	—	—	○	△	—	(—)	—
19	—	—	(—)	(—)	—	(—)	—	—	○	—	—	—
20	—	—	△	—	—	(—)	—	△	△	—	—	(—)
21	△	—	—	—	—	—	—	○	(—)	—	—	—

*資料番号13・15は、12と同一個体であることが判明し、空番とした。

IV-19 主要造岩鉱物三角ダイアグラム



V まとめにかえて

中世松河戸ムラ

松河戸遺跡の発掘調査において検出できた遺構を基に、中世期の松河戸遺跡のついてまとめおきたい。ここで取り扱う資料は松河戸遺跡ならびに近年当センターが調査した勝川遺跡・町田遺跡の成果を含めて取り扱うことにしたい。これらは春日井市南東地区に位置しており、庄内川中流域右岸の限定された小地域を対象とすることにもなる。当地域は文献的には「安食荘」の一部と考えられている地区でもあり、鎌倉時代から平安時代にかけての具体的な考古資料の提示は、こうした文献史料との係わり合の中で再度検討されることを期待したい。

1) 遺構の変遷

■時期区分

中世期の時期区分についてはすでに第III章第4節にて言及しておいた。これらの時期区分は基本的には土器・陶磁器様式区分に準拠しているものであり、以下やや繰り返しになるが中世期の考え方を含めまとめおきたい。

まず時期区分であるが、中世期をI～IV期の4つに大きく区分しておいた。I期は11世紀後葉～12世紀中葉までの時期で、Ia・b期に細分する。灰釉系陶器尾張型椀(椀I類)の登場をもって考えることにしたいが、灰釉系陶器0類の細分類を含めて系統的な変化とその分布が今後の重要な課題でもある。なお尾張型椀は現状では「百代寺窯期」の中で確実にその出現が推定できよう^{▼1}。なお現状ではI期に中心を置く集落遺跡の調査事例に乏しい。

II期は12世紀後葉～13世紀中葉までの尾張型椀の盛行期で、IIIa・b・c期に細分する。尾張型椀の最も充実した時期で、そのデザインイメージの中心を「愛智郡」の中に求めておきたい。さらに尾張平野内での集落遺跡の増加が類推できる。

III期は13世紀後葉～14世紀中葉までの時期で、瀬戸型椀B続けてさらに東濃型椀Aが主要な器種として流入してくる時期である。IIIa・b期に細分する。IV期は14世紀後葉～15世紀中葉までの東濃型椀Bを主体とする時期。施釉陶器古瀬戸後期さらに伊勢型鍋に替わって羽釜型鍋・尾張型鍋・尾張型皿といった新たな器種が消費地にて登場し、その中心的な存在となっていく。様式的にはIV期における変化は他と大きく異なるもののように考えら

▼1 例えば前川 要が分類する椀A。前川 要1984「猿投窯における灰釉陶器生産最末期の諸様相」『瀬戸市歴史民俗資料研究紀要III』

れる。なお灰釉系陶器にはさらに複雑な型式区分が必要であるが、ここではそれにいたる前提として尾張型をはじめとするやや特徴的な形態区分を先行させることにした。

■89EF区の状況

今回の調査において最も良好な形で遺構群が展開する地区は89EF区である。したがってここではやや詳細にその遺構群の変遷を概観しておきたい。遺構の在り方から大きく4つの段階に区分して考えておきたい。

4つの
段階

第1段階.....であるが、調査区北西端に存在するSD03・SD166.122に象徴されるような、斜め方向に調査区を横断する溝の掘削時期である。この方向性は、基盤地形と大きく係わっており、根本的には埋積浅谷と微高地の形成に基づいていると考えておくことができよう。出土遺物からI期に遡ることができる。建物・土坑の掘削はほとんど見られない。

第2段階.....はIIa・b期の時期であり、本格的な微高地の開発が開始される。具体的な主要遺構を上げておくと、溝ではSD151・SD154・SD110・SD106であり、ピット群A並びにBが所属し、この地区にはなんらかの建物が数度に亘って存在した可能性が高い。土坑ではSX151・SX158・SX153・SK152・SK110・SK119が存在し、土壙としては木棺墓のSK168、さらに同様な形態であったと想定できるSK170が含まれる。いずれにしても溝SD106の掘削が大きな画期であり、それは第1段階における自然地形に基づく方向性からの脱却、それを否定する様相を見せ始めている。しかし南北・東西方向への完全な規定におよばず、やや複雑な在り方を見せている。すなわちピット群Aに至る西側では比較的東西方向を意識しているものの、それ以东では既成の方向性にゆがめられる傾向が見られる。ピット群Aの存在がこうした溝の設計を歪めたとも考えられるが、他のSD151・SD109を考慮すれば、やはり既成の方向性と規格化された方向性の矛盾が具体的な遺構配置に反映されていると考えておきたい。なおSK161の存在からもIIb期には既存の方向性(自然地形による)が確実に否定されていたことは留意しておきたい。当地区としては最も遺構配置が充実した時期である。それはおおよそ13世紀前葉を中心とした時期である。

第3段階.....は溝SD120に象徴される時期で、東西・南北方向の規格性が具体的な遺構配置に直接反映され始めた。遺構としては徐々に衰退し、主要建物群はおそらく調査区東側に移ったものと考えられる。それはSK156の周辺部でのピットの掘削が当該期に所属することからも類推できよう。SD177に代表される南側の複雑な蛇行溝の掘削も、その多くがこの段階のものと考えられる。出土遺物からはIIc期に所属する。

第4段階.....はSD105およびSD109の掘削に特徴的に現われる。また調査区内ではすでに主要な建物・土坑の掘削は停止した段階で、SD105に多量の遺物の投棄が確認された時期でもある。さらにSD109のような在り方を見てみると、東西・南北方向の規制がむしろ逆に消極的な状況であり、従来の自然地形に基づく既存の方向性に回帰するような現象が見

られることは大変興味深いものである。

なおSD105での多量の遺物投棄はSD105南部での蛇行部分であり、投棄方向は西からと考えられる。第4段階は出土遺物からIIIa期に所属し、この段階をもって調査区内での遺構掘削は原則的に停止する。それはおおよそ14世紀初頭の段階と思われる。

以上のような変遷を以下のようにまとめて考えることができよう。

まず第I期において自然地形に影響された方向性が存在し(以下地形型方向性)、SD03を基本に数条の溝が掘削された。おそらくSD03に平行する道の存在が推測できよう。それは中切町から松河戸町に向かう道とも考えられる。その後のIIa期の12世紀後葉になると調査区内に建物・土坑の配置が見られるようになり、IIa・b期には複数の建物(ピット群A・B)が存在した。さらにその周りには土坑が掘削され、SX151・SX153のような鍛冶関係の遺物を共伴するものも見られる。またSK170・SK168といった土壇も確認でき、屋敷墓の様相を留めるものとも考えられる。徐々に遺構配置に東西・南北方向の方向性(以下条里型方向性)をもつものが浸透する。建物そのものの性格は推定が困難ではあるが、ピット群A周辺部では軒丸瓦・フイゴ口・鉄滓が出土しており一般集落的な建物配置を類推する必要はないと考える。さて13世紀でも中頃を過ぎるとSD120のような条里型方向性をもつ遺構配置が具体化し、同時にSD03に平行したであろう「中切ムラへの道」も廃止され、かわって南側に展開する溝群によって設定される「南の道」が存在することになる。なおこの道は条里大畦畔からおおよそ半町的位置にあり、微高地開発の基本的な機軸が明確化していることを推定させる。その後の第4段階では逆に従来の既成の地形型方向性に回帰し、溝および「南の道」も蛇行溝群による不安定性が露出する。こうした傾向は当地区での基本軸線の設定がいかに地形型に基づいているのかを如実に表わしているものと解釈でき、そこに条里型方向性の限界を見る。しかし人的な遺構配置が一度開始されると、条里型方向性がそこにレイヤーとして付加される。

地形型
条里型

なおSD105への陶磁器廃棄は、西側からの廃棄状況、未使用品、墨書表記、椀・皿のセット配置に特徴づけられよう^{▼1}。こうした投棄状況は例えば土田遺跡・阿弥陀寺遺跡にも類似する状況が認められ、そこには近似(調査区外西側)して集団的な墓域が設定されていたことを類推させるものでもある。例えば土田遺跡の方形土壇の群集化である。松河戸遺跡でもこのSD105への投棄がIIIa期とすると13世紀後葉には墓制においても変革が生じていたことを推定させるものでもある。II期～III期への変化の中に墓制の画期を含める見解^{▼2}は庄内川中流域においても容認できる見通しがたてられよう。

▼1 岡本直久1990「松河戸遺跡SD105について」『年報平成元年度』愛知県埋蔵文化財センター

▼2 赤塚次郎1897「まとめにかえて」『土田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第2集

■水田開発

全調査区全域において複数の水田耕作層を確認することができた。こうした水田耕作層の中で、特に下層とした層位での水田遺構についてまとめて考えておきたい。下層水田は大きく上位と下位に区分でき、特定の地区でしか明確化できない下位水田と異なり、上位水田はほぼ普遍的に検出できた。したがって以下特に記述しないかぎり上位水田についてまずは考えていくことにする。所属時期はおおむね14世紀後半以降であり、中世IV期の水田遺構と考えることができる。

さてまず全体を通じて前述したように共通する特徴が指摘でき、それをまとめておくと以下のようなだろう。

- 1：基本形態は「長地形」でその方向に東西・南北の明確な違いが存在する。
- 2：「長地形」水田はその内部を小区画小畦畔によって構成される（以下小区画）。
- 3：大畦畔によって囲まれた坪内では長地形方向はほぼ一定であり、検出できた範囲内では内部は10分割する（約10～12m幅）。ただし一部において坪内での方向を異にする場合も存在する。
- 4：小区画内では小畦畔沿いに方形土坑が設置されることが普遍的である。
- 5：小区画は長地形内（調査範囲内）では7～8分割が基本と考えられる。
- 6：以上を総合すると1小区画は理論的には長軸15～13mで短軸10～12mとなり、面積では平均154㎡となる。これらの数値と現実の検出遺構との対比は表V-2を参照されたいが現状ではかなり不安定であり、統一的ではない。

こうした上位水田の状況は一貫して現在の当地区に残る水田畦畔景観にも反映されている点はPL-3を参照していただければ明らかであろう。すなわち現水田景観は少なくとも14世紀後半期での上位水田設立期まで遡ることが許されよう。

地籍図

さてこうした状況を踏まえ改めてPL-3の畦畔景観を分析すると、以下の興味深い点に気づく。すなわち庄内川自然堤防ならびに氾濫原の変遷と畦畔景観が密接な関係にある点が指摘できる。それは松河戸ムラを含めた小河川・微高地・湿地といった非生産場における開発が極めて新しい段階にいたるまで原則的には耕作地となりえなかった点である。さらに沖積地内での微高地の開発、具体的には水田耕作層の形成は17世紀以降に限定できよう。それは微高地1～5での遺構の在り方を概観すれば、水田耕作層が客土層の発達によって成し遂げられている。こうした小地域大規模造成における組織的な耕作面積の増加は、例えば17世紀後半期に最盛期を迎える新田開発において始めて可能になったと考えられる。さらにその時点での水田景観は従来の条里型方向性を踏襲してはいるものの、一坪内部における長地形分割法は崩れてより細部な分割を目指したようであり、微高地の周辺部では「長地形」状の幅は比較的狭く、分割は10以上に達している。PL-3に見られる畦畔幅の大小はこうした要因に基づくものと理解できよう。より詳細な分割が見られる部分は上位水

田耕作層形成以後のものかあるいはその後の改変とまずは考えて置くこともできる。すると上位水田景観に近い形で残る部分はPL-3の中では1/3ほどになり、中世IV期での水田面積の想定に1つの手掛かりを与えることにもなる。

さて下位水田あるいは最下層水田耕作土となると、その形成はさらに限定された部分になると思われる。現状の調査成果を踏まえると特に河岸段丘付近に流れる地蔵川周辺部が注目でき、あるいはその内の一部には古代にまで遡る水田耕作土層の形成が推定できる。いずれにしても極めて限定された、特定の条件下においてのみ水田開発が実施されて行くようにも思われる。またその継続性もはなはだ懐疑的である。

ところで松河戸ムラから中切ムラへの道沿いに掘削された溝SD01 (PL-3) の在り方は留意しておく必要がある。溝SD01とは遺構番号でいう91ASD01・89IaSD01さらに91BSD01・89IaSD06を含めて考えることができる。これらの溝から出土した遺物はおおよそ3つの時期に大きく分類することが可能である。また溝の重複関係からも特定場所での複数の溝の掘削が想定できる。さて3つの時期とは、まず最も古く遡ることができる資料群として岩崎41号窯期のものがある。次に虎溪山1号窯期前後の灰釉椀類の資料があり、最後に中世Ia期とした灰釉系陶器無釉椀類が存在する。虎溪山1号窯期から中世I期へはほぼ連続した時期を認めるとすれば、おおよそ11世紀以降連続的な溝の使用・改変が加えられてきたと考えることができる。それは当地区における本格的な開発が平安時代後半期にまで確実に遡りえる資料と捉え直すこともできよう。一方で岩崎41号窯期を中心とする7世紀末葉前後の資料については、単発的なものと理解することもできようが、資料のまとまりからはむしろ、当該期におけるなんらかの開発計画を示唆するものと考えておきたい。しかしながら溝SD01の方向性はあくまで地形に影響されたものであり、そこに条里型方向性は見出しにくい。

2) 中世土器・陶器様式の動向

■ 灰釉系陶器

消費地における調査研究は近年若干の進展が認められるものの、消費地的な土器・陶器様式の研究はまだ途上にあることは否定しきれない。つまり発掘調査の増加に比例して研究がそれほど進んでいないように思われる。それは生産地での陶器研究に著しい進展が見られるように、出土遺物の多くを占める陶器の動向に左右される宿命があるようである。しかしながら例えば灰釉系陶器での型式区分は実はほとんどなされておらず、本来が多様な形式・型式が存在し、さらに系統が見られるのであるが、なぜか椀・皿1型式?という前提が暗々裡の内に出来上がってしまったように思われる。その典型的な事例が、製作技法が根本的に異なる「東濃型椀」と、常滑・猿投窯の主体を占める「尾張型椀」すら、「山茶椀」という1形式?名で呼称される点に象徴的に見られる。

山茶椀

ここでは特に特徴的な形態を留める器種についての動向を考えることにし、それに付随する形で他の器種を扱うことになる。具体的には灰釉系陶器椀と伊勢型鍋である。

これらの2者は中世期を特徴づける形式と考えられ、さらに濃尾平野に普遍的に存在する。まず灰釉系陶器椀を前述したように尾張型・瀬戸型・東濃型に大きく区分した。さらにそれらは個々2分しておいた。この程度の区分では本来不十分であるが、大きな動向を把握する点においては有効である。伊勢型鍋はA～E類までの土田遺跡での区分をそのまま採用した。

■ 松河戸遺跡での動向

中世期の時期区分にそう形で、灰釉系陶器等の遺物の在り方を概観しておきたい。ただし当遺跡では中世II～III期が主体を占めるためこの時期を中心にまとめておきたい。

中世II期.....

まず中世I期は多くの資料が尾張型椀A・Bによって占められる。灰釉陶器から無釉の灰釉系陶器への変遷がそのまま消費地における動向に反映されているようにも思われる。さて中世II期になると尾張型が最盛期を迎えるようで、他の型式は極めて希少である。しかし特に瀬戸型椀Aとした特徴的な椀が若干流入しており、尾張型椀との共伴が随所で確認できる。例えば62B区集石・89FaSK119・91ASK02等に認められ、瀬戸窯での瀬戸「第5型式」(本分類では瀬戸型椀A)との共伴と考えられる。

さらに62E区SE01出土資料のような瀬戸型椀A形態の影響が他の尾張型椀におよぼした形跡が認められるものも確認でき、生産地における系統の問題が今後の興味深い問題でもある。

さて中世IIa期～IIb期になると明らかに尾張型椀Bの圧倒的な優位性は動かし難い。つまり尾張型Bの流入が、もしくはその生産がIIb期～IIc期の消費地での動向を決定づけたとも考えられる。尾張型Bとは現状では鳴海・有松窯系統のものが中心であるようにも考えられ、常滑窯ではこの段階で尾張型B系列に基本的には変化するようである。II期は伊勢型鍋・C類が多く共伴し、B類が平野部での伊勢型鍋の普遍的な定着期に相当する。

ところでIIc期になると、口縁端部が肥厚し、明らかな面をもつものが散見できるようになる。さらに底径が5・6cmに集中するような動きがある。II期での尾張型椀の基本的な形態変化は器高の一定化に比べて、口径の著しい縮小化が特徴的であり、底径はその型式の系統性によって多様な段階から徐々に統一される方向にあると理解できよう。つまり底径の多様はすなわち形態の外郭ラインに直接結び付くのであり、表面的には系統の多様性と表裏の関係がある。

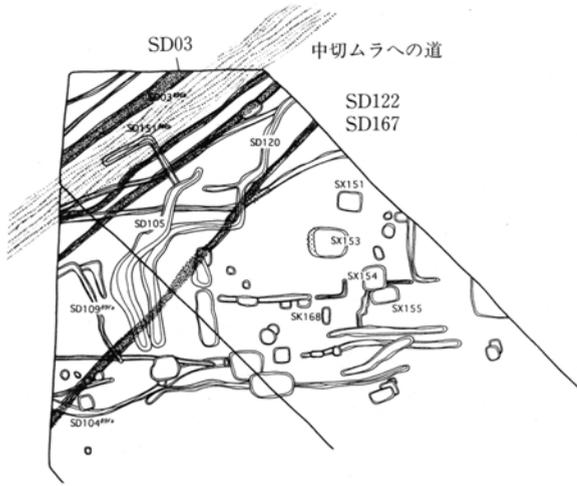
中世III期……

こうした1つの方向性が大きく崩れるのがIIIa期である。当遺跡では瀬戸型椀Bの流入が特徴的であり、それは特徴的な器壁表面と形態を備えた型式でもある。さらに瀬戸窯での生産の拡大とよく呼応するようでもある。なお瀬戸型椀Bはそれまでの慣習を破って器高の変化を基調に置いた点が重要と考えている。つまり高さの増加である。また伊勢型鍋が増加し、伊勢型鍋D～E類への変化をこの段階で考えておくことができる^{▼1}。

IIIb期になると東濃型椀Aの圧倒的な流入が開始される。その出現は消費地においては唐突であり、極めて興味深い様式的な変化である。さらに椀の大小という法量分化が見られる点も大変重要である。灰釉系陶器椀では法量分化といった概念は長く存在しなかっただけにその変化は、外部の異系統性に求めるべきであろう。伊勢型鍋は軽量薄鍋Eとなり、最も多量に普遍化する時期と思われる。

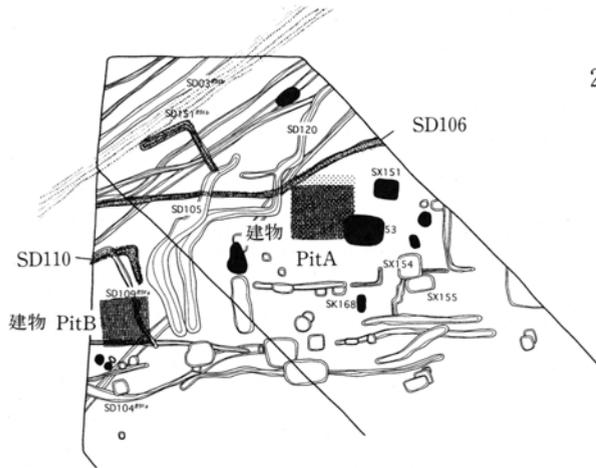
こうした状況を考えるとやはりII期とIII期の間に大きな画期を想定せざるをえないように考える。さらに13世紀後葉～14世紀前葉は様式的に激変する時期であるようにも思われ、不安定な流通環境を推定できるものかもしれない。あるいは生産地での激変・再編成が進行したとも考えられる。それは同時にそれらを管理・運営する政治的な環境の変化おも考慮に入れる必要を感じる。

▼1 伊勢裕偉1992「南伊勢系土師器の展開と中世土師工人」『研究紀要』三重県埋蔵文化財センターにおける2段階を中心とするものであろう。



1 段階
地形型方向性

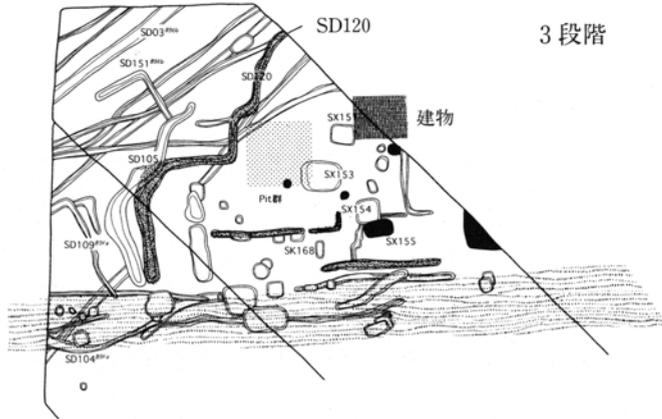
V-1 89EF区遺構変遷



2 段階



条里型方向性

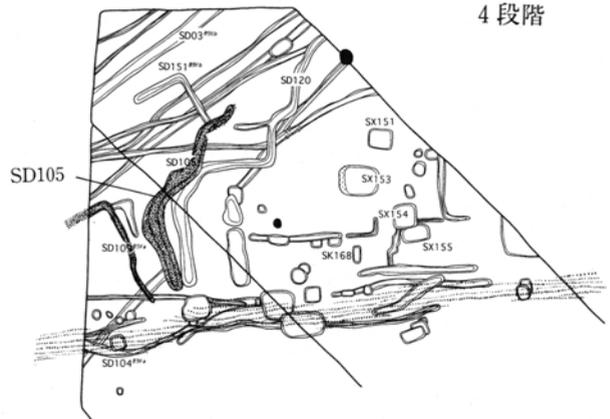


3 段階

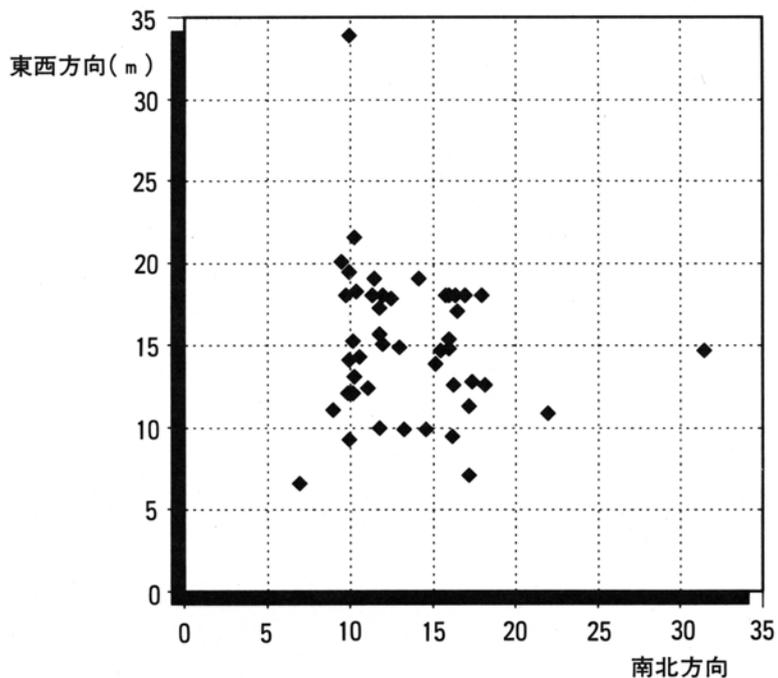


南の道

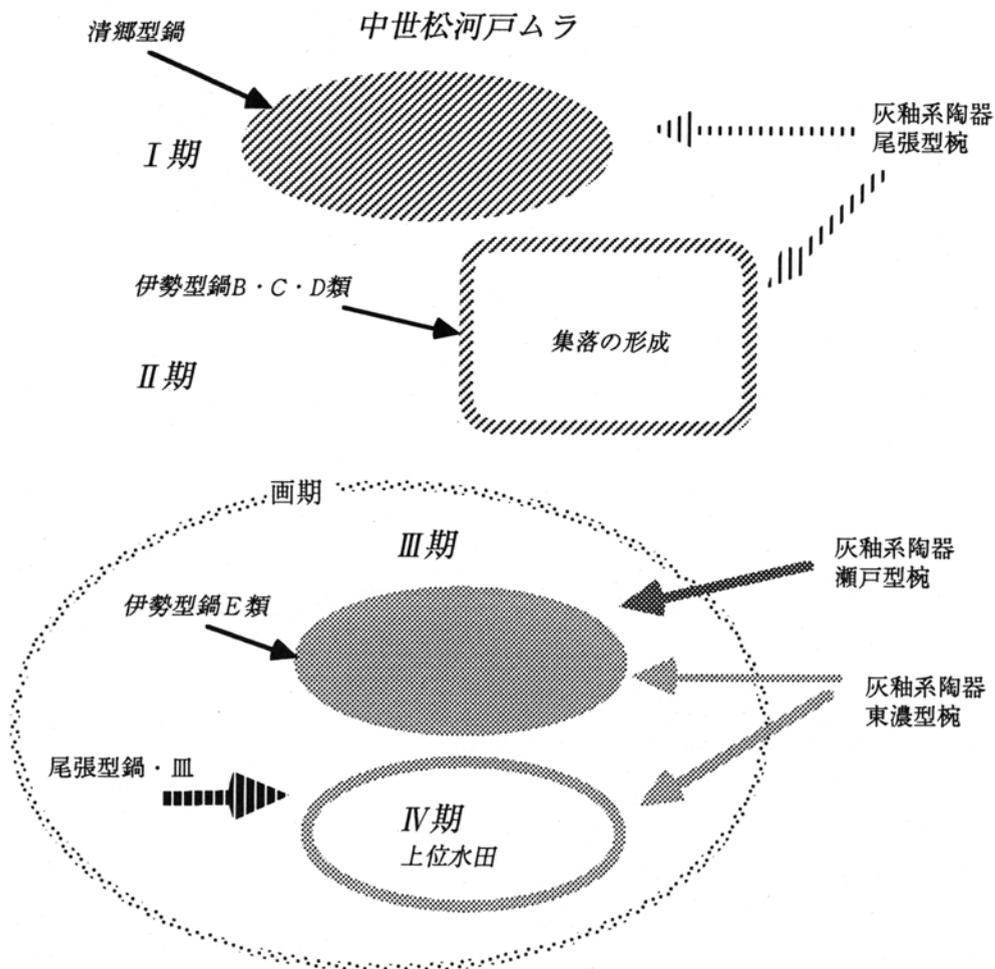
地形型方向性の回帰



4 段階



V-2 水田計測値分布



V-3 灰釉系陶器流入イメージ

付論1 松河戸様式の設定

1 はじめに

近年の濃尾平野における古墳時代土器編年研究の進展とともに、3世紀～5世紀の一括資料の提示が盛んに行なわれてきた。そのような中で1990年廻間遺跡の報告書の中で「廻間様式」を提唱し、3・4世紀のおおよその土器編年を行なってきた^{▼1}。そこでここでは廻間式土器の後続様式である「松河戸様式」を新たに設定することにしたい。

松河戸式
の提唱

松河戸式の提唱は1989年1月に大阪府豊中市で行なわれた第25回埋蔵文化財研究集会での発表要旨にはじまる^{▼2}。そこでの内容は塔之越遺跡SX01の次に西北出遺跡溝B・松河戸遺跡SK201・小田井遺跡SK01・宇田遺跡VI・VII層・勝川遺跡SX01という変遷を提示し、西北出遺跡から小田井遺跡までを「松河戸式」とし、それ以降を「宇田式」と仮称したいというものであった。なお当時まだ「廻間Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式」は設定できていない。その後若干の進展が認められたものの、基本的な変遷への批判と研究の深化はほとんど見られない。ただ加納俊介は「西北出期」と「松河戸期」との間に大きな画期を想定した。それは基本的には小型精製土器の崩壊に基づく原則論であった^{▼3}。

上条
荒新切期

ところで1968年に提示された大参義一編年では^{▼4}、「元屋敷期」の後を「石塚期」「上条期」「荒新切期」とされていたが、提示された資料そのものが考古学的に不安定なものであるという制約によって、時期の逆転・混乱が伴ない資料批判が困難である。しかしながら今日の愛知県内では「上条・荒新切期=5世紀の土器」という一般的な評価を受けているように見受けられる。

こうした点を踏まえながらここでは松河戸式を改めて設定しておきたい。しかし廻間様式や山中様式で行なったような詳細な分類案の提示に至っていない。それは以下のような資料的な制約が大きく横たわるからである。まず第1に松河戸遺跡での資料の在り方が極めて偏在的であり、さらに当遺跡は濃尾平野低地帯に所属していない。第2に全国的に布留中段階以降の編年研究が深化しておらず、形式の対比・抽出が困難である。さらに一括資料とされる基準資料が極めて少ない。こうした状況の中でここでは「松河戸式」の大枠の設定に主眼を置くことになる。

▼1 赤塚次郎1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集

▼2 赤塚次郎1989「東海」『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』第25回埋蔵文化財研究集会
赤塚次郎1991「古墳時代の時期区分と集落の動向」第91回愛知考古学談話会例会発表要旨

▼3 加納俊介1991「東海」『古墳時代の研究 6』雄山閣

▼4 大参義一1968「弥生時代から土師器へ」『名古屋大学文学部研究論集』XLVII

2 分類

器種分類の困難さはそのまま変遷・系統のあいまいさになってしまうのであるが、とりあえず現状での分類を行なっておきたい。大きく甕を4類、高杯を4類、小型丸底土器を4類、壺を5類に区分し、その他として特に鉢とX型器台を加えることができる。

甕は口縁部の形状を重視してA・B・C・Dとする。

甕

甕AはS字甕で、さらにA1・A2・A3と細分する。A1はS字甕C類としたものを一括する。A2は口縁端部が肥厚し、体部のヨコハケが欠損するS字甕D類で、A3は山陰系の口縁部をもつS字甕。甕Bは宇田型台付甕(以下宇田型甕)。次に台付甕か丸底甕かが判定できない資料が多いため、甕Cはく字口縁甕を総括する。同様に口縁部に僅かな段あるいは鈍い稜を有する有段(稜)口縁甕を甕Dとする。

高杯はA・B・C・Dに分類し、屈折脚高杯Bの変遷をその機軸にする。

高杯

高杯Aは有段高杯で、脚部は大きく緩やかな外反脚で、透孔を伴うもの。調整技法にタテミガキを多用する。その形状によってA1・A2^{▼1}に細分する。高杯Bは原則的に透孔を伴うことがなく、脚部に屈折部をもつ系統に属するものを一括する。その形状によって細分し、B1は極めて細長い脚部をもち、B2は屈折脚高杯の典型的なもので、B3は杯部が浅く大きいもの。B4は杯部に明確な垂下稜を伴うもので、B5は脚部が緩やかに広がり、やや深い杯部をもつもの。高杯Cは大型の高杯で、杯部が深く脚部は大きく八字状に広がるもの。高杯Dは碗型の杯部をもつもので基本的には後続様式(宇田式)に含まれるもの。

小型丸底系土器^{▼2}(以下小型壺)は多く散見でき、松河戸式を特徴づけるものであり、ここでは廻間Ⅲ式後半期に盛行した小型丸底土器の系統に属すると思われる一群の小型壺を抽出する。その形状によってA・B・C・Dに細分する。小型壺Aはいわゆる小型丸底土器の範疇におさまるものであるが、ここでは口径が体部径を大きく凌駕し、かつ体部が著しく小さいものを一括する。小型壺Bは口径と体部径が類似するもので、口頸部は比較的小さく直口する。小型壺Bはさらに3つに分ける。B1は口頸部が体部とほぼ同じで比較的大きいもの。B2は口頸部が逆に明確に小さいもの。B3は頸部付近に明瞭な鈍い稜をもつもの。小型壺Cは口頸部が大きく有段部をもつもので、山陰系と考えられる。小型壺Dは有段口縁をもつもので、須恵器の影響が窺えるもの。

小型壺

▼1 A2は本来高杯A1とは系統を異にするものと考えられる。しかしながらその変遷・淵源地について明確な答えを持ち合わせていないためにここでは分類を保留する。

▼2 小型丸底土器あるいは小型丸底鉢・壺と総称される一群の土器を総括する。本来は複数の系列が存在するようである。

壺は大きくA・B・C・D・Eに区分し、壺Aは広口壺、壺Bは柳ヶ坪型壺、壺Cは短頸壺。壺Dは口縁部に段ないし鈍い稜をもつものを一括し、有段口縁あるいは口縁上段部が大きく外傾するものや、複合口縁状を呈するもの等が見られるが、山陰系の影響が強いものと考えられる。壺Eは中型の直口壺で、E1は比較的短頸の外反口頸部をもつもので、E2は直口する比較的長い口頸部を有するもの。

その他、鉢は有段口縁鉢（3）の系統に属するものがわずかに初段階に残存し、その後松河戸Ⅱ式期（後述）に改めて直口鉢（83）が登場するものと考えられる。それは韓式系あるいはその影響の中で解釈できるものであろう。

3 松河戸様式の細分基準

以上の器種の変遷を機軸として以下において様式細分を行なうのであるが、前述したように特定遺跡の遺構の重複関係が極めて少ないために、変遷の基本をS字甕D類と高杯Bの型式組列によるところが大きい。

S字甕
D類

S字甕D類は古・中・新段階とした基本的な変化を濃尾平野の中で想定している^{▼1}。S字甕D類古段階はS字甕C類から変化し、口縁部端部のみが肥厚し明瞭な面をもつ。さらに体部上半のヨコハケが欠損する段階。次の中段階の資料は器壁が厚くなり、口縁部も端部の厚さに合わせて厚く均一化する。また形態は体部最大径を中位に置くもので最も長胴化するもの。新段階の資料は口縁部の特徴的な屈曲が極めて鈍くなり、全体の器壁の厚さが急速に厚くなる。宇田型甕1類と共伴することが多い。体部最大径の位置が再び上昇傾向になる。

高杯B

高杯Bは無透孔屈折脚高杯で、これまでいわゆる「畿内系高杯」と無批判に総括されたものである。高杯B2に限定して今その基本的な変化を単純化すれば、杯部の稜径の増大化が基調に存在するようである。つまり徐々に杯部稜径が大きくなり、杯部の形態が深く高い杯部から浅く大きく外傾したものへ変化していることが分かる。

こうした特徴的な器種の変化を機軸にして濃尾平野の異なる遺跡間の資料を利用してその変遷を見通してみたい。しかしその前に松河戸様式を構成する基本的な形式群とその大区分を提示しておく必要がある。

▼1 赤塚次郎1990『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集

松河戸式は以下の基本的な形式をもって構成する。すなわち甕A2（S字甕D類）・高杯B（無透孔屈折脚高杯）・小型壺B（粗製小型丸底系土器）・壺C（短頸壺）及び壺D（有段口縁壺）である。さらに技法の特徴をまとめれば調整技法が欠落し、整形手法が表面化する。たとえばケズリ整形技法^{▼1}とした板状工具によるヨコ・ナナメ方向の掻き削るものが壺・甕に散見できる。ハケメ・ミガキといった基本調整手法は特定形式を除いて客体。指による器壁表面の整形がそのまま表面化するものが多い。全体的に粗製・粗悪化が基調となる。

整形手法
の表面化

こうした特徴を機軸に松河戸式を大きくI式とII式に2分して考える。松河戸I式期はS字甕D類の時代であり、高杯B2を基本に変遷する。松河戸II式期は宇田型甕が登場し、やがて主要な形式として位置づけられるようになる。韓式系・山陰系を中心とした影響が随所に認められる。

4 松河戸I式

前半期（1・2段階）と後半期（3・4段階）に区分でき、少なくとも4段階の変遷が想定できよう。

前半期

月縄手遺跡上層資料を基準資料と考える^{▼2}。さらに月縄手遺跡SX03の在り方からSX03下層と上層資料をそれぞれ時間的な変遷を内包した松河戸I式1・2段階とする。さらに月縄手遺跡SX01・SX02資料をこれを補完する重要な資料と考える。なおその他に1段階として堀之内花ノ木遺跡SD200上層（SK161）^{▼3}、西北出遺跡溝B^{▼4}さらに2段階として八龍遺跡A地区2号住居^{▼5}を加えることができよう。

I式
1段階

1段階には甕A1（S字甕C類新段階）が残存し、甕A2（S字甕D類）古段階が登場する。月縄手遺跡SX02下層の資料がS字甕D類の最も初源的な形態と思われる。高杯は廻間III式後半期からの残存形式である高杯A1が見られるが、著しくその形態を小型化して存続する。これに高杯A2及びB1・B2が新たに加わり、特に無透孔屈折脚高杯Bの存在が印

▼1 器壁外面を整える手法のうちで調整技法ではなく、その前段階での整形技法に基づくもの。ケズリ手法においては乾燥後に改めておこなう手順をもつものが通常のケズリ手法とすると、半乾燥段階で器壁をナデるように工具を動かし器壁を直接整える目的のもの。

▼2 樋上 昇他1993『月縄手遺跡II』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第55集

▼3 蟹江吉弘他1993『堀之内花ノ木遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第52集

▼4 服部信博1990『岩倉城遺跡下層出土の古墳時代前半期の遺構と遺物』『年報 平成元年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター

▼5 杉山美雪1991『八龍遺跡A地区発掘調査報告書 各務原市教育委員会』

象的である。さらに廻間Ⅲ式後半期での高杯の激減とは対照的に、この段階で高杯の比率が相対的に急増する。なお高杯は全て外面タテミガキ調整を基本にし、脚部柱状内面は指頭ナテで整え、明らかな調整を施さないという特色が認められる。杯部は深く脚部屈折部内面も高さを保つ。高杯A 2は透孔をもち脚部端部を肥厚させる特徴がある。

小型壺はAとした小型丸底土器が残存するが、粗製化が著しく外面のミガキ調整はほとんど痕跡的。鉢さらに器台も粗製化を伴ない僅かに残存する程度となる。壺ではやはり壺A（広口壺）や壺B（柳ヶ坪型壺）が散見できるが、その他に短頸壺Cが新たに見られるようになる。器壁にはケズリ技法が表面化している。

I式
2段階

2段階になると甕A 1（S字甕C類）がほとんど認められなくなり、甕A 3とした山陰系口縁を有するS字甕は口縁の段部が大きく、さらに屈曲が鈍くなり最終段階を迎える。同時に器台・鉢類さらに柳ヶ坪型壺・広口壺もこの段階をもって消失したものと考えられる。高杯では高杯B 2類が主体的な存在となり、早くも外面タテミガキ調整が形骸化して痕跡的となる。脚柱部に顕著な膨らみが見られるものも存在する。小型壺ではA類に代わって小型壺B類が主体を占める。小型壺B類はおそらく1段階をもって新たに登場する形態と考えられるが、特にB 2類とした口頸部の低い形態がこの時期以降明らかに主体を占め、体部に張りが見られる。なお外面は指で整えるのみ。松河戸I式前半期は廻間Ⅲ式からの残存形式が急速にその姿を消し、松河戸式の基本的な型式群が定着する時期といえよう。

後半期

松河戸遺跡SK201を基準資料とするが、前述したように松河戸遺跡が濃尾平野低地部からはずれておりその内容は再検討の余地がある。さらにここでは月繩手遺跡SX03最上層資料から高蔵遺跡SH01・松河戸遺跡SK201までの変化を全て含んだ段階を想定している。本来複数の段階を包含しているものと考えるが、便宜的に高蔵遺跡SH01^{▼1}・松河戸遺跡SK201を松河戸I式3・4段階の資料にあて、平野部での資料の増加により再考したい。

I式
3・4段階

松河戸I式後半期の特徴はまず甕A 2（S字甕D類）が中段階へと変化し、他の甕類やさらに壺を含めてその多くが最も長胴化する段階である点である。さらに外面はケズリ技法が盛行し、ハケメがほとんど認められない。高杯は外面調整が欠落した高杯B 2が盛行する。また大きく浅い杯部をもつ高杯B 3が見られるようになる。小型壺はB 2類が多く、体部は最も球形に近くなる段階である。壺Dとした有段口縁壺が定量見られ、さらに有段口縁をもつ甕Dも明らかに前半期に比べて多く散見できるようになる。3段階では高杯B 2の脚部内面にケズリが見られる資料が一部にあり、4段階へとつながる。なおこの形式では4段階の高杯杯部が最も浅くなるようである。小型壺はB 1が3段階に見られるものの、4段階ではB 2が主体を占める。

▼1 重松和男他1987『高蔵遺跡発掘調査報告書』名古屋市文化財調査報告XX

5 松河戸Ⅱ式

現状では愛知県稲沢市福田遺跡出土遺物をもって考えることができる^{▼1}。特に福田遺跡SB04は松河戸Ⅱ式2段階の標識資料とすることができ、同じく福田遺跡SD01もほぼ同様な時期が中心と思われる。また松河戸遺跡SK07もこれに含めて考えることができよう。さらに重要な資料として、三重県亀山市地藏僧遺跡がある^{▼2}。地藏僧遺跡SB22及びSB44・45の一括資料は、この時期における特定遺跡での変遷を窺える良好な資料と考えられる。つまりそれぞれ松河戸Ⅱ式期1段階・2段階の変化に対応し、福田遺跡SB04の一括資料と地藏僧遺跡SB44・45は同時期の資料と推定できる。ここでは地藏僧遺跡の在り方を参考に福田遺跡を中心として松河戸Ⅱ式期の問題点を整理しておきたい。

福田遺跡
SB04

松河戸Ⅱ式期になると高杯B4・B5さらに高杯Cの参入によって高杯全体として型式が多様になる。2段階では高杯B2は著しくその脚部の形態が肥満化し、末期的な状況となり、変わってB5とした緩やかな外反する脚部が徐々に目立つようになる。さらに小型壺は大きく変化し、相対的な量を増加させるとともにさらに新たに小型壺C・Dとした山陰系・韓式系の影響が強い形態が随所に見られる。そして口縁部に鈍い稜が見られるB3とした特徴的な形態が出現して小型壺の主体を占める。なお2段階では体部の形態が偏平化するようである。さらに外面体部下半をヨコケズリするものが主体となる。また鉢C・Dとした

小型壺
B3

さて次に最も重要であり特徴的な変化をまとめておきたい。すなわち松河戸Ⅱ式期において宇田型甕が登場し、S字甕D類新段階と共伴する点である。地藏僧遺跡SB22ではS字甕D類新段階の中に宇田型甕1類が伴うが、逆にSB44・45では宇田型甕が主体を占め、S字甕D類は極少量となる。これは1段階と2段階の変化を端的に表わしているものと考えられ、福田遺跡SB04ではやはり宇田型甕1類が主体的な位置を占める。

宇田型甕

さてこのように松河戸Ⅱ式期は2段階の変遷が迎えられるようではあるが、さらに次の後続様式(宇田式)との間には若干の開きがあるようにも思われ、さらにこの間を埋める資料が推測される。今後の良好な資料の追加を待ちたい。

▼1 日野幸治1989『土田関連遺跡発掘調査報告書』土田関連遺跡発掘調査団

▼2 『地藏僧遺跡発掘調査報告』1978亀山市埋蔵文化財調査報告Ⅰ

6 松河戸様式の問題点

■廻間Ⅲ式との関係について

廻間様式と松河戸様式との関係をここでまとめておきたい。まず様式を構成する土器型式について見ておくと、廻間Ⅲ式ではS字甕C類が存在し、高杯は廻間Ⅱ式後半期において確立した外反脚を有する有段高杯を踏襲しており、器台・鉢を含め小型精製品ならびにその系譜をもつ器種が盛行している。ところが、松河戸Ⅰ式になるとこうした基本的な型式群が大きく崩れ、器種そのものが変わってしまう点が重要である。たしかにS字甕においてはC類から段階的な組列が認められS字甕D類へと変化する。がしかし他の器種においてはその多くが消失ないし激減し、替わって屈折脚高杯に代表されるまったく新たな形式が参入する。と同時に高杯の量的な比率も一気に増大する。さらに壺や小型壺にもあらたな形式(壺D・小型壺B)が存在するようになる。加えてS字甕D類に象徴されるように器壁の厚化、調整技法の著しい省略化が全体の器種にも見られ、松河戸式土器から醸しだされるカタチのイメージは、残念ながら粗雑化という悪評はまぬがれえない。

粗雑化

さて廻間Ⅲ式後半期の標識資料としている岩倉城下層資料^{▼1}と松河戸Ⅰ式前半期との様相の違いは上記のとおりであるが、廻間Ⅲ式4段階と松河戸Ⅰ式1段階の問題をさらにまとめておく必要がある。

廻間Ⅲ式4段階の資料は岩倉城下層SK1204や・宮之脇遺跡第2号住居^{▼2}が代表的なものであり、若葉通遺跡SB02^{▼3}がその内でも最も新しい様相を残す資料と考えられる。これらの土器群にはあきらかに有段高杯の存在が極めて少ない点が共通して窺い知れる。一方で松河戸Ⅰ式1段階の月繩手上層SX01あるいはSX02・3下層資料は有段高杯を残しつつ新たな屈折脚高杯が多く散見できるのであり、この点を踏まえてもそこに大きな画期が存在していることは容易に推察できよう。

■松河戸式の淵源と畿内との併行関係について

松河戸式土器に見られる新たな型式群の淵源についてであるが、従来はどちらかという屈折脚高杯を代表させて無批判に「畿内系」と一括されてきたようでもある。さらにこうした相似形態が列島の拡散することから一律に畿内政権との関係を想定する傾向が強い。しかし詳細な形態の比較や技法の検討からは、こうした結論への早急な帰結には躊躇

▼1 服部信博他1992『岩倉城遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第38集

▼2 宮腰健司1988「宮之脇遺跡第2号住居出土土器について」『古代』86号

▼3 伊藤厚史1989『若葉通遺跡』名古屋市教育委員会

せざるをえないようである。例えば屈折脚高杯の外表面タテミガキ調整は畿内にはほとんど見られないし^{▼1}、A2及びB1の形態は明らかに畿内とは異なる系譜と考えざるをえないようである。さらに壺Cや壺Dも同様であり、また小型壺Bは畿内においても突然の出現と理解できるものである。相対的に畿内あるいは東海地域への影響を与えた第3の地域を摸索する必要がある^{▼2}。

次に畿内との併行関係であるが、現状では松河戸I式期での共伴関係資料はほとんど見出だせない。しかし松河戸II式期において若干の資料が存在する。もっとも良好な資料と考えられるものは山田道第2次SD2570上層出土資料である^{▼3}。共伴する台付甕は宇田型甕1類のものである。SD2570上層資料は韓式系土器を含むものであり、その編年的位置づけが大変重要な資料と考えられる。高杯・小型壺等の形態から上ノ井手遺跡井戸下層資料^{▼4}よりは新しいものと思われ、八尾南遺跡SE21^{▼5}と近いものと考えられる。松河戸II式期は韓式系土器あるいは初源的な須恵器との共伴が想定されるこうした段階と理解できよう。また一方で廻間III式後半期のS字甕C類が平城宮下層SD6030^{▼6}で共伴関係が認められるところから、松河戸I式期はその間の時期に位置するものと見て大過なからう。因みに藤原宮内裏東外郭下層SD912にはタテミガキを施し圧縮した形態の高杯脚部が存在する。こうした布留式土器の中で盛行する特徴的なヨコミガキ調整が欠落し始めるこの段階が、おおよそ松河戸I式前半期と基本的に併行するものと考えたい。

山田道2次
SD2570

■後続様式（仮称宇田式）について

松河戸II式期に後続する土器群がどのようなものであるかについては、現状において良好な資料に恵まれていないため、不明瞭と言わざるをえない。しかしおおよその予測は断片的な資料群によって推測できる。現状では一宮市浅井第3号墳石室前方^{▼7}や一宮市同者遺跡^{▼8}の資料が仮称「宇田様式」古相に相当するものと考えておきたい。なお浅井第3号墳石室前方資料は同者遺跡内に所属しており、宇田型甕の変化からも浅井第3号墳石室前方資料が最古相の資料と考えられる。その様相は以下のような土器群によって構成される

同者遺跡

▼1 ただしこれが布留式のヨコミガキが欠損した段階であり、そのタテ方向の面取り状の調整痕との類似点を指摘することも可能でもある。

▼2 現状では明確に指摘できない。ただし山陰系の土器が目立つ点は留意したい。

▼3 西口寿生1991「山田道第2・3次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』21 奈良国立文化財研究所

▼4 木下正史・安達厚三「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60号第2巻

▼5 『八尾南遺跡』1981八尾南遺跡調査会

▼6 奈良国立文化財研究所1981『平城宮発掘調査報告X』

▼7 岩野見司他『新編一宮市史』資料編3

▼8 土本典生他1991『同者遺跡発掘調査報告書』浅井古墳発掘調査会

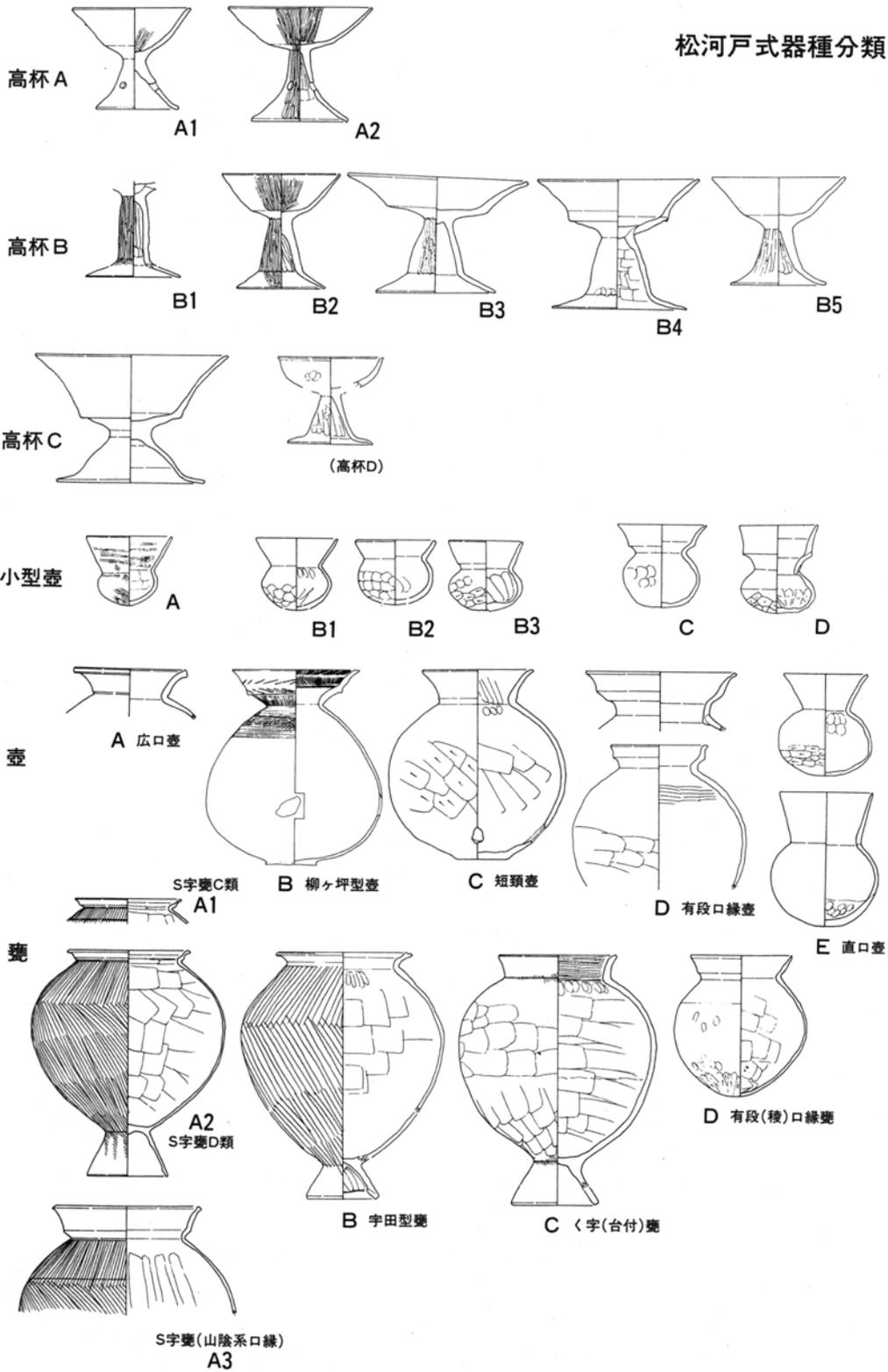
ものであろう。すなわち宇田型甕（2類）^{▼1}・椀形高杯・僅かな口縁部をもつ特徴的な鉢、さらに口縁端部を摘み上げる長胴の丸底甕が主要な型式として考えられる。これらの主要な型式は、特徴的な甕に代表されるように、韓式系の影響を受けているものと理解できるものであろう。なお共伴する須恵器は城山2号窯期を中心とするものであり、おおむねTK208型式に併行するものと考えられる。

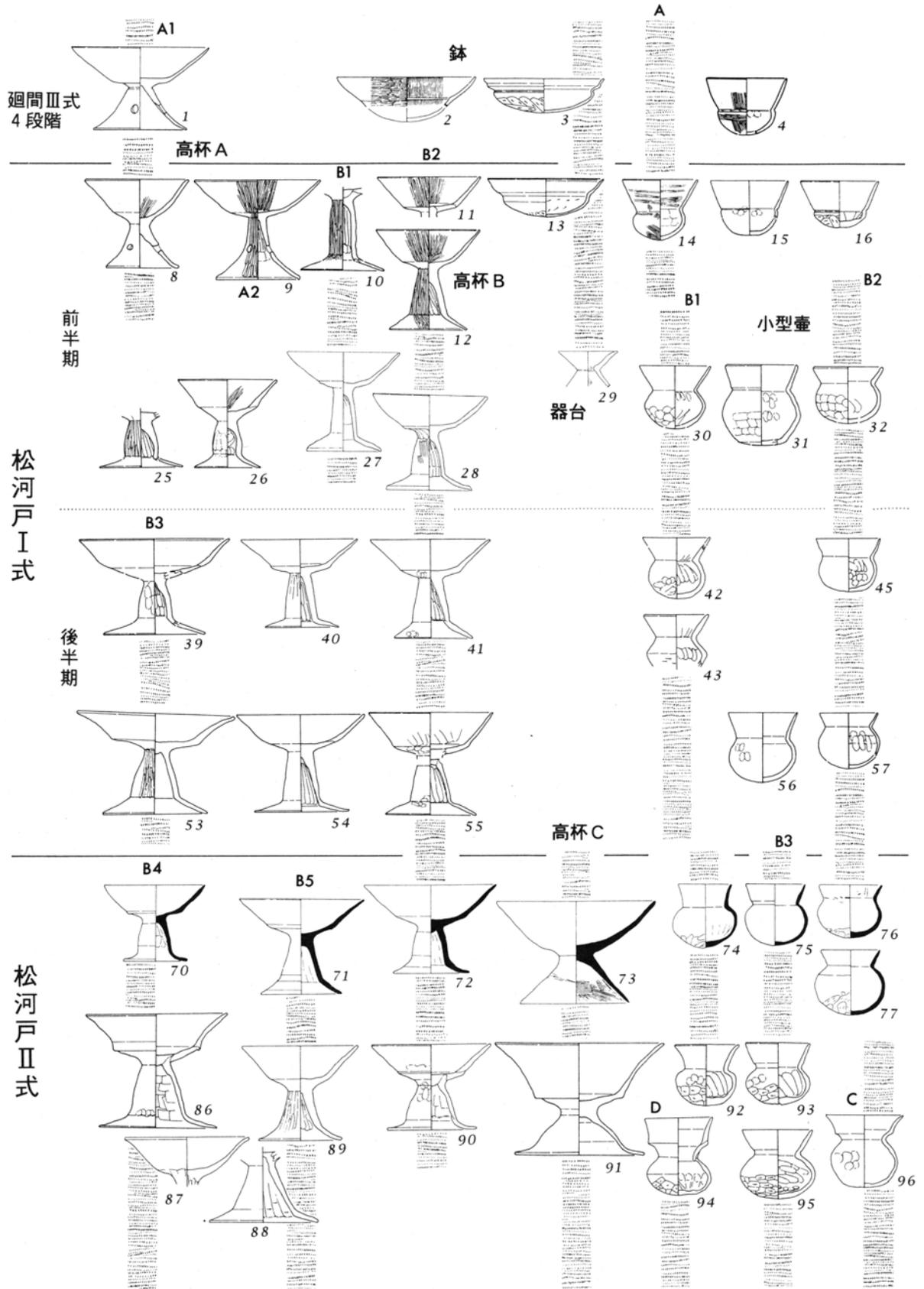
▼1 赤塚次郎「最後の台付甕」『古代』86号 早稲田大学考古学会
この中で宇田型甕の1～4段階の変遷を考えたが、ここではそれを1～4類に改める。

編年表遺跡一覧

廻間Ⅲ式 4段階	岩倉城下層SK1204...1・2・3・6 若葉通遺跡SB02...5 塔の越遺跡SX02...7
松河戸Ⅰ式	月繩手遺跡SX01...8・9・11・13・15・20 SX02下層...10・14・21・22
1段階	SX03下層...12・17・23・24 朝日遺跡...18 西北出遺跡溝B...16
2段階	月繩手遺跡SX02上層...26・30・31・32・33・36 SX03上層...25・34・38 八龍遺跡2号住...19・27・28・29・35
3段階	月繩手遺跡SX03最上層...39・44・37 高蔵遺跡SH01...40・41・42・43・45・46・47・48・49・50・51・52 朝日遺跡...69
4段階	松河戸遺跡SK201...53・54・55・56・57・58・59・60・61・62・63・64・65・66・67・68・69
松河戸Ⅱ式	
1段階	地藏僧遺跡SB22...70・71・72・73・74・75・76・77・78・79・80・81・82・83・84・85
2段階	福田遺跡SB04...87・88・89・90・92・93・95・96・98・103・106・107・108・109 福田遺跡SD01...94・97・99・100・101・102・105 松河戸遺跡SK07...86・91・104

松河戸式器種分類





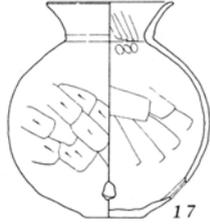
広口壺

A
[Small vertical text block]

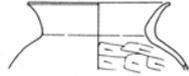


33

C 短頸壺



17



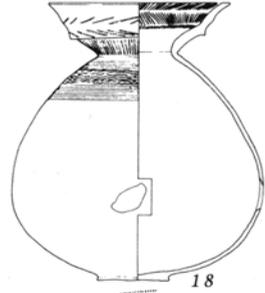
34

B

柳ヶ坪型壺



5

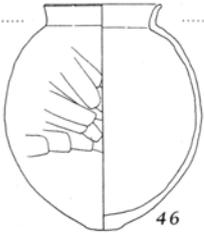


18

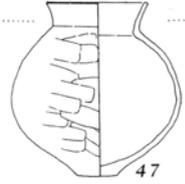
有段口縁壺

D

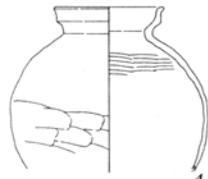
E



46



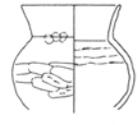
47



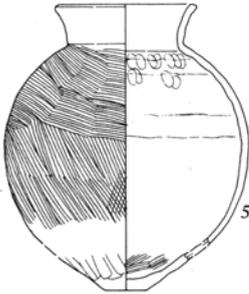
48



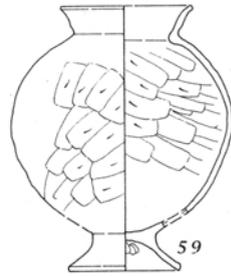
44



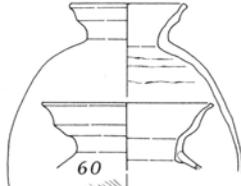
49



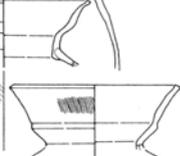
58



59

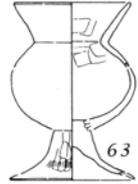


60



61

62



63



78



79



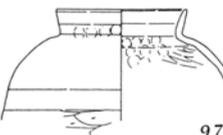
80



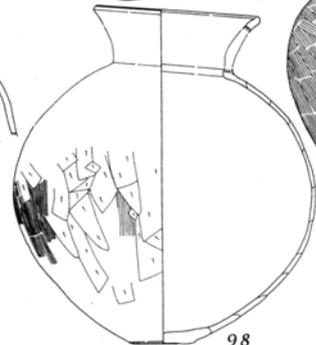
81



82



97



98

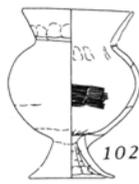


99

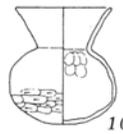
100



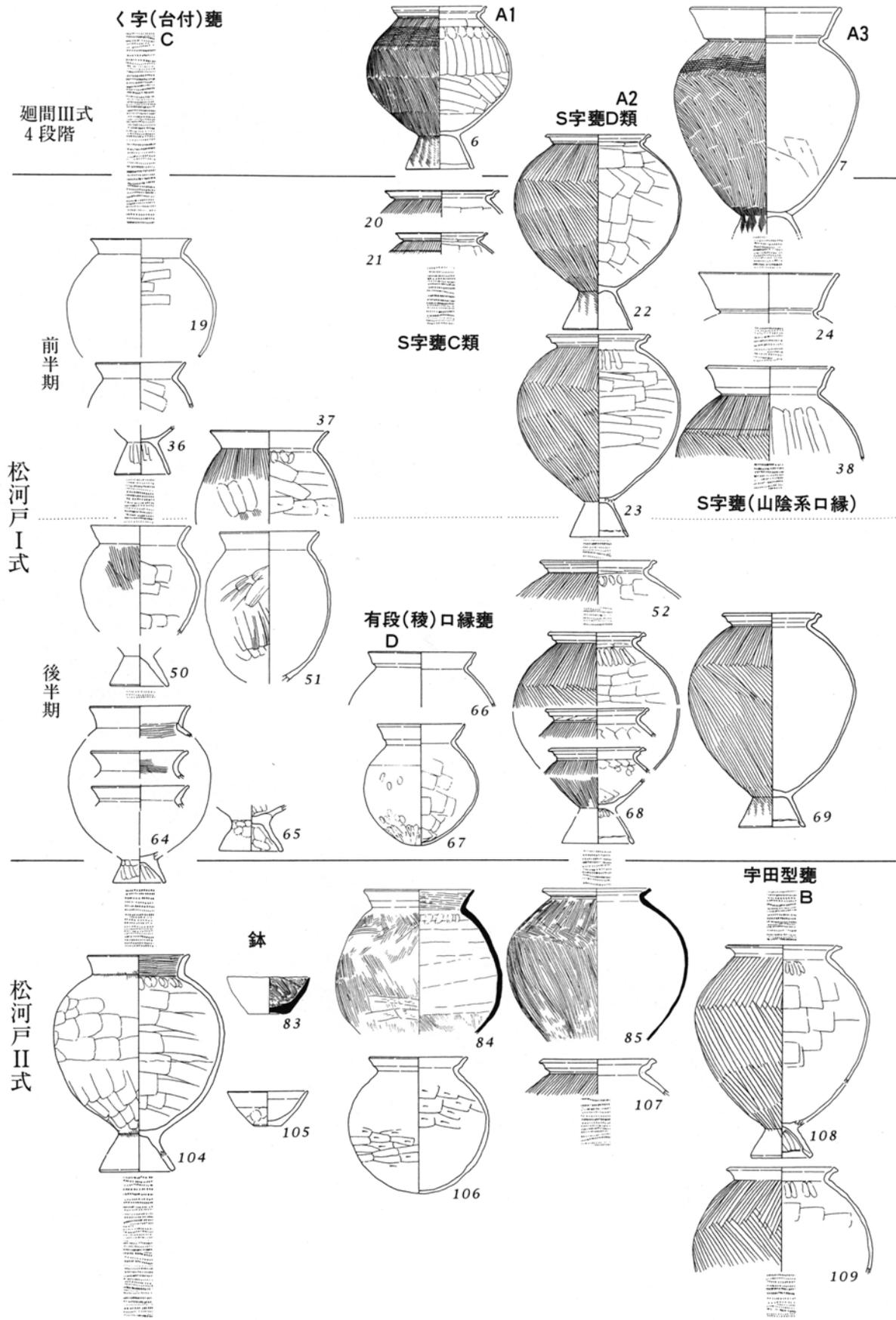
101



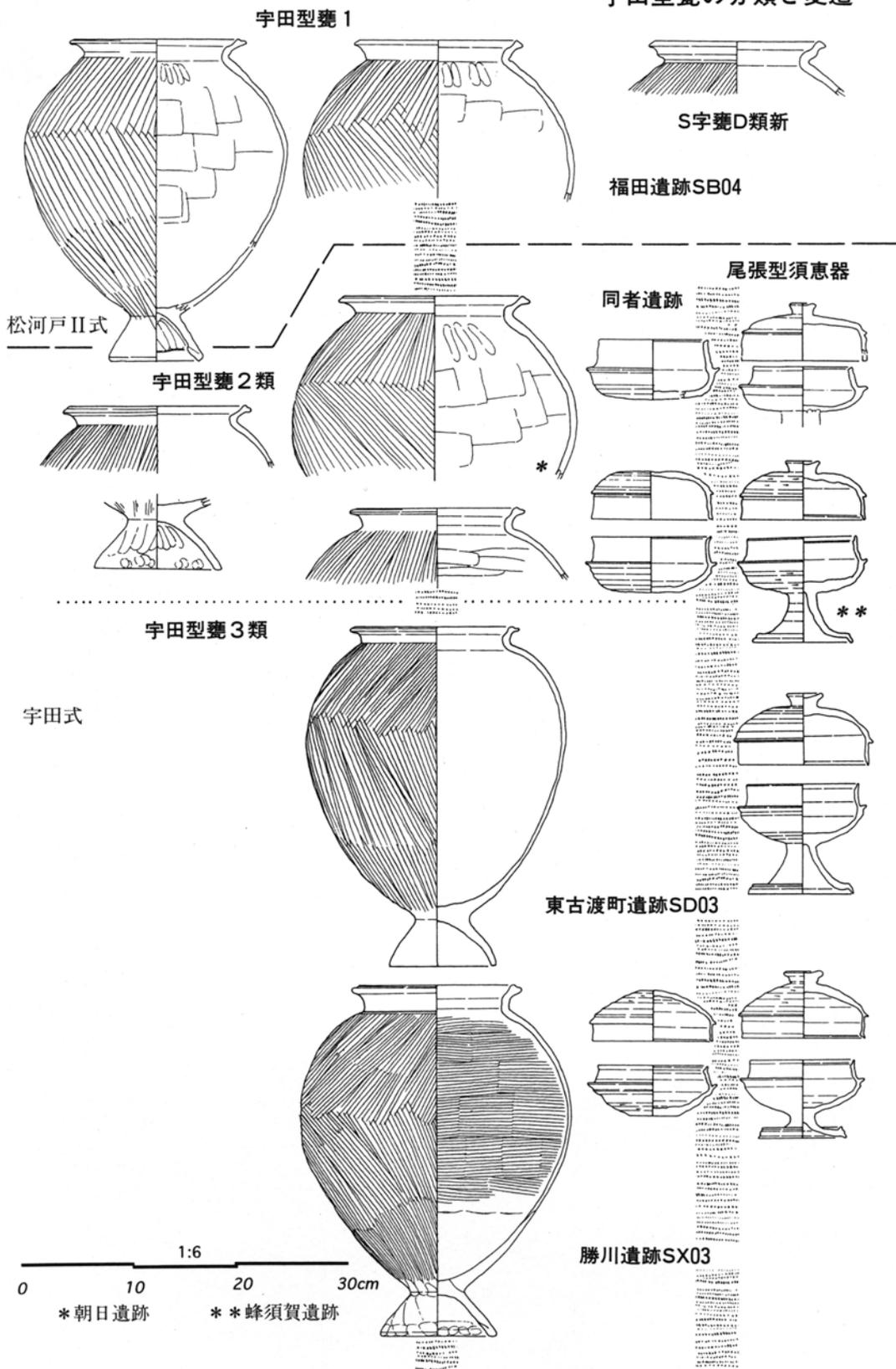
102

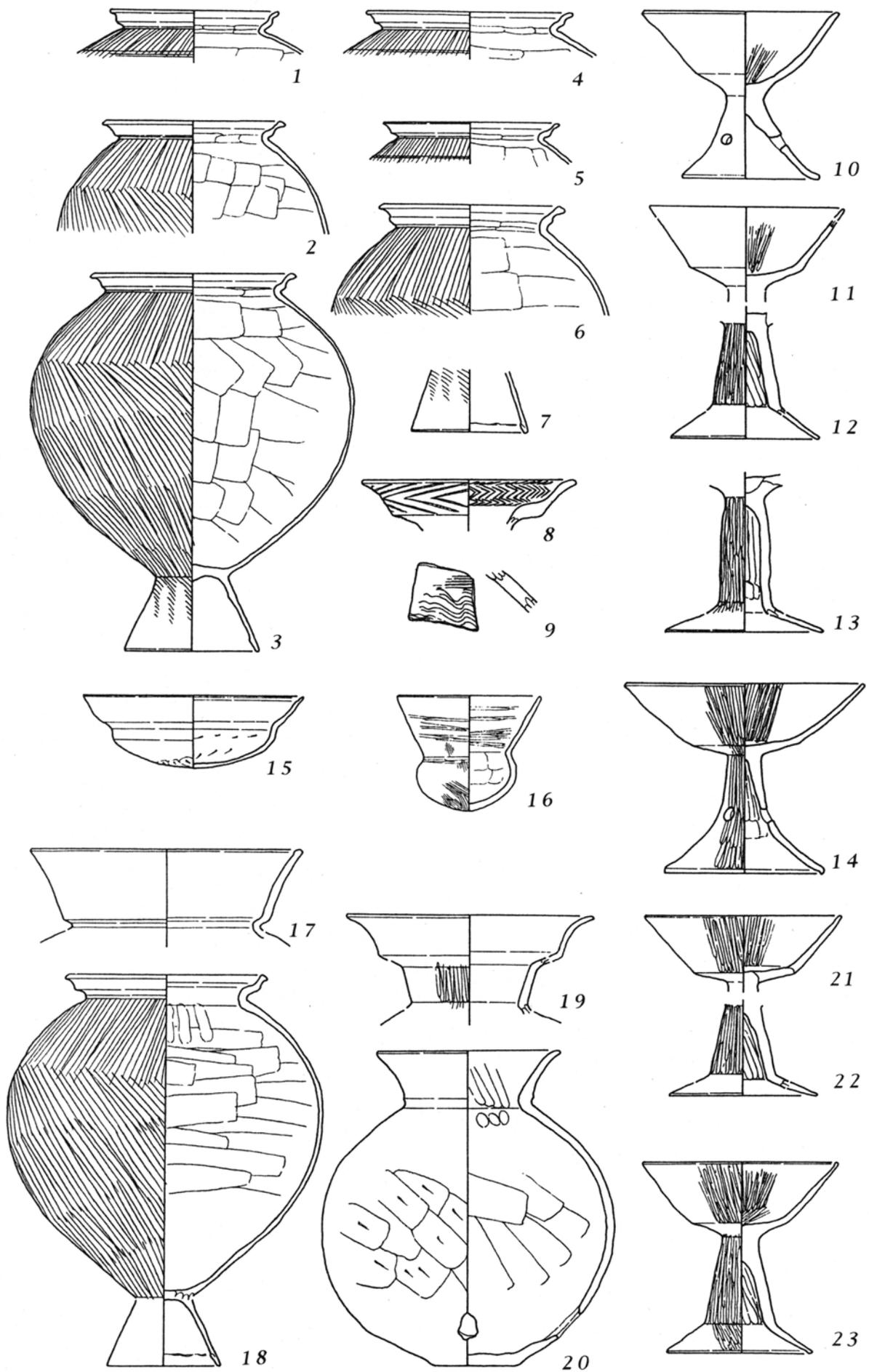


103

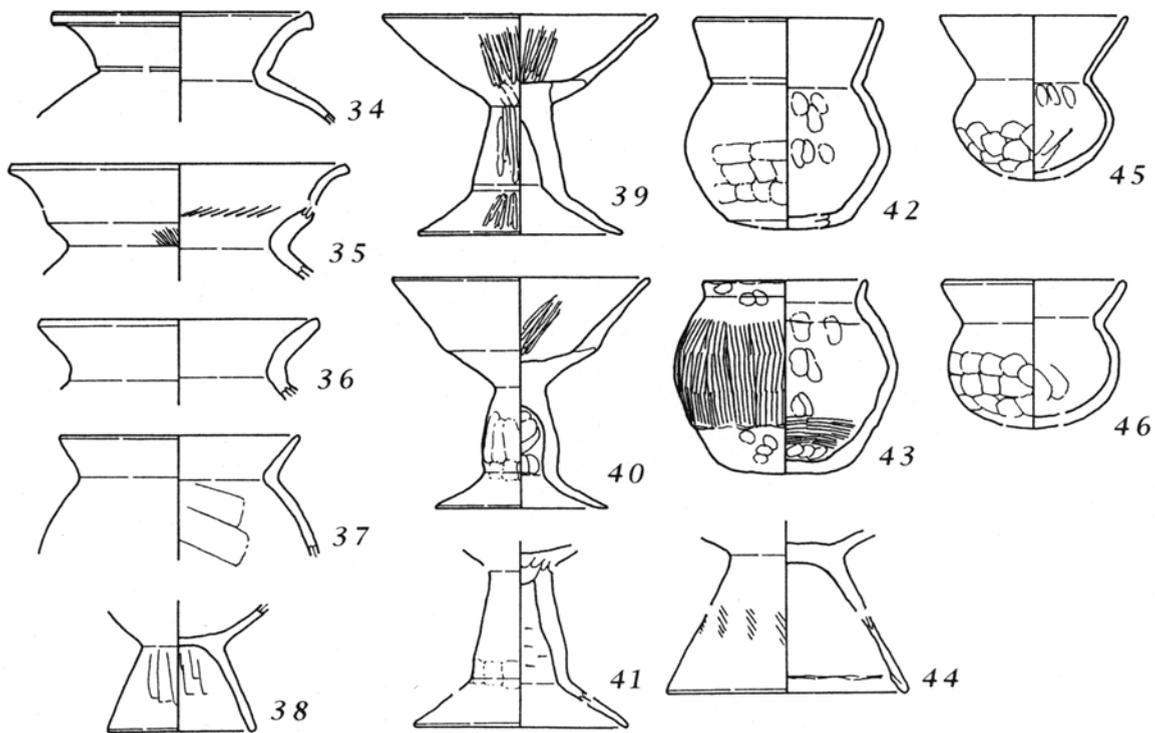
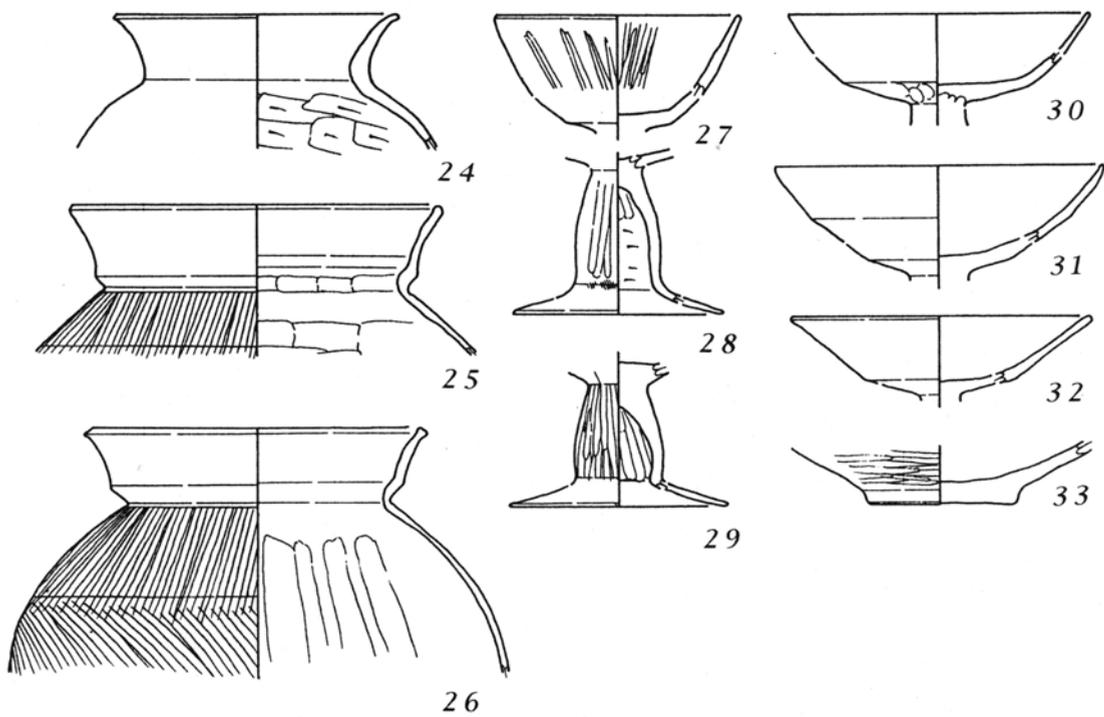


宇田型甕の分類と変遷



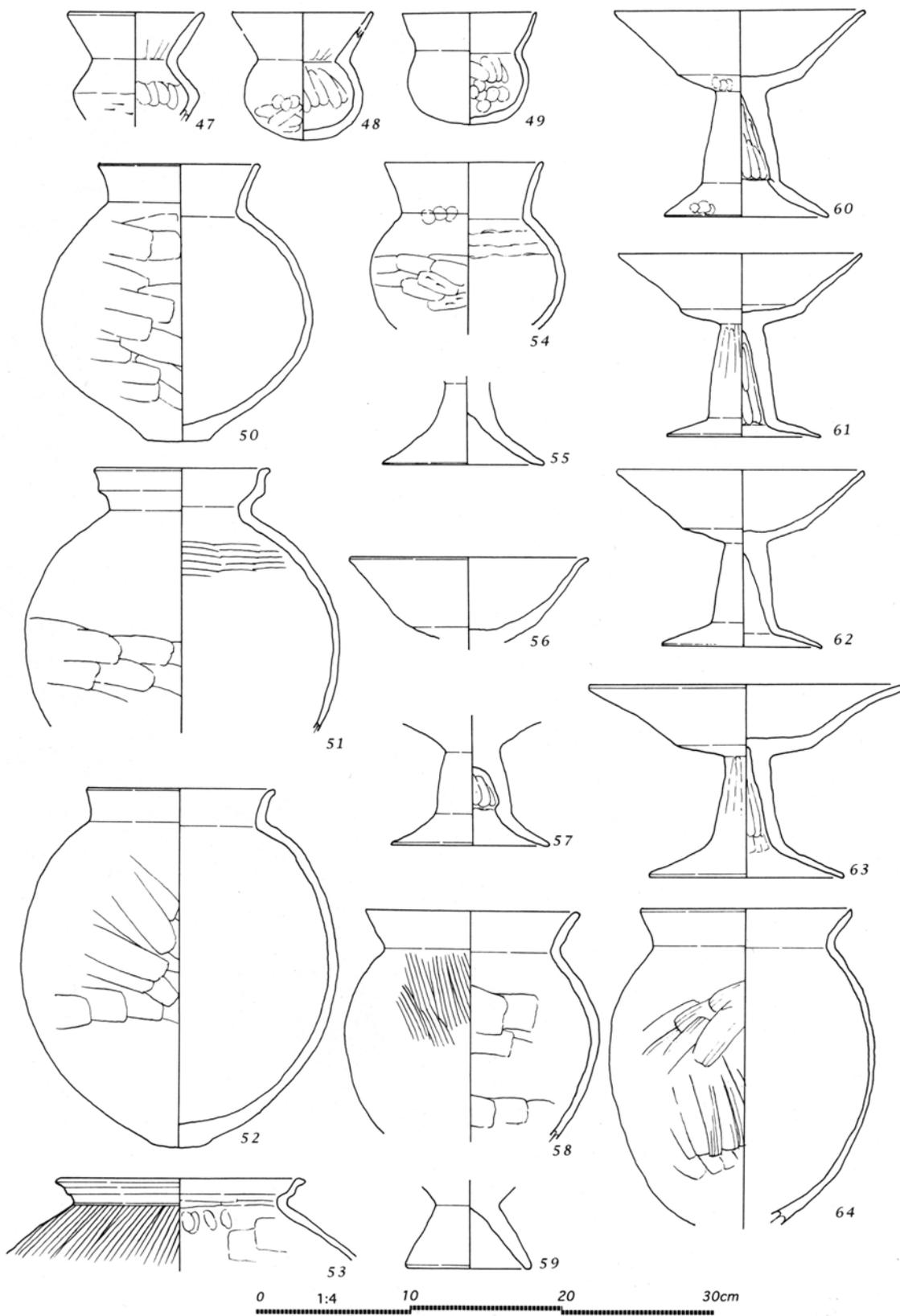


月繩手遺跡上層 1~9・11~13 : SX02下層 10・14~16 : SX01
17~23 : SX03下層

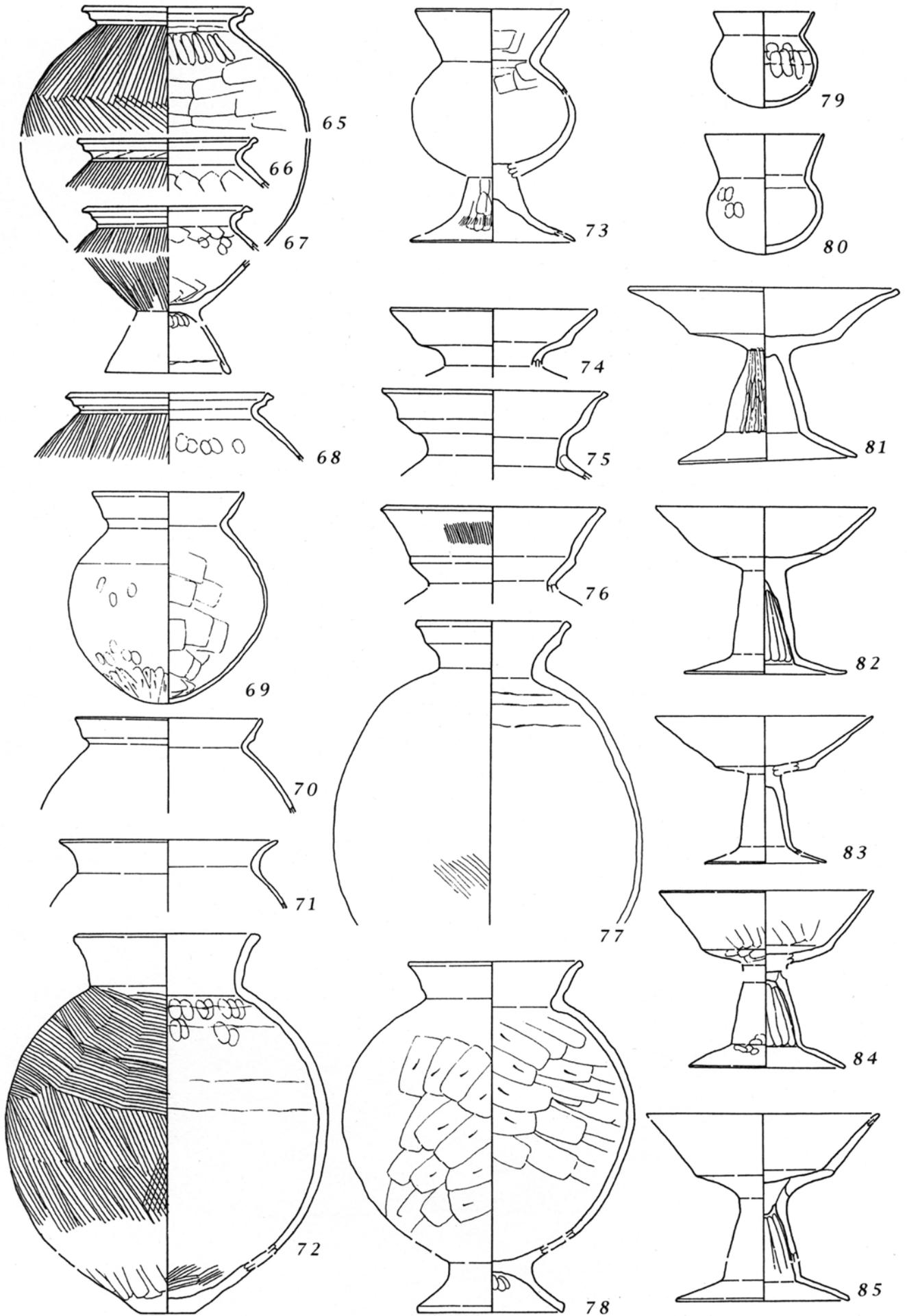


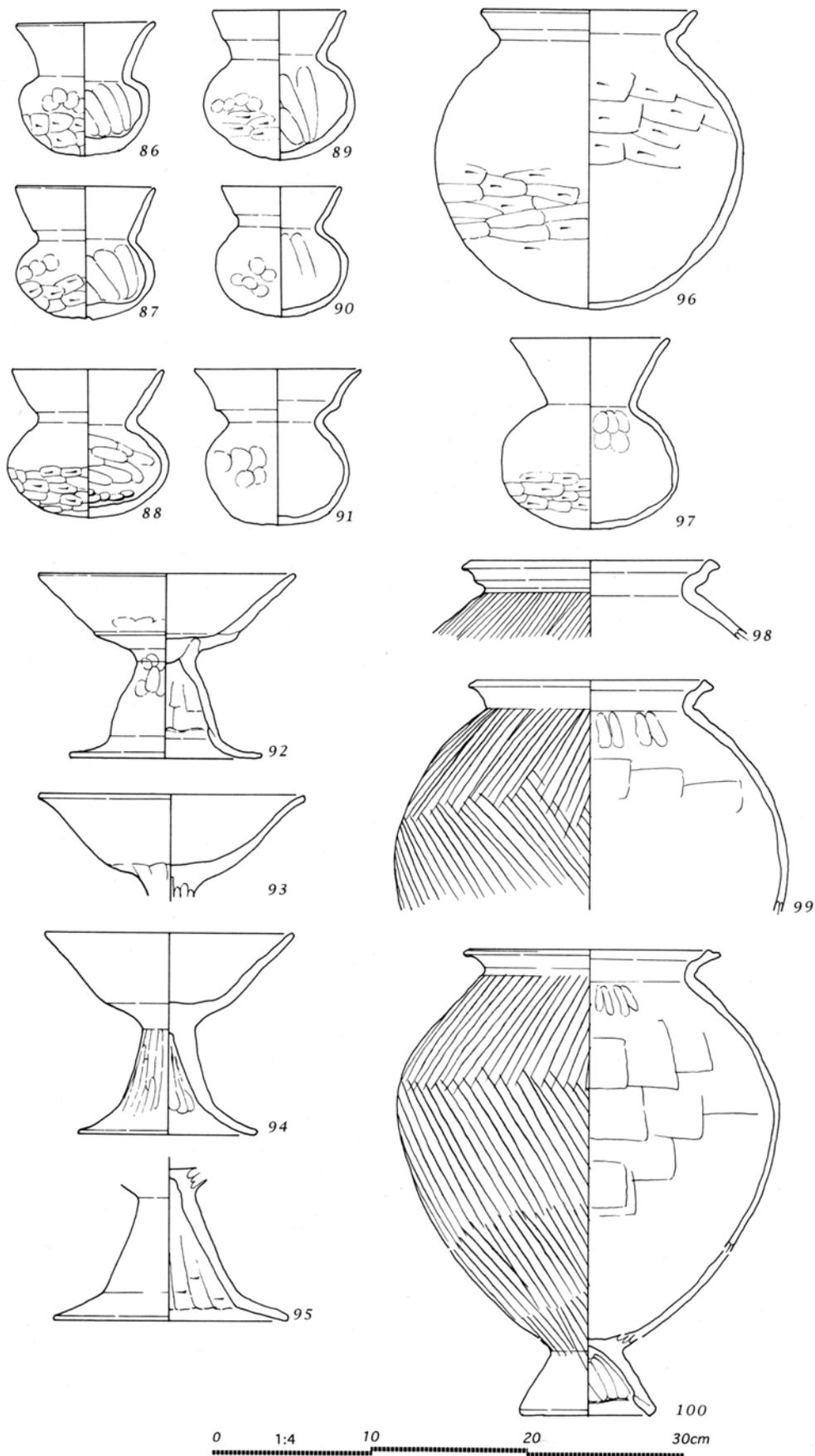
0 1:4 10 20 30cm

月繩手遺跡上層 24~33 : SX03上層 34~46 : SX02上層

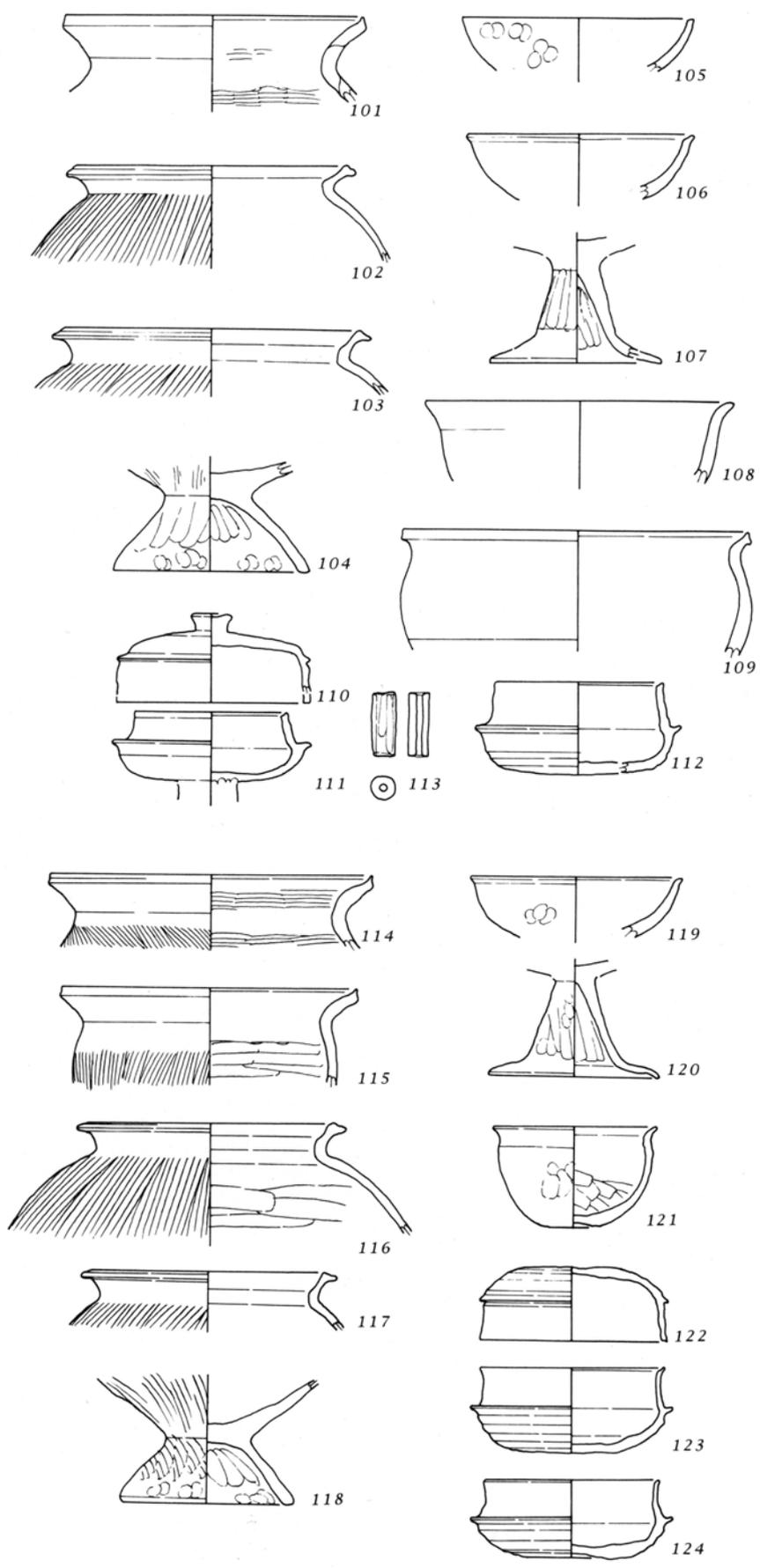


高藏遺跡SH01





福田遺跡SB04



101~113：浅井古墳第3号墳石室前方(同者遺跡)
 114~124：同者遺跡

付論2 伊勢湾沿岸地方における弥生前期の集団関係

—特に錯綜する遠賀川系土器集団をめぐって—

1) はじめに

日本列島のほぼ中央部に位置する伊勢湾沿岸地方は、遠賀川系文化が波及した東端の地である。しかし、それは三河地方以東に展開する伝統的な縄文晩期終末期文化と対峙せねばならない状況を必然的なものとした。当地方における弥生文化成立期の研究は、アプローチの方法は別として、この外来文化（弥生文化）と伝統文化（縄文文化）とが複雑に絡み合う様相を整理し、その具体像をいかに明らかにすることができるかという点に勢力が注がれてきた。また、この二つの大枠内部においても、その状況は一樣ではなく錯綜した集団関係の存在が指摘されているが、それらは小規模な調査と表採資料によって設定されたものであり、その実態の把握は困難な状況にあった。

近年、高蔵遺跡（名古屋市熱田区）、月繩手遺跡（名古屋市西区）、松河戸遺跡（春日井市）、山中遺跡（一宮市）、麻生田大橋遺跡（豊川市）、白石遺跡（豊橋市）などの発掘調査が行われ、新たな知見と良好な一括資料をもたらし、再び当該期の様相を再考する気運が盛り上がりつつある^{▼1}。ここでは、特に遠賀川系土器を主体的に使用する尾張以西の遺跡を整理し、その集団関係を探ってみたい。

2) 遺跡の分布

伊勢湾沿岸地方における遠賀川系土器出土遺跡は100遺跡を超え、近年の発掘調査の増加に伴いさらに漸増する傾向をみせている。また、納所遺跡、上箕田遺跡、朝日遺跡、西志賀遺跡など、拠点集落と考えられ、学史上著名な遺跡も数多く分布しており、質・量ともに遠賀川系文化東端の地としてふさわしい内容を備えている。

▼1 1991年に長野市で『東日本における稲作の受容』（第1回東日本埋蔵文化財研究会）、1993年には豊橋市において『突帯文土器から条痕文土器へ』（第1回東海考古学フォーラム）と題するシンポジウムが相次いで開催されている。

■伊勢湾西岸地域

伊勢湾西岸地域は、地形的には丘陵・平野が南北に細長く展開する地域であり、主要な河川がほぼ10～20km間隔で東流する。

遠賀川系土器を出土する遺跡は、概ねこれら主要河川の流域に分布し、とりわけ、上箕田遺跡、納所遺跡など弥生時代全時期を通して拠点集落となる遺跡は、河川下流域の沖積地が開け、かつ海岸部に近い地点に位置している。

中央構造線に並行して流れる南勢地方の櫛田川・宮川流域には河岸段丘がよく発達し、河川を見おろす中位段丘および洪積台地上に遺跡は立地する。しかし、拠点集落となりうるような遺跡はみられず小規模な遺跡が点在する。また、それらの遺跡は突帯文期の遺物を出土する地域とほぼオーバーラップする傾向が認められる^{▼1}。

■伊勢湾東岸地域

伊勢湾東岸地域における地形的な特徴は、木曾三川によって形成された広大な濃尾平野の存在である。弥生時代の濃尾平野は現在の大垣市近辺まで湾入していたと推定され、犬山市を頂点とした扇形状に広がっていたと考えられる。また、その東側には丘陵状の洪積台地が展開する。

遺跡の分布は、まず当時の海岸線に沿った地域とやや内陸よりの一宮市周辺 of 自然堤防上に集中する。前者は朝日遺跡・西志賀遺跡など貝塚を伴ない弥生時代全時期を通して拠点集落となる遺跡が点在し、後者には単発的な遺跡が数多く分布する。また、名古屋台地には高蔵遺跡の存在が目立つ程度で遺跡の分布は少ない。

3) 集団関係の抽出

■分析手順

東海地方において弥生文化研究の先鞭をつけられた紅村 弘氏は、当該期の土器編年を構築するにあたり、第1類「正統」遠賀川式土器、第2類「亜流」遠賀川式土器、第3類「削痕」遠賀川式土器、第4類条痕文系土器、第5類大洞式に類似するものに分類された。これは土器の系統を念頭に置いたものであり、当地方の特性を明示する有効な分類方法であろう^{▼2}。この紅村氏の分類方法を下敷きに、以下のような、伊勢湾沿岸地方における弥生文化成立期の集団関係を抽出するための分析を行なった。

▼1 奥 義次1990「三重県における凸帯文系土器出土遺跡の分布相」『Mie History』vol. 1 三重 歴史文化研究会

▼2 紅村 弘1956「愛知県における前期弥生式土器と終末期縄文式土器との関係」『古代学研究』13
紅村 弘1981「東海地方弥生文化前期の諸問題」『東海先史文化の諸問題—本文 編—補足 改訂版

具体的な集団関係を想定するためには、基本的にはすべての遺跡の資料に当たらねばならないが、実際のところ各遺跡間で遺物の出土量に差があり、同レベルで遺跡を検討するにはかなりの無理がともなう。幸いながら伊勢湾沿岸地方は、当該期の遺跡の発掘調査が進み、各地域内における主要遺跡が判明している。そしてこれらの遺跡からは一定量の遺物が出土し、地域間の差異をある程度反映していると考えられる。そこで発掘調査がなされた遺跡の報告書記載の資料を、A：正統遠賀川系土器、B：亜流遠賀川系土器、C：削痕系土器、D：条痕文系土器、E：その他の系統の土器（大地形、浮線渦巻文など）に分け、特に壺・甕を中心に、口縁部および体部の点数をカウントし、分析資料の総点数に対する割合で各遺構別および報告書掲載資料全体のレーダーチャートを作成し、各遺跡別の特徴を抽出した^{▼1}。ただし底部に関しては正統・亜流の区別が困難なため分析対象からはずした。同様に条痕文系に関しても底部はカウントしなかった。

分析対象とした遺跡は、次の通りである。尾張…山中遺跡・元屋敷遺跡・朝日遺跡（貝殻山貝塚地点・56B区）・月縄手遺跡・松河戸遺跡・高蔵遺跡、伊勢…永井遺跡・上箕田遺跡・納所遺跡・金剛坂遺跡である。

■遺跡別の傾向

金剛坂遺跡 三重県多気郡明和町

金剛坂遺跡は、中央構造線に沿って東流する櫛田川左岸の段丘上に位置する遺跡であり、いわゆる亜流遠賀川系土器を多量に出土する遺跡として著名である。1970・1989年の2回にわたる発掘調査の結果、I-3から4期^{▼2}を中心とした土器が出土しているが、遺構に伴う資料は少ない。全体の約9割近くが遠賀川系土器であり、条痕文系土器は1割にもみえない。また、遠賀川系は、従来から指摘されているように亜流遠賀川系土器の占める割合が他遺跡に比して高い。

納所遺跡 三重県津市納所町

納所遺跡は、津市の北方を流れる安濃川左岸に位置する伊勢湾西岸地域最大の拠点集落である。1973～75年にかけて発掘調査が行われた。当該期の資料は他遺跡に比して豊富であり、I-1～4期にわたる資料が検出されている。しかし、報告書記載の資料は極一部であり、各時期における傾向はつかめないため、報告書に掲載されている壺・甕の文様構成表から類推して全体の傾向を把握した。金剛坂遺跡と同様に遠賀川系の比率が高く、な

▼1 報告書掲載の資料が全てではないし、また報告書の掲載にあたって恣意的な面が排除されているかどうかは判断できない。しかし、現状で我々が検討することができる資料は報告書によらねばならず、今回は敢えて報告書掲載資料に限って分析を実施した。

▼2 遺跡の時期比定に関しては、石黒立人1992「尾張地方を中心とした弥生時代前期の諸相—遠賀川系土器」『山中遺跡』の編年観によった。

かでも亜流の占める割合が高いのが特徴的であり、条痕文系は1割にもみえない。しかし、報告書によれば遠賀川系土器進出段階（I-1～2期か）には亜流がみられないという記述があり、それが事実とすると、初期段階は上箕田遺跡、永井遺跡と同様な傾向を示していたのかもしれない。時間の変遷とともに傾向は変化している可能性が高い^{▼1}。

上箕田遺跡 三重県鈴鹿市箕田町

上箕田遺跡は、鈴鹿川右岸の標高5m程度の自然堤防上に位置する遺跡であり、1960・1968～69年の2回にわたる発掘調査が実施され、納所遺跡と同様に拠点集落に相応しい遺構・遺物が検出されている。当該期の資料も充実しており、I-1～3期に相当する資料が出土しているが、残念ながら遺構に伴う資料はみられない。全体的な傾向としては、遠賀川系土器のみで占められ、条痕文系は認められない。また、遠賀川系土器は正統タイプが主流であり、金剛坂・納所遺跡で顕著であった亜流タイプは極端に少ない。

永井遺跡 三重県四日市市尾平町

永井遺跡は、三滝川が形成した沖積地を望む標高20～30m程の台地南端部に集落を形成した遺跡である。1972年に発掘調査が実施され、複数の環濠が巡らされた集落の様相が明らかにされている。遺構出土の資料も多く、概ねSD1・2→SD3・4→SD5・6の順に環濠が掘削されたと想定され、時期的にはI-2・3期前半→I-3期後半→I-3後半・4期に相当すると考えられる。各遺構ごとの傾向としては、I-3期後半以降に亜流・条痕文系土器がやや増加する傾向が認められるが、各時期ともに正統タイプが主流をなし、他の系統の占める割合は少ない。

高蔵遺跡 名古屋市熱田区高蔵町

高蔵遺跡は、名古屋市を南北に半島状に貫く熱田台地の東端部に位置する。調査の歴史は古く学史上著名な遺跡であるが、当該期の良好な資料は、1981・1985年の名古屋市教育委員会による発掘調査で出土しており、永井遺跡と同様に複数の環濠が巡る集落の様相が判明してきている。ここでは1985年の調査で検出されたI-3期に比定できるSD03出土資料を中心にその傾向をつかんだ。概ね正統タイプの遠賀川系土器が主流であり、条痕文系土器がやや増加する傾向が認められるが、亜流タイプの比率は少ない。

朝日遺跡 愛知県西春日井郡清洲町他

朝日遺跡は、標高2m以下の沖積地に立地する伊勢湾沿岸地方屈指の大集落である。弥生時代前期の土器が出土する地点は遺跡の南西部に位置する貝殻山貝塚地点や二反地貝塚地点など広範囲にわたる可能性が考えられるが、点的な調査が多く当該期の集落の様相については判然としない。ここでは、発掘調査によってある程度の概要を知ることのできる

▼1 調査を担当された伊藤久嗣氏によれば、遺物の出土状況から、遠賀川系土器に進出段階には亜流はみられないという。伊藤久嗣1980『納所遺跡—遺構と遺物—』三重県教育委員会

貝殻山貝塚地点（1971年調査）と愛知県教育サービスセンターによる56B区（1981年調査）出土資料を用いて遺跡の傾向を把握した。

貝殻山貝塚出土資料は、I-1～3期に比定できる資料であり、9割以上が正統タイプの遠賀川系土器で占められ、北勢地方の上箕田遺跡、永井遺跡など同様の傾向を示す。対して56B区出土資料は、貝殻山貝塚出土資料よりは若干新しい様相が看取できI-3・4期に比定される。その土器群からみられる傾向は、貝殻山貝塚でみられた様相とは対称的といえるほど異なっており、条痕文系土器が約5割を占め、正統タイプの比率が極端に減少する。垂流・削痕系は少数ながら存在する。

月縄手遺跡 名古屋市西区比良

月縄手遺跡は、庄内川右岸の自然堤防上に立地する遺跡であり、1987・1993年の調査によって、I-2・3期前半に属する小規模な環濠集落の様相が明らかにされた。出土資料は豊富であり、全体的に正統タイプの遠賀川系土器の占める割合が高く、高蔵遺跡など同様の傾向を示す。しかし、他遺跡では少ない外面ヘラ削り調整の甕、いわゆる削痕系の比率が高く特徴的である。また、垂流および条痕文系土器も若干みられるが客体的な存在である。

松河戸遺跡 愛知県春日井市松河戸町

松河戸遺跡は、庄内川右岸の標高15m前後の沖積地に立地する遺跡である。遺跡の詳細は第II章の遺構および遺物編に譲るが、半円形に広がる小規模な環濠集落が明らかにされている。出土土器は概ねI-3・4期に比定される。全体的に正統タイプの遠賀川系土器の占める割合が高く、条痕文系土器がやや増加する状況がうかがえる。高蔵遺跡と同様の傾向が認められる。

山中遺跡 愛知県一宮市萩原町

山中遺跡は、尾張北西部の木曾川によって形成された標高5m前後の沖積地に立地する。尾張地方における弥生時代後期の土器編年上のタイプ・サイトとして学史上著名であるが、1980・1991年の発掘調査によって、環濠、住居、方形周溝墓など弥生時代前期の集落構造を考究するうえで重要な成果をもたらした。出土土器は、概ねI-3後半から4期に比定されるものであり、全体的に遠賀川系土器の占める割合が高いが、条痕文系土器も4割近い比率で存在する。特徴的なのは垂流タイプの多さであり、とりわけ煮沸具の9割以上が垂流タイプで占められる。

元屋敷遺跡 愛知県一宮市丹陽町

元屋敷遺跡は、五条川右岸の標高5m程の沖積地に立地する。1961年の発掘調査によって古墳時代初頭の土器群（いわゆる元屋敷式土器のタイプ・サイト）とともに大量の弥生時代前期の土器が出土したが、明瞭な遺構は検出されなかった。出土資料は、概ねI-3期前半代に比定できるものである。全体的には正統タイプの遠賀川系土器が主流であるが、

条痕文系土器も一定量存在する。この遺跡の特徴は、かつて紅村 弘氏が指摘されたように、煮沸具における削痕系土器の占める割合の高い点にあり、全体の2割以上の比率を占める。

4) 伊勢湾沿岸地方における弥生前期の集団関係

■集団の設定

前節で分析結果を示した遺跡は各地域の主要遺跡と考えられ、これらの遺跡が示す傾向は当然周辺地域の様相を色濃く反映しているものと考えられる。これを外来の土器文化である遠賀川系土器の受入状況より分類するとP113図のような地域に区分することができるであろう。

A型

北勢地方から尾張南西部・名古屋台地に至る地域 正統遠賀川系土器が壺・甕ともに主体をなす地域であるが、尾張地方では遺跡によってやや様相が異なる。

B型

2つの地域に分類できる。

B1：壺・甕ともに亜流遠賀川が主体を占める地域 伊勢中・南勢地方を中心とした地域

B2：正統遠賀川系土器が主体であるが、煮沸具に関しては亜流・削痕系土器を使用する地域 尾張北西部を中心とした地域

C型

条痕文系土器が主体をなす地域 三河地方以東の地域

以上のように共通する土器要素を持った3つの地域を当該期における伊勢湾沿岸地方の基本的な集団関係の枠組として設定できるであろう。

■若干の問題

伊勢湾沿岸地方に分布する弥生前期の集団のうち、遠賀川系土器集団に関してはAおよびB型が相当するが、この兩類型を中心に、1：空間的な問題と集団の成立、2：地域と時間的な差異、3：集団関係の展開と崩壊についての3点にしぼり、若干の問題を考えてみたい。

▼¹ この存在については、細部で若干異なるが、かつて紅村 弘氏が、津島型遠賀川式土器、亜流遠賀川式(金剛坂式土器)、削痕遠賀川式が主体的に分布する地域に、また、高橋信明氏が尾張地方の遺跡を弥生A型、弥生B型に整理された状況とほぼ対応する結果となった。

1：空間的な問題と集団の成立

遠賀川系土器集団の分布状況は、P113図に明らかなように、A型地域を挟んでB型の遺跡群が展開する状況を読み取ることができる。これを前代の縄文晩期突帯文土器の分布状況と重ね合わせれば、従来から指摘されているように、ほぼA型地域は空白域に、B型地域は突帯文系土器の分布域にオーバーラップする。これは、B型地域の主要な基盤が伝統的な縄文晩期文化のなかで培われたことを示し、対してA型地域は、伝統的な観念に縛られることなく、新たな文化を吸収しやすい地域であったと想定することができるであろう。

遠賀川系文化の伊勢湾沿岸地域への波及に関しては、様々なルート論が展開されているが、一元的なルート論のみでは捉えられない錯綜した状況が複数の集団関係の存在から推定される。石黒立人氏は、この遠賀川文化の波及について第1段階－遠賀川系集団の点的な進出および拠点集落の形成、第2段階－第1段階の遺跡を核とした線・面的な拡大という段階的な進出を考えている^{▼1}。

伊勢湾沿岸地方における当該期の拠点集落は、中之庄遺跡、納所遺跡、上箕田遺跡、朝日遺跡、西志賀遺跡などがあるが、いずれもA型地域に属する。B型地域には現状では単発的な集落のみが存在し、時間的にみてもこれらの遺跡はA型の拠点集落より後出して登場するようである。また、B型地域に広く分布する亜流遠賀川系土器、削痕系土器は在地の縄文晩期突帯文土器が遠賀川系文化の流入により成立した変換類型^{▼2}であり、当然時間的には正統タイプの遠賀川系土器より後出するはずである。

以上の点を石黒氏の説をかりてまとめれば、第1段階－A型地域にアットランダムな形で拠点集落が形成される。第2段階－A型地域の拠点集落から相乗的な新文化のB型地域への波及と単発的な遺跡群の誕生という図式が考えられる。つまり文化レベルとして優位にたつA型地域・集団の成立が、伝統的な観念に縛られた周辺地域内部に変換的变化を引き起こし、個性的な土器を創出するB型地域・集団を誕生させたと推定されるのではないだろうか。

2：地域と時間的な差異

伊勢湾沿岸地域の弥生時代前期の遠賀川系土器集団は、先に記したように大きく3つの類型の存在を指摘できる。しかし、P113図に示したレーダーチャートには大まかな傾向の類似性はあっても、若干の差異を見いだすことができ、それは地域的および時間的な問題が大きく関わってくると考えられる。

A型における上箕田遺跡・永井遺跡と尾張南勢部に位置する月縄手遺跡・高蔵遺跡・松

▼1 石黒立人1986「弥生社会の成立と解体の理解に向けて－1」『考古学の広場』3

▼2 服部信博1992「尾張地方を中心とした弥生時代前期の諸相－亜流について」『山中遺跡』

河戸遺跡の状況は、ともに正統遠賀川系土器を主体とする遺跡でありながらも、後者の遺跡は一定量の他系統の土器が出土している。これらの遺跡は概ね他系統の土器を出土する地域と接しており、地域的な交流の結果と考えられよう。

B1型における金剛坂遺跡の分析結果は、納所遺跡とほぼ同様の傾向をみせ、近接した時間幅（I-3から4期）を両遺跡に与えることができよう。しかし、納所遺跡における各時期別の傾向が不明であるが、先述したように遠賀川系土器進出段階には亜流はみられないという状況からみれば、納所遺跡においてはI-3期以降急激に亜流が増加したことになる。単なる地域的な交流だけの問題であろうか。

B2型における山中遺跡・元屋敷遺跡の状況は、煮沸具のみを前者は亜流、後者は削痕系を主に使用する傾向が認められた。この近接した地域内に存在する両遺跡の差異は、削痕系が概ねI-3期には消滅するという時間的な問題が大きいのであろう。

3：集団関係の展開と崩壊

伊勢湾沿岸地方に成立した複数の遠賀川系集団は、どのような展開をみせるのであろうか。

A型における遺跡群の動向は、沖積地に立地する納所遺跡、上箕田遺跡、朝日遺跡、西志賀遺跡などは集落を拡大させながら順調に拠点集落として次代の中期にまで継続する。しかし、台地上に環濠集落をつくりあげた永井遺跡、高蔵遺跡などは現状の資料をみる限り中期にまでは継続しない。

一方、B型の遺跡群は、先述したように単発的な小集落が多く、一宮市の河田遺跡など一部の遺跡で中期にまで継続する場合もみられるが、現状では前期段階をもって断絶してしまう遺跡が多い。とりわけ、洪積台地・段丘上に多くの遺跡が立地する南勢地方においては弥生後期から古墳時代初頭段階まで拠点集落の形成はみられない。

このA型・B型の遺跡群における動向は、概ね沖積地におけるA型の発展とB型の衰退としてまとめることができ、これらの状況は一体何を意味しているのであろうか。

伊勢湾西岸地域の拠点集落納所遺跡と東岸域の拠点集落朝日遺跡56B区の分析結果が興味深い。この両遺跡はいずれも沖積地に立地するA型集団内で誕生し、弥生時代を通して伊勢湾沿岸地方をリードする拠点集落となる。この両遺跡において共通する現象がI-3期以降に急激に正統タイプ以外の土器—納所遺跡においては亜流が、朝日遺跡56B区においては条痕文系—が異常とも言えるほど急増することである。この状況は、非常に大胆な推測ではあるが、文化レベルにおいて優位にたつ沖積地のA型集団の中へ、劣等的なB・C集団が融合していく過程を物語り、縄文的な基盤の崩壊と弥生的な社会構造の浸透を意味しているのではないであろうか。

この推測が許されるならば、I-3期以降、農耕を基盤とした弥生社会の構造が浸透する

ことによって、まず土器に現れた変換作用が生活様式全般におよび、農耕に不適な要素は排除されていったと考えられる。それがB型集団の存在をゆるがすことになり、これらの集団・地域においては弥生中期段階まで継続して集団を営むことができなかつたと言えるであろう。またB型地域の山中遺跡においては、I-4期に洪水の影響を受け集落が衰退した状況がみられ^{▼1}、広域的な災害および環境の変化も集団間の枠組みを大きく変化させた一要因としてあげることができるのかもしれない。

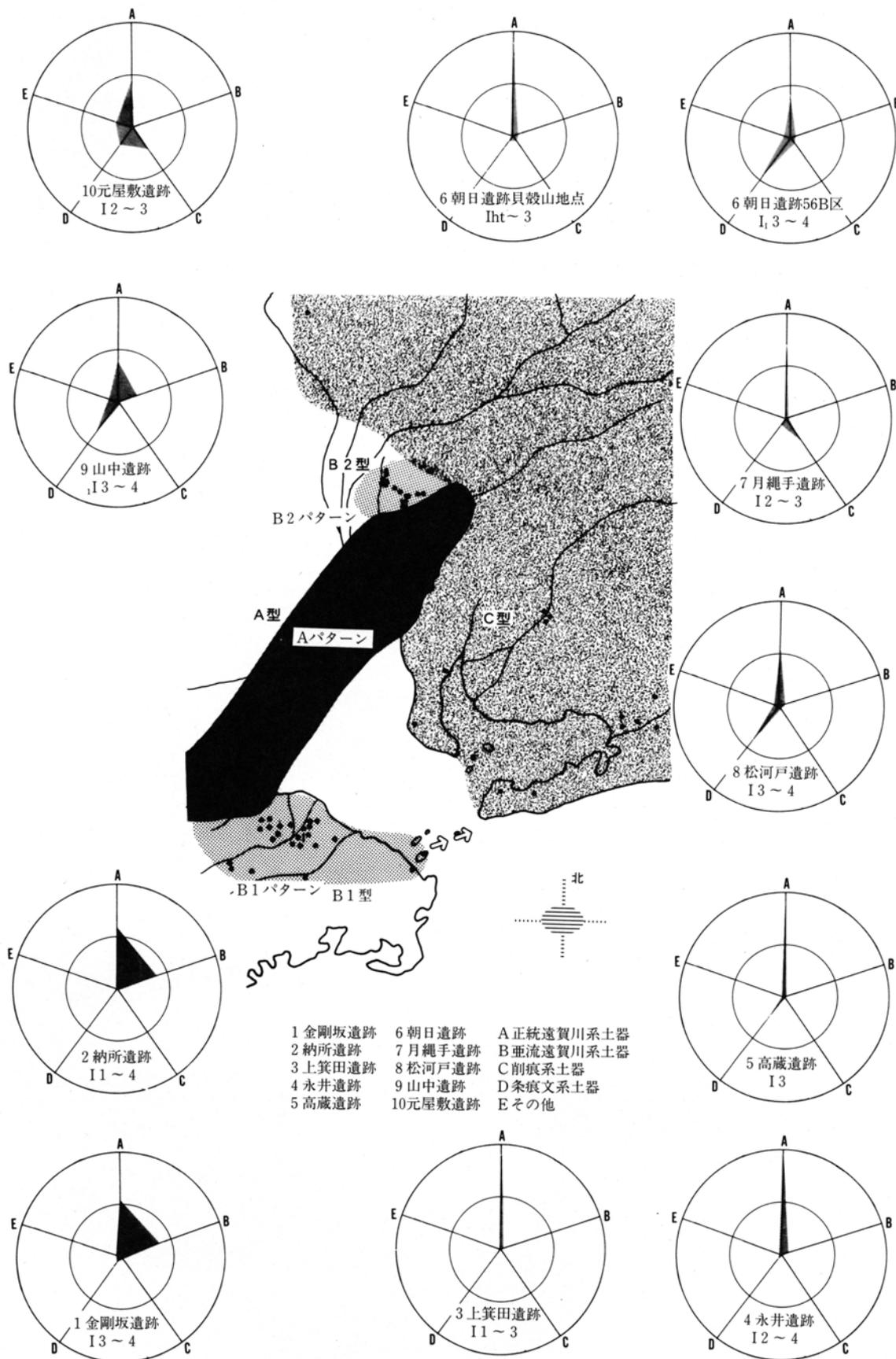
5) おわりに

以上、伊勢湾沿岸地方における弥生前期段階の集団関係について複数の集団の存在を明示して考えてきた。しかし、筆者の力量不足から大胆な推測を重ねただけの推論的なものに終わってしまった。当然、それらの推論に対しては、詳細な検証が必要であり、課せられた問題として、今後に望みたい。

参考文献

- 愛知県教育委員会 1972 『貝殻山貝塚調査報告』
 愛知県清洲貝殻山貝塚資料館 1983・1984 『貝殻山』.No.8、No.9
 愛知考古学談話会 1985 『<条痕文系土器>文化をめぐる諸問題』資料編1
 (財)愛知県埋蔵文化財センター1990 『月縄手遺跡・貴生町遺跡』
 (財)愛知県埋蔵文化財センター1994 『月縄手遺跡・貴生町遺跡(II)』
 (財)愛知県埋蔵文化財センター1992 『山中遺跡』
 一宮市 1968 『新編一宮市史』資料編2-弥生時代
 一宮市教育委員会 1982 『尾張病院山中遺跡発掘調査報告書』
 上箕田遺跡調査会 1970 『上箕田弥生式遺跡第2次調査報告』
 名古屋市教育委員会 1982 『高蔵遺跡発掘概要報告書』
 南山大学人類学博物館 1988 『高蔵貝塚(III)』人類学博物館紀要10
 三重県教育委員会 1980 『納所遺跡-遺構と遺物-』
 三重県教育委員会 1985 『昭和59年度農業基盤整備地域埋蔵文化財発掘調査報告』
 明和町教育委員会 1971 『金剛坂遺跡発掘調査報告』
 四日市市教育委員会 1973 『永井遺跡発掘調査報告』

▼1 服部信博1992『A期の遺構と遺物の変遷』『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集



弥生時代前期の遺跡分布とレーダーチャート

別表

I	中世期遺物分析	1 1 6
II	中世期遺物分布	1 2 6
III	中世期遺物・遺構変遷	1 3 0
IV	SK201構成比率	1 3 2
V	遺構一覧表・調査進行表	1 3 3
VI	遺物一覧表	1 3 8

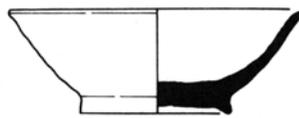
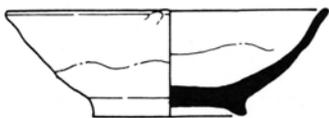
分類の基準

大分類：I・II・III・・・

小分類：A・B・C・・・

法量（小～大へ）：1・2・3・・・

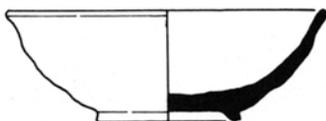
器種分類...碗



0類

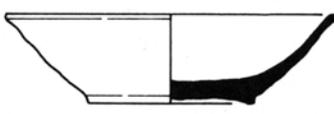
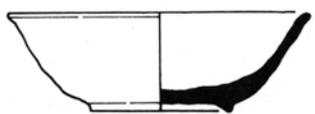
A

B



I類

灰釉系陶器尾張型碗



緩やかに内彎する体部

直線的な体部

A

B



II類

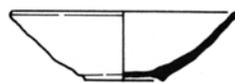
灰釉系陶器瀬戸型碗



平坦な内面底部
直線的な体部に肥厚する口縁端部

A

B



III類

灰釉系陶器東濃型碗

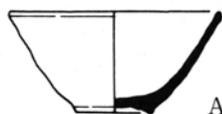
器高が高く精製軽量薄碗

器高が低く大きく外傾する精製軽量薄碗



A2(大)

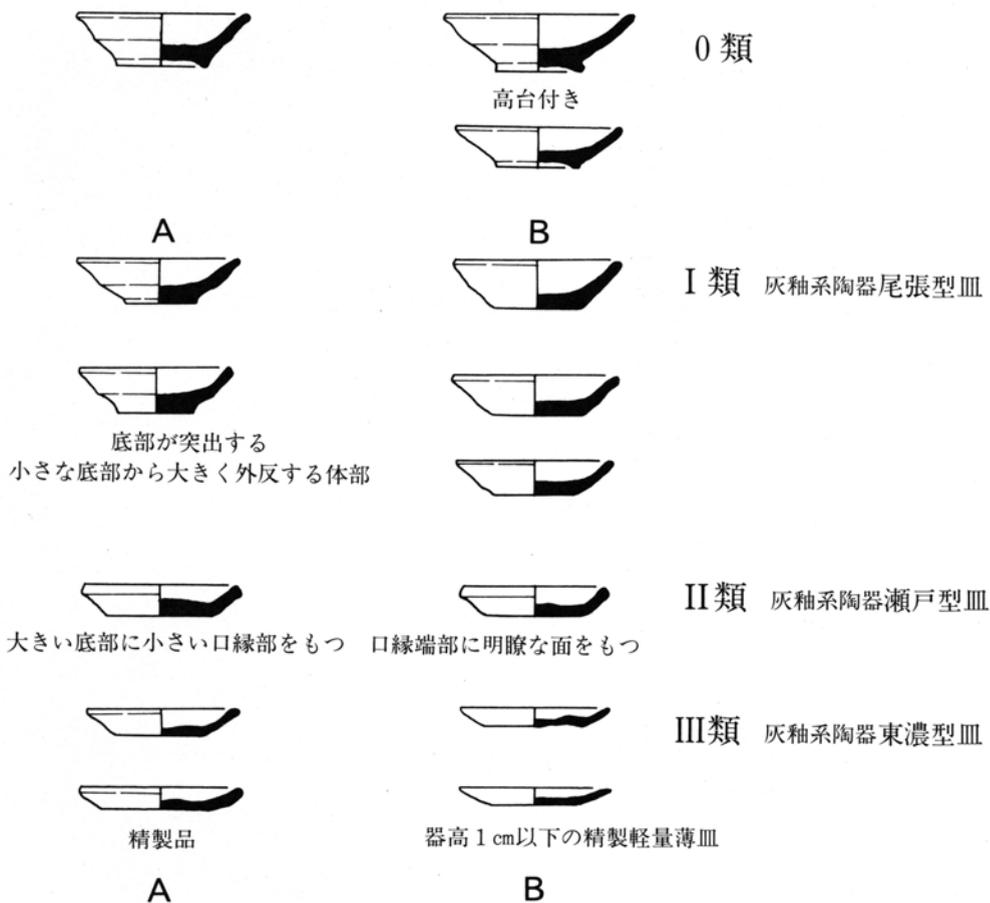
A1とA2に分化



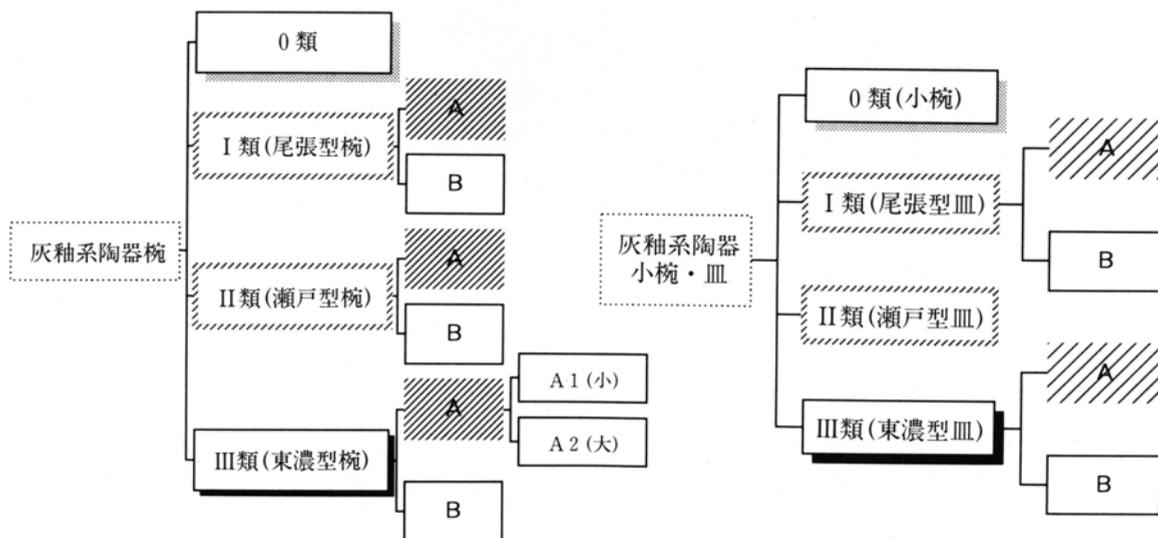
A1(小)

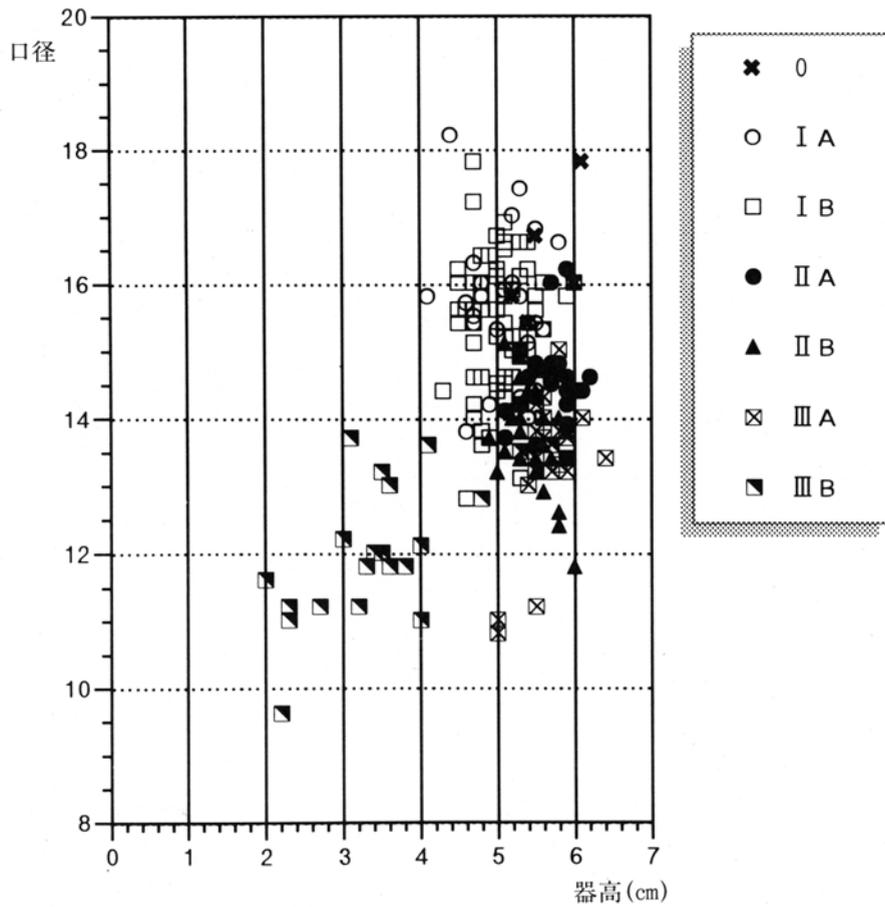
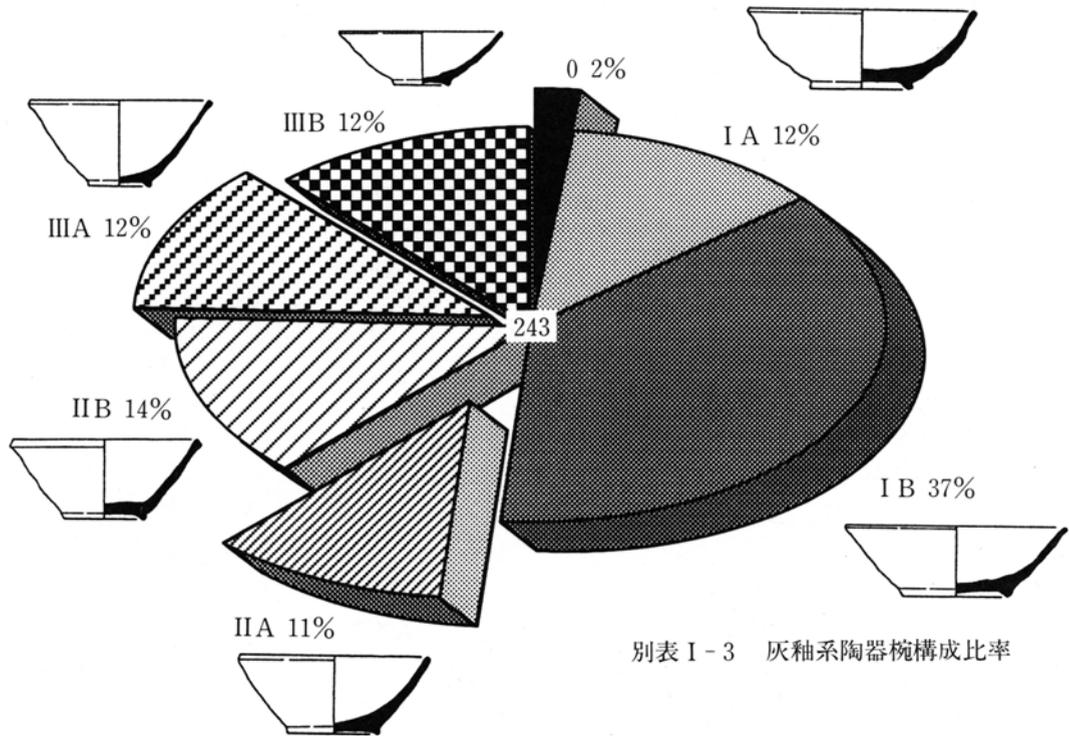
別表 I - 1 灰釉系陶器碗分類

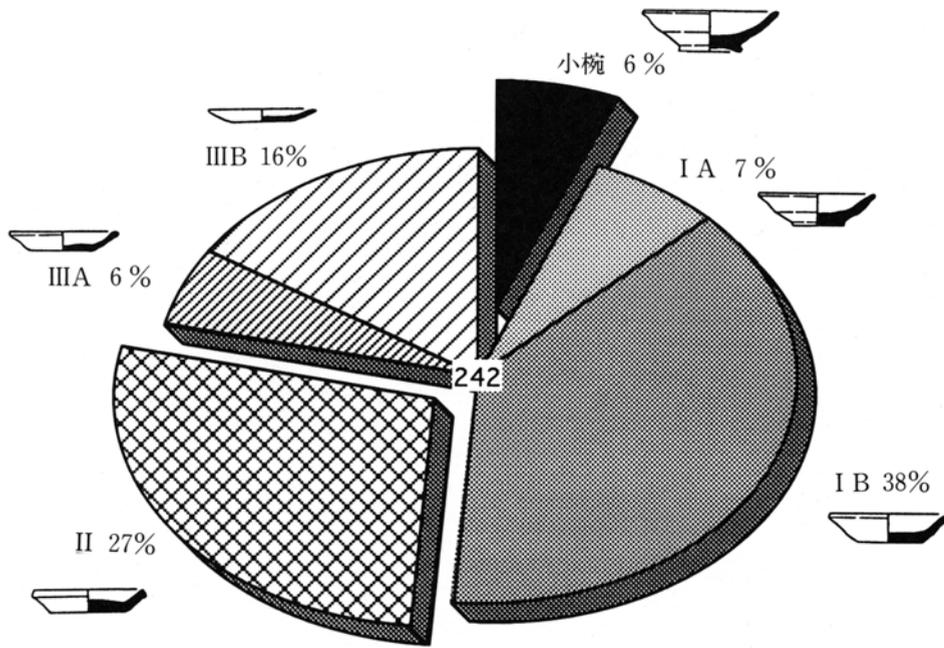
器種分類...皿・小椀



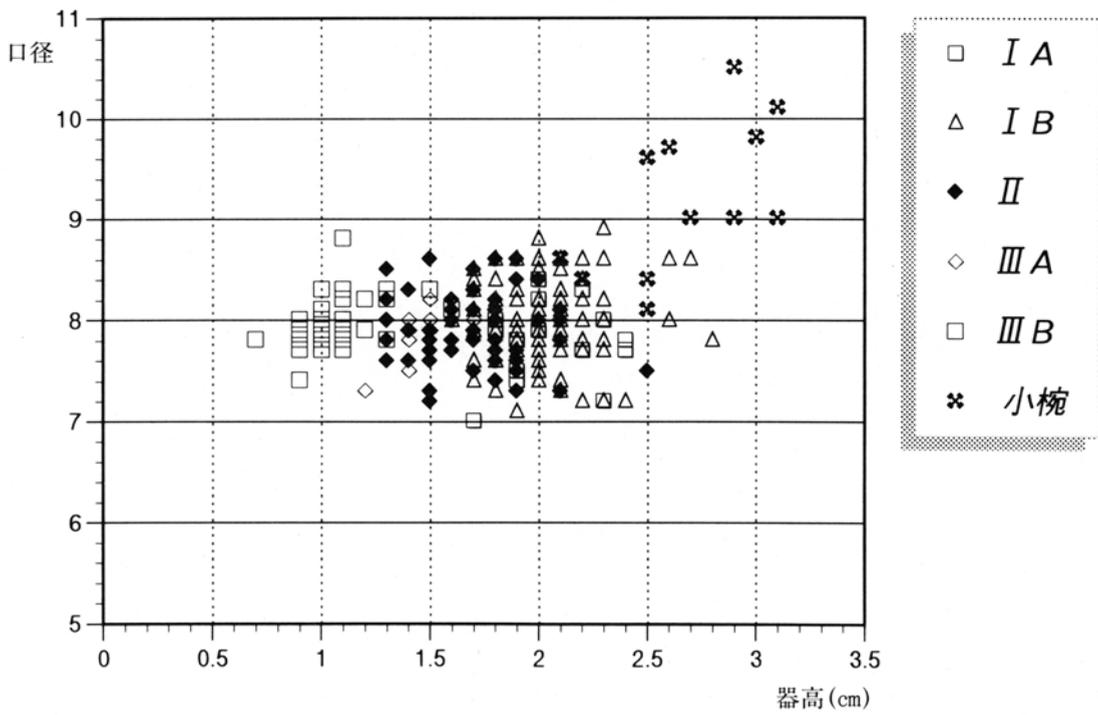
別表 I - 2 灰釉系陶器皿分類





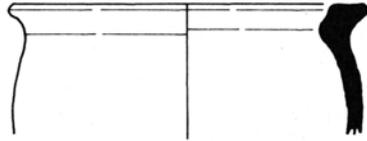


別表 I-5 灰釉系陶器小碗・皿構成比率

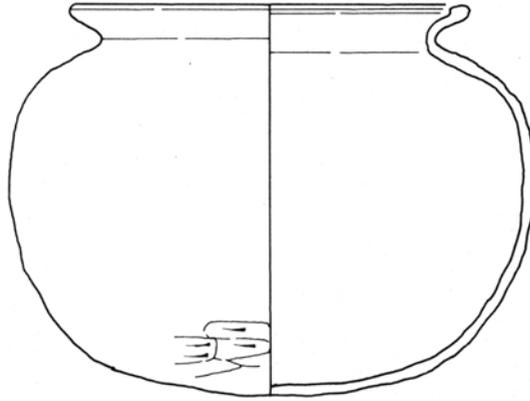


別表 I-6 灰釉系陶器小碗・皿 口径器高分布

I類
清郷型鍋

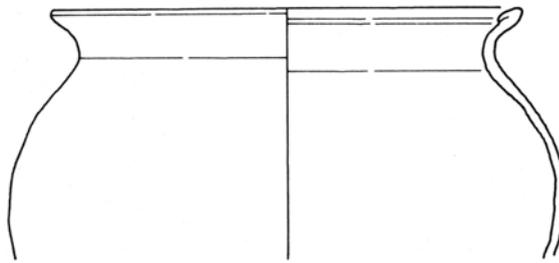


II類
伊勢型鍋



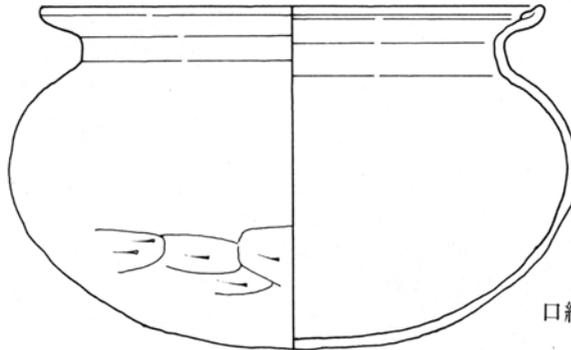
B

平坦な肥厚口縁端部 球形体部
口縁部は体部から直接屈折



C

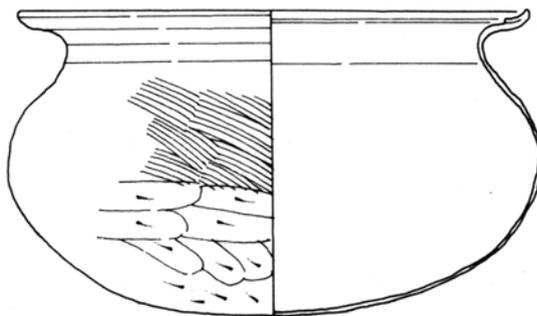
斜め肥厚口縁部
体部から緩やかに外彎する口縁部



D

直立する頸部をもつ
内彎する折り返し口縁端部
体部はやや扁平

口縁部径D1・D2・D3の小中大の区分

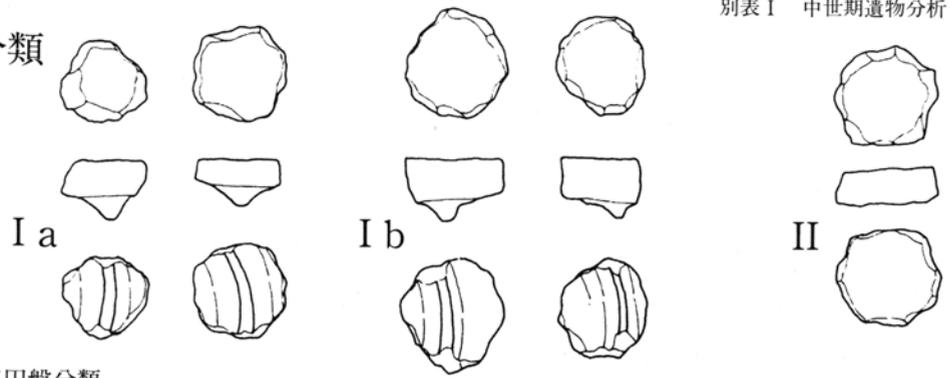


E

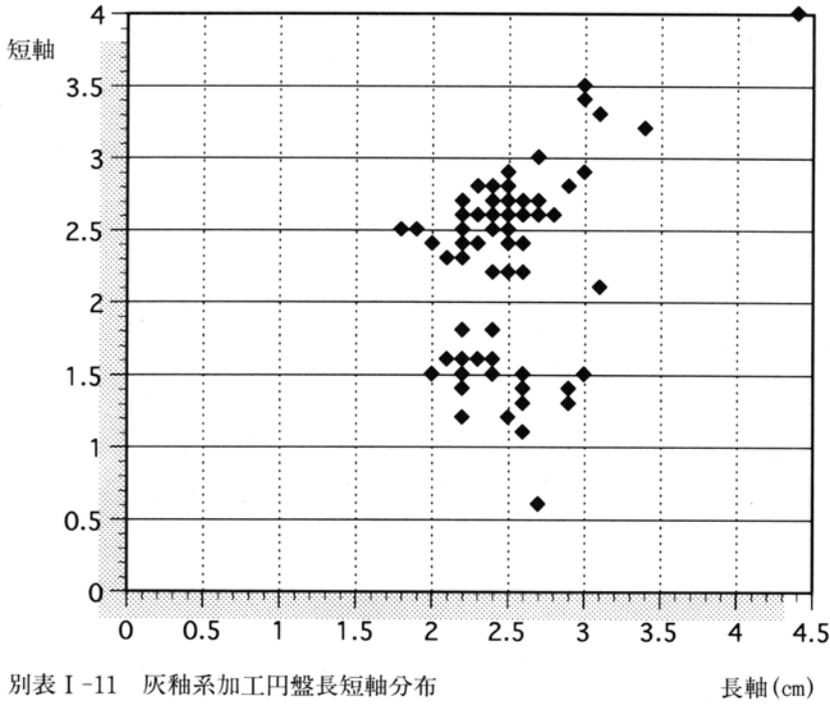
内彎口縁端部
薄鍋 体部扁平化
外面ハケ後ケズリ1/2

別表 I-7 土師器系鍋分類

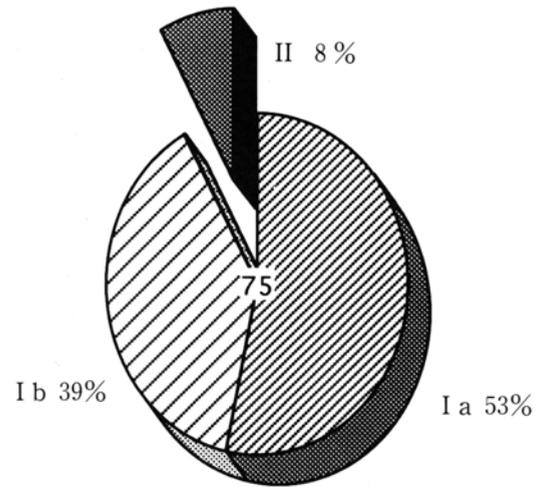
灰釉系加工円盤分類



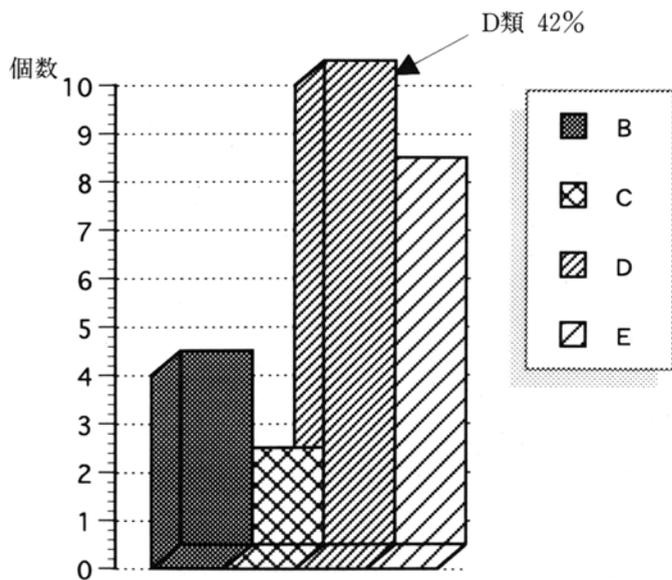
別表 I-10 灰釉系加工円盤分類



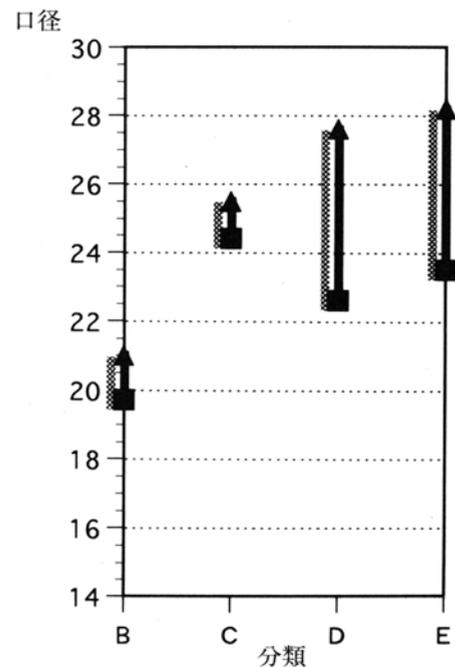
別表 I-11 灰釉系加工円盤長短軸分布



別表 I-12 灰釉系加工円盤構成比率

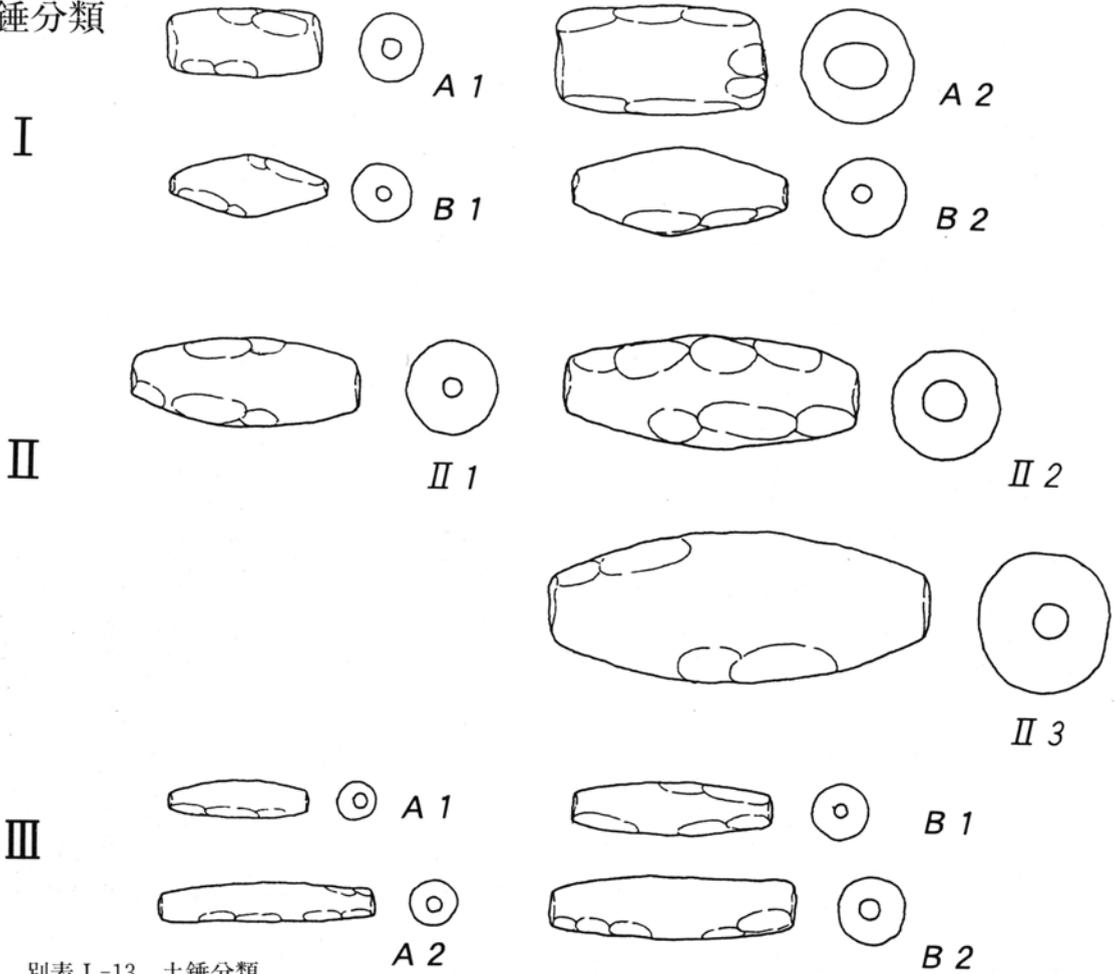


別表 I-8 伊勢型鍋構成比率(合計24点)

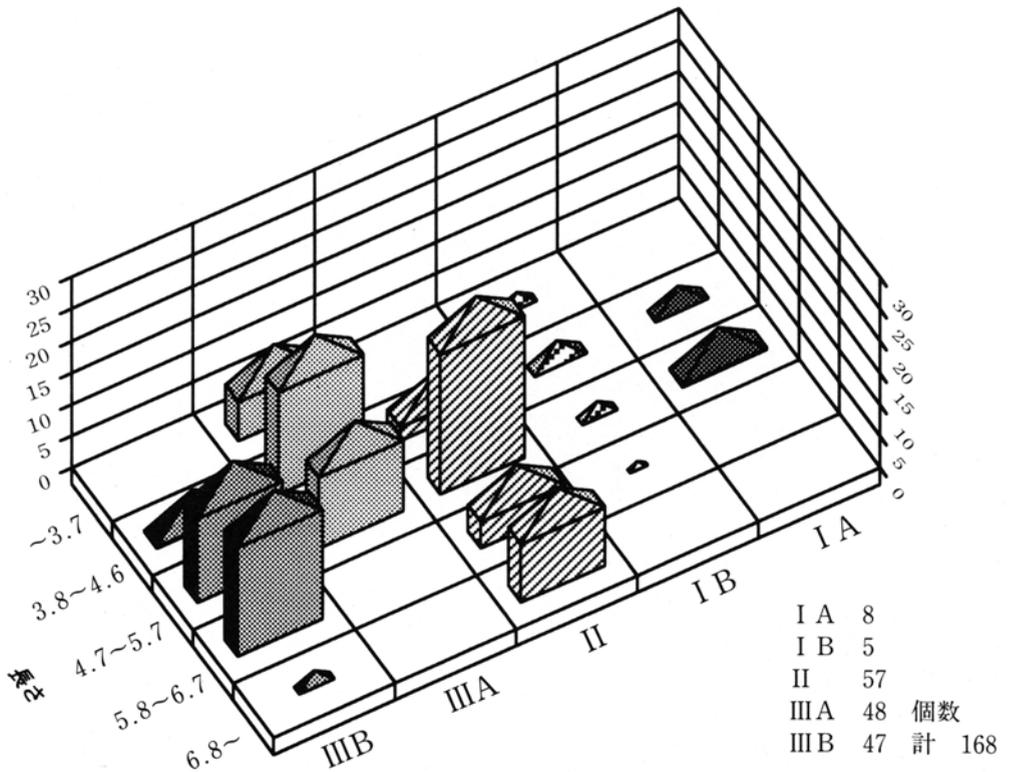


別表 I-9 伊勢型鍋分類別口径分布幅

土錘分類

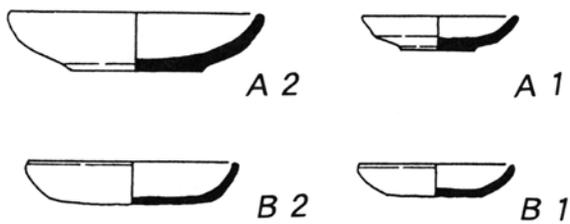


別表 I-13 土錘分類

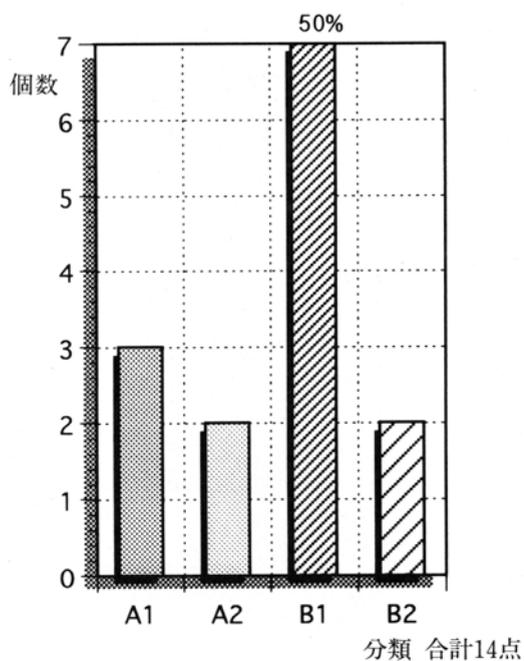


別表 I-14 土錘分類別長さ分布

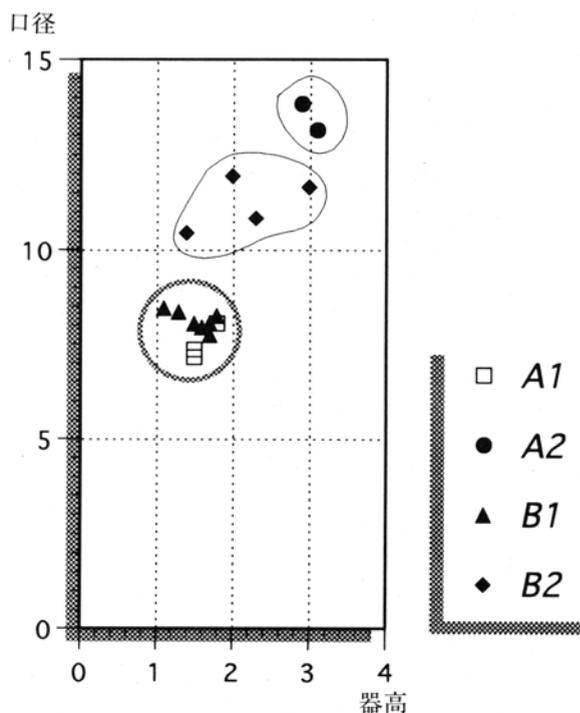
土師器系皿分類 I



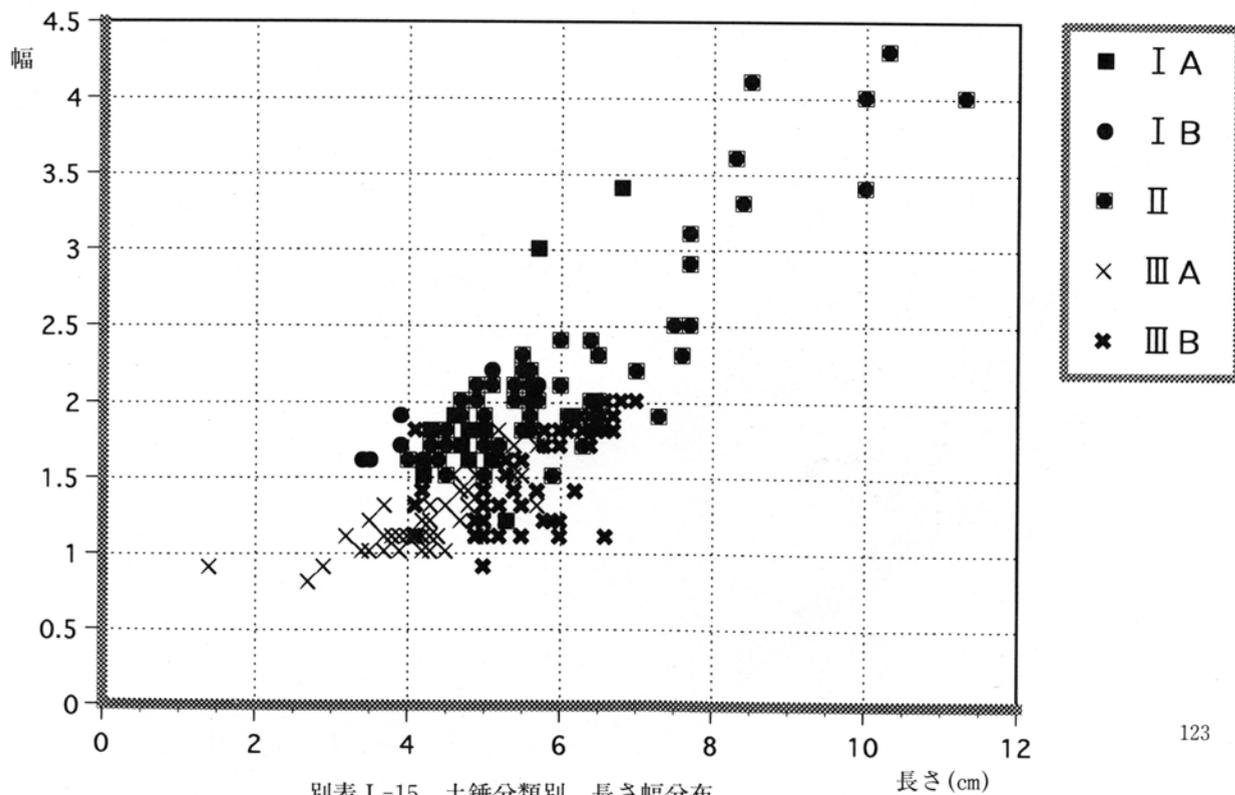
別表 I-16 土師器系皿分類



別表 I-17 土師器系皿構成比率

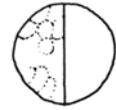


別表 I-18 土師器系皿 口径器高分布



別表 I-15 土錘分類別 長さ幅分布

陶丸分類

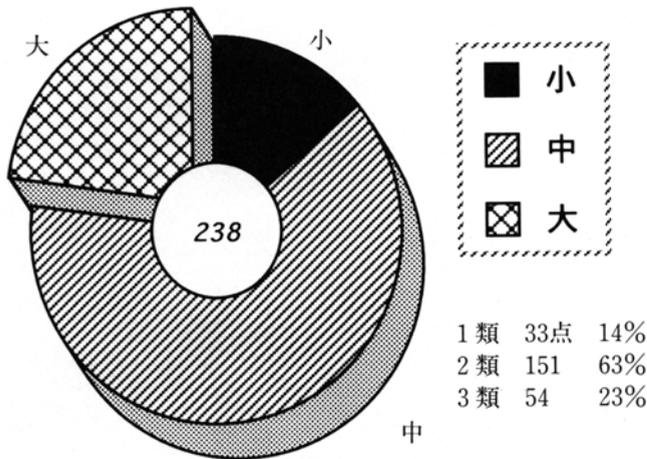


別表 I-19 陶丸分類

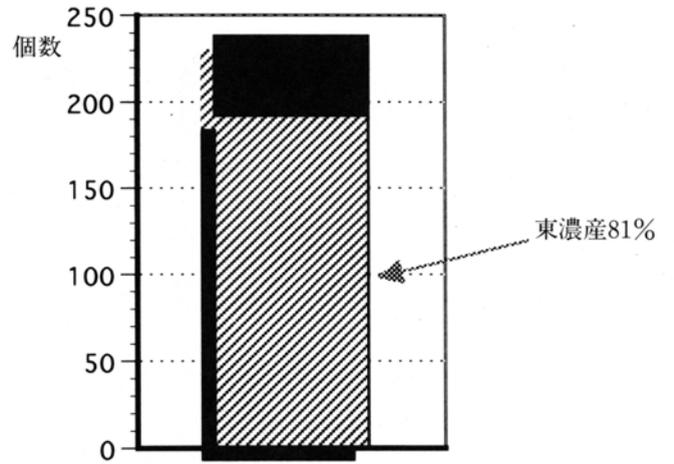
1類(小)

2類(中)

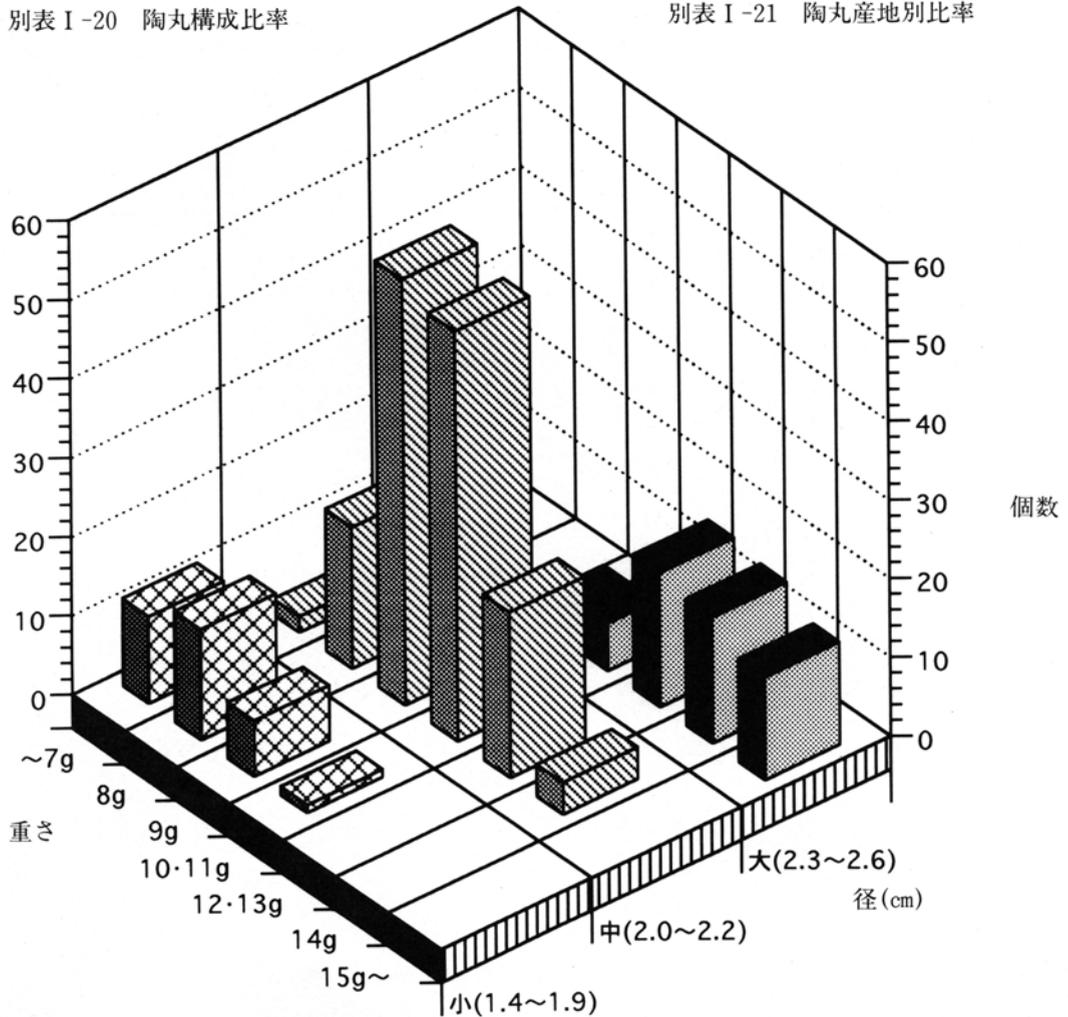
3類(大)



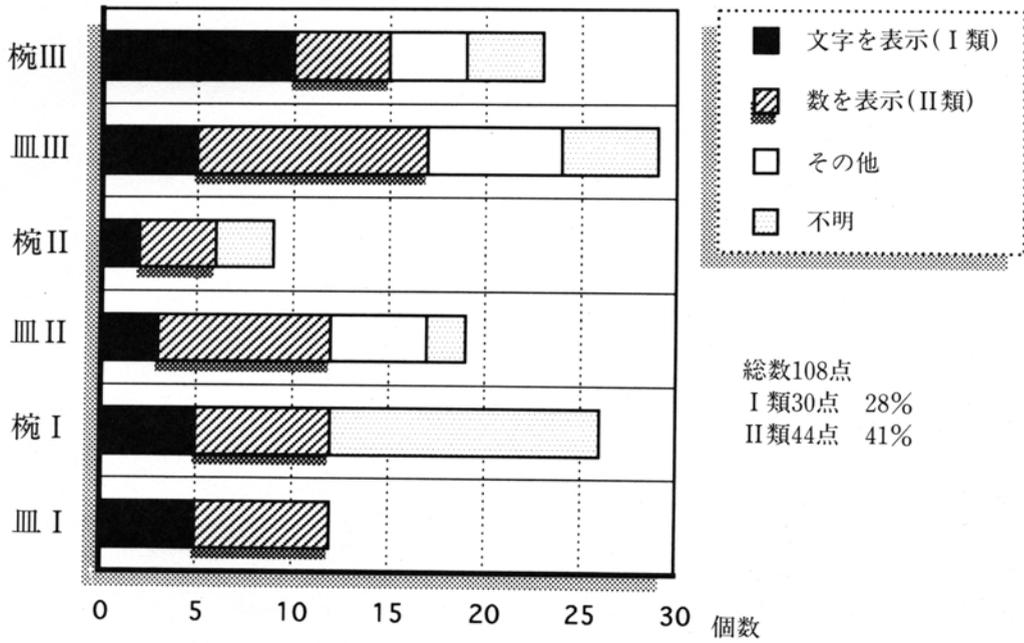
別表 I-20 陶丸構成比率



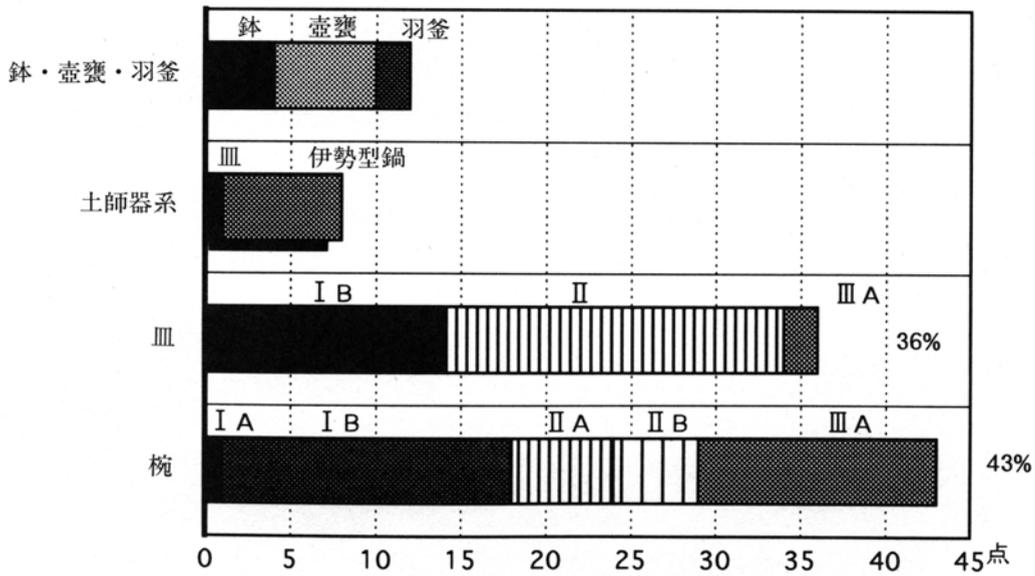
別表 I-21 陶丸産地別比率



別表 I-22 陶丸分類別構成比率



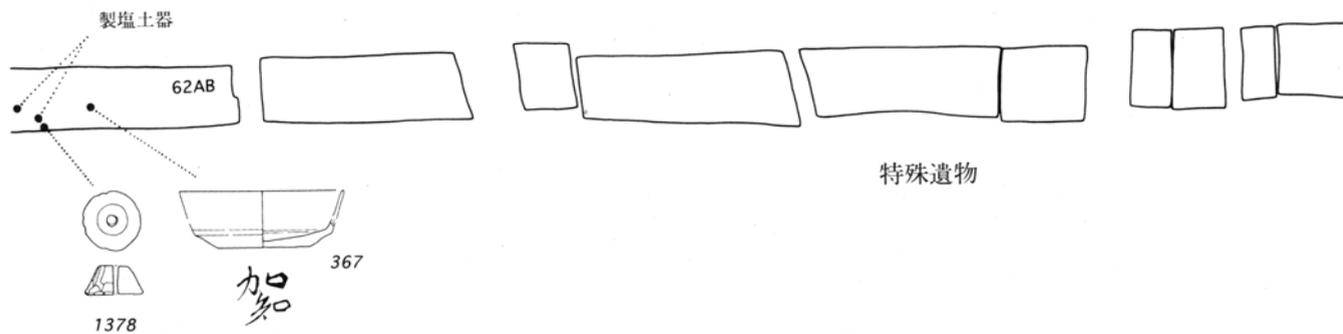
別表 I-23 墨書表示器種別比率



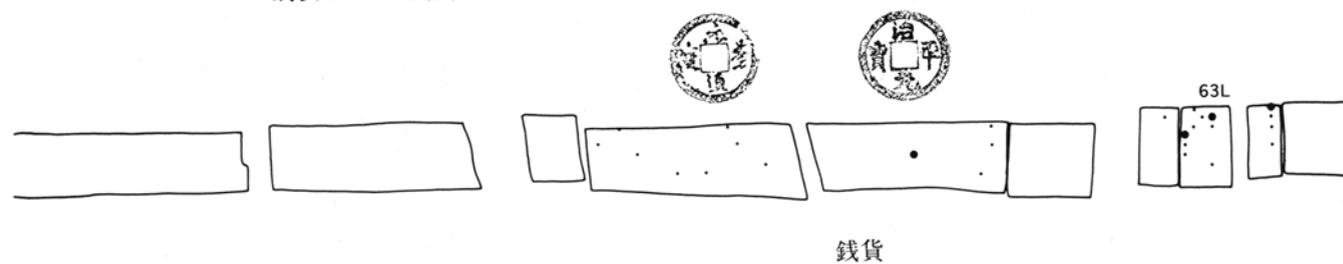
別表 I-24 SD105構成比率(個体識別総数99点)

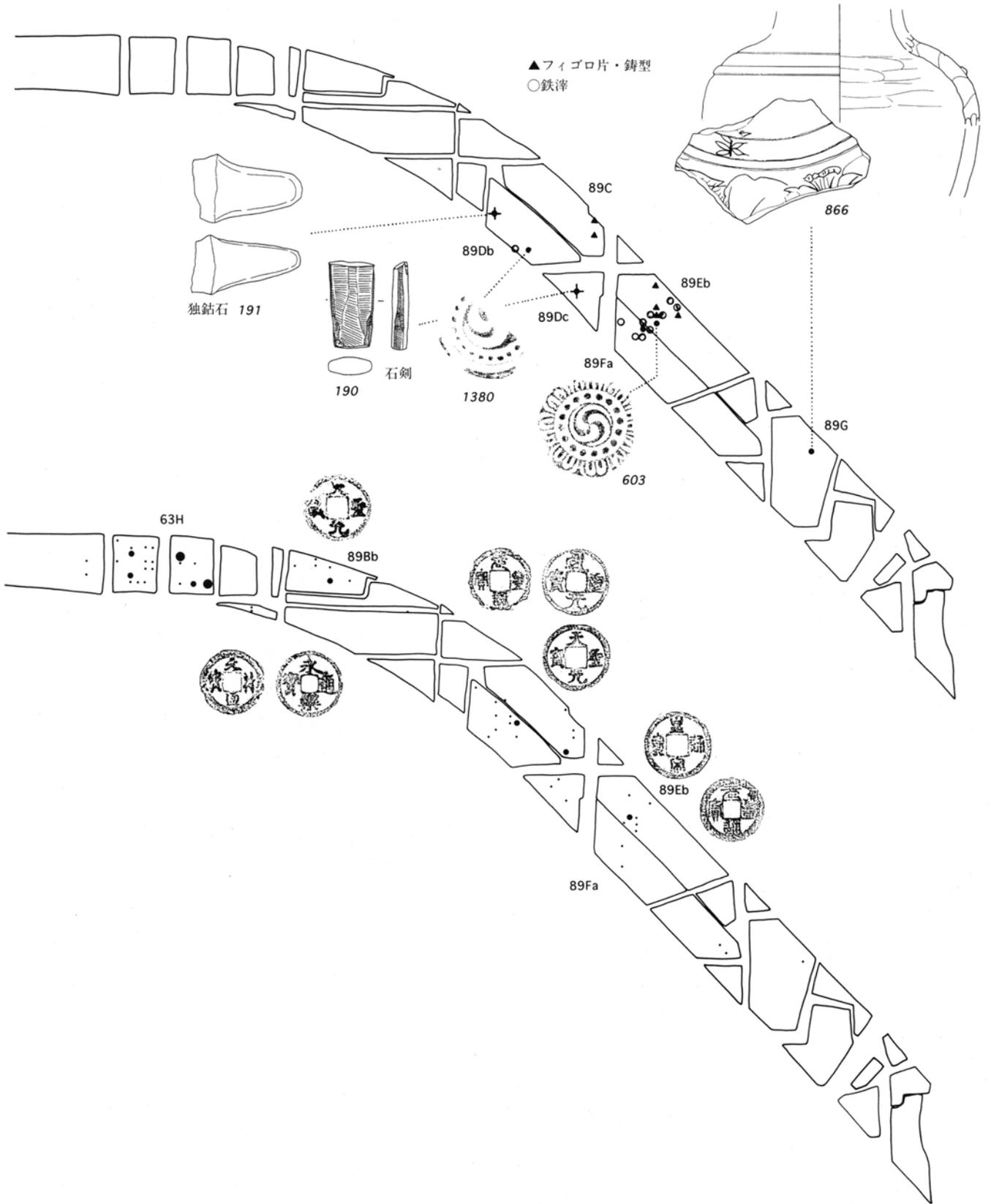
未使用品 椀 12点(椀の28%)
皿 7点(皿の19%)

別表II-1 特殊遺物分布図

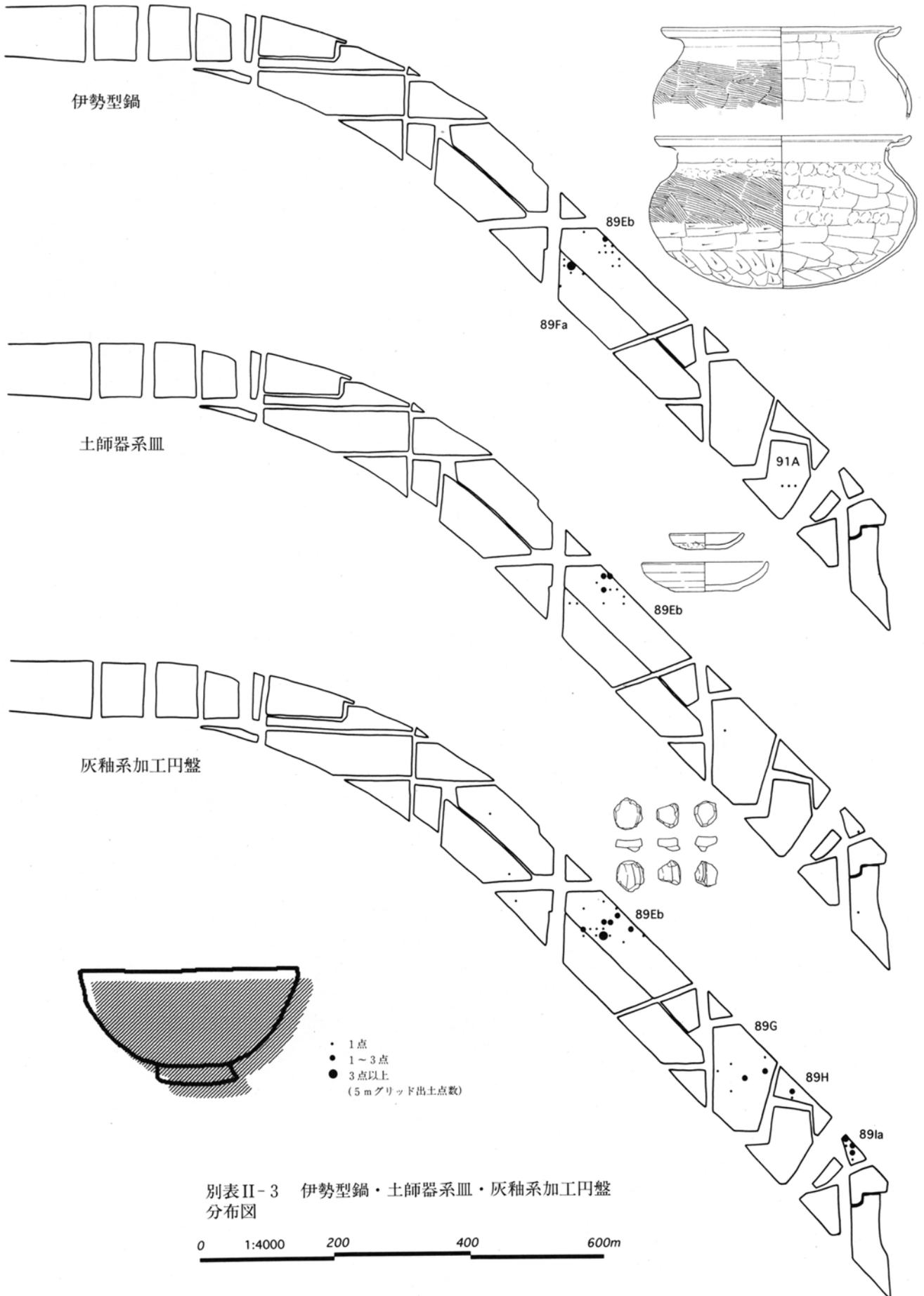


別表II-2 銭貨分布図





松河戸遺跡



伊勢型鍋

89Eb

89Fa

土師器系皿

91A

89Eb

灰釉系加工円盤

89Eb

89G

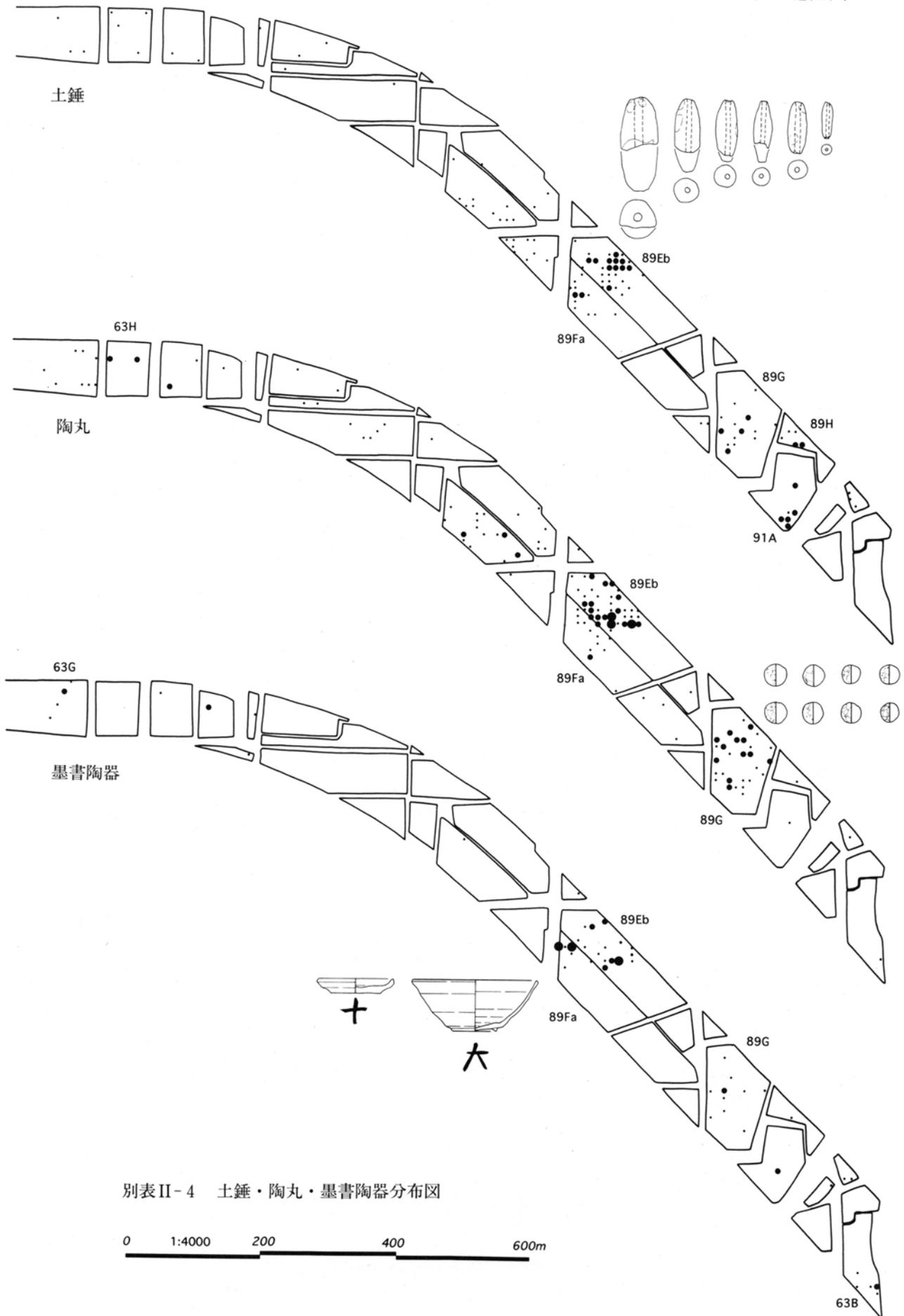
89H

89Ia

- 1点
- 1～3点
- 3点以上
(5mグリッド出土点数)

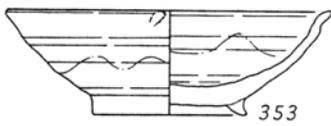
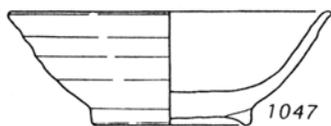
別表II-3 伊勢型鍋・土師器系皿・灰釉系加工円盤
分布図

0 1:4000 200 400 600m



別表II-4 土錘・陶丸・墨書陶器分布図

I 期

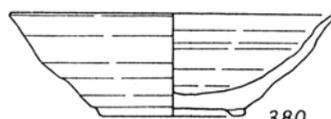
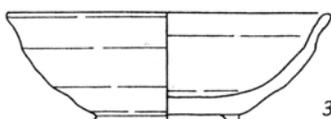
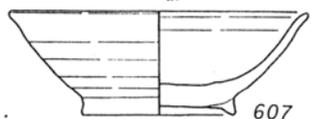


I A

I B

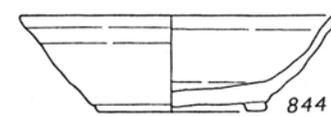
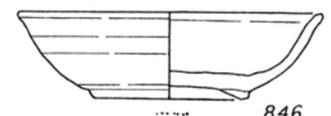
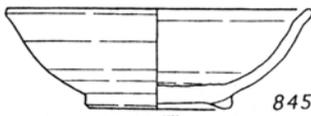
1100

I a



89IaSD01

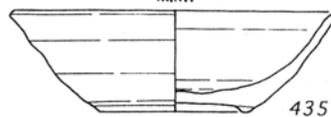
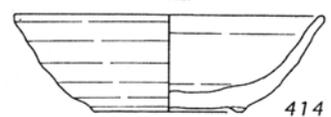
I b



91BSD02

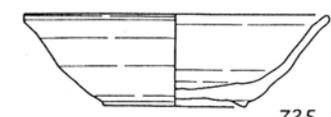
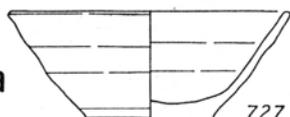
II 期

II A



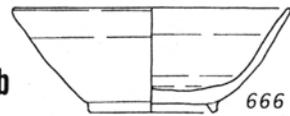
89EbSD03
集石62B

II a



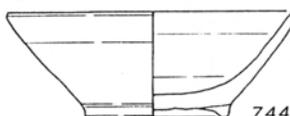
1200

II b

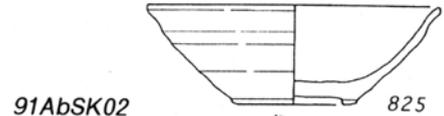
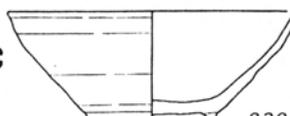


89FaSK119

II c



89EbSX155

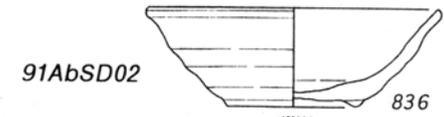


91AbSK02

II B

III 期

III A



91AbSD02

III a



89FaSD105

1300

III b



III A 2

III A 1

89EbSK180

別表III-1 中世期・陶器様式編年表

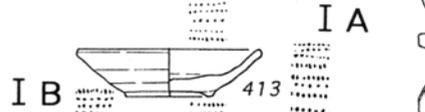
0類

灰釉系加工円盤



384

385



I A

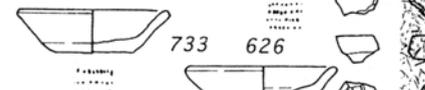
I B

413



412

422



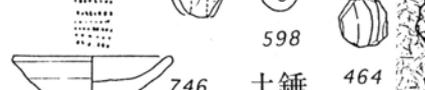
733

626



601

739



688

598



747

464

土錘

II



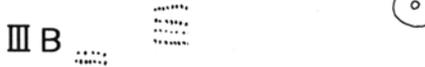
840

640



555

841



562

842



682

640

640

722

723

722

723

722

723

722

723

722

723

722

723

722

723

722

723

722

723

722

723

722

723

722

723

722

723

722

723

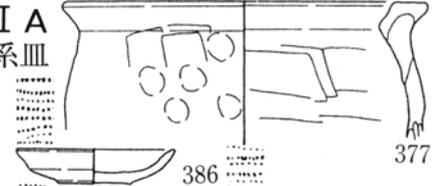
722

723

722

723

I A 土師器系皿



377

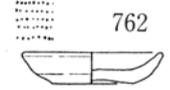


386

I類清郷型鍋

II A

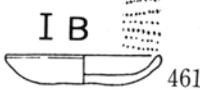
II類伊勢型鍋



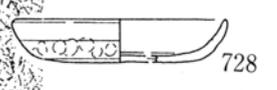
762



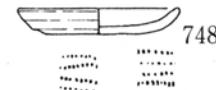
702



461



728



748



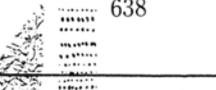
639



638



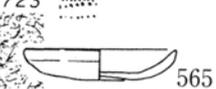
638



638



638



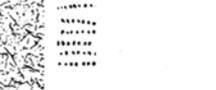
638



638



638



638



638



638



638

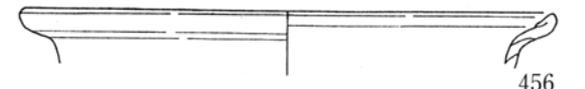


638

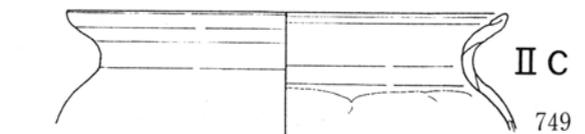


II B

444

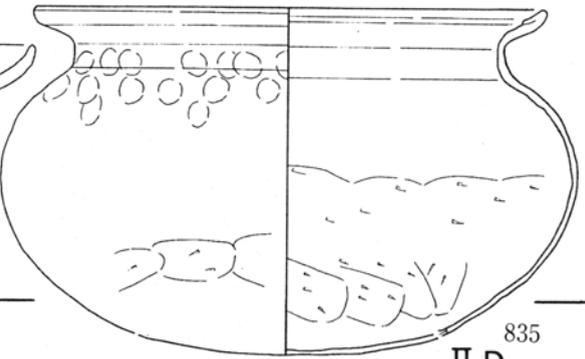


456



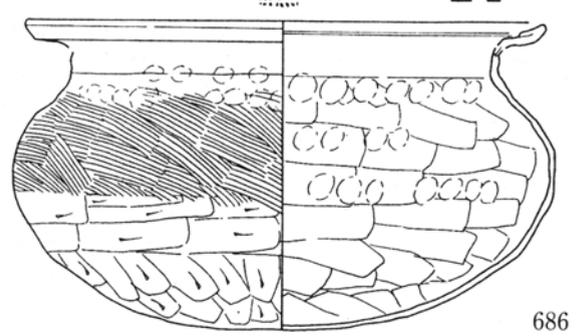
II C

749



835

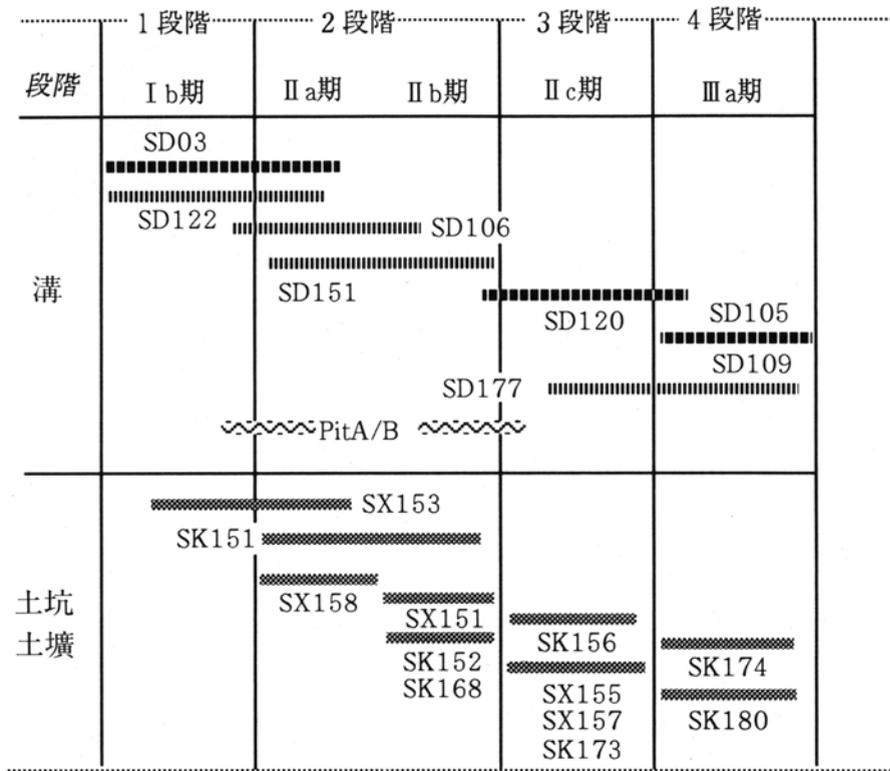
II D



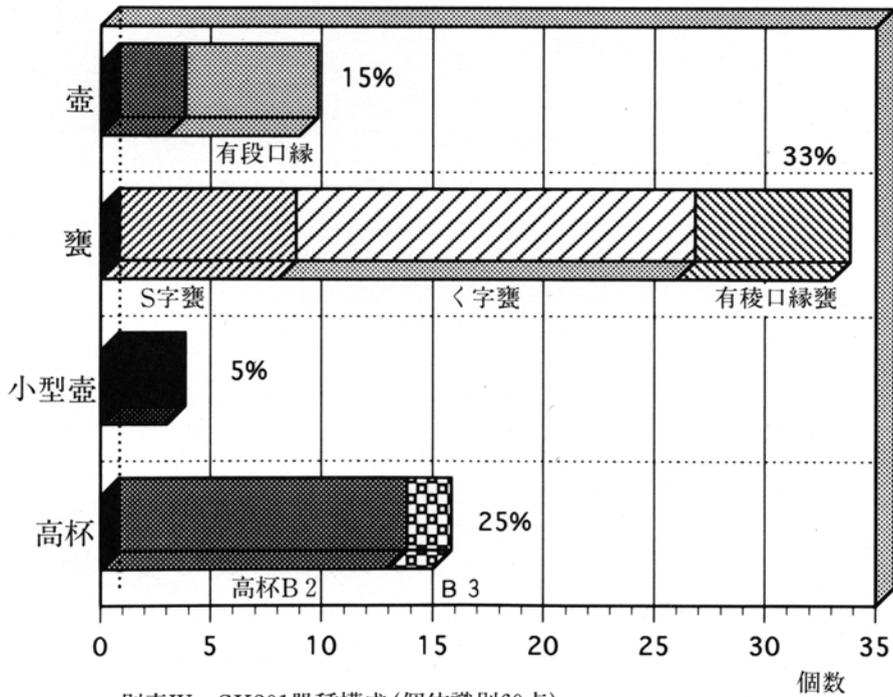
686

II E

陶丸



別表III-2 89EF主要遺構所屬時期



別表IV SK201器種構成(個体識別60点)

■土坑(SK)

調査区	遺構	規模	深さ	時期	備考
62A	SK201	2.0-2.0†	0.6	古墳中期	松河戸Ⅰ式
62B	SK10	1.9-1.5	0.2	中世	
	SK101	3.0-1.2	0.25	古墳	
	SK105	4.0-2.0	0.1	古墳	
	SK106	2.0-1.4	0.25	古墳	
	SK107	1.3-0.7	0.1	古墳	
62EF	SK06	1.3-1.0	0.06	中世	
	SK07	1.3-1.1	0.7	古墳後期	松河戸Ⅱ式
	SK105	1.4	0.5	縄文	集石炉・不定形
	SK106	1.5-0.9	0.13	縄文	
	SK107	1.6-1.5	0.22	縄文	
	SK109	1.7	0.16	縄文	
	SK117	1.1-1.1	0.06	縄文	集石炉・方形
	SK118	3.0-1.8	0.1	縄文	
	SK119	4.0	0.04	縄文	小土坑群
	SK120	1.1-0.8	0.08	縄文	
	SK121	1.2-1.2	0.06	縄文	
	SK123	1.5-0.8	0.08	縄文	
	SK127	1.0-0.7	0.1	縄文	
	SK129	3.0-2.4	0.08	縄文	小土坑群
	SK131	1.0-1.0	0.12	縄文	
	SK134	2.2-1.7	0.08	縄文	小土坑群・方形
	SK136	5.2-4.0	0.1	縄文	小土坑群・不定形
	SK139	1.5-0.7	0.24	縄文	
	SK140	1.7-0.9	0.18	縄文	
	SK141	1.3-1.2	0.11	縄文	
	SK143	1.1-0.9	0.22	縄文	
	SK148	3.5	0.16	縄文	
	SK151	0.6	0.1	縄文	集石・円形
	SK158	0.9-0.7	0.13	縄文	集石・円形
	SK161	0.8-0.6	0.06	縄文	
	SK163	3.7	0.06	縄文	小土坑群・方形
	SK164	1.5-1.4	0.11	縄文	
62G	SK03		0.11	縄文	
	SK04	2.5-1.5	0.48	縄文	
	SK07	1.5-0.8	0.15	縄文	
89Dc	SK101	1.8-1.0	0.3	弥生前期	弥生土器
	SK102	1.5-1.2	0.3	弥生前期	弥生土器
	SK104	4.0	0.3	弥生前期	
89EF	SK101	2.1-2.0	0.2	中世Ⅱ	
	SK102	4.0-3.2	0.06	中世Ⅱ	
	SK104	1.2-1.0	0.07	中世Ⅱ	
	SK107	6.0-3.0	0.04	中世Ⅱ	
	SK108	6.5-3.7	0.05	中世Ⅱ	
	SK109	4.0-2.5	0.17	中世Ⅱ	
	SK110	1.1-1.1	0.8	中世Ⅱ	炭化物堆積
	SK111	1.0-0.9	0.8	中世Ⅱ	炭化物堆積
	SK116	1.2-1.2	0.23		
	SK119	0.6	0.5	中世Ⅱ	
	SK151	3.5-2.0	0.8	中世Ⅱ	
	SK152	4.1-2.6	0.46	中世Ⅱ	
	SK156	1.5-1.2	0.1	中世Ⅱ	
	SK157	1.1-0.9	0.25	中世Ⅱ	
	SK160	1.4-1.2	0.2	中世Ⅱ	
	SK161	1.9-1.8	0.17	中世Ⅱ	
SK162	1.8-1.8	0.43	中世Ⅱ		
SK163	2.1-2.0	0.09	中世Ⅱ		
SK164	1.5-1.5	0.1	中世Ⅱ		

調査区	遺構	規模	深さ	時期	備考
89EF	SK166	2.2-2.0	0.16		
	SK168	2.2-1.0	0.5	中世Ⅱ	木棺墓
	SK170	1.9-1.0	0.3	中世Ⅱ	
	SK171	1.2-0.9	0.08	中世Ⅱ	
	SK172	0.8-0.8	0.2	中世Ⅱ	
	SK173	1.0-1.0	0.46	中世Ⅱ	
	SK174	1.1-1.0	0.28	中世Ⅲ	
	SK175	1.4-1.0	0.25	中世Ⅱ	
	SK177	1.9-1.4	0.16	中世Ⅱ	
	SK180		0.5	中世Ⅲ	
89G	SK204	0.8-0.8	0.13	中世Ⅱ	
	SK109	1.6	0.12	中世	
91A	SK01	2.3-2.1	1.05	中世Ⅱ	井戸
	SK02	1.9-1.9	1.8	中世Ⅱ	井戸(曲物1段)
	SK05	0.9-0.8	0.08	中世	
89Ia	SK04	2.5-1.0	0.11	中世	
63A	SK01	1.9	0.04	江戸	
63B	SK09	4.0-3.0	0.15	古墳中期	須恵器
	SK28	1.5	0.6	江戸	

† 長軸と短軸を表わす(単位m)

§ 検出面での平面形状

■その他(SX・SE・NR・Pit)

調査区	遺構	規模	深さ†	時期	備考
62AB	集石	13.5§		中世Ⅱ	河原石の集積
	SX101	8-4	0.26	中世Ⅱ	
	SX102		0.03	古墳	最下層水田
	SX103		0.02	古墳	最下層水田
62EF	SX01	4.5-3.8	0.1	縄文	集石土坑群・方形
	SX02	5.6-4.0	0.06	縄文	集石土坑群・方形
	SX03	6.0-5.6	0.05	縄文	集石土坑群・方形
	SX101	1.1-0.9	0.35	縄文	集石炉
	SX102	1.0-0.9	0.4	縄文	集石炉
	P-111‡	0.8-0.7	0.24	縄文	集石
	P-139	0.9-0.6	0.3	縄文	集石
	P-228	0.6-0.6	0.14	縄文	集石
89EF	P-232	0.7-0.6	0.15	縄文	集石
	P-233	0.8-0.6	0.07	縄文	集石
	SX103	8.5-2.4	0.2	中世Ⅱ	
	SX151	3.2-2.6	0.17	中世Ⅱ	
	SX153	5.5-3.9	0.28	中世Ⅱ	
	SX154	3.2-3.0	0.21	中世Ⅱ	
	SX155	3.7-2.3	0.34	中世Ⅱ	
	SX157		0.16	中世Ⅱ	
63B	SX158	2.0-1.7	0.38	中世Ⅱ	
	SX167	1.5-0.9	0.11	中世Ⅱ	
	SE01	5.2-4.3	1.8	中世Ⅳ	石組残存・井戸
	SE02	2.5-2.3	0.9	中世Ⅳ	石組残存・井戸
	NR01	15.5		古墳～	

† 単位はm

§ 長軸と短軸の大きさを表示(単位m)

‡ ビット番号・集石を伴うもの

◆は詳細図面が掲載されているものを表わす

■溝(SD)

調査区	遺構	規模	深さ	時期	備考
62AB	SD01	1.5	0.15	江戸	
	SD103	0.2	0.1	古墳後期	SD109と同じ
	SD104	3.5(9.5)†	0.35	古墳	
	SD105	0.8(7.5)	0.15	古墳後期	須恵器
	SD106	1.5	0.1	古墳	
	SD107	0.4	0.1	古墳	
	SD108	0.6	0.21	古墳	
	SD110	0.3	0.1	古墳	
	SD01	1.4	0.04	江戸	
	SD02	0.2	0.01	江戸	
62EF	SD03	0.3	0.07	江戸	
	SD05	0.4	0.02	江戸	
	SD08	0.3	0.04	江戸	
89Dc	SD120	12.0	0.9	弥生前期	
62G	SD01	1.5	0.2	古墳中期	弧状(径20m)・円墳
89C	SD02	0.5	0.13	中世	
89Dc	SD01	2.0	0.8	中世II	SD01・03を含む
	SD123	0.4	0.05	中世II	
	SD124	1.2	0.1	中世II	
	SD125	0.8	0.28	中世II	
	SD126	0.9	0.23	中世II	
89EF	SD03	1.6	0.24	中世II	
	SD101	0.7	0.1	中世II	蛇行溝
	SD103	0.6	0.06	中世II	
	SD104	0.8	0.03	中世II	蛇行溝
	SD105	3.0(2.6)	0.6	中世II	蛇行溝・陶器廃棄
	SD106	0.7	0.2	中世III	
	SD108	1.0	0.31	中世II	
	SD109	1.1	0.23	中世III	屈折溝
	SD110	1.2	0.53	中世II	屈折溝
	SD111	0.6	0.06	中世II	
	SD118	0.5	0.06	中世II	屈折溝
	SD120	1.0	0.3	中世II	屈折溝
	SD121	0.7	0.12	中世II	
	SD122	1.2	0.18	中世II	
	SD151	1.1(7.5)	0.54	中世II	
	SD154	0.6(13)	0.37	中世II	
	SD155	0.5	0.13	中世II	
	SD156	0.8	0.14	中世II	
	SD158	1.1	0.23	中世II	
	SD160	0.6	0.25	中世II	
	SD161	0.5	0.2	中世II	
	SD166	0.5	0.11	中世II	
	SD167	1.0	0.2	中世II	
	SD168	1.1	0.15	中世II	
	SD170	1.0(12.5)	0.21	中世II	
	SD171	1.3(3.2)	0.2	中世II	
	SD173	0.9(17.7)	0.1	中世II	
SD174	0.6	0.1	中世II	蛇行溝	
SD176	1.4(15.8)	0.4	中世II		
SD177	2.2	0.12	中世II	蛇行溝	
SD178	0.4	0.06	中世II	屈折溝	
SD180	0.9	0.19	中世II	蛇行溝	
SD182	1.5	0.03	中世II	蛇行溝	
SD185	0.3	0.09	中世II	屈折溝	
SD186	0.8	0.2	中世II		
SD187	1.1	0.14	中世II	屈折溝	

調査区	遺構	規模	深さ	時期	備考
89G	SD101	1.4	0.3	中世II	
	SD106	0.8(16)	0.1	中世II	
	SD107	0.9(16)	0.07	中世II	
	SD109	0.8	0.15	中世II	屈折溝
	SD114	0.9	0.06	中世II	
	SD115	0.8	0.1	中世II	屈折溝
	SD117	1.6	0.11	中世II	
	SD119	1.4	0.06	中世II	
	SD123	0.9	0.07	中世II	
	SD124	0.6	0.07	中世II	屈折溝
	SD102	0.8	0.06	中世II	
	SD103	0.5	0.06	中世II	
SD104	0.3	0.07	中世II		
91A	SD01	9.3	0.27	奈良時代	
	SD02	0.4	0.09	中世II	屈折溝
	SD03	0.6	0.08	中世II	
89I	SD01		0.85	中世II	
	SD04	1.6	0.46	中世II	
	SD05	1.4	0.2	中世II	
91B	SD06	4.7	0.9	奈良時代	
	SD01		0.27	中世II	
	SD02	2.7	0.55	中世II	
63A	SD03	3.0	0.25	中世II	
	SD01	2.3	0.52	江戸	屈折溝
	SD02	3.0	0.24	江戸	
63B	SD01	3.5	0.08	江戸	
	SD02	0.9	0.22	江戸	
	SD03	1.5(8.5)	0.4	江戸	
	SD04	0.4	0.01	中世	

† ()は溝の長さを表わす

■水田(ST)

調査区	遺構	南北†	東西§	時期	備考
62A	ST01			下位&	
	ST02			下位	
	ST03		6.8	下位	
	ST04	17.2	7.0	下位	
	ST07		14.0	下位	大畦畔東
	ST08	10.6	14.2	下位	大畦畔東
	ST10		15.0	下位	
	ST11	(12)	15.0	下位	
	ST12		15.5	下位	
	ST13	(8)		下位	
	ST14			下位	
	ST15			下位	
	ST16		6.5	下位	大畦畔西
ST18		6.5	下位	大畦畔西	
ST19	7.0	6.5	下位	大畦畔西	
ST20		11.0	下位		
62B	ST01	(10)'	9.2	下位	大畦畔北
	ST02	(9)	11.0	下位	大畦畔北
	ST03	12.0	18.0	下位	大畦畔北
	ST06		9.0	下位	大畦畔南
	ST07		14.0	下位	大畦畔南
	ST08		25.0	上位	大畦畔南
	ST09		19.0	上位	大畦畔南
	ST11			下位	大畦畔北
	ST10			上位	大畦畔南
	ST12		12.0	下位	大畦畔北
ST18			上位	大畦畔南	
62G	ST01	14.5		上位Ⅱ	方形土坑1*
	ST02			上位	
	ST03			上位	
	ST05			上位	
	ST06			上位	
63EF	ST01			上位	
	ST02		16.5	上位	
	ST03		15.5	上位	
	ST04			上位	方形土坑2
	ST05			上位	
	ST06	15.5	14.6	上位	
	ST07	16.0	14.7	上位	
	ST08	15.2	13.8	上位	方形土坑1
	ST09	16.3	12.5	上位	
	ST10	15.7		上位	方形土坑2
	ST11		18	上位	方形土坑1
ST12	11.4	18	上位		
ST13	15.8	18	上位	方形土坑2	
ST14	16.0	18	上位		
ST15	16.4	18	上位		
ST16	17.0	18	上位		
ST17		18	上位	方形土坑2	
63D	ST01			上位	
	ST02	12.6		上位	
	ST03			上位	
	ST04		10.2	上位	
	ST05		11.0	上位	
	ST06		11.2	上位	
	ST07		10.5	上位	方形土坑5
	ST08		11.5	上位	方形土坑3
	ST09		11.6	上位	方形土坑5

調査区	遺構	南北†	東西§	時期	備考
63D	ST10		10.2	上位	方形土坑1
	ST11		8.8	上位	方形土坑2
	ST12		9.7	上位	
	ST13		10.2	上位	
	ST14			上位	
	ST15	13.8		上位	方形土坑2
62H	ST16			上位	方形土坑1
	ST01			上位	方形土坑3
	ST02		14.0	上位	方形土坑13
89A	ST03			上位	方形土坑3
	ST01			上位	
	ST02			上位	方形土坑5
	ST03		9.8	上位	
	ST04	13.3	9.8	上位	方形土坑5
63L	ST05		9.6	上位	方形土坑8
	ST01			上位	方形土坑4
	ST02	13.0	14.8	上位	方形土坑2
	ST03			上位	
	ST04			上位	
63G	ST05			上位	
	ST102	24.0		上位	
	ST103			上位	
	ST104		10.2	上位	
	ST105	11.8	9.9	上位	
	ST106		9.6	上位	
	ST107		9.8	上位	
	ST108	16.2	9.4	上位	方形土坑1
	ST109		8.5	上位	
	ST110		10.5	上位	
	ST111		11.0	上位	
	ST112		10.0	上位	
	ST113	14.6	9.8	上位	
	ST114		11.2	上位	
	ST115	22.0	10.8	上位	
	ST116		9.8	上位	
	ST117		12.0	上位	
ST118		12.1	上位		
ST119			上位		
ST120	14.8		上位	方形土坑1	
ST121			上位	方形土坑1	
63H	ST01			上位	
	ST02			上位	
	ST03			上位	
	ST04			上位	
	ST05			上位	方形土坑1
	ST06		9.6	上位	
	ST07	17.2	11.2	上位	
	ST08		10.6	上位	方形土坑1
	ST09		11.2	上位	方形土坑2
	ST10			上位	
	ST11			上位	
	ST12			上位	
	ST13		13.2	上位	
ST14	18.2	12.5	上位		
ST15		13.0	上位		
ST16		11.0	上位		
ST17		11.5	上位		
ST18			上位		
ST19	24.0		上位		
ST20			上位		
63I	ST01			上位	

別表V 遺構一覧表

調査区	遺構	南北†	東西§	時期	備考	
63I	ST02		5.2	上位		
	ST03		9.2	上位		
	ST04		7.5	上位		
	ST05			上位		
89B	ST01			上位		
	ST02	18.0		上位		
	ST03			上位		
	ST04			上位		
	ST05		13.8	上位		
	ST06	9.8		上位		
	ST07	10.0	14.0	上位		
	ST08	10.2	15.2	上位	方形土坑 1	
	ST09			上位		
	ST10	9.2		上位		
	ST11	10.3	13.0	上位	方形土坑 1	
	ST12	11.8	17.2	上位		
	ST13	12.2		上位		
63J	ST01			上位		
	ST02		5.3	上位		
	ST03		2.6	上位		
	ST04		4.4	上位		
	ST05		2.4	上位		
	ST06		6.5	上位		
	ST07		18.0	上位		
	ST08		14.4	上位		
	ST09		14.0	上位		
	ST10			上位		
63C	ST36			上位		
	ST37			上位	方形土坑 4	
	ST38			上位		
	ST40	8.9		上位		
	ST41	10.0	33.8	上位	方形土坑 4	
	ST43	10.0		上位		
	ST46			上位	方形土坑 5	
ST48			上位			
63K	ST01			上位	土坑 1	
	ST02		10.5	上位		
	ST03			上位		
	ST04	9.9		上位	方形土坑 1	
	ST05	9.9	12.0	上位		
	ST06			上位	方形土坑 1	
	ST07			上位		
	ST08			上位		
93A	ST01	10.0	19.4	上位		
	ST02	14.2	19.0	上位		
	ST03			上位		
89Da	ST03	9.5		上位		
	ST04	9.5		上位	方形土坑 2	
89Db	ST05			上位		
	ST01			上位		
	ST02			上位		
	ST03		13.8	上位	方形土坑 4	
	ST04	31.5	14.6	上位	方形土坑 5	
	ST05		16.0	上位	方形土坑 3	
	ST07	11.8	15.6	上位	方形土坑 1	
	ST08		14.6	上位	方形土坑 3	
	ST09			上位	方形土坑 3	
89Dc	ST01			上位		
	ST02		13.6	上位		
	ST03		8.6	上位	方形土坑 1	
	ST04			上位		
89Dc	ST05			上位	方形土坑 2	
	ST06			上位	方形土坑 2	
	ST01			上位		
	ST02		13.0	上位		
	ST03		12.6	上位		
	ST04		12.0	上位		
	ST05	17.4	12.7	上位		
	ST07			上位		
	ST08	16.5	17.0	上位		
	ST09	16.0	15.3	上位		
	ST11			上位		
	ST12	18.0	18.0	上位	方形土坑 2	
	ST13	12.5	17.8	上位	方形土坑 5	
	ST14	9.8	18.0	上位	方形土坑 1	
	ST15			上位	方形土坑 5	
	ST16			上位		
	ST17	12.5		上位		
	ST18			上位		
89Ea	ST01			上位		
	ST02			上位		
89Eb	ST01	11.8		上位	方形土坑 5	
	ST02	11.5	19.0	上位	方形土坑 1	
	ST03	11.8		上位		
	ST04	11.3		上位	方形土坑 1	
	ST05	11.3		上位		
89Ec	ST01			上位		
	ST02			上位		
	ST03	9.3		上位		
	ST05	10.3		上位	方形土坑 2	
	ST06			上位	方形土坑 1	
	ST07			上位	方形土坑 1	
89Fa	ST01	9.5		上位		
	ST02	9.5	20.0	上位		
	ST03			上位		
	ST04			上位		
	ST05			上位		
89Fb	ST02			上位		
	ST03		11.3	上位		
	ST04	10.3	21.5	上位	方形土坑 1	
	ST06			上位		
	ST07	11.1	12.3	上位		
	ST08	10.4	18.2	上位		
	ST10	10.5		上位		
	ST11	10.2	12.0	上位		
	ST12	10.3		上位	方形土坑 1	
	ST13			上位		
	ST14		21.0	上位	方形土坑 1	
	89Ib	ST03		7.0	江戸	
		ST05			江戸	

† 南北方向の大きさ(畦畔の中央部にて計測)
 § 東西方向の大きさ(畦畔の中央部にて計測)
 & 下位水田に所属するもの
 ‡ 大畦畔(町境)に接するものを表記、その接する方向
 ()は復元推定
 || 上位水田に所属するもの
 ∞ 方形土坑が存在するもの。その個数を表記
 --- ST11～ST17まで南に大畦畔が存在する

●縄文土器

番号	口径	調査区	備考
1	26.7	62EF	松河戸火山灰層直下
2	28.6	62EF	P-239
3		63La	
4		63La	
5		63La	
6		63La	
7		63La	
8		63La	
9		63La	
10		63La	
11		63La	P-01
12		63La	
13		62EF	松河戸火山灰層直下
14		62EF	松河戸火山灰層直下
15		62EF	松河戸火山灰層直下
16		62EF	松河戸火山灰層直下
17		62EF	松河戸火山灰層直下
18		62EF	松河戸火山灰層直下
19		62EF	松河戸火山灰層直下

口径はcm単位

●突帯文

番号	口径	調査区	遺構	備考
20	18.0	89D	SD120	変容壺
21	36.6	89D	SD120	
22	17.2	89D	SD120	変容壺
23		89D	SD120	
24		89D	SD120	
25		89D	SD120	
26		89D	SD120	
27		89D	SD120	
28		89D	SD120	
29		89D	SD120	大洞A系統

●その他

番号	口径	区	遺構	備考
52	11.4	89D	SD120	遠賀川系土器
63	23.0	89D	SD120	遠賀川系土器鉢
64	20.1	89D	SD120	遠賀川系土器鉢
67	13.2	89D	SD120	糸痕文系内傾口縁土器
111		89D	SD120	その他の系統の土器
112		89D	SD120	その他の系統の土器
113		89D	SD120	その他の系統の土器

弥生土器分類は「山中遺跡」

愛教果埋蔵文化財センター調査報告書第40集に準ずる

*番号は図版および登録番号と同じ

●遠賀川系壺

番号	口径	区	遺構	A	B	C	D	E	備考
30		89D	SK102	II			Ba 4		
31		89D	SK102					Ba 4	
32		89D	SK102					Ba 5	
38		89D	SK104					Ba 5	
39		89D	SK104					Ba 3	
41		89D	SD05				Ab 3 +	Ab 6	
42		89D	SD05					Aa 3	
43		89D	SD05					Ba 7	
44		89D	SD05					Ch 1 +	
45		89D	SD05					Cb 2	
46	19.0	89D	SD05	II	無	無	Ac10		
53	19.2	89D	SD120-3	I		無	Cc 2		※
54	23.2	89D	SD120-3	II	無	無	Aa 2		
55	20.3	89D	SD120-3	I	無	無	Ba 3		
56	17.9	89D	SD120-2	II	無	無	Ba 3 +		
57		89D	SD120-3				Ab 4 +	Ab 3 +	
58		89D	SD120-3	I		無	Aa 1		※
59		89D	SD120-3	II			Ab 4 +		
60		89D	SD120-3	II			Ba 5		
68		89D	SD120-1					Ca 1 +	
69		89D	SD120-1					Ba 5	
71		89D	SD120-2					Ba 5 +	
72		89D	SD120-2					Ba5,Ba2+	
73		89D	SD120-2					Ba 4 +	
74		89D	SD120-2					Ba 3 +	
75		89D	SD120-2					Ba 3 +	
76		89D	SD120-2					Ca 1 +	
77		89D	SD120-2					Cc 2	
80		89D	SD120-3	I			Ba 1		
81		89D	SD120-3					Ba 3 +	
82		89D	SD120-3					Ba 5	
83		89D	SD120-3					Ba 3 +	
84		89D	SD120-3					Ba 5	
85		89D	SD120-3					Ba 3 +	
86		89D	SD120-3					Ba 4	
87		89D	SD120-3					Ba 4 +	
88		89D	SD120-3					Ab 3 +	
89		89D	SD120-3					Aa 2	
90		89D	SD120-3					Ca 2	
91		89D	SD120-3					Cc 1 +	

※は赤褐色、他は褐色を呈するもの

口径の単位はcm

A：口縁形態 B：口縁端部の文様調整 C：口縁内面の文様調整

D：●部の文様調整 E：体部の文様調整

●遠賀川系甕

番号	口径	区	遺構	A	B	C	D	E	備考
33	23.4	89D	SK102	IIa	有b	b	Aa 3	a	
34	26.2	89D	SK102	I	有b	b	Aa 2	a	
35		89D	SK102	I	有b	b	Aa 3 +	a	
36		89D	SK102				Aa 3	a	
47	21.2	89D	SD05	I	無	b(ハケ)	無	a	
48	24.4	89D	SD05	IIa	有b	b	Aa 4	a	
61	14.4	89D	SD120-1	I		b	Aa 4	a	
62	38.6	89D	SD120-3	I	無	b	無	a	
70		89D	SD120-1	I	無	b	無	a	
78		89D	SD120-2	IIa	無	b	Ab 2 +		
79		89D	SD120-2				Aa 2 +	a	

A：口縁形態 B：口縁端部の文様と調整 C：その内面

D：体部文様 E：体部の調整

●条痕文甕

番号	口径	区	遺構	A	B	C
37		89D	SK101	有d	b	c
40		89D	SK104	無	b	e
51		89D	SD05	無	b	e
92		89D	SD120-1	有d	b	e
93		89D	SD120-2	無	b	e
95		89D	SD120-2	有c	b	e
96		89D	SD120-2	無	b	e
97		89D	SD120-2	無	b	e
102		89D	SD120-3	無	b	e
103		89D	SD120-3	有d	b	e
104		89D	SD120-3	有b	b	e
105		89D	SD120-3	無	b	e
106		89D	SD120-3	無	b	e
107		89D	SD120-3	無	b	e
108		89D	SD120-3	有c (内面c)	b	e
109		89D	SD120-3		b	e

A：口縁部文様

B：体部外面調整 C：体部内面調整

●条痕文壺

番号	口径	区	遺構	A	B	C	D
49		89D	SD05	有a		b	e
50		89D	SD05	無		b	e
65	20.1	89D	SD120-1	有a		b	e
66	13.2	89D	SD120-2			b	e
94		89D	SD120-2	無			e
98		89D	SD120-2			b	e
99		89D	SD120-3	無		b	e
100		89D	SD120-3	無		b	e
101		89D	SD120-3	無		b	e
110		89D	SD120-3			b	e

A：口縁部文様 B：体部文様

C：体部外面調整 D：体部内面調整

●石器

番号	登録番号	タテ	ヨコ	厚さ	重さ	石材	調査区	遺構
石鏃	114	S-001		1.8	0.5 (3.9)	チャート	62F	
	115	S-002	(1.4)		0.1 (0.3)	チャート	62F	
	116	S-003	(1.4)		0.1 (0.2)	チャート	62F	
	117	S-004	1.5	(1.4)	0.2 (0.2)	チャート	62E	
	118	S-005	1.5	1.6	0.2 0.4	下呂石	62F	
	119	S-006	1.5	(1.7)	0.3 (0.6)	チャート	62F	
	120	S-007	(1.3)	1.2	0.1 (0.2)	チャート	62F	
	121	S-008	(1.4)	1.2	0.2 (0.3)	チャート	62F	
	122	S-009	(1.6)	(1.3)	0.4 (0.5)	チャート	62F	
	123	S-010	(1.5)	(1.5)	0.3 (0.3)	チャート	62F	
	124	S-011	1.4	(1.8)	0.2 (0.4)	チャート	62E	
	125	S-012		1.5	0.2 (0.3)	チャート	62F	
	126	S-013	(1.8)	(1.4)	0.2 (0.3)	チャート	62E	
	127	S-014	1.5	(1.3)	0.3 (0.5)	チャート	62F	
	128	S-015	(1.9)	(1.3)	0.2 (0.4)	チャート	62E	
	129	S-016	(2.3)	(1.6)	0.2 (0.8)	チャート	62F	
	130	S-017			0.2 (0.8)	チャート	62F	
	131	S-018	1.7	(1.8)	0.2 (0.6)	チャート	62E	
	132	S-019	(2.0)	2.1	0.3 (0.9)	安山岩	62F	
	133	S-020	(2.1)	(2.0)	0.5 (0.9)	チャート	62F	
	134	S-021	2.1		0.1 (0.4)	チャート	62F	SX105
	135	S-022	2.4	(2.1)	0.2 (0.7)	チャート	62F	
	136	S-023	1.8	1.4	0.3 0.8	下呂石	62F	
	137	S-024	2.4	1.7	0.6 2.2	チャート	62F	
	138	S-025	2.0	1.6	0.3 0.7	下呂石	62E	
	139	S-026	2.3	1.2	0.4 1.0	チャート	62F	
	140	S-027	1.4	1.3	0.2 0.4	チャート	62E	
	141	S-028	1.7	1.3	0.2 0.3	チャート	62F	
	142	S-029	(2.1)	1.7	0.2 (0.6)	チャート	62F	
	143	S-030	(2.4)	(1.7)	0.4 (1.1)	チャート	62E	
	144	S-031	(2.1)	(1.5)	0.1 (0.3)	チャート	62F	
	145	S-032	2.0	1.4	0.2 (0.4)	チャート	63La	
	146	S-033	(2.3)	(1.8)	0.3 (1.7)	チャート	62E	
147	S-034	1.8	1.6	0.5 1.6	チャート	62E		
148	S-035	(2.7)	(2.7)	0.6 (2.4)	チャート	62F		
149	S-036	2.3	(2.5)	0.2 (1.2)	チャート	62E		
150	S-037	2.1	(1.9)	0.3 (1.3)	チャート	62E		

松河戸遺跡

番号	登録番号	タテ	ヨコ	厚さ	重さ	石材	調査区	遺構	
尖頭器	151	S-038		1.6	0.7	(2.9)	チャート	63D	
	152	S-039	6.3	2.7	1.3	19.8	下呂石	89E	
石錐	153	S-040	(2.7)	1.9	0.3	(2.1)	チャート	62F	
	154	S-041	(2.6)	1.9	0.3	(1.3)	チャート	62F	
	155	S-042	(2.6)	2.2	0.4	(2.0)	チャート	62F	
	156	S-043	2.3	1.3	0.3	1.1	チャート	62F	
	157	S-044	2.8	1.4	0.2	1.4	チャート	62F	
	158	S-045	3.3	1.3	0.4	2.7	チャート	62F	
スクレイパー	159	S-046	2.1	2.6	0.4	2.6	チャート	62F	
	160	S-047	2.3	3.1	0.6	5.6	チャート	62F	
	161	S-048	2.3	5.5	0.7	5.7	チャート	62F	
	162	S-049	3.6	4.2	0.4	8.6	チャート	62F	
石匙	163	S-050	5.2	2.7	1.3	14.8	チャート	62F	
	164	S-051	2.6	2.3	0.5	2.2	チャート	62F	
	165	S-052	3.0	3.8	0.5	5.4	安山岩	62F	
	166	S-053	4.2		0.9	(12.1)	チャート	62F	
	167	S-054	2.9	4.6	0.8	9.1	チャート	62F	
	168	S-055	5.3	7.1	1.3	35.8	チャート	62F	
	169	S-056	3.7	4.9	1.1	17.7	チャート	62E	
	170	S-057	1.5	1.6	0.6	2.4	ヒスイ	62E	勾玉
石斧	171	S-058	1.6	1.4	0.7	2.1	ヒスイ	89D	勾玉
	172	S-059	3.8		0.7	(7.9)	滑石	62F	
	173	S-060	7.2	5.2	1.3	59.8	ホルンフェルス	62F	SX101
	174	S-061		3.9	1.5	(56.2)	凝灰岩	62E	
	175	S-062		3.4	1.0	(21.9)	熔結凝灰岩	62E	
	176	S-063	9.5	4.9	3.4	289.0	凝灰質砂岩	62E	
	177	S-064	9.8	5.2	2.5	(8235.6)	熔結凝灰岩	62E	
	178	S-065	12.6	5.6	4.1	514.4	ホルンフェルス	62E	
	179	S-066	12.1	(4.8)	3.3	(232.3)	緑色凝灰岩	62F	
石鎌	180	S-067	4.0	1.8	0.5	4.0	下呂石	89D	
	181	S-068	(2.1)	(1.5)	0.4	(0.7)	下呂石	89D	SD129
	182	S-069	(2.0)	(1.3)	0.2	(0.5)	下呂石	89D	SD108
	183	S-070	(2.3)	1.3	0.5	(0.9)	下呂石	89D	SK104
	184	S-071	3.0	1.3	0.4	1.1	下呂石	89D	SD05
	185	S-072	(2.3)	(1.2)	0.3	(0.5)	下呂石	89D	SK101
	186	S-073	(2.0)	1.2	0.3	(0.5)	下呂石	89D	SK102
石斧	187	S-074		5.4	3.6	(265.4)	変塩基塩岩	89D	SK104
	188	S-075	15.2	7.6	4.8	991.1	変塩基性岩	89D	SK101
	189	S-078	14.2	6.7	2.7	404.7	ホルンフェルス	89D	SD120
	190	S-076		3.2	1.3	(44.9)	頁岩	89D	SD120
	191	S-077	4.9		4.1	(181.2)	はんれい岩	89D	独結石

()は推定
長さの単位はcm、重さはg

●土師器(松河戸式)

遺構	番号	機種分類	口径	底径	器高	備考
62A SK201	192	土師器S字甕	13.6			
	193	土師器S字甕	15.8			
	193	土師器S字甕	14.4			
	194	土師器S字甕	13.0			
	195	土師器S字甕				
	196	土師器甕	13.8			
	197	土師器甕		8.0		
	198	土師器S字甕				
	199	土師器甕	17.8			
	200	土師器甕	16.0			
	201	土師器甕	14.4			
	202	土師器甕				
	203	土師器甕		4.6		
	204	土師器甕				
	205	土師器甕	19.6			
	206	土師器甕	14.4			
	207	土師器甕	13.8			
	208	土師器甕		7.4		
	209	土師器甕	16.0			
	210	土師器甕	14.6			
	211	土師器甕	13.8			
	212	土師器甕	12.2		17.4	
	213	土師器甕	15.0			
	214	土師器甕	16.0			
	215	土師器甕	14.8			
	216	土師器甕		8.8		
	217	土師器甕		10.5		
	218	土師器甕		11.5		
	219	土師器甕	18.6			
	220	土師器甕	13.8			
	221	土師器甕	17.6			
	222	土師器甕	12.8			
	223	土師器甕				
	224	土師器甕				
	225	土師器甕	11.5			
	226	土師器甕				
	227	土師器高杯				
	228	土師器高杯	19.2			
	229	土師器高杯				
	230	土師器高杯				
	231	土師器高杯	21.5	14.4	14.3	
	232	土師器高杯		12.8		
	233	土師器高杯				
	234	土師器高杯	12.6			
	235	土師器高杯	17.0			
	236	土師器高杯	16.0			
	237	土師器高杯		12.4		
237	土師器高杯	17.8				
238	土師器高杯		13.8			
239	土師器高杯					
240	土師器高杯		10.6			
241	土師器高杯					
242	土師器高杯					
243	土師器高杯	18.0	13.5	13.4		
244	土師器高杯					
245	土師器高杯					
246	土師器高杯					
247	土師器高杯		10.6			

遺構	番号	機種分類	口径	底径	器高	備考
62A SK201	248	土師器高杯	17.3			
	249	土師器高杯				
	250	土師器高杯	17.5			
	251	土師器高杯		12.6		
	252	土師器壺(小型)	8.2			
	253	土師器壺(小型)	9.4		9.9	
	254	土師器壺				
	255	土師器壺				
	256	土師器壺				
	257	土師器壺		11.0		
	258	土師器壺	14.0			
	259	土師器壺			16.2	
	260	土師器壺	17.8			
	261	土師器壺	17.8			
	262	土師器壺	12.2			
	263	土師器壺	13.5			
	62F SK07	264	土師器壺	11.5		16.0
265		土師器壺	14.0		31.0	
266		土師器				手づくね
267		土師器壺(小型)	12.2		10.1	
268		土師器高杯	20.0	16.5	25.8	
269		土師器高杯	24.0	18.4	15.8	

1 単位はすべて(cm)に統一

●須恵器・灰釉・他

遺構	番号	器種分類	口径	底径	器高	備考
63B SK09	270	須恵器杯蓋	11.9		4.5	
	271	須恵器杯蓋	11.4 ◀		4.7	
	272	須恵器杯蓋	14.3 ◀		5.1	
	273	須恵器高杯		8.1		
	274	須恵器杯蓋	12.8		3.5 ◀	62GSD01
	275	須恵器杯蓋	13.4		4.0	62G
	276	須恵器杯蓋	12.0 ◀		4.6 ◀	63K
	277	須恵器杯身	12.0		5.0	62F
	278	須恵器杯蓋	12.6 ◀		5.5 ◀	62BST01
	279	須恵器杯蓋	15.3		5.3	
62A SD105	280	須恵器杯蓋	15.2 ◀			
	281	須恵器杯蓋	15.0		5.5	
	282	須恵器杯身	13.7 ◀			
	283	須恵器杯身	13.3		5.6	
	284	土師器甕		8.2 ◀		
62A	285	須恵器杯蓋	15.0			SD109
	286	須恵器杯身	14.4 ◀	5.8 ◀		SD109
	287	須恵器杯身	12.4			ST02
	288	須恵器杯身	14.4 ◀		4.8 ◀	ST16
63B NR01	289	須恵器杯身	12.8 ◀		4.0	62G
	290	須恵器杯身	13.0	5.3	5.5	62G
	291	須恵器杯蓋	10.9 ◀		4.9 ◀	
	292	須恵器杯身	10.8 ◀		4.8 ◀	
	293	須恵器杯身	11.0	4.4	4.7	
	294	土師器高杯		10.5 ◀		
	295	土師器S字甕	14.8 ◀			
	296	土師器パレス	17.8 ◀			
	297	土師器台付甕		6.7 ◀	16.5 ◀	
	298	土師器高杯				
	299	土師器高杯		13.0 ◀		
	300	須恵器壺	17.8 ◀			
301	土師器台付甕	22.4 ◀		31.0 ◀		
302	土師器甕	17.0 ◀				
89Ia SD01 91AB SD01	303	須恵器杯蓋	15.8		3.8	
	304	須恵器杯蓋	16.0		3.2	
	305	須恵器杯蓋	15.5		2.5	
	306	須恵器杯蓋	13.6		2.3	
	307	須恵器杯身	14.9 ◀	11.2 ◀	3.7	
	308	須恵器杯身	15.3	10.8	4.8	
	309	須恵器杯身	15.3 ◀	11.4	5.0	
	310	須恵器杯身	15.7 ◀	12.0 ◀	4.7	
	311	須恵器杯身	7.2	10.0	4.5	
	312	須恵器杯身	14.5	10.9	3.5	
	313	須恵器杯身	12.9		4.8	
	314	須恵器杯身	11.6	3.8	4.5	へら記号
	315	須恵器杯身	12.5 ◀	6.4	4.5	
	316	須恵器杯身	11.5	5.7	4.5	へら記号
	317	須恵器杯身	12.8	10.3	4.4	
	318	須恵器杯身	13.8 ◀	10.4 ◀	4.3	
	319	須恵器杯身	14.7	12.5	4.5	
	320	須恵器杯身	9.4	6.2	3.8	へら記号
	321	須恵器杯身	10.7	5.3	3.5	へら記号 ¹⁾
	322	須恵器杯身	11.7		4.7	へら記号
	323	須恵器杯身	11.8		4.6	へら記号
	324	須恵器鉢	20.2 ◀			
	325	須恵器横瓶	10.3		25.3	
	326	須恵器蓋		8.1 ◀		
	327	須恵器杯蓋	10.2			
	328	須恵器杯蓋	10.0		2.8	

遺構	番号	器種分類	口径	底径	器高	備考
89Ia SD01 91AB SD01	329	須恵器杯身	8.4	4.0	3.5	
	330	灰釉碗	14.1	7.4	5.3	
	331	灰釉碗	13.0	7.2	4.4	
	332	灰釉碗	13.8	7.0	4.7	
	333	灰釉碗	14.4	6.6	5.5	
	334	灰釉系碗IA	14.4	7.0	5.5	
	335	灰釉碗	14.2	6.8	5.3	
	336	灰釉碗	15.1	7.2	5.8	
	337	灰釉碗	16.0	6.6	5.5	
	338	灰釉皿	11.2	6.3	2.6	
	339	灰釉皿	10.3	5.0	2.1	
	340	灰釉皿	11.9	5.8	2.5	
	341	灰釉皿	3.9	6.8	2.8	
	342	灰釉皿	13.6	7.2	3.0	
	343	灰釉碗	11.0	4.8	4.7	
	344	灰釉碗	11.0	6.4	4.0	
	345	灰釉碗	14.6			
	346	灰釉碗	15.1	6.3	6.2	
	347	灰釉碗	15.5	7.2	6.1	
	348	灰釉碗	15.0	7.1	6.0	
	349	灰釉碗	15.0	7.1	6.8	
	350	灰釉碗	15.0	7.7	6.5	
	351	灰釉碗	10.8		3.7	
	352	灰釉碗	13.8	6.1	5.9	
	353	灰釉系碗0	16.7	7.7	5.5	
	354	灰釉碗	14.8	7.8	4.6	
	355	灰釉碗	15.1	7.2	4.4	
	356	灰釉耳皿		4.2	3.7	
	357	灰釉壺		5.0		
	358	土師器碗		5.0		
	359	土錘H・II	2.1	26.6	6.0	2
	360	土錘H・IIIB	1.1	9.9	6.0	
	361	土錘H・IIIA	1.5	13.0	5.5	
	362	土錘S・IIIB	1.1	4.6	5.5	
	363	土錘H・IIIA	1.6	8.6	4.2	
	364	土錘H・IIIA	0.9	2.2	2.9	
	365	須恵器杯蓋	14.8		2.4	62A
366	須恵器杯身	12.7	7.0	3.6	62A✓	
367	須恵器杯身		6.9		「加知」 ³⁾	
368	灰釉碗	12.8	6.8	4.9	89Ia	
369	灰釉系碗		6.8		89IaSD05	
370	灰釉硯				89IaSD05	

- 1 へら記号「×」が主体
- 2 土錘H(軟質淡褐色)・S(硬質灰色)を表現
- 3 須恵器杯底部に墨書表記
✓墨書表記

◀ は推定値

●灰釉系陶器

遺構	番号	器種分類	口径	底径	器高	備考	区	
89Ia SD01	371	白磁鉢	15.6				89Ia	
	372	灰釉鉢	19.5	9.7	11.8		89Ia	
	373	白色陶器土器		7.1			89Ia	
	374	灰釉碗		7.2		「西」	89Ia	
	375	須恵器蓋	6.3				89Ia	
	376	灰釉耳皿		4.0	2.5		89Ia	
	377	土師器系鍋	18.6			清郷型	89Ia	
	378	灰釉系碗 I B	13.6	6.9	4.8		89Ia	
	379	灰釉系碗 I A	16.6	7.0	5.8		89Ia	
	380	灰釉系碗 I B	16.6	7.2	5.4	「一」	89Ia	
	381	灰釉系碗 I B	15.9	7.7	5.2		89Ia	
	382	灰釉系碗 I B	17.2	8.4	4.7		89Ia	
	383	灰釉系小碗A	8.6	4.3	2.1		89Ia	
	384	灰釉系小碗A	8.8	4.6	2.8		89Ia	
	385	灰釉系小碗A	8.4	4.2	3.0		89Ia	
	386	土師器系皿	9.0	3.6	1.8		89Ia	
	62B SX101	387	灰釉系皿 I B	8.2	4.4	2.3		62B
		388	灰釉系皿 I B	8.6	4.2	2.6	「山大」	62B
389		灰釉系碗 I B	15.6	7.9	4.6		62B	
390		灰釉系碗 I B	16.0	6.7	4.5		62B	
391		灰釉系碗 I A	16.3	7.4	4.7		62B	
392		灰釉系碗 I B	16.2	7.4	5.0		62B	
393		灰釉系碗 I B		7.0		✓	62B	
394		灰釉系碗 I B		7.2		「一」	62B	
395		灰釉系碗 I B	16.2	8.6	4.5		62B	
396		灰釉系碗 I B	15.4	7.0	4.7		62B	
397		灰釉系碗 I B	15.6	8.0	5.5		62B	
398		灰釉系碗 II A	16.0	7.4	5.7		62B	
399		灰釉系碗 I B	15.8	7.6	4.8		62B	
400		灰釉系碗 I B	7.7	7.0	5.1		62B	
401		灰釉系碗 I B	16.2	7.4	5.4		62B	
402		灰釉系碗 I A	17.0	8.0	5.2		62B	
403		灰釉系碗 I A	16.0	7.4	5.2		62B	
404		灰釉系碗 I A	16.8	8.0	5.5		62B	
405	灰釉系碗 I A	15.4	7.1	5.5		62B		
406	灰釉系碗 II A	16.2	7.4	5.9		62B		
407	灰釉蓋		7.8			62B		
62E SE01	408	灰釉系碗 I B		8.4		SD108	62A	
	409	灰釉系碗 I A	15.8	8.2	5.3	最下層	62E	
	410	灰釉系碗 II A	14.1	5.0	5.1		62E	
	411	灰釉系皿 I B	8.2	5.0	2.2		62E	
	412	灰釉系皿 I B	8.6	4.5	2.7		62B	
	413	灰釉系小碗	9.6	4.4	2.5	下層	62E	
62B 集石	414	灰釉系碗 I A	15.9	7.4	5.1		62B	
	415	灰釉系碗 I A	13.4	7.0	5.4		62B	
	416	灰釉系碗 I B		7.2		「大」	62B	
	417	灰釉系碗 I A	17.4	8.0	5.3		62B	
	418	灰釉系碗 I B	15.4	6.8	4.5		62B	
	419	灰釉系碗 I B		7.8		✓	62B	
	420	灰釉系碗 II A	14.4	5.5	5.9		62B	
	421	灰釉系碗 I B		7.1		「大」	62B	
	422	灰釉系 I A	8.3	3.6	2.4		62B	
	423	灰釉系羽釜					62B	
89Dc SD01 89Eb SD03	424	加工円盤 I b	2.4	8.7	2.2		62B	
	425	加工円盤 I a					62B	
	426	加工円盤 I a	2.8	12.1	2.9		62B	
	427	灰釉系碗 I B	17.8	8.0	4.7		89Dc	
	428	灰釉系碗 I B	15.0	7.0	5.4		89Dc	
	429	灰釉系碗 I A	15.5	6.7	4.7		89Dc	
	430	灰釉系碗 I B	14.4	6.8	4.3		89Dc	
	431	灰釉系碗 I A	15.1	6.8	5.4		89Dc	
	432	灰釉碗		7.1			89Dc	
	433	灰釉系碗 I B	16.6	8.0	5.1		89Eb	

遺構	番号	器種分類	口径	底径	器高	備考	区
89Dc	434	灰釉系碗 I B	16.0	7.7	4.8		89Eb
	435	灰釉系碗 I B	16.6	7.4	5.3		89Eb
SD01	436	灰釉系碗 I B	16.9	7.7	5.1		89Eb
89Eb SD03	437	施釉壺					89Eb
	438	灰釉系小碗A	9.0	4.6	2.9		90C
	439	灰釉系皿 I B	8.5	4.0	2.1		89Dc
	440	灰釉系皿 I B	8.6	4.6	2.2		89Eb
	441	灰釉系皿 I B	8.2	4.8	1.9		89Eb
	442	灰釉系皿 II	7.8	4.6	1.7		89Eb
	443	灰釉系皿	8.2	5.4	1.3	口縁加工	89Eb
	444	土師器系鍋	20.0			伊勢型	89Eb
	445	灰釉系甕	23.4				89Eb
	446	灰釉系壺		13.2			89Eb
89Eb SD151 SD154	447	灰釉系碗 I B	15.8	6.8	5.1		89Eb
	448	施釉碗	116				89Eb
	449	加工円盤 II	4.0	22.0	4.4		89Eb
	450	灰釉系皿 II	7.8	5.1	1.6		89Eb
	451	灰釉系皿 I B	8.5	5.0	1.7		89Eb
	452	灰釉系皿 II	8.4	5.2	1.9		89Eb
	453	灰釉系皿 I B	7.8	4.4	2.8	瀬戸産	89Eb
	454	灰釉系皿 I B	8.0	4.2	2.3		89Eb
	455	灰釉系皿 I B	7.7	4.0	2.2		89Eb
	456	土師器系鍋	27.6				89Eb
89Eb SD167	457	土師器系鍋	26.6				89Eb
	458	灰釉碗		7.4			89Eb
	459	灰釉碗		7.9			89Eb
89Fa SD122	460	灰釉系皿 II	7.7	5.0	1.9	瀬戸産	89Eb
	461	土師器系皿	8.0	4.2	1.5		89Eb
	462	灰釉系皿 II	7.2	3.7	5.3		89Eb
89Eb SD177	463	加工円盤 I b	3.3	10.3	3.1		89Eb
	464	加工円盤 I a	2.7	11.3	2.5		89Eb
	465	加工円盤 I a	2.8	10.5	2.5		89Eb
	466	加工円盤 I a	2.4	7.1	2.3		89Eb
	467	加工円盤 II	2.7	8.0	2.6		89Eb
	468	灰釉系皿 II	7.5	4.8	2.5		89Eb
	469	灰釉系皿 I B	8.6	4.8	1.8		89Eb
89Eb SD177	470	灰釉系羽釜	29.2				89Eb
	471	灰釉系皿 I B	8.0	4.5	2.2		89Eb
	472	灰釉系皿 II	8.2	5.4	1.8	「×」	89Eb
	473	灰釉系皿 II	8.5	5.9	1.3	「×」	89Eb
	474	灰釉系皿 III A	7.9	4.4	1.4		89Eb
	475	灰釉系碗 II	14.0	5.0	5.1		89Eb
	476	灰釉系碗 II B		5.6			89Eb
	477	灰釉系碗 III A		4.7		「○」	89Eb
	478	加工円盤 I a	1.6	9.8	2.4		89Eb
	479	土鐿H・II	1.8		4.5		89Eb
89Fa SD105	480	灰釉系碗 I A	16.0	6.0	4.8		89Fa
	481	灰釉系碗 I B	15.2	6.7	5.0		89Fa
	482	灰釉系碗 I B	14.4	6.3	5.0		89Fa
	483	灰釉系碗 I A	15.3	6.4	5.0		89Fa
	484	灰釉系碗 I A	15.4	7.4	4.7		89Fa
	485	灰釉系碗 I B	14.6				89Fa
	486	灰釉系碗 I B	15.8	7.1	5.9		89Fa
	487	灰釉系碗 I A	14.1	5.4	5.2		89Fa
	488	灰釉系碗 I B	14.4				89Fa
	489	灰釉系碗 II A	14.6	5.7	5.4		89Fa
	490	灰釉系碗 I B	14.2	6.6	4.7		89Fa
491	灰釉系碗 I B	16.0	7.8	6.0		89Fa	
492	灰釉系碗 II A	14.6	7.2	5.9		89Fa	
493	灰釉系碗 II A	14.8	1.6	5.7		89Eb	
494	灰釉系碗 III A	13.2	6.4	5.9		89Fa	
495	灰釉系碗 II A	14.5	6.7	5.7		89Fa	
496	灰釉系碗 III A	7.0	5.0	5.6		89Fa	
497	灰釉系碗 III A	10.8	3.8	5.0		89Fa	
498	灰釉系碗 III A	11.2	3.9	5.5		89Fa	
499	灰釉系碗 III A	11.0	3.7	5.0		89Fa	
500	灰釉系碗 I B	14.2	5.8	5.5		89Fa	

松河戸遺跡

遺構	番号	器種分類	口径	底径	器高	備考	区
89Fa SD105	501	灰軸系碗 I B	12.8	5.5	4.6		89Fa
	502	灰軸系碗 II B	14.4	4.8	5.5		89Fa
	503	灰軸系碗 II B	14.0	6.0	5.8		89Fa
	504	灰軸系碗 II B	14.0	6.4	5.2		89Fa
	505	灰軸系碗 II B	13.8	6.4	5.3		89Fa
	506	灰軸系碗 III A	13.5	4.8	5.3		89Fa
	507	灰軸系碗 III A	14.0	5.6	6.1		89Fa
	508	灰軸系碗 III A	14.4	5.1	6.0		89Fa
	509	灰軸系碗 III A	14.2	5.0	5.5		89Fa
	510	灰軸系碗 II B	13.4	4.8	5.3		89Fa
	511	灰軸系碗 III A	13.8	6.4	5.3		89Fa
	512	灰軸系碗 II B	13.8				89Fa
	513	灰軸系碗 II B	14.6	6.0	5.3		89Fa
	514	灰軸系碗 II B	13.7	5.8	4.9		89Fa
	515	灰軸系碗 I B	13.8	5.4	4.8		89Fa
	516	灰軸系碗 I B		6.8			89Fa
	517	灰軸系碗 II A		6.4			89Fa
	518	灰軸系碗 II A		5.6			89Fa
	519	灰軸系碗 II A		6.2			89Fa
	520	灰軸系碗 III A	13.2	4.5	5.7	文様	89Fa
	521	灰軸系碗 III A	13.6	4.7	5.7		89Fa
	522	灰軸系碗 III B	13.6	5.0	5.7		89Fa
	523	灰軸系碗 III A	13.7	4.6	5.6	「×」	89Fa
	524	灰軸系碗 III A	13.3	5.2	5.6	「一」	89Fa
	525	灰軸系碗 III B	13.5	4.6	5.4		89Fa
	526	灰軸系碗 III A	14.3	5.4	5.6		89Fa
	527	灰軸系碗 III B	13.5	5.0	5.3	「つる」	89Fa
	528	灰軸系碗 III A	13.4	4.4	5.5	「○」	89Fa
	529	灰軸系碗 III B	13.2	4.6	5.5	「大」	89Fa
	530	灰軸系皿 I B	7.7	4.8	2.1	「一」	89Fa
	531	灰軸系皿 III B	8.3	3.8	1.5	「一」	89Fa
	532	灰軸系皿 II	7.8	4.8	1.5	「一」	89Fa
	533	灰軸系皿 I B	8.3	4.6	1.9	「一」	89Fa
	534	灰軸系皿 II	8.1	4.5	1.7	「一」	89Fa
	535	灰軸系皿 II	7.5	4.9	1.7	「の」	89Fa
	536	灰軸系皿 II	7.7	4.5	1.5	「の」	89Fa
	537	灰軸系皿 I B	8.2	4.5	2.0	精製	89Fa
	538	灰軸系皿 I B	7.9	3.8	2.0		89Fa
	539	灰軸系皿 I B	7.4	4.2	1.7		89Fa
	540	灰軸系皿 II	8.0	5.4	1.8		89Fa
	541	灰軸系皿 I B	7.8	4.8	1.9		89Fa
	542	灰軸系皿 II	7.8	5.0	1.8		89Fa
	543	灰軸系皿 I B	8.1	4.0	2.0		89Fa
	544	灰軸系皿 I B	7.3	3.5	1.8	精製	89Fa
	545	灰軸系皿 II	7.4	4.5	1.8		89Fa
	546	灰軸系皿 I B	8.2	4.0	2.3		89Fa
	547	灰軸系皿 I B	7.4	4.4	2.0		89Fa
	548	灰軸系皿 I B	7.8	3.8	2.0		89Fa
	549	灰軸系皿 I B	7.3	4.3	2.1		89Fa
	550	灰軸系皿 I B	7.8	5.2	2.0		89Fa
	551	灰軸系皿 I B	8.0	3.6	2.1	精製	89Fa
	552	灰軸系皿 I B	8.3	2.1	2.1		89Fa
	553	灰軸系皿 I B	8.8	3.8	2.0	精製	89Fa
	554	灰軸系皿 II	7.8	5.0	1.6		89Fa
	555	灰軸系皿 II	7.6	5.0	1.9		89Fa
	556	灰軸系皿 II	7.8	5.2	1.8		89Fa
	557	灰軸系皿 II	7.7	4.2	1.8		89Fa
558	灰軸系皿 III A	8.2	5.3	1.5		89Fa	
559	灰軸系皿 II	8.3		1.7		89Fa	
560	灰軸系皿 II	8.6	5.2	1.5		89Fa	
561	灰軸系皿 II	7.9	4.8	1.4		89Fa	
562	灰軸系皿 II	7.8	4.2	1.5		89Fa	
563	灰軸系皿 I B	8.0	4.4	2.1		89Fa	
564	灰軸系皿 II	8.3	4.6	1.7		89Fa	
565	土師器系皿	7.9		1.6		89Fa	
566	灰軸系甕	27.0				89Fa	
567	灰軸系甕	24.2				89Fa	

遺構	番号	器種分類	口径	底径	器高	備考	区		
89Fa SD105	568	灰軸系羽釜	25.4				89Fa		
	569	灰軸系鉢	36.0				89Fa		
	570	灰軸系鉢	31.2				89Fa		
	571	灰軸系鉢	28.4				89Fa		
	572	灰軸系鉢		12.0			89Fa		
	573	灰軸系甕		16.5			89Fa		
	574	灰軸系甕		17.0			89Fa		
	575	灰軸系壺		11.3			89Fa		
	576	丸瓦					89Fa		
	577	土師器系鍋	28.2				89Fa		
	578	土師器系鍋	25.5				89Fa		
	579	土師器系鍋	24.4				89Fa		
	580	土師器系鍋	23.6				89Fa		
	581	土師器系鍋	23.6				89Fa		
	582	土師器系鍋	23.8				89Fa		
	583	土師器系鍋	23.5				89Fa		
	584	灰軸系羽釜	29.4				89Eb		
	585	灰軸系甕	33.0				89Eb		
	586	灰軸系甕	25.0				89Eb		
	587	施軸壺	10.6				89Eb		
	588	灰軸系碗 II A	13.9	6.6	5.9		89Eb		
	585	灰軸系碗 III A	13.7	5.6	5.6		89Eb		
	590	灰軸系碗 II B	13.2	5.4	5.0		89Eb		
	591	灰軸系皿 II	8.2	4.8	1.6		89Eb		
	592	灰軸系皿 II	7.8	4.4	1.6		89Eb		
	593	灰軸系皿 II	7.8			瀬戸産	89Eb		
	594	灰軸系皿 II	7.7	5.0	1.6	瀬戸産	89Eb		
	595	灰軸系皿 I B	7.3	4.4	1.9		89Eb		
	596	灰軸系皿 II	7.8	4.4	1.3		89Eb		
	597	灰軸系皿 I B	8.4	4.8	2.2		89Eb		
	598	土鍬H・III B	1.4	16.4	5.4		89Eb		
	599	土鍬H・II	4.3		10.3		89Eb		
	600	土鍬H・II	4.0		11.3		89Eb		
	601	土鍬H・II	3.6	90.3	8.3		89Eb		
	602	土鍬H・II	4.1		8.3		89Eb		
	603	軒丸瓦					89Eb		
	604	灰軸系碗 II	13.2	5.7	5.5		89Eb		
	605	灰軸系皿 I B	7.8	3.7	2.2		89Eb		
	606	灰軸系皿 II	7.5	4.6	1.7		89Eb		
	607	灰軸系碗 0	15.4	7.8	5.4		89Eb		
	608	灰軸系碗 I B	14.4	6.9	5.0		89Eb		
	609	灰軸系碗 II A	13.7	5.4	5.1		89Eb		
	610	陶丸	1.9	9.0		瀬戸産	89Eb		
	611	加工円盤 I a	2.4	8.1	2.0		89Eb		
	612	加工円盤 I a	2.4	9.4	2.6		89Eb		
	613	加工円盤 I b	2.5	7.9	1.8		89Eb		
	89Fa SD110	614	灰軸系碗 I B	16.1	8.7	5.3		89Fa	
		615	灰軸系碗 II A	14.6	6.2	6.2		89Eb	
		616	土師器系皿	7.7	2.2	1.7		89Eb	
	89Fa SD109	617	灰軸系碗 I B		6.0			89Eb	
		618	灰軸系碗 II B	14.4	6.0	5.4		89Fa	
		619	灰軸系碗 II B	13.4	5.8	5.7		89Eb	
		620	灰軸系皿 I B	8.0	4.0	2.1		89Eb	
		621	灰軸系皿 I B	8.4	5.2	1.8		89Eb	
		622	灰軸系皿 I B	8.0	4.4	2.6		89Fa	
		89Eb SD111	623	土師器系鍋	20.0			伊勢型	89Fa
			624	灰軸系碗 I B	13.0				89Fa
			625	灰軸系碗 0	17.8	7.7	6.1		89Eb
		SD176	626	灰軸系皿 I A	7.7	3.8	2.4		89Eb
	627		灰軸系皿 II	7.8	4.2	2.1		89Eb	
	SD104	628	土師器系鍋	27.6			伊勢型	89Fa	
		629	灰軸系皿 I B	7.9	4.5	1.8		89Fa	
	SD120	630	灰軸系碗 II A	14.6	6.7	5.7		89Eb	
631		灰軸系碗 I B	14.6	6.6	5.7		89Eb		
632		灰軸系碗 I A	14.3	6.7	5.3		89Eb		
633		灰軸系碗 I B	14.6		5.1		89Eb		

別表VI 遺物一覧表

遺構	番号	器種分類	口径	底径	器高	備考	区	
SD120	634	灰釉系碗 I B	14.5	7.0	5.1		89Eb	
	635	灰釉系皿 II	8.2	5.9	1.3	「〇」	89Ea	
	635	灰釉系碗 II A	13.6	5.7	5.5		89Eb	
	536	灰釉系壺	15.8				89Eb	
	637	白磁碗	16.0				89Eb	
	638	土師器系皿	11.6		3.0		89Eb	
	639	土師器系皿	13.1	7.0	3.1		89Eb	
	640	土鍾H・III B	2.0	25.9	6.8		89Eb	
	641	加工円盤 I a	2.6	8.3	2.5		89Eb	
	642	加工円盤 I b	2.8	7.8	2.3		89Eb	
	643	灰釉系皿 II	8.8	5.7	1.7		89Eb	
	644	灰釉系皿 II	8.1	4.0	1.8		89Eb	
	645	灰釉系皿 II	8.1	5.4	2.1		89Eb	
	646	灰釉系皿 II	8.0	5.6	1.3		89Eb	
	647	灰釉系皿 II	7.8	4.3	1.5		89Eb	
	648	灰釉系皿 II	8.0	5.5	1.8		89Eb	
	649	灰釉系皿 I B	8.9	5.5	2.3		89Eb	
	651	灰釉系皿 I B	8.2	5.5	2.3		89Eb	
	652	灰釉系皿 II	8.4	5.0	2.0		89Eb	
	653	灰釉系皿 I B	7.6	4.5	2.0		89Eb	
	654	灰釉系皿 I B	7.1	4.4	1.9		89Eb	
	655	灰釉系皿 I B	8.3	4.4	2.0		89Eb	
	656	灰釉系皿 I B	7.8	4.0	2.3	精製	89Eb	
	657	灰釉系皿 I B	8.0	4.4	2.0		89Fa	
	658	灰釉系皿 I B	7.7	4.2	2.3		89Eb	
	659	灰釉系皿 I A	7.0	3.2	1.7		89Fa	
	660	灰釉系皿 I B	7.7	4.8	1.9		89Eb	
	661	灰釉系碗 I B	14.6	6.8	5.2		89Fa	
	89Fa SK119	662	灰釉系碗 I B	15.2	7.0	5.3		89Fa
		663	灰釉系碗 I A	15.3	6.3	5.6		89Fa
		664	灰釉系碗 II A	15.0	6.5	5.3		89Fa
		665	灰釉系碗 II A	14.7	7.3	5.6		89Fa
		666	灰釉系碗 II A	14.3	6.5	5.5		89Fa
667		灰釉系碗 II A	13.4	6.5	5.9		89Fa	
668		灰釉系皿 I B	8.0	4.4	1.8		89Fa	
89Eb SK174	669	灰釉系碗 II B	13.6	5.8	5.6		89Eb	
	670	灰釉系碗 II A	14.7	5.4	5.5		89Eb	
	671	灰釉系碗 III A	13.4	5.4	5.9		89Eb	
	672	灰釉系皿 II	8.2	4.8	1.8		89Eb	
673	灰釉系皿 II	8.0	4.4	2.0		89Eb		
674	加工円盤 I a	2.6	11.6	2.8		89Eb		
89Eb SK180	675	灰釉系碗 III A	13.8	5.0	5.8	「一」	89Eb	
	676	灰釉系碗 III A	13.7	4.8	5.9		89Eb	
	677	灰釉系碗 III A	14.2	5.0	5.3		89Eb	
	678	灰釉系碗 III A	13.8	4.6	5.8		89Eb	
	679	灰釉系碗 III A	13.4	4.8	6.4		89Eb	
	680	灰釉系碗 II B	13.8	5.8	5.9		89Eb	
	681	灰釉系皿 II	8.0	5.0	2.1		89Eb	
	682	土師器系皿 III	8.4	6.0	1.1		89Eb	
	683	施釉甕		4.4			89Eb	
684	灰釉系鉢	28.4				89Eb		
89Eb SK168	685	土師器系鍋	25.0			伊勢型	89Eb	
	686	土師器系鍋				伊勢型	89Eb	
	687	灰釉系碗 I B	16.0	7.6	4.7		89Eb	
	688	灰釉系皿 I B	7.4	4.0	2.1		89Eb	
	689	灰釉系皿 I B	7.9		1.9		89Eb	
	690	灰釉系碗 I B	14.5	7.0	5.0		89Eb	
89Eb SK152	691	灰釉系碗 I A	15.1	7.1	5.4		89Eb	
	692	灰釉系鉢		9.0			89Eb	
	693	灰釉系皿 I B	8.0	5.2	1.6		89Eb	
	694	灰釉系皿 I B	8.1	3.8	2.1		89Eb	
	695	灰釉系皿 I B	8.0	4.4	2.3		89Eb	
	696	灰釉系皿 I B	8.2	5.1	1.9		89Eb	
	697	灰釉系碗 I A	16.2				89Eb	
89Eb	698	灰釉系碗 I A	14.8				89Eb	
	699	灰釉系碗 I B	16.4				89Eb	

遺構	番号	器種分類	口径	底径	器高	備考	区	
SK151	700	灰釉系皿 I B	8.2	4.2	2.1		89Eb	
	701	灰釉系皿 I B	8.0	3.8	2.2	精製	89Eb	
	702	土師器系皿	13.8	8.0	2.9		89Eb	
	703	灰釉系甕	46.2				89Eb	
	704	灰釉系甕	43.4				89Eb	
	705	灰釉系碗	16.0				89Eb	
	706	灰釉系碗 I B	16.2				89Eb	
	707	灰釉系皿 I B	7.8	4.2	1.9		89Eb	
	708	灰釉系皿 I B	8.3	4.7	1.7		89Eb	
	709	灰釉系皿 I B	8.3	5.2	2.1		89Eb	
	710	灰釉系皿 II	7.6	4.7	1.3	瀬戸産	89Eb	
	711	灰釉系皿 I B	8.1	4.3	1.7		89Eb	
	712	灰釉系皿 II	8.0	5.8	1.6		89Eb	
	713	土鍾H・II	2.5				89Eb	
	714	土鍾H・III A	1.2	6.9	4.2		89Eb	
	715	灰釉系皿 I B	8.2	5.0	1.9		89Fa	
716	灰釉系皿 I B	8.6	5.0	2.3		89Fa		
717	土師器系鍋	23.8			伊勢型	89Eb		
718	土師器系鍋	24.2			伊勢型	89Fa		
719	加工円盤 I a	2.7	8.3	2.4		89Eb		
720	加工円盤 I b	2.2	5.6	2.6		89Eb		
721	土鍾H・III A	1.1	5.1	4.0		89Eb		
722	陶丸	1.9	7.9			89Eb		
723	陶丸	2.0	10.0		精製	89Eb		
724	灰釉系皿	7.3	4.0	1.3		89Eb		
89Eb SX151	725	灰釉系碗 I B	15.8	7.2	4.8		89Eb	
	726	灰釉系碗 I B	15.3	6.5	5.6		89Eb	
	727	灰釉系碗 II A	14.4	6.2	6.1		89Eb	
	728	土師器系皿	10.8	8.3	2.3		89Eb	
	729	灰釉系皿 I B	7.9	4.9	1.7		89Eb	
	730	灰釉系皿 III A	7.5	4.9	1.4		89Eb	
	731	灰釉系皿 I B	8.1	5.2	1.7		89Eb	
	732	灰釉系皿 I B	8.2	4.9	2.3		89Eb	
	733	灰釉系皿 I B	7.2	4.4	2.2		89Eb	
	734	灰釉系皿 I B	7.5	4.0	2.0		89Eb	
	735	灰釉系皿 I B	7.6	4.2	1.8		89Eb	
	736	灰釉系皿 I B	8.6	4.3	1.9		89Eb	
	737	灰釉系皿 II	8.3	5.6	1.7		89Eb	
	738	加工円盤 I b	2.6	7.5	2.6		89Eb	
	739	加工円盤 I a	2.6	9.4	2.4		89Eb	
	740	加工円盤 II	2.7	10.4	2.5		89Eb	
741	陶丸	2.1	8.0		精製	89Eb		
89Eb SX155	742	灰釉系碗 I B	13.1	6.5	5.3		89Eb	
	743	灰釉系碗 I B	14.7	7.0	5.5		89Eb	
	744	灰釉系碗 II A	14.8	7.0	5.5		89Eb	
	745	灰釉系碗 I B	14.9	6.4	5.3		89Eb	
	746	灰釉系皿 I B	8.0	4.6	2.1		89Eb	
	747	灰釉系皿 I B	8.0	4.2	1.9		89Eb	
	748	土師器系皿	8.2		1.8		89Eb	
	749	土師器系鍋	22.6			伊勢型	89Eb	
	750	灰釉系壺	11.8				89Eb	
	751	土師器系鍋	23.3			伊勢型	89Eb	
	752	灰釉系皿 I A	7.8	4.5	1.9		89Eb	
	753	灰釉系皿 I A	7.8	4.5	1.9		89Eb	
754	灰釉系碗 I B	15.0	7.0	5.2		89Eb		
755	灰釉系碗 I B	13.7				89Eb		
756	灰釉系碗 II A	15.1				89Eb		
89Eb SX158	757	灰釉系碗 I B		7.1			89Eb	
	758	灰釉系碗 I B	16.4	7.6	4.9		89Eb	
	759	灰釉系碗 I B	15.1	7.7	4.7		89Eb	
	760	灰釉系碗 I B	15.0				89Eb	
	761	灰釉系 I B	8.0	4.3	2.0		89Eb	
	762	土師器系皿	7.1	4.4	1.5		89Eb	
	763	土師器系鍋	19.7			伊勢型	89Eb	
	764	灰釉系碗 II B	13.5	6.1	5.1	「×」	89Eb	
	SX157	765	加工円盤 I b	2.4	6.7	2.6		89Eb

松河戸遺跡

遺構	番号	器種分類	口径	底径	器高	備考	区	
SX153	766	灰釉系小椀A	9.0	4.3	2.7		89Eb	
	767	土鍾H・ⅢA	1.3	7.2	4.3		89Eb	
	768	灰釉系椀ⅠA	18.2	8.6	4.4		89Eb	
	769	灰釉系椀ⅠB	15.6	8.0	5.0		89Fa	
	770	灰釉系椀	15.6	6.2	4.4		89Eb	
	771	灰釉系椀ⅠB	15.8	7.0	5.5		89Eb	
	772	灰釉系椀ⅠA	13.8	5.8	4.6		89Eb	
	773	灰釉系椀Ⅱ	14.4	5.6	5.5		89Eb	
	774	灰釉系椀ⅡB	12.6	5.0	3.8		89Eb	
	775	灰釉系椀ⅠB	13.5	5.7	5.2		89Eb	
	776	青磁	14.0	5.6	3.5		89Eb	
	777	灰釉系小椀A	8.1	4.1	2.5		89Eb	
	778	灰釉系小椀A	8.4	3.8	2.2		89Eb	
	779	灰釉系ⅢⅠA	7.8	4.0	2.4	精製	89Fa	
	780	灰釉系ⅢⅡA	8.3	4.0	2.1	精製	89Fa	
	781	灰釉系ⅢⅠB	7.2	3.8	2.4		89Eb	
	782	灰釉系ⅢⅠA	7.7	4.1	2.2		89Eb	
	783	灰釉系ⅢⅠB	8.6	4.8	2.1		89Eb	
	784	灰釉系ⅢⅠA	7.8	4.8	2.0		89Eb	
	785	灰釉系ⅢⅠA	7.5	4.0	1.9		89Eb	
	786	灰釉系ⅢⅡ	8.0	5.0	2.1		89Eb	
	787	灰釉系ⅢⅢA	7.8	5.0	1.4		89Eb	
	788	灰釉系ⅢⅡ	7.3	4.3	2.1		89Eb	
	789	灰釉系ⅢⅢA	7.3	4.4	1.4		89Eb	
	790	灰釉系ⅢⅠA	7.9	5.1	2.0	「×」	89Eb	
	791	土師器系Ⅲ	8.0	4.8	1.7		89Eb	
	792	土師器系Ⅲ	8.3	4.8	1.3		89Eb	
	793	灰釉系鉢	29.0				89Eb	
	794	灰釉系鉢	27.4				89Eb	
	795	土師器系鍋	24.4				89Eb	
	796	土師器系鍋	23.6				89Fa	
	797	土師器系鍋	27.4				89Eb	
	798	土鍾H・Ⅱ	4.0		10.0		89Eb	
	799	土鍾H・Ⅱ	2.3		7.7		89Eb	
	800	土鍾H・Ⅱ	2.3		6.5		89Eb	
	801	土鍾H・ⅠB	1.8		6.4		89Eb	
	802	土鍾H・Ⅱ	2.0	26.4	5.4		89Eb	
	803	土鍾H・ⅢA	1.1	4.2	3.8		89Eb	
	804	陶丸	1.8				89Eb	
	805	陶丸	2.2	10.6			89Eb	
	806	灰釉系壺	4.1	10.6	7.9		89Eb	
	807	加工円盤Ⅰb	1.3	12.7	2.9		89Eb	
	808	加工円盤Ⅰb	1.6	7.4	2.3		89Eb	
	809	加工円盤Ⅰb	1.6	9.9	2.3		89Eb	
	810	加工円盤Ⅰa	1.4	11.0	2.9		89Eb	
	811	加工円盤Ⅰa	2.7	9.1	2.5		89Eb	
	812	加工円盤Ⅰb	1.3	8.6	2.6		89Eb	
	813	加工円盤Ⅰa	1.3	5.5	2.2		89Eb	
	814	加工円盤Ⅰa	2.1	9.7	3.1		89Eb	
	91Ab SK01	815	灰釉系椀ⅠB	14.6	7.2	5.1		91Ab
		816	灰釉系椀ⅠB	13.7	5.7	4.9		91Ab
		817	灰釉系椀ⅠB	13.6	6.8	4.8		91Ab
		818	灰釉系ⅢⅠB	7.8	5.3	2.1		91Ab
		819	白磁椀	15.2				91Ab
	820	土師器系鍋	25.5			伊勢型	91Ab	
	91Ab SK02	821	灰釉系椀ⅠB	15.0	6.6	5.3	「上」	91Ab
		822	灰釉系椀ⅠB	15.6	6.3	4.7		91Ab
		823	灰釉系椀ⅠB	16.4	7.2	4.8		91Ab
		824	灰釉系椀ⅠB	15.9	7.2	5.1		91Ab
		825	灰釉系椀ⅠB	15.2	6.5	5.2		91Ab
		826	灰釉系椀ⅠB	14.0	6.0	4.7		91Ab
		827	灰釉系椀ⅠB	14.6	6.8	4.7		91Ab
		828	灰釉系椀ⅠA	14.0	5.8	5.4		91Ab
		829	灰釉系椀ⅡA	14.8	6.2	5.8		91Ab
		830	灰釉系椀ⅠB		5.6			91Ab
		831	灰釉系ⅢⅠB	8.6	5.0	2.1		91Ab
		832	灰釉系ⅢⅠB	8.2	4.0	1.8	「×」	91Ab
		833	灰釉系ⅢⅠB	8.2	4.4	2.3	「×」	91Ab

遺構	番号	器種分類	口径	底径	器高	備考	区
	834	土師器系鍋	21.0			伊勢型	91Ab
	835	土師器系鍋	26.4			伊勢型	91Ab
91Ab SD02	836	灰釉系椀ⅡB	15.1	6.8	5.1		91Ab
	837	灰釉系椀ⅡB	14.9	5.8	5.3		91Ab
	838	灰釉系椀ⅡB	14.0	6.8	5.3	瀬戸産	91Ab
	839	灰釉系椀ⅡB	14.7	6.2	5.6		91Ab
	840	灰釉系ⅢⅠA	8.0	4.0	1.8		91Ab
	841	土鍾H・ⅢA	4.0	5.1	7.0		91Ab
	842	土鍾H・Ⅱ	2.4	32.7	6.4		91Ab
	843	土鍾H・ⅠB	1.9	12.1	3.9	SD04	91Ab
91B SD02	844	灰釉系椀ⅠB	16.5	8.6	5.1		91B
	845	灰釉系椀0	15.8	7.2	5.2		91B
	846	灰釉系椀ⅠA	15.7	7.7	4.6	「一」	91B
	847	灰釉系小椀A	9.8	4.8	3.0		91B
63B SE01	848	灰釉系椀ⅠB	16.5	7.6	5.0		91B
	849	灰釉系Ⅲ	10.6	6.9	1.8		91B
	850	灰釉系椀ⅢB	11.8	4.0	3.6		63B
	851	灰釉系椀ⅢB	12.1	3.9	4.0		63B
	852	灰釉系ⅢⅢB	7.7	4.3	1.1	「の」	63B
	853	灰釉系ⅢⅢB	7.9	5.3	1.2	「の」	63B
	854	灰釉系ⅢⅢB	7.4	5.0	0.9	「の」	63B
	855	灰釉系ⅢⅢB	8.0	4.8	1.1	「の」	63B
	856	灰釉系ⅢⅢB	7.8	6.3	0.7	「一」	63B
	857	灰釉系ⅢⅢB	7.8	3.7	1.0		63B
	858	灰釉系ⅢⅢB	7.9	5.0	1.0		63B
	859	灰釉系ⅢⅢB	7.9	4.3	1.2		63B
	860	陶丸	2.1	10.6		精製	63B
	861	灰釉系甕	33.0				63B
862	施釉系椀	9.6	4.1	2.4		63B	
863	土師器系Ⅲ	11.9	6.0	2.0		63B	
864	土鍾H・ⅢA	1.1	4.6	4.3		89Ia	
865	陶丸	2.1	9.5		精製	89GH	
866	灰釉系甕				花文線刻	89GH	

✓は墨書表記があるもの

陶丸・加工円盤・土鍾は底径が重さを、口径・器高は長さ（短軸・長軸）を表わす

●灰釉系陶器(ST)

番号	器種分類	口径	底径	器高	備考	調査区
867	灰釉系皿II	7.5	5.1	1.9		89GH
868	灰釉系碗IB		6.4		「三十」✓	89GH
869	灰釉系皿IA	7.9◀	4.4◀	1.8		89GH
870	灰釉系皿IB	7.6	4.4	1.7	✓	89GH
871	灰釉系皿IIIB	7.8◀	4.0◀	1.1		89GH
872	陶丸	2.3	13.1		精製	89GH
873	陶丸	2.2	13.9		精製	89GH
874	陶丸	2.2	10.8			89GH
875	陶丸	2.0	9.0			89GH
876	陶丸	2.4	13.2			89GH
877	陶丸	2.1	11.7		精製	89GH
878	陶丸	2.0	8.1		精製	89GH
879	土鍬H・IIIA	1.3	9.6	5.7◀		89GH
880	土鍬S・IIIB	1.9	28.0	6.7		89GH
882	土鍬H・IIIB	1.7	18.7	5.8		89GH
883	陶丸	2.1	8.9			89GH
884	陶丸	2.0	9.1			89GH
885	陶丸	2.0	8.0		精製	89GH
886	陶丸	2.1	11.0			89GH
887	陶丸	2.0	8.1		精製	89GH
888	加工円盤Ia	1.6	8.1	2.3		89GH
889	加工円盤Ia	1.2	7.9	2.5		89GH
890	加工円盤Ia	1.6	8.6	2.2		89GH
891	加工円盤Ib	1.4	6.4	2.2		89GH
892	陶丸	2.3	12.9		精製	89GH
893	土鍬H・IA	1.9	17.6	4.6		89GH
894	土鍬H・IIIA	1.7		5.4◀		89GH
895	土鍬H・II	1.7	12.8	5.2◀		89GH
896	土鍬H・IIIB	2.0		6.6◀		89GH
897	灰釉系碗IB		5.8		「〇十」	89GH
898	灰釉系碗IIB		4.6		「百」	89GH
899	灰釉系皿IIIB	7.8◀	4.4	1.3	「の」	89GH
900	加工円盤Ib	1.8	10.6	2.4		89Eb
901	加工円盤Ia	1.8	9.5	2.2		89Eb
902	陶丸	2.2	12.3		精製	89GH
903	陶丸	2.1	10.8		精製	89GH
904	土鍬S・IIIB	1.8	17.4◀	6.3◀		89GH
905	土鍬H・IIIA	1.0	4.7	4.3		89GH
906	土鍬S・IIIB	2.0	26.7◀	7.0◀		89GH
907	灰釉系碗IB		7.8◀		「十」	89GH
908	土師器系皿	10.4◀	7.2◀	1.4		89GH
909	灰釉系皿IIIB	8.2◀	5.0◀	1.3	✓	89GH
910	灰釉系皿IIIB	7.8◀	5.5◀	0.9	「一」	89GH
911	灰釉系皿IIIB	7.7◀	5.5◀	1.0	✓	89GH
912	灰釉系皿IIIB	7.8◀	5.4◀	0.9	「十」	89GH
913	加工円盤Ib	1.6	10.9	2.3		89GH
914	加工円盤Ia	1.1	8.7	2.6		89GH
915	加工円盤Ia	1.5	9.0	2.6		89GH
916	加工円盤Ia	1.5	10.9	3.0		89GH
917	土鍬H・II	2.1	20.6	5.6◀		89GH
918	土鍬S・IIIB	2.8	21.1	6.5		89GH
919	土鍬H・II	2.5	29.9◀	7.5◀		89GH
920	土鍬H・IIIB	1.9	23.8	6.4		89GH
921	陶丸	2.3	13.8			89GH
922	陶丸	2.3	12.6		精製	89GH
923	陶丸	2.0	8.2			89GH
924	陶丸	2.0	9.6		精製	89GH
925	陶丸	2.1	11.0		精製	89GH
926	陶丸	2.0	10.0		精製	89GH
927	陶丸	2.2	7.7		土師器系	89GH
928	陶丸	1.8	7.8		精製	89GH
929	陶丸	2.2				89GH
930	陶丸	2.2	11.5		精製	89GH

水田耕作土出土遺物

番号	器種分類	口径	底径	器高	備考	調査区
931	陶丸	2.2	10.7			89GH
932	陶丸	2.0	7.4		精製	89GH
933	陶丸	2.1	10.0		精製	89GH
934	陶丸	2.0	12.7		精製	89GH
935	陶丸	2.1				89GH
936	陶丸	2.0	8.2		精製	89GH
937	陶丸	2.0	8.8		精製	89GH
938	土鍬H・II	3.3	40.0◀	8.4◀		89GH
939	加工円盤Ia	1.6	7.6	2.3		89GH
940	加工円盤Ia	1.6	7.7	2.1		89GH
941	土鍬H・IIIA	1.2	7.5	5.0		89GH
942	陶丸	2.0	11.9		精製	89GH
943	灰釉系皿IIIB	7.8◀	4.6	1.0	「大」	89GH
944	陶丸	2.2	13.2		精製	89GH
945	陶丸	2.2	13.2		精製	89GH
946	陶丸	1.9	8.2		精製	89GH
947	陶丸	1.8	6.8		精製	89GH
948	土鍬H・III	2.1	23.0	5.1		89GH
949	灰釉系碗IB		7.6◀		✓	89GH
950	加工円盤Ib	1.2	5.4	2.2		89GH
951	加工円盤II	0.6	4.1	2.7		89GH
952	陶丸	2.0	10.0		精製	89GH
953	陶丸	2.2	9.5		精製	89GH
954	土鍬S・II	2.0	28.7◀	6.4◀		89GH
955	土鍬H・IIIA	1.4	9.7	4.8		89GH
956	土鍬H・IIIA	1.1	4.8◀	4.1		89GH
957	土鍬H・IIIA	1.4	9.5	4.7		89GH
958	土鍬H・IIIA	1.6	11.1	4.8		89GH
959	土鍬H・IIIA	1.3	7.5◀	4.8		89GH
960	土鍬H・IIIA	1.2	7.3	4.7◀		89GH
961	施釉碗			11.8◀		63H
962	灰釉系碗IIIB	13.7◀	5.6◀	3.1		63H
963	灰釉系碗IIIB		3.6◀		外面「大」	63H
964	施釉		5.8◀		✓	63H
965	灰釉系皿IA	8.2	5.0	2.0		63H
966	灰釉系碗IIIB	11.9	3.8	3.8		63H
967	灰釉系皿IIIB	8.0	6.0	0.9	「十」	63H
968	灰釉系皿IIIB	8.0◀	5.0	0.9		63H
969	土鍬S・IIIB	1.7	16.2	5.8		63H
970	陶丸	1.9	7.4		精製	63H
971	陶丸	2.1	11.2		精製	63H
972	陶丸	1.9	10.0		精製	63H
973	陶丸	2.3	14.4		精製	63H
974	陶丸	2.0	9.0		精製	63H
975	灰釉系皿IB	8.4	4.0	1.7	精製	63H
976	灰釉系碗IIIB	11.6◀	4.2◀	2.0		63H
977	土鍬H・IIIA	1.6	12.6	5.3		63H
978	陶丸	2.3	14.0		精製	63H
979	灰釉系皿IIIB	8.2	5.0	1.1	「十」	63H
980	灰釉系皿IB	7.8	4.2	2.2		63H
981	灰釉系皿IIIA	8.0◀	5.2	1.4		63H
982	灰釉系碗IIIA	13.0◀	5.2◀	5.4		63H
983	灰釉系碗IIB	12.4	5.5	5.8		63H
984	灰釉系碗IIIB	12.0	4.4	3.5		63H
985	陶丸	2.2	12.5		精製	63H
986	陶丸	2.1	9.9		精製	63H
987	陶丸	2.0	8.4◀			63H
988	陶丸	2.0	10.6		精製	63H
989	土鍬H・II	1.5	6.4◀	5.0◀		63H
990	土鍬H・II	1.7	8.3◀	4.3◀		63H
991	土鍬S・IIIB	1.2	5.2◀	5.0		63H
992	土鍬S・IIIB	1.8	17.0◀	6.1◀		63H
993	土鍬H・IIIA	1.1	4.5	4.4		89Db
994	土鍬H・IIIB	0.9	4.8	5.0		89Db
995	土鍬H・II	2.2		7.0◀		89Db
996	土鍬H・II	1.6	12.2	4.4		89Db
997	土鍬H・IIIA	1.1	4.2	3.7		89Db
998	土鍬H・IIIB	1.7	10.1◀	6.4◀		89Db

松戸遺跡

番号	器種分類	口径	底径	器高	備考	調査区
999	土鍾H・III B	1.5	9.8	5.3		89Db
1000	土鍾H・I B	1.6	7.2	3.4	面取	89Db
1001	陶丸	2.4	16.6		精製	89Db
1002	土鍾H・III A	1.0	3.5	3.4		89DC
1003	加工円盤I b	2.8	8.7	2.4		89Db
1004	陶丸	1.9			精製	89Db
1005	陶丸	2.0	7.9			89Db
1006	陶丸	2.2	10.3		精製	89Db
1007	陶丸	2.0	10.0		精製	89Db
1008	灰釉系鉢	27.6				89Ea
1009	灰釉系皿II	7.2	5.0	1.5		89Ea
1010	灰釉系皿III B	7.9	5.9	9.0		89Ea
1011	灰釉系皿III B	7.8	5.8	1.1	✓	89Ea
1012	灰釉系皿III B	8.1	4.2	1.0		89Ea
1013	陶丸	2.2	8.7			89Ea
1014	加工円盤I b	2.6	9.3	2.5		89Ea
1015	陶丸	2.1	12.4		精製	63J
1016	陶丸	2.2	11.4		精製	63J
1017	土鍾H・I B	1.7	10.4	3.9		89B
1018	陶丸	2.2	11.2			89Fa
1019	土鍾S・III B	1.4	7.5	5.0		89C
1020	土鍾H・III A	0.9	2.1	1.4		89C
1021	陶丸	2.6	20.7		精製	89C
1022	陶丸	1.8	6.8		精製	89C
1023	陶丸	2.0	7.4		精製	89C
1024	陶丸	2.1	10.8			89C
1025	陶丸	2.1	11.0		精製	89C
1026	加工円盤I a	2.5	6.9	2.2		89C
1027	灰釉系碗III B		3.0		「千」	62G
1028	灰釉系皿II		4.4		✓	62G
1029	白磁碗	15.2				62G
1030	灰釉系碗I B	14.3	6.2	5.1		62G
1031	灰釉系碗III B	11.0	2.9	4.0		62G
1032	灰釉系皿III B	7.7	5.2	9.0		62G
1033	灰釉系碗III B	11.2	3.7	3.2		62G
1034	灰釉系碗III B		5.0		✓	63D
1035	陶丸	2.3	15.0		精製	63D
1036	陶丸	1.9	10.8		精製	63D
1037	陶丸	2.1	9.7			63D
1038	陶丸	2.2	13.6		精製	63E
1039	陶丸	2.4	18.2		精製	63E
1040	陶丸	2.3	13.2		精製	63E
1041	土鍾H・II	2.0	18.2	5.4		63E
1042	灰釉系碗II B	11.8	5.2	6.0		63Lb
1043	灰釉系小碗A	8.4	4.0	2.5		63Lb
1044	灰釉系壺	4.8	4.6	4.5		63Lb
1045	陶丸	2.3	11.4			63Lb
1046	土鍾H・III	1.2	4.5	4.4		63Lb
1047	灰釉系碗0	16.0	7.8	6.0		63Lb
1048	灰釉系皿I A	7.4	4.0	1.9		63Lb
1049	灰釉系皿II	8.0	5.0	2.0	瀬戸産	63Lb
1050	灰釉系皿II	8.0	5.4	2.0	瀬戸産	63Lb
1051	灰釉系碗III B	12.0	5.2	3.4		63G
1052	旋釉碗	8.8				63G
1053	灰釉系皿III A	7.3	4.9	1.2		63G
1054	陶丸	2.0	6.5		精製	63G
1055	土鍾H・III A	1.2	3.8	3.5		63G
1056	陶丸	2.2	12.7		精製	63G
1057	陶丸	2.1	13.0		精製	63G
1058	陶丸	2.4	15.7		精製	63G
1059	灰釉系碗III B	13.0	4.7	3.6		63G
1060	灰釉系碗III B	11.2	3.2	2.7		63G
1061	灰釉系皿III B	8.3	6.1	1.0	「十」	63G
1062	灰釉系皿II	7.6	5.5	1.5	「上」	63G
1063	陶丸	2.2	12.9		精製	63G
1064	灰釉系碗III B	9.6		2.2		63G
1065	旋釉皿		4.6		「十」	63G
1066	土鍾H・III A	2.7	1.2	8.0		63G

番号	器種分類	口径	底径	器高	備考	調査区
1067	陶丸	2.4	13.7		精製	63G
1068	旋釉皿	8.6	4.0	2.5		63G
1069	灰釉系碗III B	11.2	4.0	2.3		63G
1070	灰釉系皿III B	8.2	4.8	1.2		63G
1071	土鍾H・II	1.9		7.3		63G
1072	旋釉皿	10.0	4.4	2.6		63G
1073	旋釉碗	8.8		4.5		63G
1074	旋釉皿	10.0	4.8	2.3		63G
1075	灰釉系皿III B	10.6	3.8	2.8		63G
1076	灰釉系碗III B	11.0	5.3	2.3		63G
1077	灰釉系皿III B	7.8	4.5	1.1	✓	63G
1078	灰釉系皿III A	8.2	4.4	1.5		63G
1079	灰釉系皿III B	7.9	5.0	1.0		63G
1080	加工円盤I b	2.4	7.1	2.5		63G
1081	施釉鉢	20.0				63G
1082	灰釉系皿I B	8.3	4×3	2.1		63G
1083	陶丸	2.1	13.1		「十」精製	63G
1084	陶丸	2.3	12.8		精製	62A
1085	灰釉系小碗A	9.7	4.9	2.6		62A
1086	灰釉系皿III B	8.3	5.0	1.1		62A
1087	陶丸	2.1	11.0		精製	62A
1088	灰釉系碗III B	12.2	4.4	3.0		62A
1089	陶丸	2.0	7.5		精製	62A
1090	陶丸	2.2	14.7		精製	62A
1091	灰釉系皿II	7.6	5.0	1.8		62A
1092	灰釉系碗I B	16.7	9.1	5.0		62A
1093	灰釉碗	12.0	6.7	3.9	「大口」	62A
1094	灰釉系碗III B	13.6	4.7	4.1		62A
1095	灰釉系皿II	7.3	5.4	1.9	瀬戸産	62A
1096	灰釉系皿III B	8.0	5.0	1.0		62A
1097	施釉碗	11.2				62A
1098	陶丸	2.3	11.3		精製	62A
1099	灰釉系壺		7.6			62A
1100	灰釉系皿III A	8.0	4.8	1.7		62A
1101	灰釉系皿III A		4.4		「の」	62A
1102	灰釉系皿III B	7.9	5.2	1.1		62A
1103	灰釉系皿III A	7.9	4.5	1.5		62A
1104	灰釉系皿II	8.1	5.0	1.6		62A
1105	灰釉系碗I B	15.6	6.8	4.5		62A
1106	灰釉系碗II	15.3	7.4	5.3		62A
1107	灰釉系碗III B	13.2	4.0	3.5		62B
1108	灰釉系皿II	7.6	5.0	1.9		62B
1109	灰釉系皿I B	8.6	5.0	2.3		62B
1110	灰釉系皿II	8.2	4.8	1.8	✓	72B
1111	陶丸	2.2	13.2		精製	62BD
1112	陶丸	2.3	12.4		精製	62B
1113	陶丸	2.3	14.1		精製	62B
1114	灰釉系碗III B	11.8	2.8	3.3		62B
1115	灰釉系皿III B	8.2	4.9	1.1	✓	62B
1116	灰釉系皿I B	7.9	3.8	2.1		62B
1117	灰釉系碗III A				「刻書」	62B
1118	灰釉系碗III B	12.8	4.6	4.8		62B
1119	須恵器杯	16.8				62B
1120	灰釉系碗II A	14.2	5.2	5.9		62B
1121	灰釉系壺	6.1				62A
1122	施釉鉢	12.7	8.4	3.2		62B
1123	灰釉系碗II B	13.6	5.9	5.6	瀬戸産	62B
1124	灰釉碗		7.1		✓	62B
1125	加工円盤I b	2.6	7.1	2.2		62B
1126	灰釉系碗I B	14.6	6.8	4.8		62E
1127	灰釉系皿I A	2.7	3.7	2.3		62E

✓は墨書表記が認められるもの

加工円盤・陶丸は底径が重さを、口径・器高は長さ（短軸・長軸）を表わす

●灰釉系加工円盤

調査区	番号	分類	長軸	短軸	重さ	備考
89Ia	1128	加工円盤 I a	2.7	2.7	11.4	89Ia
	1129	加工円盤 I b	2.5	2.9	10.1	89Ia
	1130	加工円盤 I b	2.5	2.2	8.9	89Ia
	1131	加工円盤 I b	2.7	3.0	12.4	89Ia
	1132	加工円盤 I a	3.4	3.2	12.5	89Ia
	1133	加工円盤 I b	3.0	3.5	20.5	89Ia
62E	1134	加工円盤 I a	3.0	3.4	13.2	62E
	1135	加工円盤 I a	3.0	2.9	11.9	62E
	1136	加工円盤 I a	2.9	1.4	12.2	62E
	1137	加工円盤 I a	2.7	2.2	6.6	62E
	1138	加工円盤 I b	2.2	1.5	7.6	62E
	1139	加工円盤 I a	2.2	2.4	7.0	62E
	1140	加工円盤 I b	2.0	1.5	9.7	62E
	1141	加工円盤 I a	2.5	2.8	7.2	62E
	1142	加工円盤 I b	2.6	1.4	9.4	62E
	1143	加工円盤 I a	1.9	2.5	6.0	62E
	1144	加工円盤 I a	2.4	2.7	10.2	62E
	1145	加工円盤 I b	2.4	1.5	10.0	62E
	1146	加工円盤 I b	2.2	2.3	5.5	62E
	1147	加工円盤 I a	2.1	2.3	7.3	62E
	1148	加工円盤 I b	2.4	2.5	9.0	89Ia
1149	加工円盤 I b	2.5	2.5	8.4	89Db	
1150	加工円盤 I a	2.4	2.2	7.3	89Ia	
1151	加工円盤 I a	2.5	2.6	9.3	89Ia	
1152	加工円盤 II	2.7	2.6	8.5	89Eb	

●墨書表記資料

番号	器種分類	口径	底径	器高	墨書表記	備考
1153	灰釉系碗ⅢA	15.0	6.4	5.8		62E
1154	灰釉系碗ⅡB		5.5		「一」	89Eb
1155	灰釉系皿ⅢB	8.8	7.0	1.1	「一」	89Eb
1156	灰釉系皿Ⅱ		5.0		「〇一」	89GH
1157	灰釉系皿ⅢB	8.3	5.0	1.3	「〇十」	89A
1158	灰釉系皿Ⅱ	7.3	4.4	1.5	「十」	89Ea
1159	灰釉系皿Ⅱ	8.3	5.2	1.4	「十」	89Ea
1160	灰釉系皿Ⅱ	7.6	4.9	1.4	「十」	89Eb
1161	灰釉系碗ⅠB		5.9		「十」	89Eb
1162	灰釉系皿ⅠB	7.7	3.8	2.0	「十」	63B
1163	灰釉系皿		5.1			89Ea
1164	灰釉系皿Ⅱ	8.6	5.4	1.9		89Eb
1165	灰釉系皿ⅢB	8.1	3.8	1.6		62F
1166	灰釉系小碗A		5.7		「五」	89Db
1167	灰釉系碗ⅡB		4.5		「圓」	89Eb
1168	灰釉系碗ⅢB		3.8		「の」	63B
1169	灰釉系碗ⅡB		5.5			89Eb
1170	灰釉系皿ⅠB	8.6	5.2	2.0		89Ea
1171	灰釉系皿ⅢA	8.0	4.6	1.5	「つる」	62G
1172	灰釉系皿ⅢB	2.3	13.5		瀬戸産	63C
1173	灰釉碗		6.6			89A
1174	灰釉系皿ⅢB	8.2	5.2	1.1		62E
1175	灰釉碗		4.4		「田」	62A
1176	灰釉系碗ⅢB		4.4		「富」	62Ha
1177	灰釉系皿Ⅱ		5.0		「上」	62Ha
1178	灰釉系碗ⅠB		7.6		「上」	62E

●土錘

番号	器種分類	長さ	厚さ	重さ	調査区
1179	土錘H・ⅢB	5.0	1.1	7.2	89Eb
1180	土錘H・ⅢB	4.9	1.2	8.0	89Eb
1181	土錘H・ⅢA	5.1	1.6	11.1	89Eb
1182	土錘H・ⅢA	4.6	1.5	9.2	89Eb
1183	土錘S・ⅢB	5.3	1.2		89Fa
1184	土錘S・ⅢB	5.5	1.3	10.1	89GH
1185	土錘H・ⅢB	4.9	1.1	7.2	89GH
1186	土錘S・ⅢB	5.9	1.2	8.5	89Fa
1187	土錘S・ⅢB	6.2	1.4		89Fa
1188	土錘H・ⅢA	4.9	1.5		89Eb
1189	土錘S・ⅢB	5.0	1.3	6.8	89Db
1190	土錘H・ⅢA	3.9	1.0	4.2	89Db
1191	土錘H・ⅢA	5.4	1.5		89GH
1192	土錘H・ⅢA	3.9	1.1	4.1	62BD
1193	土錘H・ⅢA	4.3	1.0	4.4	62B
1194	土錘H・ⅢA	3.4	1.0	2.5	62E
1195	土錘H・ⅢA	3.7	1.0	3.5	89GH
1196	土錘S・ⅢB	5.7	1.4	9.3	62E
1197	土錘H・ⅢB	5.2	1.1	7.0	89Db
1198	土錘S・ⅢB	6.0	1.2	8.6	89Fa
1199	土錘S・ⅢB	5.8	1.2	7.6	89GH
1200	土錘H・ⅢB	5.3	1.5	12.3	89Eb
1201	土錘S・ⅢB	5.2	1.3		89Fa
1202	土錘H・Ⅱ	5.1	1.6	12.0	91Ab
1203	土錘H・ⅢB	5.3	1.6	11.9	89Eb
1204	土錘H・ⅢA	4.3	1.2	5.1	63H
1205	土錘H・ⅢA	4.9	1.1	6.0	89Eb
1206	土錘H	4.3	1.2	6.0	89Ia
1207	土錘H・ⅢA	4.3	1.3	7.8	89Eb
1208	土錘H・ⅢA	4.5	1.0	4.5	89Db
1209	土錘H・ⅢA	4.2	1.0	5.3	89Db
1210	土錘H・ⅢA	3.8	1.1	3.2	63G
1211	土錘H・ⅢA	4.2	1.1	4.5	63G
1212	土錘H・ⅢA	3.5	1.0	3.5	62F
1213	土錘H・Ⅱ	5.3	1.2	18.7	89Eb
1214	土錘H・Ⅱ	4.9	2.0	16.7	89GH
1215	土錘H・Ⅱ	5.0	1.7	14.3	89Fa
1216	土錘H・ⅠA	4.2	1.5	10.8	89Eb
1217	土錘H・Ⅱ	4.7	1.9	15.7	90D
1218	土錘H・ⅠB	5.1	2.2	18.3	62E
1219	土錘H・Ⅱ	4.8	1.8	10.0	62E
1220	土錘H・Ⅱ	4.7	2.0	14.0	63D
1221	土錘H・Ⅱ	4.5	1.5	7.5	63D
1222	土錘H・Ⅱ	4.9	2.1		91Ab
1223	土錘H・ⅢA	5.7	1.7		91Ab
1224	土錘H・Ⅱ	5.0	1.7	13.8	91Ab
1225	土錘H・Ⅱ	4.8	1.6	13.7	91Ab
1226	土錘H・Ⅱ	5.0	1.9	14.6	62F
1227	土錘H・ⅢA	5.2	1.8		89GH
1228	土錘H・Ⅱ	5.5	2.2	26.7	89Eb
1229	土錘H・ⅢB	6.7	1.8		89Eb
1230	土錘H・Ⅱ	5.6	1.9		89Eb
1231	土錘S・ⅢB	6.0	1.8	23.6	89Eb
1232	土錘H・Ⅱ	6.2	1.9		89Eb
1233	土錘H・Ⅱ	5.5	2.3	31.4	89Eb
1234	土錘H・Ⅱ	5.6	2.0	22.6	89Eb
1235	土錘H・Ⅱ	5.4	2.1	20.1	89GH
1236	土錘H・Ⅱ	5.6	2.2	28.3	89GH
1238	土錘H・Ⅱ	6.5	2.0		89Eb
1239	土錘H・ⅢB	5.5	1.6	14.4	89Db
1240	土錘S・Ⅱ	5.5	1.8	19.4	89Eb
1241	土錘H・ⅢB	5.8	1.8	17.2	89GH
1242	土錘H・Ⅱ	5.9	1.5	12.1	89C
1243	土錘H・ⅢB	6.6	1.8	19.9	89Db

松河戸遺跡

番号	器種分類	長さ	厚さ	重さ	調査区
1244	土鍾H・II	6.1	1.9	16.4	89C
1245	土鍾H・II	7.6	2.3	35.1	62BD
1246	土鍾H・II	7.7	3.1	48.2	63C
1247	土鍾H・II	7.7	2.9	57.7	89Bb
1248	土鍾H・II	10.0	3.4		89Eb
1249	土鍾H・IB	4.2	1.6	8.2	89Eb
1250	土鍾H・II	5.0	1.9	3.2	89Db
1251	土鍾H・II	4.3	1.8	43.9	89Eb
1252	土鍾H・IB	5.7	2.1	22.7	89GH
1253	土鍾H・II	5.6	1.8	18.2	89Eb
1254	土鍾H・IIIA	4.1	1.4	8.4	89C
1255	土鍾H・IIIB	4.1	1.8	5.5	91Ab
1256	土鍾H・IIIA	3.7	1.3	5.7	89Db
1257	土鍾H・II	4.5	1.7	11.5	89Db
1258	土鍾H・IA	4.7	1.7	17.2	89GH
1259	土鍾H・II	4.0	1.6	9.7	91Ab
1260	土鍾H・IA	4.8	1.8		62G
1261	土鍾H・IA	4.3	1.8	13.6	89Eb
1262	土鍾H・IA	5.0	1.8	18.5	89Eb
1263	土鍾S・IA	5.7	3.0	57.1	62E
1264	土鍾H・IA	6.8	3.4	92.8	89GH

●陶丸・その他

番号	器種分類	径	重さ	備考	調査区
1265	陶丸	1.8	5.9		89Fa
1266	陶丸	2.0	10.1	精製†	89Fa
1267	陶丸	1.9	8.1	精製	89Fa
1268	陶丸	2.2	10.0	精製	89Fa
1269	陶丸	2.0	10.3	精製	89Fa
1270	陶丸	1.6	5.2	精製	89Fa
1271	陶丸	1.9	8.3	精製	89Fa
1272	陶丸	2.2	11.3	精製	89Fa
1273	陶丸	1.4	15.9	精製	89Fa
1274	陶丸	2.3	13.4	精製	89Fa
1275	陶丸	2.2	12.5	精製	89Fa
1276	陶丸	2.1	11.5	精製	89Fa
1277	陶丸	2.1	11.3	精製	89Fa
1278	陶丸	2.0	10.1	精製	89Fa
1279	陶丸	1.7	6.6	精製	89Fa
1280	陶丸	2.2	10.7		89Eb
1281	陶丸	2.1	9.4		89Eb
1282	陶丸	2.2	11.3	精製	89Eb
1283	陶丸	2.1	9.4	精製	89Eb
1284	陶丸	2.1	9.7	精製	89Eb
1285	陶丸	2.0	10.3		89Eb
1286	陶丸	1.8	6.9	精製	89Eb
1287	陶丸	2.2	11.5	精製	89Eb
1288	陶丸	2.3	14.2	精製	89Eb
1289	陶丸	2.1	10.8	精製	89Eb
1290	陶丸	2.3	11.2		89Eb
1291	陶丸	2.2	11.9	精製	89Eb
1292	陶丸	2.3	13.1	精製	89Eb
1293	陶丸	1.8	7.7	精製	89Eb
1294	陶丸	2.2	12.4	精製	89Eb
1295	陶丸	2.2	11.8	精製	89Eb
1296	陶丸	2.2	9.8	精製	89Eb
1297	陶丸	2.1	11.3	精製	89Eb
1298	陶丸	1.7	6.4		89Eb
1299	陶丸	2.3	10.4	精製	89Eb
1300	陶丸	2.2	12.3	精製	89Eb
1301	陶丸	2.1	8.9	精製	89Eb
1302	陶丸	2.3	14.3	精製	89Eb
1303	陶丸	2.1	8.8		89Eb
1304	陶丸	2.1	9.5	精製	89Eb
1305	陶丸	2.1	9.2	精製	89Eb
1306	陶丸	2.0	8.2	精製	89Eb
1307	陶丸	1.9	9.0		89Eb
1308	陶丸	2.0	9.0		89Eb
1309	陶丸	2.0	9.5	精製	89Eb

番号	器種分類	径	重さ	備考	調査区
1310	陶丸	2.0	9.4	精製	89Eb
1311	陶丸	2.3	15.9	精製	89Eb
1312	陶丸	2.2	12.2	精製	89Eb
1313	陶丸	2.1	9.2	精製	89Eb
1314	陶丸	1.9	6.1	精製	89Eb
1315	陶丸	2.0	9.2	精製	89Eb
1316	陶丸	1.8	6.3	精製	89Eb
1317	陶丸	2.0	7.5		89Eb
1318	陶丸	2.0	8.2		89Eb
1319	陶丸	2.0	8.4	精製	89Eb
1320	陶丸	2.2	12.7	精製	89Eb
1321	陶丸	1.9	7.5	精製	89Eb
1322	陶丸	2.1	12.2	精製	89Eb
1323	陶丸	2.3	13.1	精製	89Eb
1324	陶丸	1.9	7.7		89Eb
1325	陶丸	2.1	10.9		89Eb
1326	陶丸	2.3	12.2	精製	89Eb
1327	陶丸	1.9	9.0		89Eb
1328	陶丸	1.7	7.0	精製	89Eb
1329	陶丸	2.0	9.0	精製	89Eb
1330	陶丸	1.9	8.5	精製	89Eb
1331	陶丸	2.0	8.5		89Eb
1332	陶丸	2.3	13.1	精製	89Eb
1333	陶丸	1.8	6.9	精製	89Eb
1334	陶丸	2.2	10.2		89Eb
1335	陶丸	2.2	11.5	精製	89Eb
1336	陶丸	2.3	12.4	精製	89Eb
1337	陶丸	2.3	9.3		89Eb
1338	陶丸	2.2	11.3	精製	89Db
1339	陶丸	2.2	11.0		89Db
1340	陶丸	2.4	12.6	精製	89Db
1341	陶丸	2.3	12.2	精製	89Db
1342	陶丸	2.3	15.4	精製	89Db
1343	陶丸	2.0	9.9	精製	89Db
1344	陶丸	2.3	11.7	精製	89Db
1345	陶丸	2.3	12.4		89Db
1346	陶丸	1.9	7.3	精製	89Db
1347	陶丸	2.2	10.8		89Db
1348	陶丸	2.1	10.6	精製	89Db
1349	陶丸	1.9	8.7	精製	89Db
1350	陶丸	2.1	9.6	精製	89Db
1351	陶丸	2.4	14.5	精製	89Db
1352	陶丸	2.0	10.4	精製	89Db
1353	陶丸	2.1	12.0	精製	89Db
1354	陶丸	2.1	10.5	精製	62BD
1355	陶丸	2.2	11.0	精製	62BD
1356	陶丸	2.2	11.4	精製	62BD
1357	陶丸	2.1	9.6	精製	62BD
1358	陶丸	2.1	8.5	精製	62BD
1359	陶丸	1.9	7.4	精製	62BD
1360	陶丸	2.6	20.2	精製	63D
1361	陶丸	2.0	9.6	精製	63D
1362	陶丸	2.0	9.6	精製	63D
1363	陶丸	2.2		精製	89A
1364	陶丸	2.0	8.5	精製	89A
1365	陶丸	1.9	8.0	精製	89GH
1367	陶丸	1.8	7.4	精製	89GH
1368	陶丸	2.6	18.9		62E
1369	陶丸	1.8	6.2	精製	89Eb
1370	陶丸	2.1	9.4	穿孔	89Fa
1371	加工円盤 Ia	2.5	8.0	SD01	89Ia
1372	土鍾H・IB	1.6	7.4	SD01	89Ia
1373	青磁碗	14.5			62BD
1374	白磁	13.8			62E
1375	青磁碗	17.0			62E
1376	製塩土器				62BD
1377	製塩土器				62BD
1378	紡錘車(陶質)	2.2	4.4	34.8g	62BD
1379	灰釉系小型高杯	1.5	1.4		89Fa
1380	軒丸瓦	2.2			89Db

† 精製とは胎土の特徴であり、東濃系陶丸の可能性が高いもの

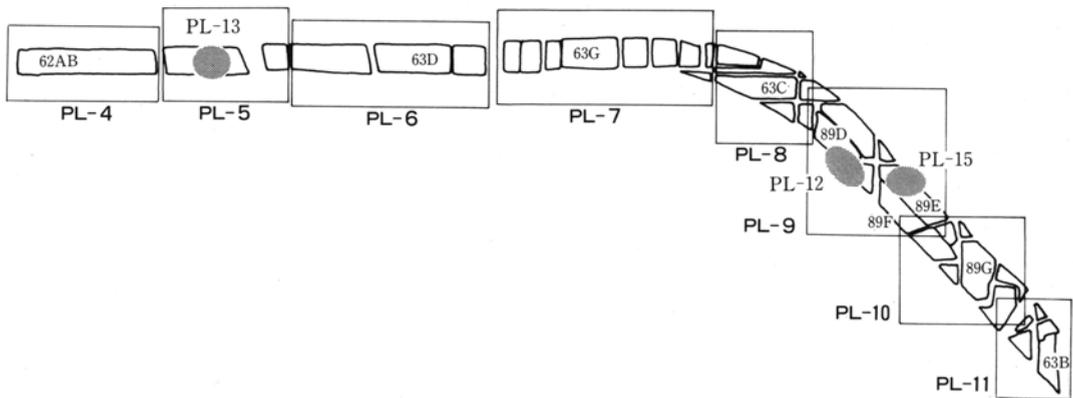
図版

基本図面

1 : 5 0 0  0 10 20 30m

Section 垂直方向 1 : 1 0 0
水平方向 1 : 2 0 0

▼ Sectionの位置  5 m 1 m 0



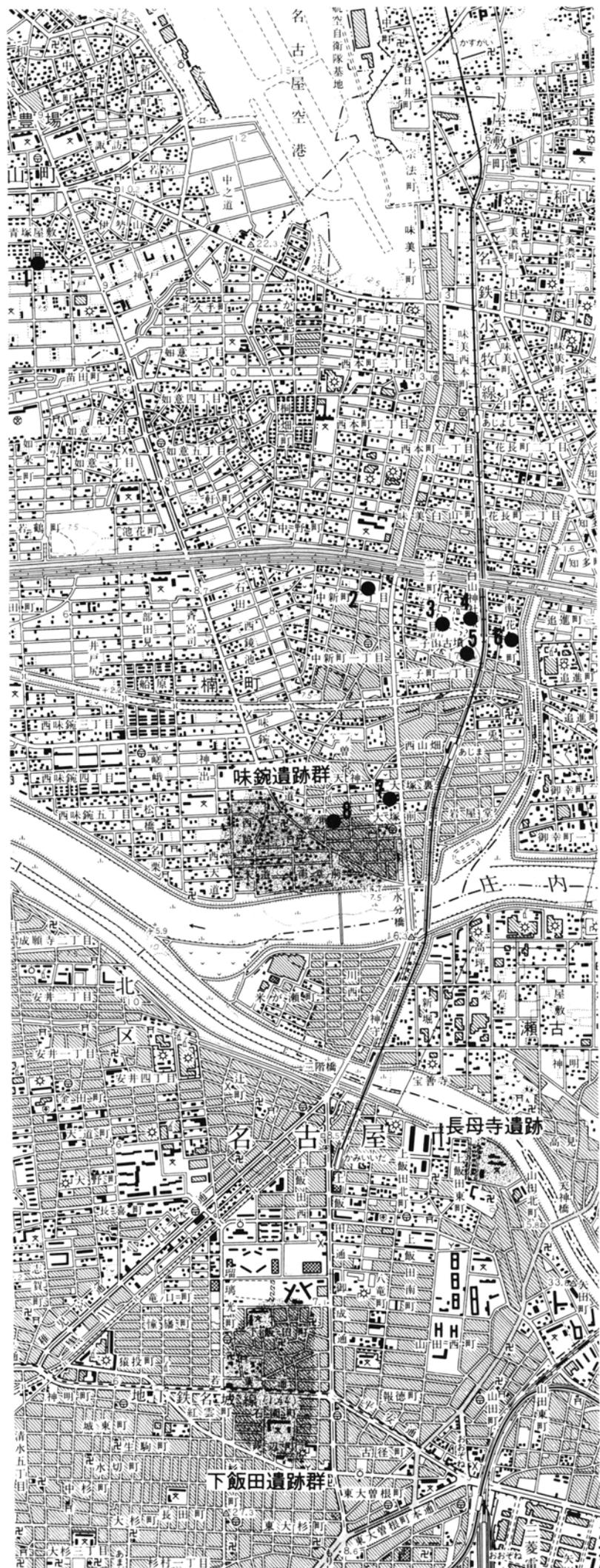
庄内川・矢田川流域の遺跡
(弥生時代・古墳時代)

■集落遺跡

- 松河戸遺跡(縄文～江戸)
- 町田遺跡(弥生～江戸)
- 勝川遺跡(弥生～江戸)
- 松新遺跡(弥生)
- 王子遺跡(弥生)
- 味鏡遺跡群(弥生～室町)
 - 味鏡BC遺跡・南堂の前遺跡
 - 味鏡D遺跡・天道遺跡
- 長母寺遺跡(弥生～中世)
- 下飯田遺跡群(弥生～古墳)
 - 下飯田A遺跡・下飯田B遺跡
- 若葉通遺跡・芦近町遺跡
- 西城遺跡(弥生)

■古墳

- 1 豊山青塚古墳
- 2 味美春日山古墳
- 3 御旅所古墳
- 4 味美白山神社古墳
- 5 味美二子山古墳
- 6 ドンドン塚古墳
- 7 味鏡大塚古墳
- 8 白山藪古墳
- 9 笹原古墳
- 10 山神古墳
- 11 洲原山(南東山)古墳
- 12 勝川大塚古墳
- 13 オシメンド森古墳
- 14 守山白山神社古墳
- 15 町北古墳
- 16 小幡瓢箪山古墳
- 17 北島古墳
- 18 小幡長塚古墳
- 19 小幡茶白山古墳
- 20 池下古墳





春日井市

王子遺跡

松新遺跡

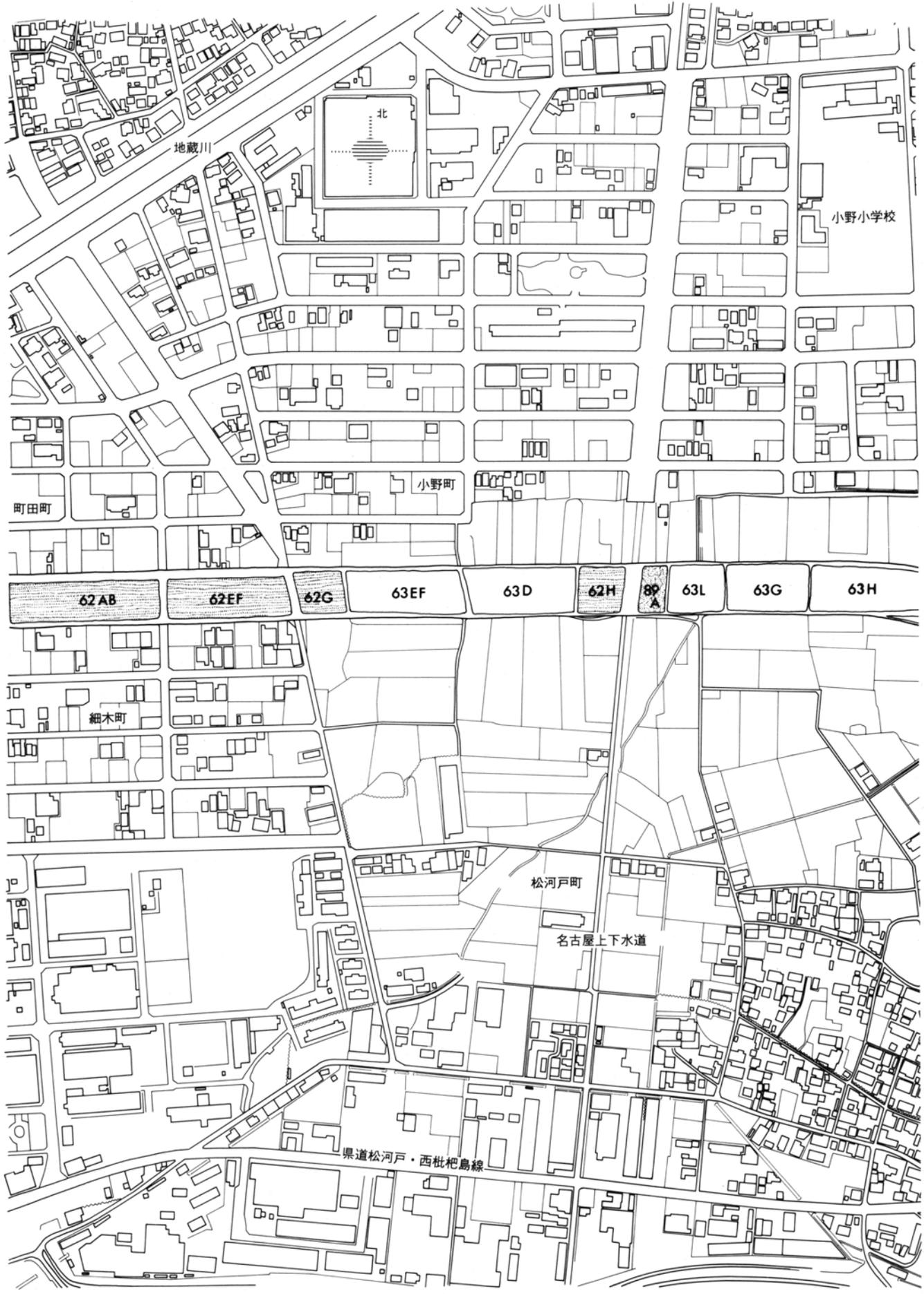
松河戸遺跡

勝川遺跡

町田遺跡

西城遺跡

猪子石原



地藏川

小野小学校

町田町

小野町

62 AB

62 EF

62 G

63 EF

63 D

62 H

89 A

63 L

63 G

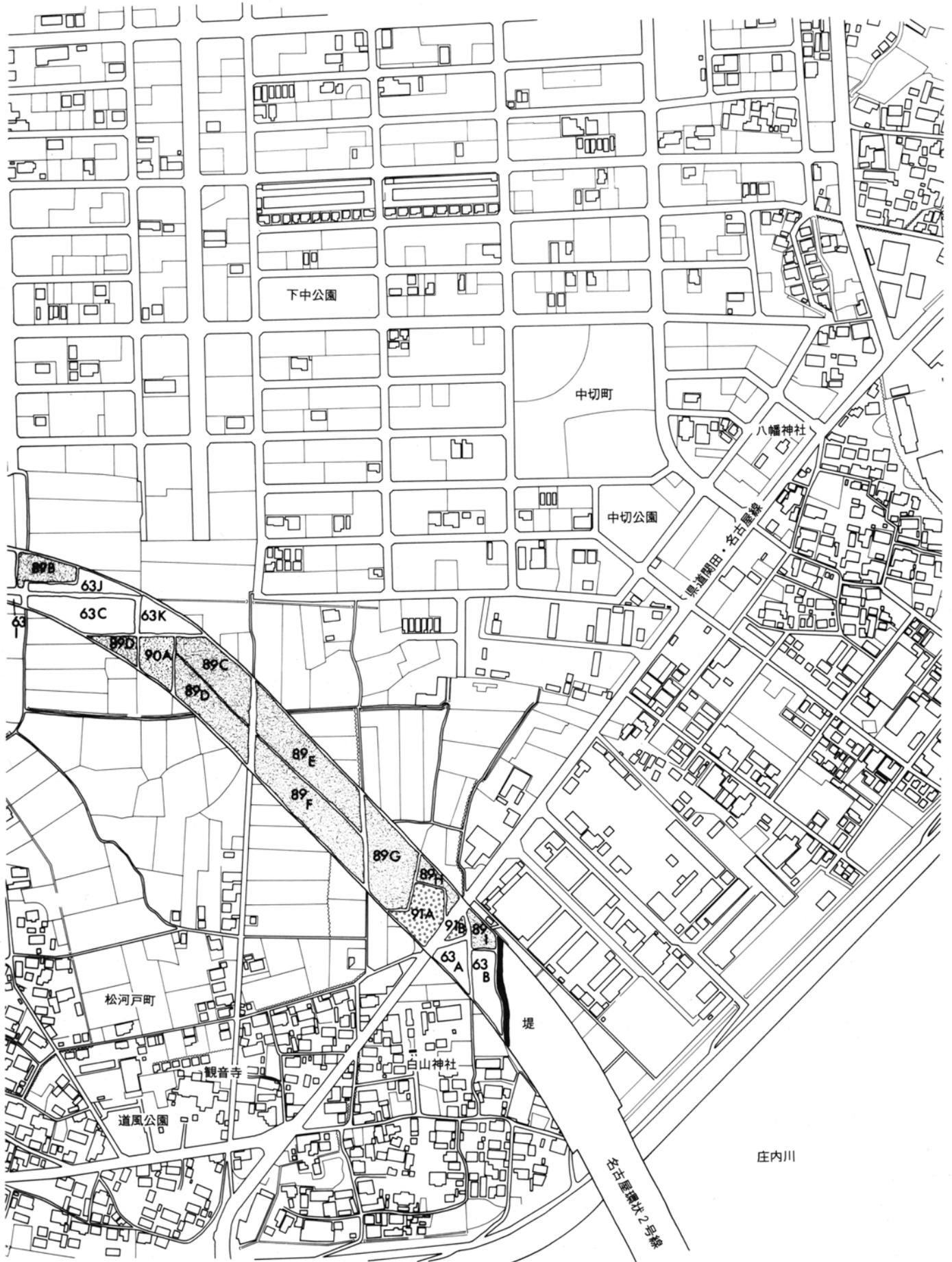
63 H

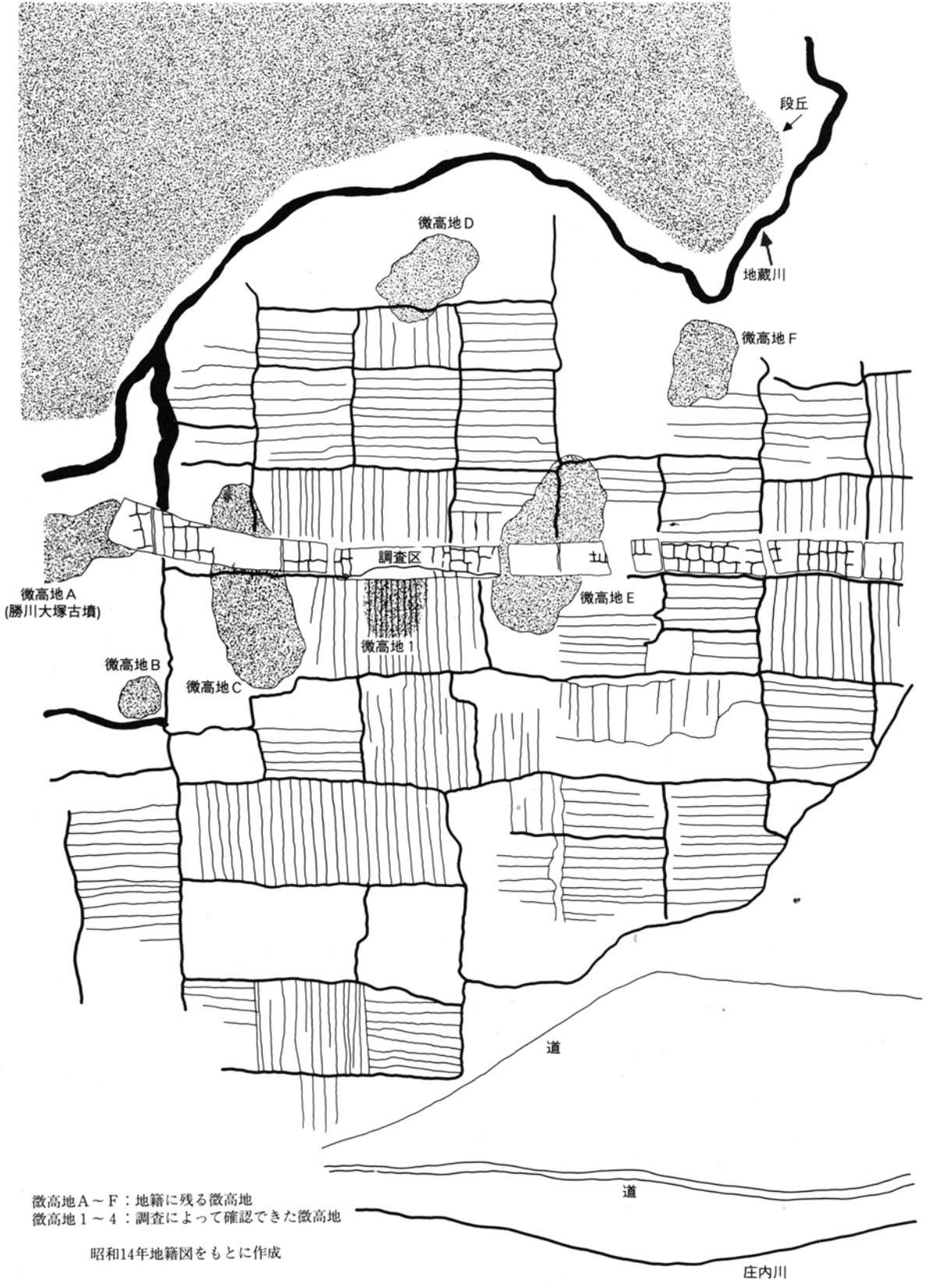
細木町

松河戸町

名古屋上下水道

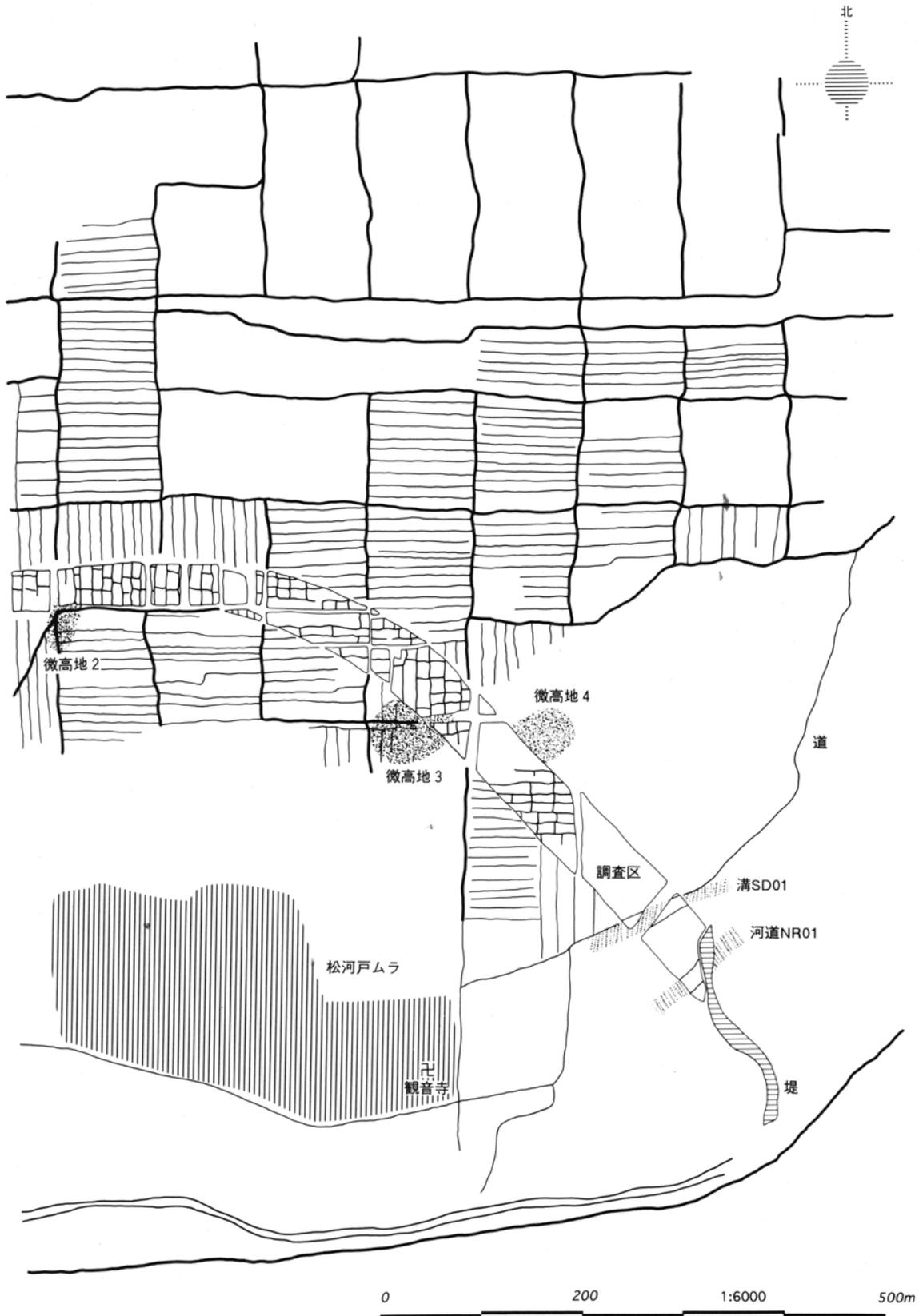
県道松河戸・西枇杷島線

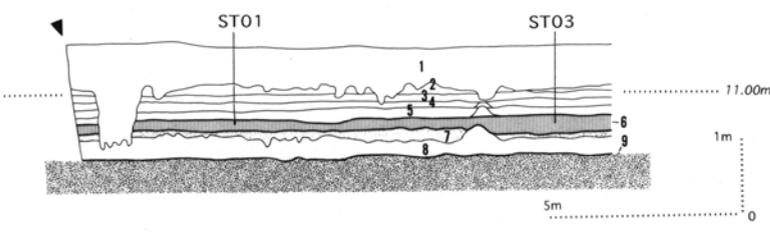
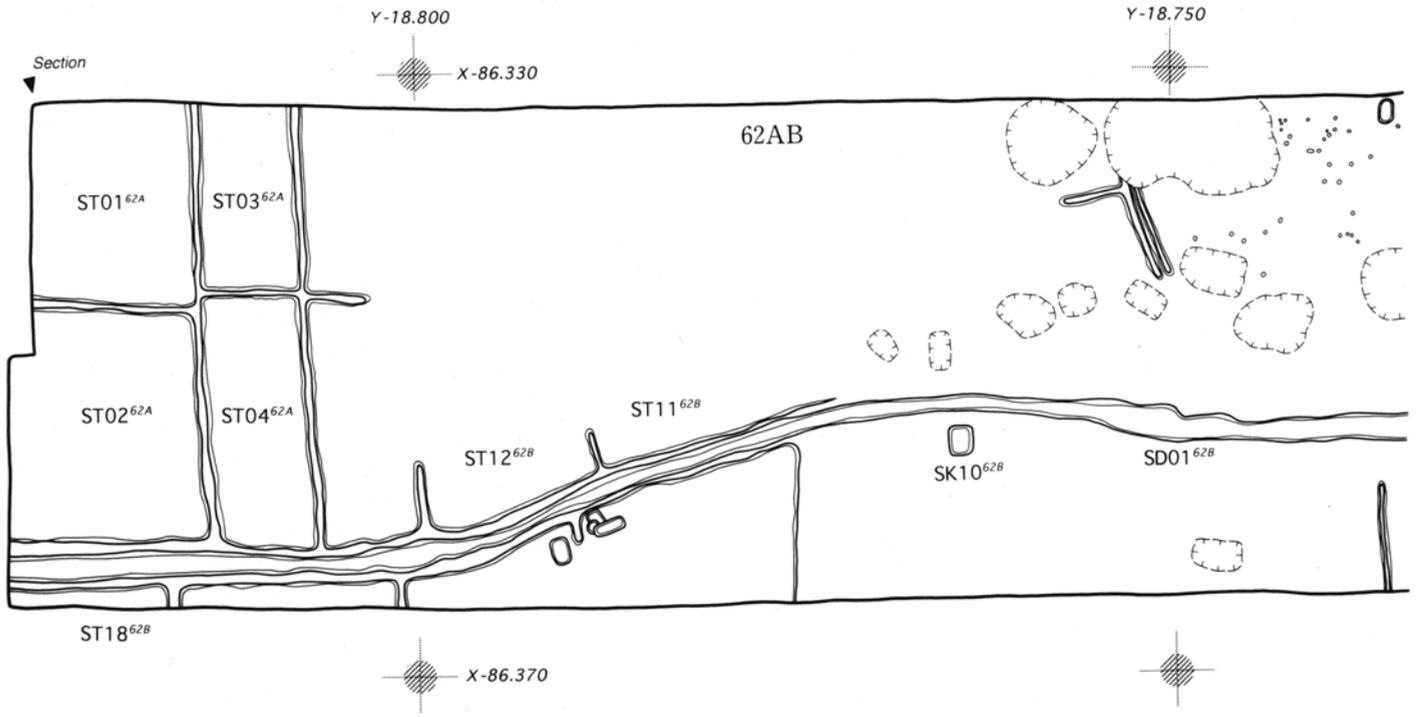




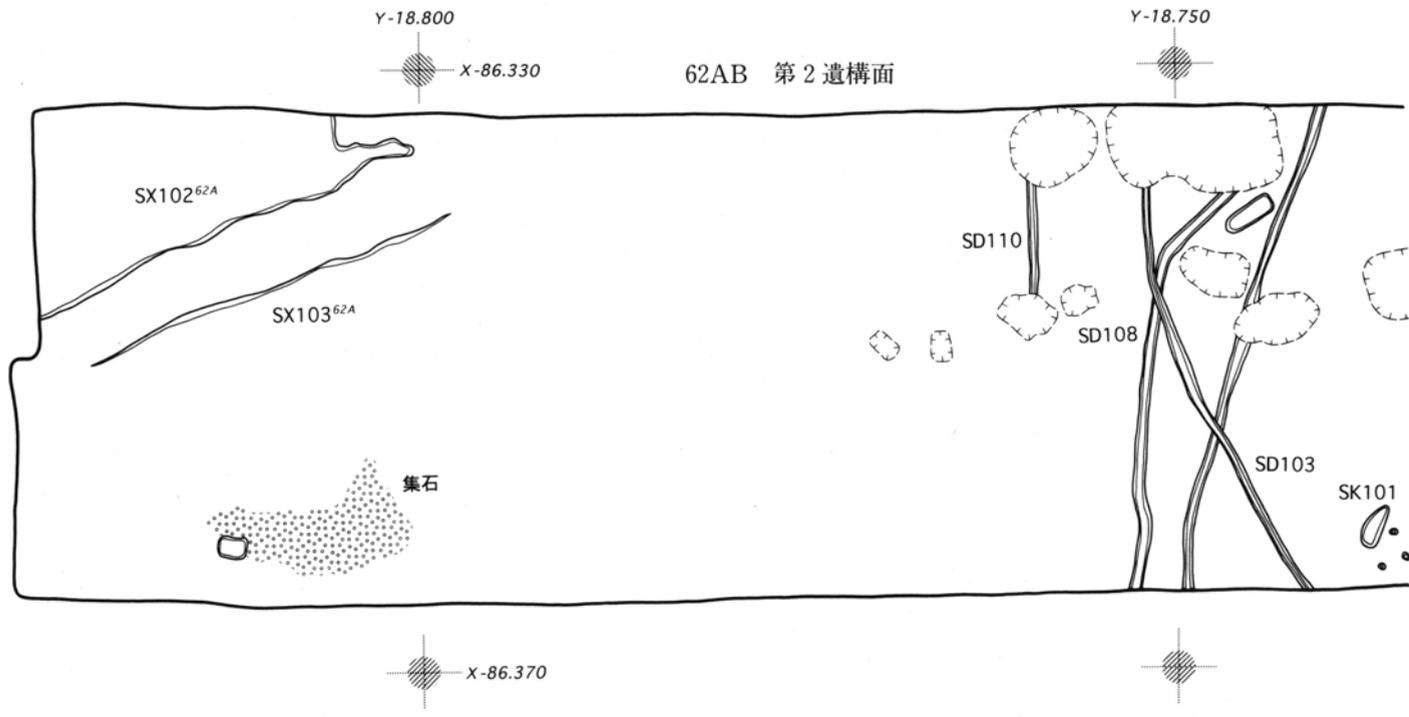
微高地 A～F：地籍に残る微高地
 微高地 1～4：調査によって確認できた微高地

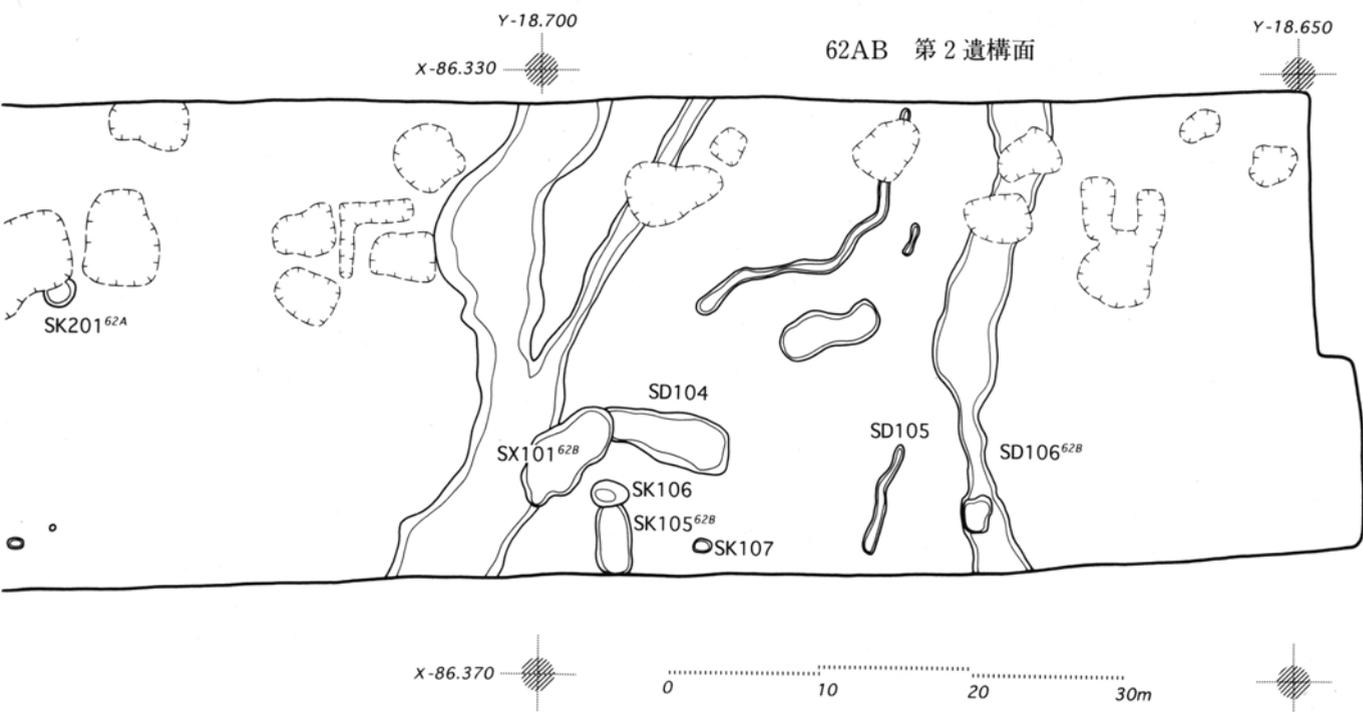
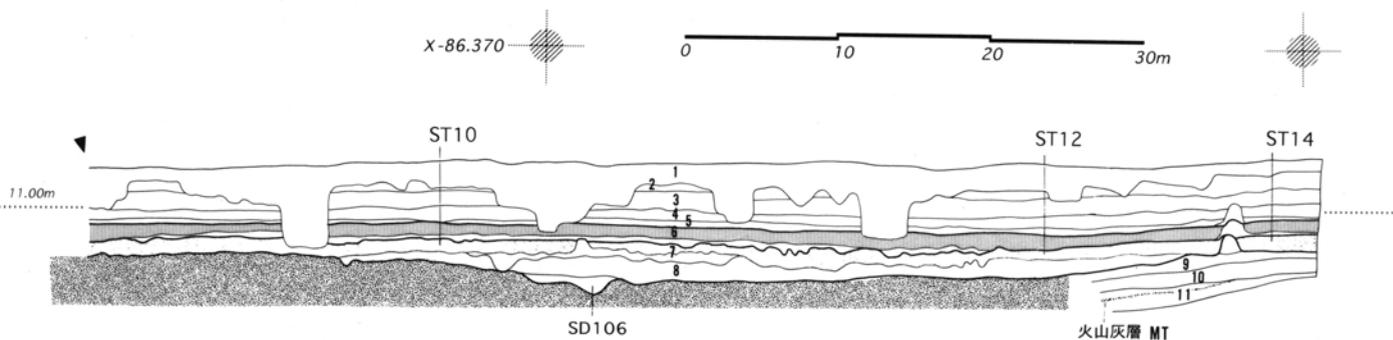
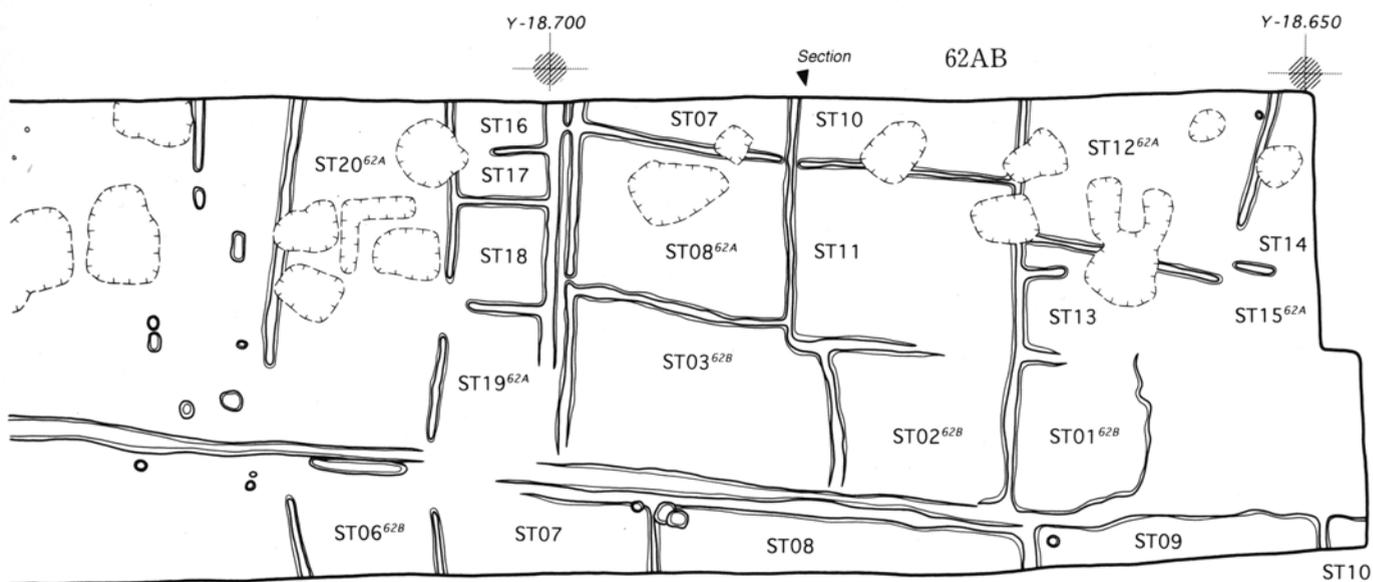
昭和14年地籍図をもとに作成





- 1 客土
- 2 暗い褐色粘質・斑鉄(水田1)
- 3 黄緑色粘質(水田2)
- 4 灰色粘質・斑鉄及びマンガ(水田3)
- 5 灰色粘質・斑鉄(水田4)
- 6 褐色粘質・斑鉄及びマンガ(水田5) 上位水田
- 7 暗灰色粘質・斑鉄(水田6) 下位水田
- 8 暗青灰色粘質・(水田7) 最下層水田SX102
- 9 黒灰色粘質
- 10 淡灰色粘質・黒色粘土互層(ラミナ)
- 11 黒色粘土(黒バンドI)火山灰含む





Y-18.630



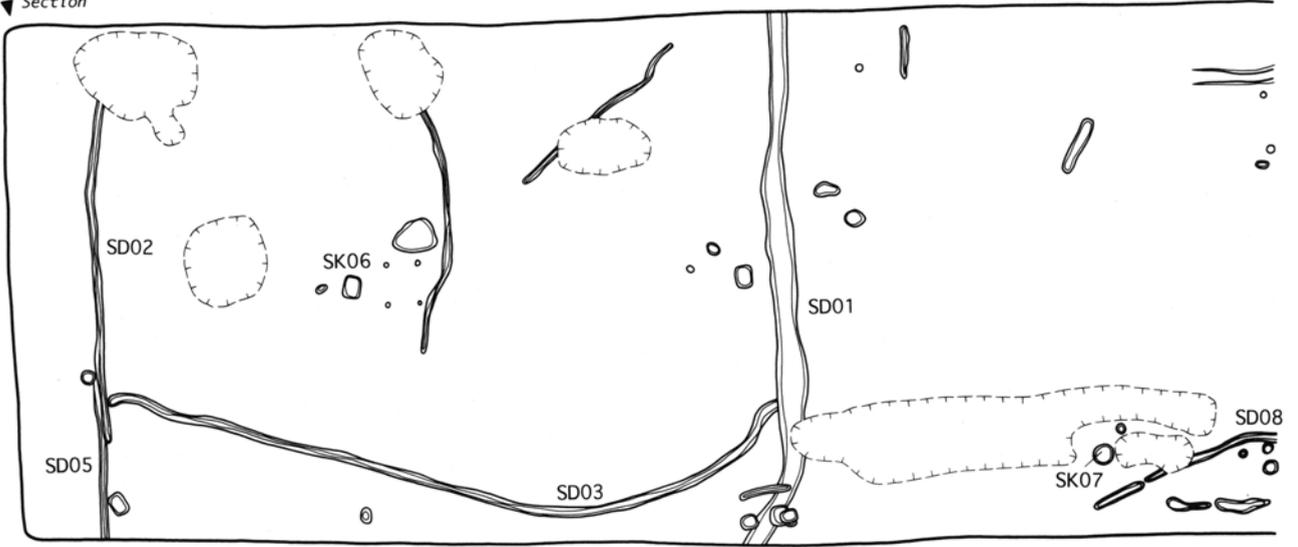
Y-18.600



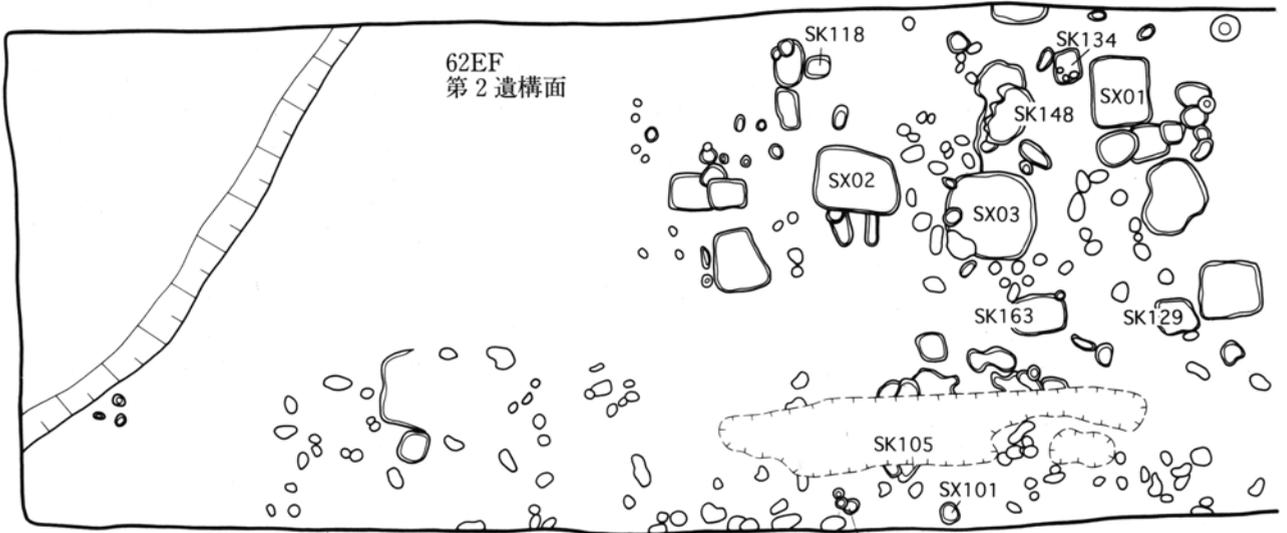
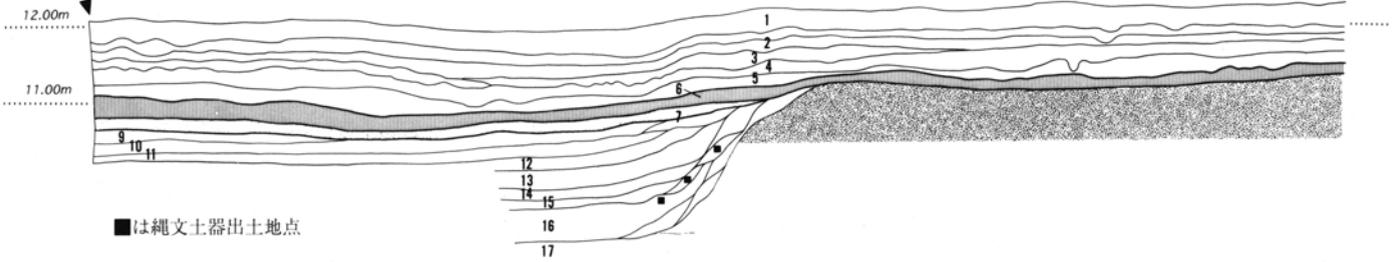
X-86.320

62EF

Section



X-86.370



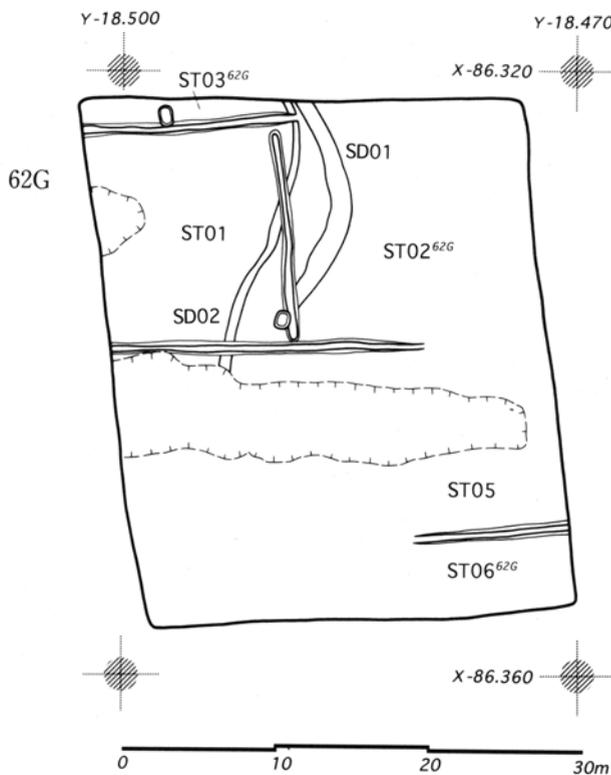
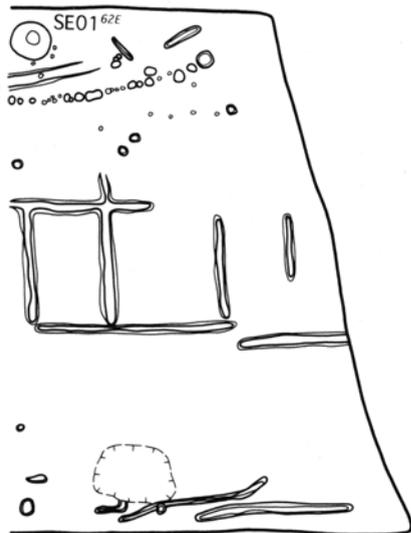
Y-18.630



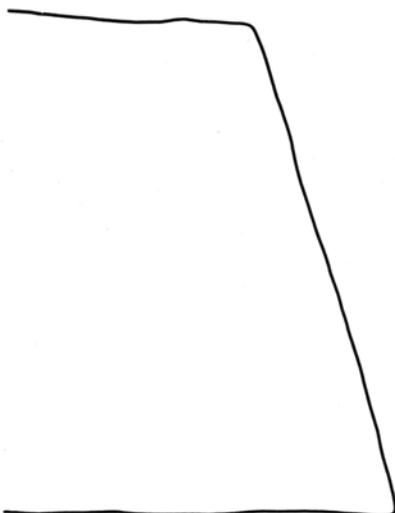
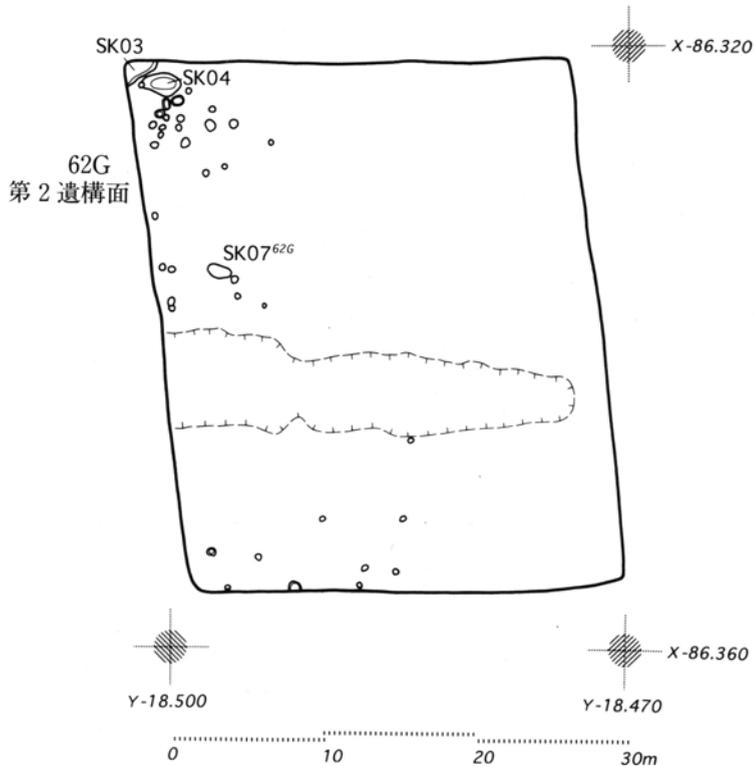
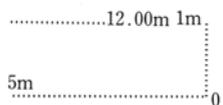
Y-18.600

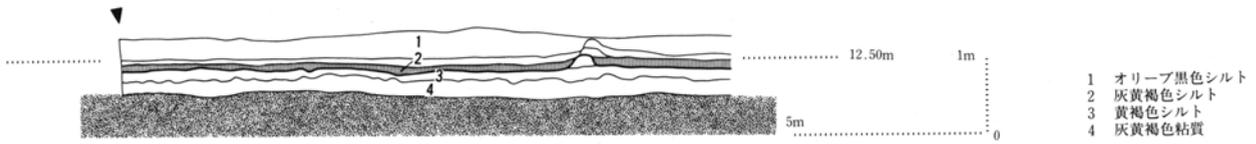


X-86.370



- 1 客土
- 2 暗い褐色粘質・斑鉄(水田1)
- 3 黄緑色粘質(水田2)
- 4 灰色粘質・鉄マンガ斑紋(水田3)
- 5 灰色粘質・斑鉄(水田4)
- 6 褐色粘質・鉄マンガ斑紋(水田5) 上位水田
- 7 暗灰色粘質・斑鉄(水田6) 下位水田
- 9 黒灰色粘質
- 10 淡灰色粘質・黒色粘土互層(ラミナ)
- 11 黒色粘土(黒バンドI)火山灰含む
- 12 黒色粘土・植物遺在体含む
- 13 淡灰褐色粘土・植物遺在体含む
- 14 黒色・淡灰褐色互層(ラミナ)
- 15 暗褐色粘土・植物遺在体含む
- 16 泥炭(縄文土器含む)
- 17 砂礫(5~10cmの河原石)

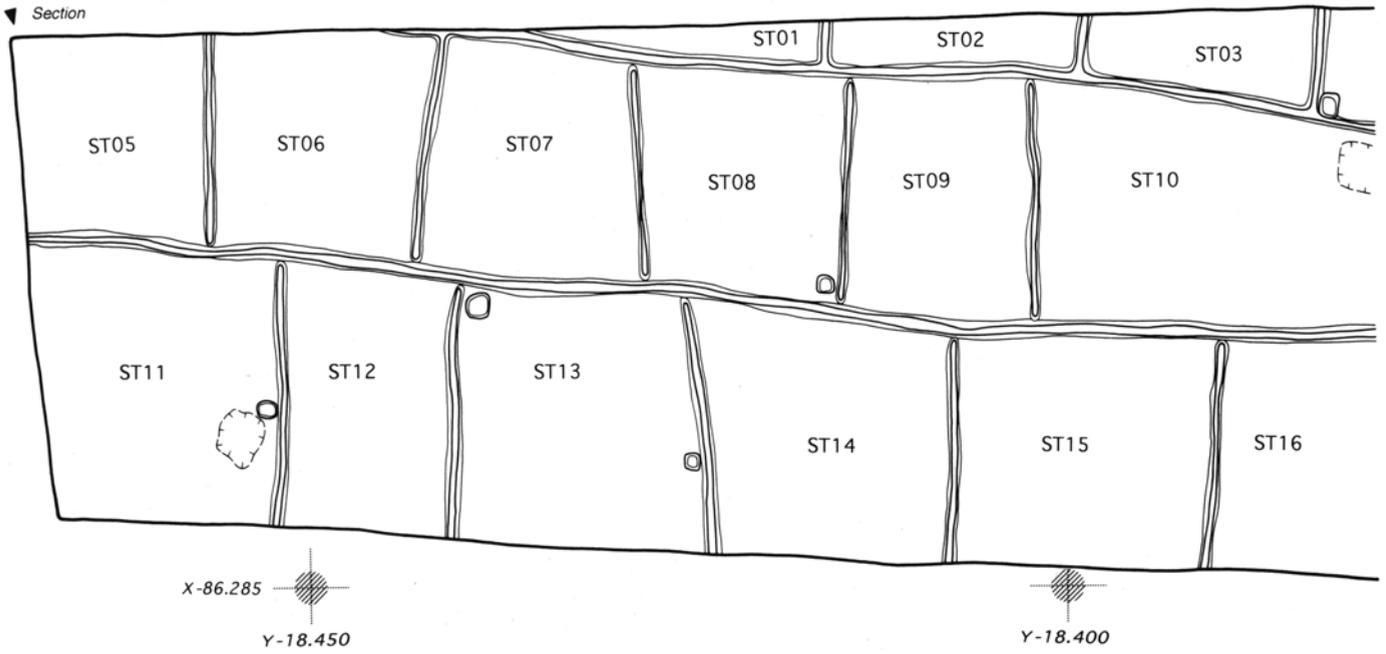




Y-18.450
X-86.320

X-86.320
Y-18.400

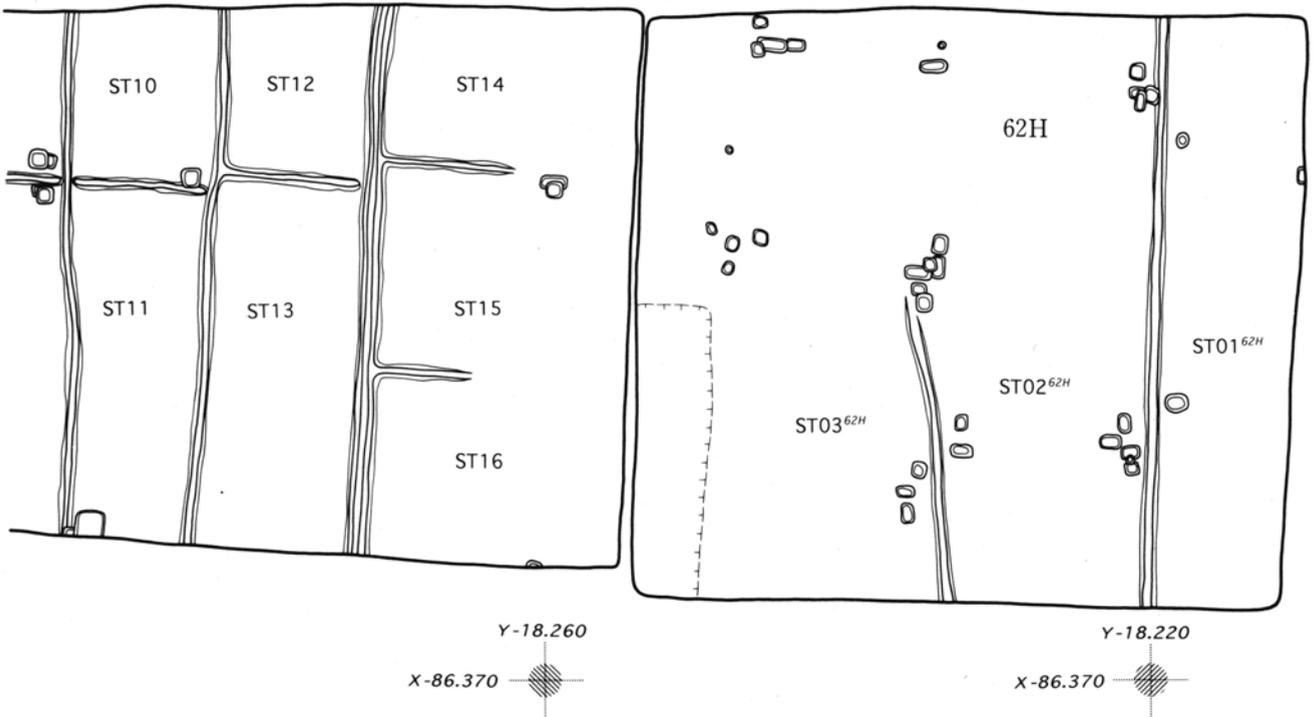
63EF

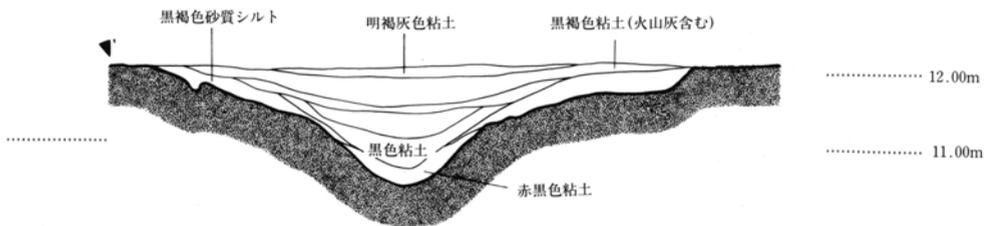
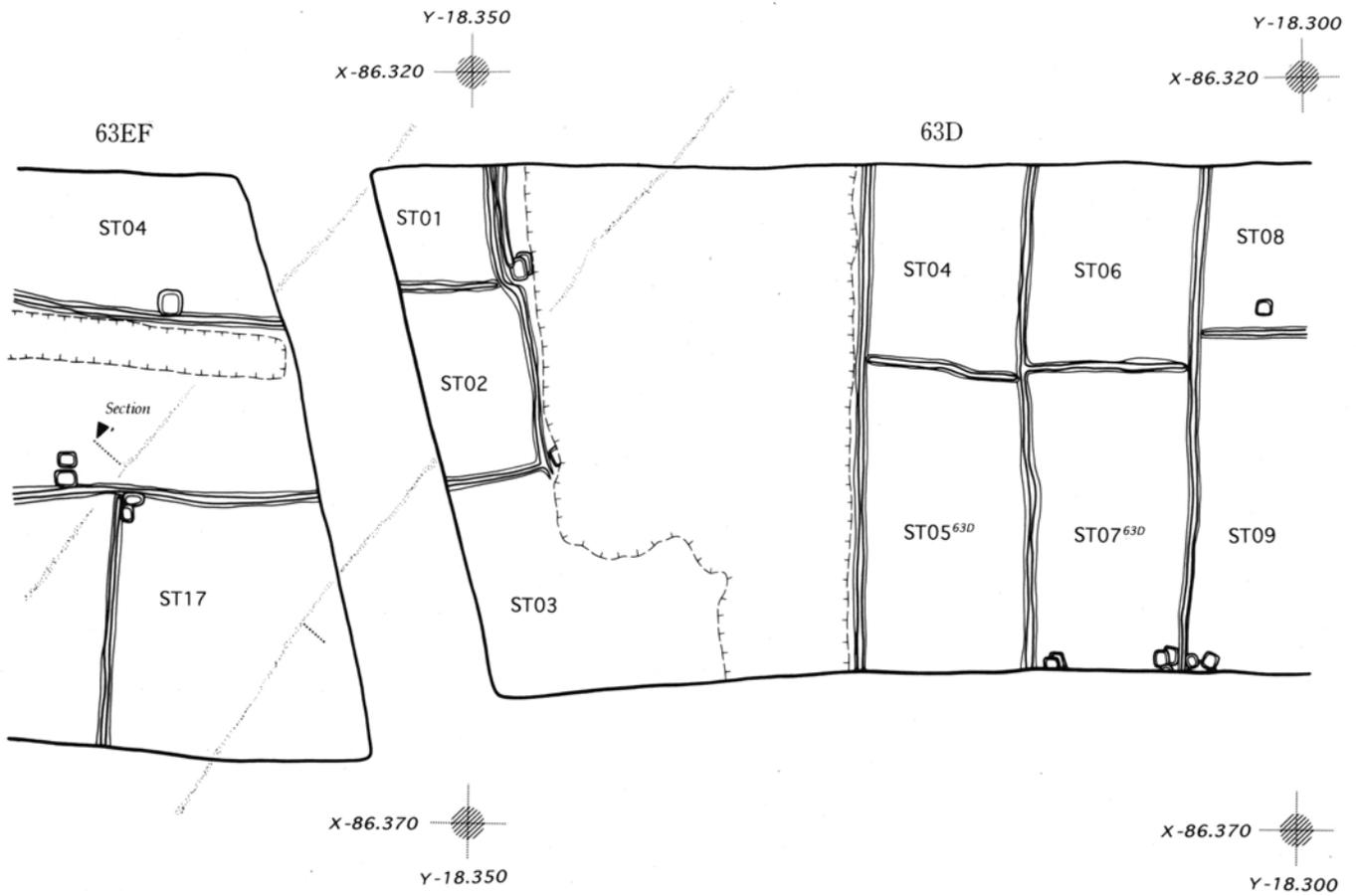


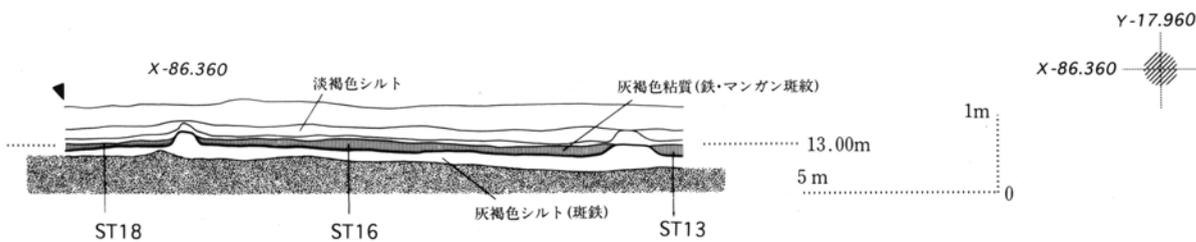
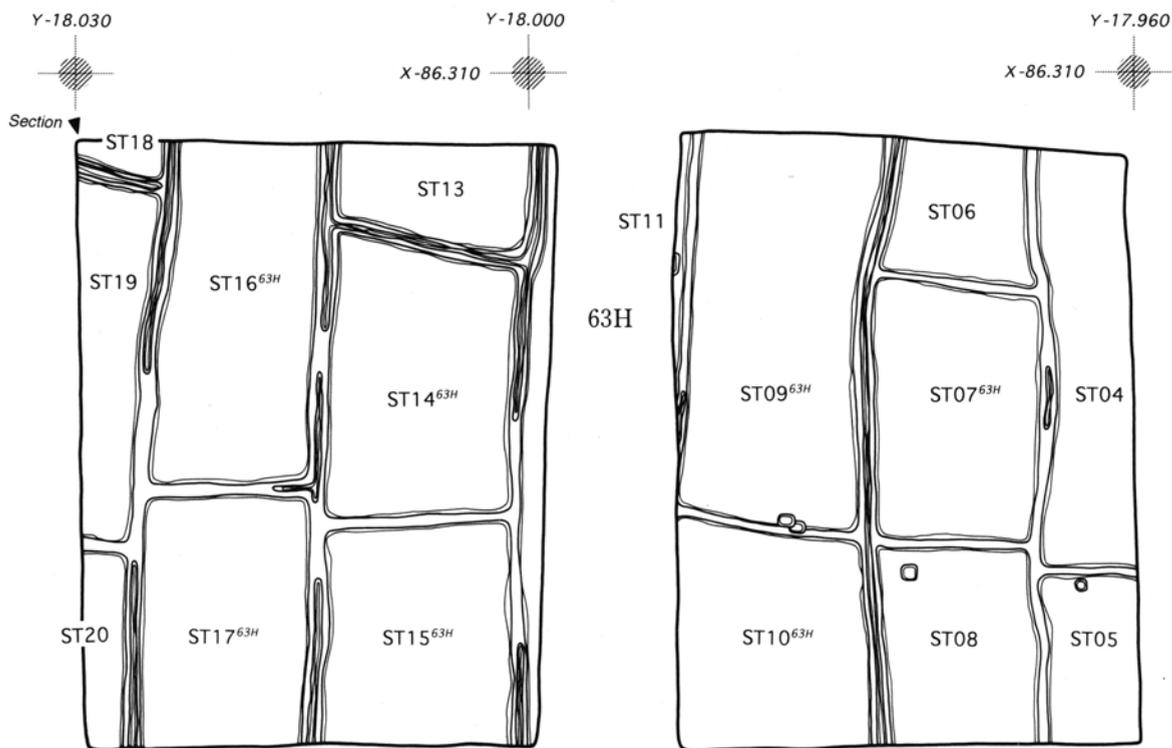
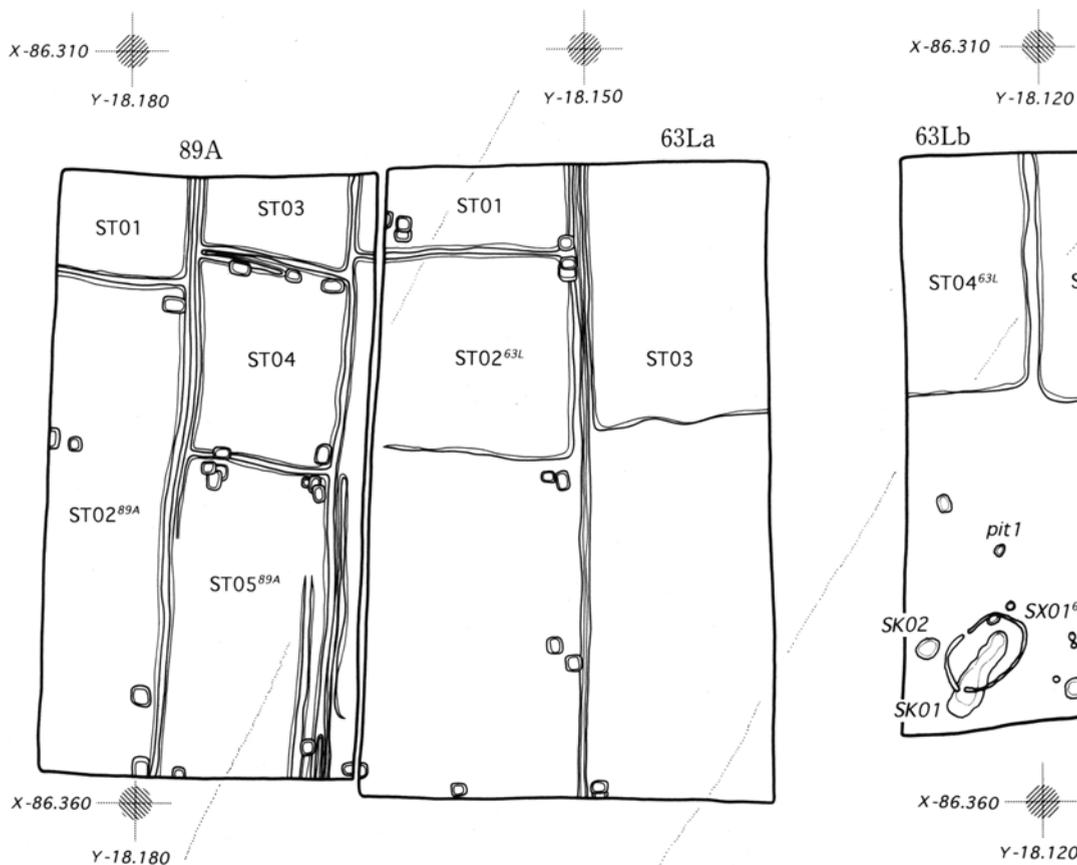
Y-18.260
X-86.320

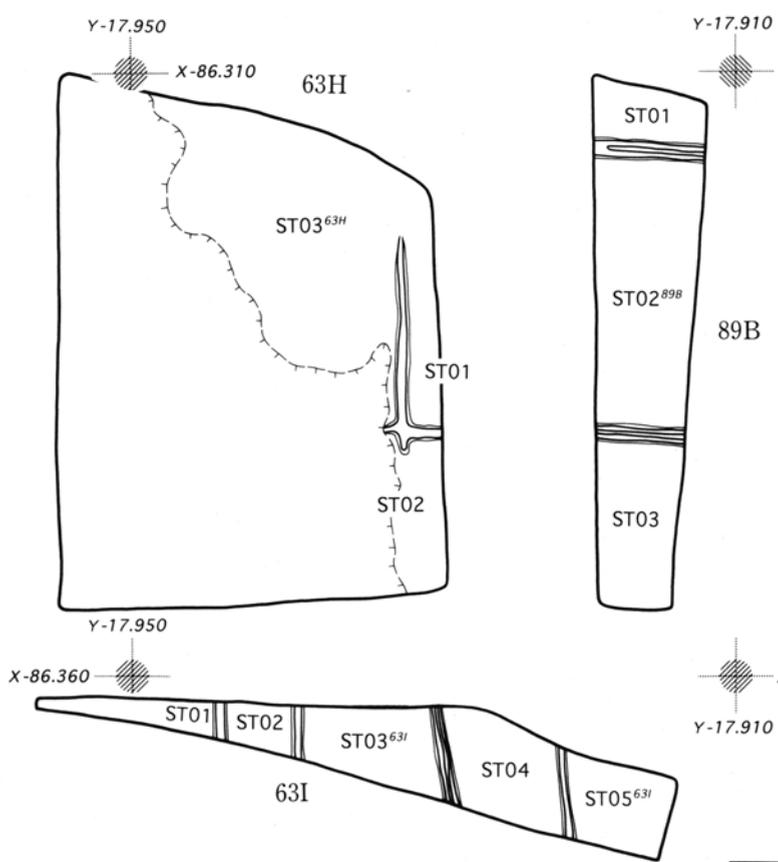
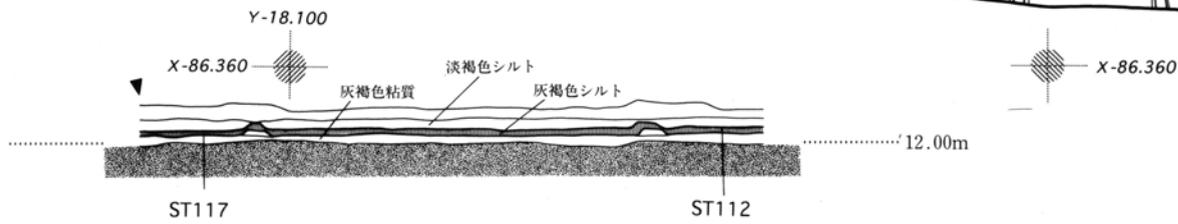
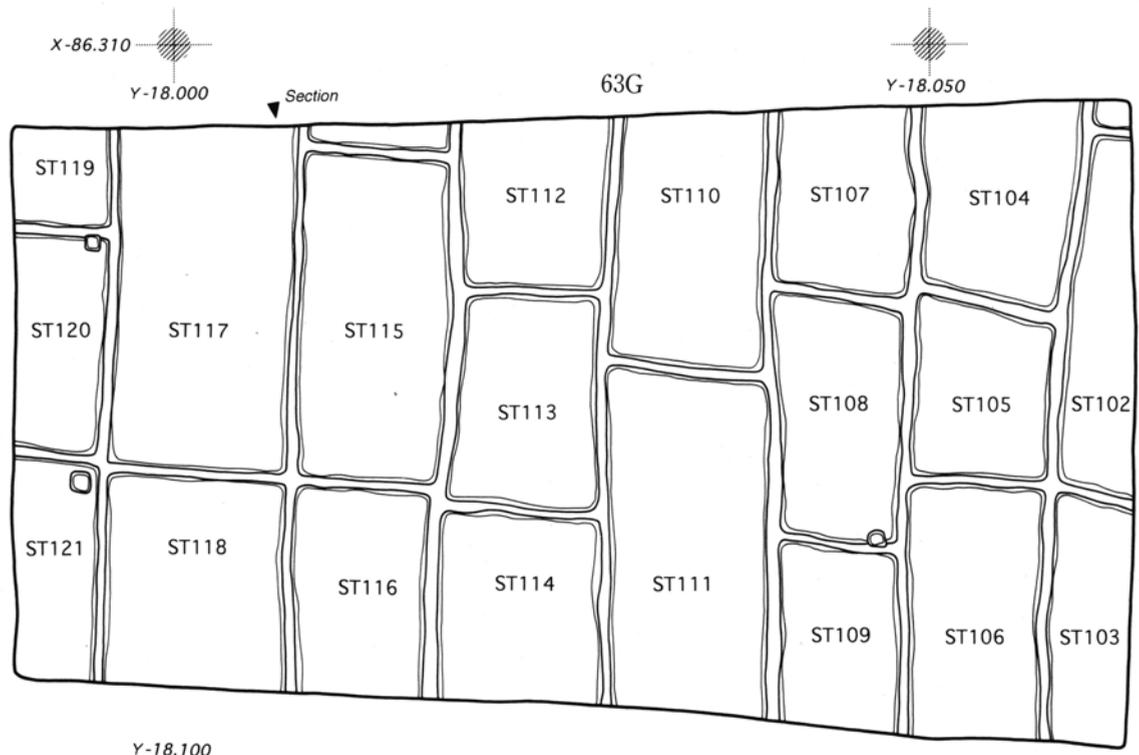
X-86.320
Y-18.220

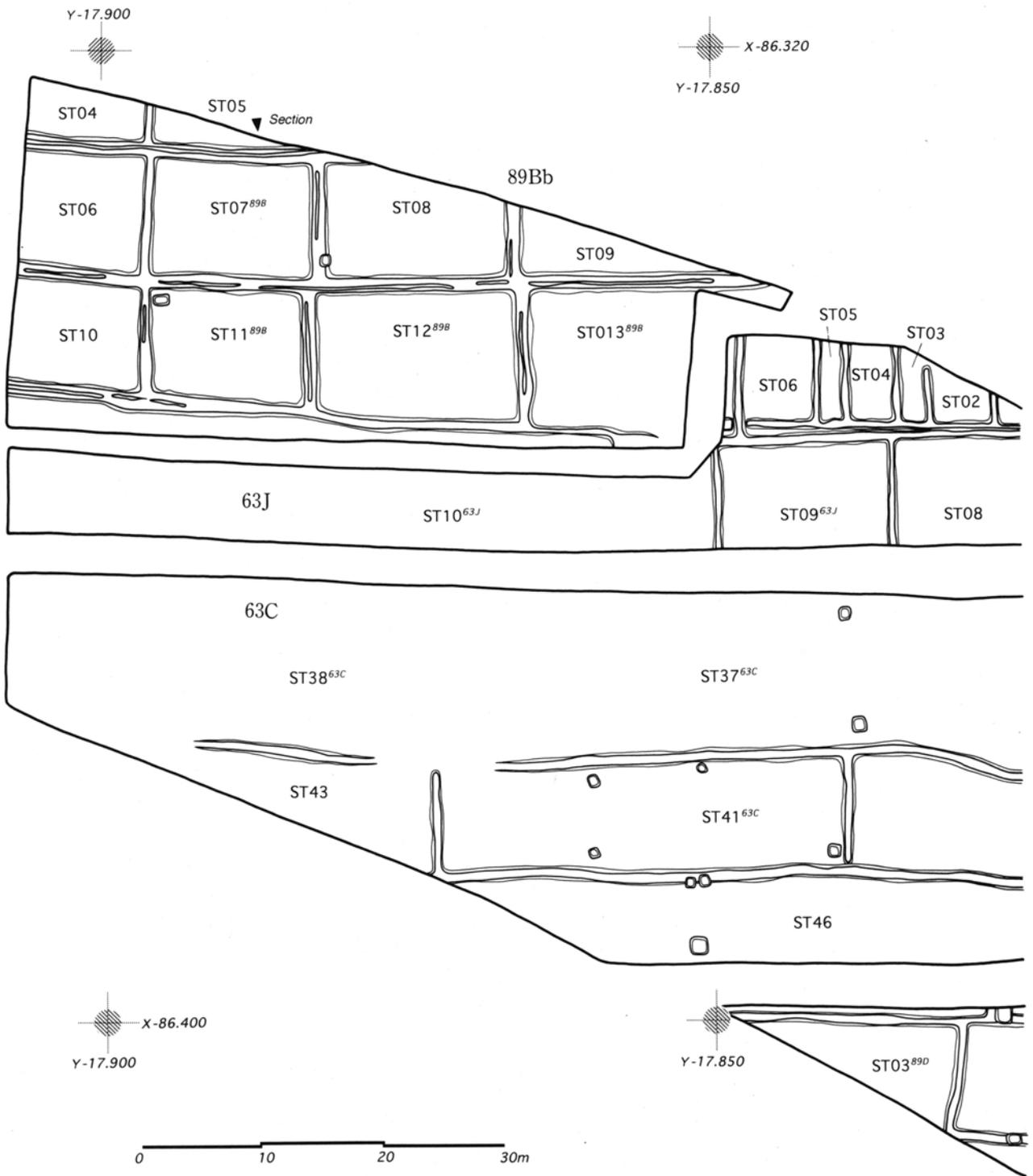
63D

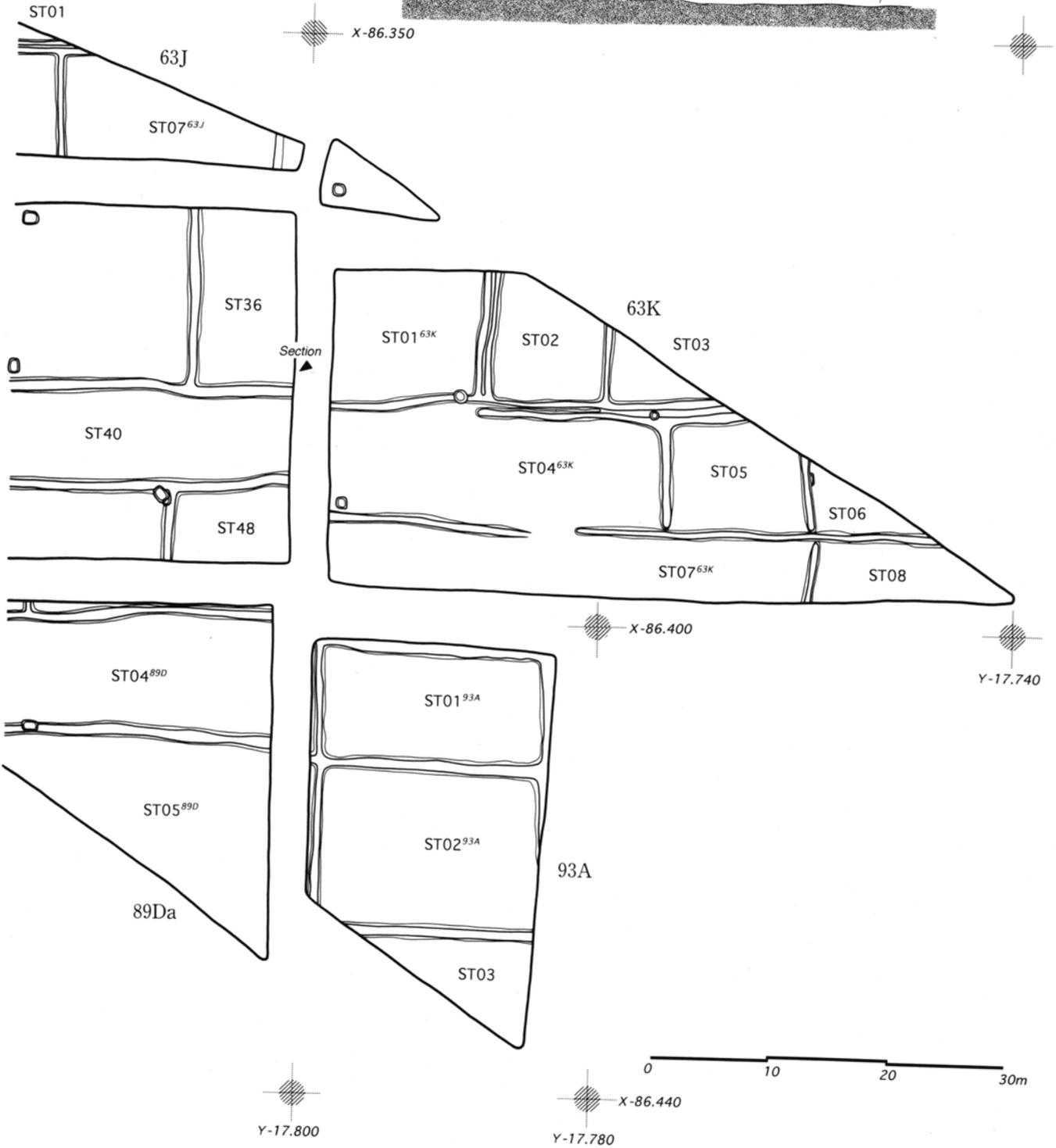
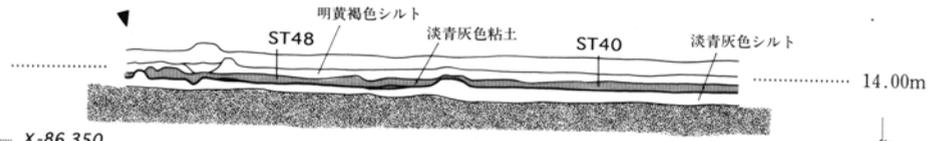
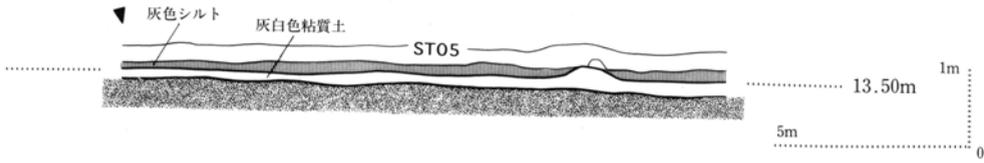


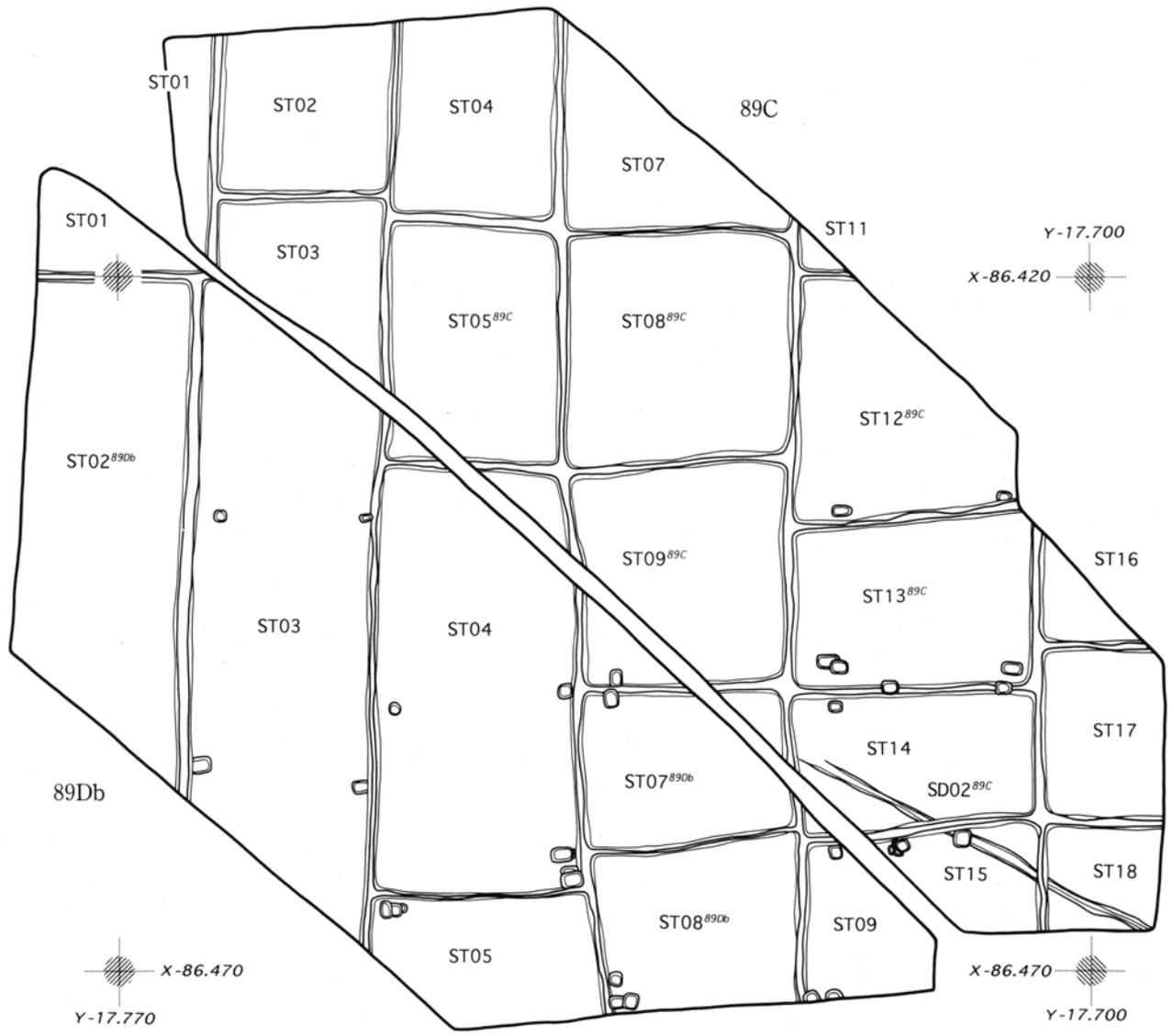


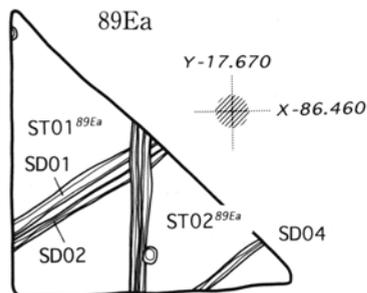




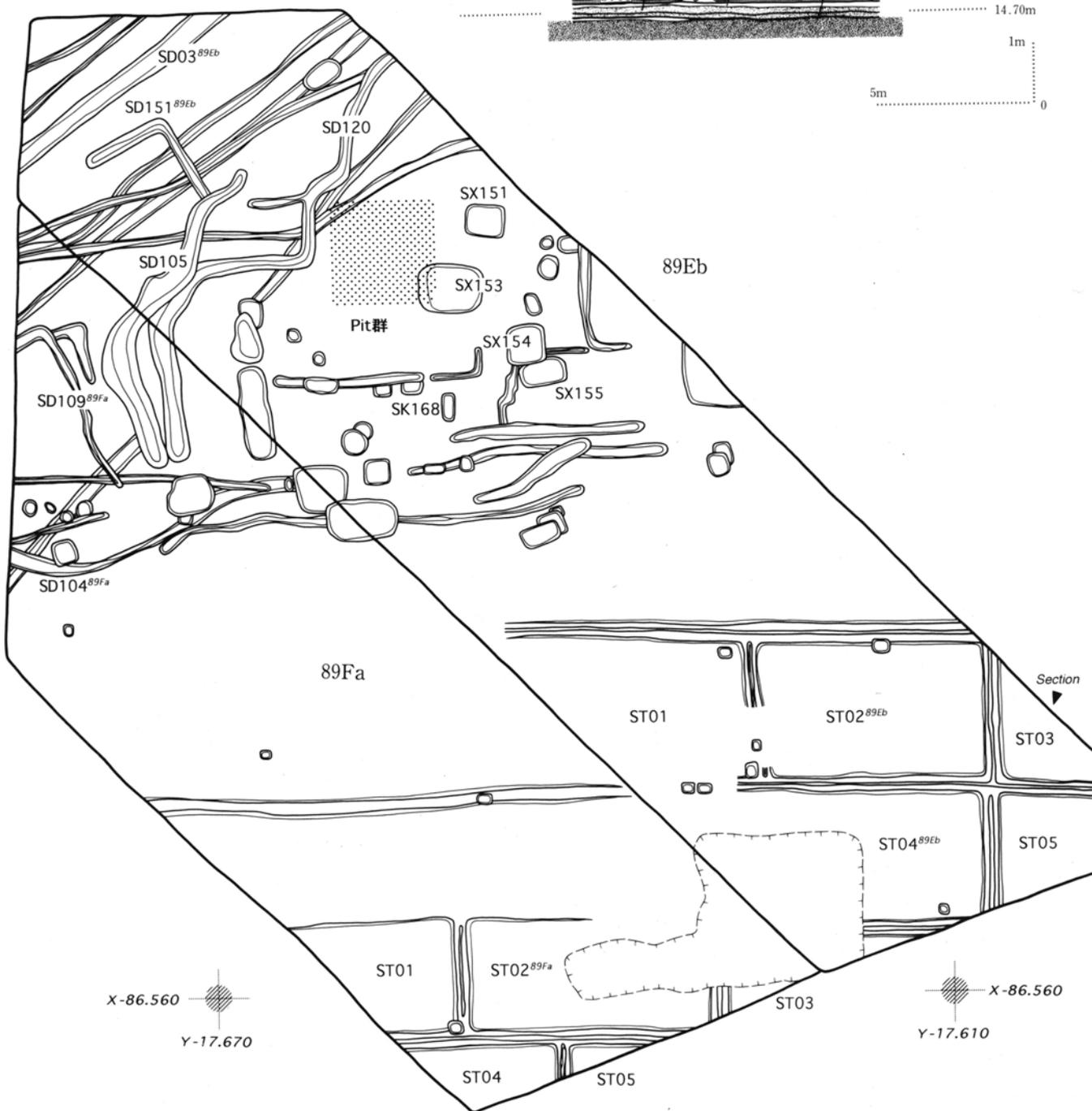
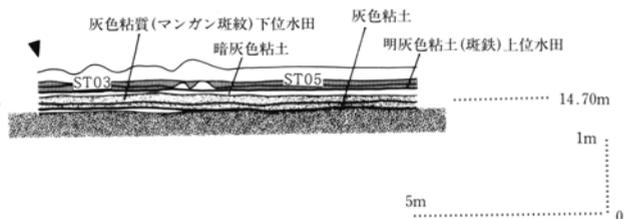






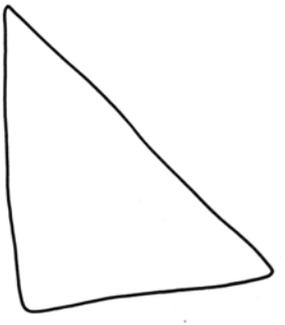
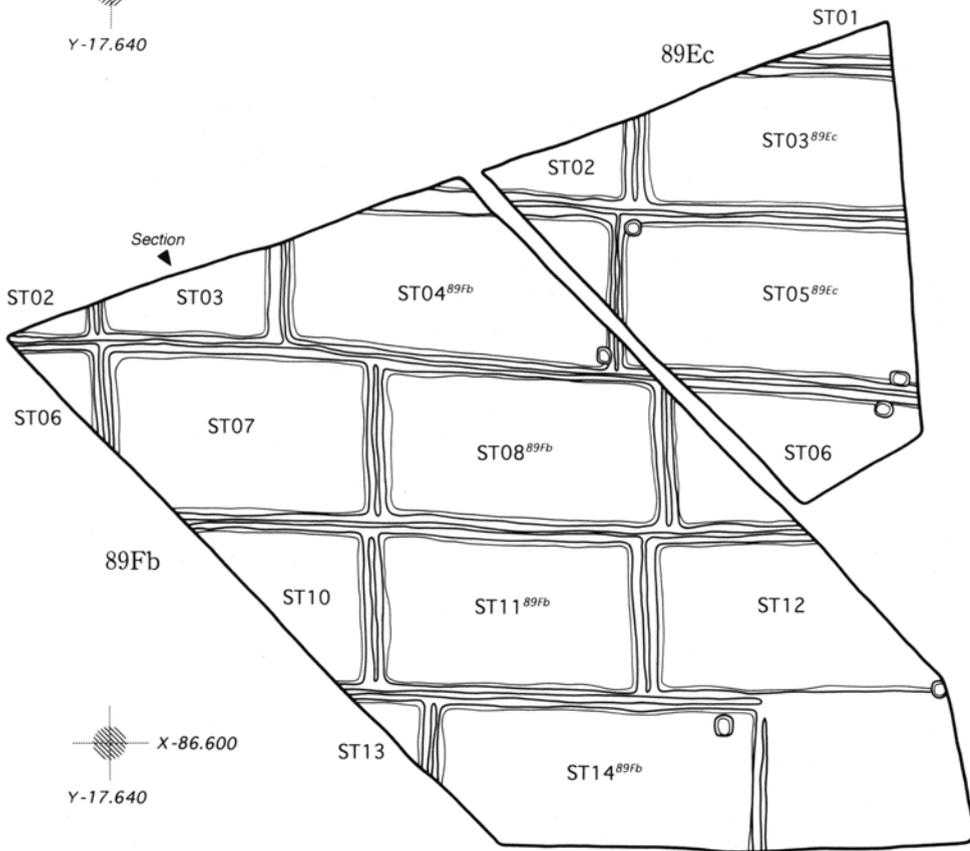


Y 17.610



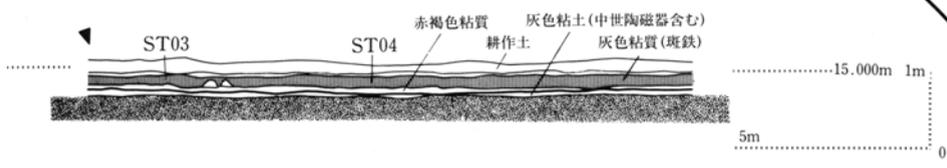
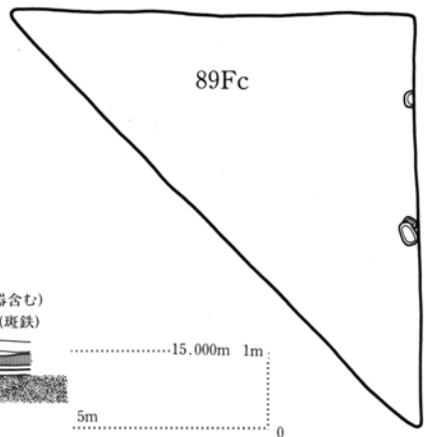
X-86.550
Y-17.640

Y-17.580
X-86.550



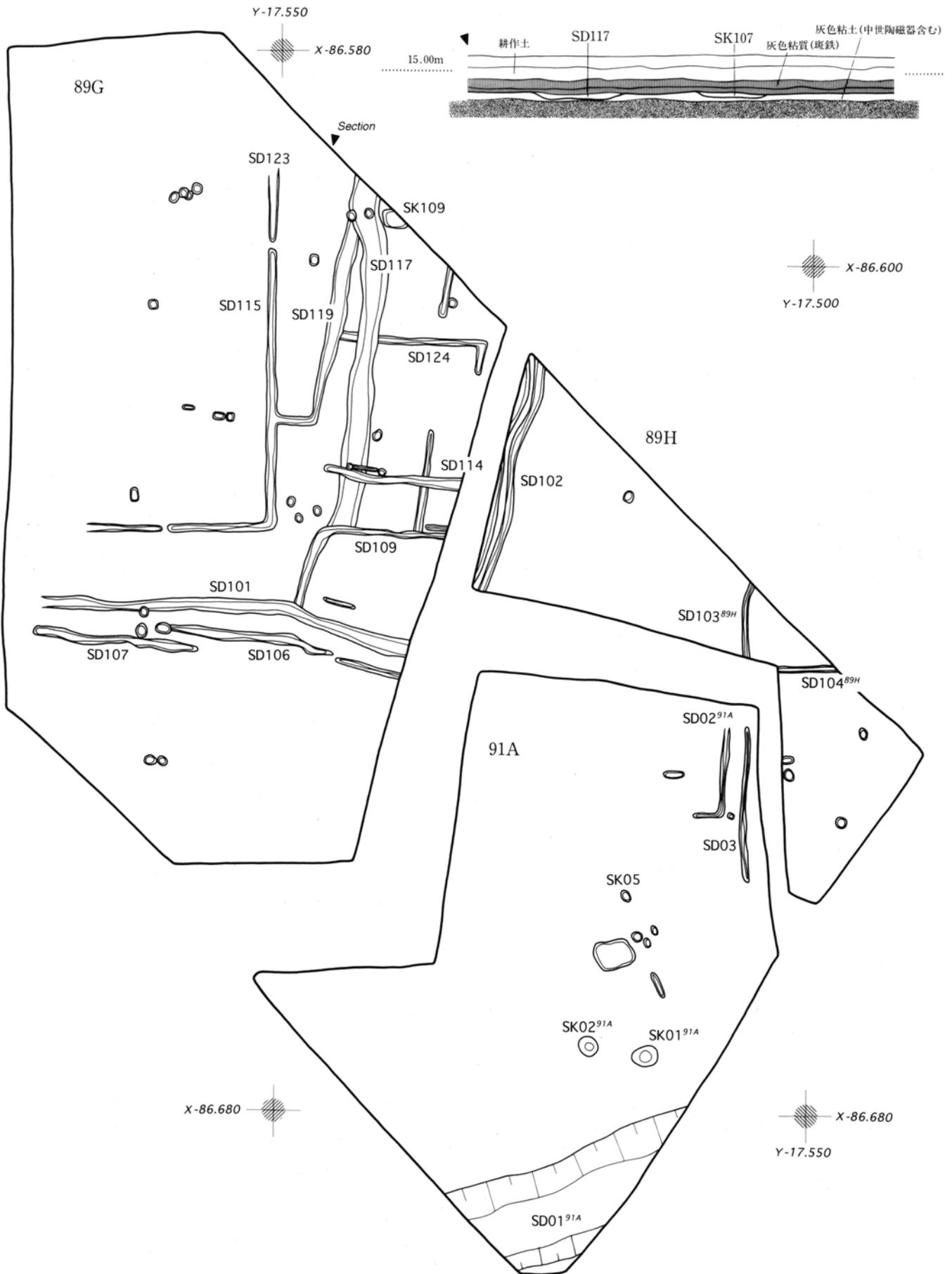
X-86.600
Y-17.640

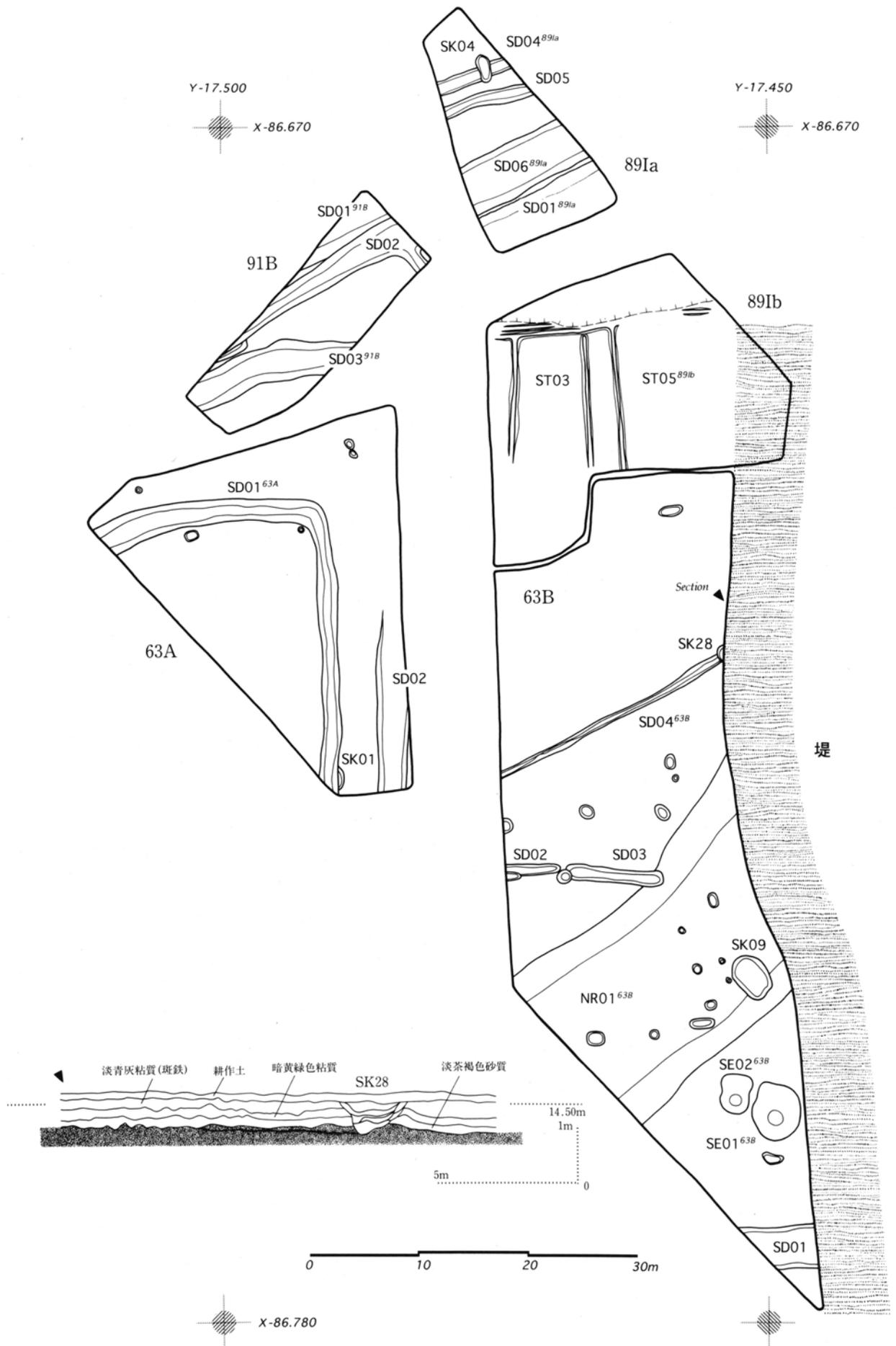
X-86.600
Y-17.580

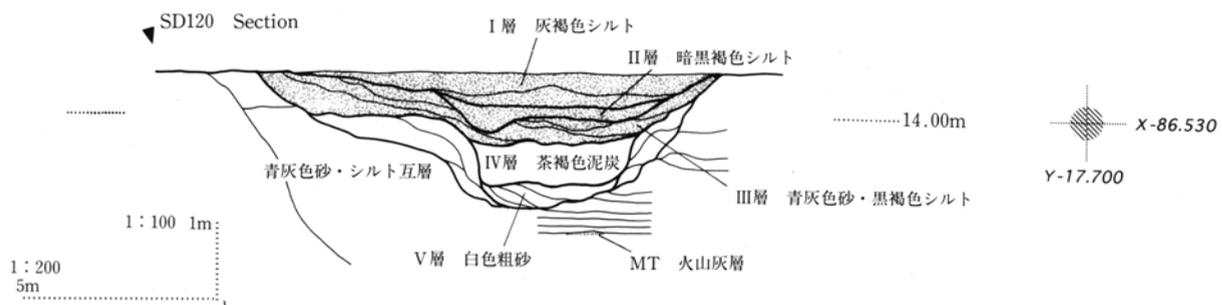
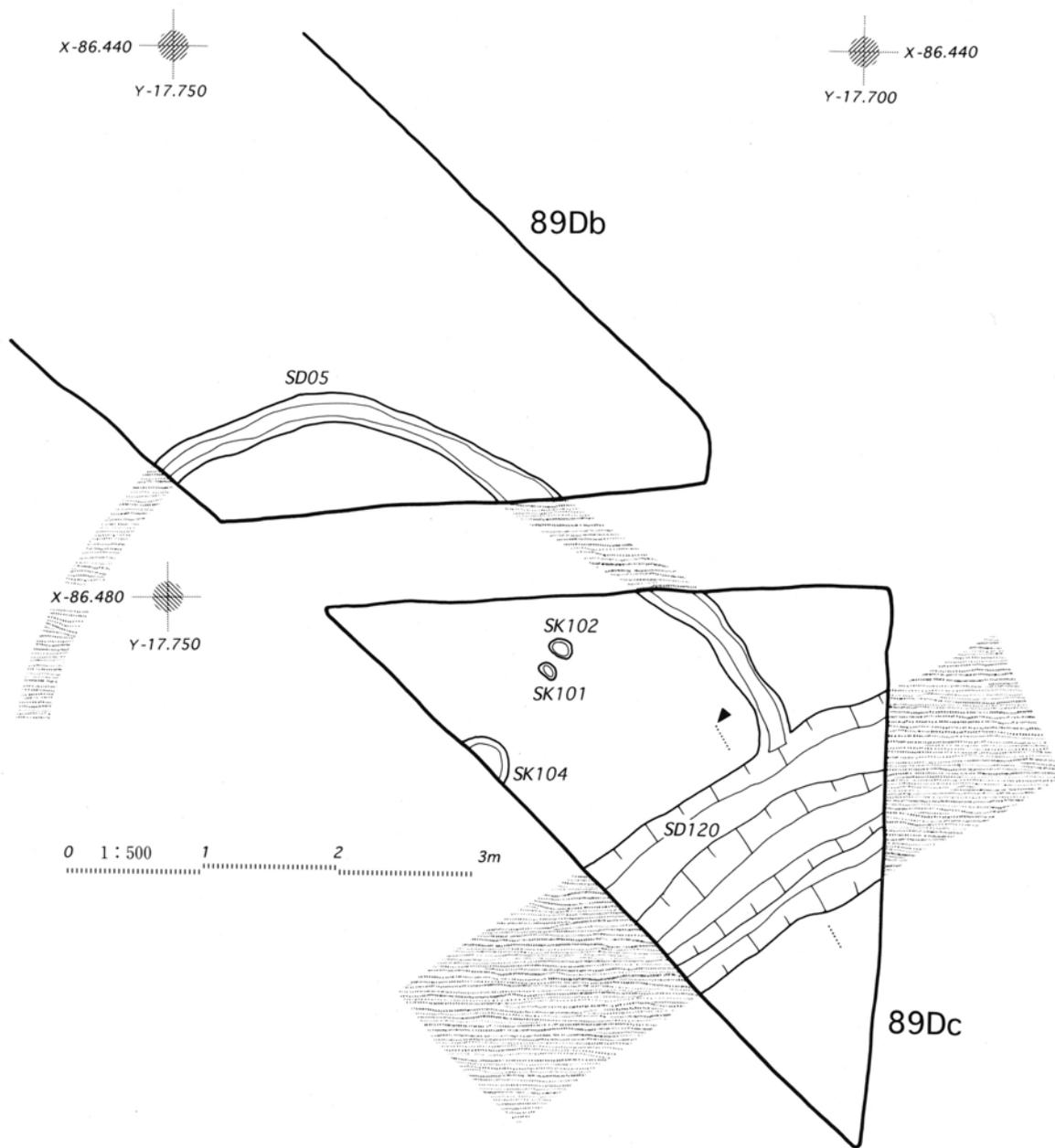


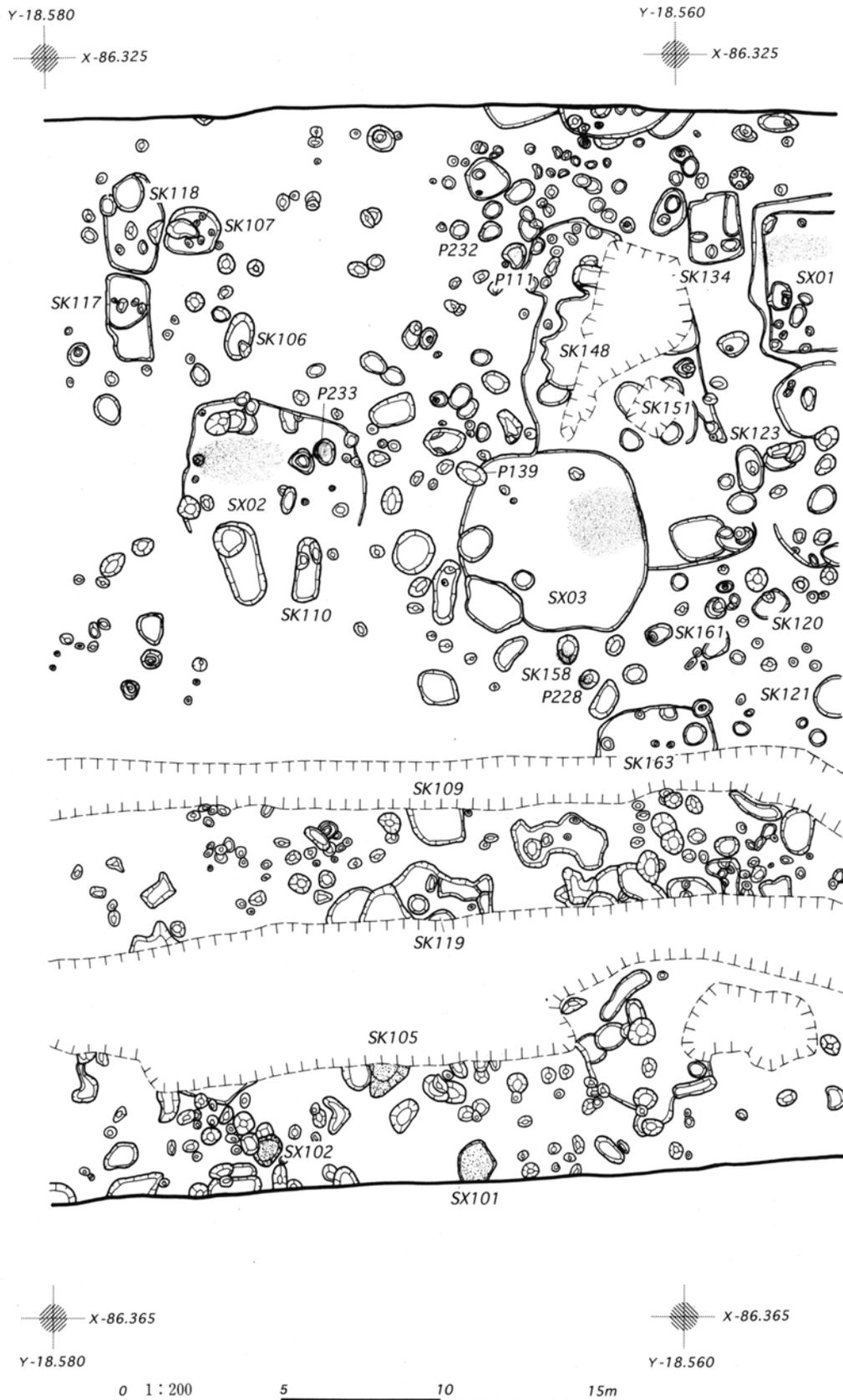
0 10 20 30m

X-86.650
Y-17.580



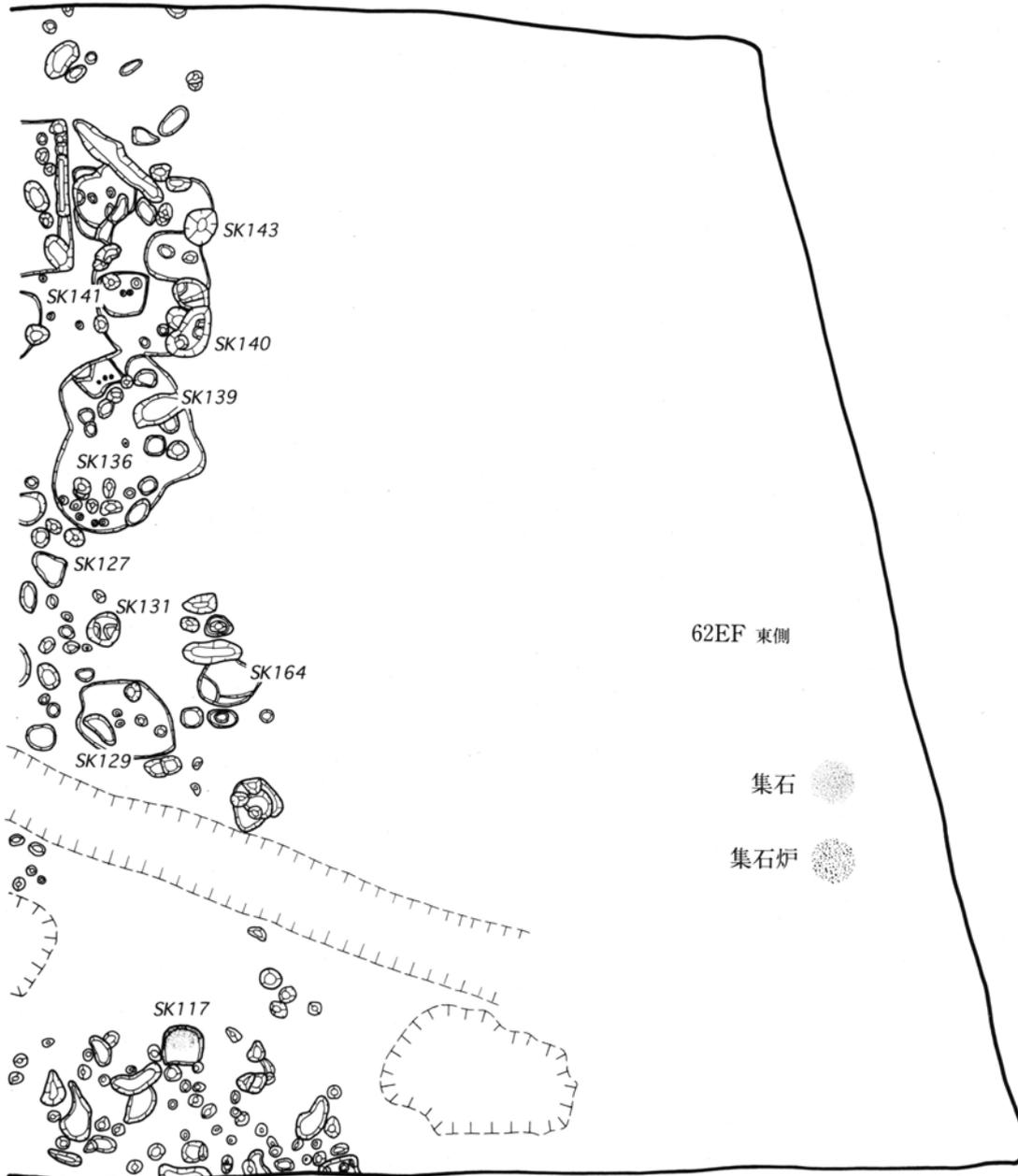
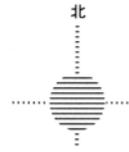






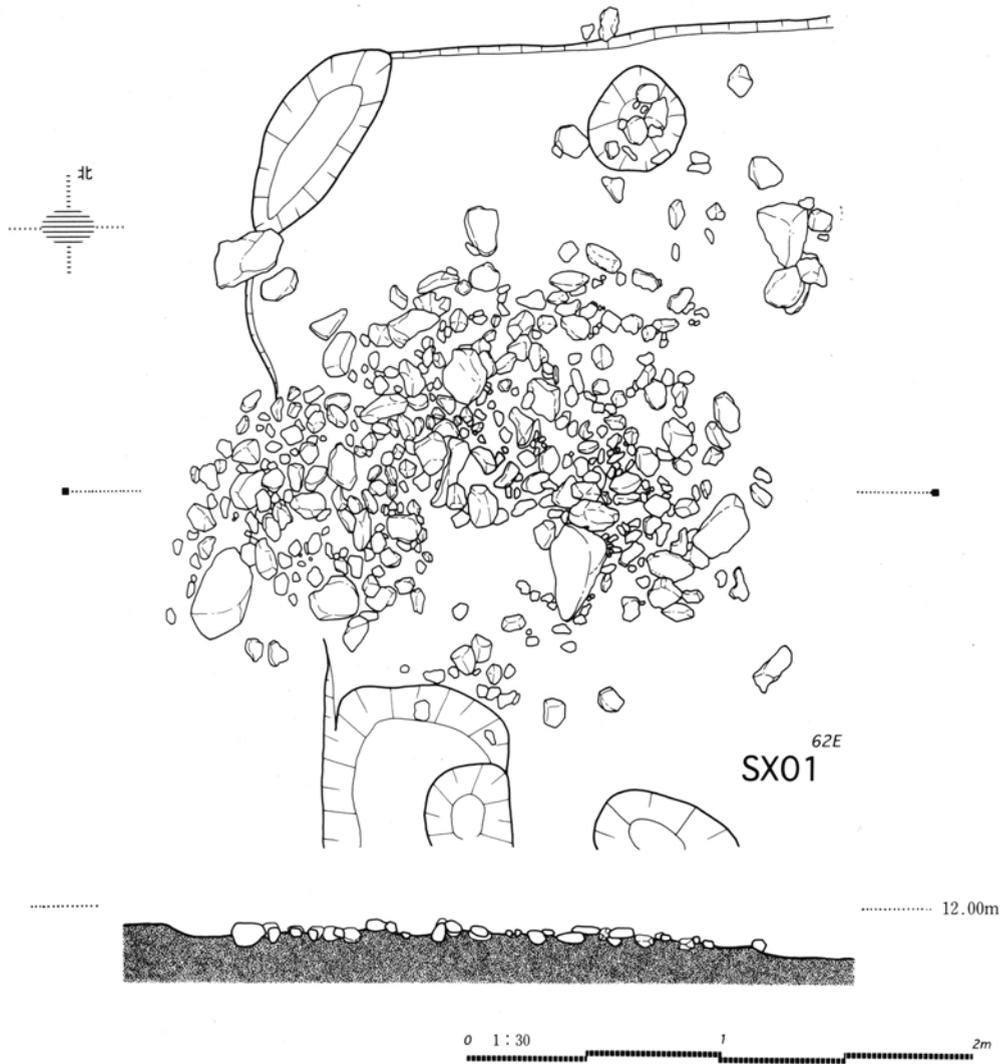
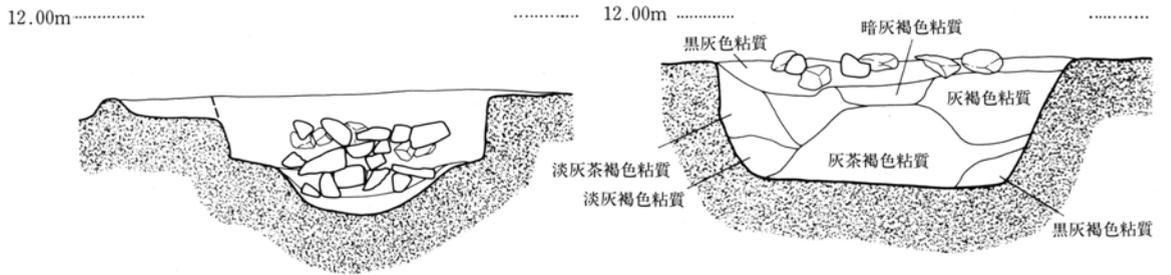
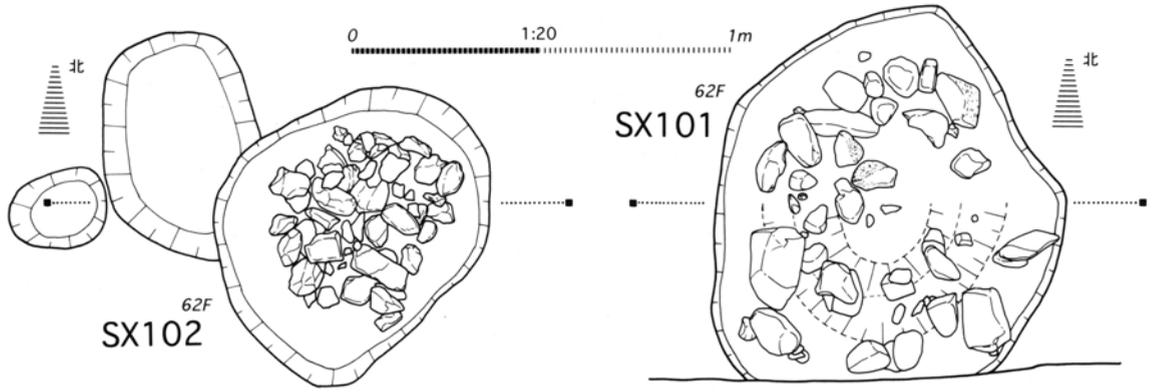
Y-18.550
X-86.325

Y-18.540
X-86.325



X-86.365
Y-18.550

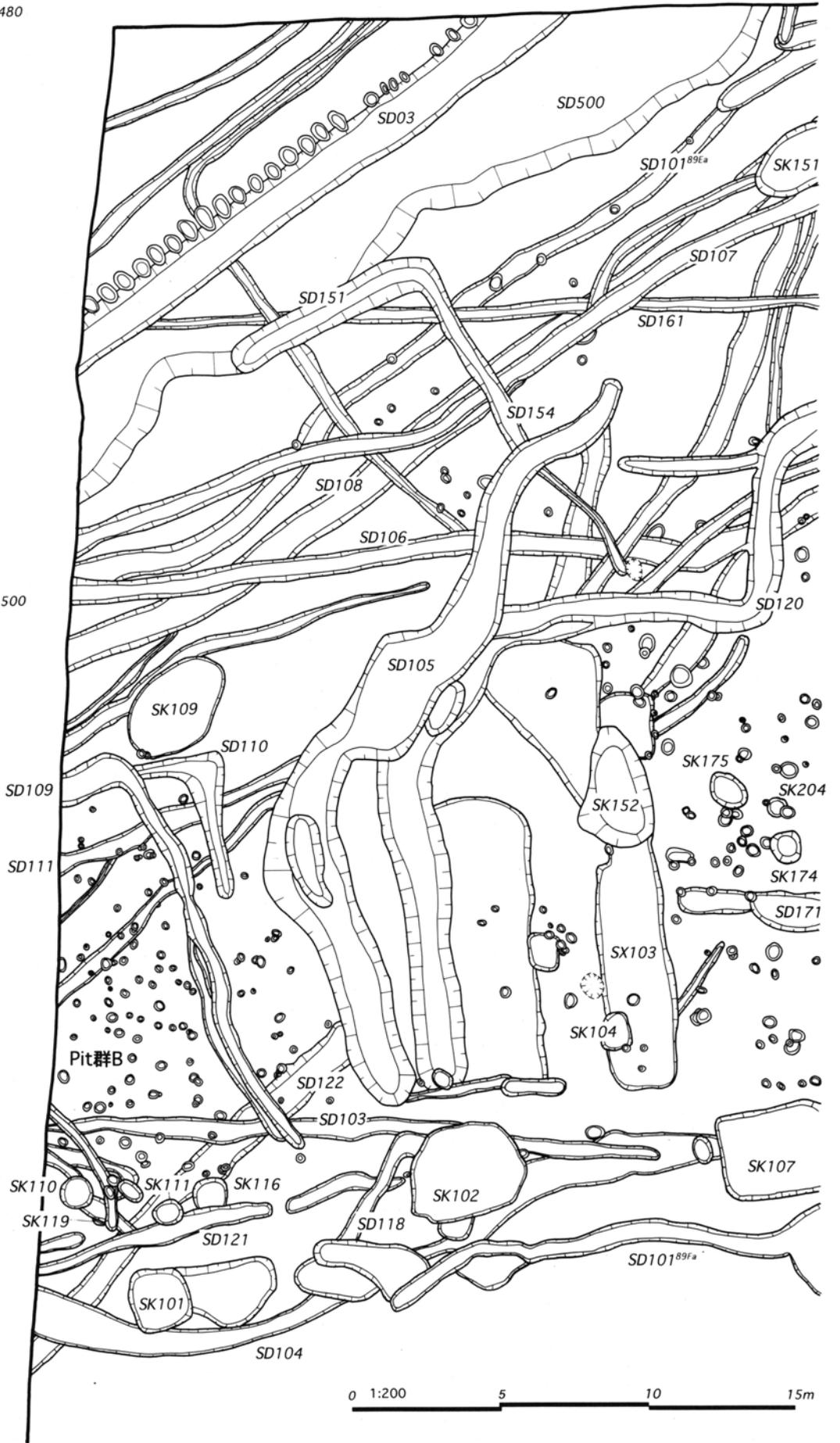
X-86.365
Y-18.540



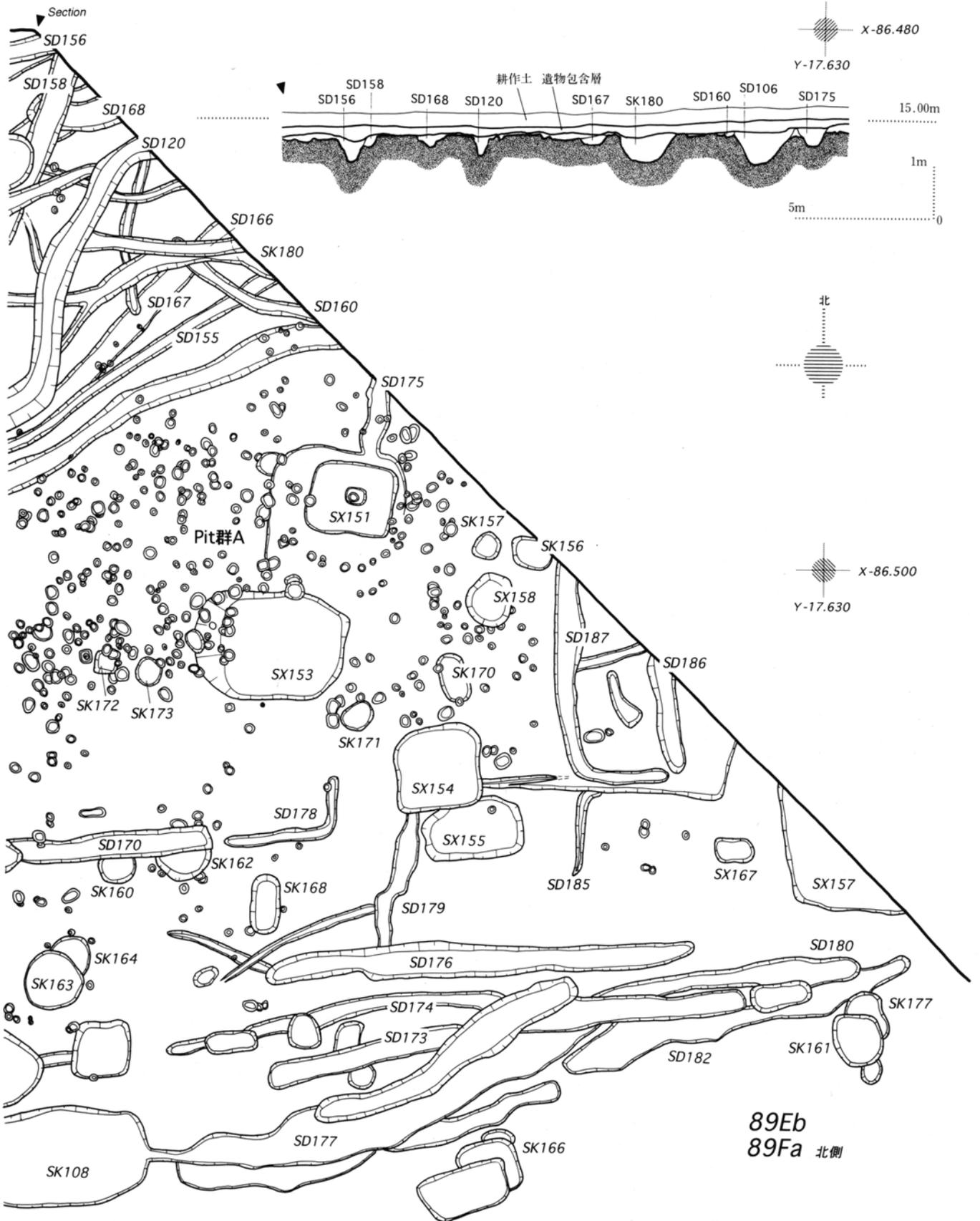


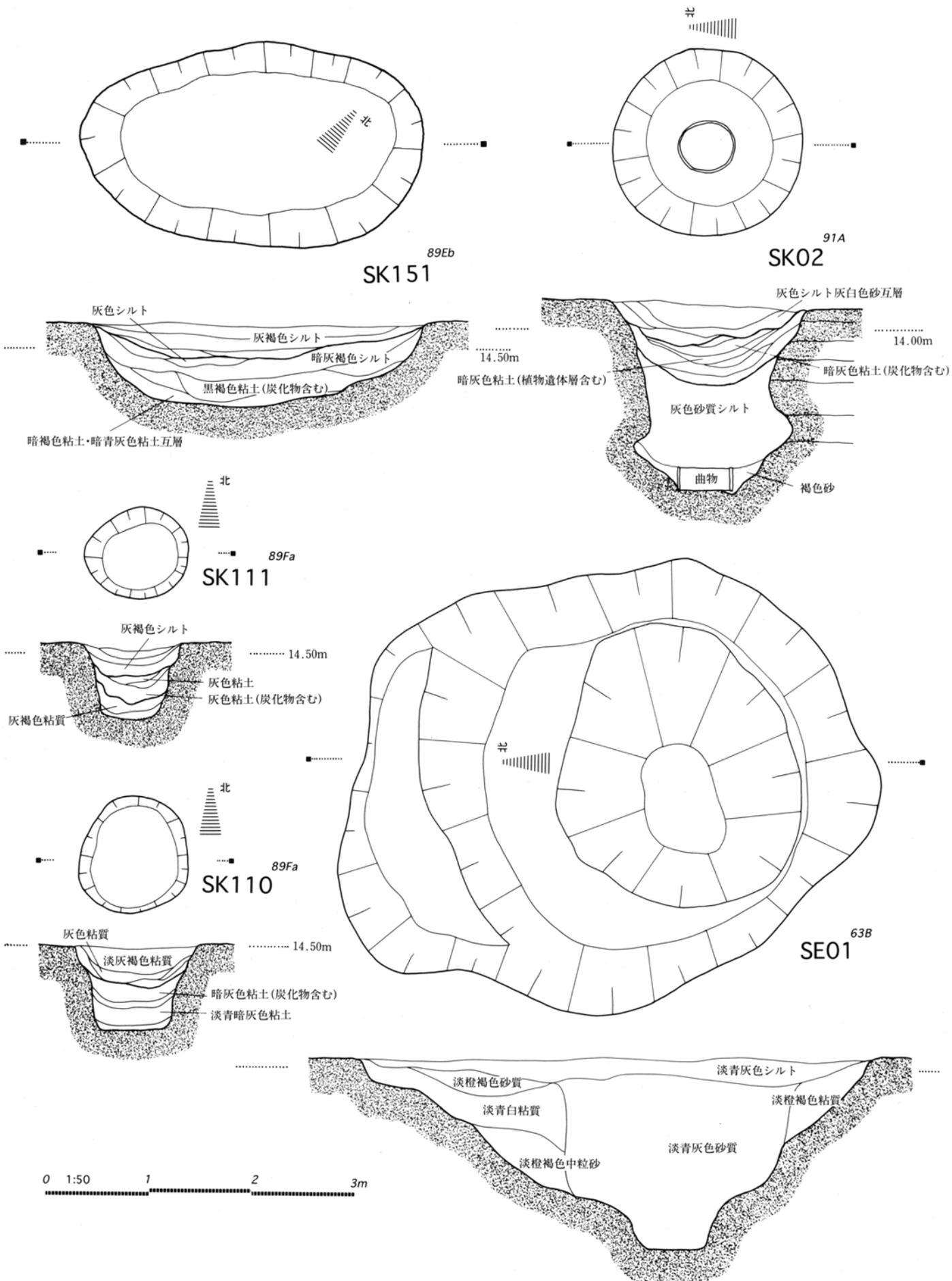
X-86.480
Y-17.690

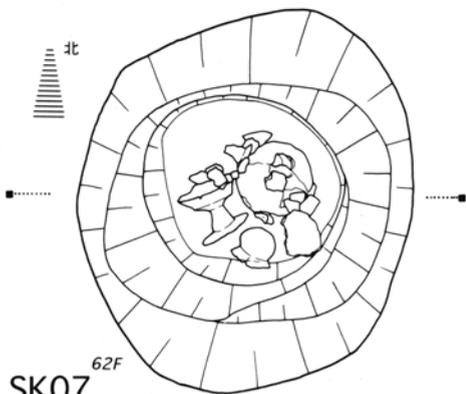
X-86.500
Y-17.690



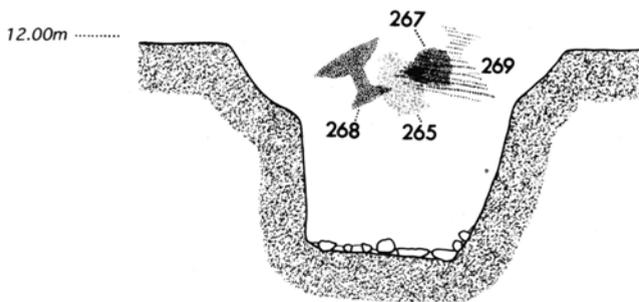
0 1:200 5 10 15m



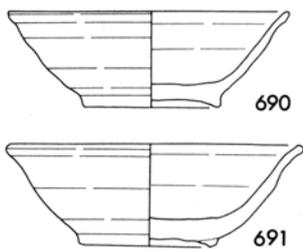
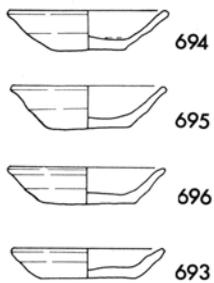




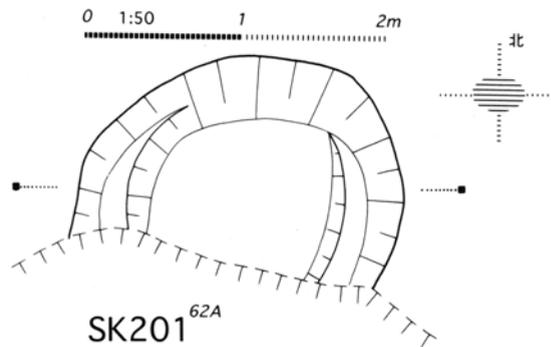
SK07 62F



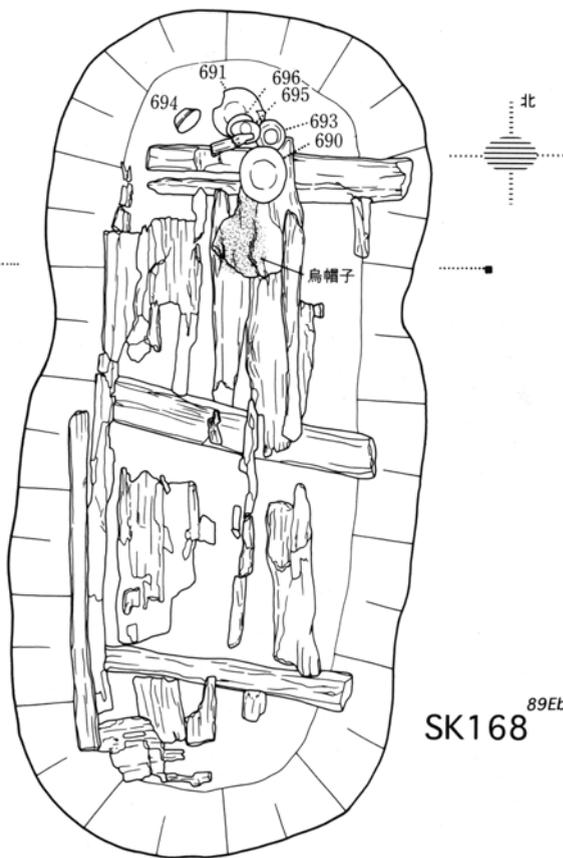
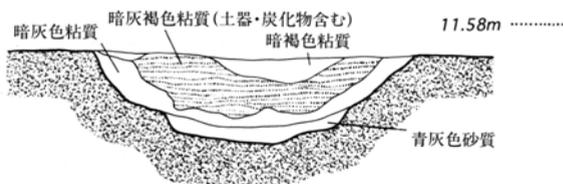
0 1:30 1 2 3m



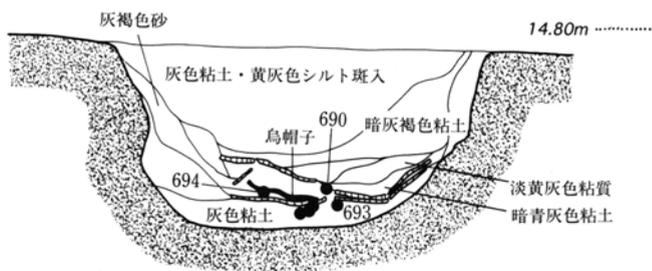
0 1:20 1m

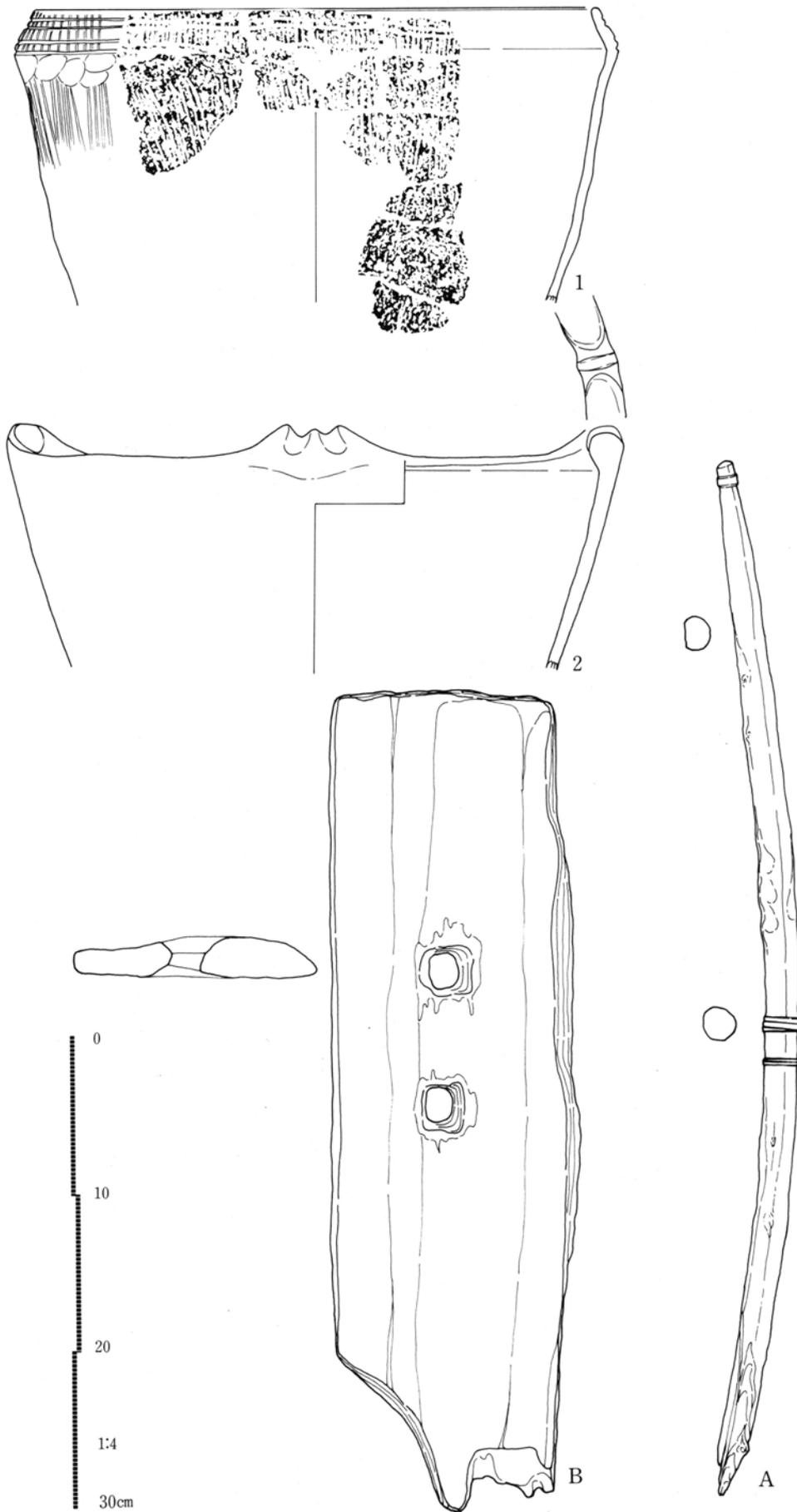


SK201 62A

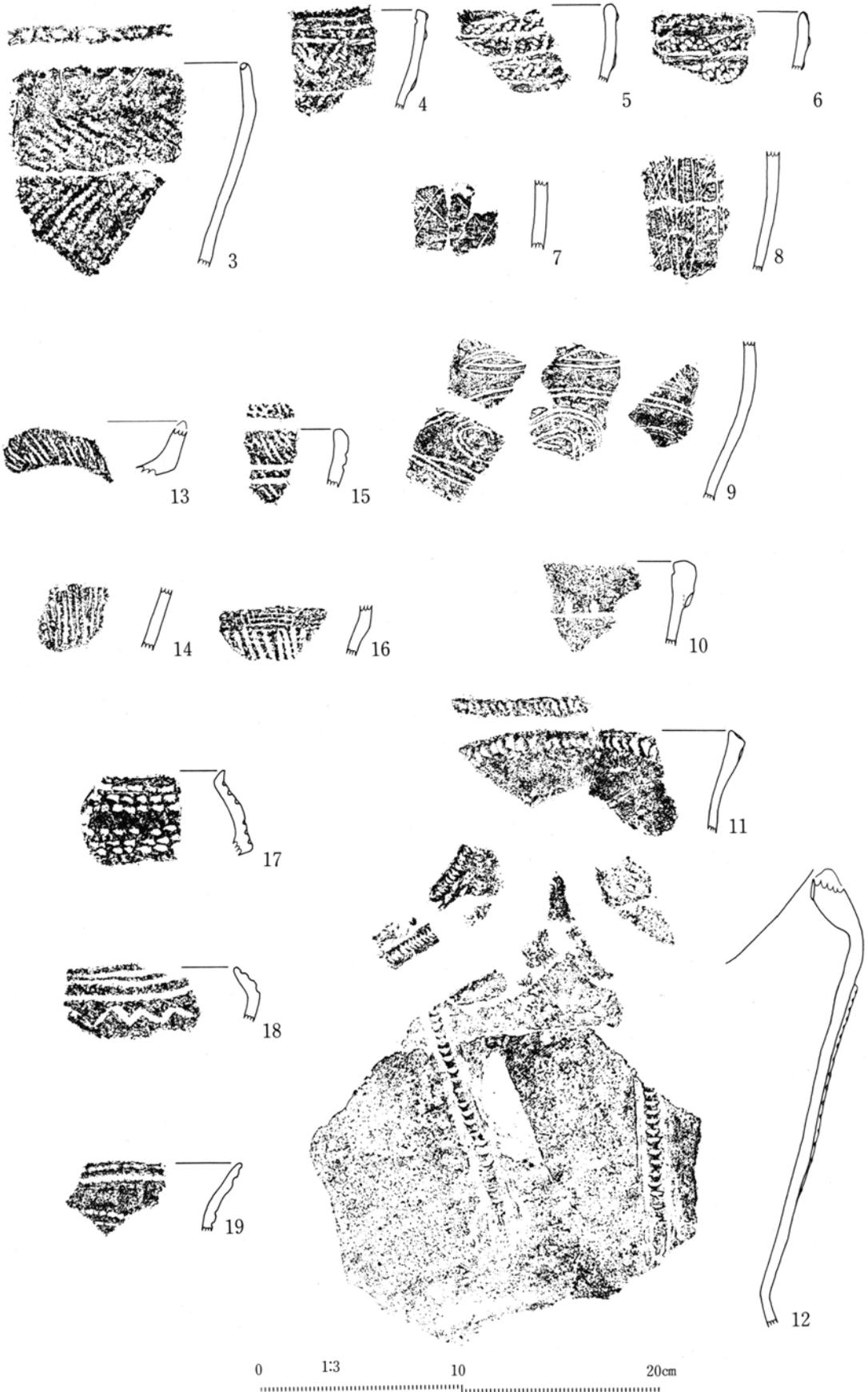


SK168 89Eb

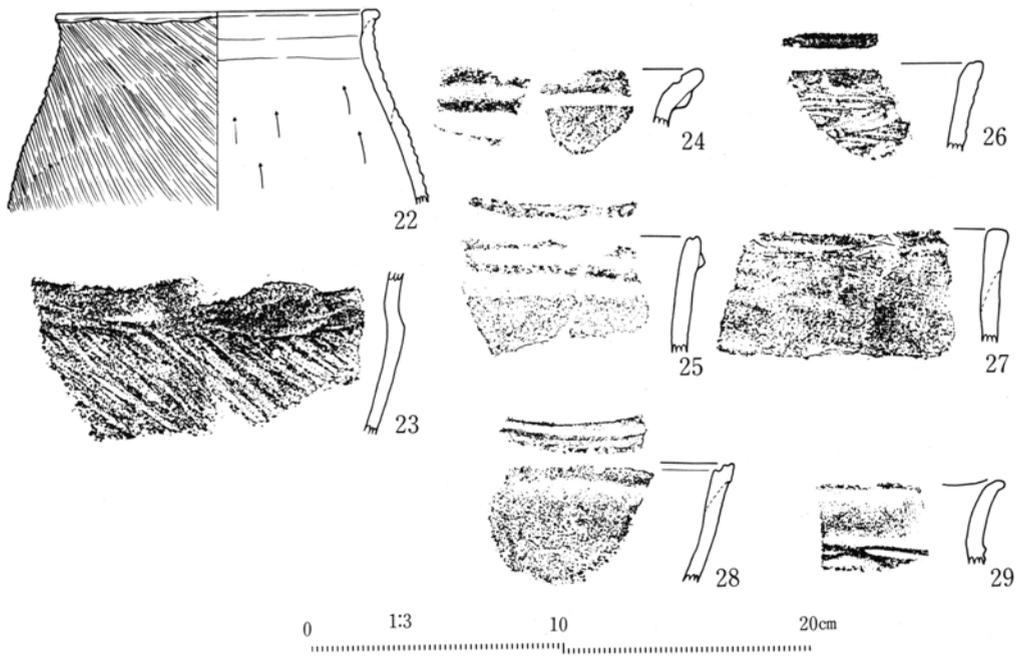
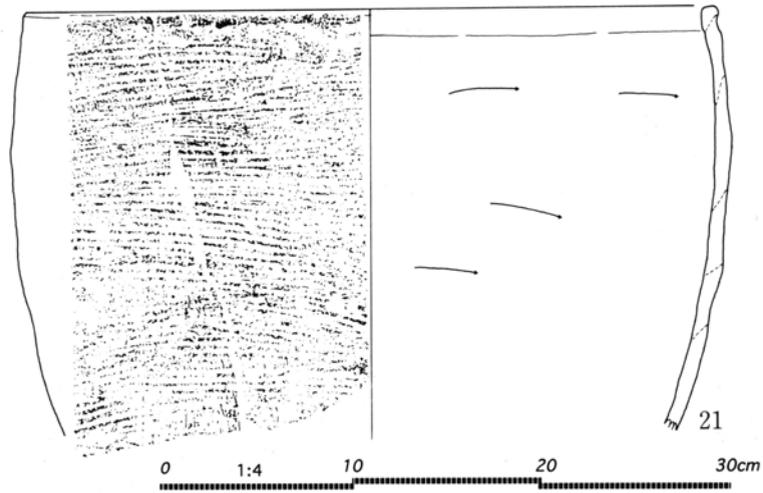


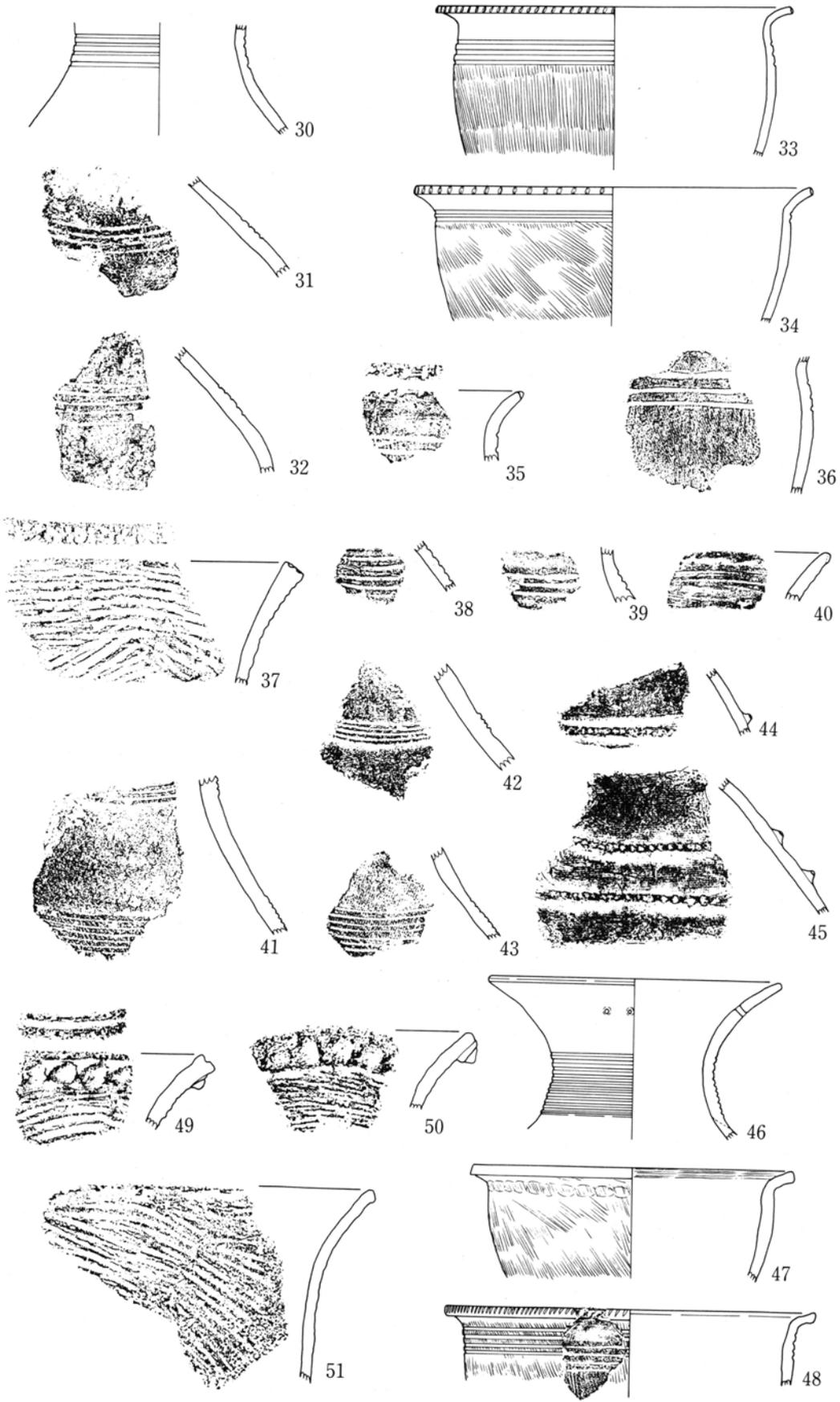


62E·F(1·2) 89DcSD120第IV層(A·B)

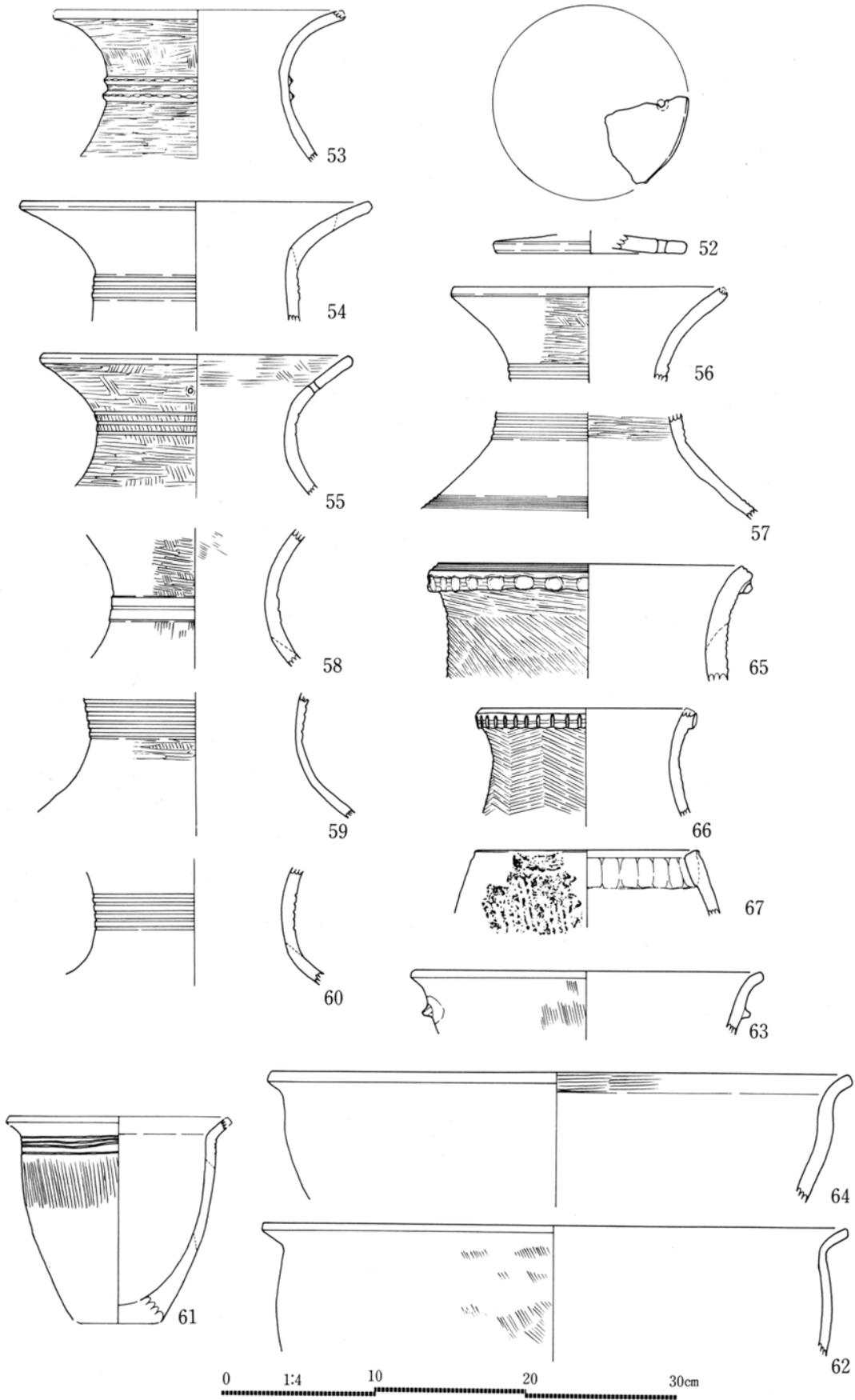


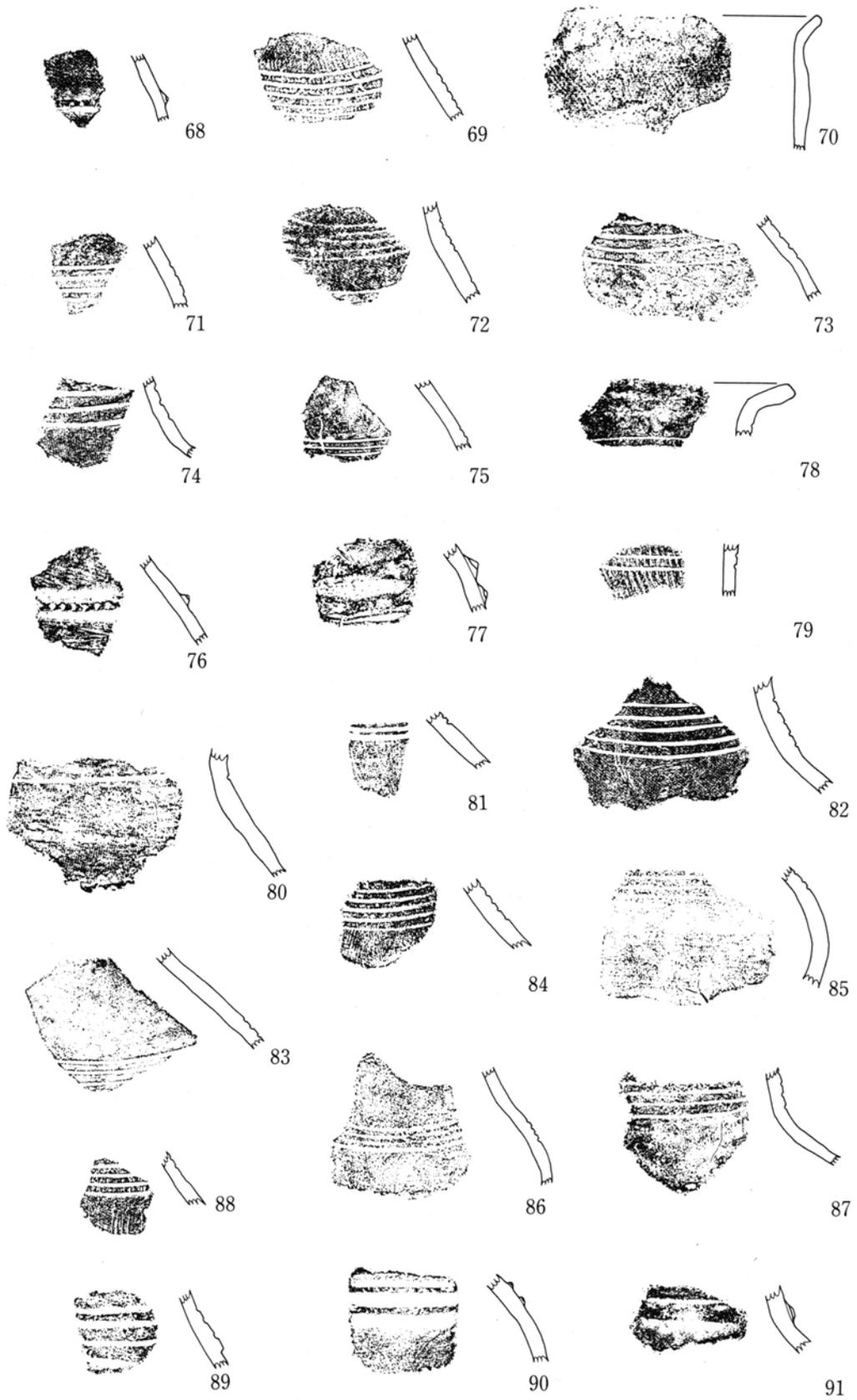
63L(3~12) 62E·F(13~19)

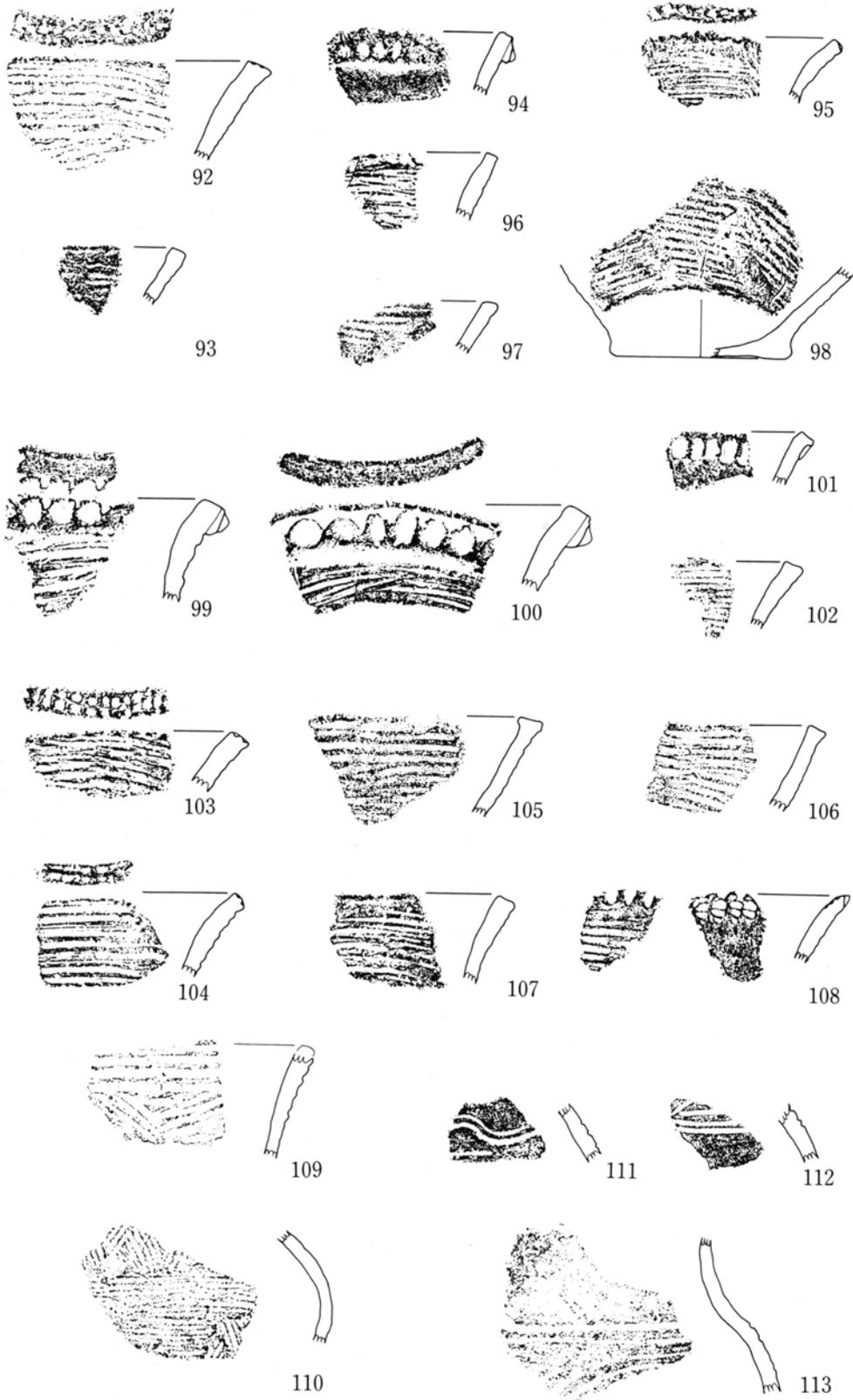




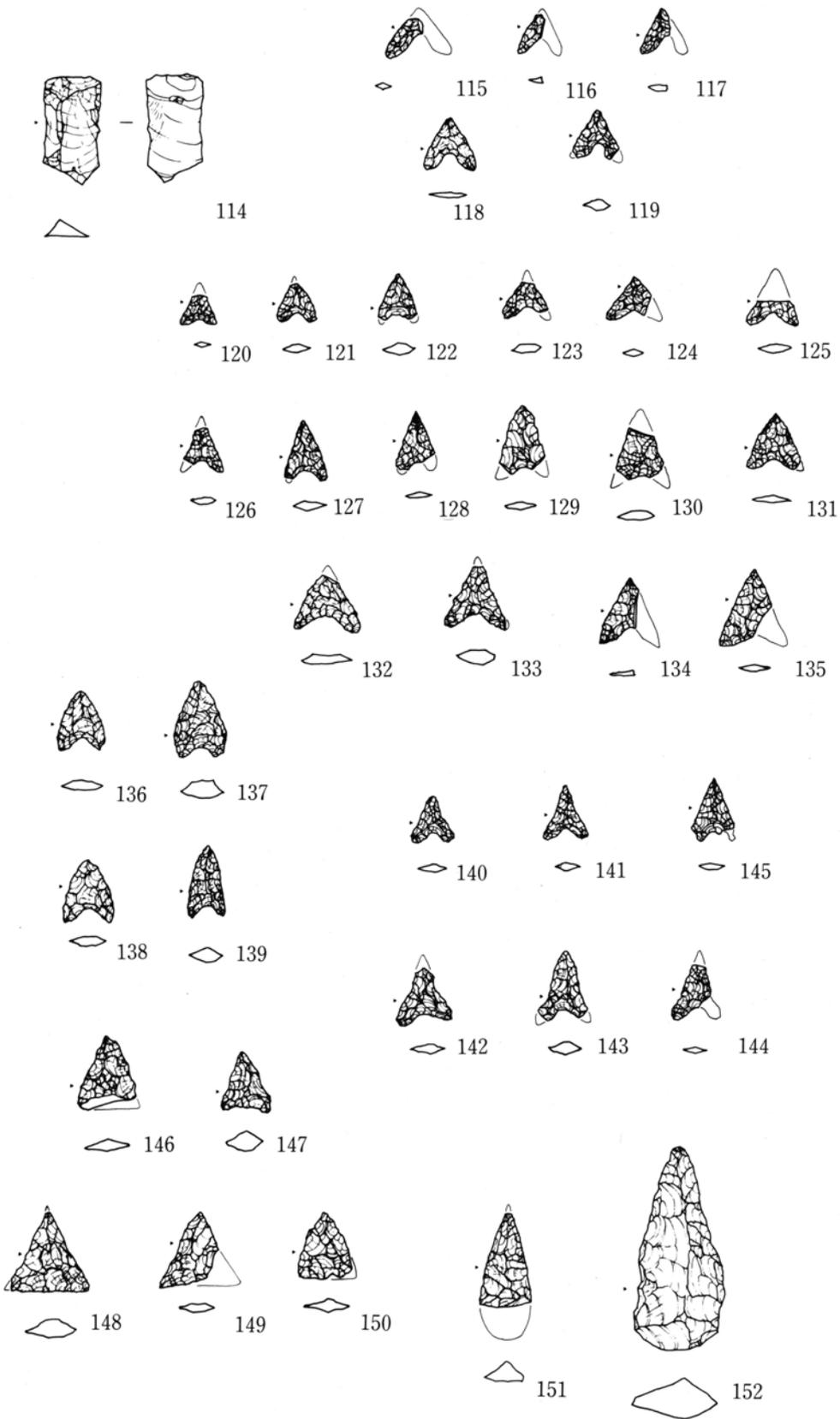
89DcSK102(30~36) SK101(37) SK04(38~40) SD05(41~51)



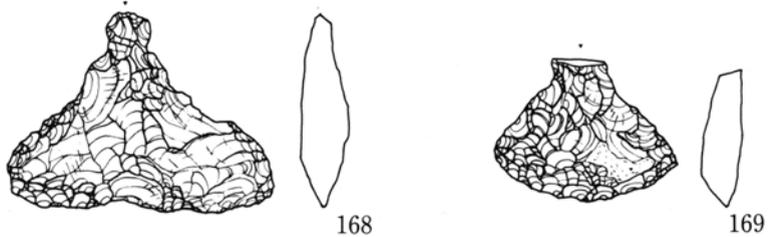
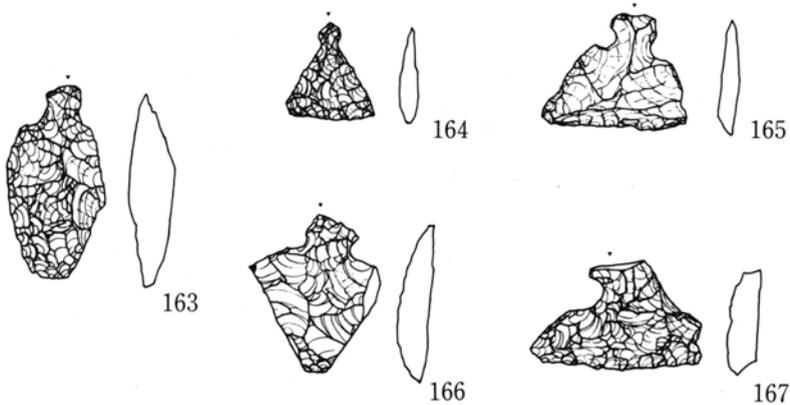
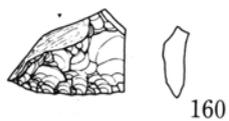
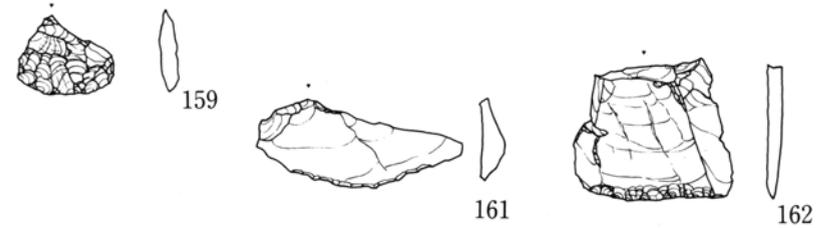
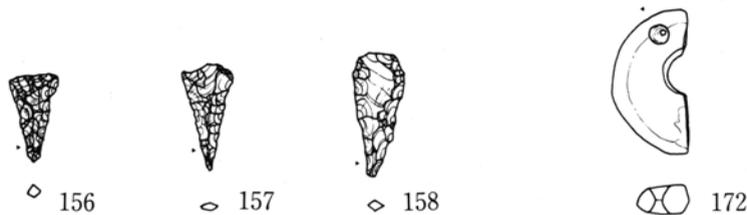
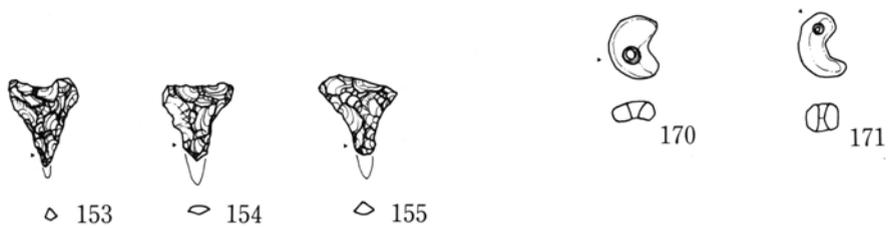


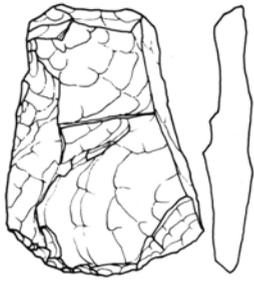


0 1:3 10 20cm



0 1:2 5 10 15cm





173



174



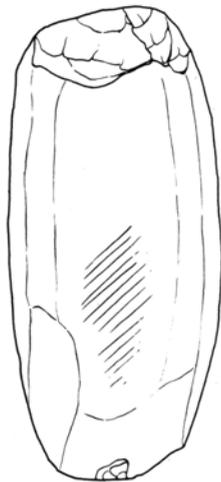
175



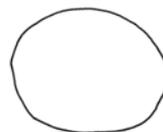
176



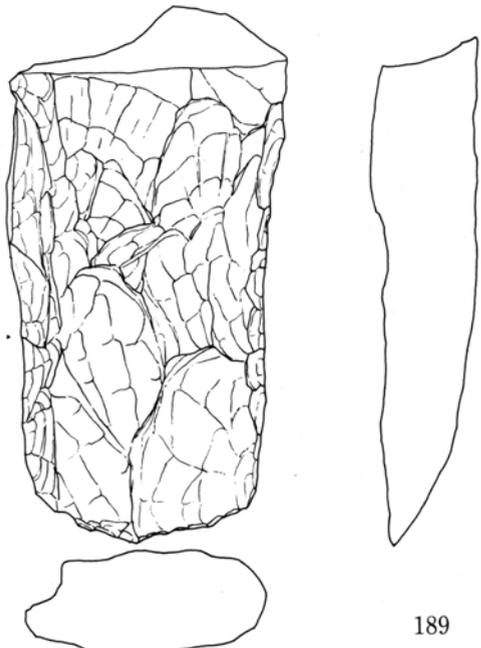
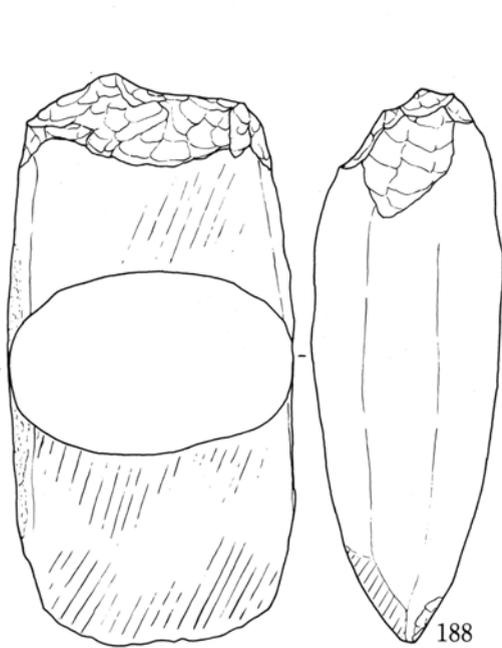
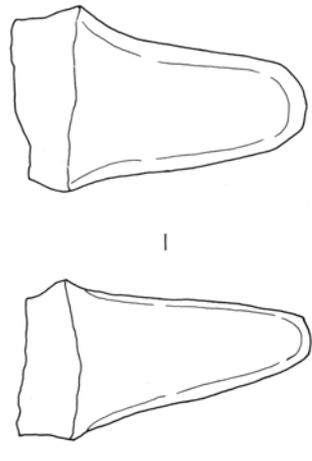
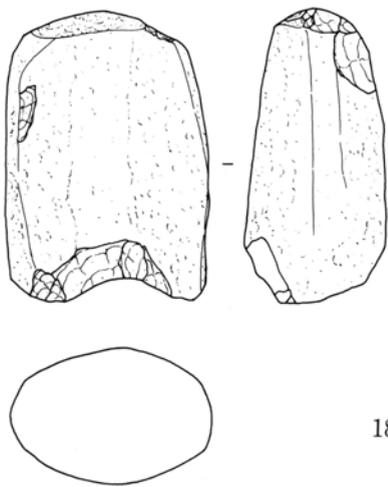
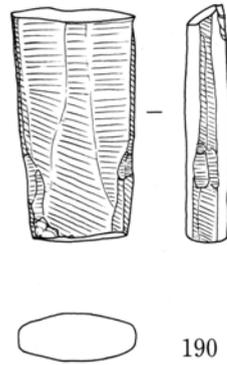
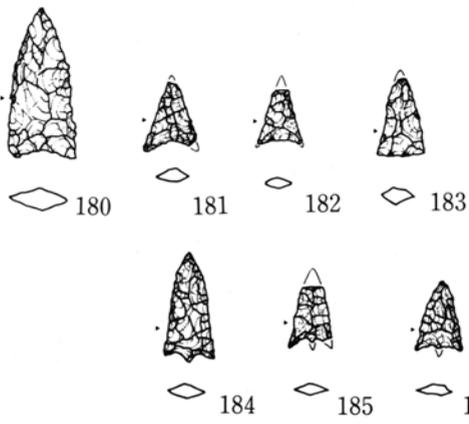
177



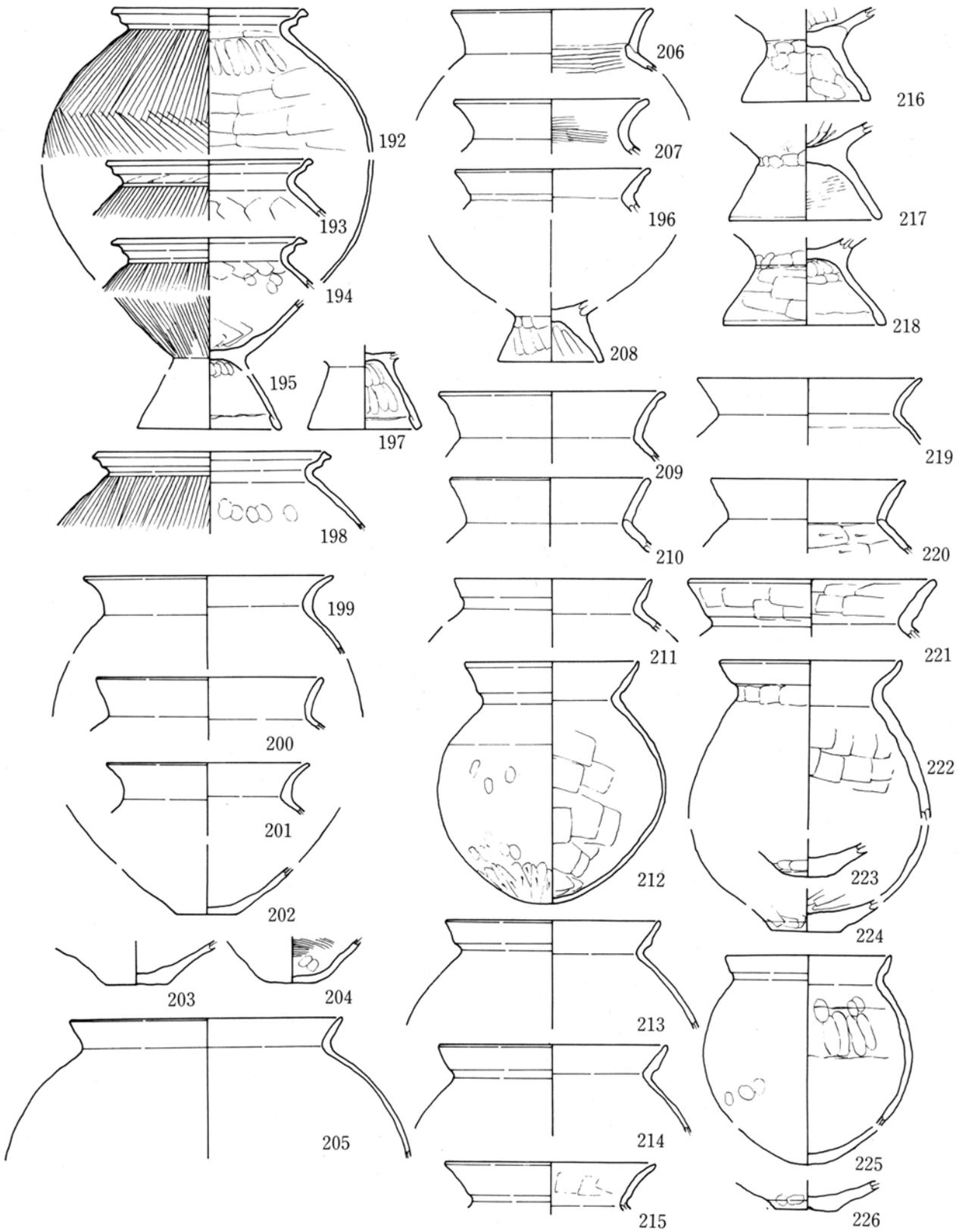
178

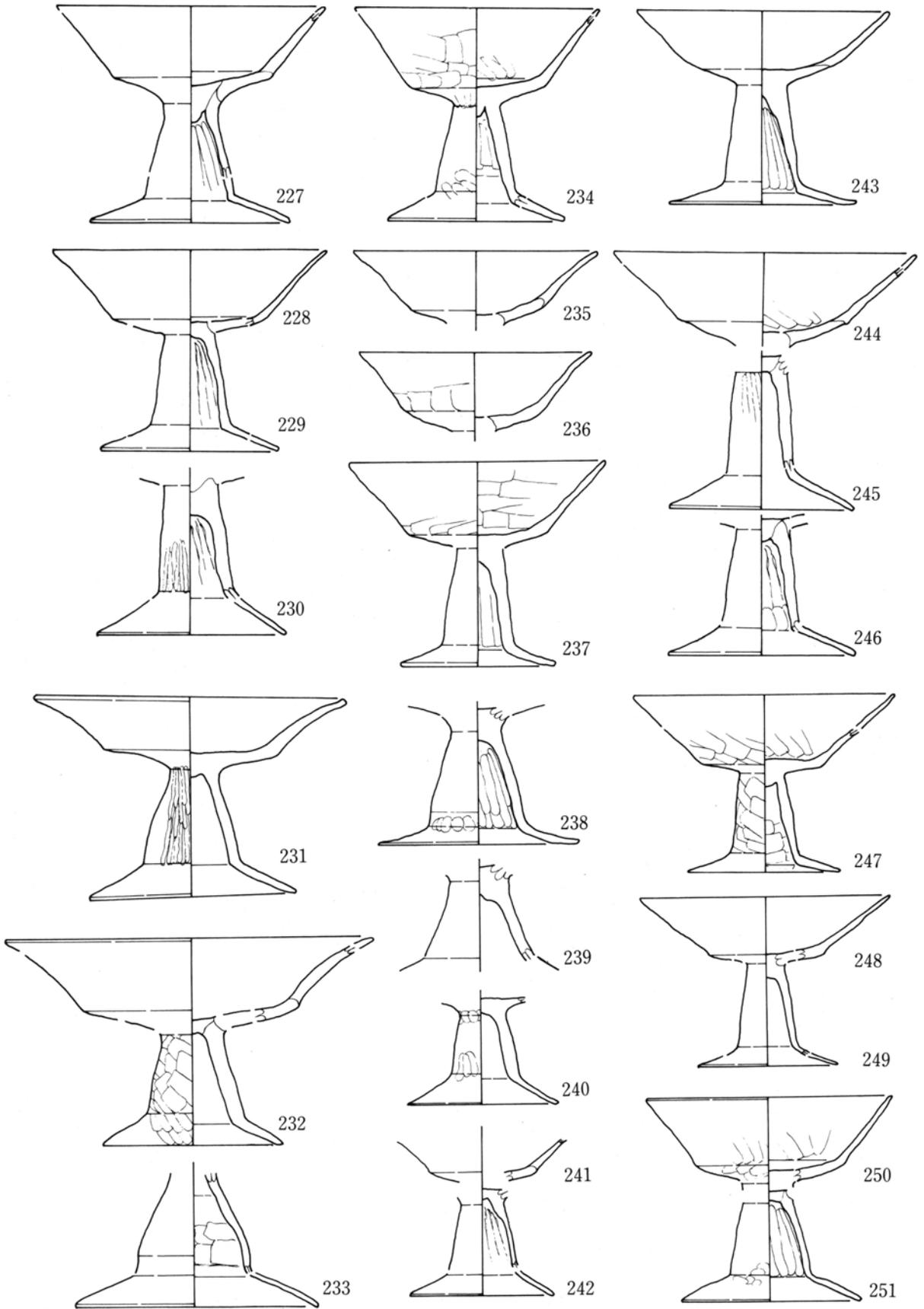


179

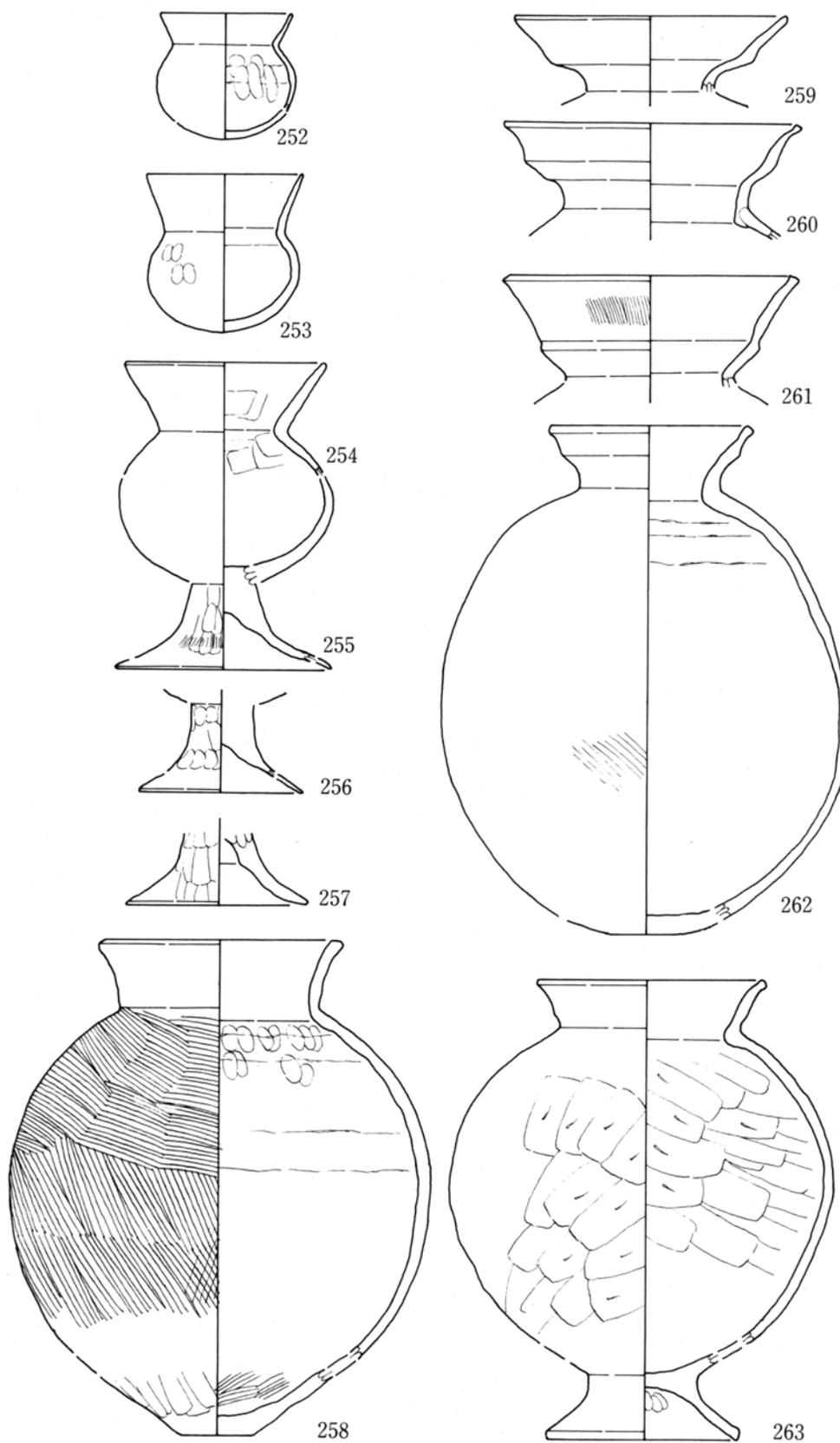


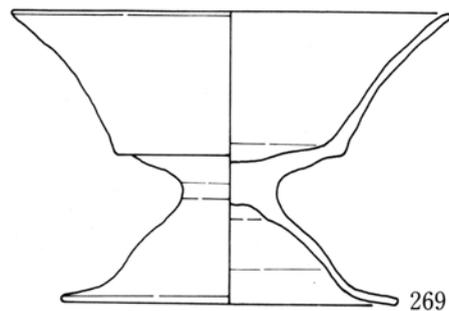
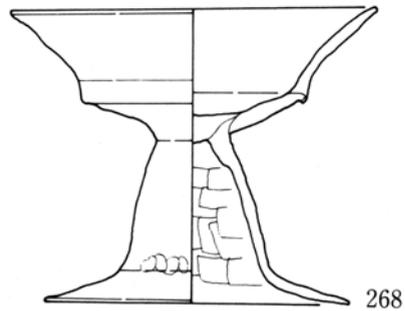
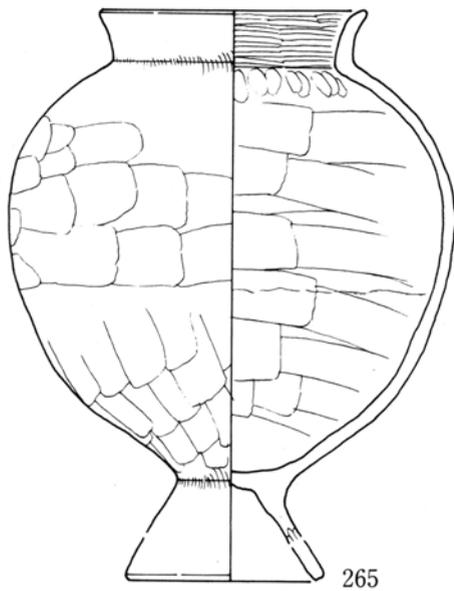
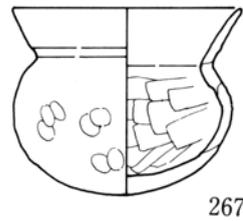
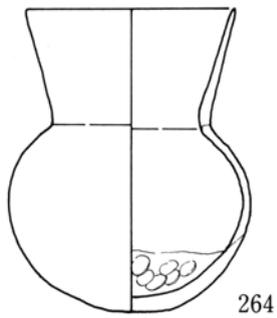
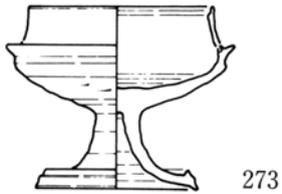
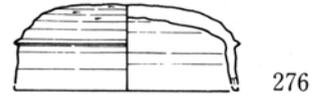
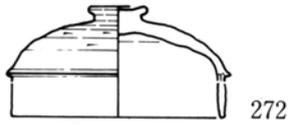
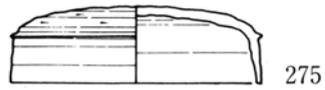
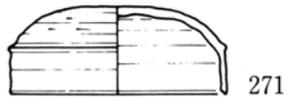
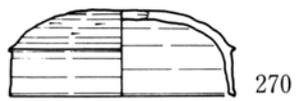
0 1:2 5 10 15cm

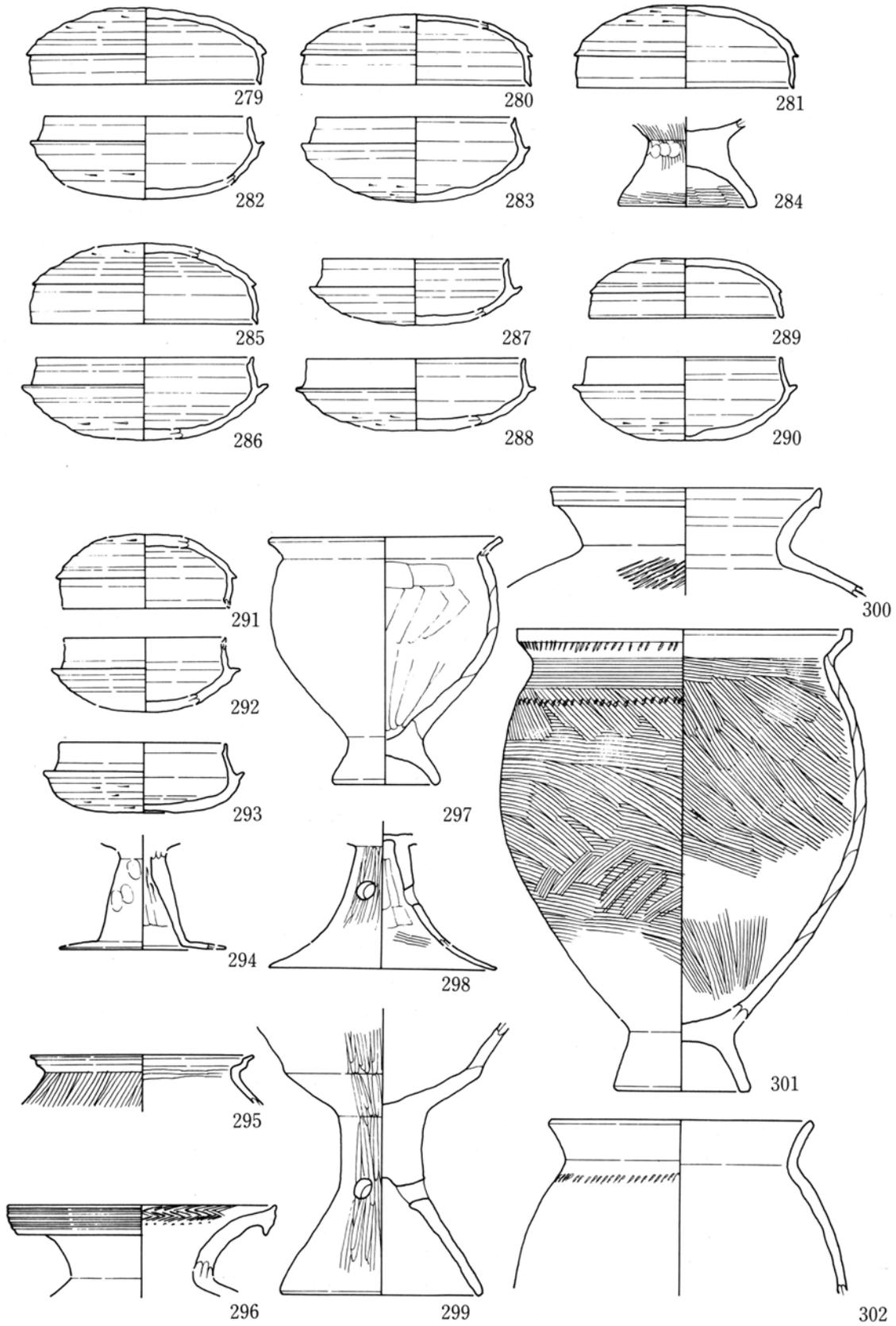




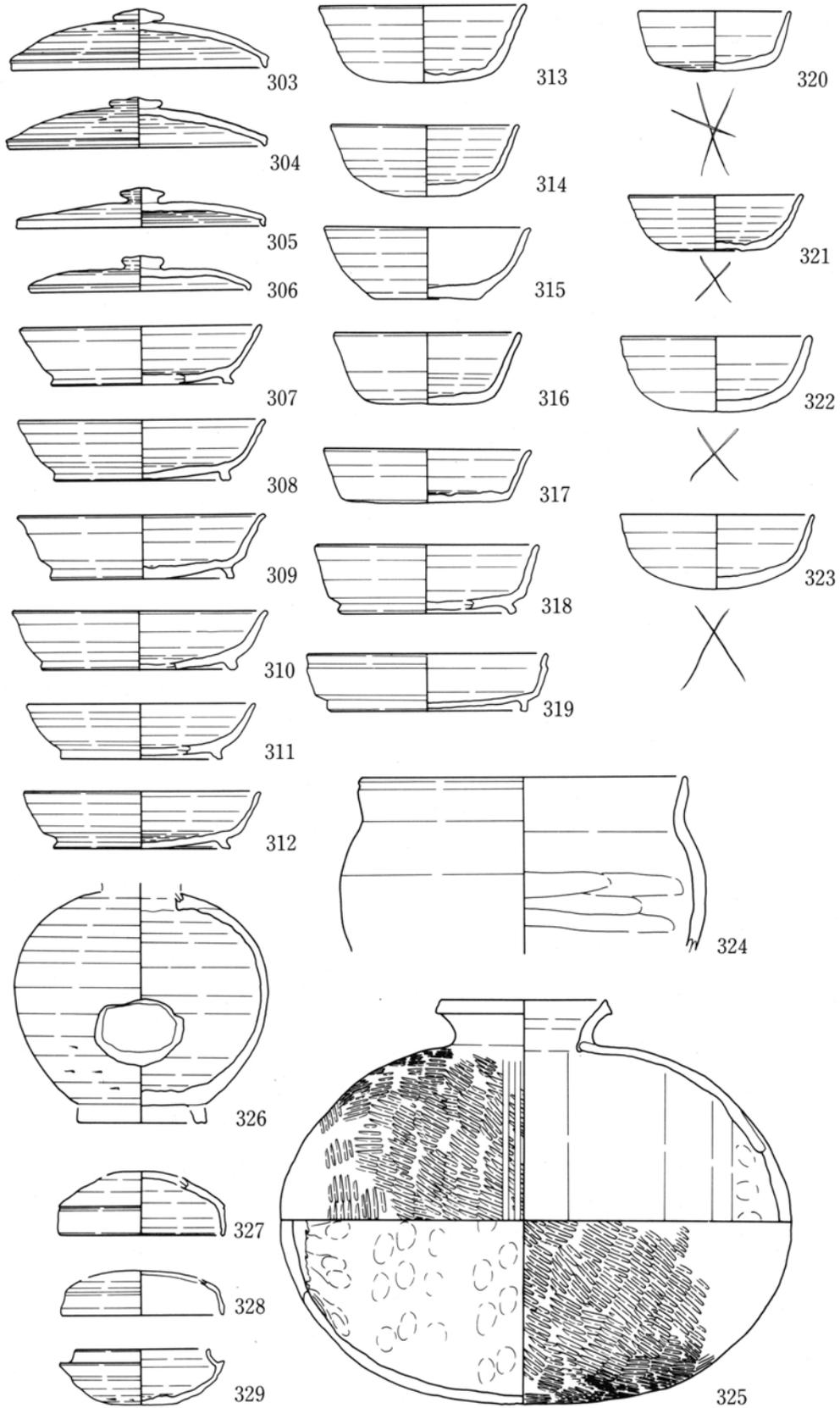
0 1:4 10 20 30cm



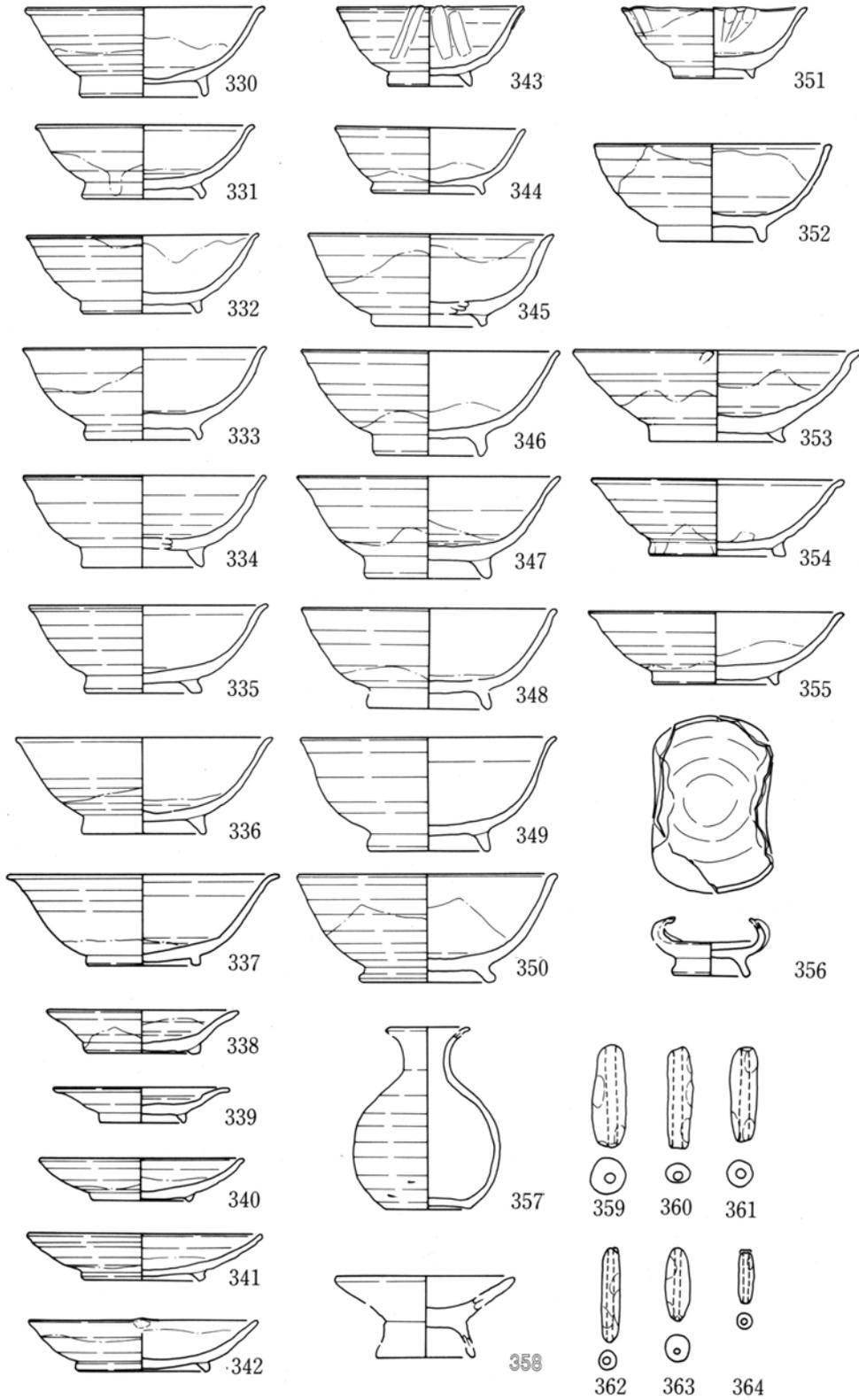


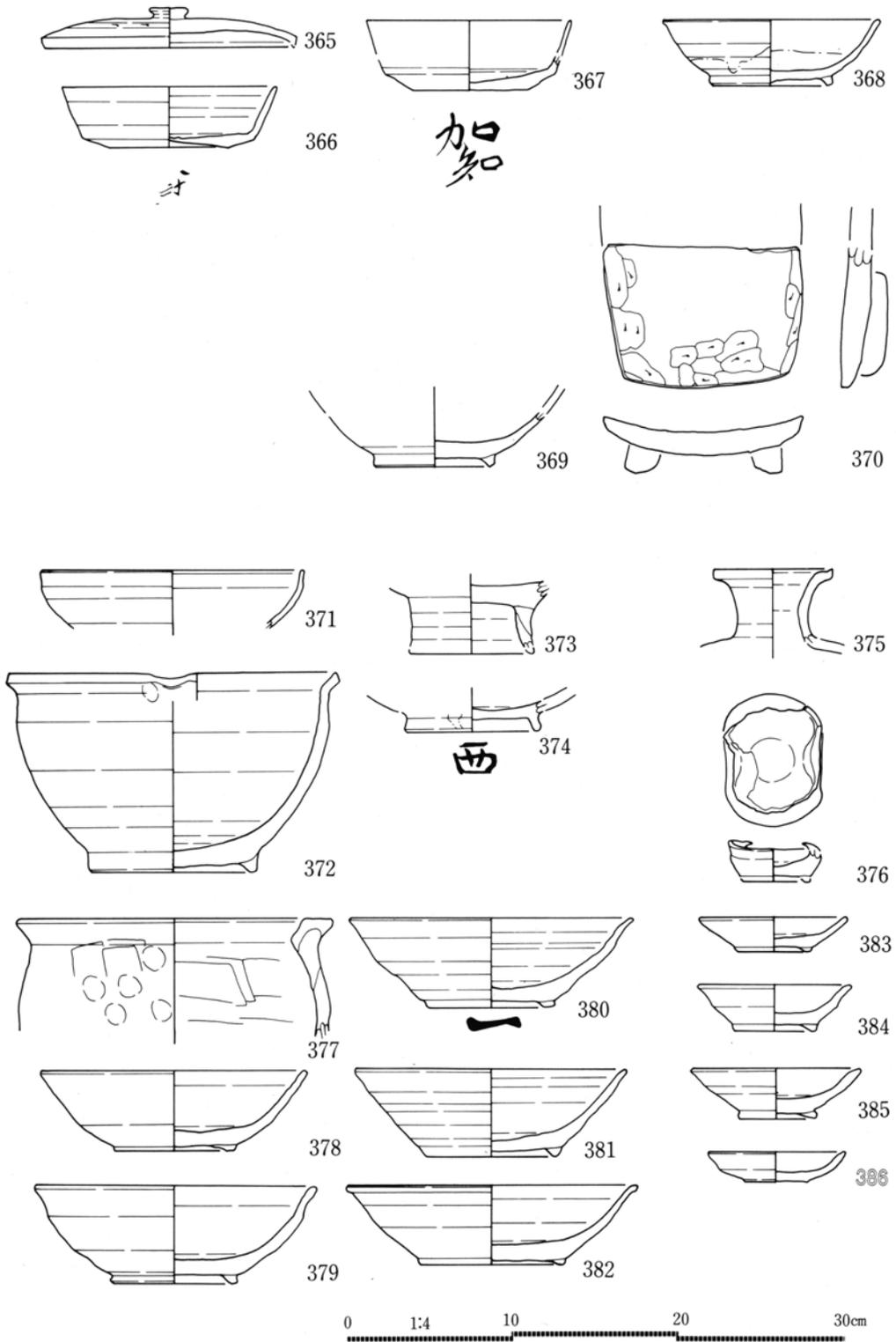


62ASD105 (279~284) 62ASD109 (285•286) 63BNR01 (291~302)

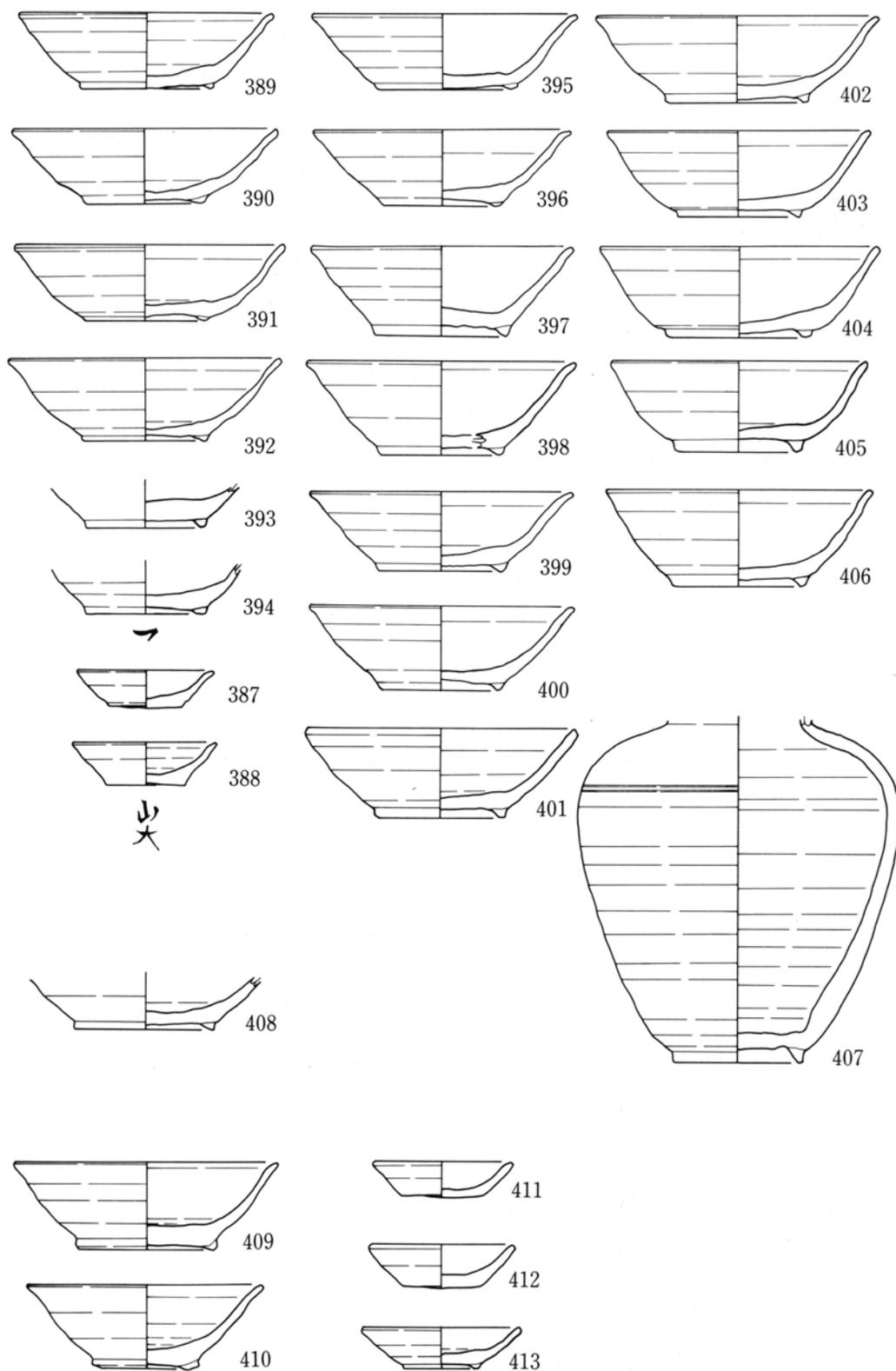


0 1:4 10 20 30cm

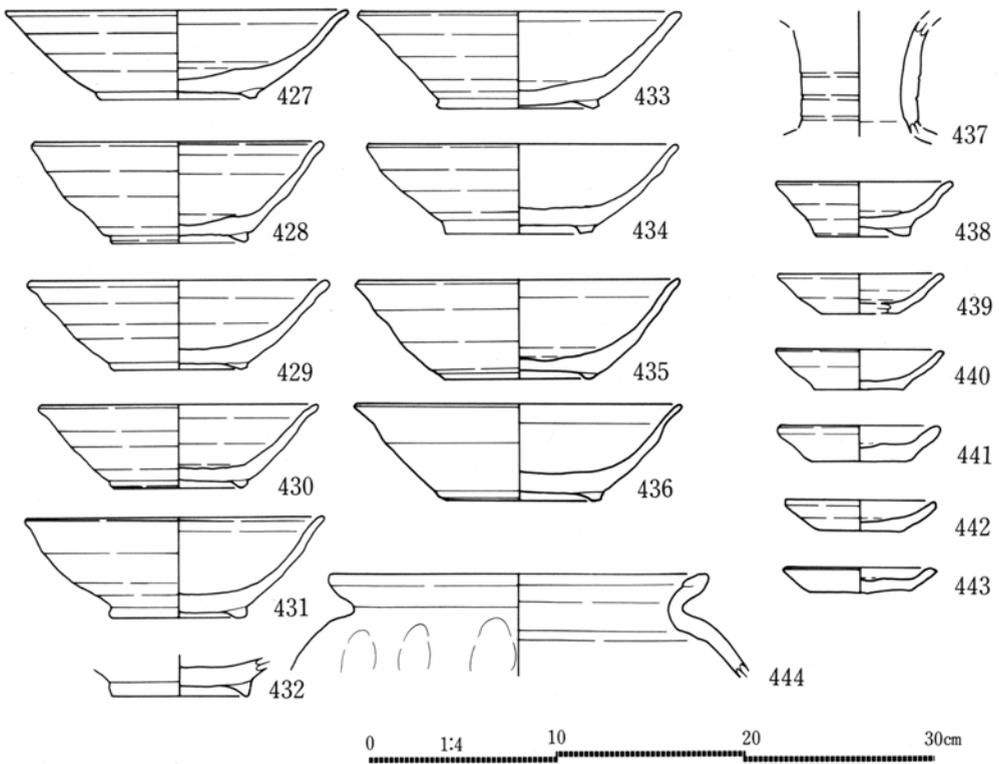
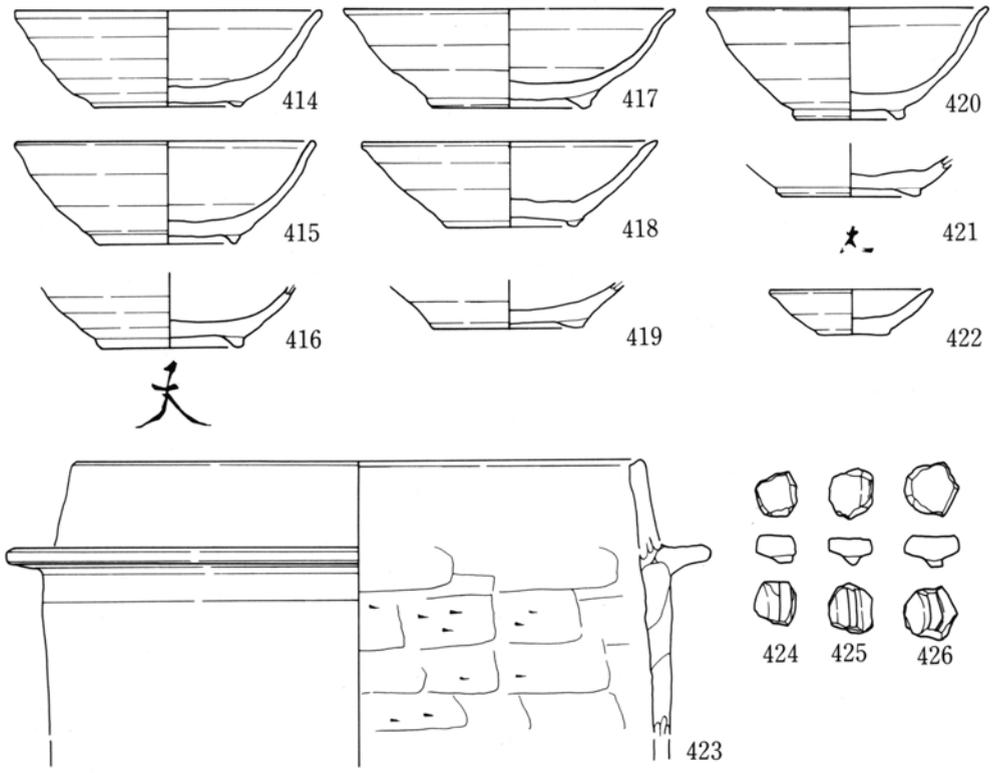


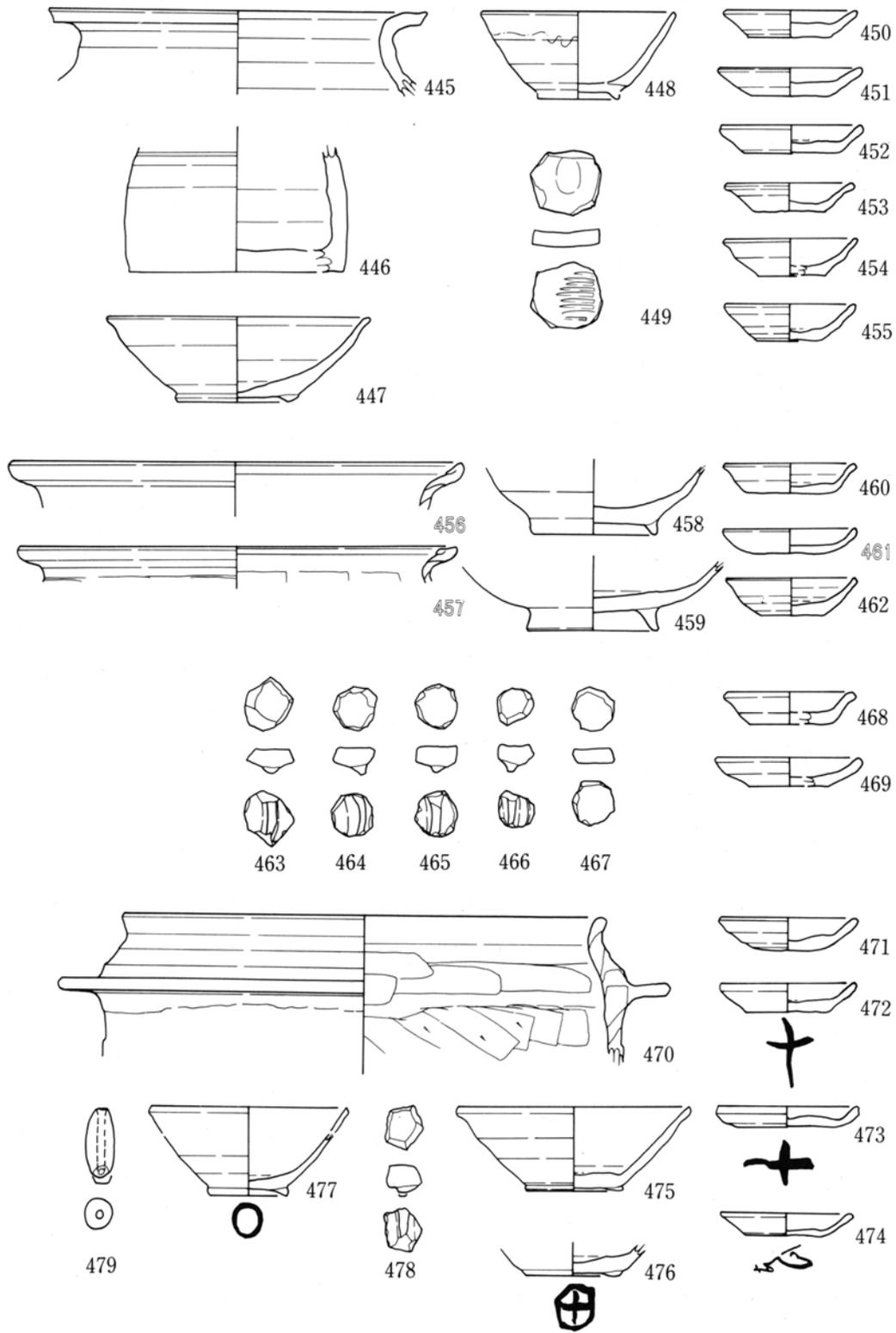


89Ia SD01 (371~386)

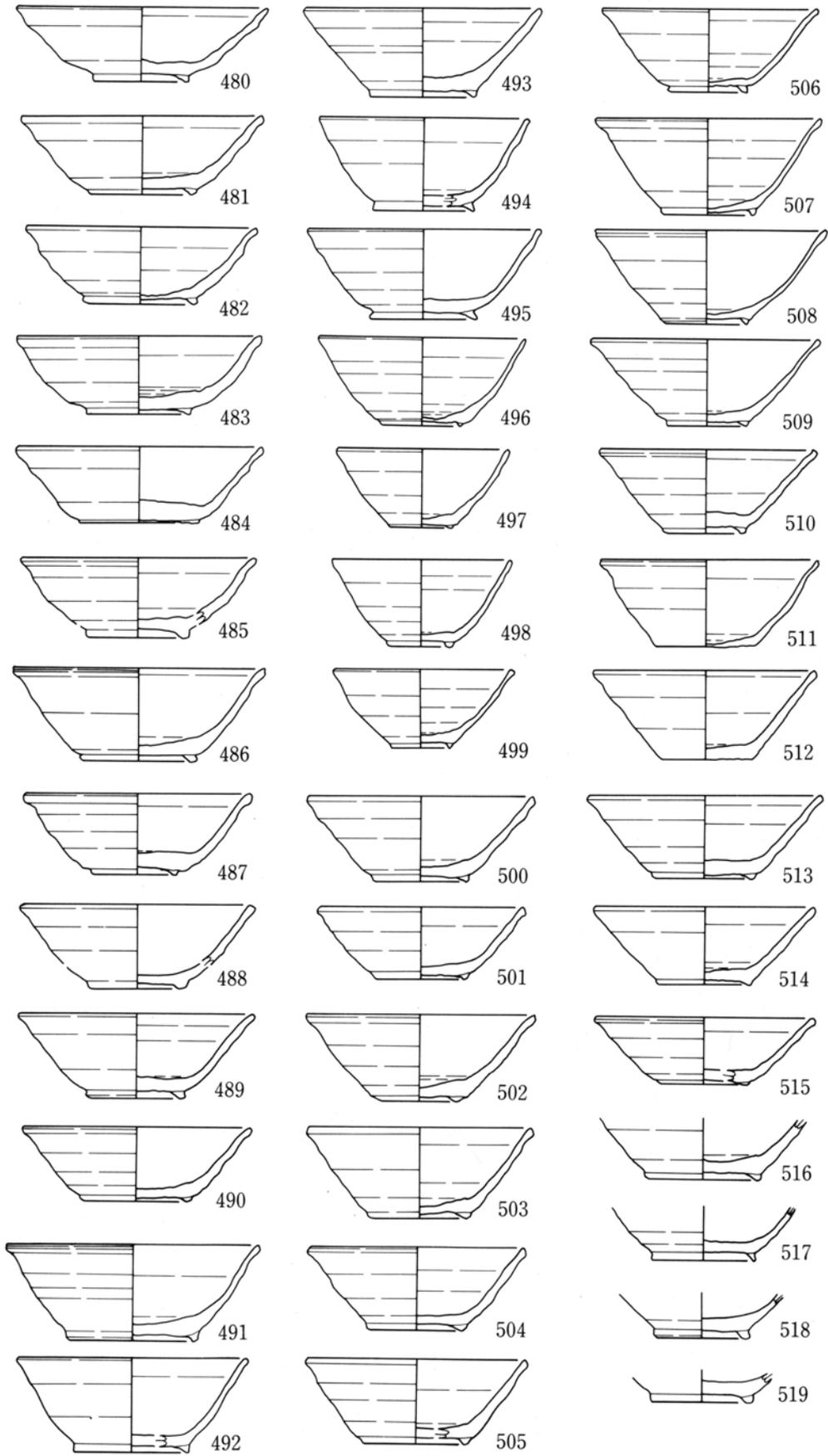


63B SX101(389~407) 62A SD108(408) 62E SE01(409~413)

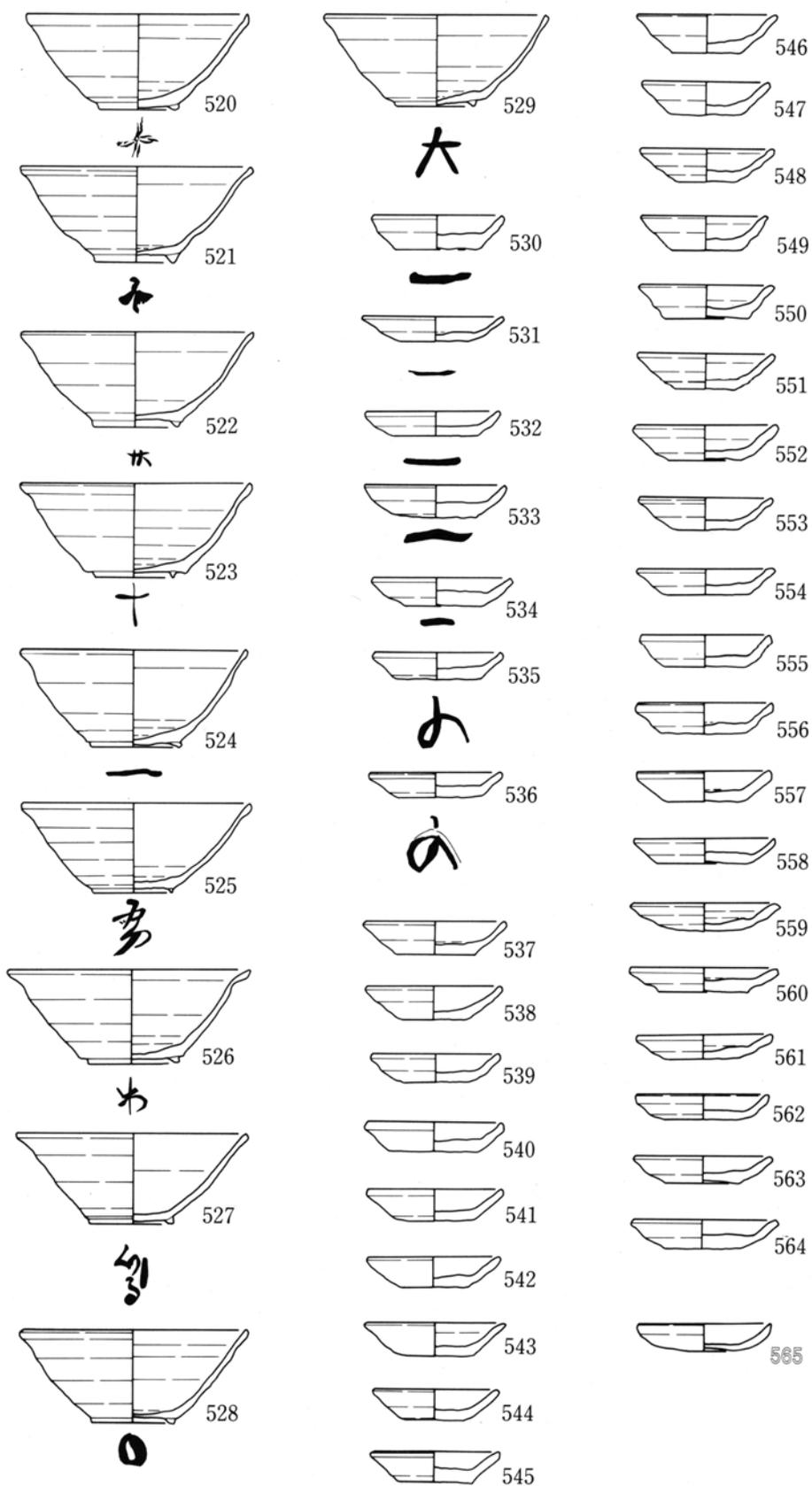


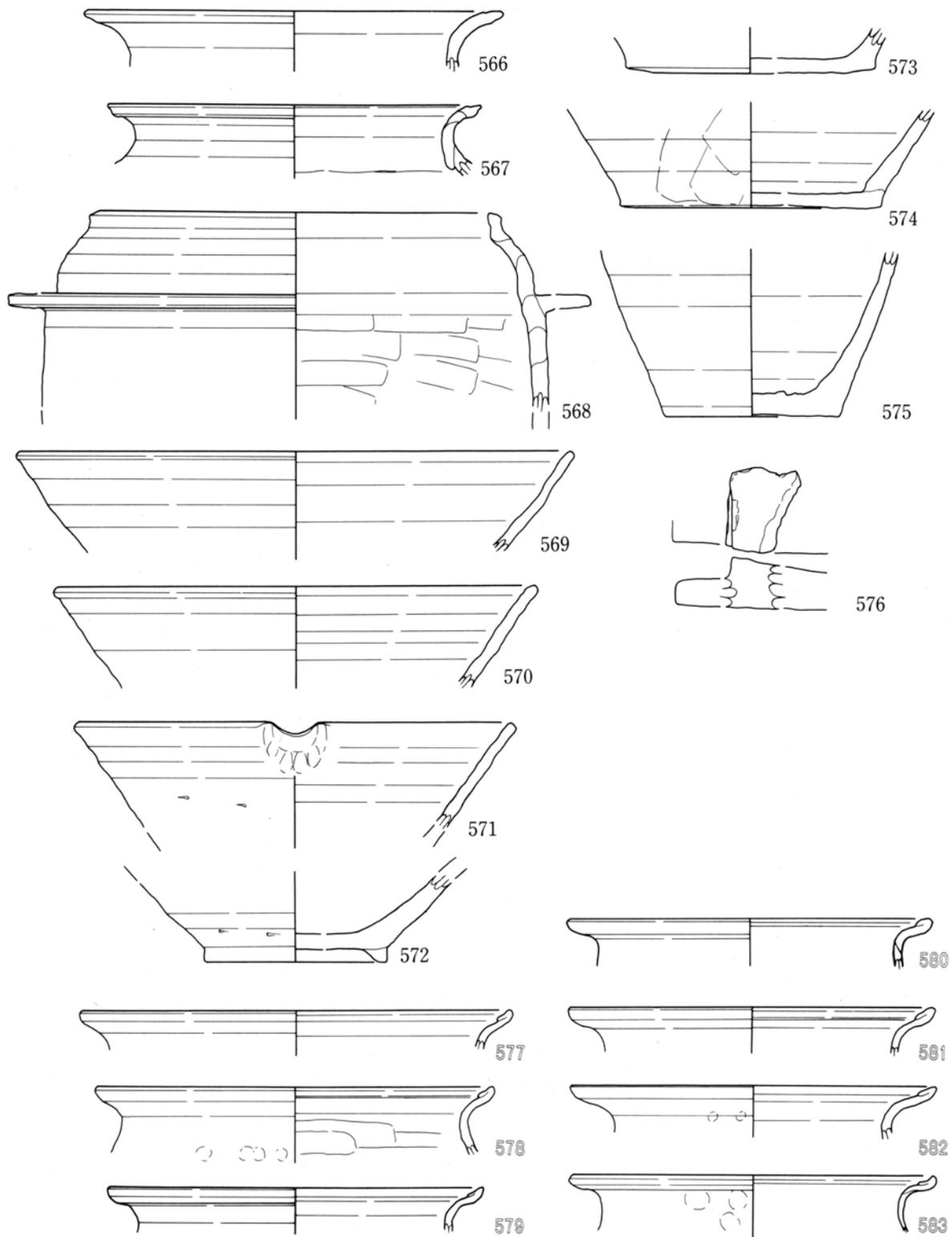


89Eb SD151-154 (445~447) 89Eb SD167-122 (456~462)
 89Eb SD170 (463~469) 89Eb SD177 (470~479)

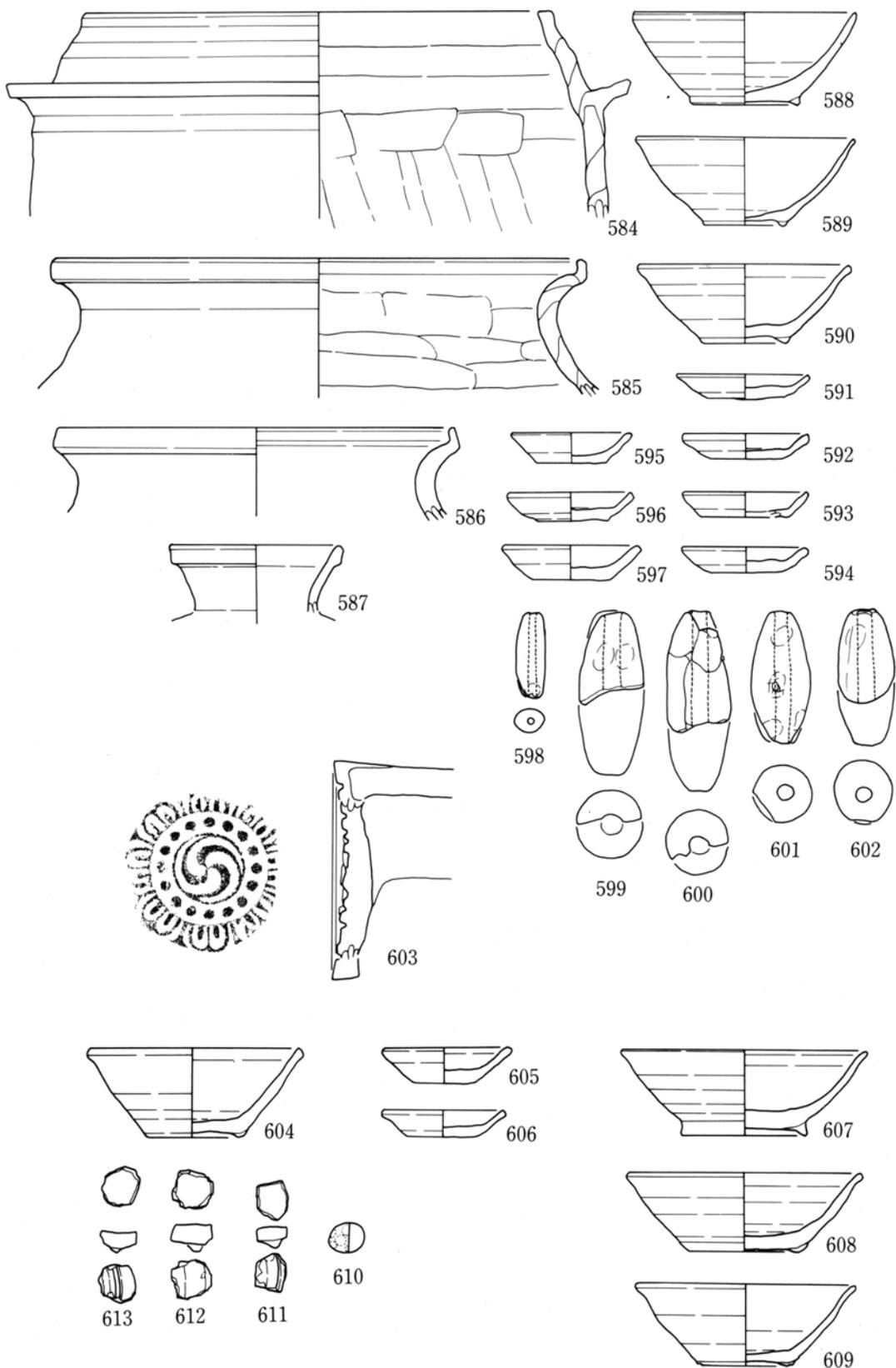


0 10 20 30cm

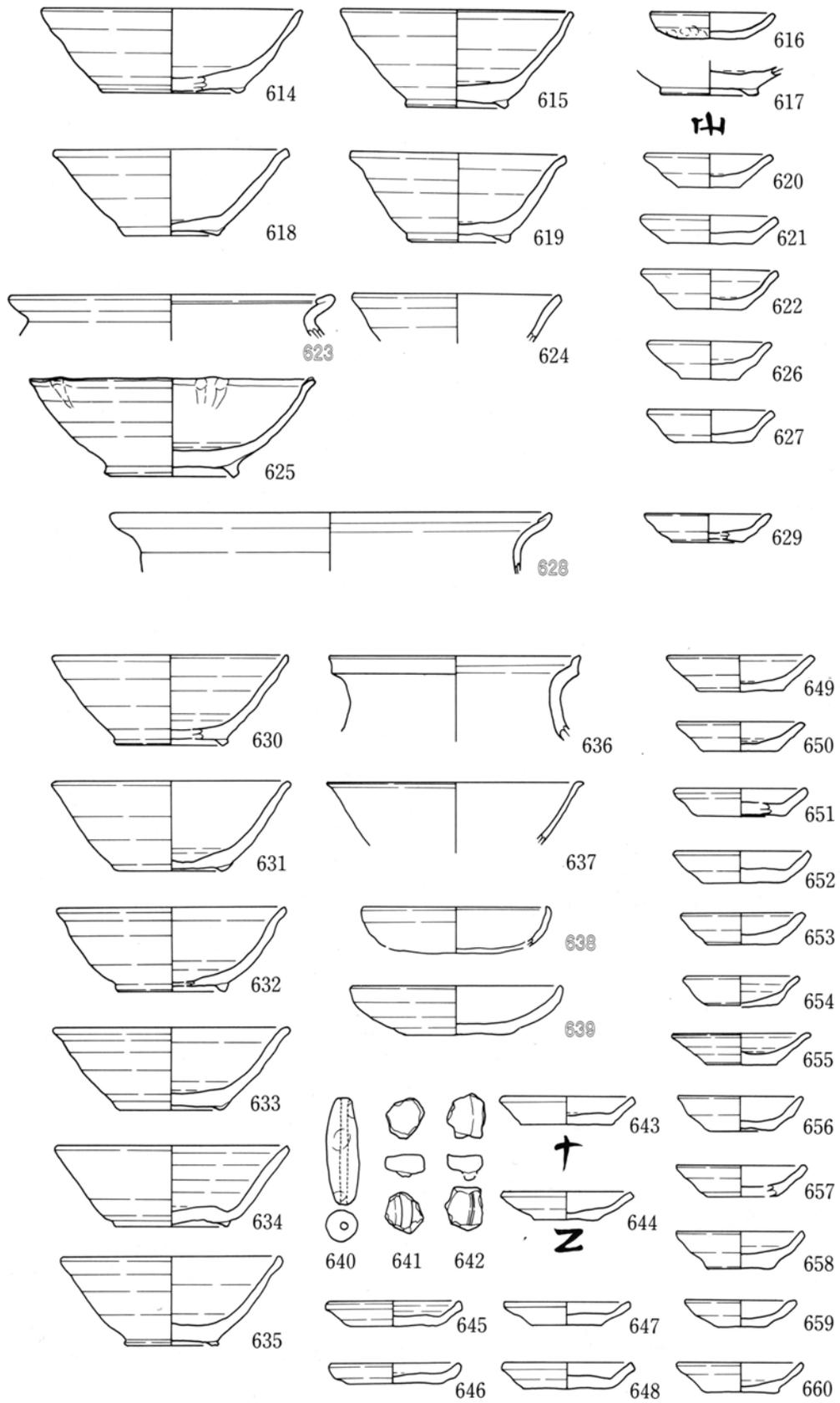




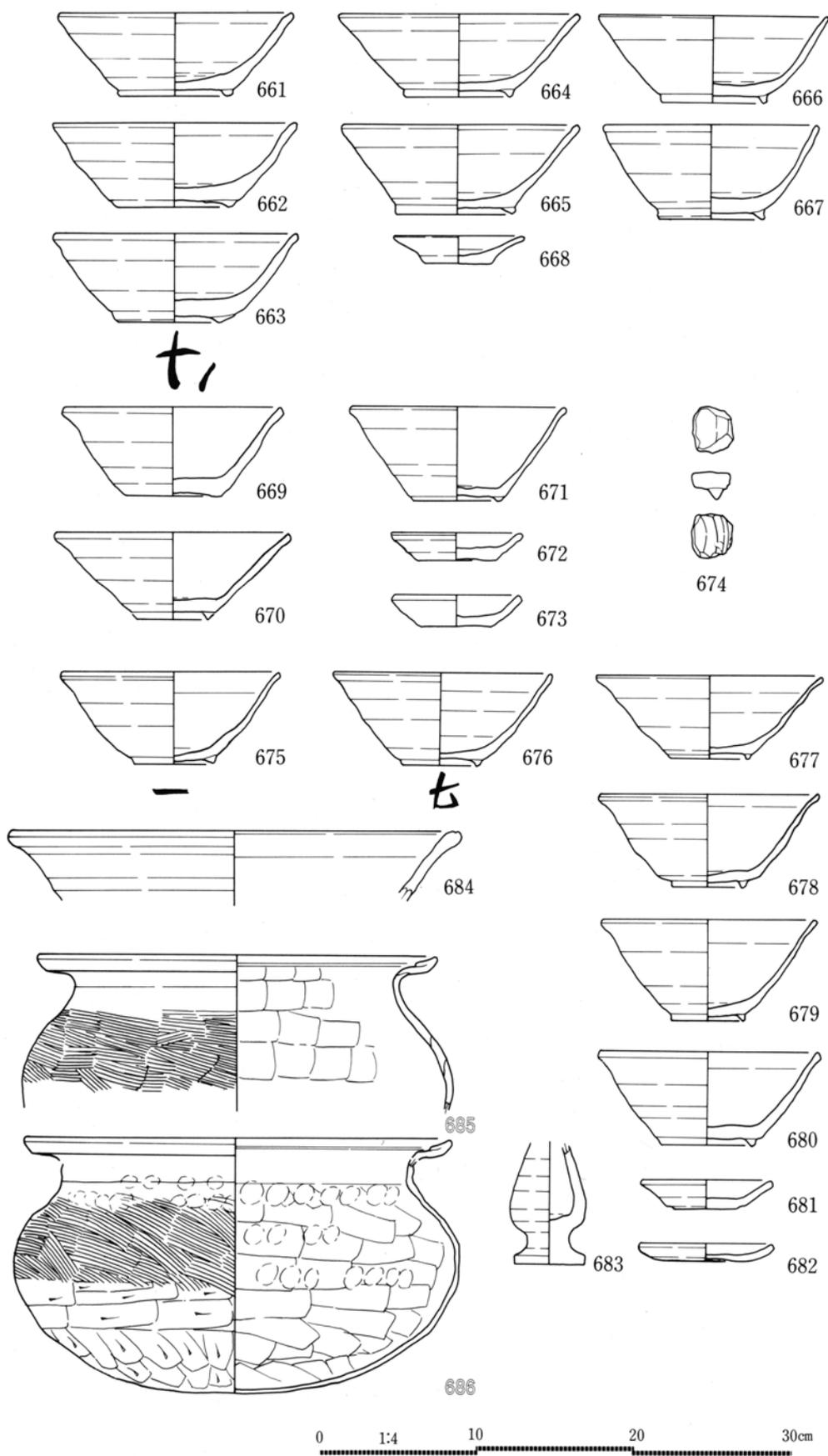
0 1:4 10 20 30cm



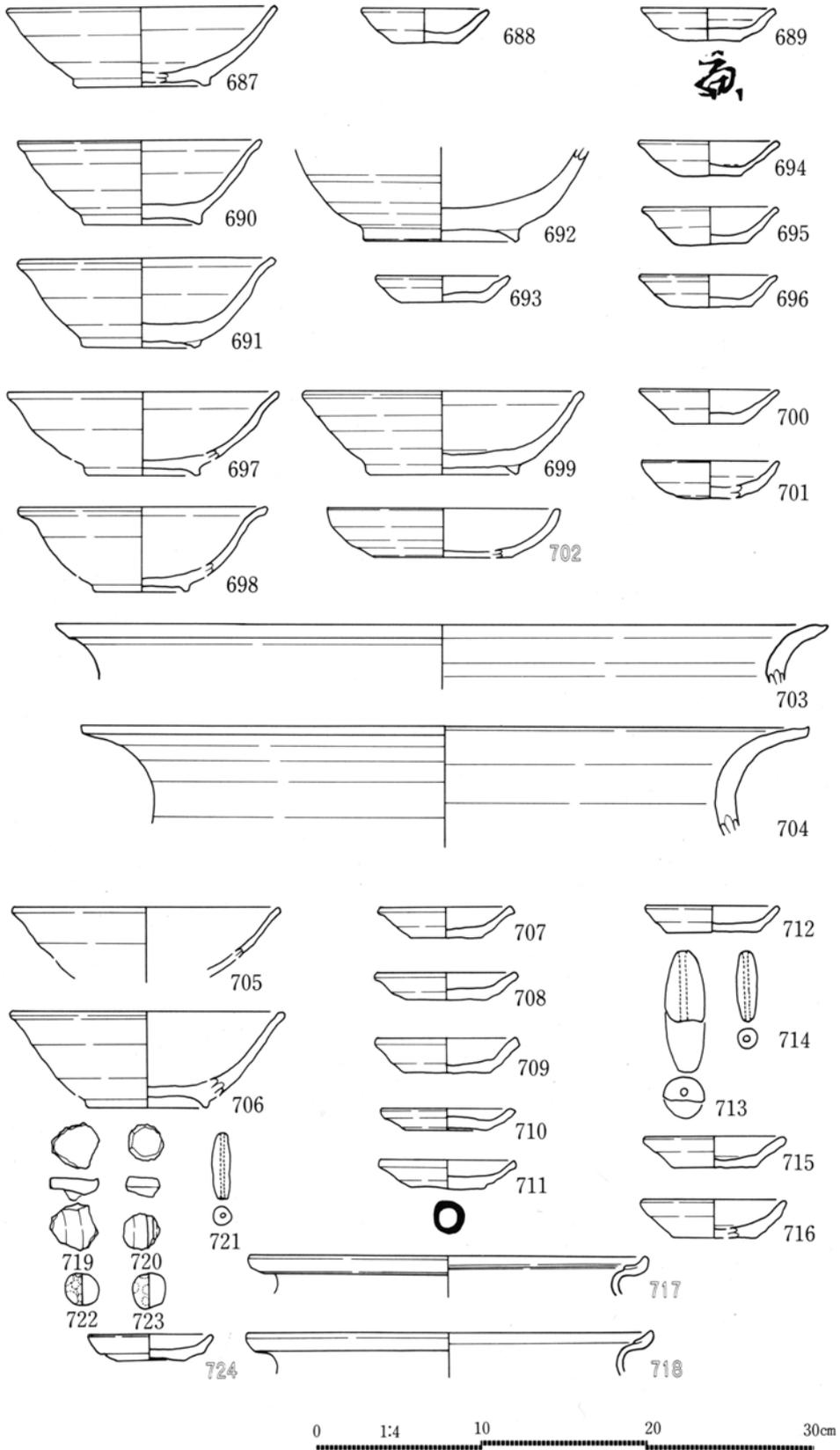
89Eb SD105(584~602) 89Fa-EbSD(603~613)



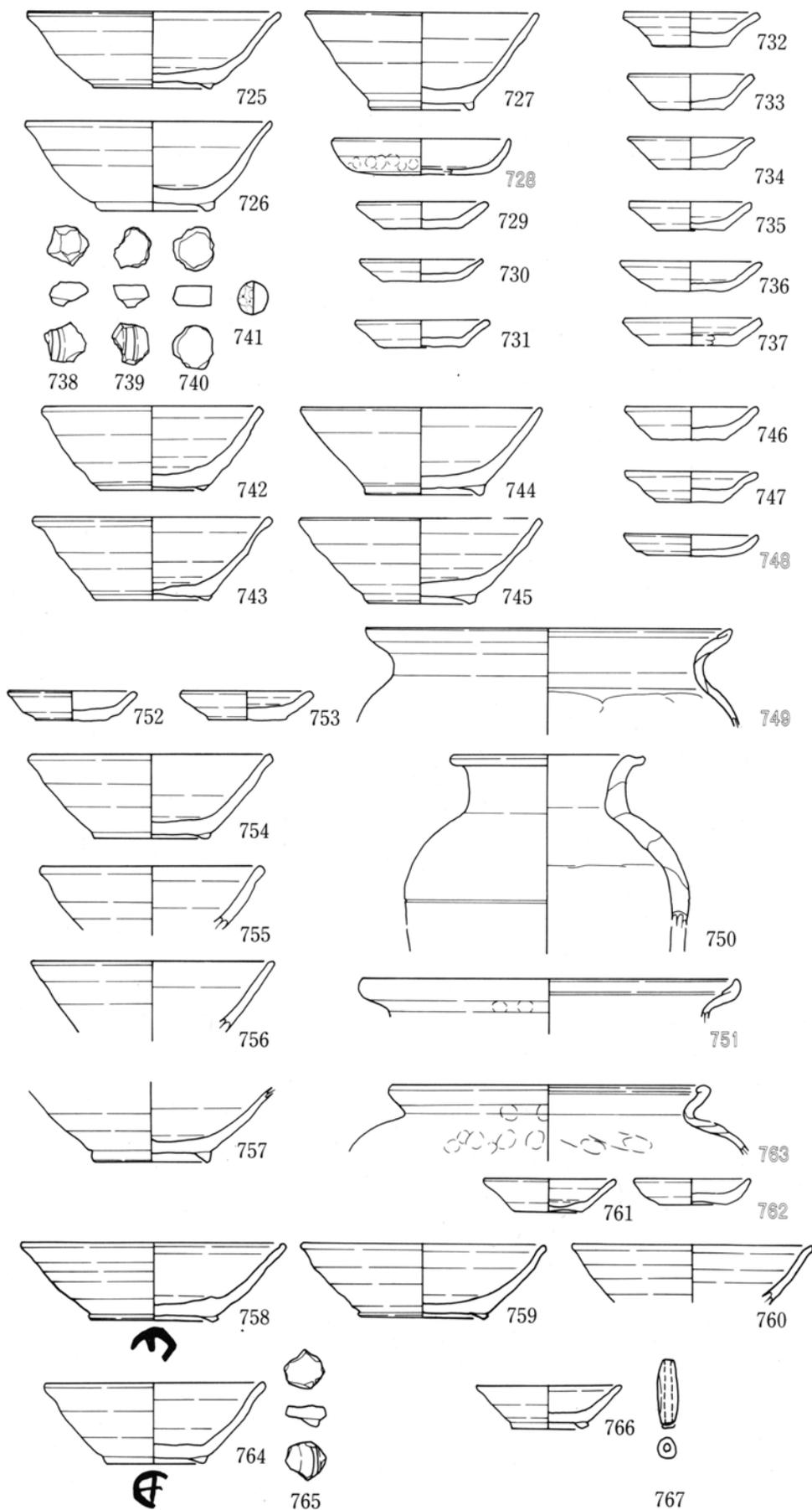
89Fa SD110(614~617) 89Fa SD109(618~622) 89Fa SD111(623~625)
 89Eb SD176(626·627) 89Fa SD104(628·629) 89Eb-FaSD120(630~660)



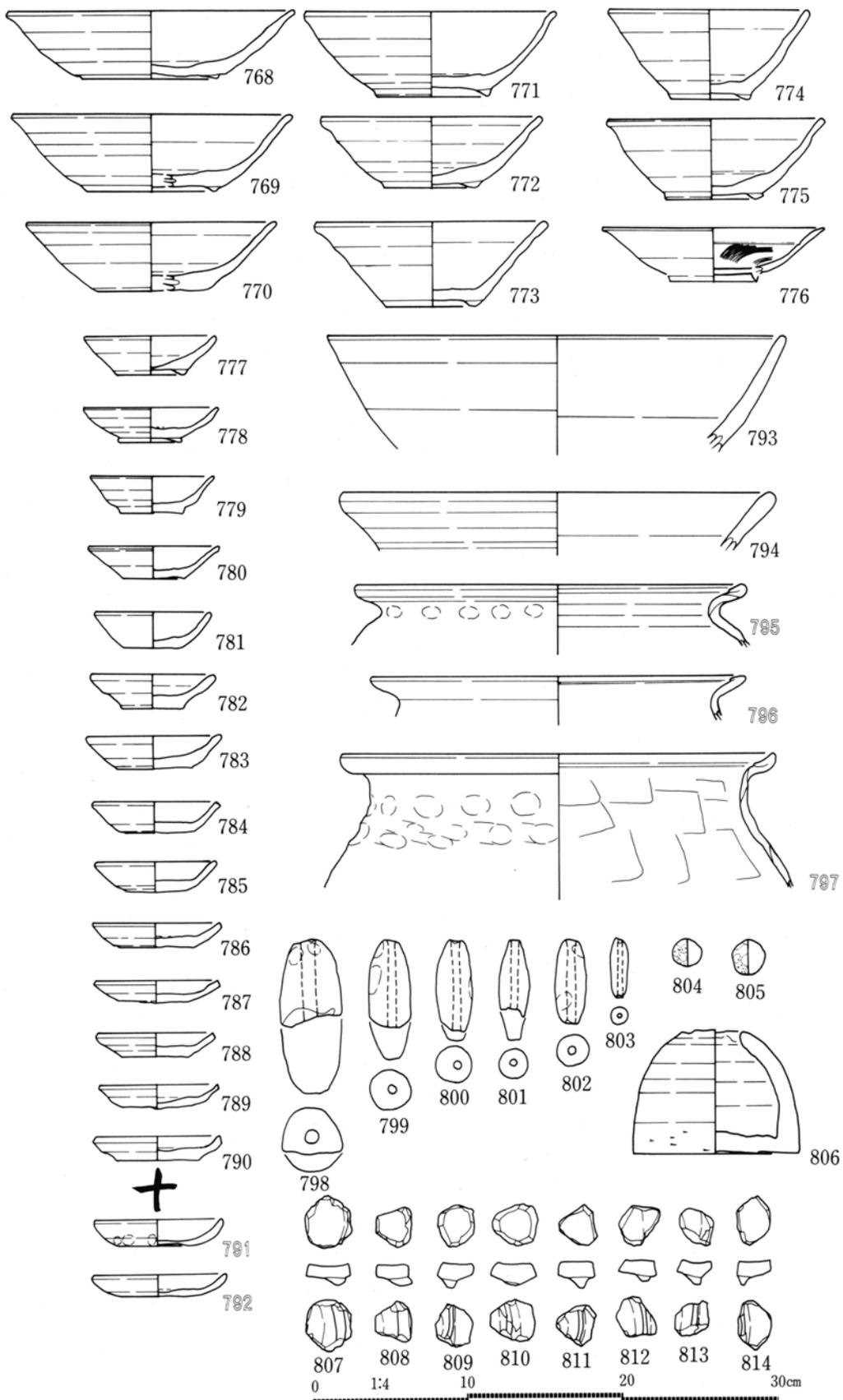
89Fa SK119(661~663) 89Eb SK174(669~674) 89Eb SK180(675~686)

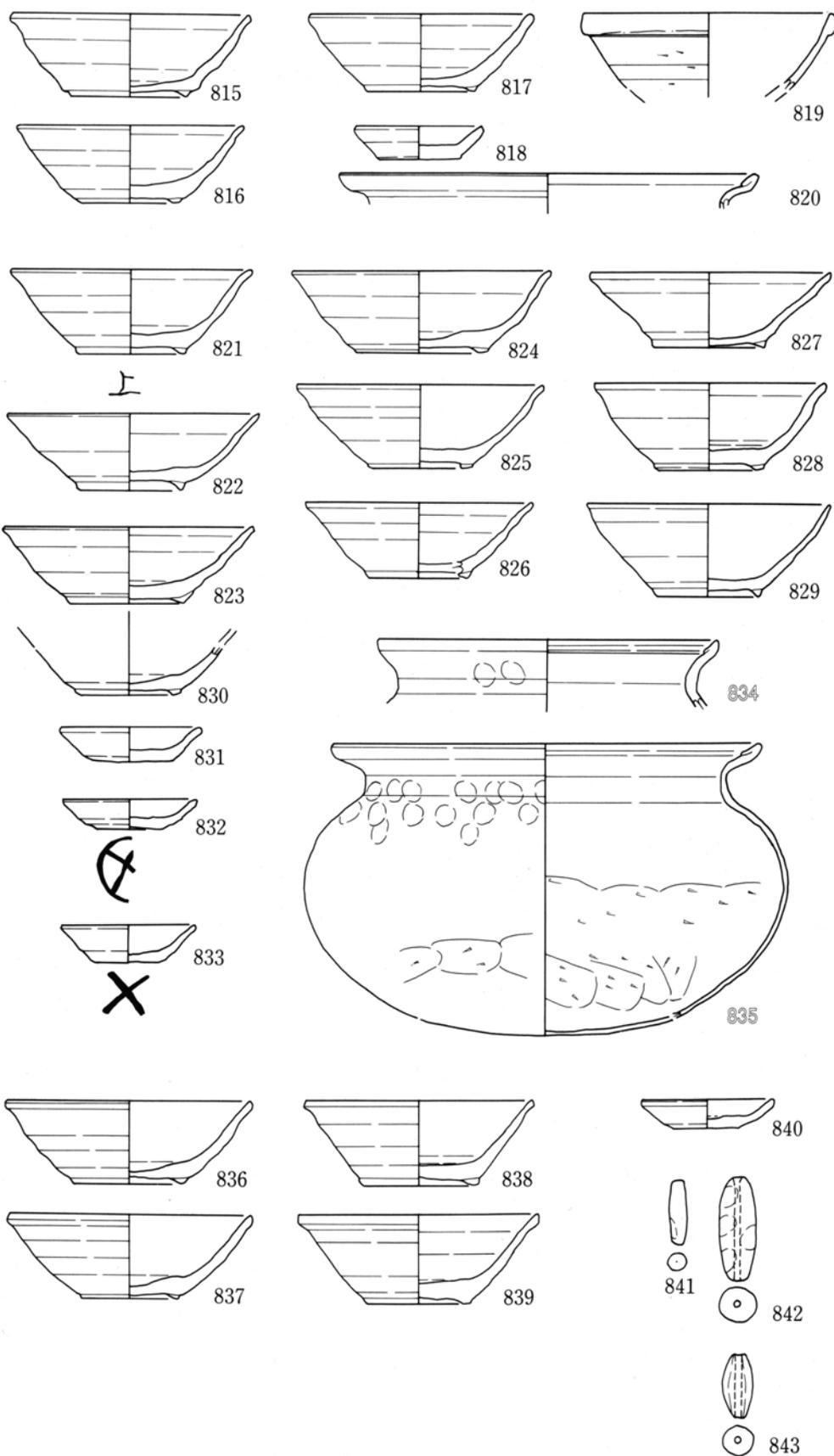


89Eb SK152 (687~689) 89Eb SK168 (690~696)
 89EbSK151 (697~704) 89Eb SK (705~724)

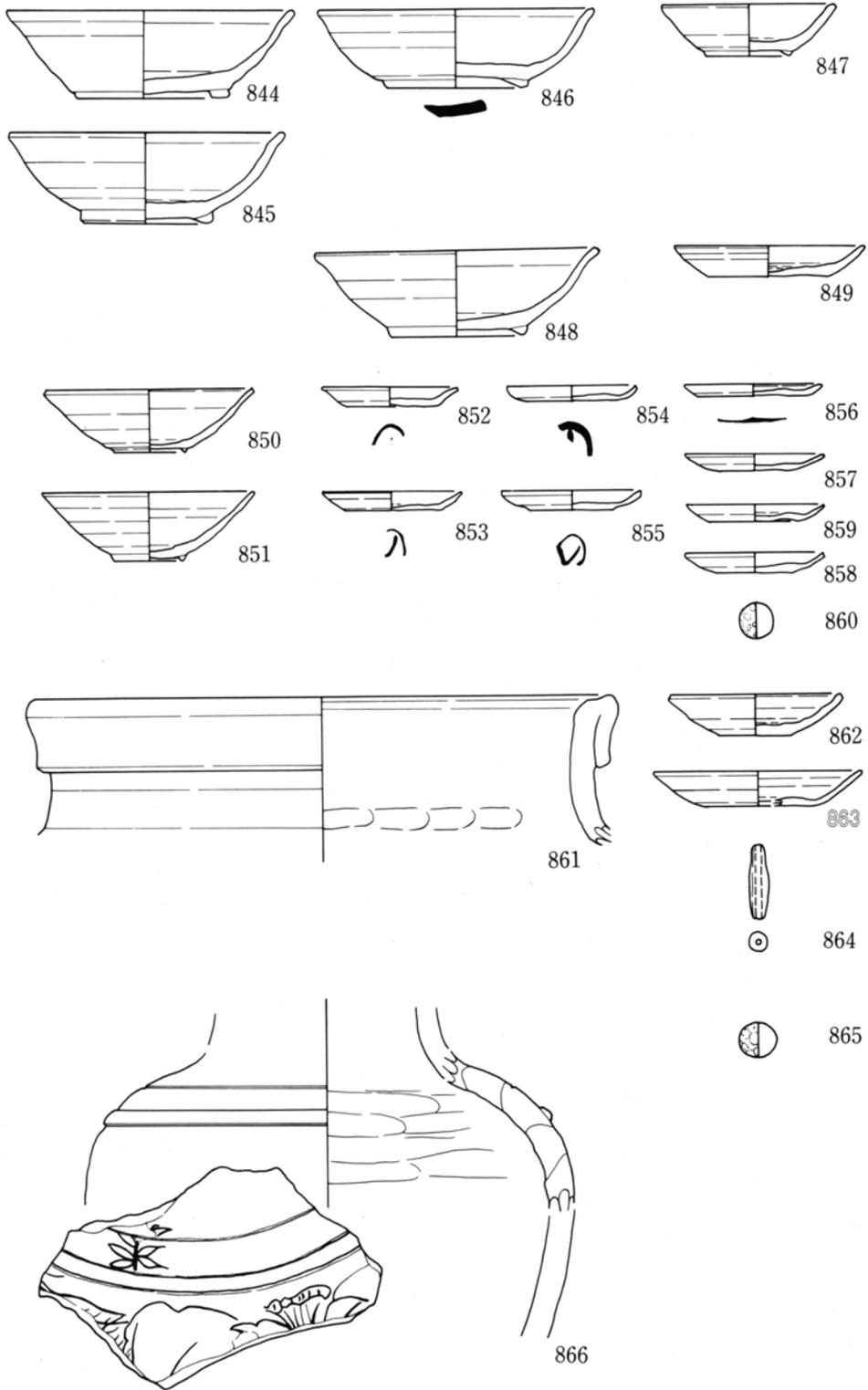


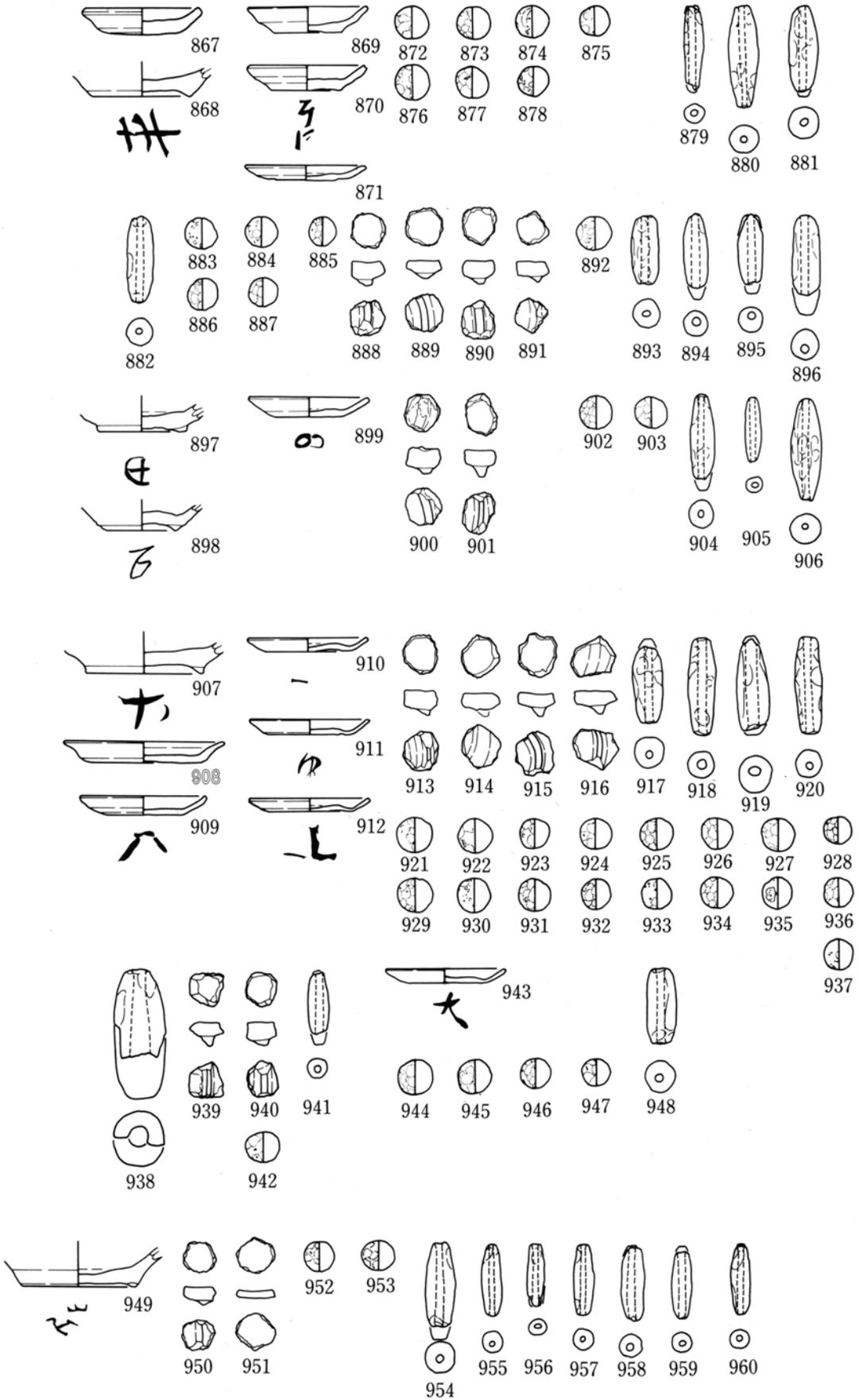
89Eb SX151(725~737) 89Eb SX155(742~756) 89Eb SX158(757~760)
 89EbSX157(764•765) 89Eb SX153(766•767)



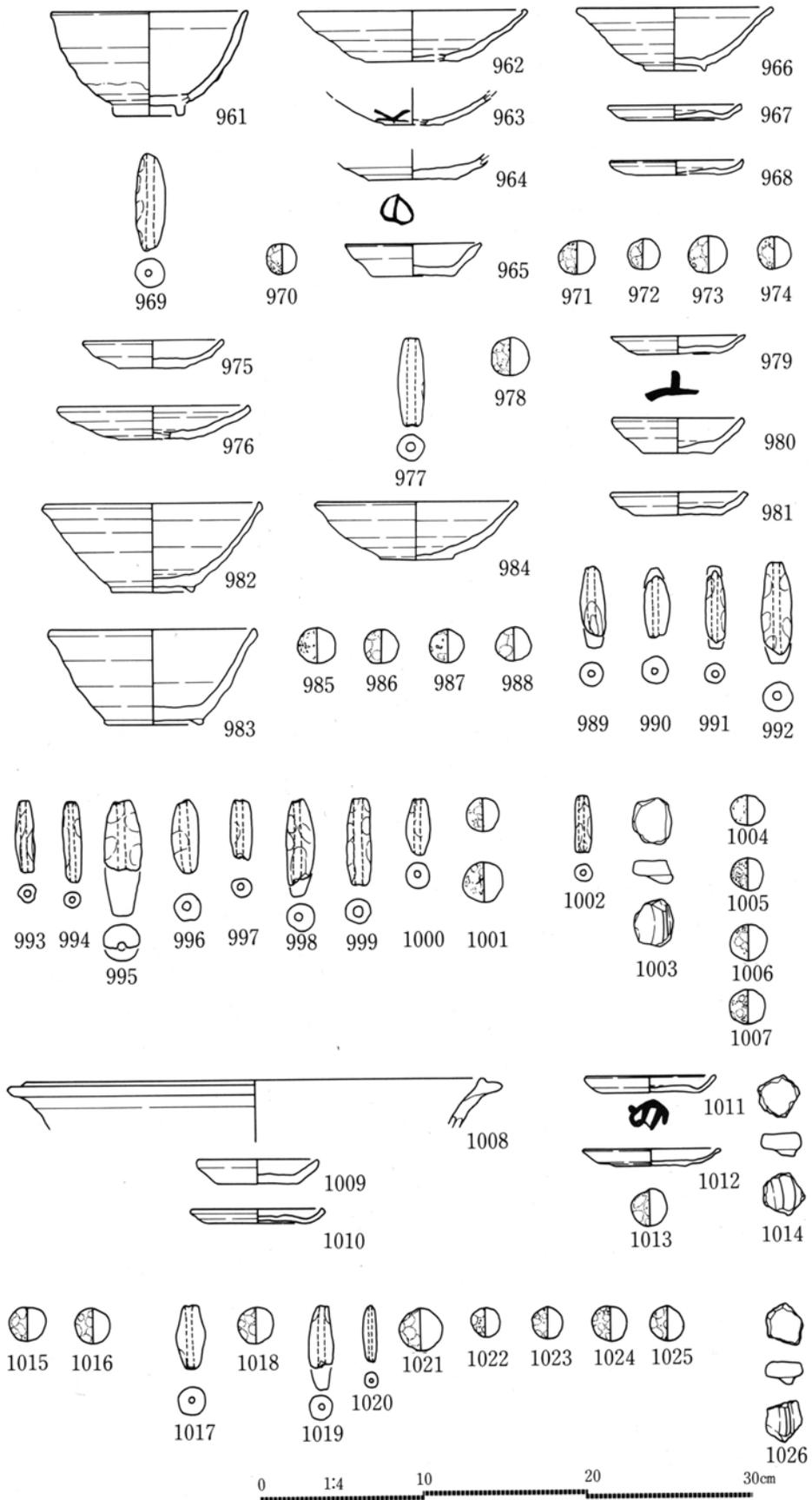


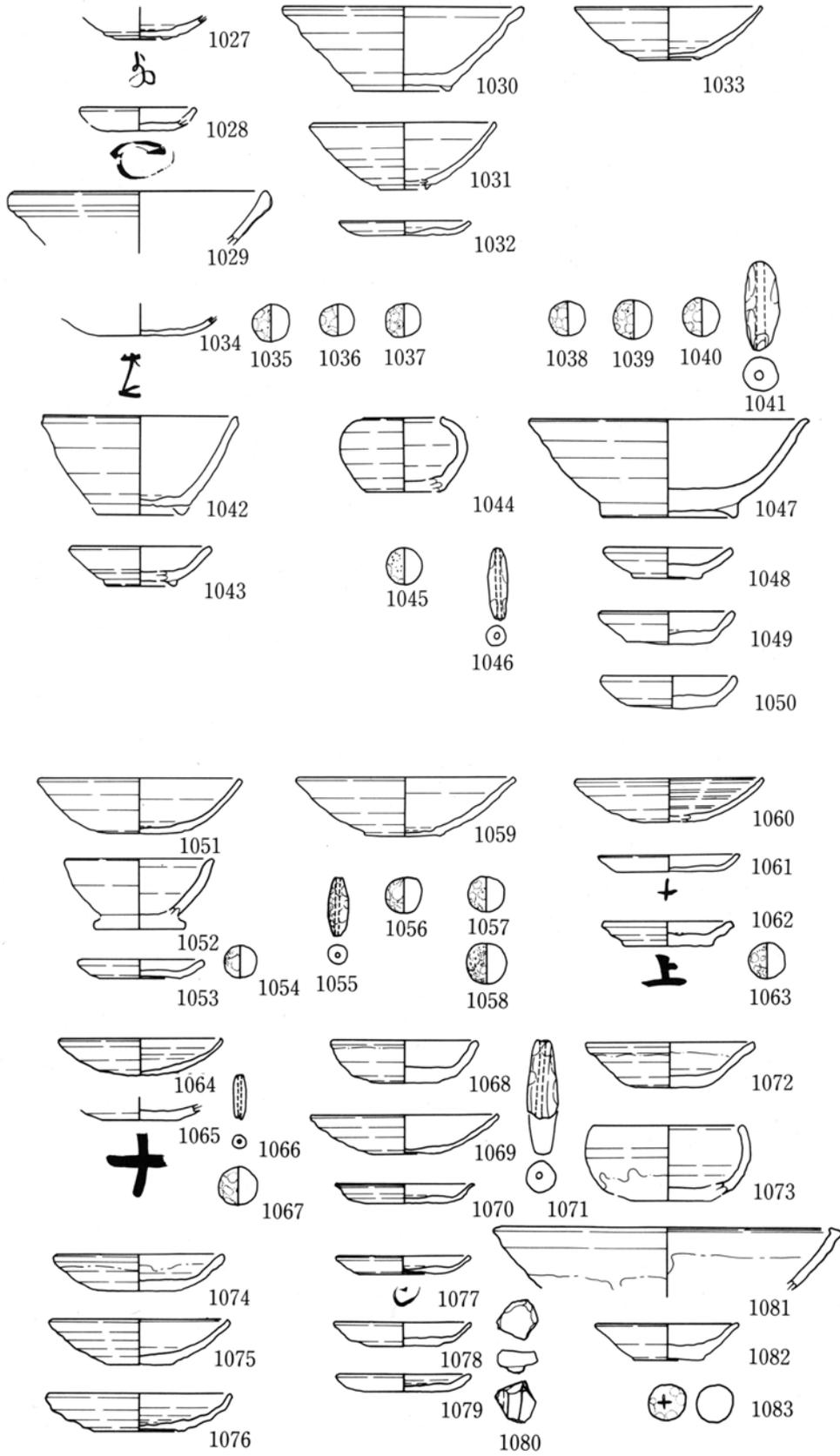
91Ab SK01 (815~820) 91Ab SK02 (821~835)
 91Ab SD02 (836~842) 91Ab SD04 (843)



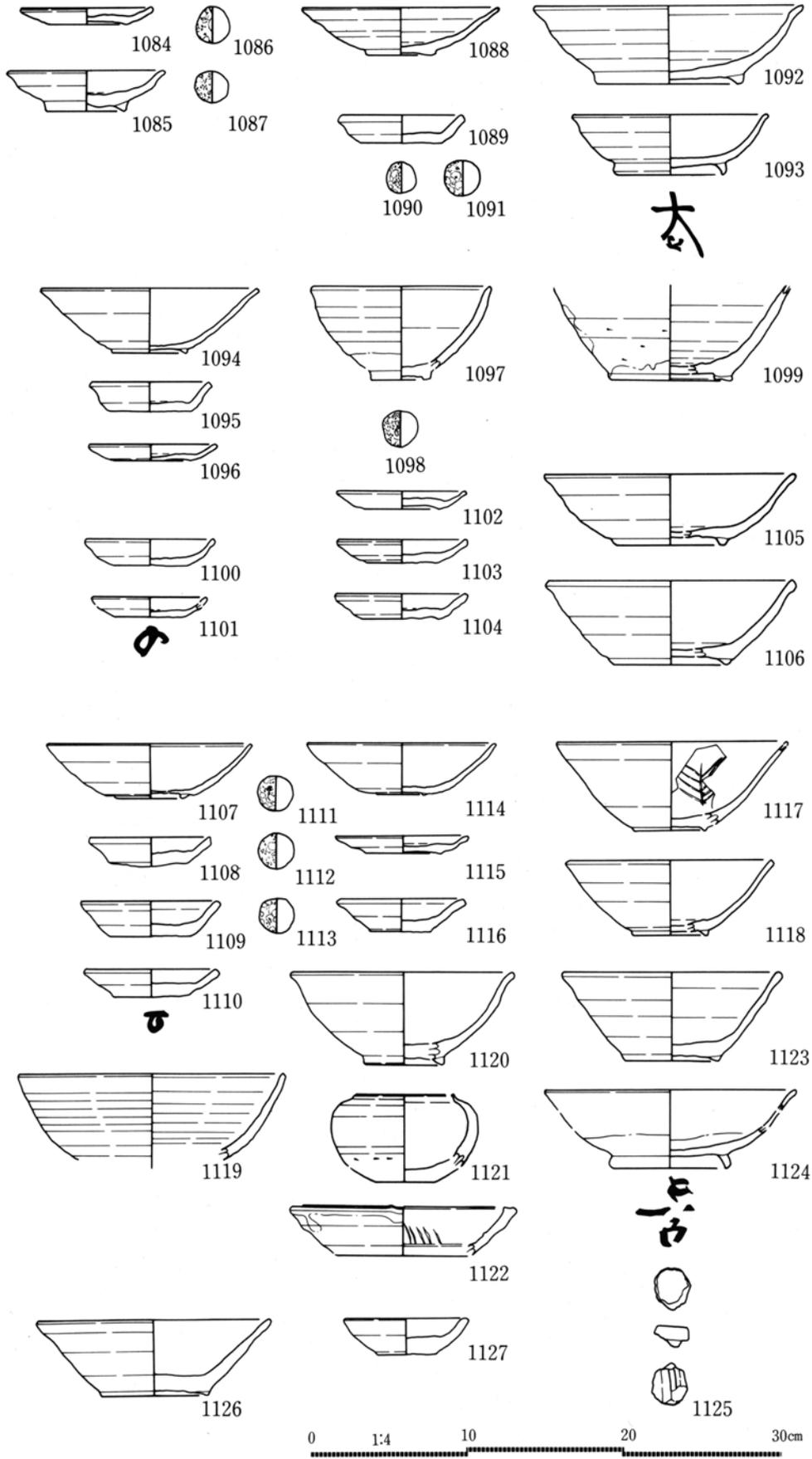


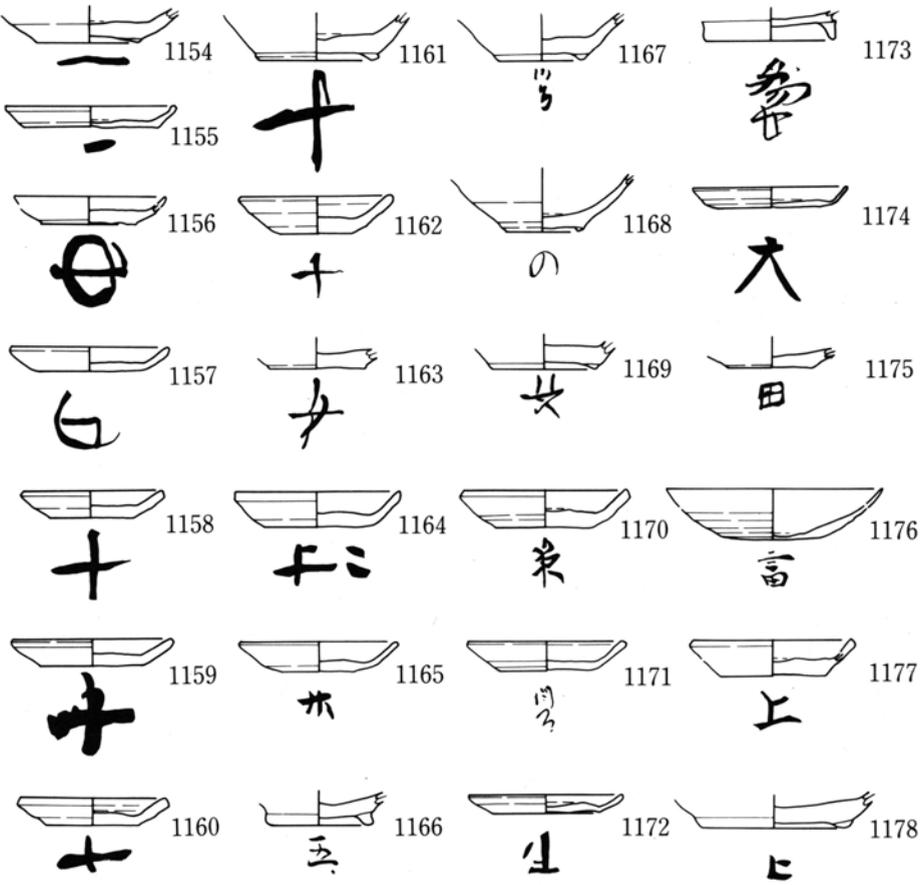
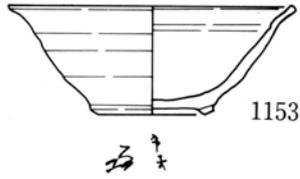
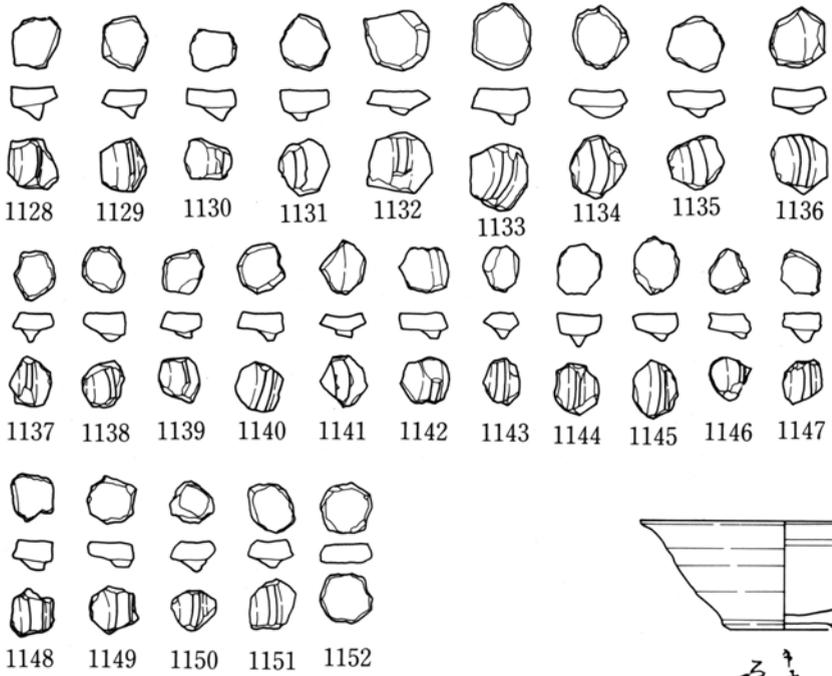
水田耕作土

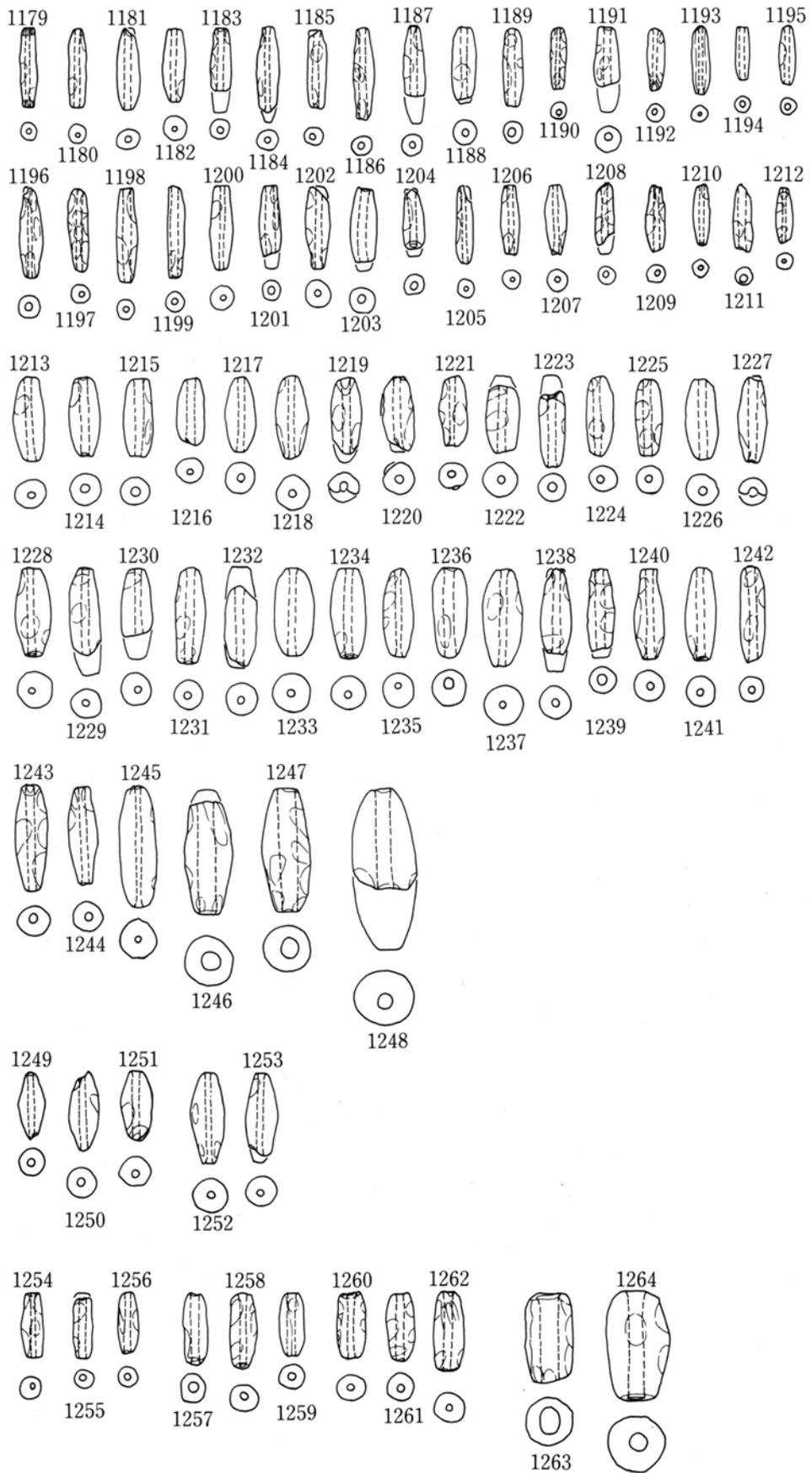


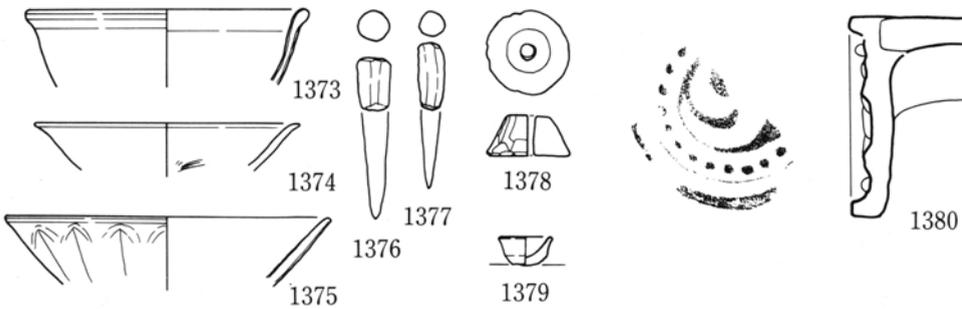
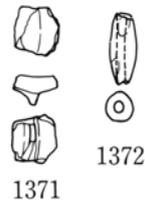
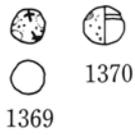
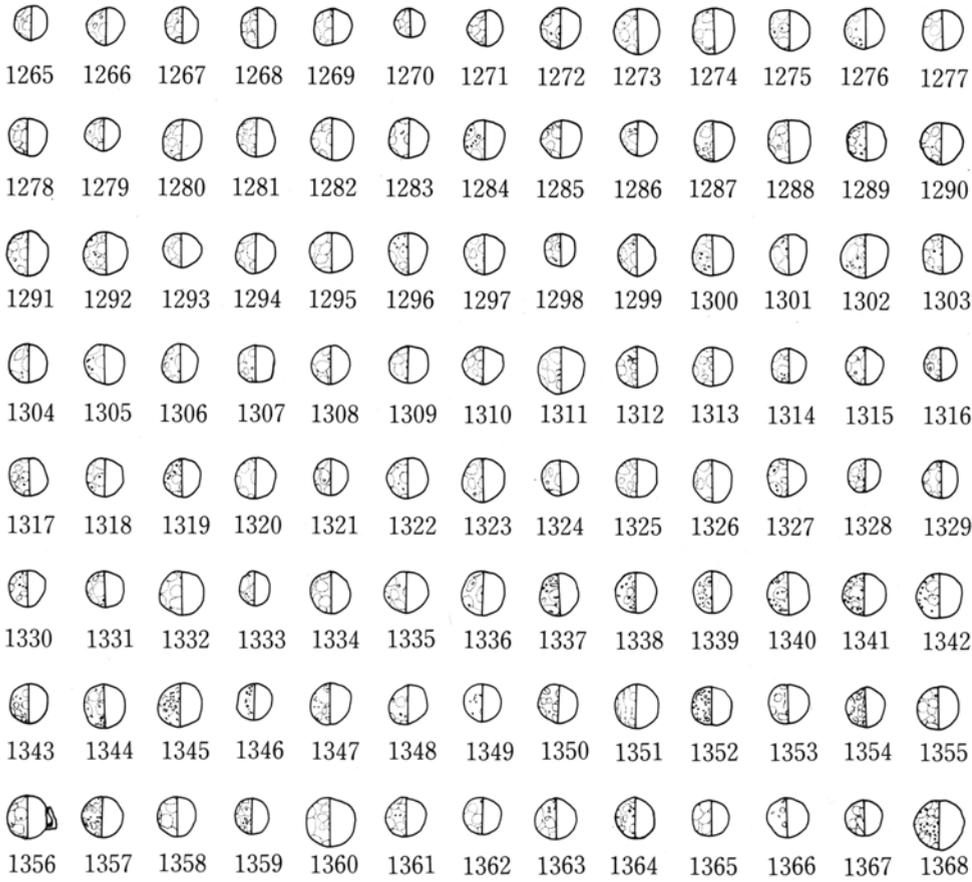


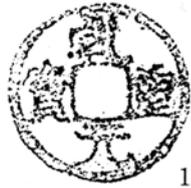
水田耕作土











1381



1382



1383



1384



1385



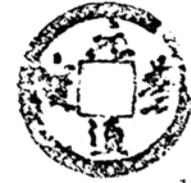
1386



1387



1388



1389



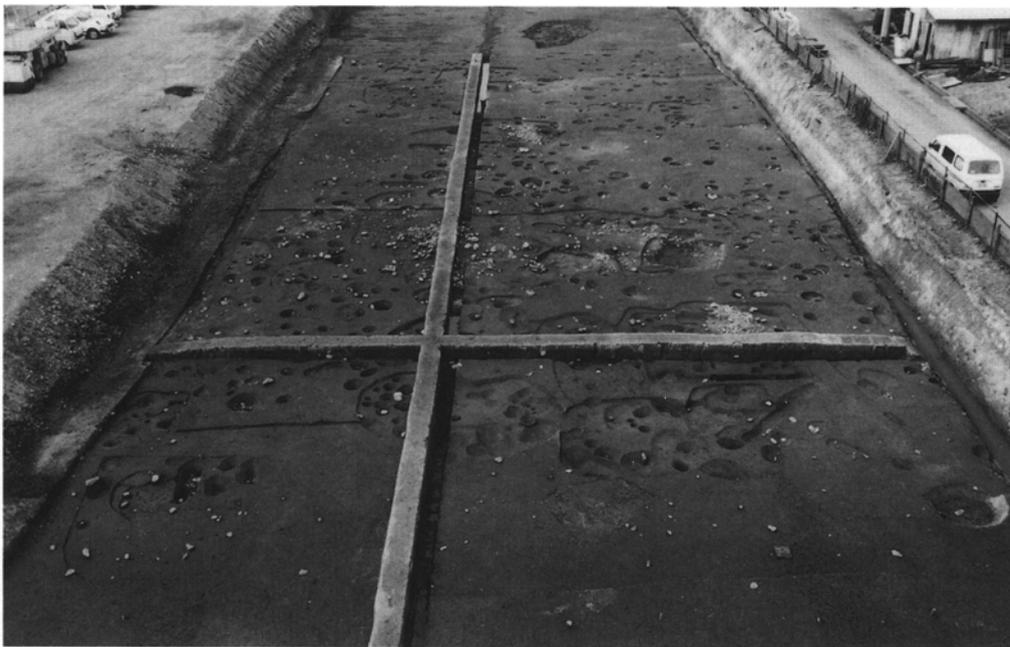
1390

錢貨

番号	分析番号	錢徑	種類	調査
1381	25	25	乾元重寶	89C
1382	22	25	天聖元寶	89C
1383	172	24	天聖元寶	89Bb
1384	17	24.5	皇宋通寶	89Eb
1385	32	24	治平元寶	63D
1386	6	23.5	元豐通寶	89Ec
1387	23	23	元豐通寶	89C
1388	41	23	元符通寶	63I
1389	36	24	元豐通寶	63E
1390	26	24	永樂通寶	89C

開元通寶	6
乾元重寶	2
至道元寶	1
天禧通寶	1
天聖元寶	2
景祐元寶	1
嘉祐元寶	1
治平元寶	2
熙寧元寶	2
元豐通寶	7
元祐通寶	2
元符通寶	3
大觀通寶	2
政和通寶	1
洪武通寶	1
永樂通寶	5
不明	61(個数)

写真図版



62E区 (東から)



62E区 SX03



89Dc区 (北から)
第2遺構検出面

62A区 SK201

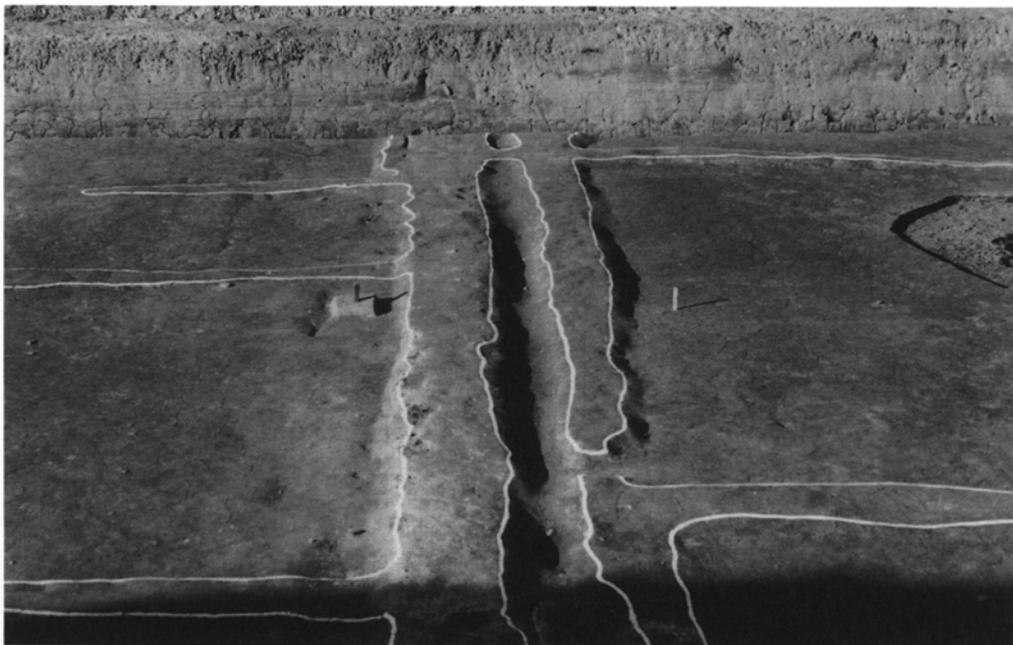


62A区 SK201



62F区 SK07





62A区 (南から)
ST18・ST08



62B区 (西から)



62A区 (東から)
第2遺構検出面

89F区 (北から)



63C区 (東から)



63H区 (西から)







89C · D · E · F区



89Eb区 (北西から)

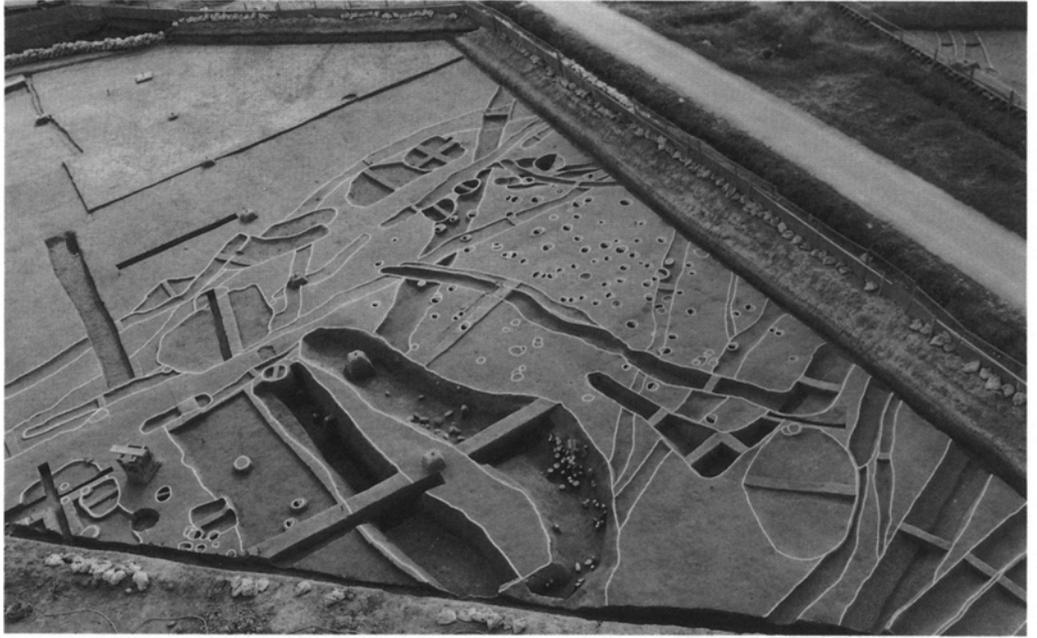


SD151
SD107周辺

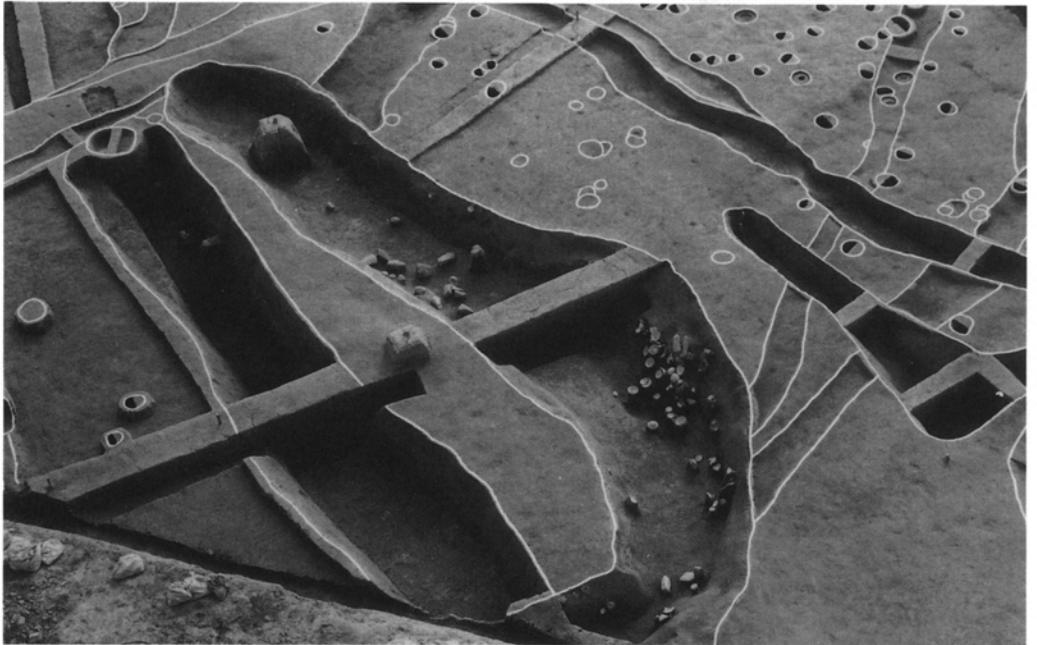


SK152
SD120 (南から)

89Fa区 (北から)
SD105周辺



SD105

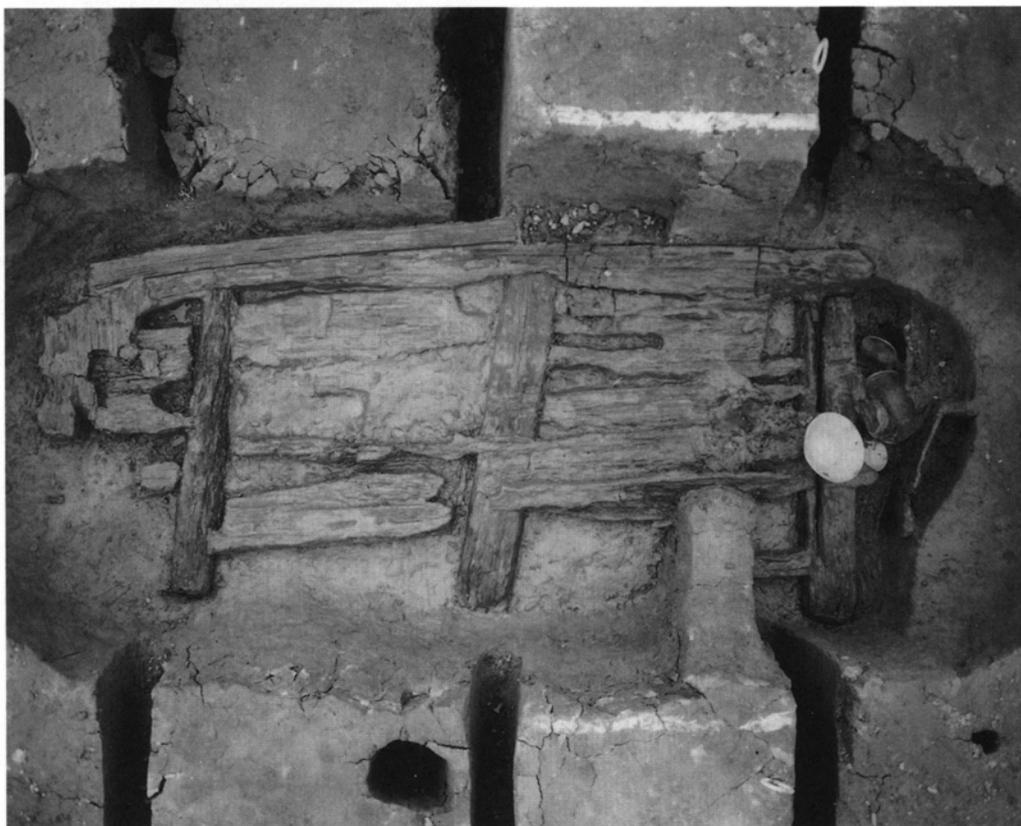


SD105 (東から)
遺物出土状況





89Eb区
SK168 (南から)



SK168 (東から)

89G区 (西から)

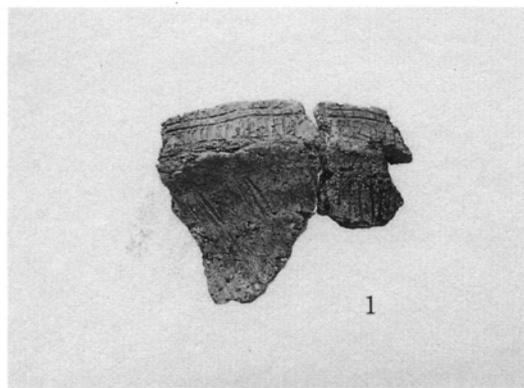


91B区 (南東から)

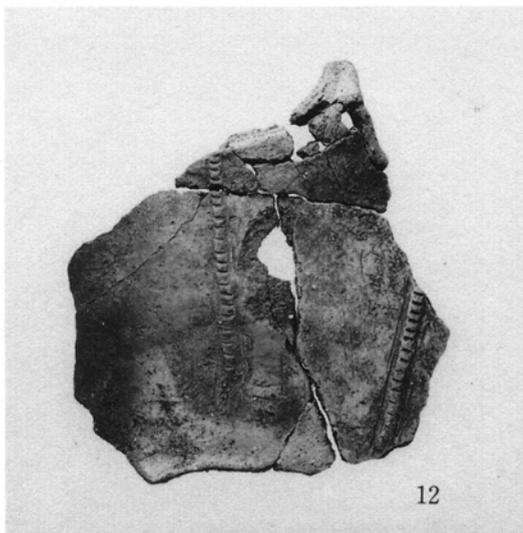


91A区 SK02

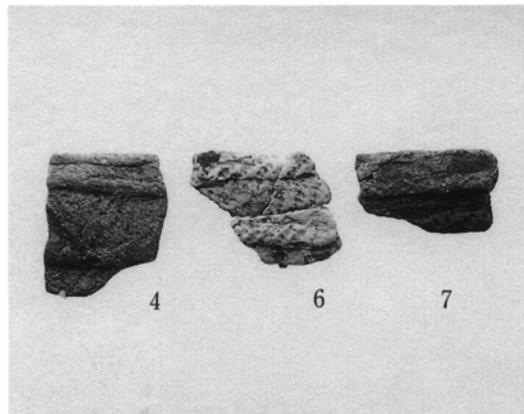




1



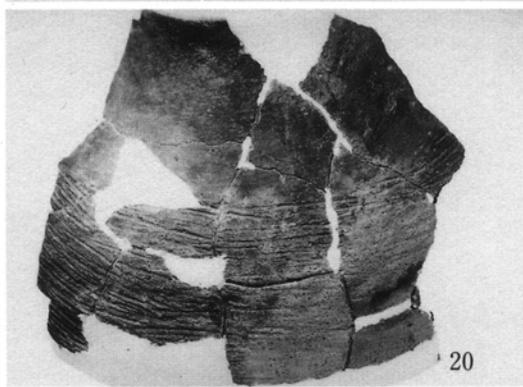
12



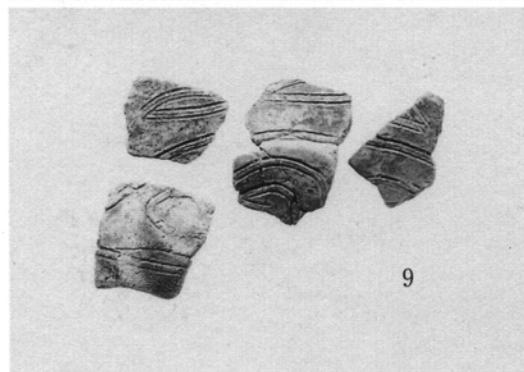
4

6

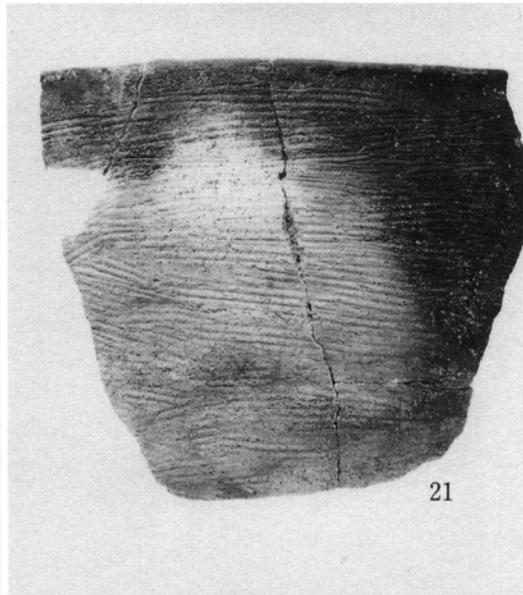
7



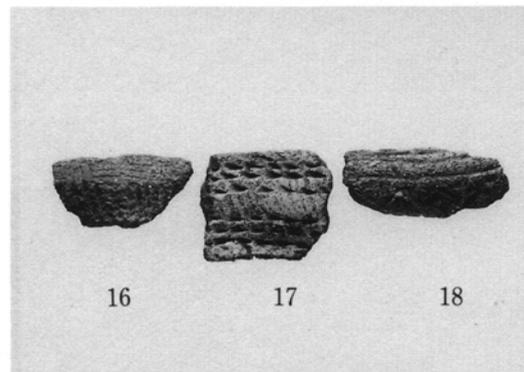
20



9



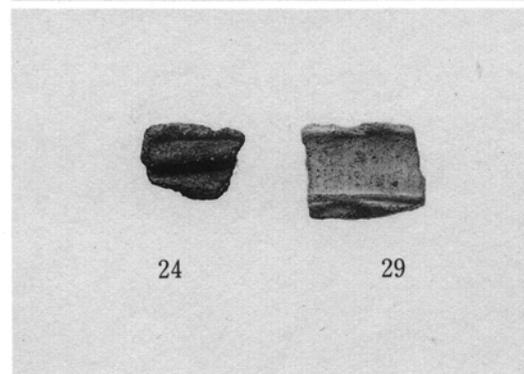
21



16

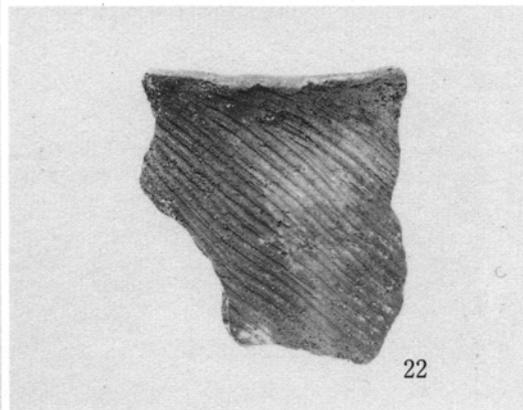
17

18



24

29

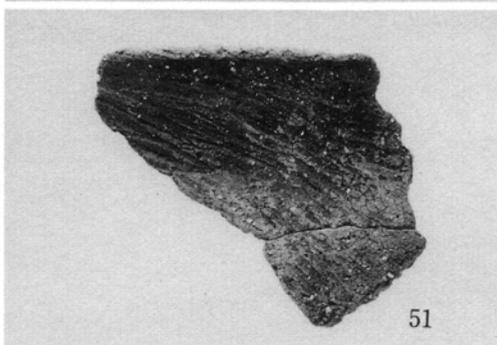
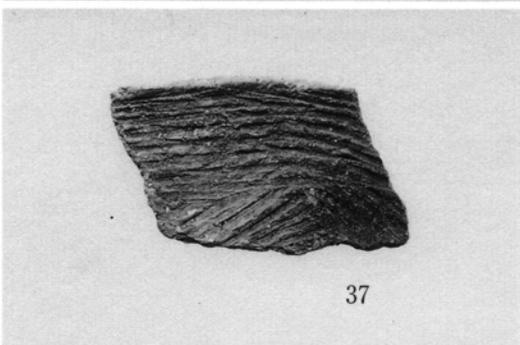
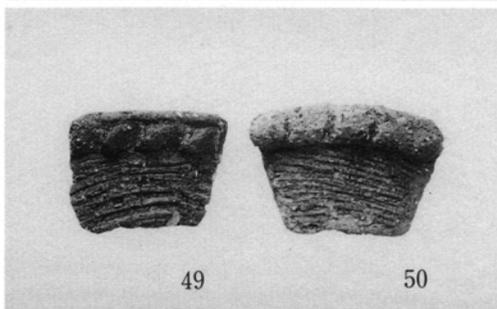
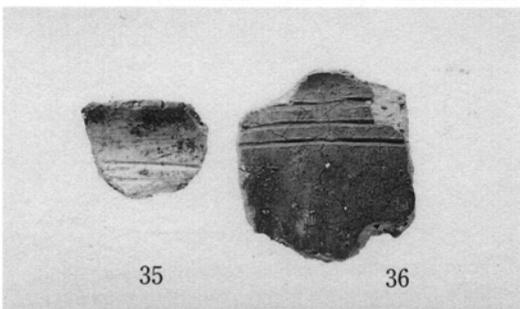
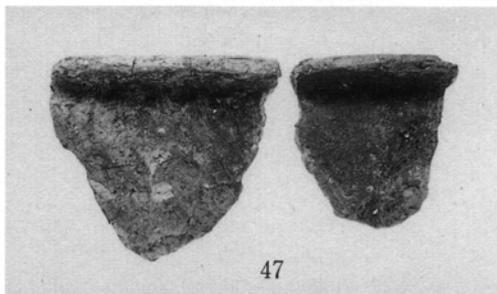
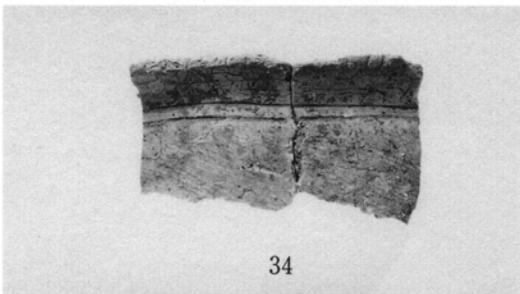
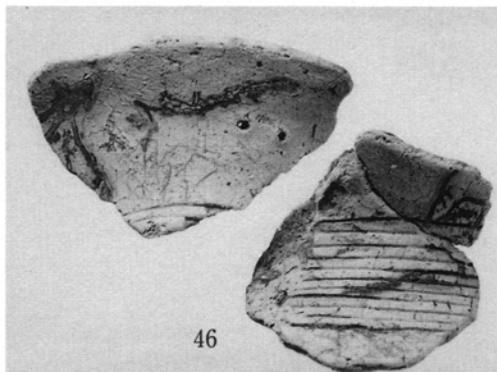
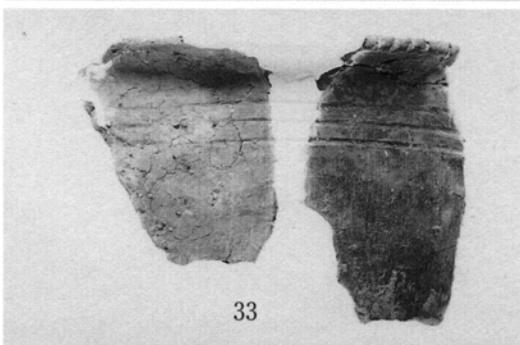
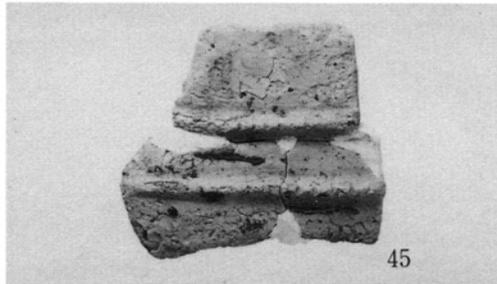
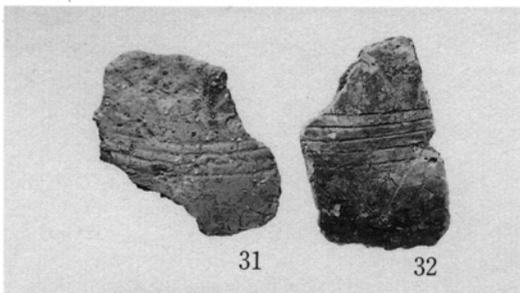
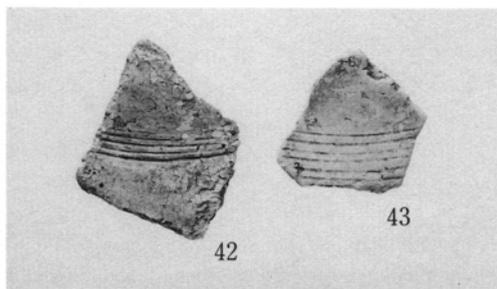
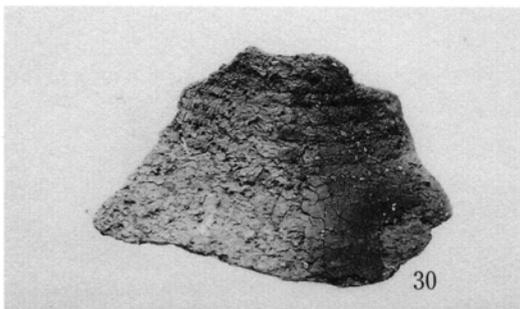


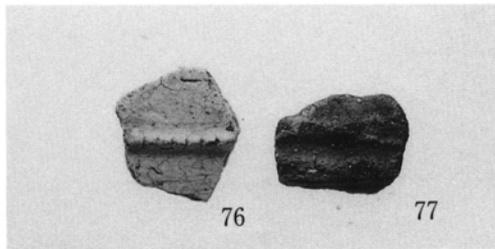
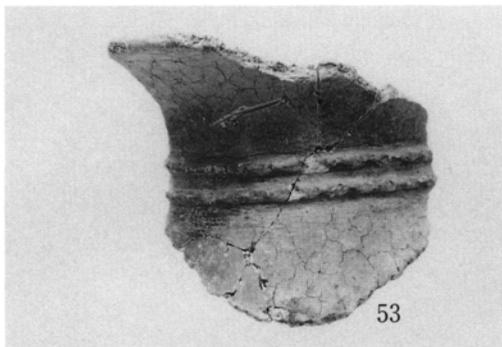
22

62F区 (1・16~18)
63L区 (4・6・7・9・12)
他は89Dc区 SD120

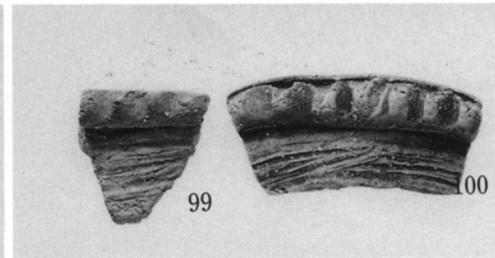
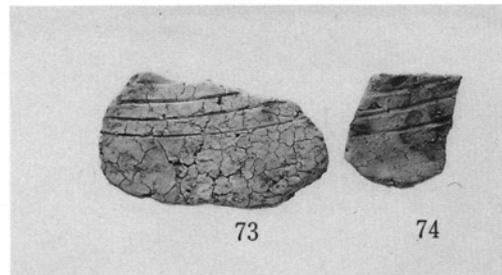
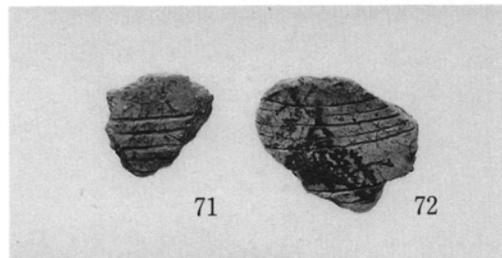
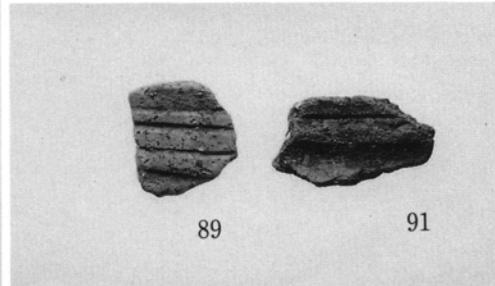
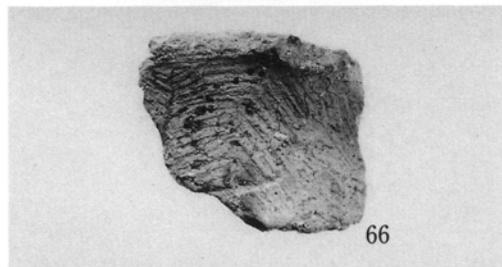
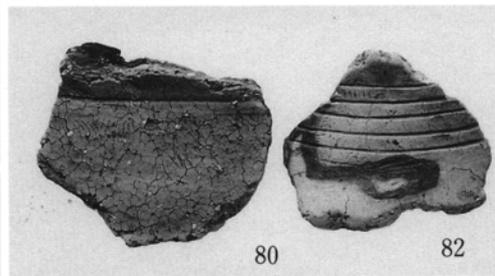
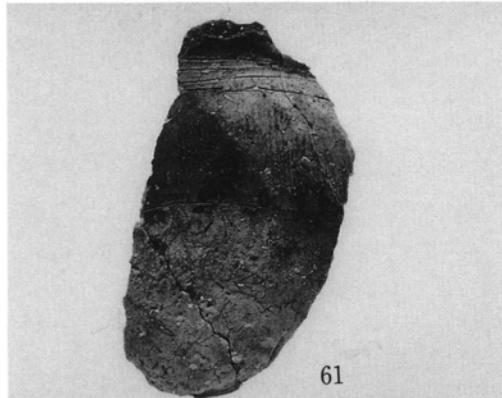
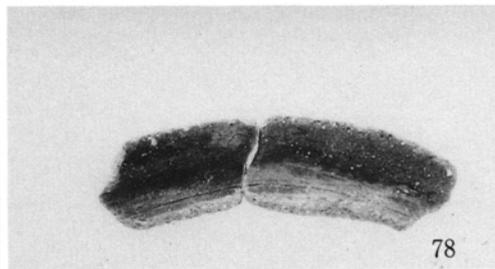
1/3
1/4 (12.21)
1/6 (20)

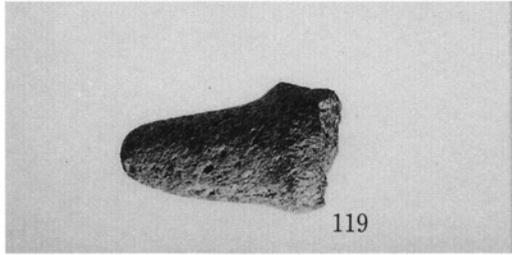
89Dc区 SK102
 (30·31·32·33·34·35·36)
 89Dc SK101 (37)
 89Dc SD05 (42·43
 45·46·47·49·50·51)



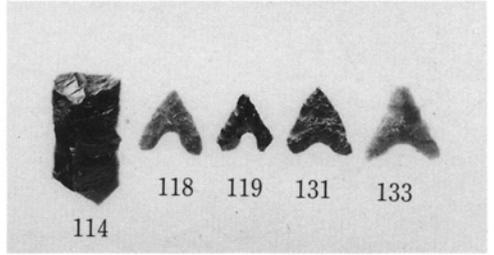


89Dc区
SD120





119



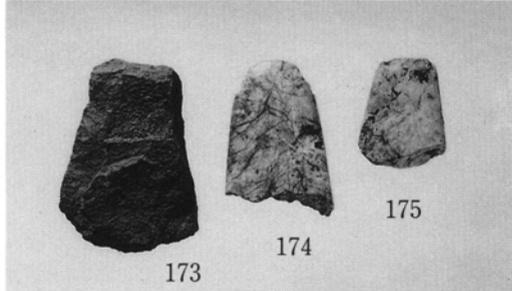
114

118

119

131

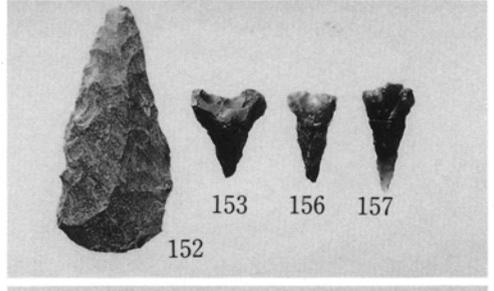
133



173

174

175

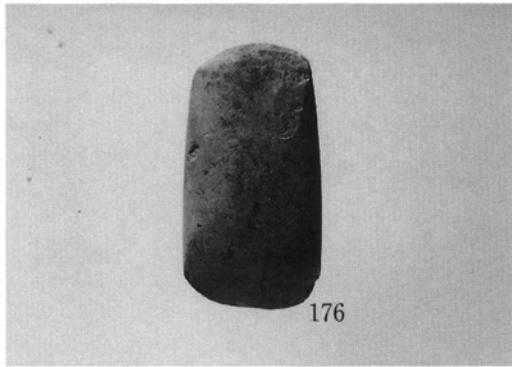


153

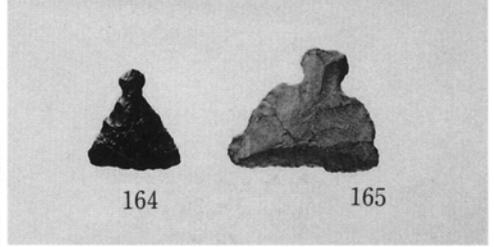
156

157

152

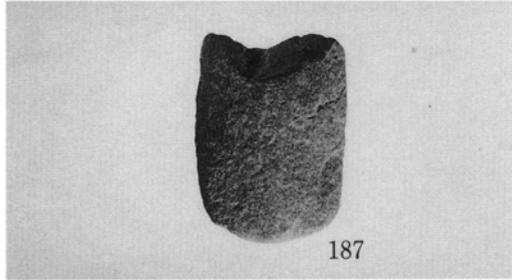


176

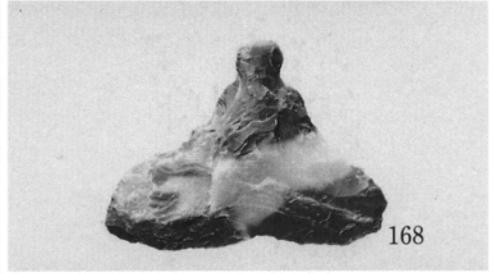


164

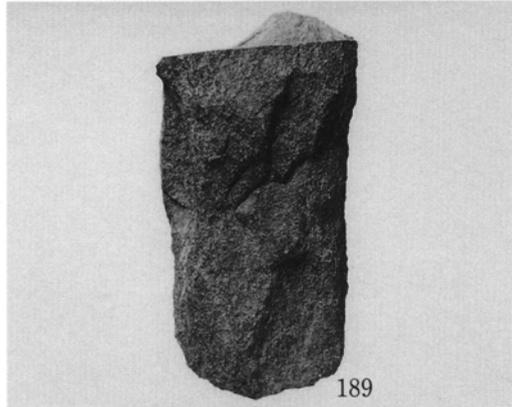
165



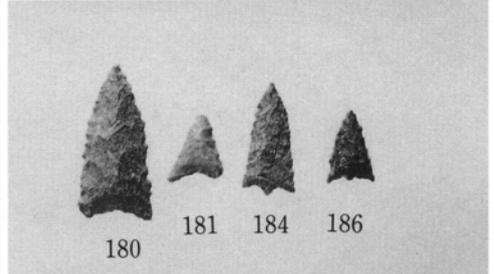
187



168



189

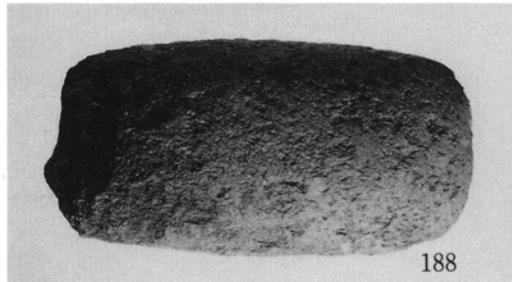


180

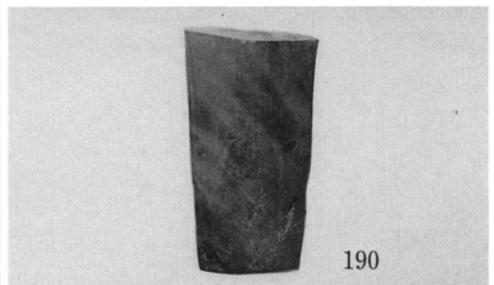
181

184

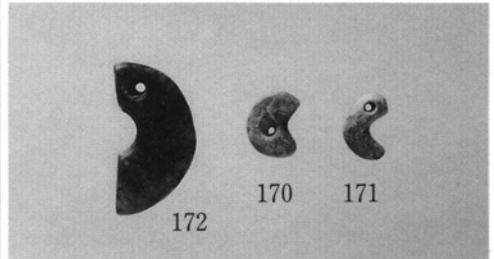
186



188



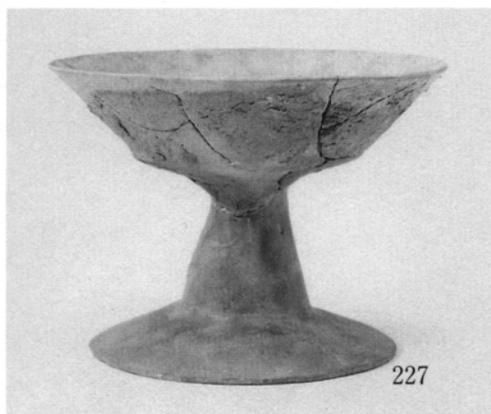
190



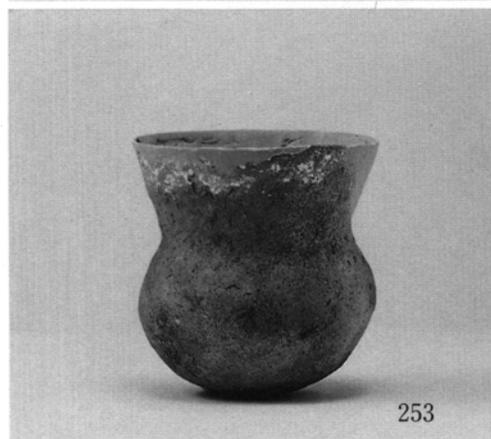
172

170

171



62A区
SK201

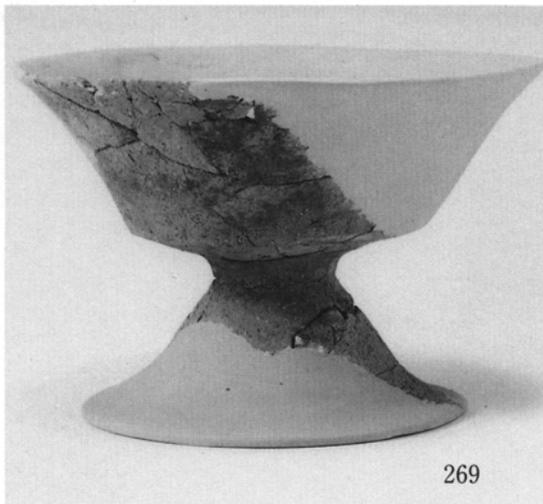
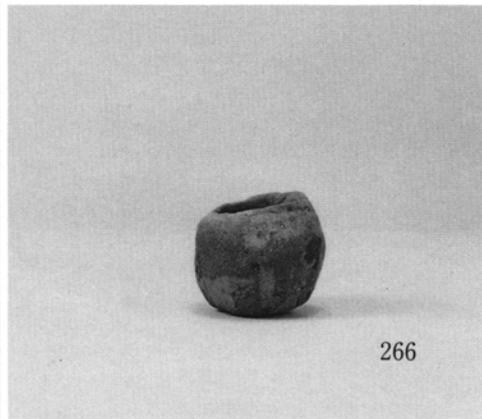
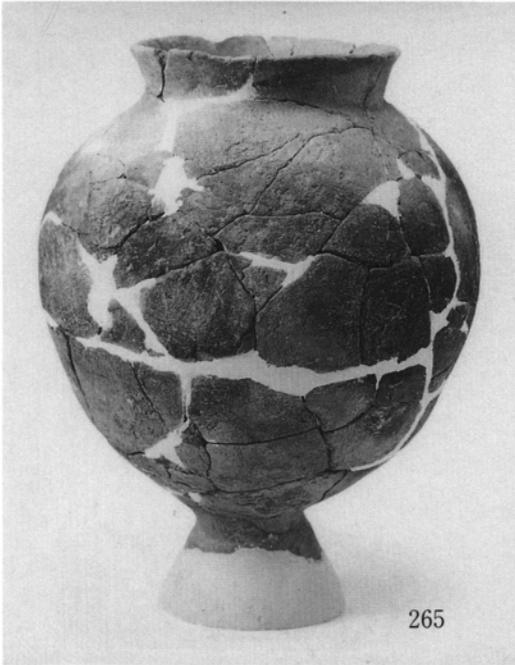




1/3
1/4 (263 • 258)



62A区 SK201 (262)
62F区 SK07
(264~269)



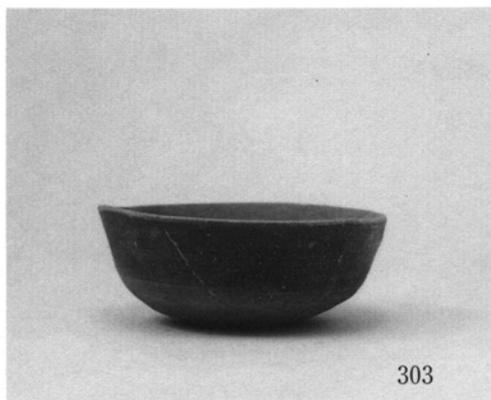
1/3
1/4 (262・265)



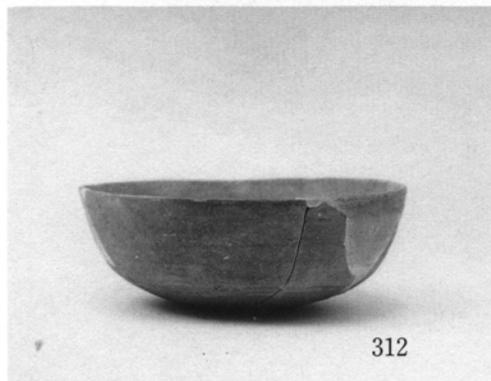
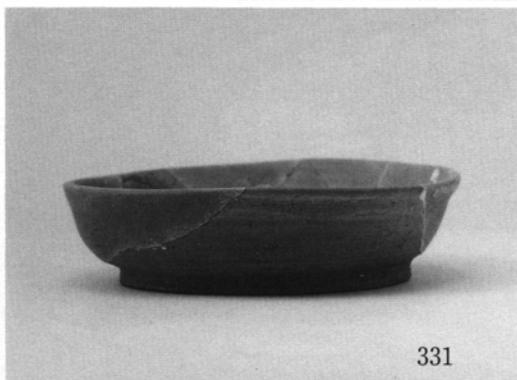
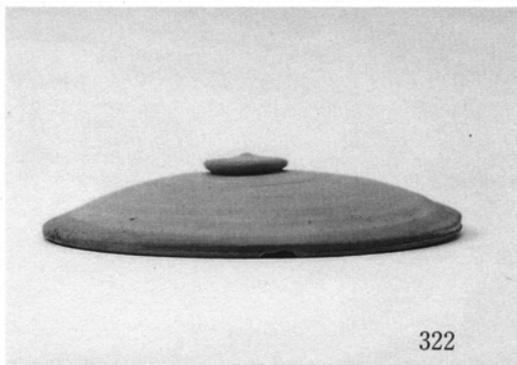
62A区
SK201



62F区
SK07

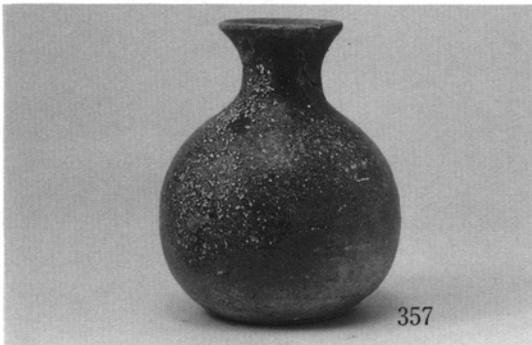
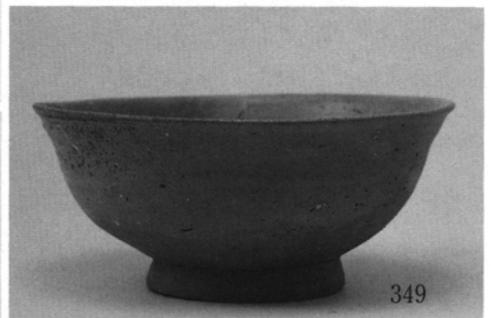
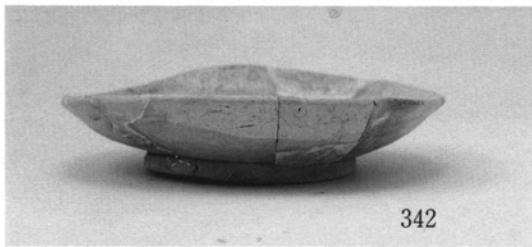
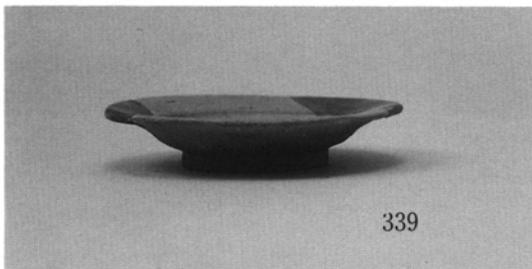


91AB区 SD01
89Ia区 SD06



1/3
1/6 (325)

91AB区 SD01
89Ia区 SD06





380

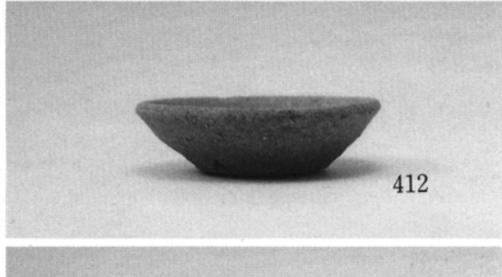


409

62E区 SE01
(380 · 409 · 412)
62B区 SX101
(391 · 395 · 405 · 387 · 388)
89EF区 SD105
(530 · 531 · 535 · 536
537 · 540 · 542 · 564)



391



412



395



387



405



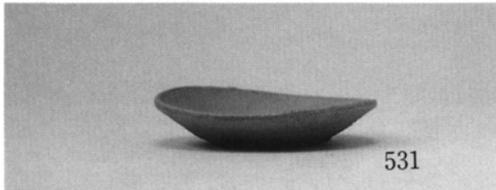
388



530



537



531



540



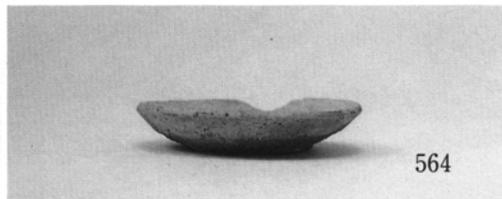
535



542

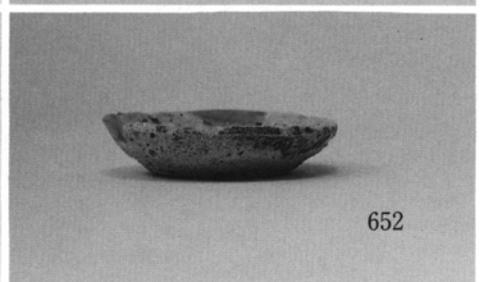
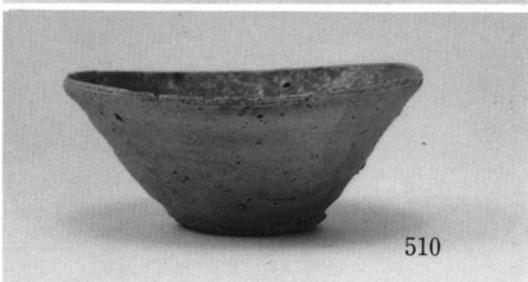
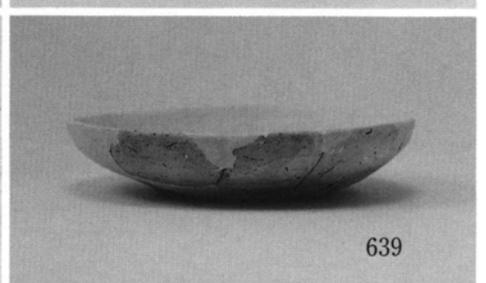
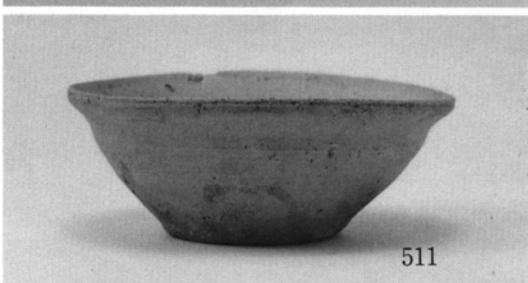
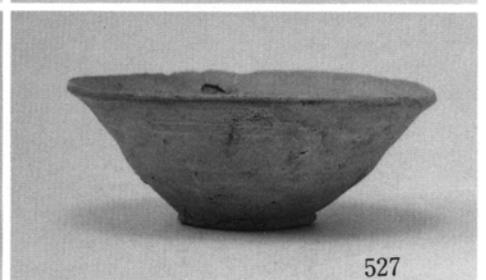
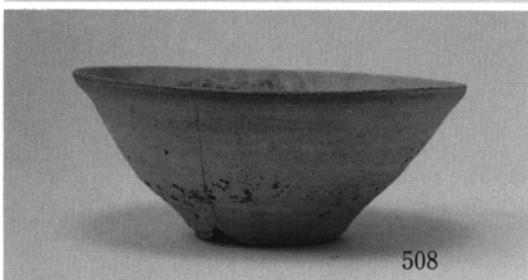
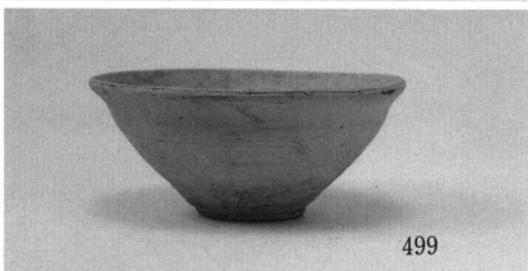
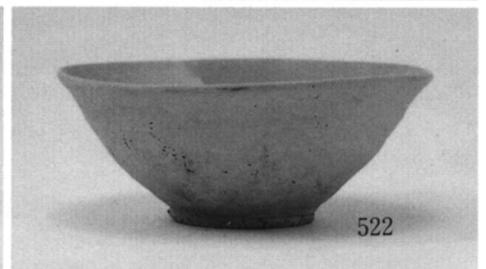
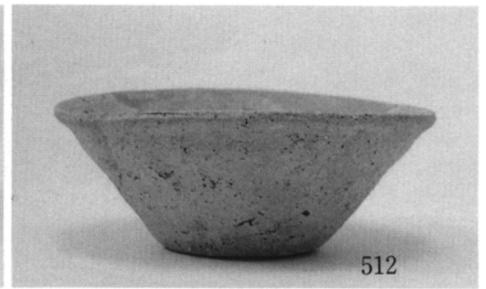
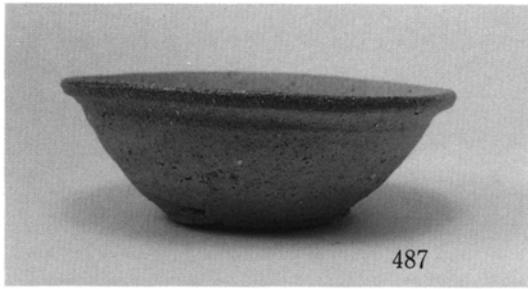


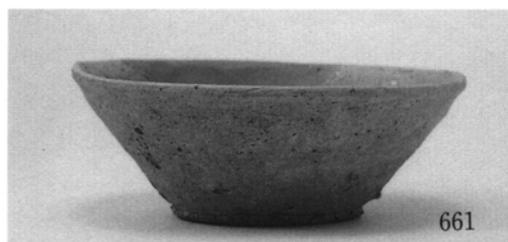
536



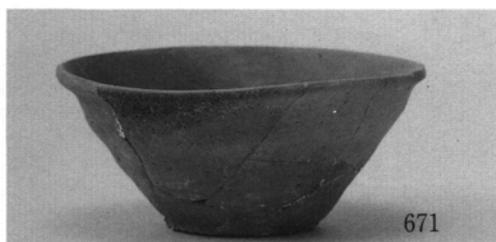
564

89E・F区 SD105

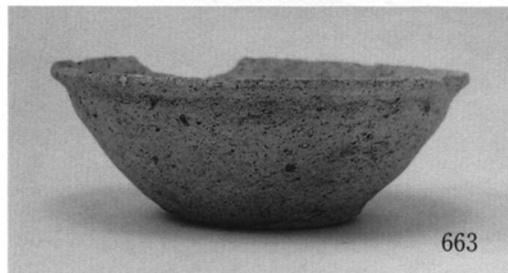




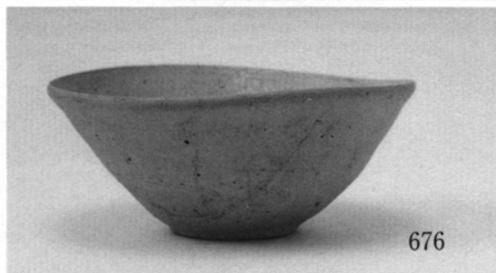
661



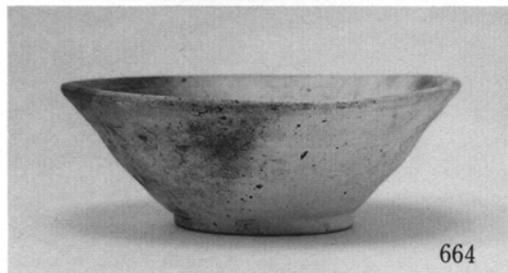
671



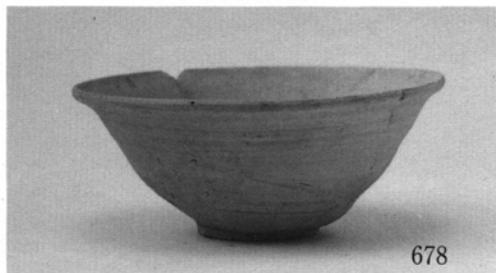
663



676



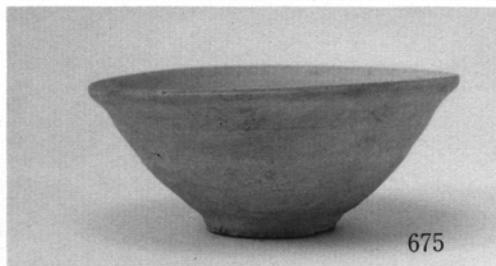
664



678



665



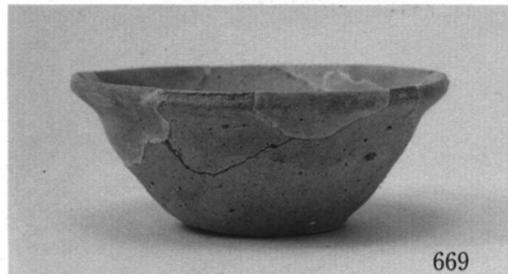
675



666



680



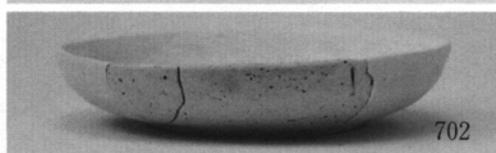
669



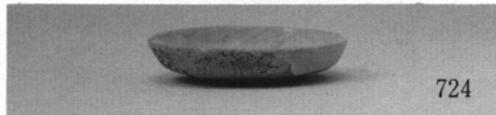
683



670



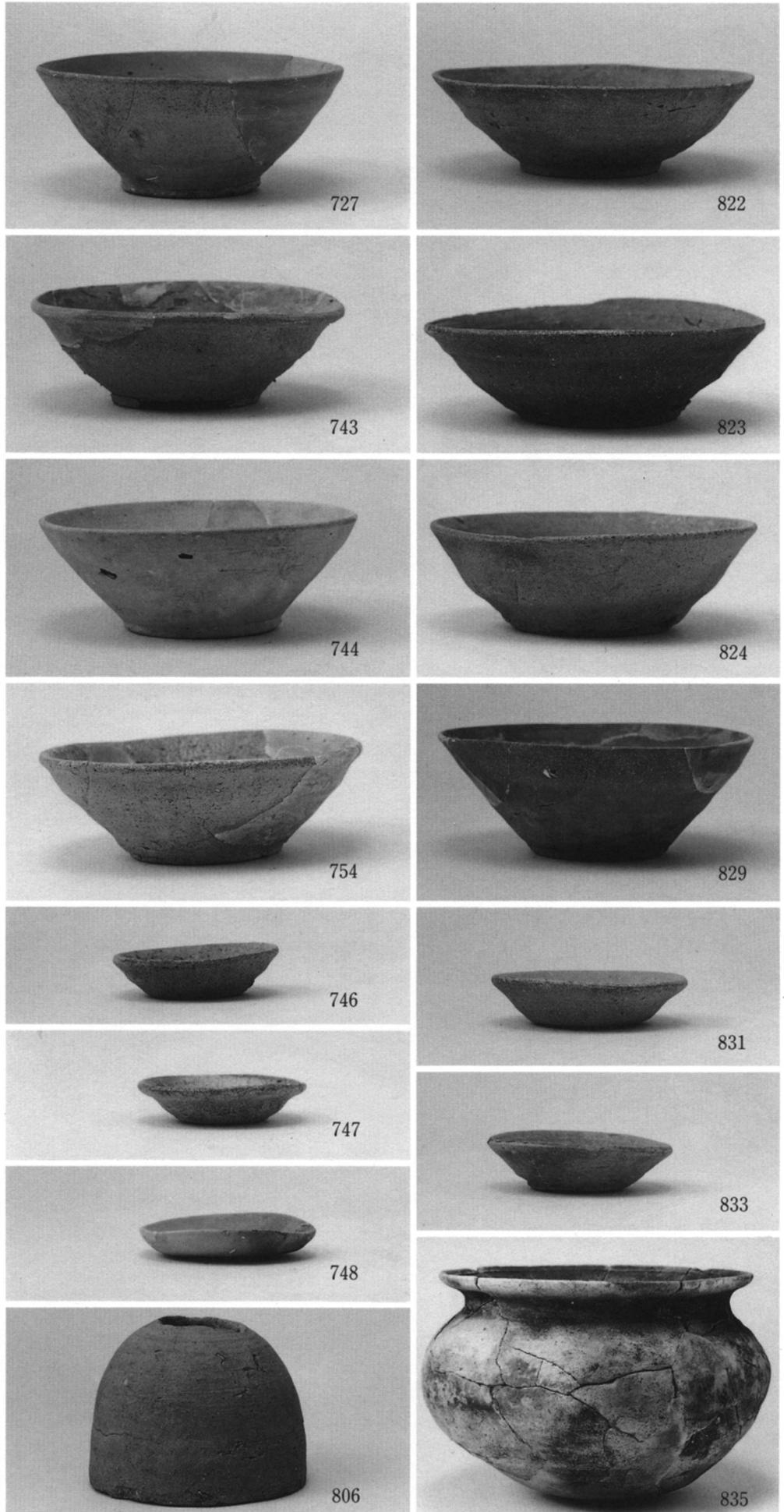
702



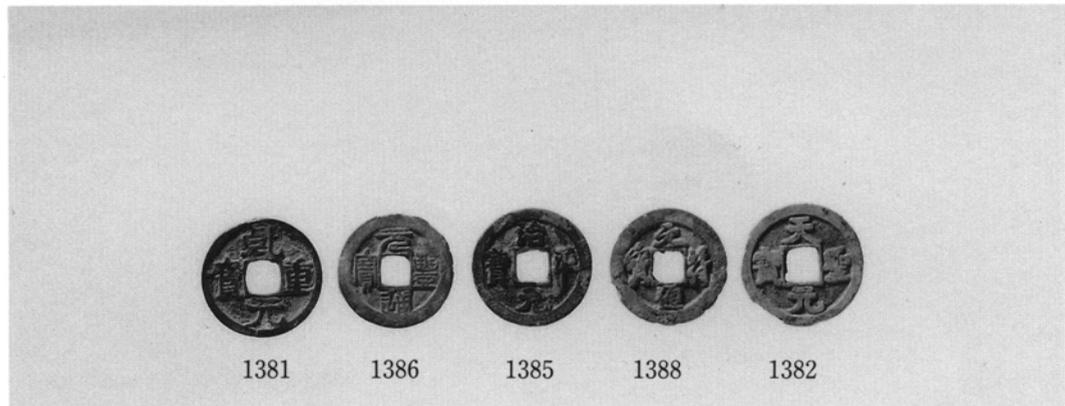
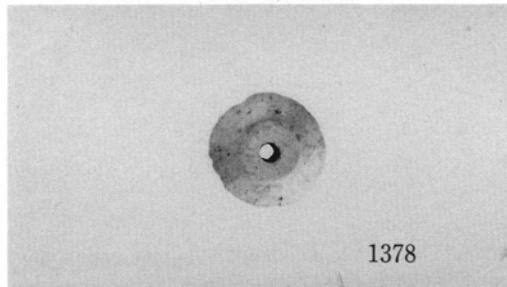
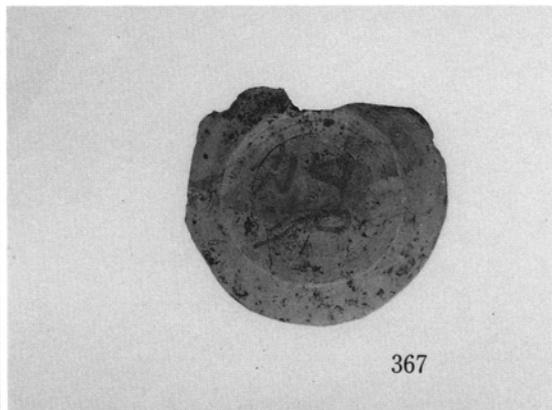
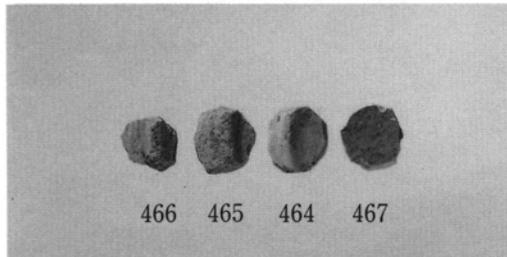
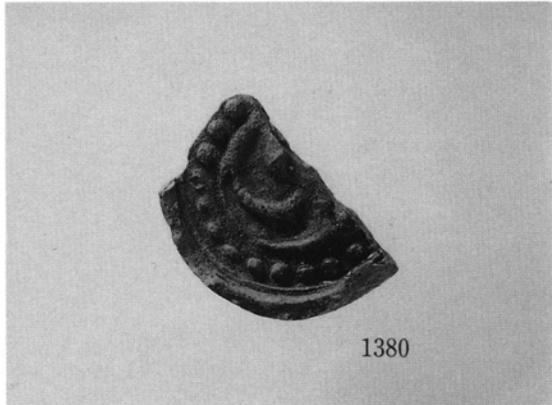
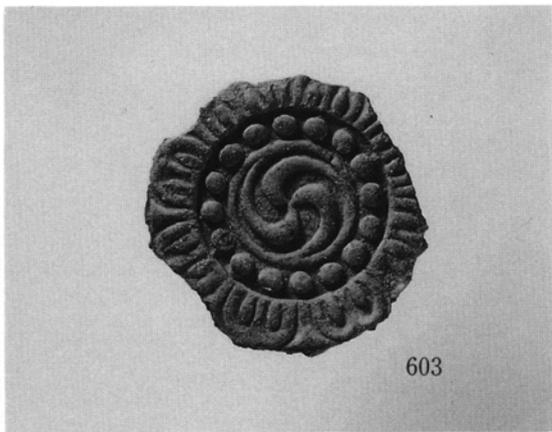
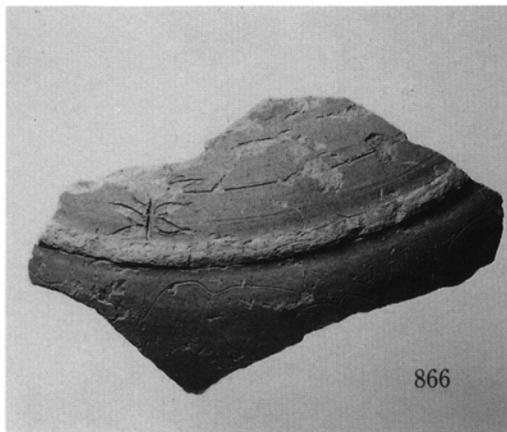
724

89Fa区 SK119
(661・663・664・665・666)
89Eb区 SK174
(669・670・671)
89Eb区 SK180
(676・678・675・680・683)
89Eb区 SK151 (702)
89Eb区 SK204 (724)

89Eb区 SX151 (727)
 89Eb区 SX155
 (743 · 744 · 754 · 746
 747 · 748)
 89Eb区 Pit群B (806)
 91A区 SK02
 (822 · 823 · 824 · 829
 831 · 833 · 835)

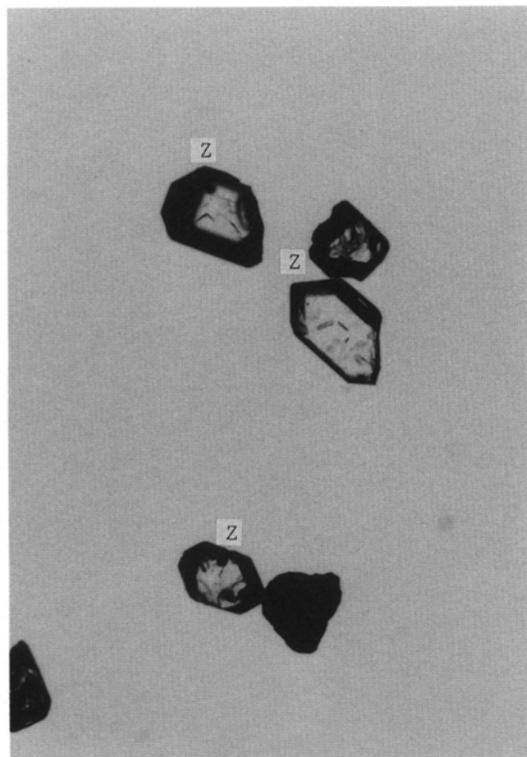


1/3
 1/5 (835)



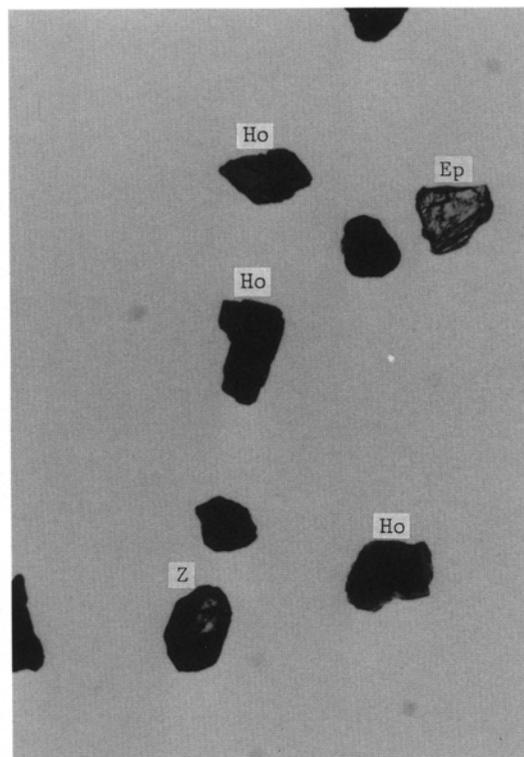
自然科学分析

胎土中の重鉱物



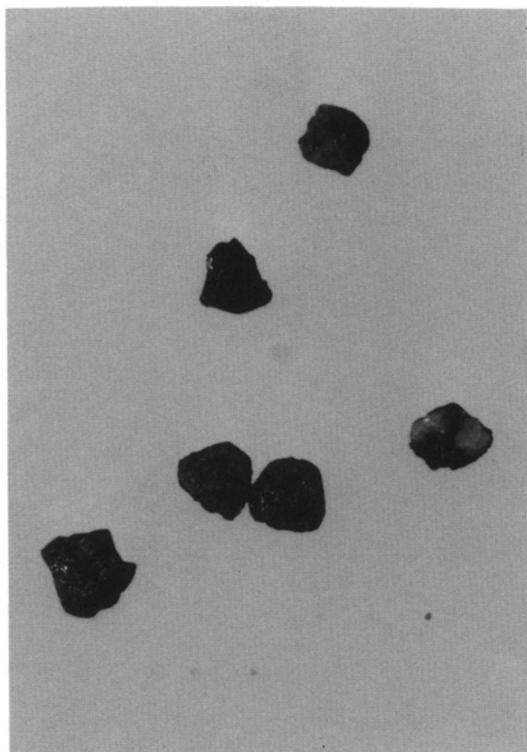
1. 試料番号9 (B類)

0.5mm



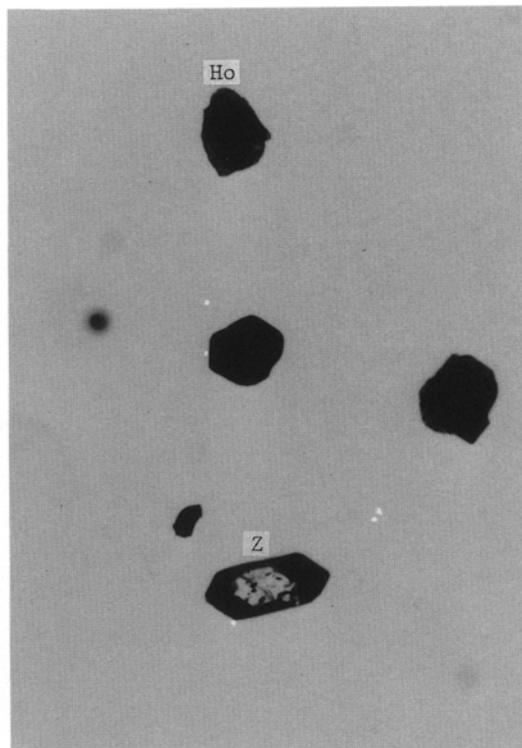
2. 試料番号27 (C類)

0.5mm



3. 試料番号36 (D類)

0.5mm

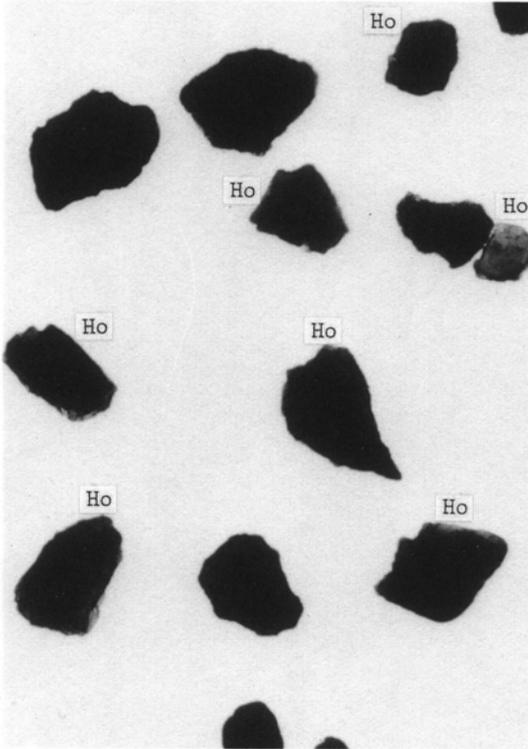


4. 試料番号45 (D類)

0.5mm

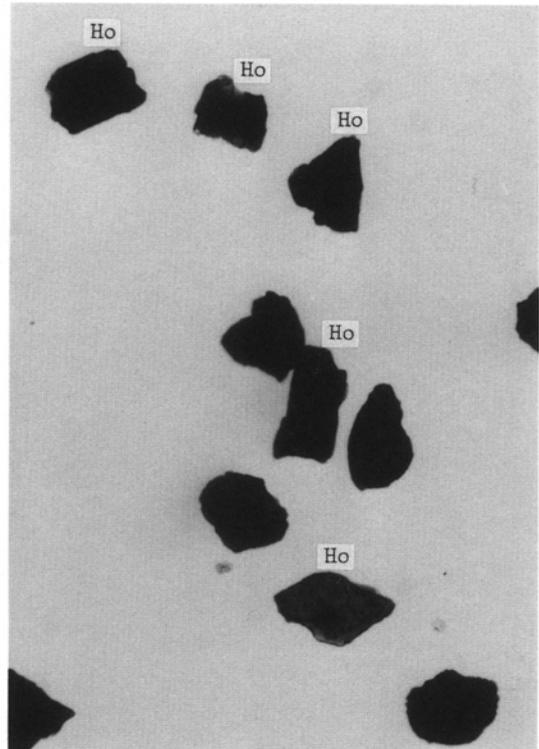
Ho: 角閃石, Z: ジルコン, Ep: 緑レン石.

胎土中の重鉱物



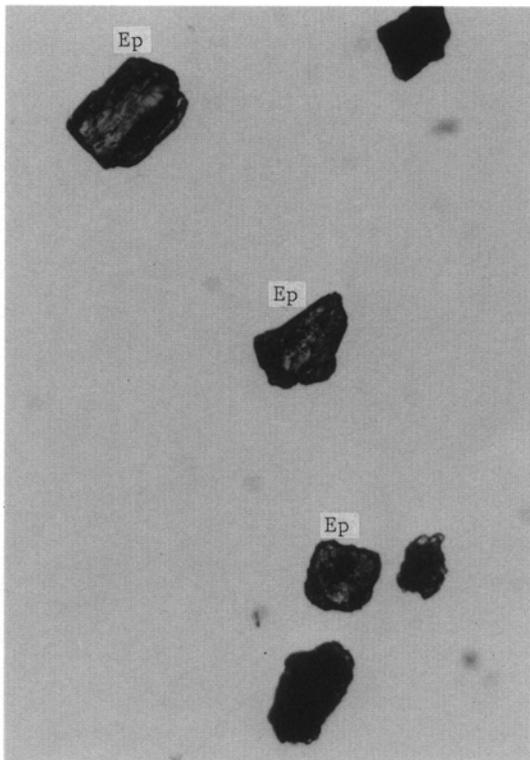
5. 試料番号23 (E類)

0.5mm



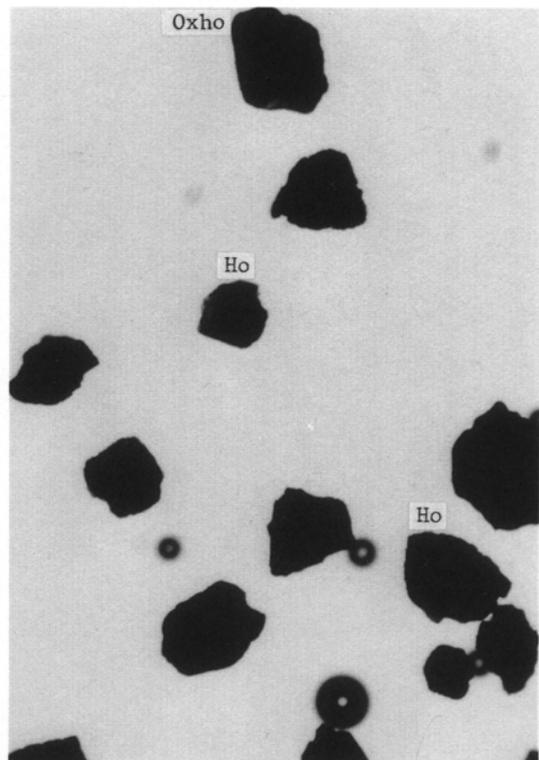
6. 試料番号24 (E類)

0.5mm



7. 試料番号56 (E類)

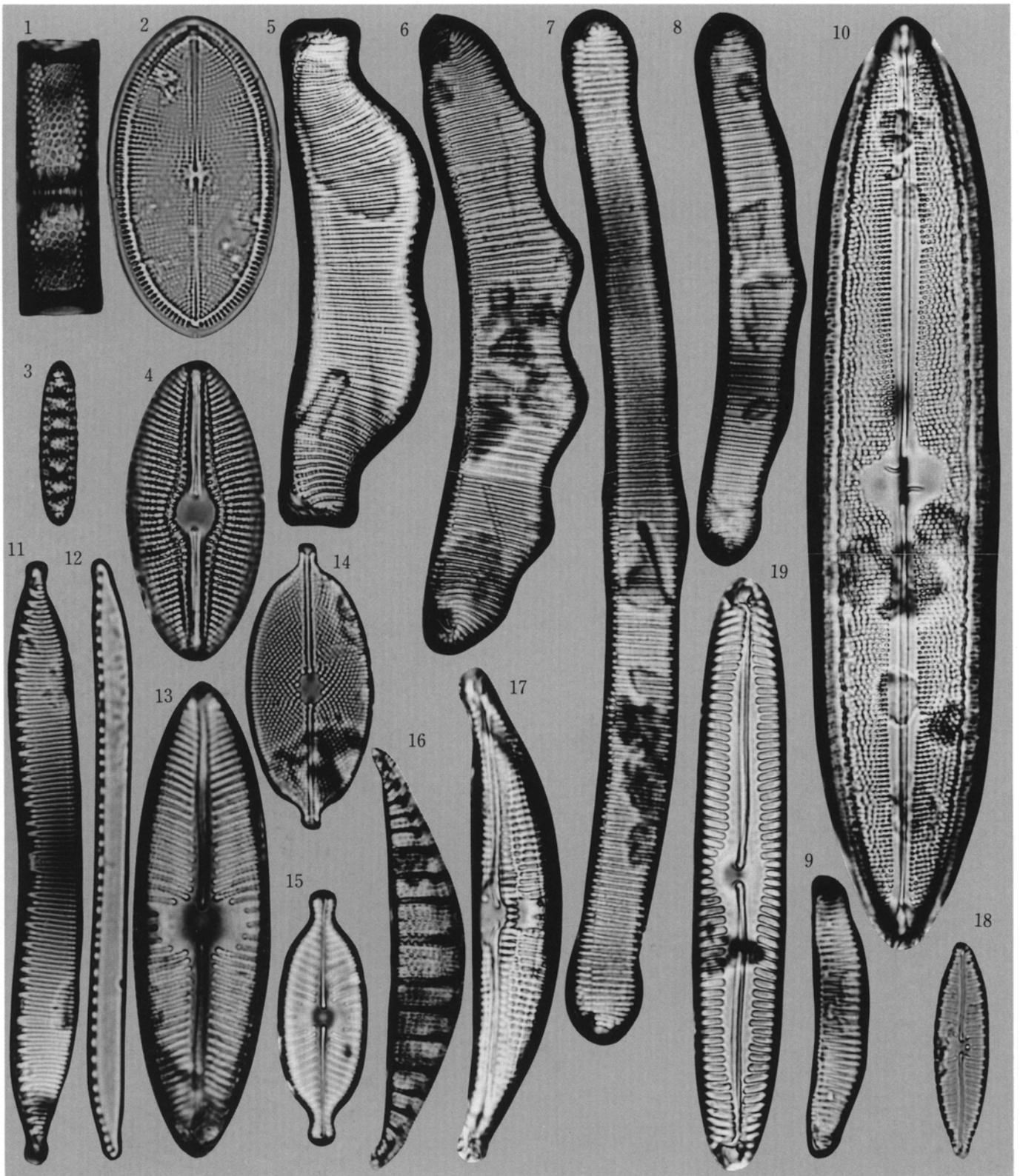
0.5mm



8. 試料番号57 (E類)

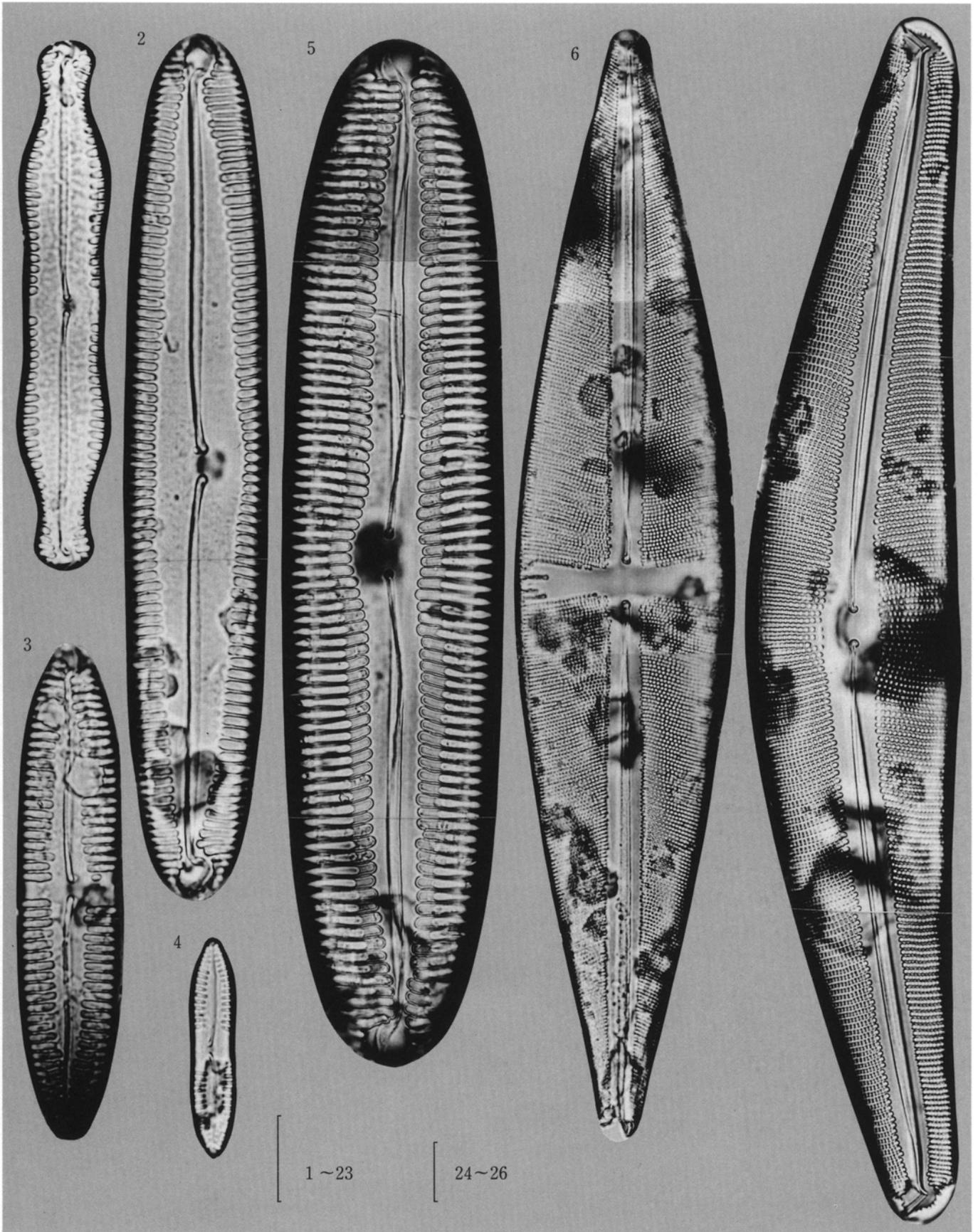
0.5mm

Ho : 角閃石, Oxho : 酸化角閃石, Ep : 緑レン石



1. *Aulacosila ambigua* (Grun.) Simonsen
2. *Cocconeis placentula* (Ehrenberg)
3. *Denticulopsis lauta* (Bail.) Simonsen
4. *Diploneis ovalis* (Hilse) Cleve
5. *Eunotia praerupta* Ehrenberg
6. *Eunotia robusta* Ralfs
7. *Eunotia pectinalis* var. *undulata* Ralfs
8. *Eunotia pectinalis* var. *undulata* Ralfs
9. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kütz.) Rebenhorst
10. *Neidium iridis* (Ehr.) Cleve

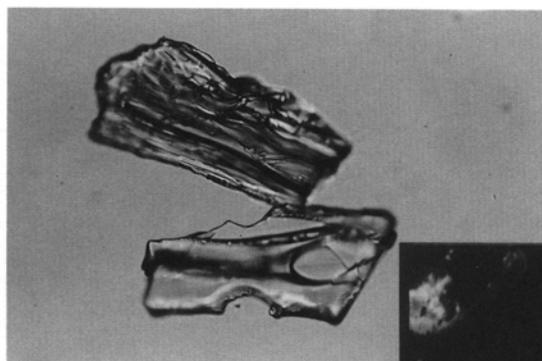
11. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Grunow
12. *Nitzschia obtusa* W. Smith
13. *Navicula elginensis* var. *cuneata* H. Kobayasi
14. *Navicula placenta* Ehrenberg
15. *Navicula elginensis* (Greg.) Ralfs
16. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) O. Müller
17. *Amphora ovalis* var. *libyca* (Ehr.) Cleve
18. *Gomphonema parvulum* Kutzing
19. *Pinnularia microstauron* (Ehr.) Cleve?



1. *Pinnularia nodosa* Ehrenberg
2. *Pinnularia brevicostata* Cleve
3. *Pinnularia viridis* (Nitz.) Ehrenberg
4. *Pinnularia subcapitata* Gregory

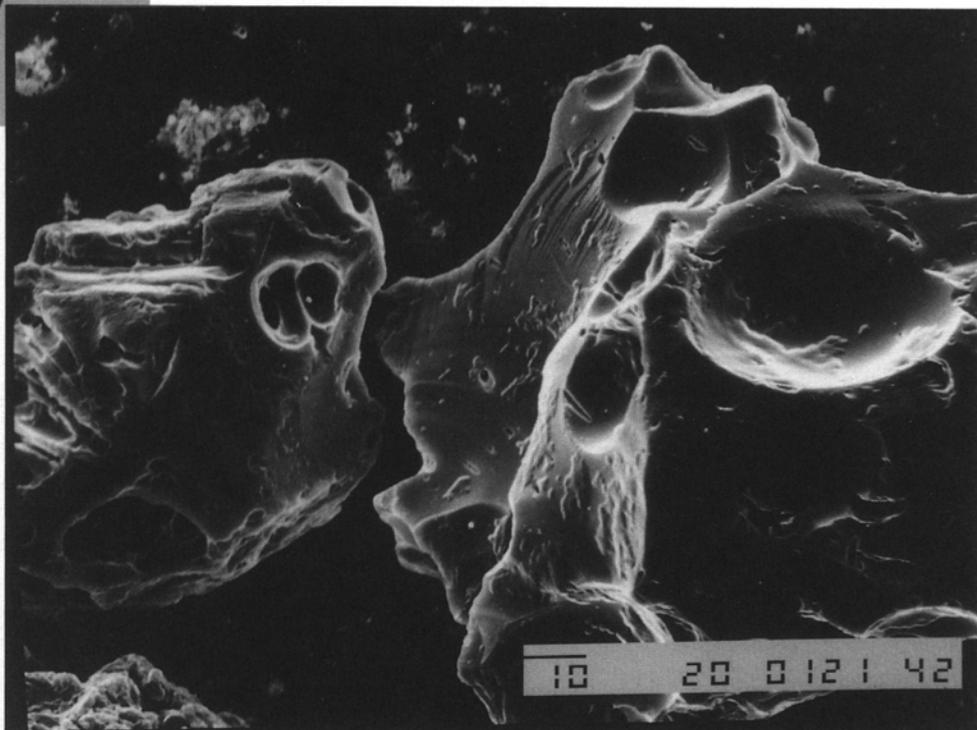
5. *Pinnularia dactylus* Ehr.
6. *Stauroneis phoenicenteron* Hustedt
7. *Cymbella aspera* (Ehr.) Cleve

(バースケールは10 μ m)

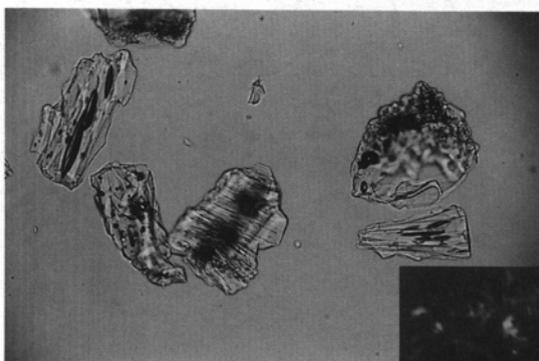


1

- 1 松河戸火山灰層の実体顕微鏡写真
多孔質ガラス (約100倍) 松河戸62A区
- 2 松河戸火山灰層の電子顕微鏡写真
中間型ガラス (スケールは右下) 上に同じ

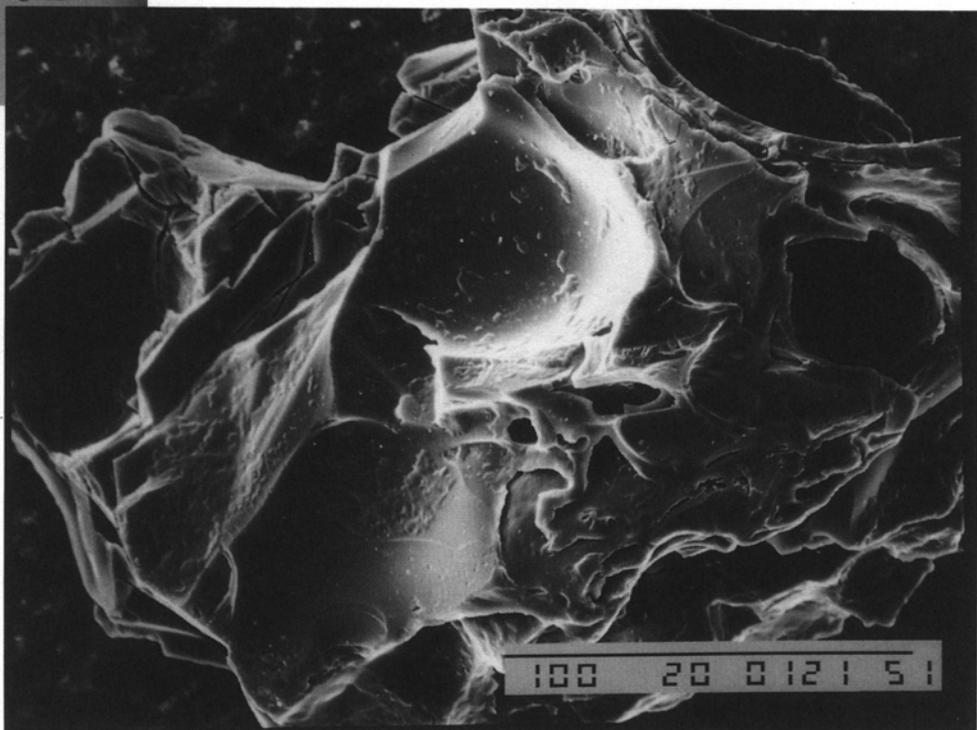


2

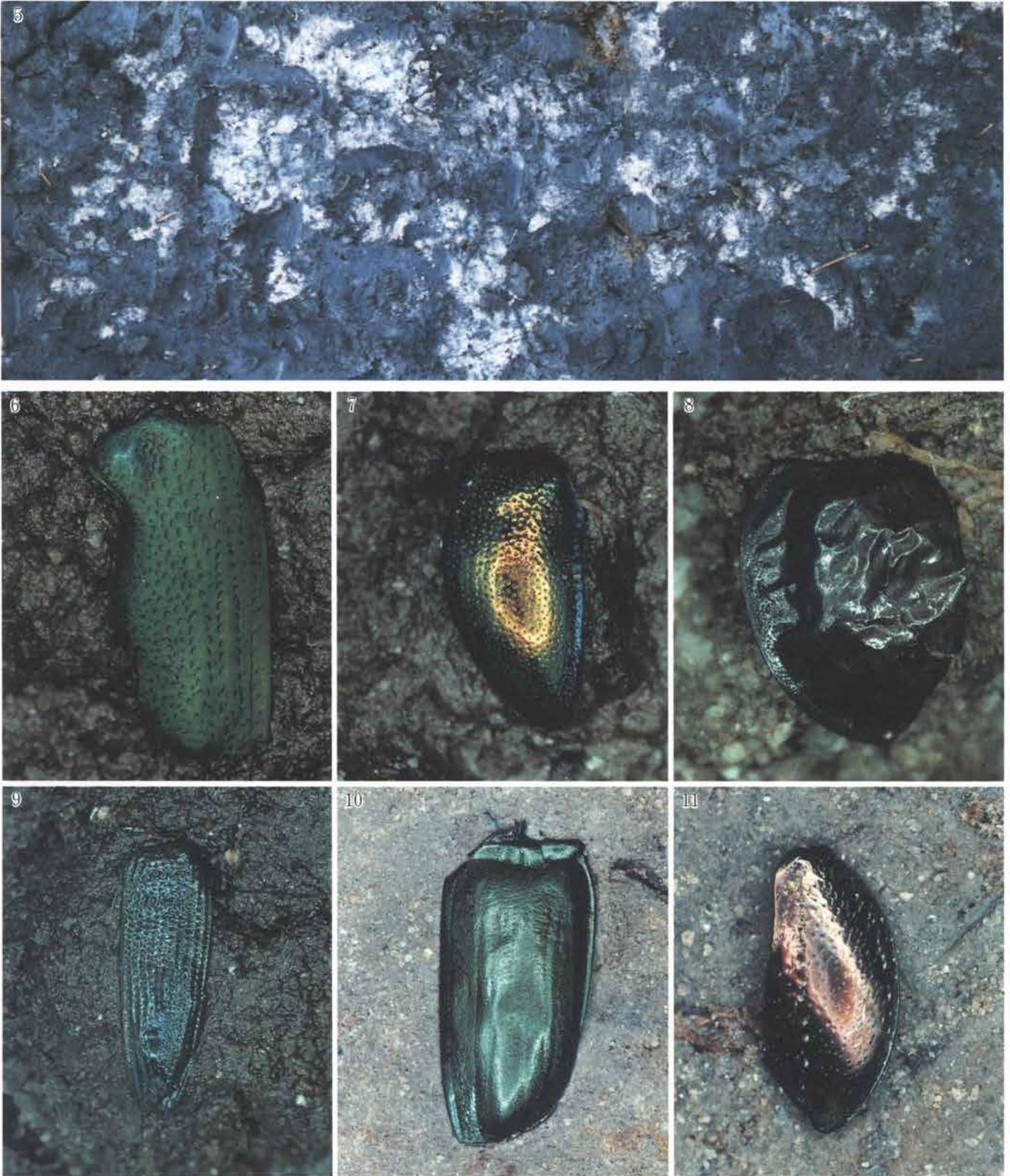


3

- 3 カワゴ平バミスの実体顕微鏡写真
多孔質ガラス (約75倍) 静岡県長崎遺跡
- 4 カワゴ平バミスの電子顕微鏡写真
中間型ガラス (スケールは右下) 上に同じ



4



5 松河戸火山灰層 (MT) の検出状況 (松河戸62A区)

昆虫化石の顕微鏡写真

6 コアオハナムグリ *Oxycetonia jucunda* (FALDERMANN)

左鞘翅 (長さ11mm) 縄文晩期 (松河戸89Dc区)

7 アカガネサルハムシ *Acrothinium gaskevichii* MOTSCHUSKY

左鞘翅 (長さ4.2mm) 縄文晩期 (松河戸89Dc区)

8 テントウムシ科 *Coccinellidae* sp.

左鞘翅 (長さ3.4mm) 縄文晩期 (松河戸89Dc区)

9 イネネクイハムシ *Donacia provosti* FAIRMAIRE

右鞘翅 (長さ5.2mm) 弥生後期 (勝川62F区)

10 ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* MOTSCHULSKY

右鞘翅 (長さ9.2mm) 江戸前期 (勝川62A区)

11 ドウガネアブイ *Anomala cuprea* HOPE

左後腿節 (長さ6.1mm) 江戸前期 (勝川62A区)

報 告 書 抄 録

フリガナ	マツカワドイセキ							
書名	松河戸遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第48集							
編著者名	赤塚次郎・服部信博・堀木真美子・森勇一・澤田康次							
編集機関	財団法人愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24							
発行年	西暦1994年3月31日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
マツカワド 松河戸	カスガイシ 春日井市 マツカワドチョウ 松河戸町	23206		35°13'15"	136°58'	198604) 199112	65,306	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
松河戸	集落 耕地	縄文 弥生 古墳 鎌倉 室町	集石 8 集石炉 3 環濠 1 水田 228 木棺墓 1 土坑 多数	縄文土器 弥生土器 独鈷石 石剣 土師器 灰釉系陶器		縄文時代の集石群 弥生時代前期の 環濠集落 古墳時代中期の 土師器一括資料 鎌倉時代の木棺墓 と建物 中世水田跡		

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集

松 河 戸 遺 跡

1994年3月31日

編 集 財団法人
発 行 愛知県埋蔵文化財センター

印 刷 共同印刷株式会社